史跡勝沼氏館跡

― 外郭域発掘調査報告書（中世編） ―

2009

甲州市教育委員会

勝沼氏館跡外郭域全景

H5G 区

H4G 区

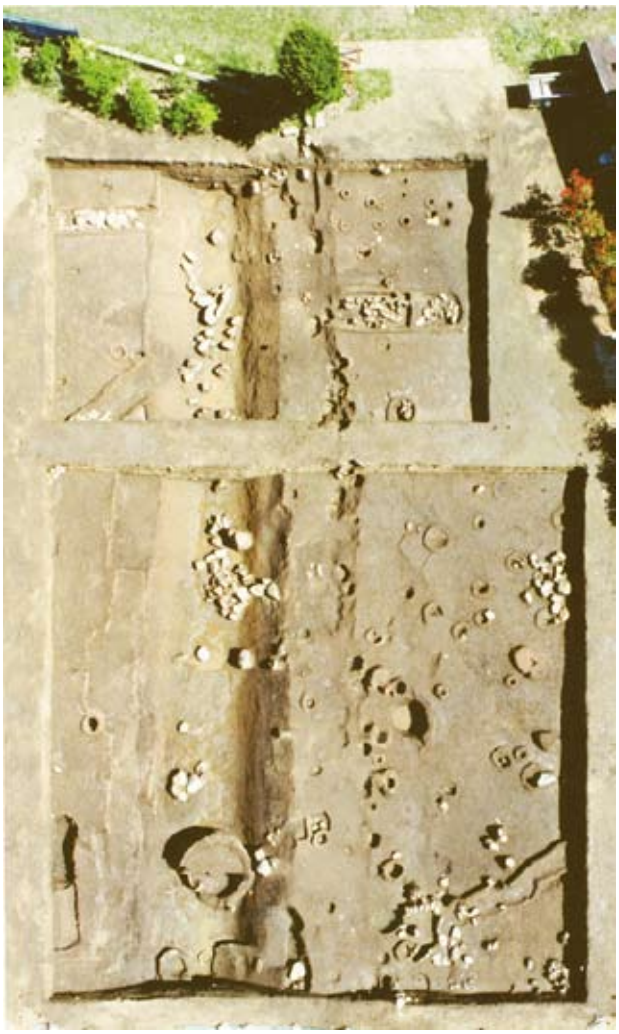
H7G 区

H6G 区

H9G 区

H8G 区

H12G 区



H10G 区

H11G 区

H8F 区

H15・16F 区

H13・14G 区

序

「史跡のまち」と言われる甲州市には、国宝３件・国指定文化財２６件・県指定文化財１５６件等、合わせると２６３件の文化財が所在しております。

本書は、国指定史跡勝沼氏館跡の環境整備事業や地域文化財保全事業に伴う調査として、平成４年（1992）から平成１７年（2005）までの間、国や県の補助を受け、勝沼町教育委員会ならびに甲州市教育委員会（平成１７年１１月合併）が実施した外郭域の発掘調査の報告書であります。

１６世紀に生きた勝沼信友の館跡で、国の史跡に指定されております。
深い堀と高い土塁に囲まれた内郭部の整備はすでに完了し、公開されているところですが、この度、外郭域の発掘調査の成果をまとめた報告書が、３ケ年の経過を経て漸く刊行の運びとなりました。この間、内郭部の調査で出土していた土師質皿に金粒が付着していることが再発見されるなど、多くの方々の耳目を集めたところです。

この報告書を関係者はもとより、多くの市民に読んでいただき、埋蔵文化財に対する理解を深めていただき、「史跡のまち」甲州市の文化財に一層の関心を持っていただければ幸甚と思うところであります。

結びになりましたが、遺跡調査や遺構分析、報告書の作成にご協力を賜りました勝沼氏館跡整備検討委員会の委員の皆様をはじめ、関係機関の皆様に心から感謝申し上げます。

平成　21 年　3 月　30 日

甲州市教育委員会
教育長　　古　屋　正　吾

例　言

1、本書は、山梨県甲州市勝沼町勝沼に所在する史跡勝沼氏館跡の環境整備事業に伴う資料調査ならびに地域文化財保全事業に伴う事前調査として、平成４年度 (1992) から平成 17 年度 (2005) までの間、国・県の補助を受け、勝沼町教育委員会ならびに甲州市教育委員会（平成１７年１１月合併）が実施した、外郭域Ｇ・Ｆ地区の発掘調査報告書である。

2、勝沼氏館跡に関わり実施された発掘調査は別表のとおりであり、本書に関わる調査区は外郭域Ｇ地区のＨ４Ｇ区～Ｈ１４Ｇ区までとＨ８Ｆ・Ｈ１５Ｆ・Ｈ１６Ｆ区である。調査区は県立ワインセンター進入路の北側一帯にあたり、勝沼氏館跡最盛期の縄張りでは東郭及びその周辺郭外域に当たっている。

3、調査区対象となった番地は、山梨県甲州市勝沼町勝沼 2474-5、2474-9、2474-10、2474-1、2487-2、2488-1、2489-1、2492-1 及び 2491、2492-3、3270-1 番地である。

4、調査および整理作業において以下の調査業務を委託実施した。

自然科学分析	パリノ・サーヴェイ (株)
地中レーダー探査	テラ・インフォメーション・エンジニアリング
地形および基準杭測量	(株) 一瀬調査設計
調査区航空写真撮影	(株) 東京航業研究所、(株) 一瀬調査設計
木製品実測	(財) 山梨文化財研究所
出土品保存処理	(財) 山梨文化財研究所

5、本書の執筆は第５章第３節を植月学（山梨県立博物館）、第５章第１節、第２節は成果報告に基づき他の章とともに室伏徹が行い、編集・図版製作は入江俊行・野沢すみれが行った。

6、本遺跡の概要は、

『史跡勝沼氏館跡―平成４～７年度外郭域Ｇ地区発掘調査概報』(1996)

『史跡勝沼氏館跡―平成８～１７年度外郭域Ｇ・Ｆ地区発掘調査概報』(2006)

などで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

7、発掘調査ならびに遺構図の整理、遺物の実測、トレース、図版原稿整理については、以下の方々の協力を得た。

雨宮和美、内田恵美子、内田栄昭、奥山清、佐藤美和子、芹沢昇、高野まゆみ、竹内まさ子、辻妙子、藤原靖子、鶴田千鶴子、前島弘、前田春子、丸太美奈子、三森徳昭、望月達也、守屋達也、山下恵美、若林豊美、渡辺嘉子、杉本悠樹

8、本遺跡にかかわる出土品・記録図・写真等は一括して甲州市教育委員会に保管してある。

9、本遺跡出土の瀬戸美濃産陶器については、愛知県誌編纂に伴う陶磁器調査で来県した楢崎彰一氏、藤沢良祐氏に、舶載陶磁器については歴史民俗博物館の小野正敏氏に指導を賜った。

10、本遺跡調査の遺構分析、報告書の編集には、勝沼氏館跡整備検討委員会委員の秋山敬、小野正文、清雲俊元、後藤善博、田代孝、萩原三雄、畑野経夫各位から御助言を賜り、文化庁記念物課、山梨県学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館、山梨県立博物館、旧山梨県史編纂室等関係各機関の方々より御指導、御配慮を賜った。記して心より感謝申し上げます。

凡　例

1、調査区には５ｍグリッドを設定し、基準点から５ｍごとに番号をふり、西はW、東はＥ、北はＮ、南はＳの記号の後に番号を付し、その交点をＷ１Ｎ２などと表記、グリッド軸線はＷ１ラインなどと呼び、グリッドは南西隅の交点名で表記することとした。また、調査地区名は昭和５２年度に実施した範囲確認調査の地区区分と調査開始年度を組み合わせ、Ｈ１０Ｇ区などと表記した。

2、調査に当たっては 15 ｍごとに幅１ｍの土層保存用のベルトを表土層から残し調査を実施した。発見された遺構はＳＧＤ４５などと記号化し、Ｓは遺構、Ｇは発見された調査区、Ｄは遺構種別を表し、これに発見番号を付し表記している。遺構種別は、Ａ＝土塁、Ｂ＝建物、Ｃ＝広場、Ｄ＝溝、Ｅ＝井戸、Ｆ＝焼土・炉、Ｇ＝庭園、Ｈ＝堀、Ｋ＝土壙、Ｐ＝水溜、Ｚ＝敷石、Ｘ＝石組・石積とした。なお、外郭域では水路・溝・堀も一括しＤ記号を用いた。

3、全体遺構図及び建築遺構図は縮尺１／100、遺物は古銭が原寸、小型遺物は１／3、大型遺物は１／６で表示してある。遺構図では中世遺構を実線、中世遺構の連続性は一点鎖線、石はスクリントーンで、中世遺構面にかかる近世以降の遺構は破線で示してある。

4、一覧表の遺物出土地点は、ＥＷ０・ＮＳ０を原点とし、ＥW方向をＸ軸でＥ方向を＋、W方向を－数値で、ＮＳ方向をＹ軸としてＮ方向を＋、Ｓ方向を－のメートル数値で標高とともに示してあり、大きさは cm 単位で表記してある。

目次

巻頭カラー写真
序
例言
凡例
目次
第１章　勝沼氏館跡の立地と歴史環境
　第１節　地理的環境…… 1
　　（1）立地
　　（2）水利
　　（3）地名
　　（4）街路
　第２節　歴史的環境…… 2
　第３節　勝沼氏について…… 2
第２章　調査の経過
　第１節　調査経過…… 8
　第２節　外郭域の土層…… 15
第３章　遺構
　第１節　郭配置…… 17
　第２節　段差構造…… 17
　第３節　堀…… 19
　第４節　土塁…… 21
　第５節　水路・溝…… 22
　第６節　井戸・水溜…… 25
　第７節　建物・塀…… 26
　第８節　土壙・竪穴状遺構…… 31
　第９節　小鍛冶・焼土遺構…… 33
　第10節　通路・空閑地…… 33
第４章　遺物
　第１節　焼物類…… 70
　　（1）土師質土器
　　（2）瓦質土器類
　　（3）国産陶器
　　（4）舶載陶磁器
　　（5）焼成粘土塊
　第２節　金属製品類…… 77
　　（1）鉄製品
　　（2）銅・金銅製品
　　（3）銭貨
　　（4）金属加工関係品
　第３節　石製品類…… 79
　第４節　植物製品類…… 79
　　（1）食膳具
　　（2）服飾具
　　（3）遊具祭祀用具
　　（4）家具調度品
　　（5）建築部材
　　（6）製作用具および未製品
第５章　外部調査
　第１節　地中レーダー探査……155
　第２節　自然科学分析……155
　第３節　動物遺体分析……156
第６章　調査の成果
　第１節　館以前の時期変遷……158
　第２節　外郭施設の時期変遷……158
　第３節　建築の時期変遷……160
　第４節　内郭部時期変遷と外郭域時期変遷の対応関係……163
　第５節　遺物……164
遺構図
土層図
遺物分布図
遺構遺物一覧表
写真図版
報告書抄録
奥付

図版目次

第 1図　勝沼氏館跡位置図…… 4
第 2図　勝沼村慶長検地以前の地名復元図…… 5
第 3図　勝沼村正徳検地道路網図…… 6
第 4図　勝沼氏館跡周辺中世遺跡図…… 7
第 5図　外郭域調査区々分図…… 14
第 6図　外郭域土層模式図…… 16
第 7図　勝沼氏館跡郭配置図…… 18
第 8図　外郭域段差構造模式図…… 19
第 9図　外郭域遺構図位置図…… 35
第 10図　外郭域遺構図（1）…… 36
第 11図　外郭域遺構図（2）…… 37
第 12図　外郭域遺構図（3）…… 38
第 13図　外郭域遺構図（4）…… 39
第 14図　外郭域遺構図（5）…… 40
第 15図　外郭域遺構図（6）…… 41
第 16図　外郭域遺構図（7）…… 42
第 17図　外郭域遺構図（8）…… 43
第 18図　外郭域遺構図（9）…… 44
第 19図　外郭域遺構図（10）…… 45
第 20図　外郭域遺構図（11）…… 46
第 21図　外郭域遺構図（12）…… 47
第 22図　外郭域遺構図（13）…… 48
第 23図　外郭域遺構図（14）…… 49
第 24図　外郭域遺構図（15）…… 50
第 25図　外郭域遺構図（16）…… 51
第 26図　外郭域遺構図（17）…… 52
第 27図　外郭域遺構図（18）…… 53
第 28図　外郭域土層図（1）…… 54
第 29図　外郭域土層図（2）…… 55
第 30図　外郭域土層図（3）…… 56
第 31図　外郭域土層図（4）…… 57
第 32図　外郭域土層図（5）…… 58
第 33図　外郭域建物遺構図A群（1）…… 59
第 34図　外郭域建物遺構図A群（2）…… 60
第 35図　外郭域建物遺構図B群…… 61
第 36図　外郭域建物遺構図C群・D群…… 62
第 37図　外郭域建物遺構図E群（1）…… 63
第 38図　外郭域建物遺構図E群（2）…… 64
第 39図　外郭域建物遺構図E群（3）・F群…… 65
第 40図　外郭域建物遺構図G群…… 66
第 41図　地中レーダー探査図…… 67
第 42図　土師質土器（1）…… 84
第 43図　土師質土器（2）…… 85
第 44図　土師質土器（3）…… 86
第 45図　土師質土器（4）…… 87
第 46図　土師質土器（5）…… 88
第 47図　土師質土器（6）…… 89
第 48図　土師質土器（7）…… 90
第 49図　瓦質土器（1）…… 91
第 50図　瓦質土器（2）…… 92
第 51図　瓦質土器（3）…… 93
第 52図　瓦質土器（4）…… 94
第 53図　瓦質土器（5）…… 95
第 54図　瓦質土器（6）…… 96
第 55図　瓦質土器（7）…… 97
第 56図　瓦質土器（8）…… 98
第 57図　瓦質土器（9）…… 99
第 58図　常滑（1）……100
第 59図　常滑（2）……101
第 60図　古瀬戸……102
第 61図　瀬戸大窯（1）……103
第 62図　瀬戸大窯（2）・連房……104
第 63図　天目・白磁……105
第 64図　青磁……106
第 65図　染付……107
第 66図　土製品……108
第 67図　金属製品（1）……109
第 68図　金属製品（2）・金属加工関係品……110
第 69図　古銭……111
第 70図　石製品（1）……112
第 71図　石製品（2）……113
第 72図　木製品（1）……114
第 73図　木製品（2）……115
第 74図　木製品（3）……116
第 75図　木製品（4）……117
第 76図　木製品（5）……118
第 77図　木製品（6）……119
第 78図　木製品（7）……120
第 79図　木製品（8）……121
第 80図　木製品（9）……122
第 81図　木製品（10）……123
第 82図　木製品（11）……124
第 83図　木製品（12）……125
第 84図　木製品（13）……126
第 85図　木製品（14）……127
第 86図　木製品（15）……128
第 87図　木製品（16）……129
第 88図　木製品（17）……130
第 89図　木製品（18）……131
第 90図　木製品（19）……132
第 91図　木製品（20）……133
第 92図　木製品（21）……134
第 93図　木製品（22）……135
第 94図　木製品（23）……136
第 95図　木製品（24）……137
第 96図　木製品（25）……138
第 97図　木製品（26）……139
第 98図　木製品（27）……140
第 99図　木製品（28）……141
第 100図　木製品（29）……142
第 101図　木製品（30）……143
第 102図　木製品（31）……144
第 103図　木製品（32）……145
第 104図　木製品（33）……146
第 105図　木製品（34）……147
第 106図　遺物分布図（1）陶磁器類……148・149
第 107図　遺物分布図（2）陶磁器類……150・151
第 108図　遺物分布図（3）木製品類……152・153
第 109図　遺物分布図（4）鉄釘・鉄滓・焼成粘土塊…154
第 110図　遺構重複関係図 ……166
第 111図　外郭域時期別遺構図（1）……167
第 112図　外郭域時期別遺構図（2）……168
第 113図　外郭域時期別遺構図（3）……169
第 114図　外郭域時期別遺構図（4）……170
第 115図　外郭域時期別遺構図（5）……171
第 116図　外郭域時期別遺構図（6）……172

表図版

第１表　外郭域調査一覧表…… 14
第２表　外郭井戸遺構一覧表…… 68
第３表　外郭域建物遺構一覧表…… 68
第４表　外郭域塀一覧表…… 69
第５表　外郭域土壙・竪穴状遺構一覧表…… 69
第６表　外郭域動物遺体一覧表（現場採取）……157
第７表　外郭域動物遺体一覧表（水洗採取）……158
第８表　外郭域遺物一覧表……173

写真図版

写真図版　1　Ｈ４Ｇ・Ｈ５Ｇ区遺構写真……188
写真図版　2　Ｈ５Ｇ区遺構写真……189
写真図版　3　Ｈ６Ｇ区遺構写真……190
写真図版　4　Ｈ７Ｇ区遺構写真……191
写真図版　5　Ｈ８Ｇ区遺構・遺物出土状況写真……192
写真図版　6　Ｈ９Ｇ区遺構写真……193
写真図版　7　Ｈ９Ｇ区遺物出土状況写真……194
写真図版　8　Ｈ１０Ｇ区遺構・遺物出土状況写真……195
写真図版　9　Ｈ１０Ｇ区遺物出土状況・Ｈ１１Ｇ区遺構写真……196
写真図版 10　Ｈ１１Ｇ区遺物出土状況写真……197
写真図版 11　Ｈ１１Ｇ区遺物出土状況・Ｈ１２Ｇ区遺構写真……198
写真図版 12　Ｈ１２Ｇ区遺物出土状況・Ｈ１３Ｇ・Ｈ１４Ｇ遺構写真……199
写真図版 13　Ｈ１４Ｇ区遺構・遺物出土状況写真……200
写真図版 14　Ｈ８Ｆ・Ｈ１５Ｆ・Ｈ１６Ｆ区遺構写真……201
写真図版 15　土師質皿・瓦質鍋・瓦質火鉢……202
写真図版 16　瓦質擂鉢・瓦質茶釜・常滑甕……203
写真図版 17　古瀬戸・瀬戸大窯陶器……204
写真図版 18　瀬戸大窯・連房陶器・舶載天目・白磁……205
写真図版 19　青磁・染付……206
写真図版 20　土製品……207
写真図版 21　鉄製品・青銅金銅製品・銭貨……208
写真図版 22　金属加工関係・石製品・木製品……209
写真図版 23　木製品建築部材……210
写真図版 24　木製品・杭……211
写真図版 25　木製品……212
写真図版 26　木製品……213
写真図版 27　木製品……214
写真図版 28　木製品……215
写真図版 29　木製品……216
写真図版 30　木製品……217
写真図版 31　動物遺体　魚類・切痕が認められた骨……218
写真図版 32　動物遺体　鳥類・哺乳類……219

第 1 章　勝沼氏館跡の立地と歴史的環境

第 1 節　地理的環境

（1）立地 [第 1 図]

勝沼氏館跡は、甲府盆地の東辺、大菩薩峠に源を発する日川が御坂、秩父山地の山間地形から抜け、甲府盆地の沖積地との間に形成した日川扇状地の扇頂部にある。日川扇状地は大善寺の西付近を頂点とし、南は甲州市勝沼町下岩崎、上岩崎の坂下川を挟み京戸川扇状地と接し、北は勝沼町小佐手、休息の田草川を挟み鬢櫛川扇状地と接している。近世勝沼村は日川右岸から北の田草川との間にあり、西は等々力村、東は菱山村、柏尾村と接し、館付近 (標高 421m) を頂点とし、日川に沿った一帯が高く北西に向かい緩やかに傾斜する自然地形を有している。

館の主要郭は、日川が形成した高さ 20 mの右岸段丘崖に沿い配置されている。館が乗る段丘面は、柏尾との境にある御手洗沢の西から始まり、幅 150 m、長さ 800m の平坦面で、東から「夏秋」、「水上屋敷」、「御所」の字名となっている。この段丘面の北辺は、北東にある柏尾山 (標高 739m) の山裾との間に形成された高さ 8m ほどの断崖となっており、この断崖は館の北東上町小公園 (浄泉寺跡) で北に大きく向きを変える。この屈曲部の断崖上が葡萄の栽培地として早くから知られる字「上ノ山」・「鳥居平」である。断崖はそのまま北上し、字日休 (矢羽根) の田草川左岸沿まで続く、断崖に沿う一帯は近世には「東反保」とも呼ばれた窪地状の水田が広がっていた。

（2）水利

旧勝沼村の水利は、勝沼村の産土神で勝沼氏の氏神である雀宮神社 (現勝沼中学校) に湧水地 (弁天池) があったと伝えられ、これより上では井戸も数えるほどしかなく、専ら水田用水には次郎堰、飲料水には柏尾堰 (深沢用水) が用いられていたという。次郎堰は日川水を取水する 2 番目の用水堰で、勝沼氏館跡内郭部の直下で取水し、段丘崖に沿い流下し、字富町・堰合町で扇状地上にのぼり、さらに上堰と下堰の二流に別れ、それぞれ北流し田草川に至るもので、下堰は別に山県堰とも呼ばれ永禄 5 年 (1563) 山県三郎兵衛の命により造られたという伝承が残されている。柏尾堰 (深沢用水) は大善寺の東側深沢川の水を取水し、大善寺山門前を横切り、館のある段丘面の北辺を流れ、館の北の甲州街道と小佐手小路 (御先手小路) の交差点から小佐手小路に沿い北流する流れと、甲州街道に沿い、勝沼宿を西流する流れに二分されている。

（3）地名 [第 2 図]

現在の甲州市勝沼町勝沼（近世勝沼村）の小字は、正徳 5 年 (1712)「甲州山梨郡栗原筋勝沼村田畠検地水帳」及び「勝沼村一筆下絵図」(向山修家蔵) により、これ以降変化していないことが確認できる。さらに寛永 1 8 年 (1641)「勝沼村古来字名所」は慶長検地以前に使用されていた以下の地名を伝えている。

夏秋　西埜　上ノ山　東　工屋　加賀屋敷　向原　中原　筋違　宮ノ上　猿林　大塚　宮ノ下　西原　上境畑　下境畑　境田　亀甲原　富士塚　一輪久保　二輪久保　三輪久保

これらの地名は、慶長 6 年 (1601) 検地の折、西埜を水上と御所、上之山を上之山と鳥居平、東を東と長遠寺、中原を新居と桜地蔵、筋違を筋違と井戸尻、猿林を板取窪と亀窪、宮ノ上を宮ノ上と宮ノ後、宮ノ下を宮ノ下と宮ノ前、西原を地蔵久保と願光寺と六左原と堰合、境田を南境田、亀甲原を北境田、一輪久保と二輪久保を上川久保に改められ、さらに元和 8 年 (1622) に上境畠を上天神、下境畠を中天神に改められたという。正徳検地の字名はこれら二度の改名を受けた結果となっており、現在の小字図を元に、改名の経過をたどることにより、慶長検地以前の地名図を復元想定できる。これによれば慶長検地以前、勝沼氏館跡の一帯の字は「西埜」で、原地となっていた可能性が考えられ、ここが慶長 2 年 (1597)「御所御城跡改発被仰付村中ニ而仕候」(勝沼古事記) により開発が行われ、慶長検地の段階では耕地として検地対象地に組み入れられた経過が読み取れる。また、慶長検地以前の字名「西原」「東」など村の中心 (小佐手小路、筋違付近) からの方位で命名され字名があるが、館を西埜と呼ぶことはこの視点とは異なっており、あるいは大善寺の年不

詳武田晴信判物に大善寺領として「三貫文　佛供免　勝沼之屋敷」とあり、館廃絶後、一時大善寺領となり大善寺からの視点で西野と呼称されていた可能性も考えられる。

（4）街路 [第３図]

旧勝沼村の道は、甲州街道 (第３図Ａ) が館の北郭の北辺堀に沿い東西に通過したことにより、街道の一帯は大きく変化した。これ以外の道は正徳検地の折、作成されたと考えられる「勝沼村一筆下絵図」に記された道が、中世以来の道を受け継いでいると考えられる。この正徳古道中に、現在でも道路名が伝承されているものがある。館の北郭から北 440 mにある勝沼氏の菩提寺泉勝院まで間の道は「小佐手小路」(第３図Ｄ、「御先手小路」が変化したものか) でこれより北側は萩原道と呼ばれ、館の北郭北西隅付近から北西の東漸院までの間は「筋違往還」(第３図Ｃ) または「鎌倉街道」と呼ばれ、この道はさらに小佐手を休息山立正寺の北で「道者街道」と合流し、秩父方面に至っている。これとは別に「御巡見道」(第３図Ｂ) と呼ばれる旧雀宮の北側で分岐し甲州市勝沼総合庁舎の西を南下、黒駒から御坂峠方面に至る道も「鎌倉街道」と伝承されている。また、中原の通神社から東林院山の西裾を通り日休から台地上に登り、鳥居平を南下し、館の東で日川を渡り、上岩崎・下岩崎・藤井を抜け鈴郷の浅間神社山宮に至る道を通神社の御幸祭の折祭神が通る道として「通道」(第３図Ｅ) と呼んでいる。

第２節　歴史的環境

勝沼氏館跡の東には、平安初期の薬師如来を本尊とし、弘安９年 (1285) 立柱の本堂建築がある大善寺があり、その境内域は、館の背後柏尾山の西麓から日川の河岸段丘上にもおよび、館は大善寺境内に隣接していると言っても過言ではない。館の北方小佐手小路 (御先手小路) の突き当たりには勝沼氏の菩提寺泉勝院があり、勝沼信友の夫人勝月院誓庵理鳳を開基とし、福正院殿光山輝公、長遠寺殿快翁道俊、崇正院殿華岳妙栄 (信縄夫人) などの位牌と「三階菱」「圏内に花菱を亀甲の上に重ね付けたる」紋を付けた勝沼氏の遺品を伝えていた。北東柏尾山の西麓には勝沼氏の祈願所海蔵院、鬼門鎮守の尾崎明神、福徳稲荷社、北西には勝沼の産土神雀宮があり、勝沼五郎奉納の首鎧、太刀を伝えていた。勝沼に隣接した等々力には甲斐国の浄土真宗を代表する万福寺がある。

勝沼の南日川を隔てた岩崎には武田信光の子信隆を祖とし、寛正２年 (1461) 跡部氏との戦いで滅んだとされる岩崎氏館跡がある。坂下川を北の守りとし、三方に二重堀を巡らした方一町ほどの館跡があり、東には岩崎の産土神氷川神社があり、寛正２年 (1461) の跡部氏の棟札を伝えている。北西には館のある小字立広を山号とすることから菩提寺と考えられる生福寺、祈願所の正宗寺などの社寺があり、館の南には岩崎氏の山城とされる蜂城山城があり、南東岩崎山の山頂には笹子峠と結ぶ茶臼山狼煙台がある。

勝沼の北、田草川を隔てた小佐手には、武田信重の永信を祖とし、武田信虎に滅ぼされたという一町四方の区画として残る小佐手氏館跡がある。館跡の東には菩提寺東林院、館から移されたという稲荷社日宮が南西に、北東には祈願所林照院、産土神伏木神社がある。小佐手の西隣は休息で東身延と呼ばれた日蓮宗の立正寺がある。さらに鬢櫛川を隔てた北側山村・牛奥・中原・菱山は萩原道と黒川金山に至る落合道の合流点に当たり、牛奥八騎と称された武士団がいたとされ、田草川氏、内田氏などの屋敷跡が伝えられている (第４図)。

第３節　勝沼氏について

勝沼氏については『甲斐国志』が初めて項を立て説明した。

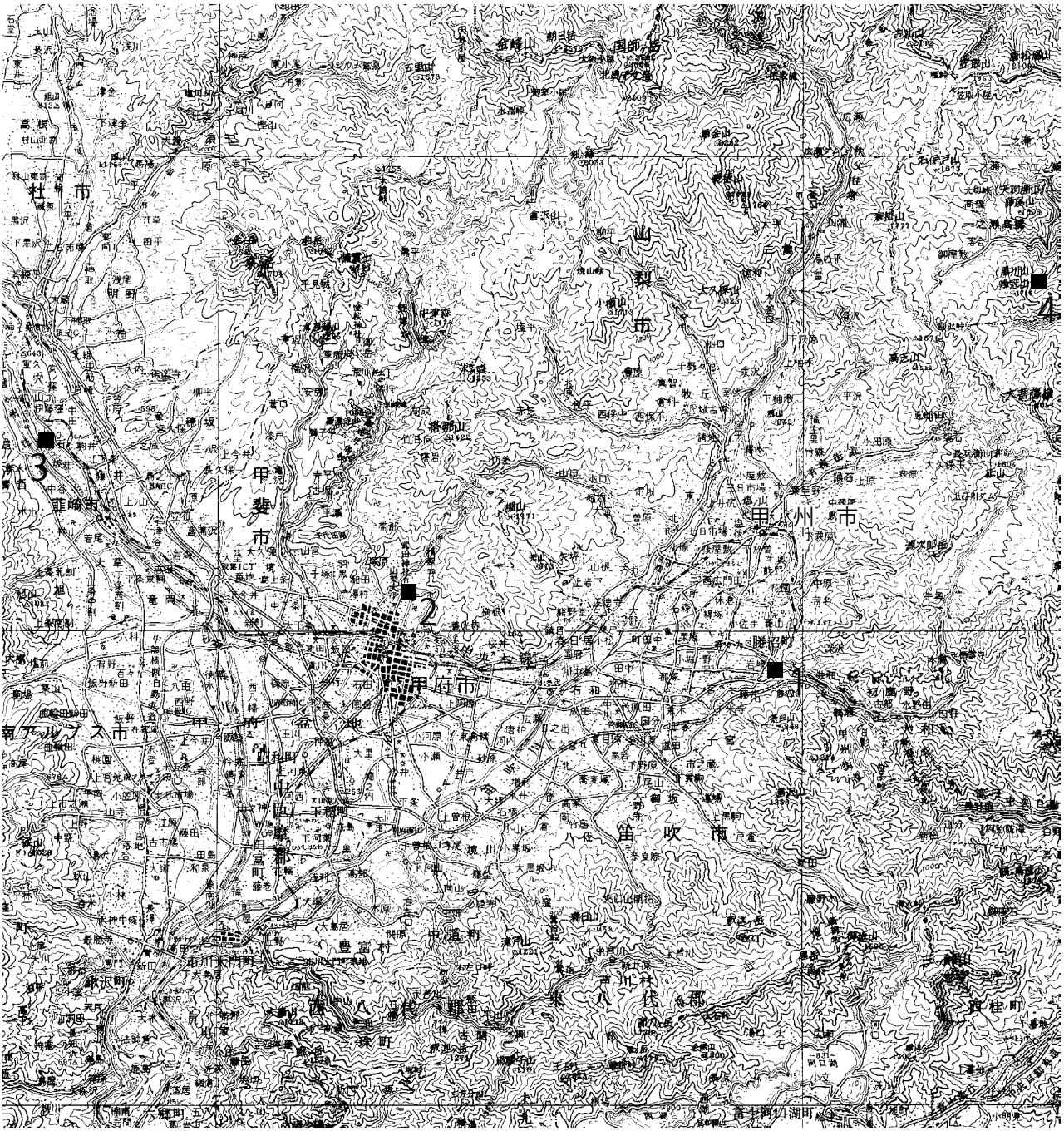
「武田系図信虎ノ弟次郎五郎信友安芸守称二勝沼殿一永禄三庚申年霜月三日死ス法名不山道存庵主一作一道厚一

男丹波守信元二男信原又信厚称二加藤丹後守一天正壬午三月十二日於武州箱根崎一死年四十三法名傑宗道英居士ト記ストアリ後人の誤伝ナラン未レ考　信元男為レ僧名ハ日閑相州信隆院ニ住ス信隆院ハ相州馬入川ノ

辺今井村ニアリ　勝沼泉勝院ノ牌子ニ開基勝沼殿御局誓庵理鳳大姉弘治三丁巳二月十日逝ス今勝月院ニ作ル勝沼殿ハ長遠寺殿快翁道俊大禅定門又福正院殿光山輝公大禅門、同奥宗正院殿華岳栄公大姉トアリ皆年月亡ス華岳妙栄ハ五郎信縄ノ夫人信虎ノ母ナリ信友亦同母ナラン　軍鑑大全伝解等ニ信玄公勝沼入道ノ息女ニ御手ヲ掛ケラレ古籠屋小路ニ屋敷ヲ構へ入置カル又勝沼殿御成敗武州ノ藤田右衛門ト内通ノ事発覚スル故也ト云々　勝沼入道トアルハ信友ニテ五郎トアルハ信元ノ事カ　伏誅ノ後其男僧トナリ相州ニ在ル故叔母理慶尼モ老後彼処ニ住シナラント聞ユ　然レドモ都留郡岩殿七社権現永正十七年ノ棟札ニ御奉加鳥目百匹武田左衛門大輔信友ト記セリ　勝山記ニ天正四乙未年八月廿二日相模ノ屋形勢ツカヒ被レ食候テ人数弐萬四千御方ハ弐千許ニテ軍ヲ被レ召小山田殿マケ被レ召候弾正殿、大輔殿、侍者周防殿、小林左京殿、下ノケンダン随分ノ方々打死被レ召候　殊ニ勝沼ノ人数以上弐百七拾人打死申候トアリ　大輔殿トハ武田左衛門大輔信友ニテ即チ勝沼ノ事ナルヘシ　時代廿六年ノ違アリ今訂二一定之一　但舎兄信虎ノ女所レ嫁ニ穴山信友アリ其男梅雪初メ左衛門大夫ト云ヘリ近族ニシテ同名不レ穏ト謂ヘシ」とし、武田系図に示された信虎の弟次郎五郎信友の没年を永禄３年ではなく、勝山記により天文４年と訂正し、甲陽軍鑑にある五郎を信元のことではないかとした。

昭和３７年の『勝沼町誌』も「勝沼氏館跡」の項を立て、甲斐国志を基本としながら、新たに『大善寺過去帳』を紹介し、さらに『甲陽軍鑑』と『甲陽日記』の天文 11 年大門峠合戦、天文１５年笛吹峠合戦、戸石城合戦、天文１６年海野平決戦、天文１９年戸石城攻め、天文２２年桔梗原合戦などに勝沼氏の記述があることを示した。昭和４８年勝沼氏館跡内郭部の調査が開始され、昭和５０年の『勝沼氏館跡調査概報』は、勝沼町誌の内容を踏襲し、勝沼信友について、石橋八幡神社大永六年棟札写しに「大檀那　武田信虎　勝沼氏信友」とあることを紹介し、勝沼氏は信友の戦死後は、嫡男の丹波守信元（信基とも）が継嗣する」とした。昭和５２年磯貝正義は『定本武田信玄』で「信友は勝沼にあって勝沼氏を称したが、郡内に駐屯して関東方面に備えるとともに、郡内諸将の動静を監視するという重要な任務についていた。」とし、さらに「陰謀事件もなかったとはいえないが、それは信友ではなく、その後継者のだれか（例えば丹波守信元）であろう。」とした。また、甲陽軍鑑の天文１１年大門峠合戦、天文１５年の笛吹峠合戦は合戦自体が無かったこと、天文１６年、天文１９年、天文２２年の参戦者名も書き加えられた可能性が高いと考えられるようになった。昭和５３年秋山敬は「武田一族と地名について」で永禄三年正月廿日御判の付箋がついた大善寺文書に「三貫文　仏供免　勝沼之屋敷」とあることを紹介し、勝沼氏の終焉をめぐる資料である可能性を指摘した。

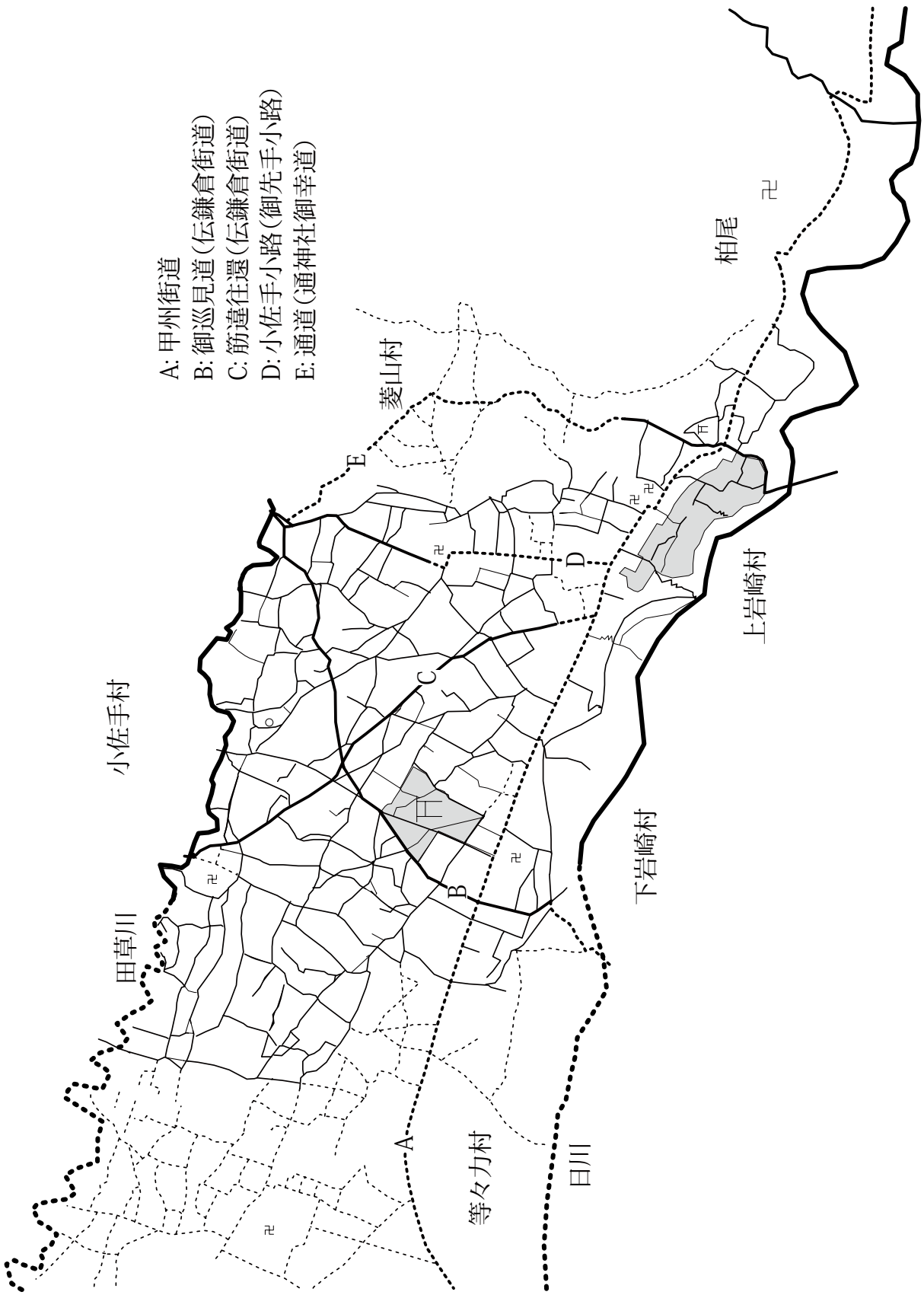
その後、限られた資料から勝沼氏にかかわる考究は進展をみなかったが、平成８年『山梨県棟札調査報告書国中Ⅰ』において旧境川村石橋八幡神社大永六年棟札写しに検討の余地があることが指摘され、旧塩山市熊野神社天文十八年棟札の (裏) 面写に「国主源朝臣武田信濃守四位晴信地頭今井横（ママ）相守入道道秀」とあることが紹介された。平成１１年室伏徹は『武田氏研究 20』「史跡勝沼氏館跡外郭域発掘調査の成果」において大善寺天文二十四年柏尾山造営勧進状案にある「誓令本願奉始　国主武田晴信當寺」「檀那今井相模守信甫嫡男惣領安芸守」「信良其外以下侍諸士地下信心尤」「深重也依之其時改而成檜皮葺半天」「文十九年三月中旬小山田出羽守」の五行が継紙であることを指摘し、『高白斎記（甲陽日記)』や『妙法寺記（勝山記)』にしばしば登場する「相模守」について再検討を提示した。平成１４年『山梨県史資料編６』で高野山引導院日牌帳謄写本が紹介され、その解説で「勝沼今井氏に関する記載が散見される。「勝沼今井相州」とあり、今井信甫が勝沼を本拠としていたことが確認され、これにより『勝山記』にみえる「勝沼ノ相州」も、今井信甫に確定する。また、兄信房とその子民部大輔、信甫の妻理勝・秀慶、その母理慶という近親者が確認されるが、このうち理慶は、いわゆる『理慶尼記』の作者とされる「理慶尼」にあたる存在とみられ、注目される。「理慶尼記」では、彼女は勝沼武田氏の娘とされているが、実は同氏に代わって勝沼を本拠とした今井氏の関係者である可能性が出てこよう。」とし、信友の死後、その後継者すなわち甲陽軍鑑が伝える永禄三年に成敗された勝沼殿が誰なのか興味深い検討が行われるようになり、さらに、勝沼氏の娘とされた理慶尼をめぐり新たな視点が加えられた。いずれにしても、勝沼氏に関しては直接資料が少なく、そのよりどころとなる資料が写本や後世の編纂資料などに限られており、考究の余地が多分にあるといえる。



1: 勝沼氏館跡　2: 武田氏館跡　3: 新府城　4: 黒川金山

第 1 図　勝沼氏館跡位置図

第２図　勝沼村慶長検地以前の地名復元図



第 3 図　勝沼村正徳検地道路網図

1: 勝沼氏館跡　2: 雀宮神社　3: 小佐手氏館
4: 立正寺　5: 萬福寺　6: 岩崎氏館
7: 蜂城山城　8: 茶臼山烽火台　9: 田草氏屋敷
10: 内田氏屋敷　11: 大善寺

第 4 図　勝沼氏館跡周辺中世遺跡図

第２章　調査の経過

第１節　調査経過〔第５図、第１表〕

（１）平成４年度調査〔第１０図〕

調査期間：　平成５年１月１８日～平成５年２月１９日

調査地区：　名称Ｈ４Ｇ区、範囲（東西ＮＳ０～Ｅ３、南北Ｓ３～ＮＳ０）、面積 140m^2

調査概要：　調査区は、県立ワインセンター進入路が南北から東西に屈曲する部分に当たる。発見された遺構は、１２世紀代の竪穴住居３基、戦国時代の掘立柱建物２棟の一部および土壙群、江戸時代以降の水田、小柱穴群から成る葡萄棚等が検出された。遺物は竪穴住居からは土師器が、掘立柱建物の遺構面からは土師質皿、釘、飾り金具、古銭、灰釉皿破片等が検出された。また、現状地形は北から南に緩やかに傾斜しているが、中世地山層は、調査区内では逆に、南から北に下っており、北側にある柏尾山の山裾、字鳥居平・上ノ山の台地との間に沢状地形が想定される。従来、館の外郭北辺が、鳥居平の山裾に近接しており、防御上不利な設定ではないかと考えられていたが、天然の沢により分断されていたことが明らかになり、さらに、近世初頭に整備された甲州街道が、明治初期まで台地の崖の中腹を通過していたのも、この湿地帯を避けていたためと考えられる。また、外郭域で検出された掘立柱建物は、出土遺物から内郭で検出された礎石建物と同時期と判断され、外郭域と内郭部では異なる建築技法が用いられていることが明らかになった。

（２）平成５年度調査〔第１１図、第１２図〕

調査期間：　平成６年１月２０日～平成６年３月３１日

調査地区：　名称Ｈ５Ｇ区、範囲（東西Ｗ３～Ｅ３、南北ＮＳ０～Ｎ３）、面積 483㎡

調査概要：　調査区はＨ４Ｇ区の北側にあたる。表土層直下から近世水田層面に載るように明治期の建物遺構が、水田面の精査でこれを掘り抜く葡萄棚の杭穴が多く確認された。近世水田層面の直下は縄文前期の遺物を含む黒褐色の中世地山層となっており、この層を掘り込んだ溝、掘立柱建物の柱穴が多数検出される。検出された溝の内、ＳＧＤ０４とＳＧＤ０５は、並行して検出されたが、覆の切り合い関係からＳＧＤ０４が古く、両水路とも一部石積みを伴う素掘溝で、調査区内を東西に抜け、砂礫の堆積状況から常時水が流れていた水路と判断された。検出された水路ＳＧＤ０５の北側７m先には、平行して柏尾堰 (深沢用水) の流れがあり、検出された水路遺構は中世段階の深沢用水路であると判断される。掘立柱建物は、柱穴内に柱根部が遺存するものや礎板石を伴うもの、柱穴相互が重複するもの、水路と重複するものも見られる。建物は、柱穴内から発見された柱根から芯を伴う丸太材を柱とし、さらに柱穴内から検出された焼けた土壁により外壁が土壁構造であったと考えられる。さらに、これらの遺構群は、周辺から発見された陶磁器、土師質皿、瓦質土器が内郭部で発見されたものであり、同時期に存在したと考えられるが、柱穴の掘方底部から瀬戸大窯３期後半に相当する初山窯の擂鉢底部が発見され、内郭部より１時期新しい建築群が存在している可能性が考えられる。また、この一群の建物は、東郭の外側に位置し、特定の範囲で継続的に建替えが行われていること、主屋と馬屋、主屋と蔵など小規模ながら複数棟の建築構成をもつこと、刀装具が伴うことなどから武家屋敷地と考えられ、その敷地規模は、おおよそ東西 20 ～ 25m、南北 15m ～ 20m と想定される。

（３）平成６年度調査〔第１３図、第１４図、第１５図〕

調査期間：　平成６年１１月１日～平成７年２月２８日

調査地区：　名称Ｈ６Ｇ区、範囲（東西Ｗ６～ＥＷ０、南北Ｓ３～Ｎ４）、面積 544㎡

調査概要：　調査区は平成４・５年度調査区の西側にＬ字状に設定する。Ｈ４Ｇ区に接した柱穴群が確認され、建物群の輪郭が明らかになる。この建物群は南側に石積井戸を伴っており、Ｈ５Ｇ区の屋敷が水路から

水を確保できるのに対し、飲料水の確保も別にしていることから、Ｈ５Ｇ区とは別の家臣屋敷と判断される。これを受けＨ５Ｇ区を東郭東門外北屋敷、Ｈ４Ｇ区を同南屋敷と呼ぶこととする。なお、東郭東辺堀ＳＧＤ１６と家臣屋敷群との間には建物遺構等が設けられない幅 11m の空閑地ＳＧＣ０１の存在が明らかになる。また、堀ＳＧＤ１６に伴う土塁ＳＧＡ０１が 60cm の盛土層を残し残存していることが確認されたが、土塁と堀は、東西溝ＳＧＤ２２で終わり、北には延びないことが明らかになる。さらに、土塁下から、雷紋帯青磁碗を伴う２間四方の掘立柱建物２棟 (ＳＧＢ２６・ＳＧＢ２７) が発見され、北屋敷からも発見されていた２間飛ばし（６尺を１間とし２間分を１柱間とする柱配置）の柱配置を取る小規模建物が１５世紀まで遡る古い建物であること、土塁脇側溝下から水溜 (ＳＧＰ０１) が発見されたことにより、外郭域では土塁や堀の位置を変更し、郭を拡大する大規模な構造改変があったことが明らかになる。

（４）平成７年度調査〔第１６図〕

調査期間：　平成７年１１月１７日～平成８年２月２０日

調査地区：　名称Ｈ７Ｇ区、範囲（東西Ｗ９～Ｗ６、南北Ｓ３～Ｎ２)、面積 321㎡

調査概要：　調査区はＨ６Ｇ区の西側に当たる。調査区は、県立ワインセンター進入路を挟み南側Ｈ地区で確認された東郭東辺土塁ＳＨＡ０１の延長線上に当たることから、当初土塁が発見されると予想されたが、延長線上から上面幅７ｍの素掘りの水溜ＳＧＰ０２が南北方向で確認され、土塁ＳＨＡ０１は、県立ワインセンター進入路下で鍵の手に屈曲し土塁ＳＧＡ０１に連続していた可能性が高くなる。さらに水溜の南西端には幅 2.5 ｍの出水路ＳＧＤ３３があり、これを渡る木橋の根太を置いた痕跡も見いだされたことから、この部分が東郭に入る通路と判断され、付近に東郭東門遺構の存在が予測されたが、調査区内では見出すことができなかった。水溜ＳＧＰ０２はその後、中央に石積みを行い、幅員が狭められ、さらに出水路ＳＧＤ３３を石積みで閉鎖し、新たに西壁側に出水路ＳＧＤ３４を設ける改修が行われている。なお、土塁と水溜の間から２間規模の２棟の建物ＳＧＢ２９・３０およびＳＧＰ０１からの出水路および柵列が確認される。

（５）平成８年度調査〔第２６図、第１７図〕

調査期間：　平成８年４月１日～平成８年６月３０日

調査地区：　名称Ｈ８Ｆ区、範囲（東西Ｗ 23 ～Ｗ 26、南北Ｎ７～Ｎ 17)、面積 552㎡

調査概要：　史跡勝沼氏館跡見学者用駐車場整備に伴い、史跡指定地外ではあるが事前調査として実施する。調査区は甲州街道勝沼宿の近世から現在にいたるまでの建築が繰り返し構築されていたため、著しく撹乱を受けており、中世遺構は調査区の南端から、幅７ｍの東西堀ＳＦＤ０６と、その南側から基底部幅 11m の東西土塁ＳＦＡ０１、さらにその南側から堀と考えられるＳＦＤ４３の落ち込みが確認されたのみである。なお、調査区内の地山はＮ 14 ライン付近より黄色砂礫層から黒褐色粘質土に変化しており、この付近から鳥居平の台地との境にある沢状地形が始まっていたと考えられる。

調査期間：　平成９年１月６日～平成９年３月２８日

調査地区：　名称Ｈ８Ｇ区、範囲（東西Ｗ 12 ～Ｗ９、南北Ｓ３～Ｎ２)、面積 315㎡

調査概要：　調査区はＨ７Ｇ区の西隣に当たる。Ｈ７Ｇ地区の水溜ＳＧＰ０２の改修出水路ＳＧＤ３４の行方に重点を置き調査を進める。確認された出水路は断面台形で、途中に削り出し構造の堰門状の突出部があり、これを境に幅員が増し、流路断面方向で南側が一段高い二段底構造となっていた。北側の低い底が粘土堆積などから流路と判断され、南側の一段高い底は堰門から始まっていることから管理用通路ではないかと考えられる。なお、流路は流下方向にも段差構造がみられ、堆積した粘土層中には多量の木製品、植物遺存体が含まれており、木製椀の荒型が検出されたことから、近接した職人工房の存在が想定される。水路ＳＧＤ３４に平行して直壁構造の溝ＳＧＤ４２が確認される。この溝には流入路が無いにもかかわらず底部には、植物遺存体を含む粘土堆積が見られることから、浚渫土の廃棄溝と考えられる。また、水路ＳＧＤ３４や溝

ＳＧＤ４２より新しい郭内流水路ＳＧＤ３７の存在が明らかになる。

（６）平成９年度調査〔第１８図〕

調査期間：　前半　平成９年４月１日～平成９年６月３０日

：　後半　平成９年１２月１５日～平成１０年３月３１日

調査地区：　名称Ｈ９Ｇ区、範囲（東西W 15 ～W 12、南北Ｓ３～Ｎ3)、面積 360㎡

調査概要：　調査区はＨ８Ｇ地区の西隣に当たる。西に向かう水路ＳＧＤ３４からは多量の木製品、植物遺存体が引き続き検出される。調査区内でこの水路は上面幅員が 5m、深さ 2m におよぶ大規模なものとなり、さらに新旧２時期あることが確認される。水路ＳＧＤ３４は、旧路が整備され、あまり時間が経過しない段階で流路内に大量の木製品類や木片等が灰や炭などと共に一括投棄され、直後に廃棄物の上部だけをすくい取って溝ＳＧＤ４２に移し、そのまま継続して使い続け、やや時間が経過し堆積物で埋め尽くされる状況になってから、一旦埋めたて、同一法線で新路を開削しなおした経過が明らかになる。出土した木製品類には、椀の未製品やナタ台、削りカス、漆布、タガ締め槌、桜皮やヘギ板など木製品の製作にかかわる遺物が含まれており、水路に比較的近い位置に木製品の製作工房があった可能性がさらに高くなる。

（７）平成１０年度調査〔第１８図、第１９図〕

調査期間：　平成１０年４月１日～平成１１年１月３１日

調査地区：　名称Ｈ１０Ｇ区、範囲（東西W 15 ～W 18、南北ＮＳ０～Ｎ5)、面積 309㎡

調査所見：　調査区はＨ９Ｇ区の北西隣に当たる。調査は前年度のＨ９Ｇ区の水路ＳＧＤ３４の北側一帯の遺構確認に重点を置いて実施し、粘性土のため柱穴や土壙の確認が難しかったものの、ここより２間３間規模と想定される掘立柱建物ＳＧＢ３２、ＳＧＢ４３さらに、２間６間の２間飛ばし構造の柱配置を取る建物ＳＧＢ４０、ＳＧＢ４１が同位置で確認される。ＳＧＢ３２、ＳＧＢ４３の柱配置はＨ５Ｇ区の家臣屋敷の建物と類似しているが柱穴径、柱痕から想定される柱径が一回り小さい。この他水路に隣接したW 15 ＮＳ０杭を中心に漆塗膜断片を含む黒色粘質層、その下部に木炭を多量に含む造成層が広がり、ここより２間四方で周囲に土壙を伴う小規模建築ＳＧＢ３３、ＳＧＢ３４が確認される。さらに、この一群の北西側より、鉄滓や飾り金具類が多く発見され、鉄滓を伴う土壙ＳＧＫ１４８や焼土遺構、内部に小鍛冶遺構を伴うＳＧＢ３８、ＳＧＢ４７などの２間四方の掘立柱建物が見出される。これら一群の建物の間から素掘りの井戸ＳＧＥ０３が確認され、内部から、削りカス、砥石、桜皮などの小片が多数発見され、土壙として調査したＳＧＫ１５３やＳＧＫ１５６も井戸である可能性が考えられる。建物の周辺から見出された土壙は、船底形の浅い矩形土壙と、円形ないし矩形の直壁土壙と砂礫が詰まった土壙があり、直壁土壙の内ＳＧＫ１４７の底部には、桶を据えたと考えられる台石が見出されたことからこのタイプの土壙は桶据土壙である可能性が考えられる。

また調査区を南北に縦断するように、堀ＳＧＤ５６が発見される。内部の堆積物の状況から流路とは考えられないが、底部に粘土層が見られ、漆椀、箸、下駄、独楽、雪駄、建築材料、曲輪板などの木製品がゲンゴロウ、ガムシなどの水生昆虫の遺骸と共に発見される。

（８）平成１１年度調査〔第２０図、第２１図〕

調査期間：　前半　平成１１年４月１日～平成１１年７月９日

：　後半　平成１１年１２月１日～平成１２年２月２９日

調査地区：　名称Ｈ１１Ｇ区、範囲（東西W 15 ～W 21、南北Ｓ３～ＮＳ０)、面積 337㎡

調査概要：　Ｈ１１Ｇ区は、Ｈ９Ｇ区の西隣でＨ１０Ｇ区の南側に当たる東西方向の調査区である。Ｈ９Ｇ区から続く水路ＳＧＤ３４新路は調査区を東西に抜けており、当初単純な傾斜底であったものを 6m から 7m 程の間隔で乱杭を打ち、さらに石積み堰堤を設け、流路を階段状にする改修を行った形跡がみられる。

旧路内部からは大量の木製品、植物遺存体が投入された状況で見出され、流路はW 19 とW 20 の間で終息し、南に屈曲している可能性もあるが、砂礫が詰まった幅 30cm の溝が検出され、これが出水路ではないかと考えられる。水路ＳＧＤ３４の北側に隣接して２間四方の掘立柱建物ＳＧＢ４８が土壙と重複して見出され、船底型の土壙ＳＧＫ１８３の底部から乱雑に重なる木質圧痕を確認することができ、このタイプの土壙は木製品製作にかかわる廃棄土壙であることが分かる。さらにこれらの建物群から若干離れた西側より、２間３間規模の建物がＳＧＤ３４旧路に切られて見出され、この一群の建物は、周囲に漆塗膜片を伴うものの土壙を伴わず、W 15 の水路北側の小規模建物群とは規模性格が異なっている。これらの建物や土壙の下部から、ＳＧＤ３４旧路に切られる石積み井戸ＳＧＥ０５・ＳＧＥ０６が見出され、ＳＧＥ０５は遺構確認面から -2m までが石積み、それ以下 -3m までが素掘り構造で、使用途中で素掘り部分を埋めたて、石積部分のみの井戸に改修した形跡が見られた。ＳＧＥ０６は当初からＳＧＥ０５の石積み部分に相当する深さまでしか掘削を行っておらず、廃絶に当たり灰や木炭を投げ入れている状況が観察される。また、ＳＧＤ３４の旧路、新路に切られるようにＳＧＤ５６と並走する南北方向の土塁ＳＧＡ０３、堀ＳＧＤ６７、土塁ＳＧＡ０２などが見出される。堀ＳＧＤ６７の一部を埋め立て、土塁ＳＧＡ０３が構築されている状況が観察され、土塁ＳＧＡ０２と堀ＳＧＤ６７がある段階までの外郭の東辺防御施設で、新たに土塁ＳＧＡ０３と堀ＳＧＤ５７が追加構築され、近接二重土塁堀構造としたと考えられる。堀ＳＧＤ５６は水路ＳＧＤ３４新路に切られる直前で堀底が立ち上がっており、この先に土橋の存在が考えられる。さらに土塁ＳＧＡ０２においても、土橋の延長線上の位置で、土塁の盛土方法とは異なる水平盛土層がＳＧＤ３４新路の南壁から確認され、この部分に切り通し構造の通路の存在が確認される。

（9）平成１２年度調査〔第２２図〕

調査期間：　平成１２年4月1日～平成１３年3月３０日

調査地区：　名称Ｈ１２Ｇ区、範囲（東西W 18 ～W 21、南北ＮＳ０～Ｎ 5)、面積 345㎡

調査概要：　調査区はＨ１０Ｇ区の西側、Ｈ１１Ｇ区の北側に当たる。調査区の南端堀ＳＧＤ６７の上部からＨ１１Ｇ区で見出された建物ＳＧＢ４９、５０と同規模の２間３間の建物ＳＧＢ５１が南北方向で確認される。堀ＳＧＤ６７は断面逆台形で底部は北から南に傾斜しているものの、4m 程の間隔で 10cm 前後のわずかな段差が見られる。これに伴う土塁ＳＧＡ０２は 70cm 程の盛土層が残存しており、断面的な盛土の手順と共に、水平的な盛土状況を観察することができた。内郭部北辺の外側土塁ＳＧＡ０３の断面調査では、土塁は堀側に小規模な土手を築いてから、これをまたぐように内側に順次盛土を行っていた。ところが、土塁ＳＧＡ０２は堀から遠い郭内側から盛土を始め、順次堀側に盛土するという逆の手順で構築していること、また水平にこれを見ると、堀側から堀の反対側に斜めの縞模様を形成するように黒色粘土層と黄色砂礫層が観察され、本来上下関係で堆積している土が交互にあることから、堀は一定の区画単位に掘り下げ、区画ごとに掘り下げる深度を違えることにより、異なる性質の土を採取し、これを堀から遠い所へ斜めに運び盛土するという構築方法が復元される。さらに、土塁ＳＧＡ０２の基底部北半から古瀬戸後期以後の水田層面および水路が確認され、初期館が構築される前の景観が想定されるようになる。調査と並行し堀や水路の堆積土９地点を選び自然科学分析調査を委託実施した。

（１０）平成１３年度調査〔第２３図、第２４図〕

調査期間：　平成１３年4月1日～平成１４年3月３１日

調査地区：　名称Ｈ１３Ｇ区、範囲（東西W 21 ～W 24、南北ＮＳ０～Ｎ 6)、面積 375㎡

調査概要：　Ｈ１３Ｇ区はＨ１２Ｇ区の西隣に当たる。Ｈ１２Ｇ区の土塁ＳＧＡ０２に沿うように石積み水路の可能性のある礫群が見出され、ここより西に向かう素掘りの排水路が３条見出される。この溝に直行するように建物ＳＧＢ５３、５４の２棟の重複建物とした大型建物の一部が見出され、この建物の南東から３間幅の建物ＳＧＢ５５の一部が見出される。礫群の下部からは、北端で西に曲がり始める堀ＳＧＤ１１２と、

これに伴う土塁ＳＧＡ０５が見出され、調査区の北端が外郭帯の屈曲部分であることが確認される。さらに土塁基底部からは館構築以前の水田層と、これを切るように構築された竪穴状遺構ＳＧＫ２４１、ＳＧＫ２３８が見出される。

調査に並行し地中探査レーダー調査を、北面外郭線把握のため旧甲州街道に沿い実施した。この結果、北郭の中央を東西に初期段階の北辺堀が通過していること、Ｈ８Ｆ区で確認された東郭北辺の幅員 7m の堀ＳＦＤ０６がＨ１２Ｇ区の北側をさらに東に抜けていることが確認され、これに対応する東郭東辺の掘は、水溜としたＳＧＰ０２しか無く、これを東辺堀と改めることとした。さらに、ＳＧＰ０２が堀であるなら、その郭内側のＳＧＤ３７との間に土塁の存在が想定され、これを土塁ＳＧＡ０４とする。また、東堀の東側から発見された土塁ＳＧＡ０１に伴う堀ＳＧＤ１６は予想通り県立ワインセンター進入路下で屈曲し、道路南側の土塁ＳＨＡ０１に伴う堀ＳＨＤ０１に接続する状況が確認され、東郭東門が鍵形虎口構造である可能性が高くなるなどの成果が得られた。

（１１）平成１４年度調査〔第２４図〕

調査期間：　平成１４年４月１日～平成１５年３月２７日

調査地区：　名称Ｈ１４Ｇ区、範囲（東西Ｗ 21 ～Ｗ 24、南北Ｓ２～ＮＳ０)、面積 120㎡

調査概要：　調査はＨ１３Ｇ地区の調査を継続実施すると共に、新たにＨ１３Ｇ地区の南側、Ｈ１１Ｇ区の西隣に調査区を設定した。Ｈ１３Ｇ区の南端で発見された建物ＳＧＢ５５は桁行３間で梁行が９尺 (曲尺) １間の東西棟の建物で、特異な間幅を有することが明らかになる。またＨ１１Ｇ区から続くＳＧＤ３４新路はＷ 21 ライン手前で終息しており、その末端部は堀ＳＧＤ１１２の堆積土との峻別が難しかったため、ＳＧＤ１１２の底部まで調査を進め、ようやく明らかにすることができた。これより先は、屈曲している可能性も考えられるが、調査区南壁から溝の底に、直径 20cm ほどのパイプ状に粘土が堆積した遺構が検出され、ある段階以降これが出水路で、ＳＧＤ３４新路の水は、この末端から地中配管に近い状況で給水されていたと考えられる。なお、ＳＧＤ３４新路の末端部には、水路の終末段階で樹木の根、焼けた建築部材、焼成粘土塊 (土壁) や大型鉄製蜀台などが大量に投入されている。堀ＳＧＤ１１２は断面台形を呈し、構築されてからしばらく後、土塁ＳＧＡ０５側が埋設され、幅員、深さ共に半減する改修が行われ、さらに土塁が削られ、堀が埋設されてから建物ＳＧＢ５５が乗る整地層面が築かれるという変遷過程が確認され、底部に近い粘土層から、土師質皿、陶磁器と共に漆椀、箸などの木製品が検出される。

調査期間中、国立歴史民俗博物館による出土舶載陶磁器調査、愛知県誌編纂に伴う山梨県内の出土瀬戸美濃産陶器の調査に協力した。

（１２）平成１５年度調査〔第２７図〕

調査期間：　平成１５年４月１日～平成１６年３月３１日

調査地区：　名称Ｈ１５Ｆ区、範囲（東西Ｗ 24 ～Ｗ 27、南北Ｎ３～Ｎ６)、面積 232㎡

調査概要：　Ｈ１３Ｇ，Ｈ１４Ｇ地区の測量作業を継続実施すると共に、Ｈ１３Ｇ区の西側、Ｈ８Ｆ区の南側にＨ１５Ｆ区を設定する。Ｈ８Ｆ区調査で一部が確認された外郭東西堀ＳＦＤ４２の幅員が 5.5m で、これが堀ＳＧＤ１１２と接続すると考えられる。この堀の南側から南北土塁ＳＧＡ０５と接続する東西土塁ＳＦＡ０２が基底部幅 7m で確認される。しかし、基底部の地山砂礫層まである段階で削平され、土塁を含む調査区全体に焼土や炭化物を伴う盛土層面が広がっていることが分かる。この層にトレンチを入れ掘り下げると土塁ＳＦＡ０２の郭内側から地山が３５度近い角度で急激に落ち込んでおり、調査区半域が大規模な堀ＳＦＤ４６の内部に含まれていることが確認される。この堀は位置的に見て、内郭の東側、東郭Ｃ地区調査および内郭の北側の範囲確認調査で確認された、内郭を囲む二重目の堀の屈曲部に当たると考えられる。なお、調査と並行し、今後の調査整備活用計画策定の基礎資料として史跡全体の 1/500 地形測量を委託実施する。

（１３）平成１６年度調査〔第２５図〕

調査期間：　平成１６年４月１日～平成１７年３月３１日

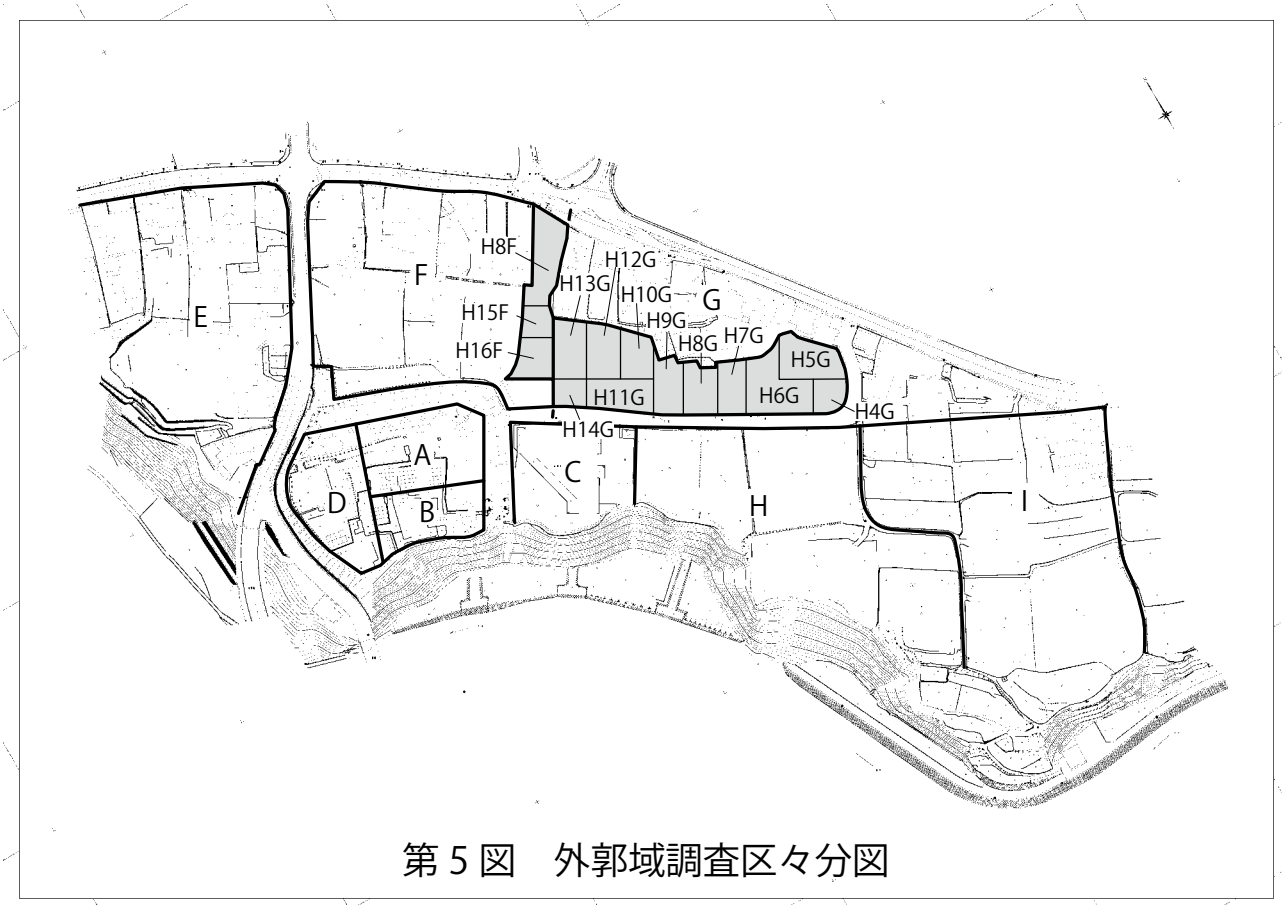
調査地区：　名称Ｈ１６Ｆ区、範囲（東西W 24 ～W 27、南北ＮＳ０～Ｎ 3)、面積 225㎡

調査概要：　Ｈ１５Ｆ区の調査を継続すると共に、堀ＳＧＤ４６の範囲を確認するため南側にＨ１６Ｆ区を設定する。近世水田層面下からＨ１３Ｇ区で検出された東西方向の溝が３条確認され、Ｈ１５Ｆ地区の堀ＳＧＤ４６は東西方向から南北方向に向きを変え、幅員 11m の大規模なものであることが確認される。また、この堀はある段階で埋め戻され、その上に、盛土造成が行われており、造成後設置された遺構の確認のため慎重に掘り下げていったところ、5m ～ 6m の間隔で焼成粘土塊がまとまって見出され、その箇所が柱穴であることが確認でき、Ｈ１３Ｇ区で建物ＳＧＢ５３、５４とした柱穴はこの建物の一部と判断される。建物ＳＦＢ１０は桁行き 15.5m、梁行 7.5m の廂付き東西棟大型建物である。なお、この建物は盛土造成層の上に造られたためか、柱穴底に礎板石を伴うものが多く、柱穴の位置、役割により、柱径や深さが使い分けられている。建物の建築年代は、柱穴確認面から検出された瀬戸大窯２期前半の内ヘギ丸皿破片からこれ以降の、比較的近い年代が想定される。その後焼失し、柱の抜き取り作業が行われた際に、抜き取り穴に焼成粘土塊（壁土）が混入したと考えられる。さらに、この建物の南東にある建物ＳＧＢ５５は棟の方向が一致しており、付属建物と考えられる。内郭の外堀を埋め、大規模な造成を行ったのは、この建物群の設置を目的としたものと考えられる。造成範囲から推定される屋敷の範囲は、北が土塁ＳＦＡ０１、東が土塁ＳＧＡ０１の段差で、現状地形を考慮すると東西 60m、南北 60m の規模と推定され、水路ＳＧＤ３４新路の末端は屋敷地の隅に設定されたことになり、新路の延長の目的がこの屋敷への給水にあったと考えられる。また、堀ＳＧＤ１１２の上部に見出された礫群は、本来石積水路で、溝ＳＧＤ１０９、ＳＦＤ５５に連結し、雨水排水が給水地点に流れ込まないよう排水する施設であったと考えられる。

（１４）平成１７年度調査

調査期間：　平成１７年４月１日～平成１７年１１月３０日

調査概要：　東郭のＨ１５Ｆ、Ｈ１６Ｆ地区の調査を前年度から継続実施し、確認された遺構の平面図、土層図、断面図作成を行う。Ｈ１５Ｆ地区では大型建物ＳＦＢ１０の付属建物の存在を再確認するため、造成層面を精査するが背後には建物が無かったようである。また、内郭部外堀ＳＦＤ４６の断面構造を確認するため、サブトレンチを掘り下げるが、造成層上部は強固であるものの下部は堀に自然堆積した粘土と砂礫層から構成される軟弱土であるため、掘削を断念せざるを得ず、底部の確認までには至らなかった。



第 5 図　外郭域調査区々分図

第 1 表　勝沼氏館跡外郭域発掘調査一覧

調査年度	調査期間	調査区	調査面積	事業費(千円)	検出遺構等	備考
平成4年度	H5,1,18 ～H5,2,29	H4G区	140㎡	1,523	掘立柱建物および平安時代竪穴	整備調査
平成5年度	H6,1,20 ～H6,3,31	H5G区	483㎡	5,019	掘立柱建物群と幹線水路	整備調査
平成6年度	H6,11,1 ～H7,2,28	H6G区	544㎡	5,896	東郭東辺土塁・堀と下部建物	整備調査
平成7年度	H7,11,17 ～H8,2,20	H7G区	321㎡	2,530	東郭東辺堀と通路、建物	整備調査
平成8年度	H8,4,1 ～H8,6,30	H8F区	552㎡		外郭北辺土塁・堀と水路	駐車場整備に伴う事前調査
	H9,1,6 ～H9,3,28	H8G区	315㎡	6,803	水路および廃棄溝	整備調査
平成9年度	H9,4,1 ～H9,6,30 H9,12,15 ～H10,3,31	H9G区	360㎡	9,416	水路新旧・井戸と工房建物群・土壙	整備調査
平成10年度	H10,4,1 ～Hl1,3,31	H10G区	309㎡	10,925	土塁・堀と工房建物検出	整備調査
平成11年度	Hl1,4,1 ～H11,7,9 H11,12,1 ～H12,2,29	H11G区	337㎡	10,962	堀・土塁・井戸・水路と工房建物	整備調査
平成12年度	H12,4,1 ～H13,3,30	H12G区	345㎡	12,879	土塁と堀、工房建物検出	整備調査
平成13年度	H13,4,1 ～H14,3,31	H13G区	375㎡	12,468	土塁・堀と水路末端	整備調査
平成14年度	H14,4,1 ～H15,3,27	H14G区	120㎡	10,530	堀・土塁、掘立柱建物、溝	整備調査
平成15年度	H15,4,1 ～H16,3,31	H15F区	232㎡	12,013	北辺土塁・堀、内郭外堀	整備調査
平成16年度	H16,4,1 ～H16,12,25	H16F区	225㎡	7,986	内郭外堀と重複する掘立柱建物	整備調査
平成17年度	H17,4,1 ～H17,11,30	H16F区		11,134	遺構図作成/整理作業	整備調査

第２節　外郭域の土層

勝沼氏館跡は、日川扇状地の扇頂部、日川の断崖を背にした立地である。20m 近い断崖面を観察すると下部 15m は粘板岩層、その上部 5m 程が大型の花崗岩と砂礫が混じり合った河川堆積物層で、この上に構築された館であることが分かる（第６図）。

（１）中世館以後の層　（Ｌ）

外郭域は、全て葡萄畑として利用されていた。葡萄畑の耕作土は、冬季に多量の石灰を散布することから石灰粒と土質改良のため入れられた川砂が含まれる特徴がある。現耕作土層下はＷ１～Ｗ６ラインの間を除き、明灰褐色粘質土と鉄分により赤変した赤褐色粘質土（床土）からなる旧水田層が１面ないし２面観察される。この水田層面は、Ｗ 12 ～Ｗ 16 ラインの間では２段の水田層の下段を埋め、上段と一つの水田にする耕地改良が行われた様子が観察でき、この改良後の水田面が『元和五年勝沼村上組絵図』（1619）及び正徳五年（1715）検地の折の『一筆下絵図』に描かれた水田と一致している。現地表面から水田床土層までの深さは平均すると 40cm である。

水田層面の下部は、水田造成の折の盛土・掘削の違いにより、盛土に利用された灰色砂質土がある場所、直接中世層になる場所、中世地山層に至ってしまう場所などがある。

Ｌ１－１　暗茶褐色砂質土層で石灰粒を含む表土層
Ｌ１－２　茶褐色粘質土層で砂粒、石灰粒を含む現耕作土層
Ｌ２－１　明灰色粘土層　水田耕作土
Ｌ２－２　赤褐色粘土層　水田床土層　上層水田面
Ｌ３－１　明灰色粘土層　水田耕作土
Ｌ３－２　赤褐色粘土層　水田床土層　下層水田面
Ｌ４　　灰色砂質土層　水田造成層

（２）中世館の土層　（Ｍ）

近世層と中世地山層の間にある炭化物を含む 5cm 前後の暗茶褐色土層で、中世段階で盛土造成を行った場所は厚く、中世地山層の土が混じり合った状態で確認され、堀や水路では粘土や砂礫の堆積が 1m 以上に及ぶ場合があるが、近世水田造成に伴い、中世層がまったく見出せない場所もある。

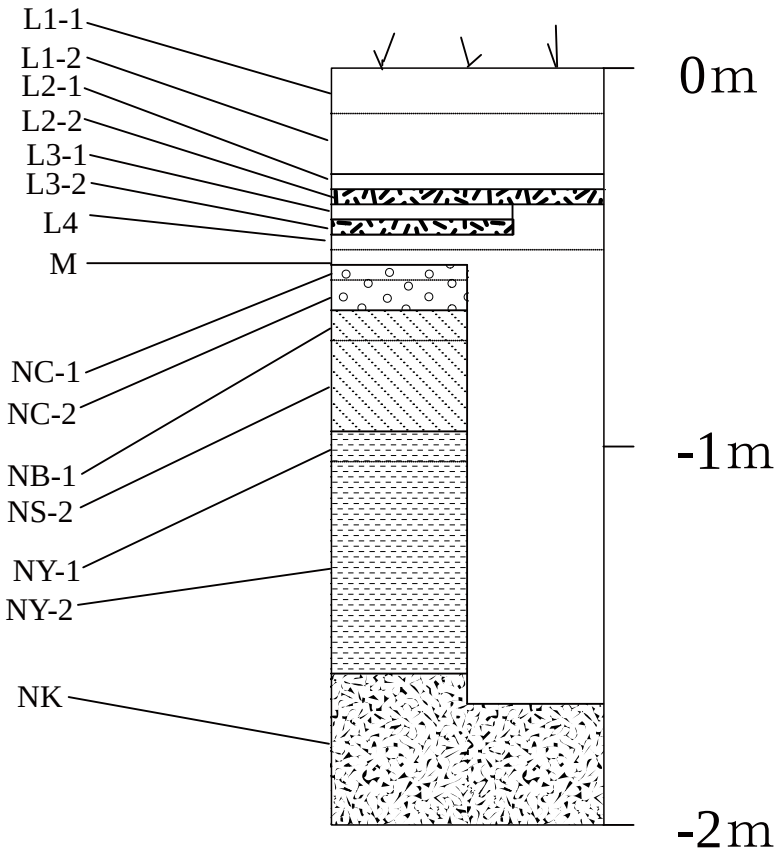
Ｍ　　暗茶褐色土層　炭化物を含む

（３）中世館地山層　（Ｎ）

中世館構築以前の土層で、茶褐色粘質土（ＮＣ）、黒褐色粘質土（ＮＢ）、黄褐色砂質土（ＮＹ）、花崗岩礫層（ＮＫ）の順で堆積している。茶褐色粘質土中からは平安の遺物が、黒褐色粘質土中からは縄文時代の遺物が見出せ、その下部の黄褐色砂質土層が山梨県内の遺跡で見出せる関東ローム層に当たる層、花崗岩礫層が扇状地を形成した河川堆積物層と考えられる。中世地山層は、中世段階の掘削造成の違いにより、Ｈ４Ｇ区・Ｈ６Ｇ区の南端では、水田層面の直下に花崗岩礫層が現れ、中世の柱穴や井戸が花崗岩を刳り貫いて構築されている状況が見られるなど、場所により異なっている。中世地山層の厚さは、中近世の掘削を免れた土塁ＳＧＡ０４下部の状況が堀ＳＧＤ６７の壁面で観察することができ、ＮＣ層が 15cm、ＮＢ層が 25cm、ＮＹ層が 63cm で、現地表下 1.6m がＮＫ層の最上部である。

ＮＣ－１　茶褐色粘質土　砂粒を含む
ＮＣ－２　茶褐色粘質土
ＮＢ－１　黒褐色粘質土　砂礫　鉄分を含む

ＮＢ－２　黒褐色粘質土
ＮＹ－１　黄褐色砂質土　鉄分を含む
ＮＹ－２　黄褐色砂層
ＮＫ　　花崗岩礫層



第６図　外郭域土層模式図

第３章　遺構

第１節　郭配置

１６世紀代の勝沼氏館跡の郭構造は、地表面に残る土塁や堀の痕跡と昭和５２年度に実施した範囲確認調査により、「内郭」と「北西郭」、「東郭」の３郭があることが早くから確認されていた。その後、内郭と北西郭を分断する県道塩山市川大門線と甲州街道の上町交差点の改修工事に際し、交差点の南側に東西方向から南北方向に屈曲する土塁を伴う堀があることが確認された。この堀は、北西郭と町屋の中心街路と考えられる小佐手小路との間に郭が存在することを示し、この郭を４番目の郭として「北郭」と呼称することとした [第７図下]。なお、今回の調査で１５世紀代の館は、内郭を取り巻く近接二重堀により護られた「外郭帯」から構成されていることが明らかになった [第７図上]。

内郭は、勝沼氏館跡の核となる郭で、東西 90m 南北 70m、南面と西面は日川の急崖、東面と北面は土塁と堀により画されている。北西郭は、内郭の北西側に位置し、内郭の外堀が屈曲し郭を構成しており、内郭北西門（内郭正門）はこの郭を経由して出入りする。規模は東西 75m 南北 45m で、西面は日川の急崖、南面は堀、北面と東面は堀と土塁に画されている。北郭は北西郭の北側に位置し、北郭の北側から、小佐手小路が始まっており、館の北門（正門）があったと考えられる。西辺区画施設がまだ確認されていないが、南北 50m、東西 100m 以上に及ぶ可能性があり、南面は堀、東面と北面は土塁と堀により画されている。東郭は内郭の東側にあり、大規模な水溜や水路の存在が確認されている。規模は東西 90m 南北 90m で南面は日川の急崖、西面は堀、東面と北面は土塁と堀により画されている。

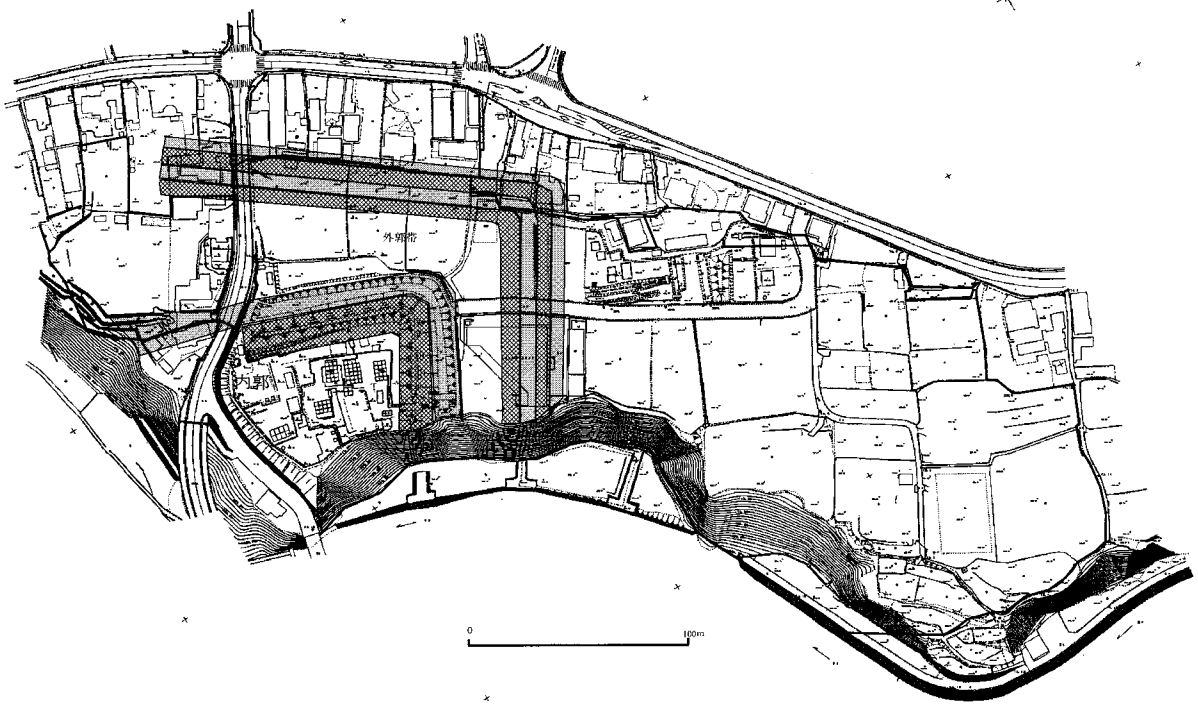
第２節　段差構造

外郭域調査区は、東から西に下る傾斜地形で東端と西端とでは約 5.7m の標高差がある。調査前の葡萄畑ではＧ地区が７段、Ｆ地区が１段、計８段の雛壇状になっており、これを東側から西に向かいＧ１～Ｇ７テラス、Ｆ１テラスと呼称することとした [第８図]。

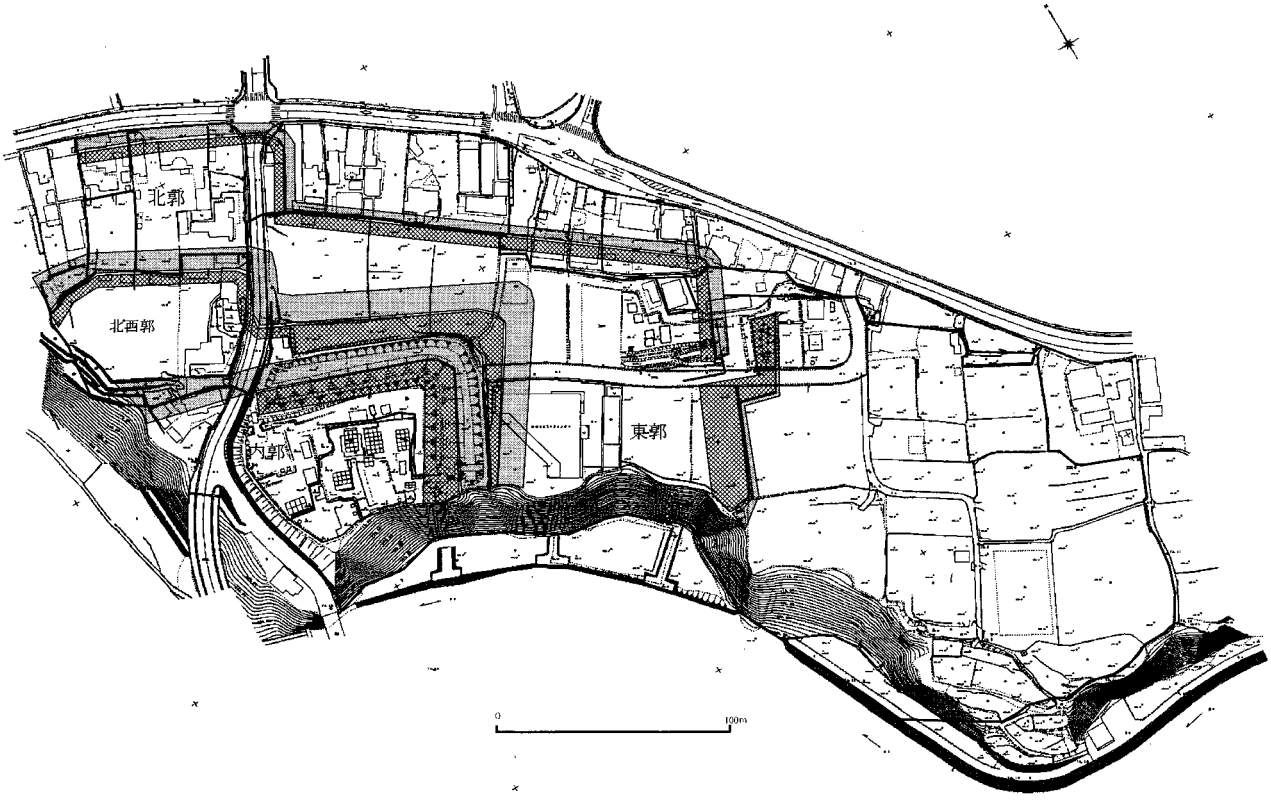
調査の結果、このテラスはＧ２テラスを除き、近世から近代の水田層面の段差を引き継いだものであることが確認された。この水田層面は、古絵図で確認することができ、元和五年勝沼村上組絵図にはＧ４テラス以西が水田化されている様子が描かれており、正徳検地一筆下絵図ではＧ３テラス以西が水田、Ｇ２テラスが畑、Ｇ１テラスが葡萄畑、明治２６年分間図ではＧ１テラスが水田に変化した経過を追うことができる。なお、Ｇ３～Ｇ５テラスの西半域では水田面が上下二面確認され、当初二面であったものを一面化する改良工事が行われた経過が観察される。元和絵図は一面化された段階の水田面を描いており、２段の小区画構造の水田は、館の廃絶後から元和までの間に起こった水田化の状況を示唆していると考えられる。

さらに、各テラスと中世遺構との関係を検討してみる。Ｇ１テラスは東郭外の家臣屋敷地に当たり、Ｇ２テラスとの間の段差は、水路ＳＧＤ０４が構築する時すでに存在していたことが水路底の段差構造から確認できる。Ｇ２テラスは土塁と堀、さらに郭外の空閑地に当たっており、特に空閑地は地山である礫層面まで掘削されたため、その後も水田として利用されることが無かったようである。Ｇ３テラスは東郭内通路と堀ＳＧＰ０２の埋め立て箇所に当たっており、これが２段水田面を形成する要因となっている。Ｇ４テラスは土塁ＳＧＡ０４とその内側の土塁脇側溝ＳＧＤ３７を反映しており、土塁盛土部とそれ以外の部分が２段水田面を形成する要因となっている。Ｇ５テラスは工房関係施設が配置されたテラスで、テラス自体が傾斜しており、これを水田化するにあたり無理の無い２段構造となったと考えられる。Ｇ６テラスは堀ＳＧＤ５６、ＳＧＤ６７の２本と土塁ＳＧＡ０２が下部にあり、中世段階でも土塁の盛土層を残し平坦化しており、近世水田面も当初から一面であったと考えられる。なお、Ｇ６以西は１４世紀には水田化されており、

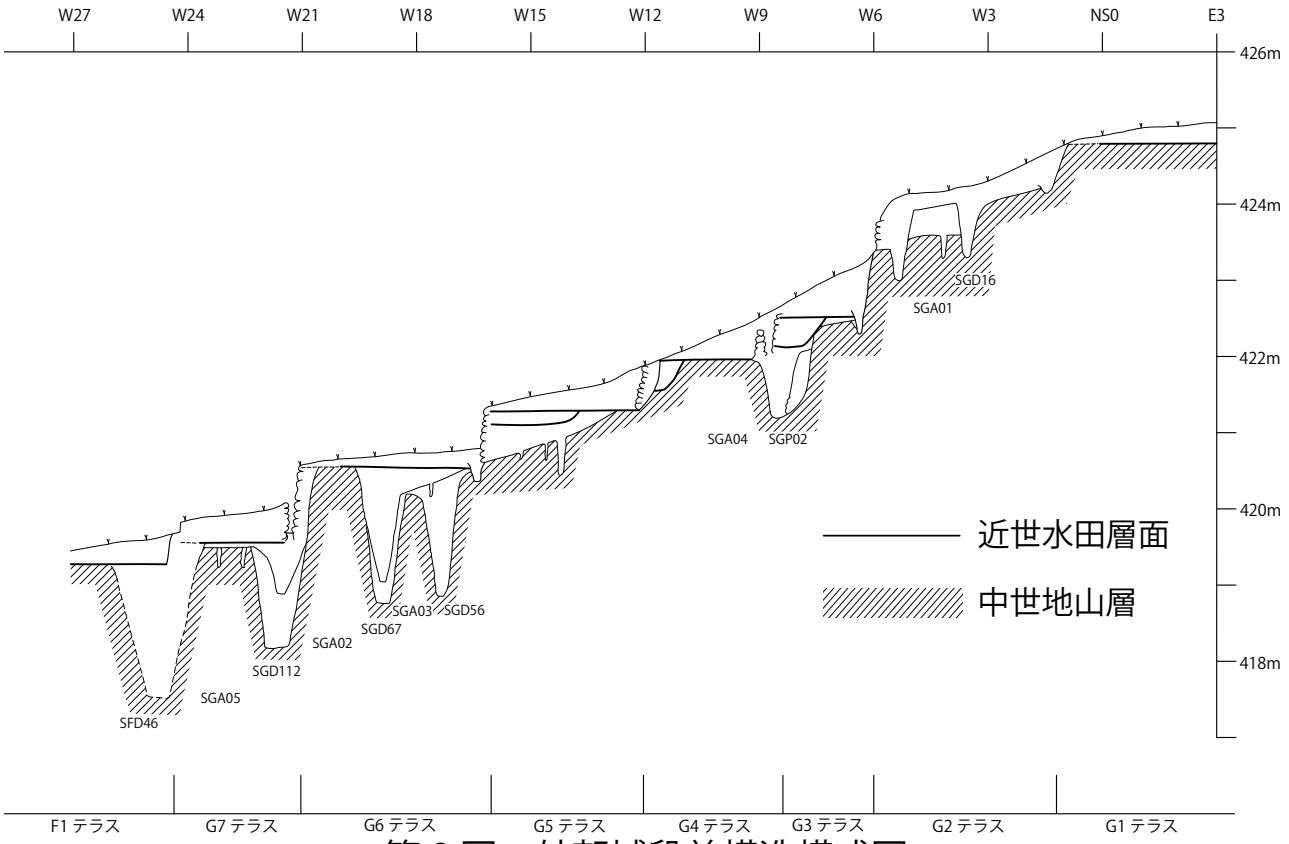
第 1A 期郭配置図



第 2A 期郭配置図



第 7 図　勝沼氏館跡郭配置図



第８図　外郭域段差構造模式図

この段階ですでにテラス化がはじまっていたと考えられる。Ｇ７テラスは堀ＳＧＤ１１２と土塁ＳＧＡ０５に当たり、Ｆ１テラスは内郭部外堀に当たっているが、両テラス一帯は東郭内屋敷地として造成整備が行われており、おそらく傾斜した一平面であったため、後に水田化するにあたりＧ７とＦ１の二つのテラスに区分されたと考えられる。

現状地形から観察されるテラス構造は近世の水田面をそのまま受け継いだものであるが、近世初頭の水田化に際しては、館終末期の防備施設、さらに郭外、郭内外の空間区分が大きく影響していると言える。

第３節　堀

ＳＧＤ１６　[第１４図、第１５図、第２８図]　Ｈ６Ｇ区で検出された南北堀。土塁ＳＧＡ０１に伴う堀で、Ｎ２ラインから始まり 24m で調査区南側に抜けている。断面逆台形で、幅員 4m、深さ 0.8m を測るが、東側の肩部分が不明瞭である。堀は掘立柱建物ＳＧＢ２６、ＳＧＢ２７の柱穴を切って造られており、ある段階で東側から投入された土砂で埋められ、その埋土中から土師質皿（第４３図３～１３）、焼成粘土塊が検出されている。堀の南側は地中探査により県立ワインセンター侵入路の南側で西に屈曲し、再び南に屈曲して、Ｈ地区で確認された東郭東辺土塁ＳＨＡ０１に伴う堀ＳＨＤ０１に接続すると考えられる。

ＳＧＰ０２　[第１６図、第２８図]　Ｈ７Ｇ区から検出された南北堀。調査当初深沢用水の水を郭内に取り入れるために造られた水溜と考えたが、地中探査の結果、Ｈ８Ｆ区で検出された東郭北辺堀ＳＦＤ０６が東側に延びていることが分かり、これと接続する堀はこの水溜以外無いことから、東郭東辺堀と考えるに至った。断面逆台形で上面幅 7m、底部幅 4.8m、深さ 0.9m を測り、北側に延びる。南西端には幅員 2.5m の出水路ＳＧＤ３３が付く。内部には粘土や砂礫が交互に堆積しており、流水路として機能していたと考えられ、ある段階で出水路ＳＧＤ３３を大型の石材で閉鎖し、堀の長軸方向の中央に石積みを入れ幅員を半減させ、南端から 5m 北側の西壁に、新たに出水路ＳＧＤ３４を設ける改修が行われ（ＳＧＰ０２ｂ）、その後全体を一旦埋設してから、新たに幅員 1.6m 深さ 60cm の水路を開削する改修（ＳＧＰ０２ｃ）が行われており、

堀から単なる水路へと機能を変化していった過程が窺える。内部からは土師質皿（第４７図８～１２）、古瀬戸広口壷（第６０図１６）、舶載天目茶碗片（第６０図１）などが検出されている。

ＳＧＤ５６　[第１９図、第２０図、第２９図]　Ｈ１０Ｇ区からＨ１１Ｇ区のW 17 ラインに沿い、28m 検出された南北堀。北端は調査区外に続き、南端は水路ＳＧＤ３４旧路に切られているが、その直前のＳ１ライン付近で底が立ち上がり堀が途絶えていることこから、ここに土橋があったと考えられる。地中探査ではこの延長線上に堀状の窪地の存在が見られ、日川に面した崖にも堀の存在を示す沢状地形が観察される。断面逆台形で上面幅 5m、底部幅 1.4m、深さ 1.2m を測る。南端の底立ち上がり部には、初め乱杭、後に石積みを行い、土橋の崩落防止を行った形跡が見られる。堀底は南に傾斜しているが、内部の粘土堆積は水平であり、粘土層中から木製品、植物遺存体と共にタニシ・ガムシなどの溜り水を好む動物遺存体が確認されているが、珪藻分析では流水が常に供給されていた状況が指摘されており、水路が接続されていた可能性が考えられる。なお、底部粘土層中から袋状のものに木材の削りカスを詰め、斎串（第９６図１・２）を刺したものが沈んだ状態（ＳＧＫ１５４）で発見され、北端の底部から東壁にかけ、完形の小型土師質皿がまとまって発見された。この他、土師質皿（第４５図９～３０）や木製品（第９５図・第９６図）、が多く検出されている。この堀は自然堆積で埋没が進んだ後、青磁稜花皿（第６４図１３）が示す１５世紀後半以後、一気に埋め立てられ、上部に建物ＳＧＢ４９・５０、井戸ＳＧＫ１５３が構築されている。

ＳＧＤ６７　[第２１図、第２２図、第２９図]　Ｈ１２Ｇ区からＨ１１Ｇ区のW 19 ラインに沿い 34 m検出された南北堀。北端、南端も調査区外に延びている。断面逆台形で上面幅 5.7m、底部幅 2m、深さ 1.6m を測り、途中東壁側を埋め、上面幅 4.7m、底部幅 1m、深さ 1.1m の規模に改修した形跡がみられる（ＳＧＤ６７ｂ）。堀底は北から南に傾斜しているが、4m ほどの間隔で 10 ～ 20cm の段差があり、調査区南端では東壁際に大型石材が据えられている状況が見られた。堀は、調査区北端で中世水田層面を切っていることが確認でき、構築直後は堆積物の珪藻分析から流水が流れ込んでいたが、幅員をせばめた改修後は停滞水となり、流水路から遮断された可能性が指摘されている。覆土中からは土師質皿（第４６図３～１９）、木製品（第９７図、第９８図）が検出されている。その後自然堆積が進み、ある段階で人為的に埋め立てられた。南端部は水路ＳＧＤ３４旧路および新路により切られ、また土上部に建物ＳＧＢ５１が構築された。建物が廃絶された後、さらに近世水田層直下の南北溝ＳＧＤ６８により切られている。

ＳＧＤ１１２　[第２３図、第２４図、第２９図]　Ｈ１３Ｇ区からＨ１４Ｇ区にかけ、W 22 ラインに沿い 35.5 m検出された南北堀。北端は西側に屈曲しており、東西堀ＳＦＤ４３に接続すると考えられ、南端は調査区外に延びる。断面逆台形で上面幅 6m、底部幅 4.5m、深さ 1.3m を測り、途中西壁側を埋め、上面幅 4.5m、底部幅 2m、深さ 0.8m の規模に縮小している (ＳＧＤ１１２ｂ)。この堀は調査区北端で中世水田層面を切って構築され、しばらくしてから規模を縮小する改修を受けた。その後、自然埋没後に人為的に埋め立てられ、その上部に建物ＳＧＢ５５に伴う造成面が造られ、同時に東西溝ＳＧＤ１０９及び連続する南北石積水路の可能性がある礫群が中央部に配置された。調査区南端部分に水路ＳＧＤ３４新路の末端部が到達している。

ＳＦＤ０６　[第２６図]　Ｈ８Ｆ区でＮ９ラインに沿い 7m 検出された東西堀。断面逆台形で上部に現在の柏尾堰（深沢用水）が流れているため、明確ではないが上面幅５～７ｍ、底部幅 2.5m、深さ 0.75m を測る。内部には砂礫の堆積が見られ、水路としても機能していたと考えられ、たびたび改修が行われたようである。砂礫層中から木製品 [第７２図・第７３図 1] が検出されている。

ＳＦＤ４３　[第２６図]　Ｈ８Ｆ区の南端、およびＨ１５Ｆ区の北端でＮ６ラインに沿い 14m 検出された堀ＳＧＤ１１２と繋がる東西堀。断面逆台形で上面幅 5.5m、底部幅 2m 以上、深さ 1.8m を測る。調査区西端の南壁には大型の石材を配置した形跡がみられる。自然堆積が進んでから、北側の土塁ＳＦＡ０１側から土砂で埋め立てられ、その後中央南側に幅 1.3m の溝（排水溝か）が掘り込まれた形跡がみられる。この堀の西側延長線上は昭和５２年度範囲確認調査の際、Ｆ－５トレンチの北端で確認されている。

ＳＦＤ４６　[第２５図]　Ｈ１３Ｇ、Ｈ１４Ｇ、Ｈ１５Ｆ、Ｈ１６Ｆ区にかけ東西方向から南北方向に屈曲

する状況で検出された堀。東西方向はＮ４ラインに沿い西側に、南北方向はW 25 ラインに沿い調査区外に続く。南北方向部分で上面幅は 11m を測る。今回の調査では底部に到達することができなかったが、昭和４９年に実施されたＣ地区でこの堀の南側延長部分が堀ＳＧＨ０３として調査され、上面幅 9.3m、底部幅 2.6m、深さ 3.4m の規模が確認されている。また、西側は昭和５２年に実施された範囲確認調査の際Ｆ－１、Ｆ－２、Ｆ－３、Ｆ－５トレンチで、内郭部の二重目の堀ＳＧＨ０４（北辺外堀）として内側に土塁ＳＧＡ０３を伴い確認されている。堀はある段階で埋め立て造成が行われており、造成層中から、外耳鍋の破片、瀬戸大窯の内ソギ丸皿片が検出され、造成後大型掘立柱建物ＳＦＢ１０、東西溝ＳＦＤ５５、ＳＦＤ５６、ＳＦＤ５７が造られている。

第４節　土塁

ＳＧＡ０１　[第１４図、第１５図、第２８図]　Ｈ６Ｇ区で確認された南北土塁。ＳＧＤ１６に伴う土塁で、ＳＧＤ１７が内側土塁脇側溝、ＳＧＤ２２が北限の土塁脇側溝と考えられる。北限基底部幅 8.0m、調査区南端の基底部幅 6.4 mで、南北 22m が確認され、中世地山層面から 30 ～ 40cm の残存盛土層が確認される。建物ＳＧＢ２６・２７と、これに伴う可能性がある溝状遺構群ＳＧＤ１８・２４・２５・２６の上部に構築された遺構である。

ＳＧＡ０４　[第１７図]　Ｈ８Ｇ区に想定される南北土塁。調査段階では近世水田層面の直下が中世地山層となっていたため土塁として確認することができなかったが、水溜ＳＧＰ０２が東郭の北辺堀ＳＦＤ０６と繋がる東辺堀と考えられることから、堀ＳＦＤ０６の内側に設けられた土塁ＳＦＡ０１に相当する土塁の存在を考慮せざるを得ず、その候補地としてＳＧＰ０２と並行する南北溝ＳＧＤ３７との間、幅 6.7m の空間が考えられる。この空間には古手の青磁を伴う溝状遺構ＳＧＤ４０以外に、１６世紀代の遺構が見出されていない。土塁の南端は当初、堀ＳＧＰ０２が狭くなるＳ２ライン付近まであり、水路ＳＧＤ３４の構築により先端が削られたと考えられる。

ＳＧＡ０３　[第１９図、第２０図、第２１図、第２２図、第２９図]　Ｈ１０Ｇ、Ｈ１１Ｇ、Ｈ１２Ｇ区で確認されたW 18 ラインに沿う南北土塁。ＳＧＤ５６に伴う土塁で、北端は調査区外に続き、南端は堀ＳＧＤ５６が途絶えるＳ３ライン付近で共に終わっていたと考えられる。20cm ほど盛土が残存しており、中世地山層面での基底部幅は 3m であるが、堀ＳＧＤ６７の断面観察で東壁側を１m埋め立てて構築されており、当初幅員 4m の規模の土塁であったと考えられる。堀ＳＧＤ５６、ＳＧＤ６７が埋め立てられると共に削平され、その後、建物ＳＧＢ４９・ＳＧＢ５０が構築され、さらに南端がＳＧＤ３４旧路により切られている。

ＳＧＡ０２　[第２１図、第２２図、第２９図]　Ｈ１１Ｇ、Ｈ１２Ｇ区で確認されたW 20 ラインに沿う南北土塁。北端は西側にわずかに屈曲しながら調査区外に続く、南端はＳＧＤ３４新路に切られ、不明瞭であるが、ＳＧＤ３４新路の土塁の延長線上に相当する南壁に水平版築層面が、確認されたことにより、ＳＧＤ３４旧路の幅員内で終わり、通路が設けられていたと考えられる。基底部幅 7.7m を測り、北側屈曲部に向かうにつれ幅員を増しており、80cm 近い盛土層が残存している。この土塁の盛土は、断面により、基底部郭内側の際に小さな土手を造るように盛土が行われ、順次、郭外側 (堀ＳＧＤ６７) に斜めに盛土しながら高さを増す構築法が取られたこと、さらに 80cm 残存部を残し削平されたことにより、削平面の土塁の水平盛土状況を観察することができた。盛土は南北土塁に対し、北東側から南西側に斜めに茶褐色土、黒褐色度、黄色砂質土の中世地山層が繰り返される縞模様として現われ、結果として土塁は北西の郭内側から南東の郭外側へと盛土され、堀ＳＧＤ６７を一度に掘るのではなく、区画を設け、地山の表層から深層へと掘削を繰り返し、盛土する構築方法が取られたと考えられる。なお土塁の基底部から土塁構築以前の遺構として、Ｎ３ライン以北では溝を伴う中世水田層面が確認され、この水田層面の直下から古瀬戸後期の卸皿片 [第６０図７] が検出される。

ＳＧＡ０５　[第２３図、第２４図、第２９図]　Ｈ１３Ｇ、Ｈ１４Ｇ区で確認されたW 23 ラインに沿う南

北土塁。北端は大きく西に屈曲し、東西土塁ＳＦＡ０２に連続し、南端は調査区外に続く。中世地山層の残層状況と、堀ＳＧＤ１１２、ＳＦＤ４３との屈曲状況の一致から、この堀に伴う土塁と考えられる。この土塁に沿うように郭内側に堀ＳＦＤ４６が構築されたため、当初の基底部幅が残されているか不明であるが、残存部分では幅員 6.6m を測る。土塁基底部からは、中世水田層面がＮ１ライン以北、畑の畝状遺構がライン以南で、さらに水田層を切る古瀬戸後期の卸皿片 [第６０図6] を伴う竪穴状遺構ＳＧＫ２４１や同様なＳＧＫ２３８が土塁構築以前の遺構として確認される。堀ＳＧＤ１１２はある段階で土塁ＳＧＡ０５側からの土砂により、幅員を狭める改修がされており、この段階で土塁は一端削平されたと考えられる。この削平と恐らく同時に、土塁の郭内側に土塁の基底部に沿うように、内郭外堀ＳＦＤ４６が構築する大規模な改修が行われる。しかし、しばらくするとこの外堀を埋め立てて、一帯を屋敷地とする造成が行われ、土塁上部にかかるように排水溝ＳＧＤ１０９・１１０・１１１、建物ＳＦＢ１０、ＳＧＢ５５が構築される。

ＳＦＡ０１　[第２６図]　Ｈ８Ｆ区で確認されたＮ８ラインに沿う東西土塁。東西両端とも調査区外に続く。近世水田層面の直下がすでに、地山である黄褐色砂層（ＮＹ-2）であったことから、土塁の盛土は残存していなかったが、堀ＳＦＤ０６との関係から、地山層が露出した基底部幅 7.5m の範囲をもって土塁と判断した。

ＳＦＡ０２　[第２７図]　Ｈ１５Ｆ区で確認されたＮ６～Ｎ７ラインに沿う東西土塁。堀ＳＦＤ４３に伴うものでＨ１３Ｇ、Ｈ１４Ｇ区の土塁ＳＧＡ０５と繋がる。中世造成層面の直下が黄色砂質層となっており、地山層の残存状況から土塁と判断した。幅員は郭内側に内郭外堀ＳＦＤ４６が掘削されたため明確ではないが、残存地山面で７ｍを測る。

第５節　水路、溝

ＳＧＤ０３　[第１０図、第１１図]　Ｈ５Ｇ区で確認された東西素掘り溝。幅員 1.4 ｍで 15cm ほどの深さしか残存しておらず、調査区内で６ｍが確認された。東側は調査区外に続くが、西側は不明瞭となっているものの、位置関係から水路ＳＧＤ０８に接続していたと考えられ、水路ＳＧＤ０４の改修路と判断される。建物ＳＧＢ０５の柱穴がこの水路を切る。

ＳＧＤ０４　[第１１図、第１２図、第１５図、第３０図]　Ｈ５Ｇ区からＨ６ＧのＮ２とＮ３ラインに沿う東西素掘り溝。調査区内で 32m が確認され、砂礫の堆積状況から、東から西に流れる水路と判断される。Ｗ１ラインおよびＷ４ライン部分で底が階段状になっており、Ｗ１ラインの下流では幅員 1.5m、深さ 50cm を測るが、上流では幅 1.1m、深さ 30cm で東に向かうにつれ浅くなる。さらに、Ｗ２ラインをはさみ、南側から溝ＳＧＤ０９、溝ＳＧＤ０８が合流するように見出された。またＷ４ラインの段差手前、左岸には部分的に石積護岸に改修した跡が見られる。流路内の遺物は、土師質皿類が流路全域から疎らに見出されるのに対し、瓦質雑器類はＷ１ライン段差手前底部、Ｗ４ライン段差の手前底部に集中する傾向が見られた。枝状の溝ＳＧＤ０９は早くからこの水路の付属施設としてあったと考えられ、水路ＳＧＤ０８は、ある段階でＳＧＤ０３－ＳＤＧ０８と繋がる流路に部分変更が行われた水路遺構と考えられる。水路ＳＧＤ０４は、その後一気に埋め立てられたと考えられ、Ｗ２とＷ３ラインの間では、埋めたてる際に投げ入れられた礫群と共に土師質皿（第４２図１～９）、染付などがまとまって検出されている。Ｈ５Ｇ区から見出された東郭東門外北屋敷のほとんどの建物の柱穴は、この水路の埋め立て後に構築されている。

ＳＧＤ０５　[第１１図、第１２図、第１５図、第３０図]　Ｈ５ＧからＨ６Ｇ区にかけ、水路ＳＧＤ０４の北側から並走するように見出された東西方向の素掘り溝。調査区内で 25m 確認され、砂礫の堆積状況から流水路と判断される。水路ＳＧＤ０５は水路ＳＧＤ０４の覆土の上部から掘り込まれており、ＳＧＤ０４より新しいが、ＳＧＤ０４と同様にＷ１ラインに段差構造を備えており、構造的類似性からも、ＳＧＤ０４の機能を受け継いだ水路と考えられる。なお、この水路の北側 6m には現在の柏尾堰 (深沢用水) が平行して流れている。段差下流では滝壺状の窪地が形成されており、幅員 2.5m、深さ 80cm を測り、右岸側Ｗ３ラインの東から 6m にわたり、水路内に突き出すように構築された高さ 50cm の石積み護岸が見出され、この

石積みの始まる箇所に対応した左岸壁に土台を伏せたような段があり、この部分に木橋を掛けた可能性が考えられる。段差上流は幅員が 1.2 m、深さ 30cm を測り、水路の段差手前水路底部からは瓦質雑器類片が見出されている。この水路はある段階で一気に埋め立てられたうえ、盛土造成が行われた形跡がみられ、建物ＳＧＢ０６の柱穴はこの水路を切っている。

ＳＧＤ０９［第１２図］ Ｈ５Ｇ区のＷ２Ｎ２グリッドで検出された溝状遺構で、壁は直壁に近い。Ｗ１ラインの水路ＳＧＤ０４の段差南側から幅員 1.2m、深さ 60cm の溝として始まり、屈曲しながら 4m で水路ＳＧＤ０４に合流する。覆土はＳＧＤ０４の底部砂礫と同じ砂礫が黄色砂質土ブロックと共に投入されたかのように入っており、特異な構造や覆土の有り方から、水路ＳＧＤ０４の段差滝壺部分に堆積した砂礫の浚渫物廃棄溝ではないかと考えられる。

ＳＧＤ０８［第１２図］ Ｈ５Ｇ区の水路ＳＧＤ０４から枝分かれしたように見出された溝で、Ｗ１ラインの東から始まり、Ｗ２ラインの西でＳＧＤ０４に合流する。幅員 80cm 深さ 48cm を測り、砂礫の堆積状況から水路であったと考えられ、位置関係から水路ＳＧＤ０３と繋がり、水路ＳＧＤ０４のＥ３ライン付近からＷ２ライン西までの間の部分を迂回路として、水路ＳＧＤ０４がかなり埋没してから構築されたものと考えられる。

ＳＧＤ１２［第１２図、第１４図、第３０図］ Ｈ５Ｇ区のＷ１ライン段差部分から始まり、西流し堀ＳＧＤ１６に接続された溝。幅員 90cm、深さ 20cm を測る。底部にわずかに砂礫の堆積が見られることから、流水路ではなく、北屋敷の雨水排水を堀ＳＧＤ１６に排出する溝と考えられる。

ＳＧＤ２２［第１５図］ Ｈ６Ｇ区のＮ２ラインに沿う東西溝。土塁ＳＧＡ０１の北限を画す溝で堀ＳＧＤ１６から始まり、ＳＧＤ１７に合流する排水溝と考えられるが、中央部が著しい撹乱を受けている。幅員 1.2m、深さ 20cm を測る。

ＳＧＤ１７［第１４図、第１５図、第２８図］ Ｈ６Ｇ区のＷ５～Ｗ６ラインの間から見出された南北溝。調査区内で 23m が確認され、南北両端とも調査区外に続く。幅員は 1.4m、深さ 30cm を測る。土塁ＳＧＡ０１の西限を画する溝で北流する構造で造られており、内郭部の北辺土塁に伴う土塁脇側溝と類似性が認められ、土塁ＳＧＡ０１の郭内側に設けられた排水側溝と考えられる。地形に対して逆流（北流）する勾配で造られていることから、南端は調査区外の余り遠くない地点で終息していると考えられる。水溜ＳＧＰ０１の覆土を切り、これより新しい。

ＳＧＤ３０［第１４図、第１６図、第２８図］ Ｈ７Ｇ地区のＷ６ラインに沿う南北溝。近現代のメクラ排水溝が重複しているため明確ではないが、水溜ＳＧＰ０１の南西端から発し、Ｗ７ＮＳ０グリッドで鍵の手に屈曲し、南下する水路と考えられる。覆土中から鋏が発見されている。幅員 1.3m、深さ 30cm を測る。

ＳＧＤ３５［第１６図］ Ｈ７Ｇ区のＷ６Ｎ２杭付近からＷ８ＮＳ０杭付近に向かう、北東から南西に向かう溝で、この遺跡では特異な方位を取っている。ＳＧＰ０１を分断して構築された可能性も考えられる。幅員 90cm、深さ 15cm を測り、ほとんど底部しか残存しておらず、西端は堀ＳＧＰ０２に切られている。

ＳＧＤ３３［第１６図］ Ｈ７Ｇ区のＷ９Ｓ３グリッドで検出された堀ＳＧＰ０２の南西端から始まる素掘り溝で、ＳＧＰ０２に入れられた水の出水路。南端は調査区外に続くが、そのまま南下すると、東郭Ｈ地区で検出された土塁ＳＨＡ０１にぶつかる事から、その手前で屈曲し、最終的にはＨ地区（現ワインセンター西隣）の大型石積水溜ＳＨＰ０１に接続すると考えられる。幅員 2.2m、深さ 80cm を測り、調査区内で 4.5 mが確認された。調査区南端の両岸に壁を掘りくぼめ、底に石を据えた施設があり、対になる位置関係から木橋の根太を据える施設ではないかと考えられる。この水路は新たに出水路ＳＧＤ３４旧路を設置する改修と同時に、堀ＳＧＰ０１との接点部分が閉鎖されている。この閉鎖は大型石材を用いた石積ＳＧＸ０５を北側に、その南 3.6m の石積ＳＧＸ０８を築き、その間に石材を含む土砂を投入して行われており、閉鎖部分以南は旧形状が残されていることから、埋め立てられた閉鎖部分は土橋となったと考えられる。

ＳＧＤ３４旧路［第１６図、第１７図、第１８図、第２０図、第２１図、第３１図、第３２図］ 東端はＷ９ラインの堀ＳＧＰ０２の西壁に始まり、西端はＷ 20 ラインの土塁ＳＧＡ０２の手前までの間、長さ 55

mに及び確認された西流する水路で、堀ＳＧＰ０２に流れ込む水の出水路に当たる。始まり部分では幅員2.5m、深さ 1m を測り、この規模で 3.5m 西進した位置で右岸側が幅 2m に渡り突出しており、おそらく流量調整を行う堰板などを、この突出部に設置する堰門として機能していた設備と考えられる。左岸側は 5mの位置から南側に 1m 幅員を広げ、この部分を境に堀底は南側が高く、北側が低い軸線方向に沿う２段底となっており、北側が流路として使用されていることから南側の段は、流路の保守作業に使用された通路設備と考えられる。北側流路は堰門から６m 下流で一段深くなり、25m の箇所で底が再び上げられており、この間が現在水路などでも用いられる土砂等の堆積を促し、定期的に浚渫除去する「溜」として機能していたと考えられる。この水路は西流するほど深さを増し、W 15 ライン付近では推定幅員 4.5 m、深さ 1.8m を測る大規模なものになっている。西端は堀ＳＧＤ６７とぶつかる位置で終息しており、ＳＧＤ６７の覆土断面観察からは、屈曲し、南下していたと考えられるが、平面的に堀ＳＧＤ６７の堆積土との区別ができず、今後の課題とせざるを得ない。ただ、ＳＧＤ３４旧路がほとんど埋没し、W 17 からW 18 の区間右岸に石積み護岸ＳＧＸ２７が設置された段階では、南下する水路も埋没し、新たに幅員 70cm、深さ 80cm を測る、内部に砂礫が堆積した直壁構造の溝状遺構ＳＧＤ７５が設けられており、恐らく管ないし樋を埋設し、出水路としたと考えられる。ＳＧＤ３４旧路の底部直上覆土粘土層中からは、多量の木製品や木製品製作用具、製作過程の木カス類および動植物遺存体が、陶磁器類や炭、灰などと共に検出されている。これらは一度に投棄されたもので、投棄後は上部を僅かに掘りくぼめるように除去しただけでそのまま水路として使用されており、堆積が進んだある段階で、一気に埋められ、同じ法線で新たにＳＧＤ３４新路が掘削されている。ＳＧＤ３４旧路は堀ＳＧＰ０２の改修期に設置されたもので、井戸ＳＧＥ０５、堀ＳＧＤ５６、堀ＳＧＤ６７、建物ＳＧＢ４９、建物ＳＧＢ５０を切り、ＳＧＤ３４新路、さらに水路ＳＧＤ３７に切られている。

ＳＧＤ３４新路　[第１６図、第１７図、第１８図、第２０図、第２１図、第２４図、第３１図、第３２図]

Ｈ７Ｇ、Ｈ８Ｇ、Ｈ９Ｇ、Ｈ１１Ｇ、Ｈ１４ＧのＳ１ラインに沿い検出された、やや弓なりの素掘り東西溝。水路ＳＧＤ３４が検出された時点では新旧２時期の存在は明瞭でなく、Ｈ９Ｇ区調査段階でようやく平面的にも峻別ができるようになった水路である。ＳＧＤ３４旧路の土砂堆積が進み、これを一旦埋め、再度その法線に従い掘削しなおした水路で、部分的に旧路がある北壁に黒褐色粘質土を貼った形跡が認められた。この水路の基点については水路ＳＧＤ３４旧路と同じと考えていたが、堀ＳＧＰ０２の覆土断面に、ＳＧＤ３４旧路設置に伴う石積の幅員を半減化する改修の後、しばらくしてから堀全体を一旦埋め、再度水路を掘りなおした様子が明瞭に現われている。堀ＳＧＰ０２の西壁法線に従い南流してきた水路ＳＧＰ０２ｃがW１Ｓ１グリッド内で西に屈曲し、水路ＳＧＤ３４新路となったと考えられる。末端は、水路ＳＧＤ３４旧路の西端よりさらに西に 12m 延長し、堀ＳＧＤ１１２を埋めて整地した、東郭内屋敷の敷地東端W 22 Ｓ２グリッドまで至っている。ここで屈曲し南流する可能性も考えられるが、土層観察でもその存在を明らかにすることができなかった。ただ、調査区の南壁断面の水路末端底部から 90cm 上の位置に、整地層面から掘り込まれた幅 20cm、深さ 30cm で底部に円形に粘土が堆積した穴が見出され、ＳＧＤ３４旧路の末端部に見出された最終段階の給水管路と類似が求められることから、当初から地中に埋設した木製管により出水する構造であったとも考えられる。ＳＧＤ３４新路は西流するに従い規模を増すが、中央部では幅員 3m、深さ 1.5m を測り、推定長は 69m に及び、壁面傾斜角度は 55 度から 70 度の急勾配で、推定基点から末端までの落差3.3mを一気に流れ下る構造である。流速を落とすためか、早い段階から底に乱杭による木堰を設け、段状底に改修した形跡が見られ、その後埋没が進んだ段階で、6m ほどの間隔で流路底に大型石材による石堰を設けた状況が観察された。覆土中からは、旧路に比べ少ないが木製品、植物遺存体、陶磁器類が検出されており、特に旧路では見られなかった筒型内耳鍋が検出されている。また、末端部底部からは僅かであるが木製品の削りカス、未製品が検出されており、流域に木製品加工工房が営まれていた可能性を示唆している。さらに、埋没がある程度進んだ段階、おそらくこの水路の終末段階ではないかと考えられるが、末端部に焼成粘土塊（壁土）、焼けた建築部材、大型鉄製燭台等が一括投入されており、位置的にみて、焼失した東郭内屋敷の主屋ＳＦＢ１０の関係遺物と考えられる。

ＳＧＤ３７　[第１７図、第３２図]　Ｈ８Ｇ区で検出された素掘り溝、Ｗ９ラインに沿い南流し、W11S2グリッドで屈曲し、下部にある溝ＳＧＤ４２の法線より若干南側を西流する。南北流路部では幅員 2.3m、深さ 40cm を測り、西流するに従い深さを増している。堆積土の観察では長期にわたり流水路として利用された形跡はみられない。水路ＳＧＤ３４新・旧路、溝ＳＧＤ４２を切る。なお、この溝の法線は堀ＳＧＰ０２の法線と一致しており、その内側に想定される土塁ＳＧＤ０４の郭内側土塁脇側溝を改修した可能性も考えられる。

ＳＧＤ４２　[第１７図、第１８図、第２０図、第３２図]　Ｈ８Ｇ区、Ｈ９Ｇ区、Ｈ１１Ｇ区のＳ２ラインを横切る素掘り溝。水路ＳＧＤ３４旧路の堰門部以西に沿うように配置されている。直壁構造で幅員は 3m 深さ 1.2m を測り、調査区内で 31m 検出され、底部は階段状になっている。この溝には流水路が接続されていないにもかかわらず、底部には木質部は残存していないものの、様々な植物圧痕跡を伴う粘土堆積層があり、この粘土層はＳＧＤ３４旧路の廃棄物を多量に含む粘土層と類似している。粘土層の上部には間層を挟み木炭を多量に含む層があり、この層の上部は一気に埋め立てを行った層となっている。この溝は、その特異な構造やあり方が、水路ＳＧＤ０４の脇に設けられた土砂廃棄溝ＳＧＤ０９に類似しており、ＳＧＤ３４旧路の浚渫土の廃棄溝として設けられた溝と判断され、ＳＧＤ０９のように末端部が本流であるＳＧＤ３４旧路に接続されていたかは定かではない。溝ＳＧＤ３７はこの溝の南壁を切るように構築されている。

ＳＧＤ１０９・ＳＦＤ５５　[第２４図、第２５図]　Ｈ１３Ｇ区、Ｈ１６Ｆ区のＮＳ０とＮ１ラインの間を東西に走る素掘り溝。東郭内屋敷の整地層の上に構築された溝で、堀ＳＧＤ１１２の埋め立て土の陥没部に滞水する雨水を排水する溝と考えられる。建物ＳＧＢ５５の軸線と一致しており、同時期に設置された溝と考えられる。

ＳＧＤ１１１・ＳＧＤ１１０・ＳＦＤ５７　[第２４図、第２５図]　Ｈ１３Ｇ区、Ｈ１６Ｆ区のＮ１ラインに沿う並行して走る東西素掘り溝。ＳＧＤ１０９・ＳＦＤ５５と同じ機能をもつ排水溝と考えられるが、建物ＳＧＦ１０の廂柱穴はＳＧＤ１１１・ＳＦＤ５７溝の覆土を除去した時点で確認されており、当初建物ＳＦＤ１０が身舎のみ、ＳＧＤ１１１・ＳＦＤ５７のラインが雨落を兼ねた排水溝で、後に廂を付加し、南側のＳＧＤ１１０のラインに付け替えたとも考えられる。

第６節　井戸・水溜

（1）井戸

ＳＧＥ０１　[第１３図]　Ｈ６Ｇ区のＷ１Ｓ３グリッド検出された石積井戸。石積み内径 1.0m、掘り方径推定 3.0 ｍで掘り方上部から底部まで深さ 2.0m を測る。底部は花崗岩を 20cm 掘り窪めており、石積み上部は除去されていたが､底部花崗岩の上部までの間 1.2 ｍが残存している。内部からは常滑Ｃ類の口縁部（第５９図３）が検出されている。井戸ＳＧＥ０２の掘り方を切る。

ＳＧＥ０２　[第１３図]　Ｈ６Ｇ区のＷ１Ｓ３グリッドで検出された石積み井戸。井戸ＳＧＥ０１の心々で 2m 南西に位置している。石積み内径 70cm、掘り方径は 2m で深さは 1.5m、石積みは上部が除去されていたものの 1.0m が残存している。覆土中から土師質皿の小片が出土している。ＳＧＥ０１より古く、東郭外家臣屋敷の南屋敷に伴う井戸と考えられる。

ＳＧＥ０３　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ 15 ～Ｗ 16 ＮＩグリッドで検出された素掘り井戸。断面が漏斗状を呈しており、上部径は 1.5m、上部から 40cm 下で径は 1.0m となり、ここから 65cm 下部で径 60cm の底部になる。底部粘土層から木製品の削りカス、仕上げ砥石小片、アワビなどが検出されており、工房に伴う井戸と考えられる。底から 30cm ほど粘土が堆積した段階で一気に埋められている。

ＳＧＫ１５３　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区のＷ 17 ～Ｗ 18 ＮＳ０グリッドで検出された素掘り井戸。掘ＳＧＤ５６を埋めた後、上面から掘りこまれ、底部は堀の底で止まっており、当初土壙と考えたが、直壁構造で深く、ＳＧＤ５６の底部に集まる滲み出し水を取水する井戸と判断した。上部径は 1.5m、深さ 90cm で径

1.2m の底部になる。内部からは土師質皿（第４７図５）が検出されている。

ＳＧＫ１５６　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区W 16 ～W 17 Ｎ１グリッドから検出された素掘り井戸。上部径 1.1m、深さ 77cm で底径 70cm を測る。当初土壙としたが、調査段階から水が滲み出ることから、ＳＧＥ０３の底部湧水層と比較したところ、同じ層に到達していることが分かり井戸と判断した。この付近は近世以後の三尺道により上部が削られていることから、当初は１m以上の深さを有していたと考えられる。

ＳＧＥ０５　[第２０図]　Ｈ１１Ｇ区のW 16 Ｓ２グリッドから検出された石積井戸。掘り方径は推定で 4.5m、石積が掘り込み面から 85cm 除去されていたが、下部 1.5m は残存しており、掘り込み面から 2.0m が当初石積み、さらに 2.3m が黄褐色砂礫層を掘りこむ素掘り構造で、上面から底部までの深さ 4.2m を測る。掘削後しばらくしてから素掘り部分は埋められ、以後石積部分のみの井戸に改修されている。これは、調査中でも下部石積の間から滲み出し水が湧出しており、素掘り部分が不要と判断されたためと考えられる。内部から木製品 [第１０２図３～６] が検出されており、厚い板材（第１０２図６）は井戸枠の可能性も考えられ、完全に埋められた後、水路ＳＧＤ３４旧路により切られ、土壙ＳＧＫ１８４、ＳＧＫ１８６がこの上部に造られている。覆土上部から検出された瀬戸大窯１期後半の灰釉端反皿（第６１図５）と水路ＳＧＤ３４旧路から検出されたものが接続した。

ＳＧＥ０６　[第２０図]　Ｈ１１Ｇ区のW 17 Ｓ１グリッドから検出された石積井戸。井戸ＳＧＥ０５の心々で 2.5m 北西に位置している。掘り方径 4.4m、石積は掘り込み面から 25cm 除去されているが、その下部に 1.75m 残存している。石積上部径は 1.4m で底部径は 1.1m を測る。廃絶段階で石積最上段が内部に崩し込まれ、土師質皿、木製品（第１０３図、第１０４図１）、木片類、炭灰などと共に一気に埋めれている。炭灰には炭化種子、骨片等が含まれており、北東側から投げ込まれたように検出されており、一部は掘り込み面の外側にも残存していた。水路ＳＧＤ３４旧路により掘り方の一部が切られ、建物ＳＧＢ４８の柱穴が掘り方を切って造られている。また井戸ＳＧＥ０５との新旧関係は不明であるが、当初からＳＧＥ０５の埋め立て改修後の層位までしか掘削が行われていない状況から、井戸ＳＧＤ０５の改築遺構と判断される。

（２）水溜

ＳＧＰ０１　[第１５図、第１６図]　Ｈ７Ｇ区のW６Ｎ１グリッドで検出された水溜。西辺は通路の設定により削られ、北側は調査区外で全体の規模は不明であるが、調査範囲内では東西 4.5m 南北 2.5m 深さ 40cm を測る。南西隅部分に石積が設けられた突出部があり、ここが取水路であった可能性が考えられる。内部からは青磁蓮弁紋碗底部（第６４図７・８）、白磁片が検出されている。水溜が埋まった後、土塁ＳＧＡ０１の側溝ＳＧＤ１７が構築されている。

第７節　建物・塀

外郭域で検出された建物遺構は全て掘立柱建築である。建物を構成する柱穴群はＧ４テラスを除き各テラス面から群を成して検出されている。Ｈ５Ｇ区のＧ１テラス北側からまとまって検出された建物群をＡ群、Ｈ４ＧからＨ６Ｇ区のＧ１テラス南側の建物群をＢ群、Ｈ６Ｇ区のＧ２テラス上の建物群をＣ群、Ｈ７Ｇ区のＧ３テラス上の建物群をＤ群、Ｈ９Ｇ区・Ｈ１０Ｇ区・Ｈ１１Ｇ区のＧ５テラス上の建物群をＥ群、Ｈ１１Ｇ区からＨ１２Ｇ区のＧ６テラス上の建物群をＦ群、Ｈ１３Ｇ区・Ｈ１４Ｇ区・Ｈ１６Ｆ区のＧ７・Ｆ１テラス上の建物群をＧ群と呼ぶこととする。

検出された柱穴は径や深さが異なっており、直径が 25cm 前後 (小型)、50cm 前後（中型）、75cm 前後（大型）のものがあり、柱穴の底は硬く締まっており、礎板石があるもの、柱の根元部分 (柱根部) が残存しているもの、柱は腐食しているが空洞として残存しているもの、柱の存在が土層断面で区別できるもの、柱の痕跡が見出せないものなどがある。

柱穴群から建物を復元するに当たっては、規模・覆土の類似性を基準にし、さらに４尺から９尺までの建

築方眼を重ね、柱配置の計画性の分析を行った（建物の輪郭結線もこの方眼を基準とし、使用されている方眼を破線で示してある）。こうして確認された建物の柱配置には、内部に柱が有るもの、内部に柱が無く桁・梁の外周部のみ柱が有るもの (側柱構造と呼ぶ)、梁行（妻部分）に柱が無く桁行部分 (平部分) のみ柱列が並ぶもの（桁柱構造と呼ぶ）、さらに廂（下屋）をもつものなどが見出された。

［A群］

ＳＧＢ０５　[第１１図、第３３図]　Ｈ５Ｇ区で検出された中型柱穴から構成される４間３間の内部区分柱を備えた南北棟建物。柱穴の底部に礎板石が多く用いられている。北東隅が調査区外であるが、桁行は４間 7.2m で南から 1.2m、2.4m、1.8m、1.8m の間隔で、梁行は３間 4.5m で 1.5m の等間隔である。建物内部は桁行１間目が２区画、２間目が通し、３・４間目が２区画に区分されており、間取り設定が見られ、南から２間目の東西いずれかが出入り口と考えられる。水路ＳＧＤ０３・ＳＧＤ０４の覆土を切り、これより新しい。南東隅柱から西へ２番目の柱穴内から永楽通宝が１点、南西隅から北へ２番目の柱穴から銅製環（第６８図１０）が検出されている。

ＳＧＢ０６　[第１１図、第３３図]　Ｈ５Ｇ区で検出された中型柱穴から構成される３間２間の側柱構造の南北棟建物。北東隅が調査区外であるが、桁行３間 6.9m は 2.3m の等間隔、梁行２間 4.6m は 2.3m の等間隔と考えられる。ＳＧＤ０５の覆土を切っており、これより新しい。建物ＳＧＢ０５とは方位が同じである。

ＳＧＢ０７　[第１１図、第１２図、第３４図]　Ｈ５Ｇで検出された中型柱穴から構成される２間１間の桁柱構造の南北棟建物。構成する６本の柱穴中、５本に礎板石が設置されており、内部中央にも礎板石を備えた床束ないし梁支えと考えられる礎板石を伴う浅い小型柱穴がある。桁行は２間 4.6m で 2.3m の等間隔、梁行は１間 3.6m である。南東隅柱の礎板石の脇から瀬戸大窯３期後半並行の初山窯の擂鉢底部（第６２図９）が、中央小型柱穴の礎板石の脇から染付け皿Ｂ１群の底部（第６５図８）が出土している。水路ＳＧＤ０４の覆土を切る。

ＳＧＢ０８　[第１１図、第１２図、第３３図]　Ｈ５Ｇ区から検出された中型柱穴から構成される３間１間の桁柱構造の南北棟建物。桁行 7.2m の柱配置は西と東側で異なっており、西側は３間で 2.4m の等間隔で、南西隅柱から 1.4m 北側に小型柱穴があり、東側は４間で南側から 2.4m、1.6m、1.6m、1.6m で、南東隅柱から 1.4m に西側と同じように小型柱穴がある。東側の 1.6m ３間は、西側 2.4m ２間を３等分した関係にある。西側の南から３列目の柱上に桁材を架すと、東側では３列目と４列目の柱上に冠木を設けて受けることになり、ここに冠木門構造の出入り口を想定することができる。東西両桁行の南側１列目と２列目の間の小型柱穴は建具の据え柱の据付穴と考えられ、この柱をはさむ窓状の設備が想定される。西側桁柱の南から２列目の柱穴内から焼成粘土塊小片が多量に出土しており、藁材と小舞の圧痕が見られることから、建物は土壁構造で、火災を受けた可能性が考えられる。水路ＳＧＤ０４の覆土を切り、これより新しく、水路ＳＧＤ０５とは軸線が直交しており、同時に配置された可能性が考えられる。梁行は１間 5.5m である。

ＳＧＢ０９　[第１１図、第１２図、第３３図]　Ｈ５Ｇ区で検出された中型柱穴から構成される２間２間の側柱構造の南北棟建物。桁行は２間 7.2m で 3.6m の等間隔で、梁行は２間 4.6m で 2.3 mの等間隔である。東西桁行柱の中央柱穴から南 1.5m に小型柱穴があり、これが建具を据える柱だとすれば窓の存在が考えられる。さらに、桁行東側柱穴列の場合、中央柱穴から北 0.9m、北東隅柱の南 0.9m にも小型柱穴があり、この柱配置はＳＧＢ０８の出入り口構造と類似性が認められる。ただし、ＳＧＢ０８が構造材から構成されているのに対し、この建物は建具的な材料を用いて設置したと考えられ、違いが認められる。礎板石が設置された柱穴が３箇所あり、北側棟柱の柱穴底部には直径 25cm の丸太材を用いた柱根部が残存していた。東側桁中央の柱穴が建物ＳＧＢ０７の柱穴により切られている。

ＳＧＢ１０　[第１２図、第３４図]　Ｈ５Ｇ区で検出された中型柱穴から構成される２間１間の桁柱構造の南北棟建物。桁行は２間 4.6m で 2.3m の等間隔、梁行は１間 3.6m であり、建物ＳＧＢ０７と同規格である。水路ＳＧＤ０４の覆土を切る。

ＳＧＢ１１　[第１１図、第３４図]　Ｈ５Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される１間１間の小型建物。

桁行は１間 3.6m、梁行は１間 1.8m で、水路ＳＧＤ０４を切る。

ＳＧＢ１２　[第１１図、第３４図]　Ｈ５Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される１間１間の小型建物。桁行は１間 3.6m、梁行は１間 1.8m で、ＳＧＢ１１の西側に位置し、規模・構造とも類似しており、水路ＳＧＤ０４を切る。

ＳＧＢ１４　[第１１図、第３４図]　Ｈ５Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建築。東西は２間 3.6m で 1.8 ｍの等間隔で、南北は１間 3.6m で、空洞化した柱穴柱痕内に後に石材が入れ込まれており、南西隅柱穴に投入された石材の間から瀬戸大窯２期後半の天目茶碗片（第６１図１２）が検出されている。

ＳＧＢ１５　[第１１図、第１２図、第３４図]　Ｈ５Ｇで検出された小型柱穴から構成される２間１間の構造の方形建物。東西は２間 4.0m で 2.0m の等間隔、南北は１間 4.0 ｍで、水路ＳＧＤ０４を切る。建物ＳＧＢ１０とは柱穴が重複するが新旧関係を把握することができなかった。

塀　[第１１図、第１２図]　Ｇ１テラス北群では、南群との間に東西６間の新旧２時期の塀ＳＧＢ１９があり屋敷の区分施設と考えられる。他には建物の一部の可能性もあるが、建物ＳＧＢ０６の東側に南北２間の塀ＳＧＢ０４が、建物ＳＧＢ０６の南辺を延長するかのように東西２間の塀ＳＧＢ１７が、これに重なるように東西４間の塀ＳＧＢ１８が、その西に塀ＳＧＢ１８に直交するように東西２間の塀ＳＧＢ２１がある。塀ＳＧＢ２０は東西２間で水路ＳＧＤ０５の北側にあり、軸線が一致しており建物の一部である可能性がある。この他建物ＳＧＢ０５と軸線を同じにして西側に中型柱穴１間の塀ＳＧＢ３２があり、北側の柱穴底部には直径 30cm 近い柱の根元が残存しており、塀ではなく単独で旗などを建てる柱が据えられた遺構である可能性も考えられる。

[Ｂ群]

ＳＧＢ０１　[第１０図、第３５図]　Ｈ４Ｇ区で検出された内部区分柱を備えた中型柱穴から構成される３間２間の南北棟建物で、北側に 1.21m の廂 (下屋) が付くと考えられる。身舎は桁行３間 5.9m で南から 1.8m、2.3m、1.8m の間隔で柱が建ち、梁行２間 3.6m は 1.8m の等間隔で、内部棟通りに桁行の柱間間隔で柱が建つ。

ＳＧＢ０２　[第１０図、第１３図、第３５図]　Ｈ４Ｇ区からＨ６Ｇ区にまたがり検出された中型柱穴から構成される建物。北辺が土層保存ベルトにかかっているため規模は不明であるが、３間１間の桁柱構造の南北棟建物と考えられる。桁行は３間 6.9 ｍで南から 2.3m の等間隔で柱が建ち、梁行は 5.2 ｍで妻部分の柱を持たない。建物ＳＧＢ２２、ＳＧＢ２３と重複するが前後関係は不明である。

ＳＧＢ２２　[第１０図、第１３図、第３５図]　Ｈ４Ｇ区からＨ６Ｇ区にまたがり検出された中型柱穴から構成される建物。ＳＧＢ０２同様北辺が土層保存ベルトにかかっているため規模は不明であるが、２間１間の方形建物と推定される。南北は１間 4.6 ｍで、東西は２間 4.6m で 2.3m の等間隔で柱が建つ。

ＳＧＢ２３　[第１３図、第３５図]　Ｈ４Ｇ区からＨ６Ｇ区にまたがり検出された中型柱穴から構成される建物で、柱底部に礎板石を伴う。ＳＧＢ０２と同様北辺が土層保存ベルトにかかっているため不明な点があるが、４間２間の棟持柱を有する側柱構造建物と考えられる。桁行は南から 1.8m の等間隔で３間、棟持柱の位置から、さらに 1.8m 北に続くと考えられ、計４間 7.2m と推定され、梁行は２間 4.6m で 2.3m の等間隔で柱が建つと考えられる。建物南西隅柱穴は風化した花崗岩を穿って造られており、その岩の脇の小ピットから完形の瀬戸大窯３期前半の鉄釉丸皿（第６２図１）が、西側桁柱穴列の南から２列目の柱穴上部から永楽通寶が１枚検出されている。

塀　[第１０図、第１３図]　Ｇ１テラス南群に伴い１間ないし２間程度の未確認の建物の一部の可能性もあるが、直線的に並ぶ柱穴列が検出されており、塀と捉えておく。塀ＳＧＢ２５は南北２間で建物ＳＧＢ２３の東側にあり、テラスの段差部分にあることから、屋敷区画施設の一部、塀ＳＧＢ２４はＳＧＢ２３の南側、井戸ＳＧＥ０１・０２の間にあり遮蔽施設、塀ＳＧＢ０３は東西２間で建物ＳＧＢ０１の北側にあり同じく遮蔽施設と考えられる。

[C群]

ＳＧＢ２６　[第１４図、第３６図]　Ｈ６Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建物。南北は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、東西は１間 3.6m で、堀ＳＧＤ１６に切られ、上部に土塁ＳＧＡ０１が構築されている。

ＳＧＢ２７　[第１４図、第３６図]　Ｈ６Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間２間の側柱構造の扁平方形建物。東西方向の北辺と南辺で柱間間隔が異なっており、東西は北辺が２間 4.2m で 2.1m の等間隔、南辺が２間 3.6m で 1.8m の等間隔であり、南北は２間 3.6m で 1.8m の等間隔である。ＳＧＢ２６の南側に位置し、堀ＳＧＤ１６に切られ、上部に土塁ＳＧＡ０１が構築されている。西側柱穴の脇から１５世紀前後の雷紋帯青磁碗（第６４図９）の破片が出土している。

[D群]

ＳＧＢ２９　[第１６図、第３６図]　Ｈ７Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建物と推定される遺構。堀ＳＧＰ０２の東壁面に僅かであるが柱穴の痕跡が残存していることから建物と判断した。南北は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、東西は１間 3.6m と推定される。堀ＳＧＰ０２より古く、北東隅の柱穴内より銭３枚が重なって検出されている。

ＳＧＢ３０　[第１６図、第３６図]　Ｈ７Ｇ区で検出された南北が２間、東西が１間の方形建物。南北は 3.8m で 1.9m の等間隔、東西は１間で 3.8 mを測る。

塀　[第１６図]　Ｄ群建物周辺では、土塁ＳＧＡ０１の側溝ＳＧＤ１７から西６ｍの通路平坦部より、これと並走する南北塀ＳＧＢ２８が９間 20.1m 検出されており遮蔽施設と考えられ、堀ＳＧＰ０２の末端屈曲部から１間 1.8m の塀ＳＧＢ３１が検出されているが、どの様な施設なのか不明である。

[E群]

ＳＧＢ３２　[第１８図、第３７図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間２間の側柱構造の南北棟建物。北半は調査区外であるが、Ｇ１テラス北群のＳＧＢ０９との類似性から南北棟建物と判断した。桁行は推定２間 7.8m で 3.9m の等間隔で、梁行は２間 4.6m で 2.3m の等間隔である。

ＳＧＢ３３　[第１８図、第３８図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建築。東西は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、南北は１間 3.6m で北側柱穴内には炭化物が含まれていた。北東隅の柱穴が建物ＳＧＢ４４の柱穴に切られ、これより古い。建物西側に土壙ＳＧＫ１３２、ＳＧＫ１３１、ＳＧＫ１３０、南側にＳＧＫ１１９があり、この建物に伴う可能性が考えられる。

ＳＧＢ３４　[第１８図、第３８図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建築。東西は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、南北は１間 3.6m で、土壙ＳＧＫ１４１により南西隅の柱が切られておりこれより古い。この建物を含む一帯からは漆塗膜片が多く出土している。建物の東側にある土壙ＳＧＫ１８３、ＳＧＫ１８４、ＳＧＫ１８６などがこの建物に伴う可能性が考えられる。

ＳＧＢ３５　[第１８図、第３８図]　Ｈ９Ｇ区で検出された中型柱穴から構成される４間２間の側柱構造の南北棟建物。桁行は４間 8.4m で 2.1m の等間隔と推定され、梁行は２間 6.4m で 3.2m の等間隔、この建物の北側妻部分の外側から火災を受け、小舞痕を残す壁土が倒壊したような状態で検出されており、北側棟持柱穴内より土師質皿が１点出土している。また、円形直壁の土壙ＳＧＫ１４７とＳＧＫ１２０の並びは建物の軸線と一致しており、建物内部に設置されていた土壙の可能性が考えられる。

ＳＧＢ３８　[第１９図、第３９図]　Ｈ９Ｇ区からＨ１０Ｇ区にかけて検出された小型柱穴から構成される２間１間の方形建築。南北は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、東西は１間 3.6m で、建物内部に高温焼成を行った小鍛冶施設と考えられるＳＧＦ１３・ＳＧＦ１２を伴う。この建物の周囲からは金属製品、鉄滓、溶融物付着土器片などが検出されており、鍛冶工房と考えられる。

ＳＧＢ４０　[第１８図、第３７図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される４間１間の桁柱構造の南北棟建物。桁行は４間 10.8m で南から 3.6m、3.6m、1.8m、1.8m の間隔で並び、梁行は１間 3.6m である。1.8m を１間として換算すると６間２間の建物になり、横長であるが大規模な建物に含まれる建築である。

ＳＧＢ４１　[第１８図、第３７図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される３間１間の桁柱構造の南北棟建物。桁行は３間 10.8m で 3.6m の等間隔と想定され、梁行は１間 3.6m である。建物ＳＧＢ４０と規格が一致していると考えられる。

ＳＧＢ４３　[第１８図、第３７図]　Ｈ９Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される２間１間の桁柱構造の南北棟建物。桁行は２間 7.2m で 3.6 mの等間隔、梁行は１間 4.4 mで、梁行西辺の中央柱から北東隅柱の間 3.6m を３分した位置に柱穴があり、Ｇ１テラス A 群の建物ＳＧＢ０８やＳＧＢ０９の出入り口の設置の仕方に類似性が認められる。

ＳＧＢ４４　[第１８図、第３８図]　Ｈ９Ｇ区からＨ１１Ｇにかけて検出された中型柱穴から構成される２間２間の東西棟建物と推定され、建物内部中央に棟支えの柱を持つ。桁行は２間 7.2m で 3.6m の等間隔、梁行は２間 6.0m で 3.0m の等間隔である。土壙ＳＧＫ１４７を切る桶据土壙ＳＧＫ１４７は、この建物の軸線と一致しており、建物ＳＧＢ３５と同様、建物内部に設置されたもので、建物ＳＧＢ３５の機能を受け継いだ建物と考えられる。

ＳＧＢ４６　[第１９図、第３９図]　Ｈ１０Ｇ区で検出された小型柱穴から構成されると考えられる建物。直角に配置された３本の柱穴のみ確認されたが、柱穴の大きさが隣接して発見されたＳＧＢ３８の柱穴と良く似ており、同規模の建物の一部と判断した。推定東西南北とも、２間 3.6m で 1.8m の等間隔の側柱構造の方形建築と考えられる。周辺からは焼土や鉄滓が検出されている。

ＳＧＢ４７　[第１９図、第３９図]　Ｈ１０Ｇ区から検出された小型柱穴から構成される建物。北側が土層保存ベルトにかかり不明であるが、柱穴列の北側に灰を伴う焼土遺構があることから、方形建築の一部と判断した。東西は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、推定南北は１間 3.6m と考えられる。この建物の北側に鉄滓を多く含む土壙ＳＧＫ１４８がある。

ＳＧＢ４８　[第２０図、第３８図]　Ｈ９Ｇ区からＨ１１Ｇ区にかけて検出された２間１間の方形建物。南北は２間 3.6m で 1.8m の等間隔、東西は１間 3.6m で、井戸ＳＧＥ０６を切り、東側から検出された土壙ＳＧＫ１２２、ＳＧＫ１２９、ＳＧＫ１４１などがこの建物に伴う可能性が考えられる。

塀　[第１８図、第１９図]　Ｅ群建物周辺からは、建物ＳＧＢ３２の東側に並行し南北２間 4.1m の塀ＳＧＢ３６、建物ＳＧＢ４１の東側に並行し南北２間 3.6m の塀ＳＧＢ３９、建物ＳＧＢ４１の西桁柱列に重複し南北３間 5.5m の塀ＳＧＢ４２、建物ＳＧＢ３８の南側に並行し東西２間 4.6m の塀ＳＧＢ４５が検出されている。

なお、Ｗ 14 ～Ｗ 16、Ｓ１～ＮＳ０の 10m 四方位の範囲 [第１８図、第１９図、第２０図] には、水田層直下に焼土粒および木炭を含む埋め立て層が広がっており、多くの遺物を含んでいた。またこの下部Ｗ 16 ＮＳ０グリッドを中心として中世初期層面上に手の平サイズの粘板岩川原石が集中して検出されており、敷石通路が有った可能性があり、この面に伴い、石臼（第７１図２）、瓦質鍋（第５０図２）が検出されている。

[Ｆ群]

ＳＧＢ４９　[第２０図、第２１図、第３９図]　Ｈ１１Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される３間１間の桁柱構造の東西棟建物。桁行は３間 5.4m で 1.8m の等間隔、梁行は１間 3.6 mで、建物の西側から漆塗膜が多く検出されている。土塁ＳＧＡ０３を削り、堀ＳＧＤ６７・ＳＧＤ５６を埋めてから構築されており、南西隅の柱がＳＧＤ３４新路により切られている。

ＳＧＢ５０　[第２０図、第２１図、第３９図]　Ｈ１１Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される３間１間の桁柱構造の東西棟建物。桁行は３間 5.4m で 1.8m の等間隔、梁行は１間 3.6m で、同規格のＳＧＢ４９とは同一の地表面から柱穴が穿たれているが、ＳＧＢ４９の柱穴がこの建物の土間面を切っており、この建物の方が古く、ＳＧＢ４９と同じく土塁ＳＧＡ０３、堀ＳＧＤ６７・ＳＧＤ５６より新しい。堀ＳＧＤ５６の覆土上部からはこの建物に伴う可能性のある土師質皿が検出されている。

ＳＧＢ５１　[第２１図、第２２図、第３９図] Ｈ１２Ｇ区で検出された小型柱穴から構成される３間１間

の桁側柱構造の南北棟建物。桁行は３間 5.4m で 1.8m の等間隔、梁行は１間 3.6m で堀ＳＧＤ６７の覆土上部に構築されており、これより新しい。建物ＳＧＢ４９・ＳＧＢ５０と同規格であり、同じ機能をもつ建物の建替えと考えられる。

[G群]

ＳＧＢ５５　[第２４図、第４０図]　Ｈ１３Ｇ区からＨ１４Ｇ区にかかり検出された小型柱穴から構成される３間１間の東西棟建物。桁行は３間 6.0m で 2.0m の等間隔、梁行は１間 2.7m で、特殊な柱配置の建物である。建物ＳＦＢ１０や排水溝ＳＧＤ１０９・ＳＧＤ１１０・ＳＧＤ１１１などの法線と一致しており、計画的に配置された建物と考えられ、南東５ｍには水路ＳＧＤ３４の末端部があることなどを考慮すると馬屋である可能性が高い。なお､遺構確認面より瀬戸大窯３期の天目茶碗片（第６１図１５）が検出されている。

ＳＦＢ１０　[第２４図、第２５図、第４０図]　Ｈ１３Ｇ区からＨ１６Ｆ区にかけて検出された大型柱穴、中型柱穴、小型柱穴から構成される、梁支えを兼ねた内部区分柱を備えた３間２間の２面廂付東西棟建物。桁行３間は 15.58m で西から 5.50m、5.50m、4.58m の間隔で柱配置され、梁行は２間 4.58m で 2.29m の等間隔で、南北平側に 1.37m の廂が付く。身舎の桁行柱穴は大型で礎板石を伴うものが多く、棟通りの柱穴は中型で礎板石を伴うものの、桁柱穴より浅いことから梁支えではないかと考えられる。廂の柱穴は小型で礎板石を伴うものもあり、南面廂の西から１列目の西側 1.83m、２列目西 1.83m、３列目と４列目の中間 2.29m 北側の１列目の西 1.83 m、２列目と３列目の中間 2.75m、３列目と４列目の中間 2.29m にも小型柱穴があり、中間にあるものは廂桁支え、ずれた位置にあるのは廂桁支えを兼ねた窓や出入り口の建具を設置する柱と考えられる。南側廂の外側にある２条の溝ＳＧＤ１１１・ＳＦＤ５７と溝ＳＧＤ１１０・ＳＧＤ５７は雨落溝を兼ねた排水溝と考えられるが、建物に近い溝は廂柱穴と重なっていることから、廂は増築された可能性も考えられる。さらに、ほとんどの柱穴の柱痕があった場所から、小舞痕跡を残す壁土が焼けた焼成粘土塊が出土しており、建物は火災で焼失し、柱は抜き取り後埋められたと考えられる（第１０９図下段)。この建物は、内郭部の外堀ＳＧＤ４６を埋め立て造成し建築されたもので、造成層から筒型内耳鍋片、瀬戸大窯２期前半の内ソギ丸皿の破片が検出されており、これ以降の建築と判断される。また、水路ＳＧＤ３４新路末端に投棄されていた、焼けた建築部材や焼成粘土塊、大型鉄製燭台等の火災建物の焼け跡を整理して投棄されたと考えられる遺物群は、位置的に近いこの建物の焼失遺物である可能性が最も高い。なお､この建築は規模が大きいことから､使用尺度を算定することができ､基準となる方眼の１間は 1.833m で、その６分の１は 30.55cm となり、曲尺に直すと１間は 6.05 尺、１尺は 1.008 尺という数値が用いられていたと考えられる。

第８節　土壙・竪穴状遺構

（１）土壙

外郭域で検出された多くの土壙は、近世水田層のさらに上面から掘りこまれたもので、中世土壙は少なく、Ｇ５テラスの建物Ｅ群の周辺からまとまって検出されている。形状から隅丸矩形ないし溝状に細長く底部から壁が緩やかに立ち上がる船底構造のもの、円形ないし矩形で底部から壁が急激に立ち上がる直壁構造のものなどがあり、またその機能用途を窺わせるものとして土壙底部に桶を据えた痕跡が残るもの、覆土が砂礫で充填されているものなどがある。

ＳＧＫ１１８　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ 14 Ｓ１からＳ２グリッドにまたがり検出された円形で擂鉢状の土壙。直径 0.7m で深さ 24cm を測る。内部は砂礫が充填されており、建物ＳＧＢ４３の柱穴を切る。覆土中から瀬戸大窯２期の鉄釉端反皿（第６１図１９）の破片が検出されている。

ＳＧＫ１１９　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ 14 Ｓ１からＳ２グリッドにまたがり検出された矩形の直壁構造の土壙、長辺 3.0m、短辺 2.4m、深さ 68cm を測る。底部は水平ではなく島状に掘り残された部分もある。内部は黒褐色のブロック土と茶褐色土が混じりあっており、短期間で埋め戻されたと考えられる。覆土中か

ら土師質皿と瀬戸大窯灰釉端反皿の小片が検出されている。

ＳＧＫ１２０　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドから検出された円形直壁構造の土壙。直径1.18m、深さ35cmを測り、土壙ＳＧＫ１２１に切られる。

ＳＧＫ１２１　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドから検出された円形直壁構造の土壙。直径1.15m、深さ59cmを測る。

ＳＧＫ１２２　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドから検出された溝状の船底構造の土壙、長辺1.5m、短辺0.55m、深さ25cmを測る。底部の一部から灰白色の粘土が検出されている。ＳＧＫ１４０・ＳＧＫ１４１・ＳＧＫ１４５・ＳＧＫ１４６より新しい。

ＳＧＫ１２３　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドから検出された円形直壁構造の土壙。直径は1.2m、深さ40cmを測り、土壙ＳＧＫ１４７に半分以上切られている。

ＳＧＫ１２９　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドで検出された溝状の船底構造の土壙。長辺は1.25m、短辺0.4m、深さ27cmを測る。ＳＧＫ１４０・ＳＧＫ１４１より新しい。

ＳＧＫ１３０　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ14ＮＳ０グリッドで検出された矩形の船底構造の土壙。長辺2.15m、短辺1.1m、深さ23cmを測る。底部から土師質皿と瀬戸大窯１～２期の灰釉端反皿底部破片が検出されている。

ＳＧＫ１３１　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ14ＮＳ０グリッドで検出された矩形の船底構造の土壙。長辺1.1m、短辺1.0m、深さ23cmを測る。土壙ＳＧＫ１３２と重複するが新旧関係は明確でない。土壙上面から古瀬戸後Ⅳ新期の天目茶碗(第６０図２)および常滑Ｂ類の口縁部（第５８図２）が検出されている。

ＳＧＫ１３２　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ14ＮＳ０グリッドで検出された矩形の船底構造の土壙。長辺1.0m、短辺0.9m、深さ25cmを測る。

ＳＧＫ１４０　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドで検出された矩形の船底構造の浅い土壙。土壙ＳＧＫ１４１に南側が切られているため明確ではないが、隅丸方形の一辺が1.5mで深さ７cmを測る。土壙ＳＧＫ１２３・ＳＧＫ１２９・ＳＧＫ１４１により切られる。

ＳＧＫ１４１　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドで検出された矩形の船底構造の土壙。長辺1.95m、短辺1.14m、深さ21cmを測る。土壙ＳＧＫ１４０より新しく、ＳＧＫ１２２・ＳＧＫ１２９より古い。

ＳＧＫ１４５　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドの土層保存ベルトにかかり検出された擂鉢状の土壙。直径0.3mの円形と推定され、深さ23cmを測り、内部には砂礫が充填されている。

ＳＧＫ１４６　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区でＷ15 Ｓ１グリッドの土層保存ベルトにかかり検出された擂鉢状の土壙。土壙ＳＧＫ１４５の南側に接し、直径0.6mの円形と推定され、深さ23cmを測り、内部には砂礫が充填されている。

ＳＧＫ１４７　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ15 Ｓ１グリッドから検出された矩形の直壁構造の土壙。長辺1.4m、短辺1.1m、深さ57cmを測る。底部には上面が水平になるように円形に配置された礫群が２箇所検出されており、恐らく底部径65cm程の桶が２基据付けられていたのではないかと考えられる。土壙上部から内耳鍋の破片(第５０図５)が検出されている。

ＳＧＫ１４８　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区のＷ16からＷ17Ｎ３グリッドで検出された矩形の船底構造の土壙。長辺3.4m、短辺1.0m、深さ20cmを測る。覆土中には多量の小礫と共に鉄滓が検出されている。

ＳＧＫ１８７　[第２０図]　Ｈ１１Ｇ区のＷ17 Ｓ１グリッドから検出された不正円形の擂鉢状土壙。直径は0.36m、深さ27cmを計る。底部には桶底の圧痕が残されており、桶を埋設していたと考えられ、覆土から完形の土師質皿２点(第４７図６・７)が検出されている。

（２）竪穴状遺構

ＳＧＫ２３８　[第２３図]　Ｈ１３Ｇ区のＷ24 Ｎ６グリッドから検出された竪穴状遺構の一部と考えられる遺構。遺構の大半は調査区外であり、調査区内では東西4m、南北2m、深さ33cmを測る。

ＳＧＫ２４１　[第２３図]　Ｈ１３Ｇ区のＷ 20 Ｎ１からＮ２グリッドにかけて検出された竪穴状遺構。南北 6.8m、東西 3.7m、深さ 19cm で北東隅が出入り口状に突出していたようであるが明確でない。底部から土師質皿の小片と古瀬戸後期の卸皿片 (第６０図 6)、焼成粘土塊が検出されている。１４世紀前半以後の水田層面を切って造られ、上部には土塁ＳＧＡ０５が構築されている。

第９節　小鍛冶・焼土遺構

ＳＧＦ０１　[第１０図]　Ｈ４Ｇ区のＥＷ０Ｓ１グリッドから検出された焼土遺構。東西 0.6 ｍ、南北 0.5 ｍの範囲に焼土粒子が広がっており、建物ＳＧＢ０１の柱穴と重複しているが、前後関係は明確にできなかった。周囲からは平安時代の竪穴住居床面が検出されており、これに伴う焼土の可能性もある。

ＳＧＦ０２　[第１２図]　Ｈ５Ｇ区のＷ２Ｎ２グリッドから検出された焼土遺構。東西 0.8m、南北 0.7m の範囲にレンズ状に焼土が検出された。周囲から小ピットと、土師質皿片が検出されているが、これに伴う建物等は見出されていない。

ＳＧＦ０３　[第１２図]　Ｈ５Ｇ区のＷ３Ｎ４グリッドから検出された焼土遺構。東西 0.7m、南北 0.38m の範囲に焼土が見出されたが、水田層の直下であり、これに伴う建物遺構等を明確にすることはできなかった。

ＳＧＦ１０・ＳＧＦ１１　[第１８図]　Ｈ９Ｇ区のＷ 14 ～ 15 ＮＳ０グリッドで検出された焼土遺構。炭化した竹材 (小舞) が並んで検出されており、火災を受け焼成された土壁が倒壊したものと考えられ、ＳＧＦ１０とＳＧＦ１１は一連のもので範囲は東西 2.7m、南北 1.0m を測る。焼失した建物は、焼土の法線と一致し、さらに近接していることを条件にすると、建物ＳＧＢ３５が最も有力ではないかと考えられる。

ＳＧＦ１２　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区のＷ 16 Ｎ１グリッドで検出された焼土遺構。東西 40cm、南北 38cm を測る。

ＳＧＦ１３　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区のＷ 16 Ｎ１グリッドで検出された焼土遺構。東西 54cm、南北 45cm、深さ 8cm を測り、かなり高温で焼成が行われたためか焼土が硬く締まっており、小鍛冶遺構の可能性が考えられる。

ＳＧＦ１４　[第 19 図]　Ｈ１０Ｇ区Ｗ 17 Ｎ１グリッドで検出された焼土遺構。東西 53cm、南北 60cm の範囲に焼土が散らばる状態で検出されており、廃棄された焼土の可能性がある。

ＳＧＦ１５　[第１９図]　Ｈ１０Ｇ区Ｗ 16 Ｎ２グリッドで検出された焼土遺構。東西 65cm、南北 53cm、深さ 6cm の浅い土壙の内部に灰が堆積しており、囲炉裏の底部の可能性が考えられる。

第 10 節　通路、空閑地

ＳＧＣ０１　[第１２図、第１３図]　Ｈ５Ｇ区からＨ６Ｇ区で検出された広場・通路空間。土塁ＳＧＡ０１・堀ＳＧＤ１６とＧ１テラス上の東門外屋敷地との間にある空閑地、水路ＳＧＤ０５を北限として西側に屈曲し、ＳＧＣ０２の通路に接続していると考えられ、東郭東門に至る通路空間と考えられる。東西幅 10m、南北 28m を測る。水路ＳＧＤ０５の北側に想定される通路ＳＧＣ０３へは、Ｗ３Ｎ３グリッドで検出された石積護岸部分に掛けられた木橋で渡っていたと考えられる。

ＳＧＣ０２　[第１６図]　Ｈ７Ｇ区で検出された南北通路空間。土塁ＳＧＡ０１と堀ＳＧＰ０２の間にあり、北限はおそらく水路ＳＧＤ０５で、東側から通路ＳＧＣ０１の屈曲部分が接続していると考えられ、南端は西に屈曲し、水路ＳＧＤ３３を当初は木橋、後に土橋により渡り東郭内に至っていたと考えられる。東西幅は 6.0m で南北は調査範囲 22m を測る。なお、通路ＳＧＣ０２の東辺を画するように塀ＳＢＧ２８が検出されている。

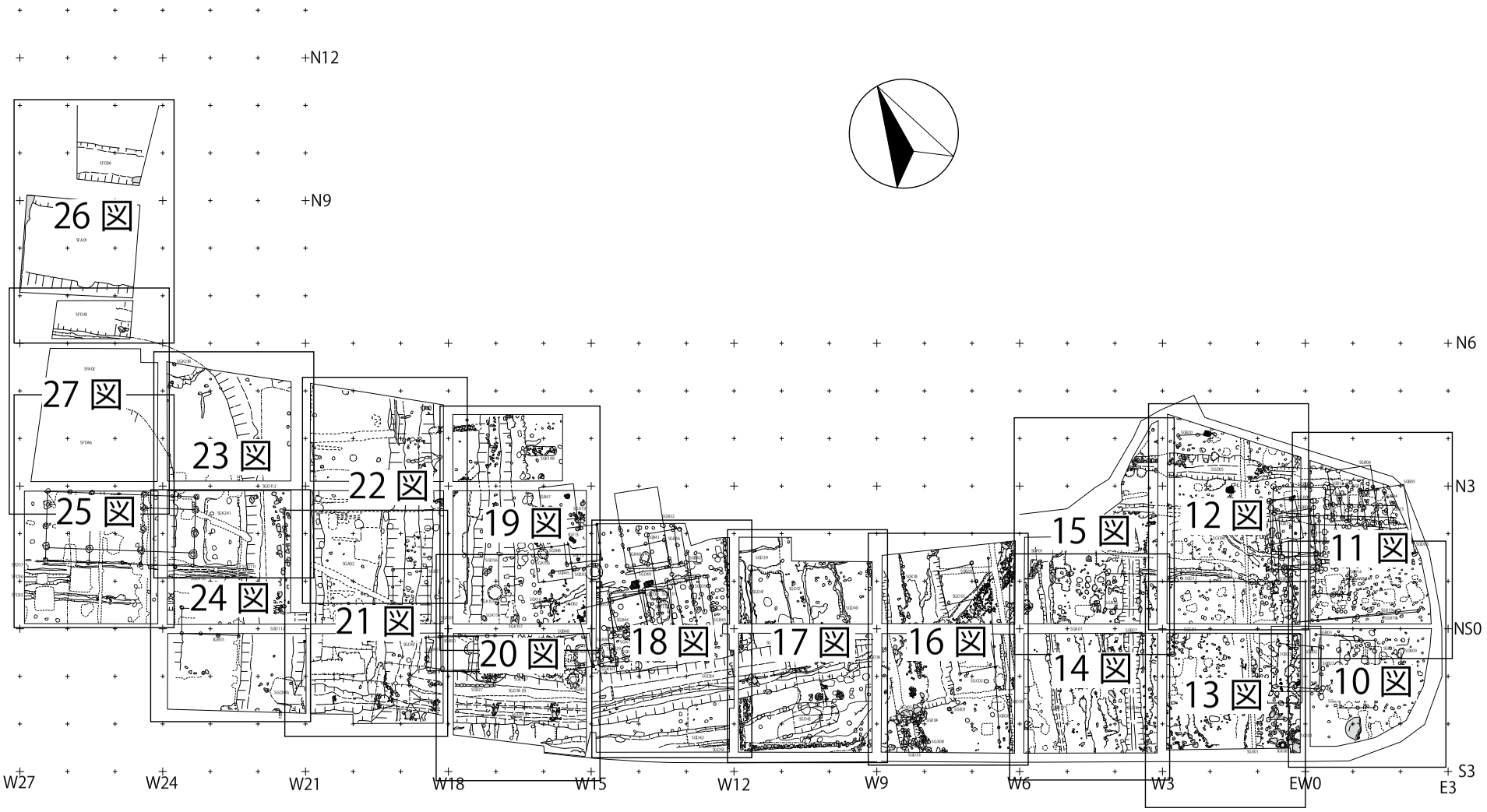
ＳＧＣ０３　[第１２図]　Ｈ５Ｇ区で検出された東西通路空間。水路ＳＧＤ０５を渡る木橋の存在と、後に

水路がさらに北側に流路を移されることを考慮すると、水路の北側に通路ないし空閑地の存在が考えられるが、大部分が調査区外であるため範囲等は明確でない。

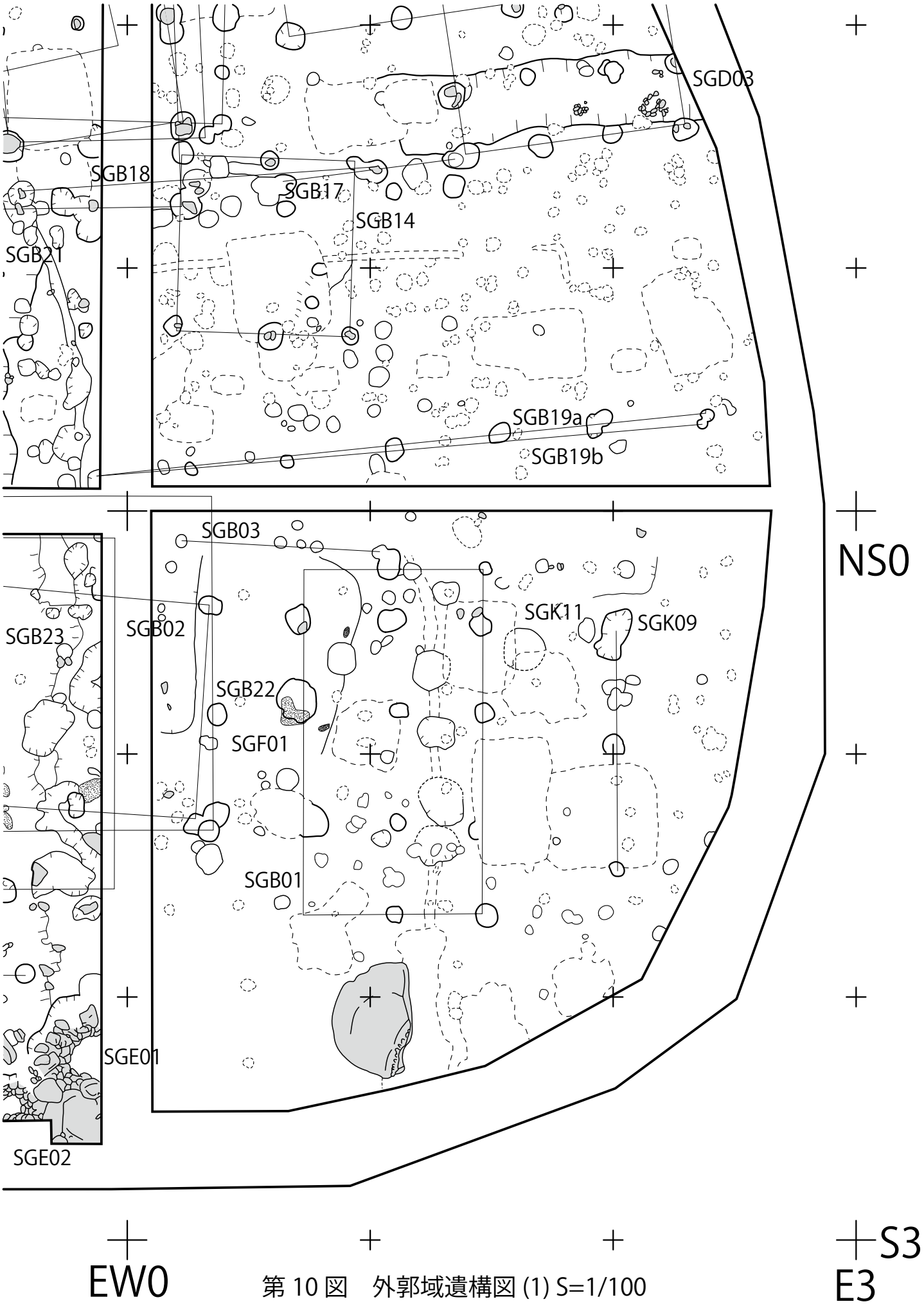
ＳＧＣ０４　[第１４図]　Ｈ６Ｇ区で検出された南北通路。土塁脇側溝ＳＧＤ１７と通路ＳＧＣ０２の間には上面幅 2.0m 長さ 21m の帯状空閑地があり、水路管理通路ないし防御上の犬走り的利用がされていたと考えられる。

ＳＧＣ０５　[第 17 図]　Ｈ８Ｇ区で検出された南北通路空間。想定される土塁ＳＧＡ０４と土塁脇側溝を後に水路として整備したと考えられる水路ＳＧＤ３７の西側に上面幅 4m 近い帯状の空閑地があり、ＳＧＣ０４と同じ機能を有した通路空間が存在したと想定される。

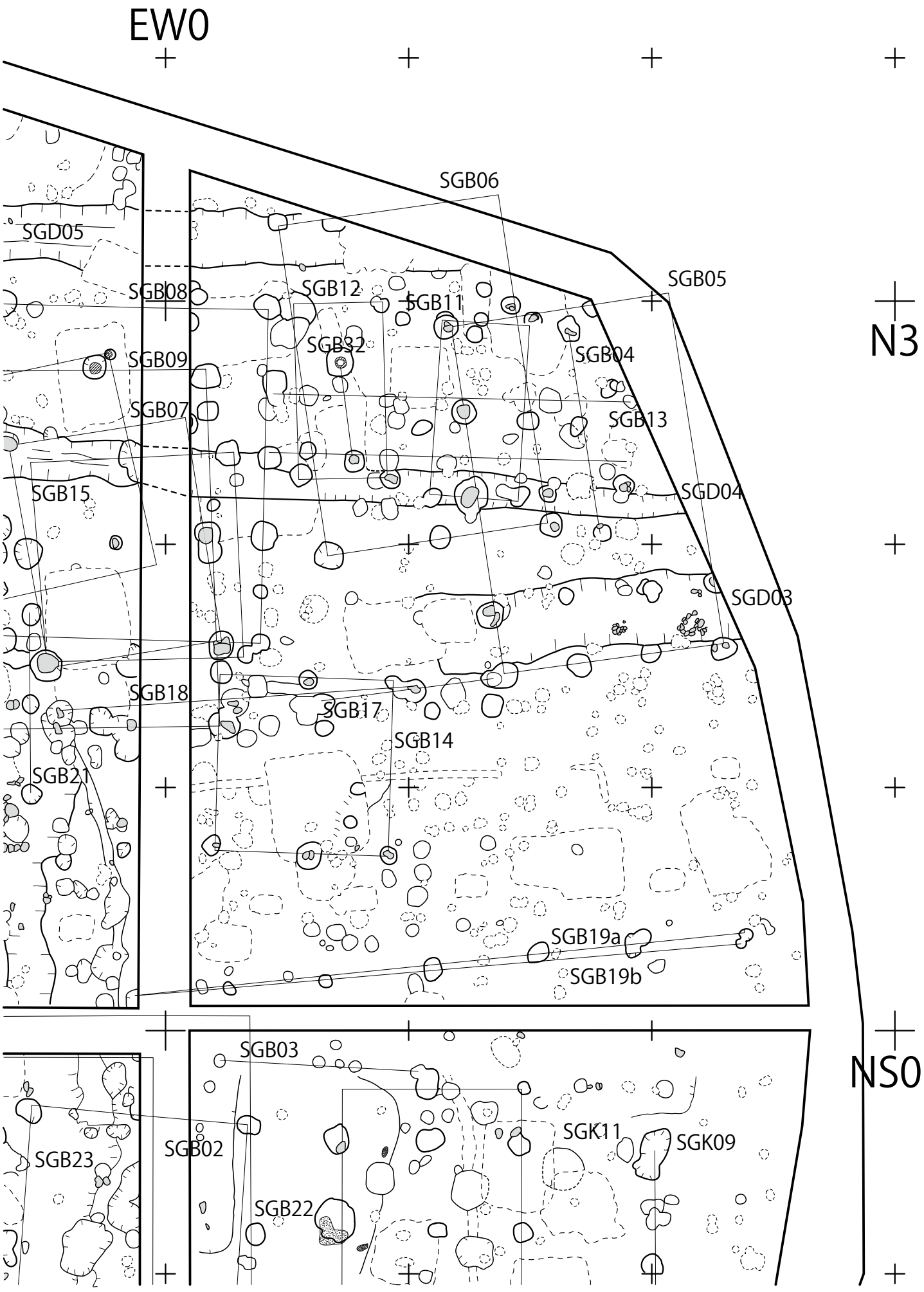
ＳＧＣ０６　[第２０図]　Ｈ１１Ｇ区に想定される東西通路空間。水路ＳＧＤ３４旧路・新路の開削によりその形状範囲は明確でないが、堀ＳＧＤ５６の南端が途切れており、その先に土橋が想定され、土塁ＳＧＡ０２の南端には通路状の版築層が存在していることから、これらの土塁、堀が機能していた段階ではＳ２とＳ３ラインの間に通路空間があったと想定され、後の東郭東門の位置もこの通路の延長線上の位置を継承したと考えられる。さらに、水路ＳＧＤ３４の位置決定も東郭内の施設配置に大きな影響を与えないこの空閑地を利用したと考えられる。



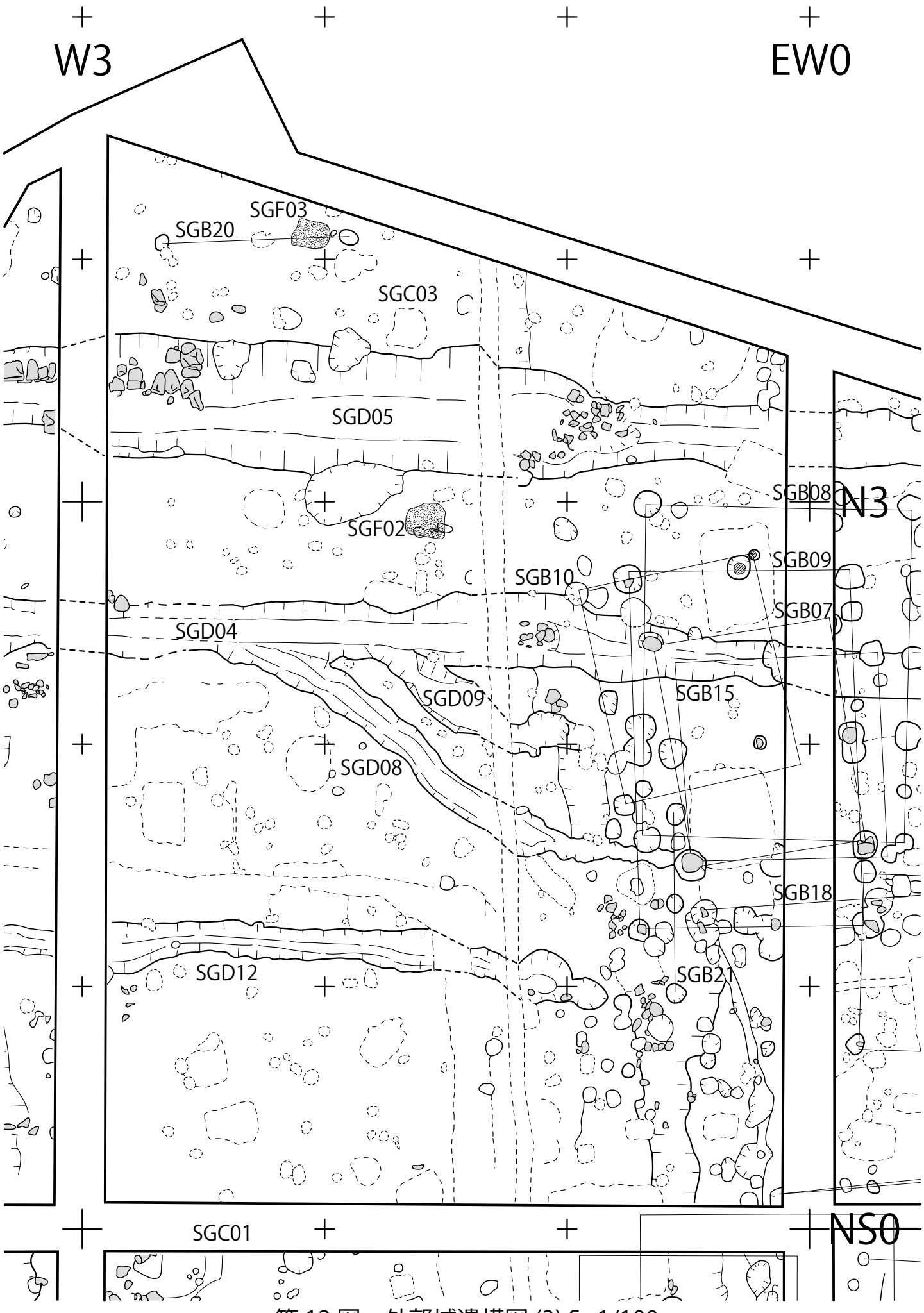
第 9 図　外郭域遺構図位置図



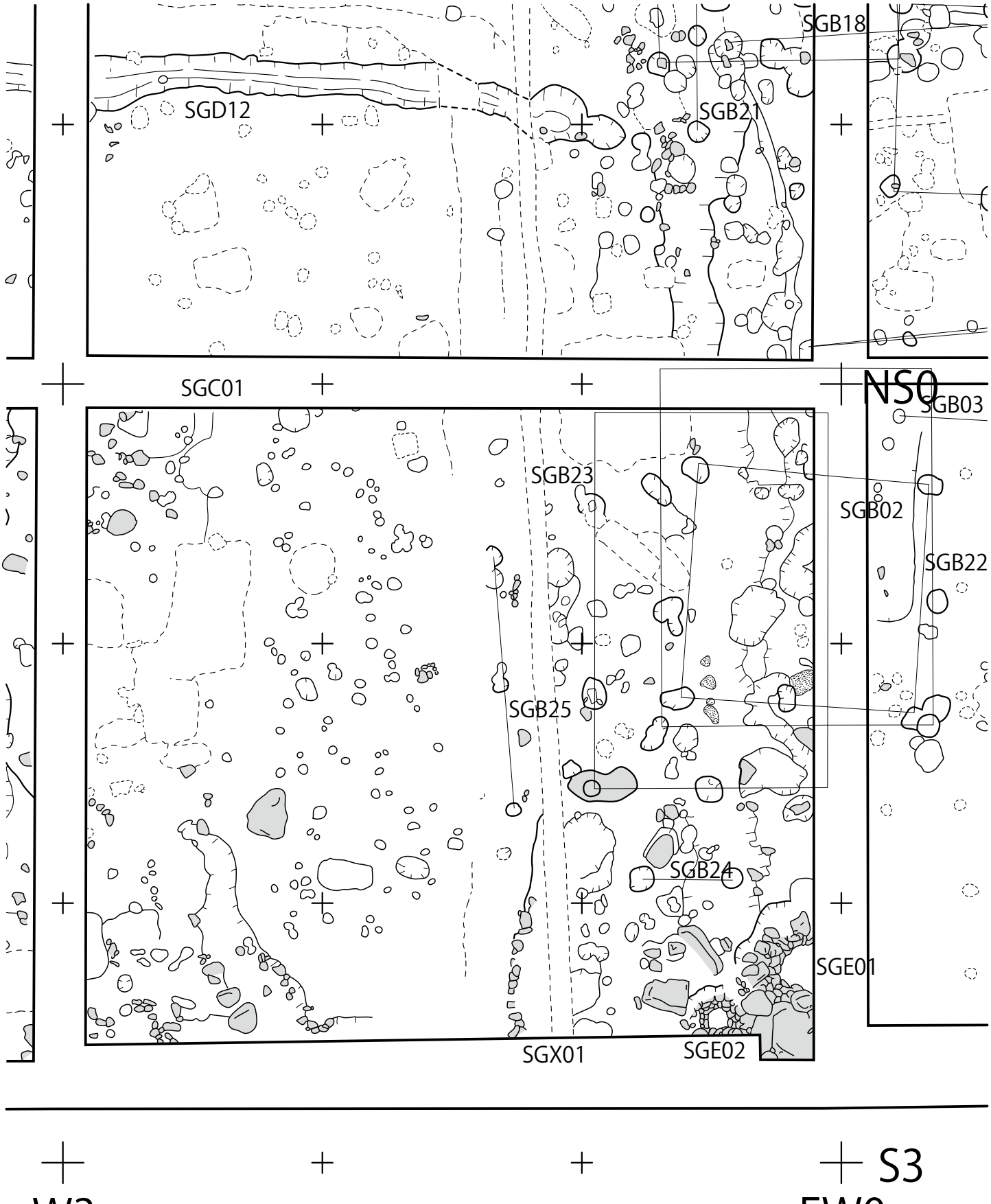
第 10 図　外郭域遺構図 (1) S=1/100



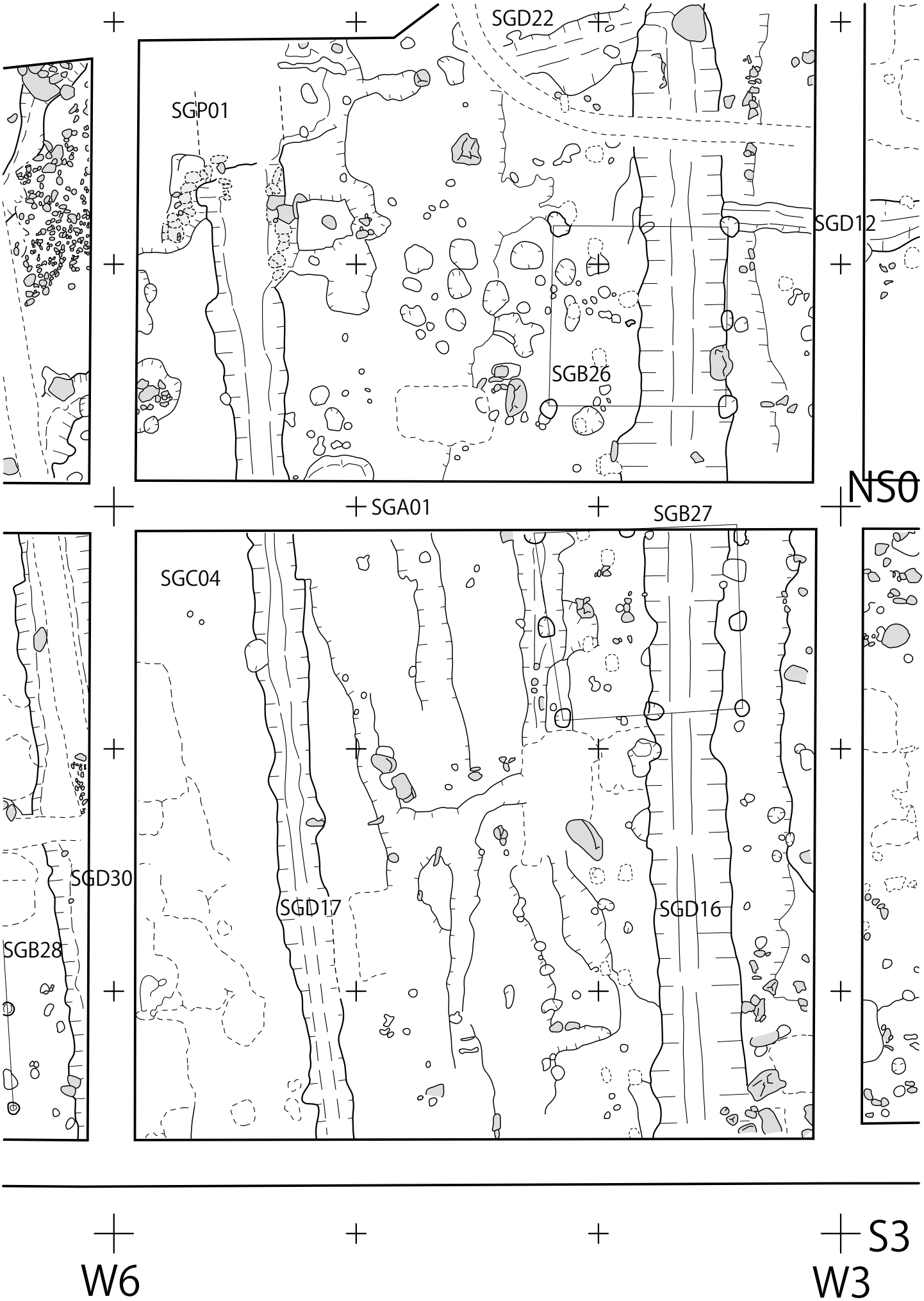
第 11 図　外郭域遺構図 (2) S=1/100



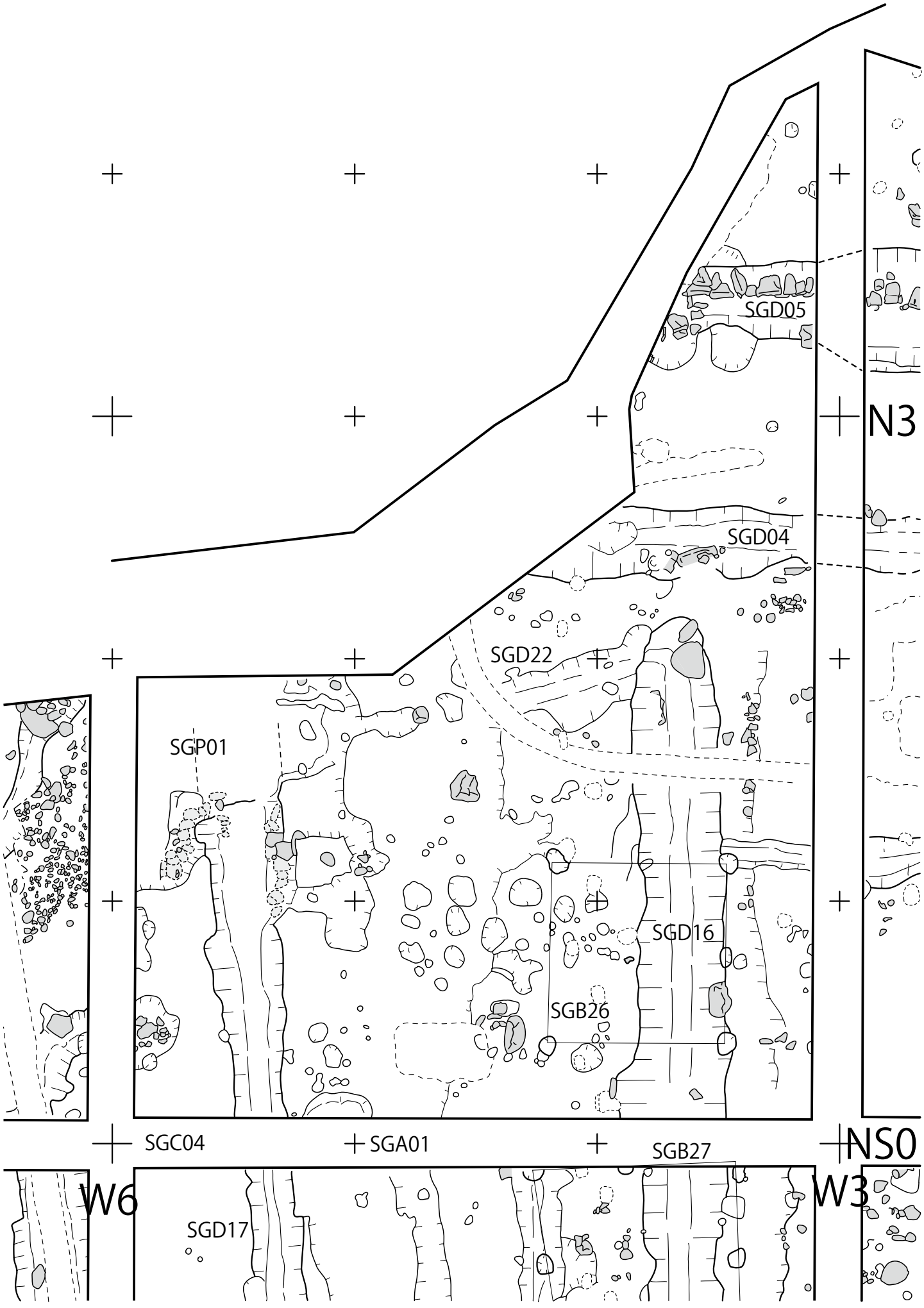
第 12 図　外郭域遺構図 (3) S=1/100



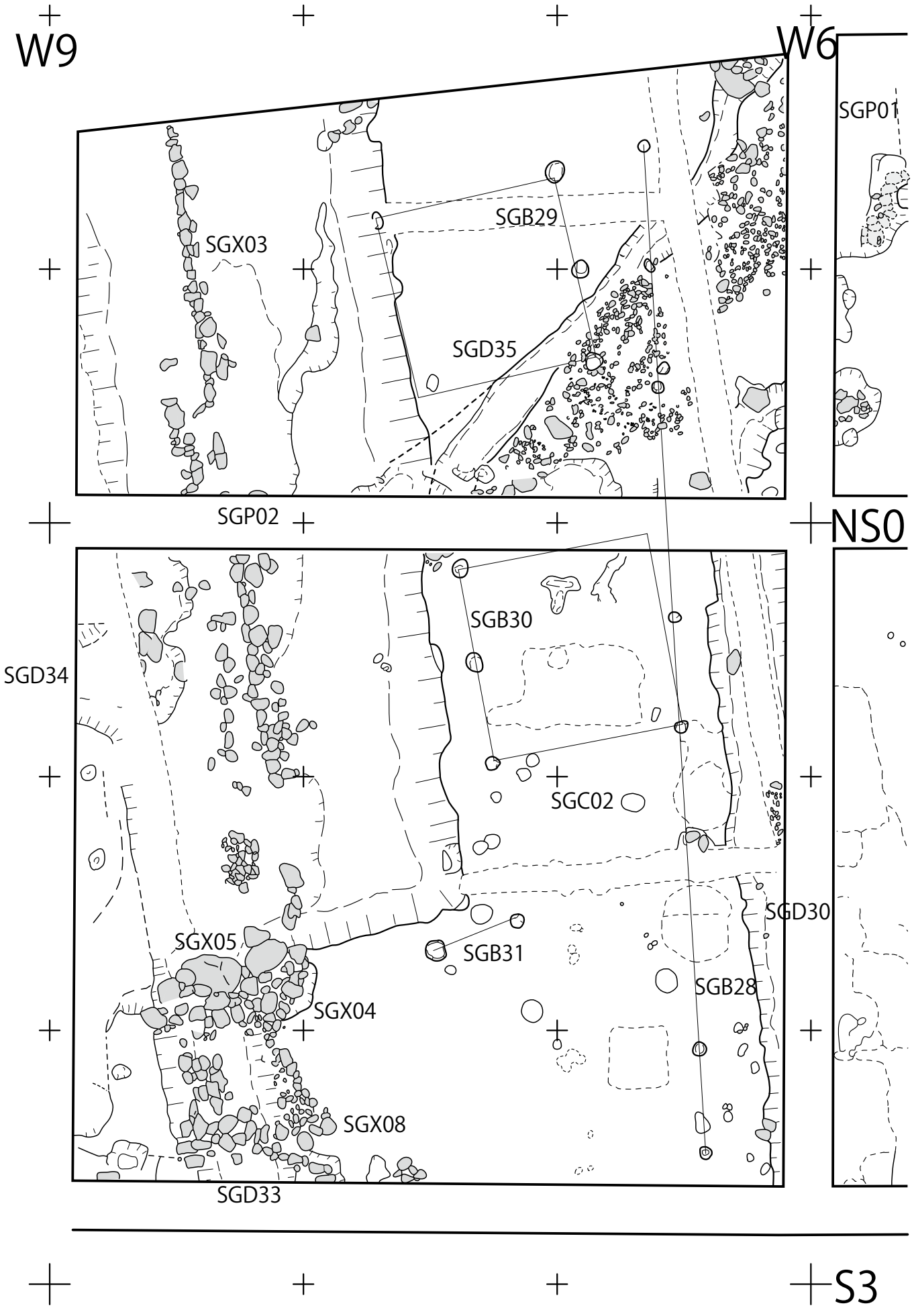
第 13 図　外郭域遺構図 (4) S=1/100



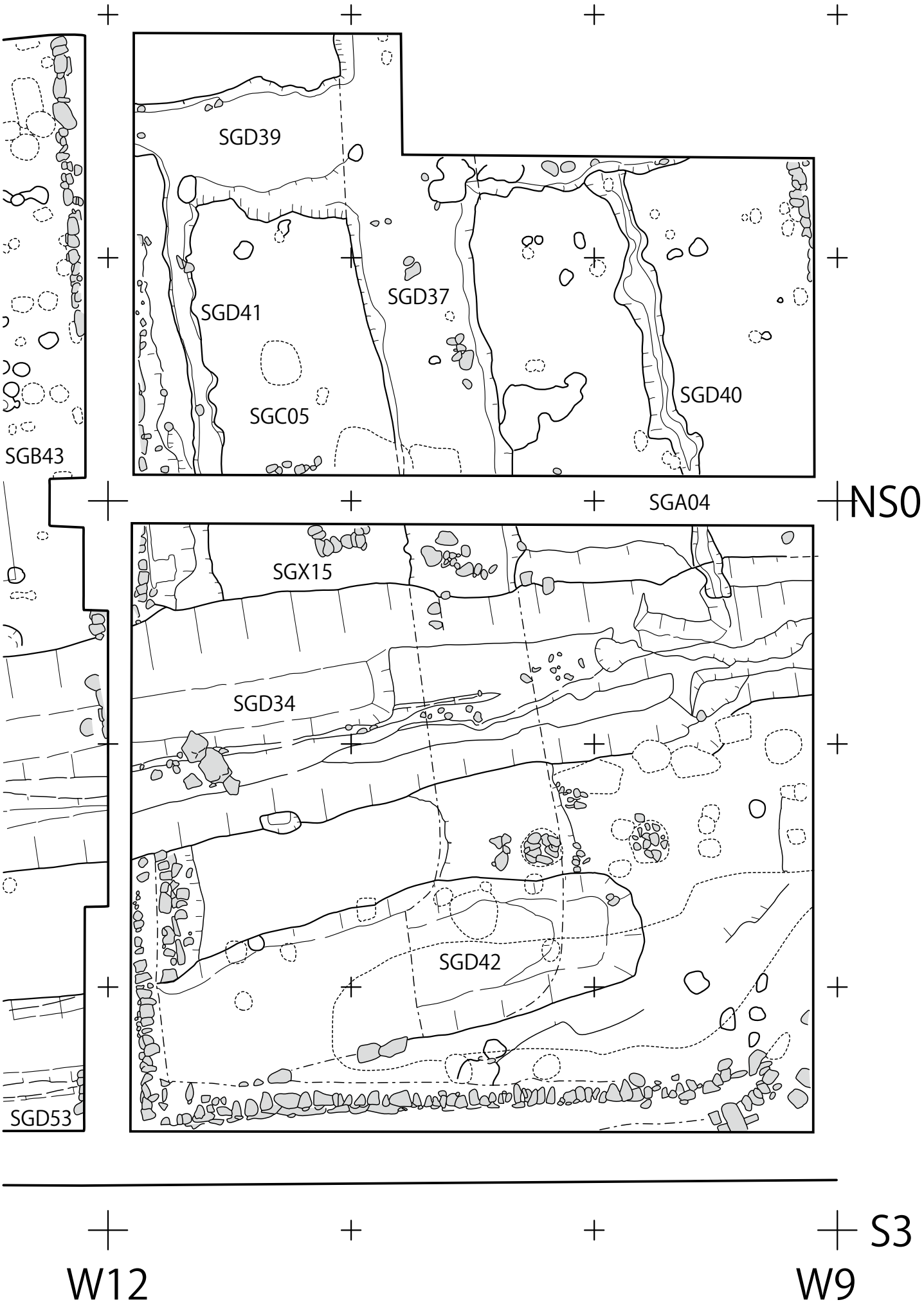
第 14 図　外郭域遺構図 (5) S=1/100



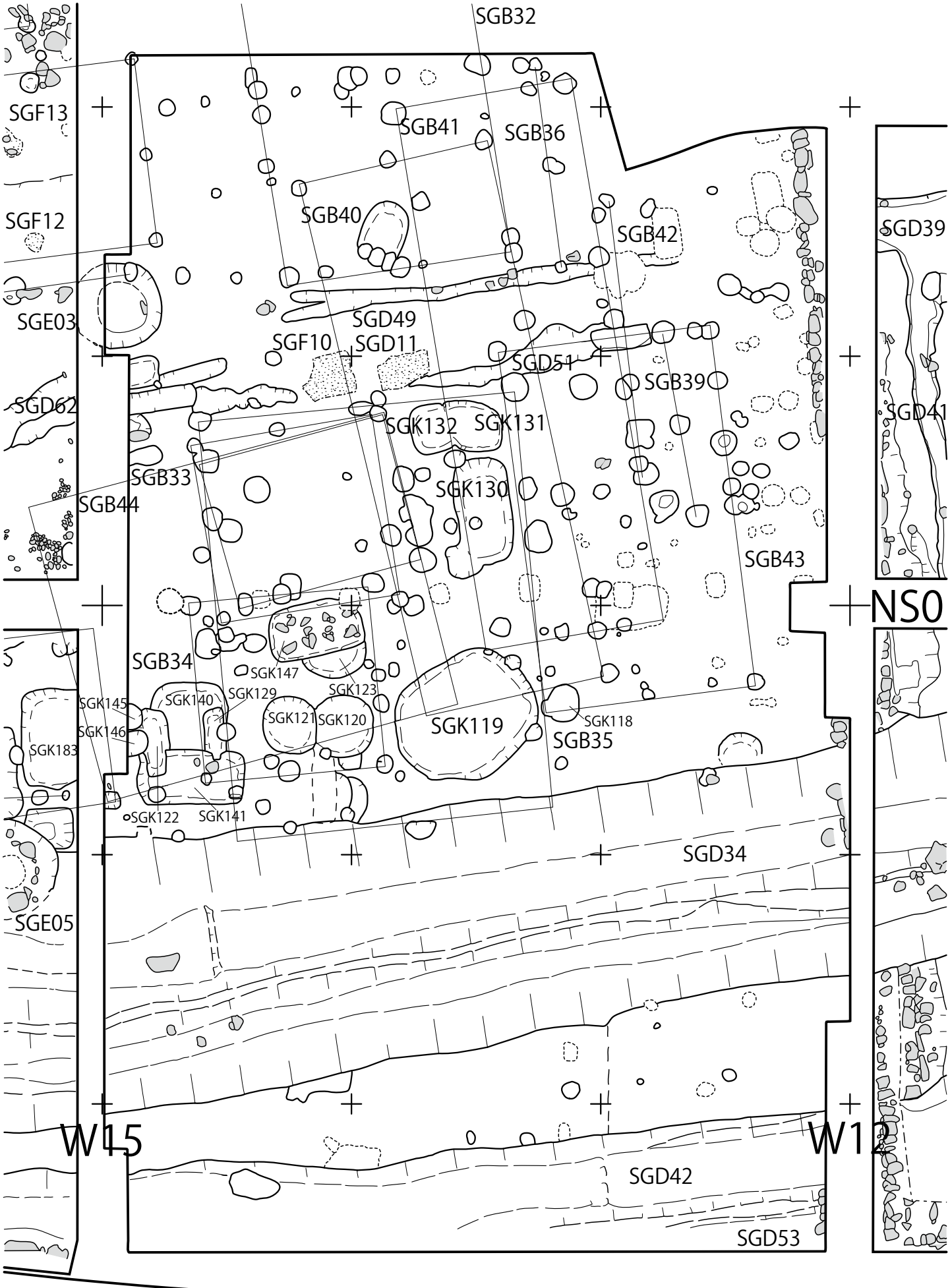
第 15 図　外郭域遺構図 (6) S=1/100



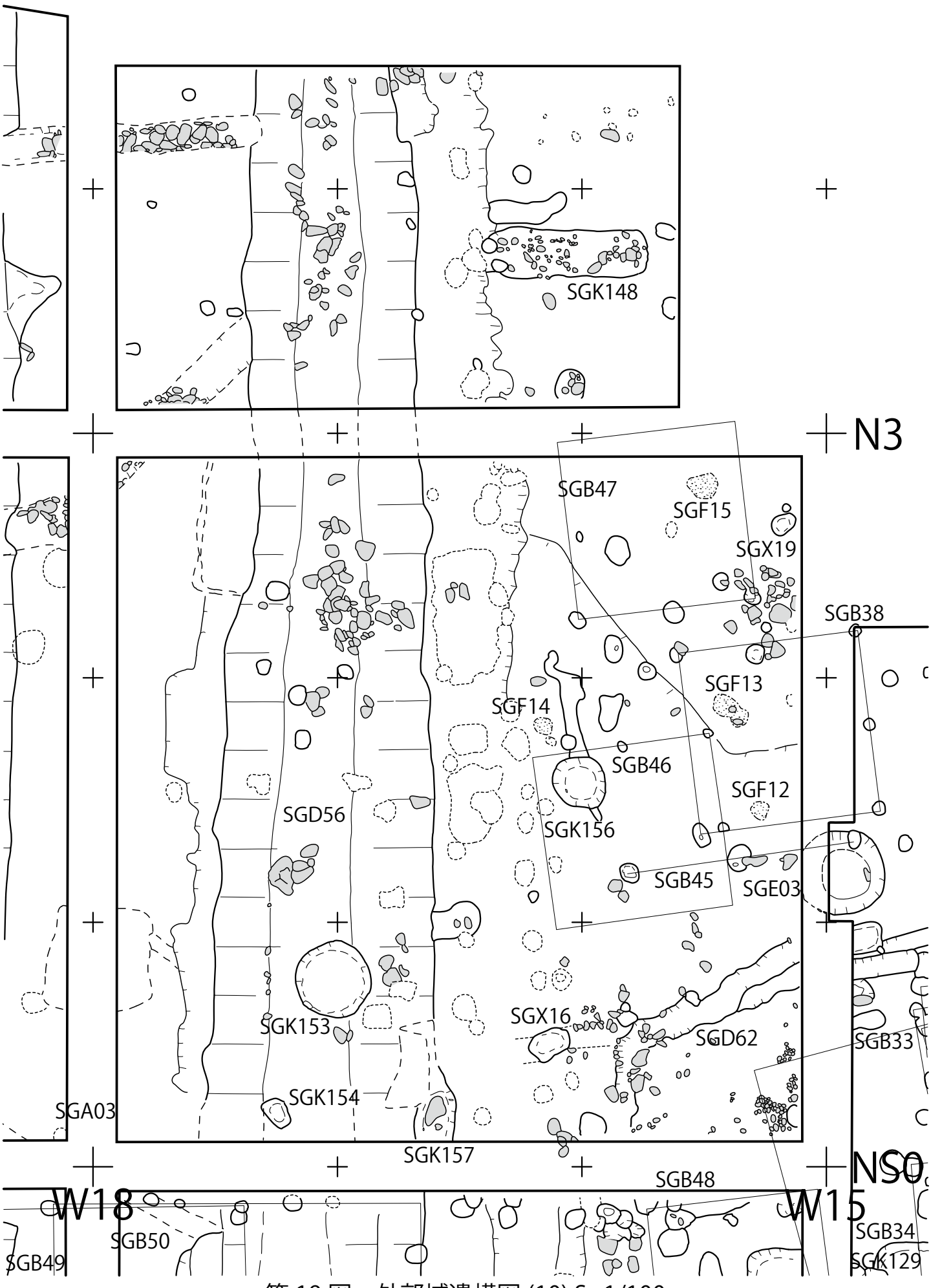
第 16 図　外郭域遺構図 (7) S=1/100



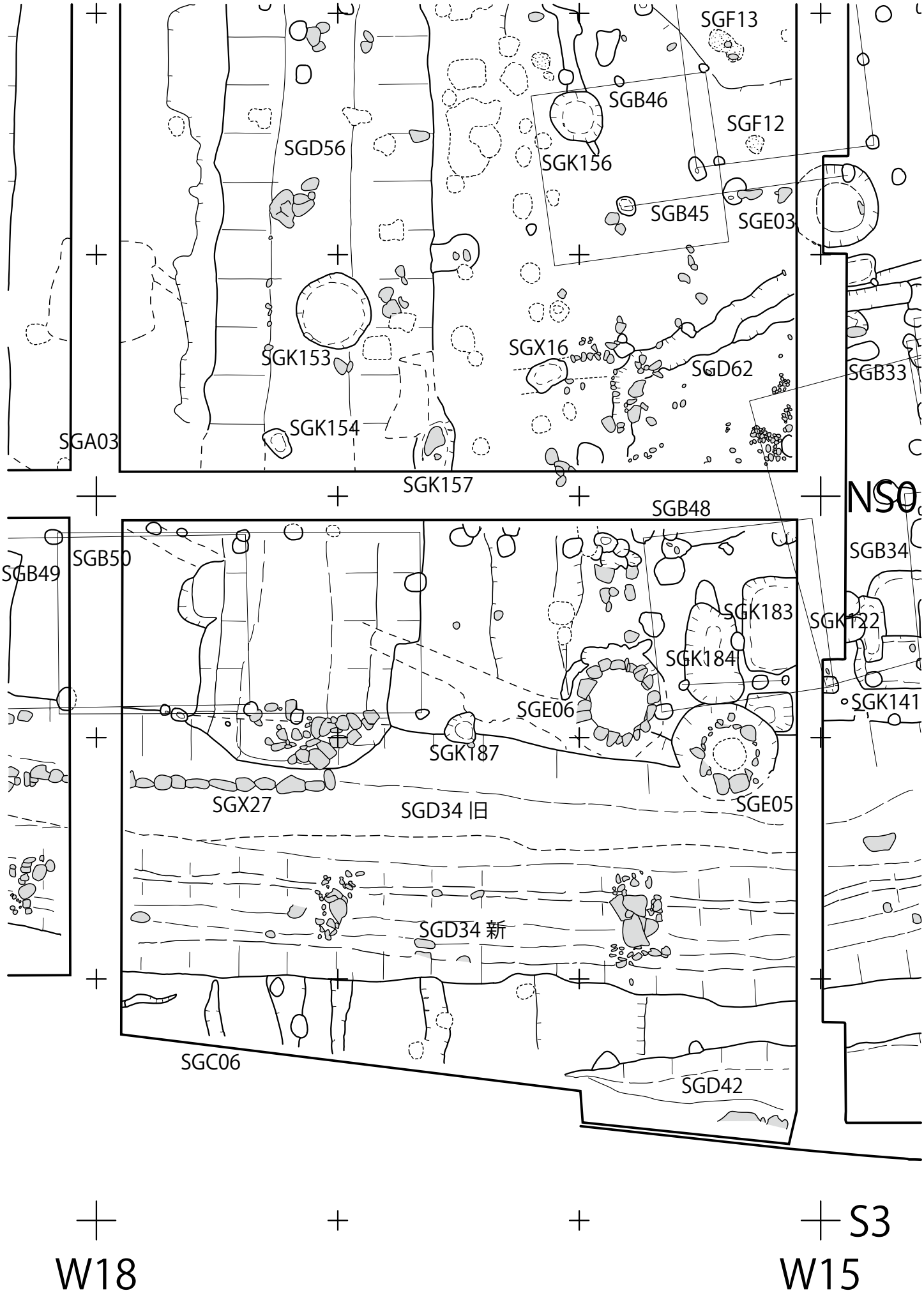
第 17 図　外郭域遺構図 (8) S=1/100



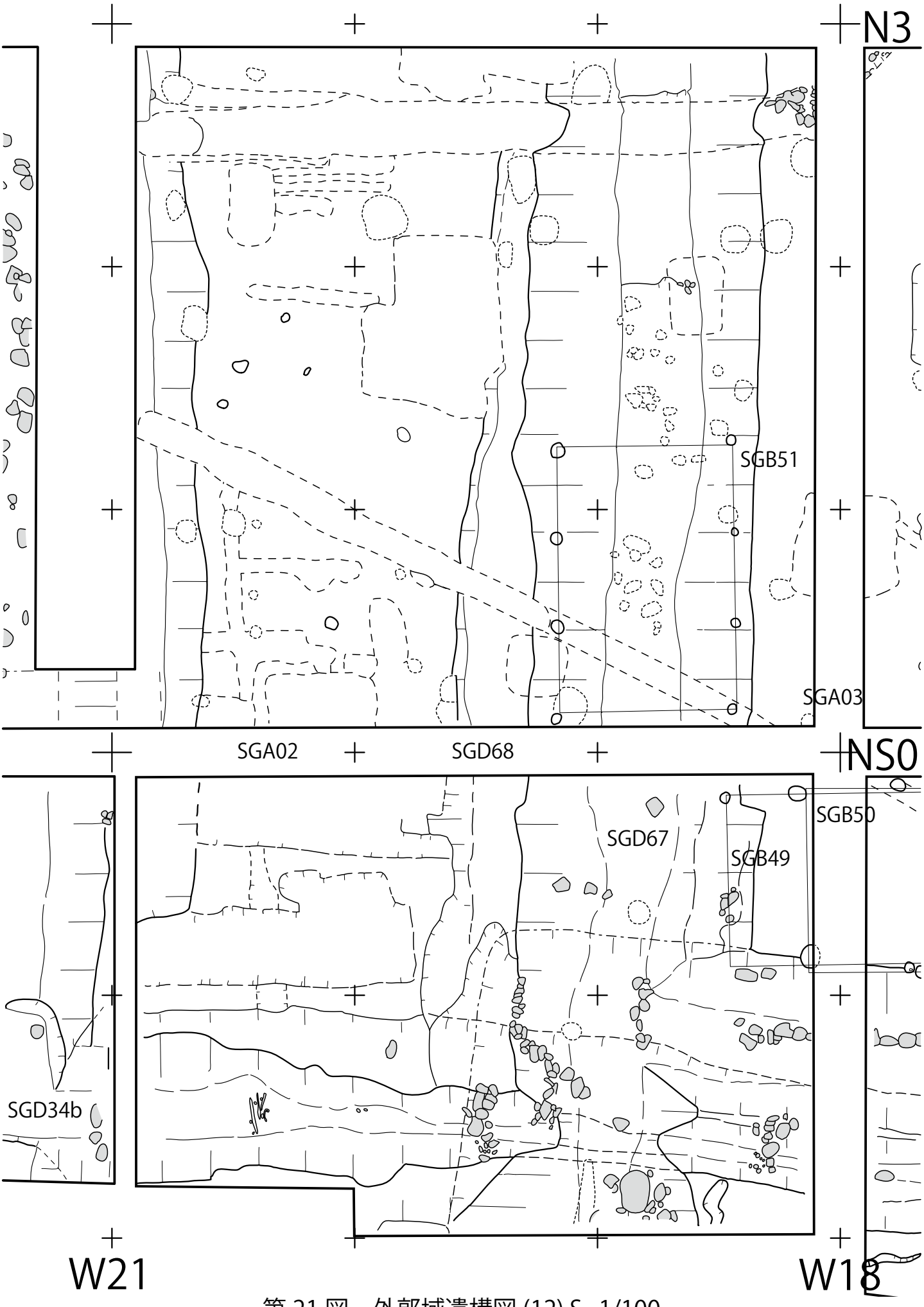
第 18 図　外郭域遺構図 (9) S=1/100



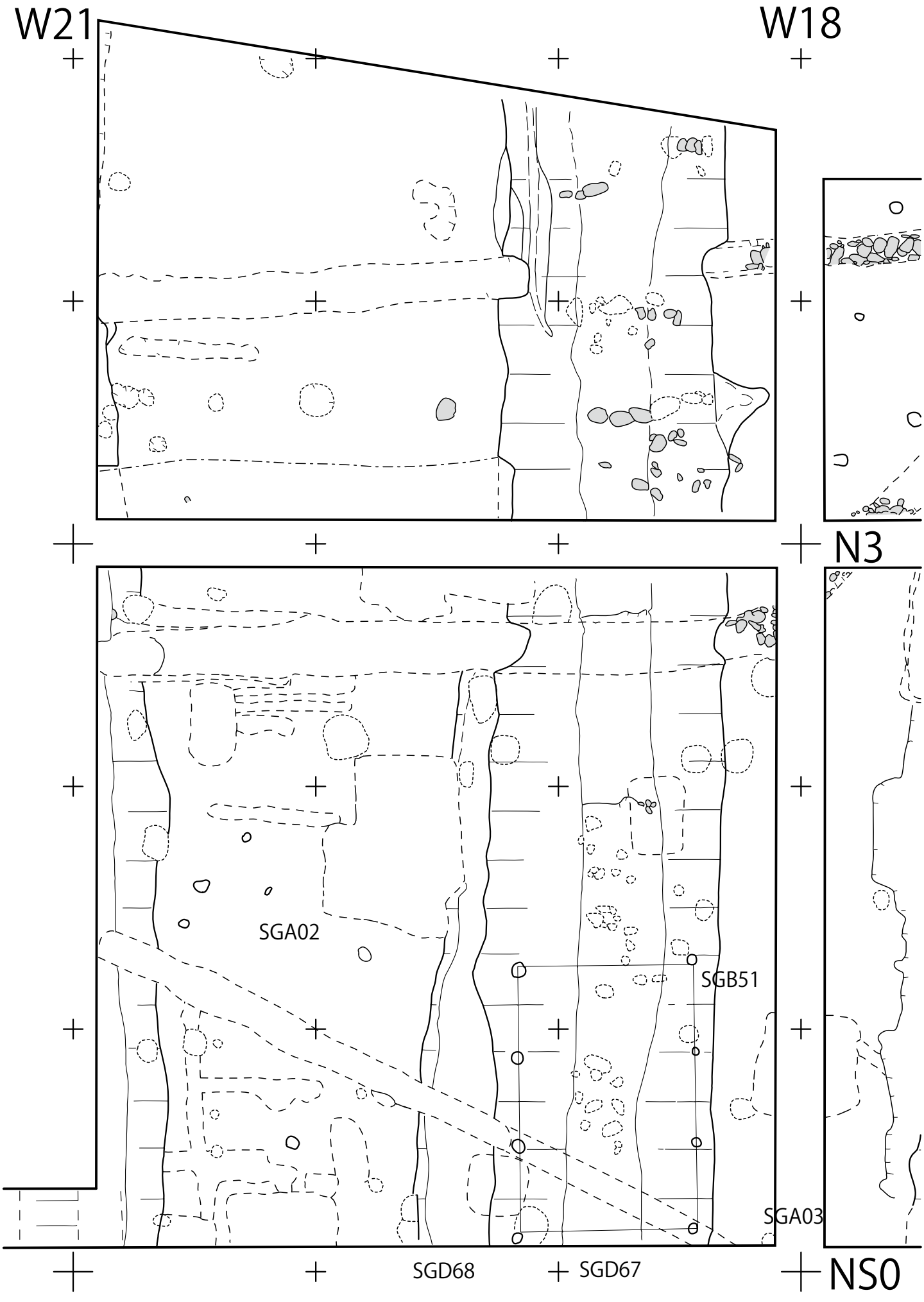
第 19 図　外郭域遺構図 (10) S=1/100



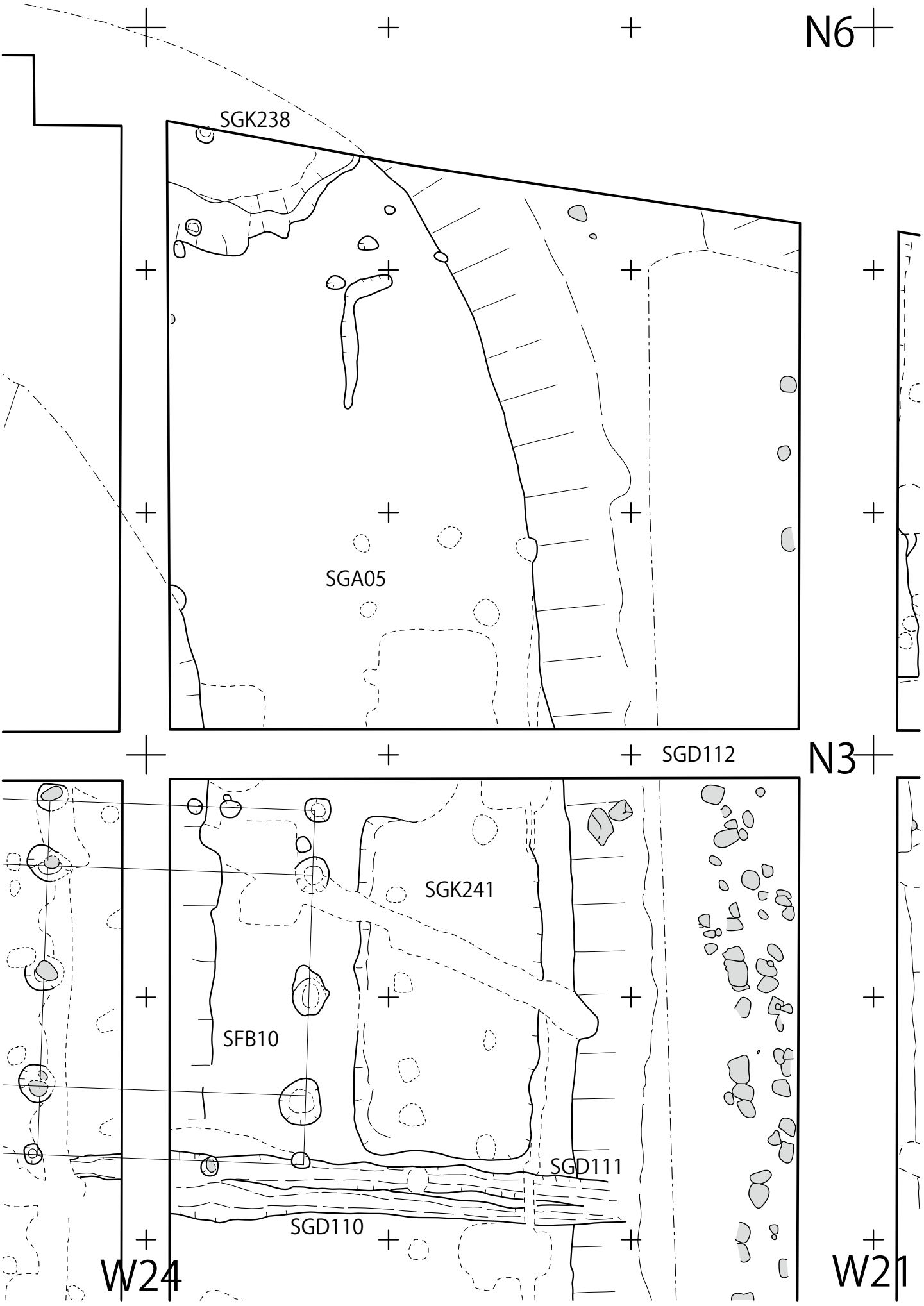
第 20 図　外郭域遺構図 (11) S=1/100



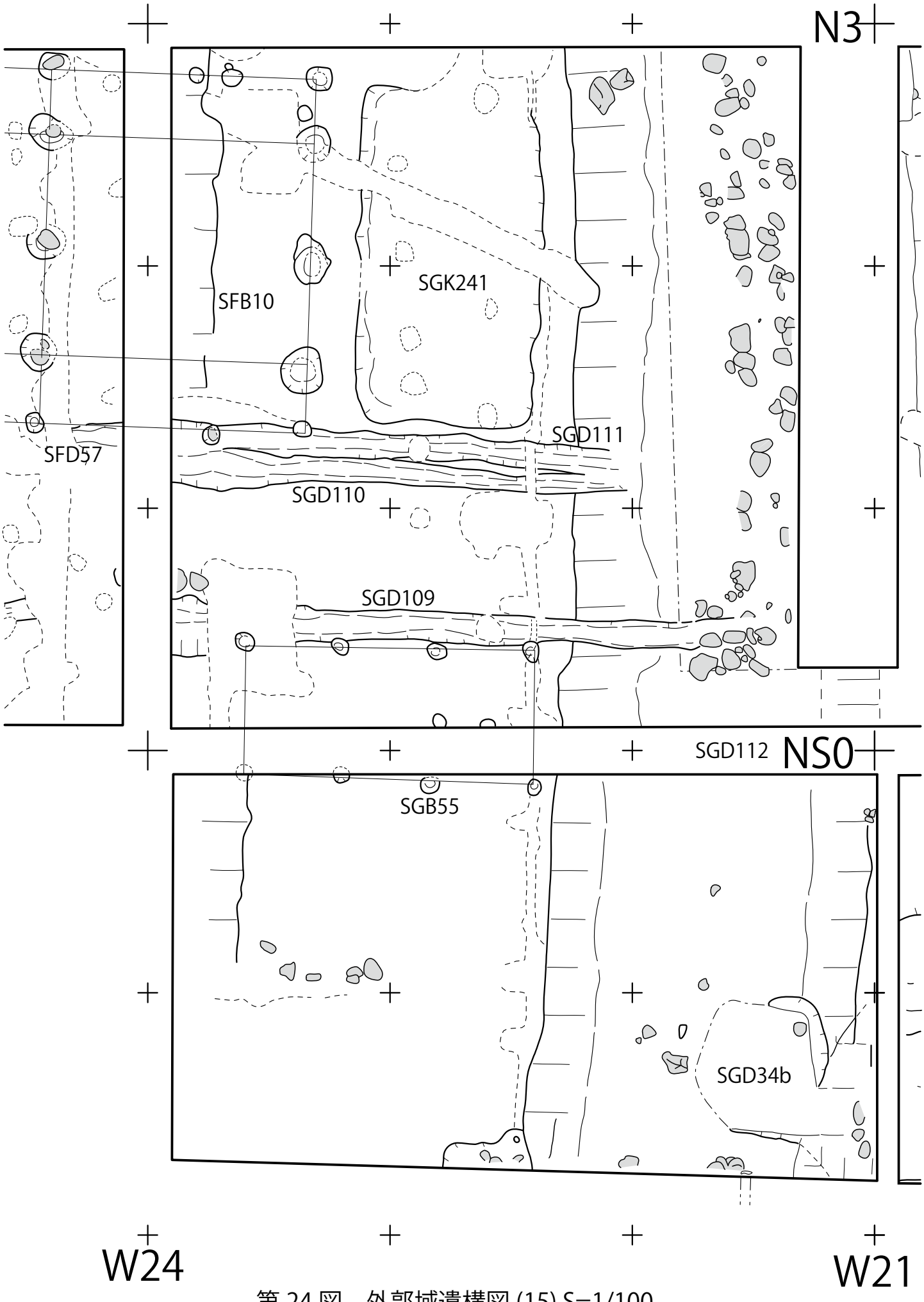
第 21 図　外郭域遺構図 (12) S=1/100



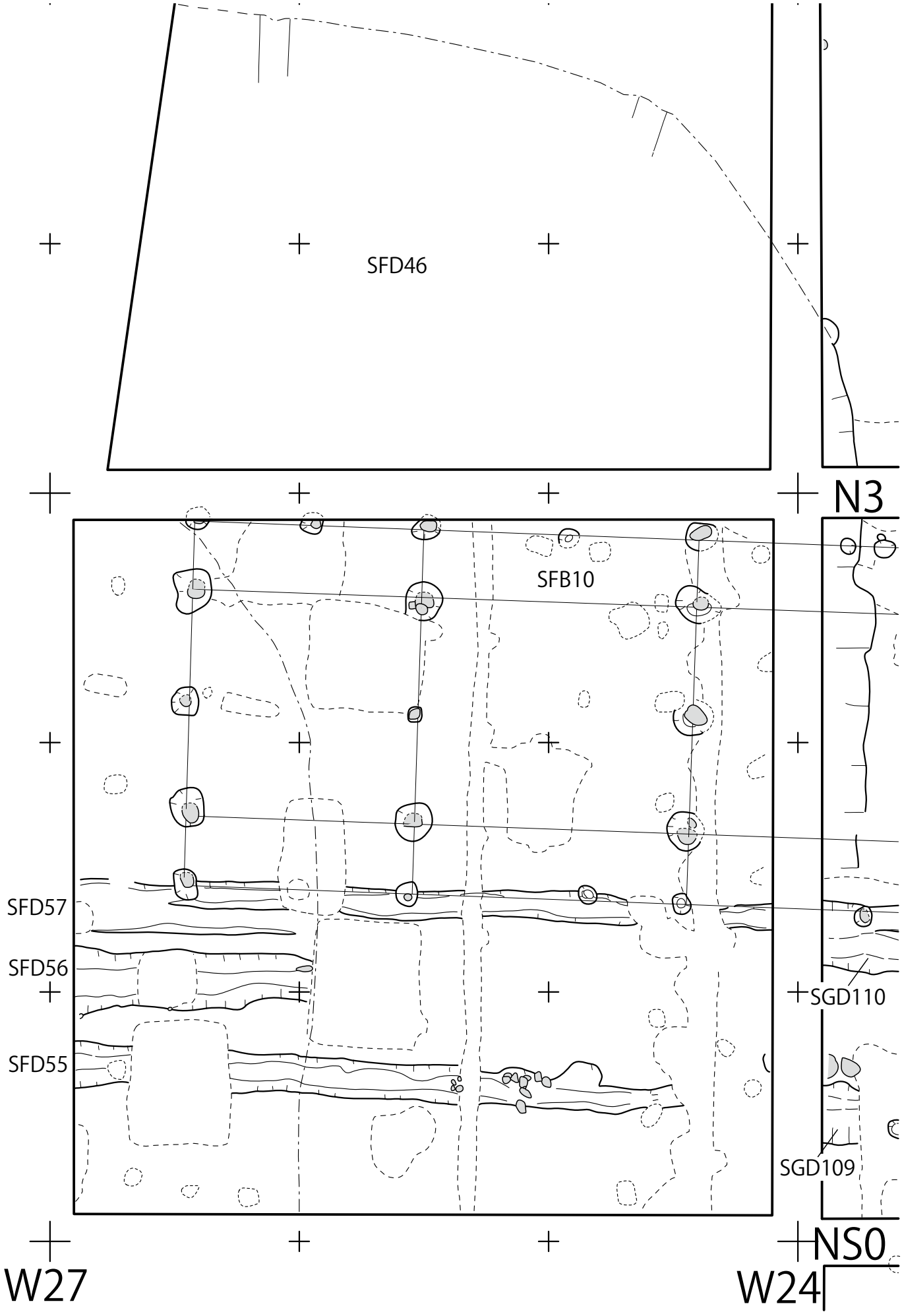
第 22 図　外郭域遺構図 (13) S=1/100



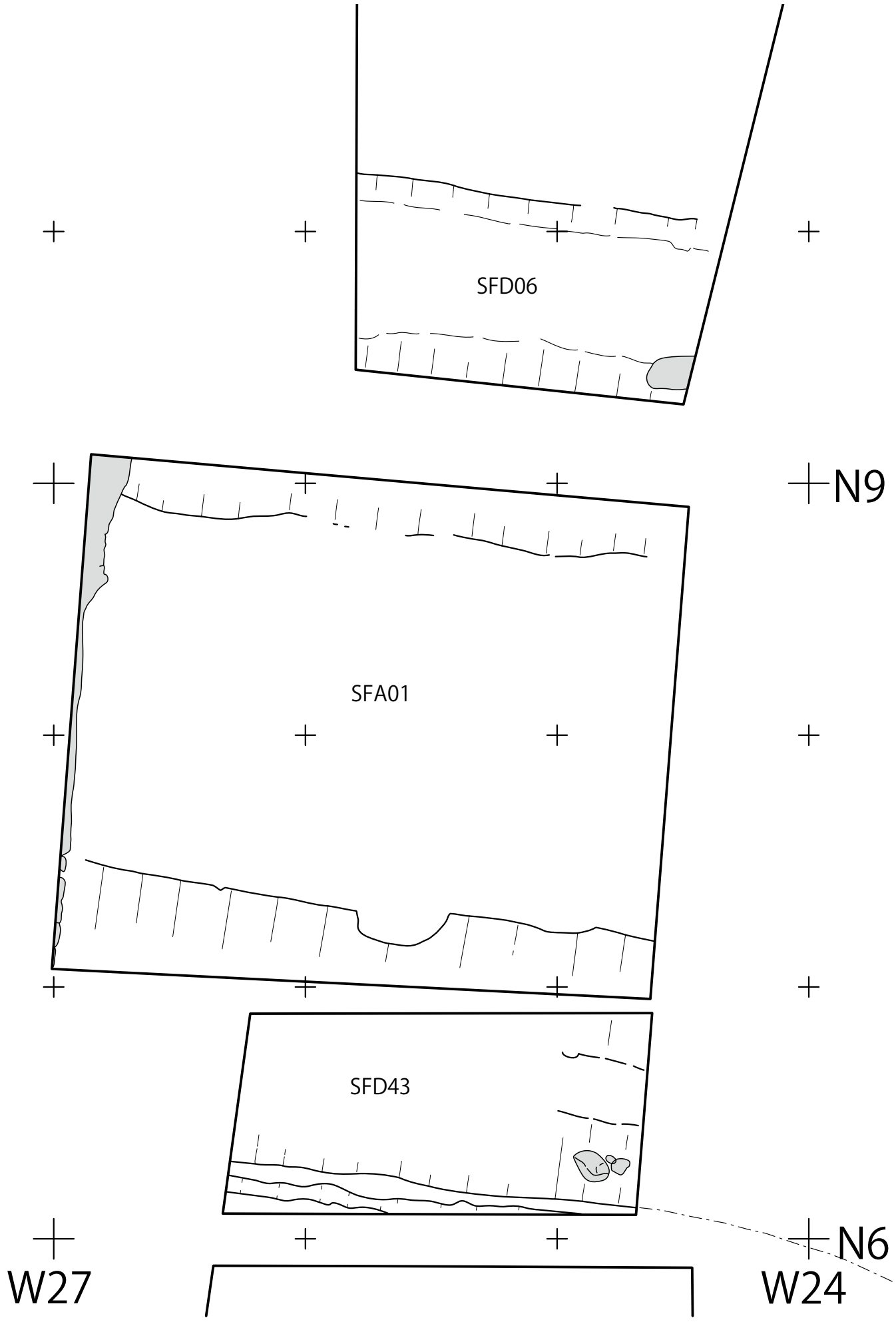
第 23 図　外郭域遺構図 (14) S=1/100



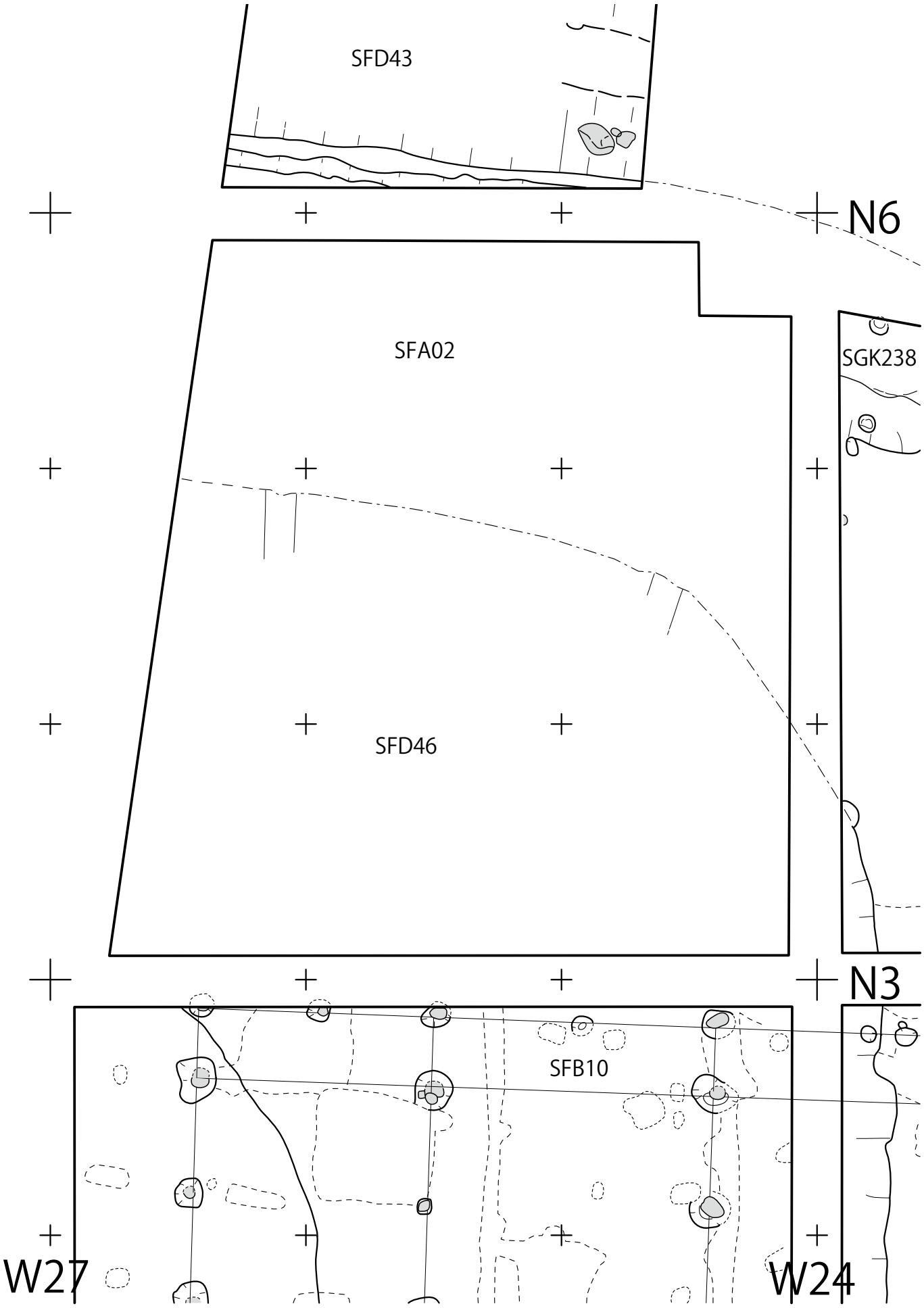
第 24 図　外郭域遺構図 (15) S=1/100



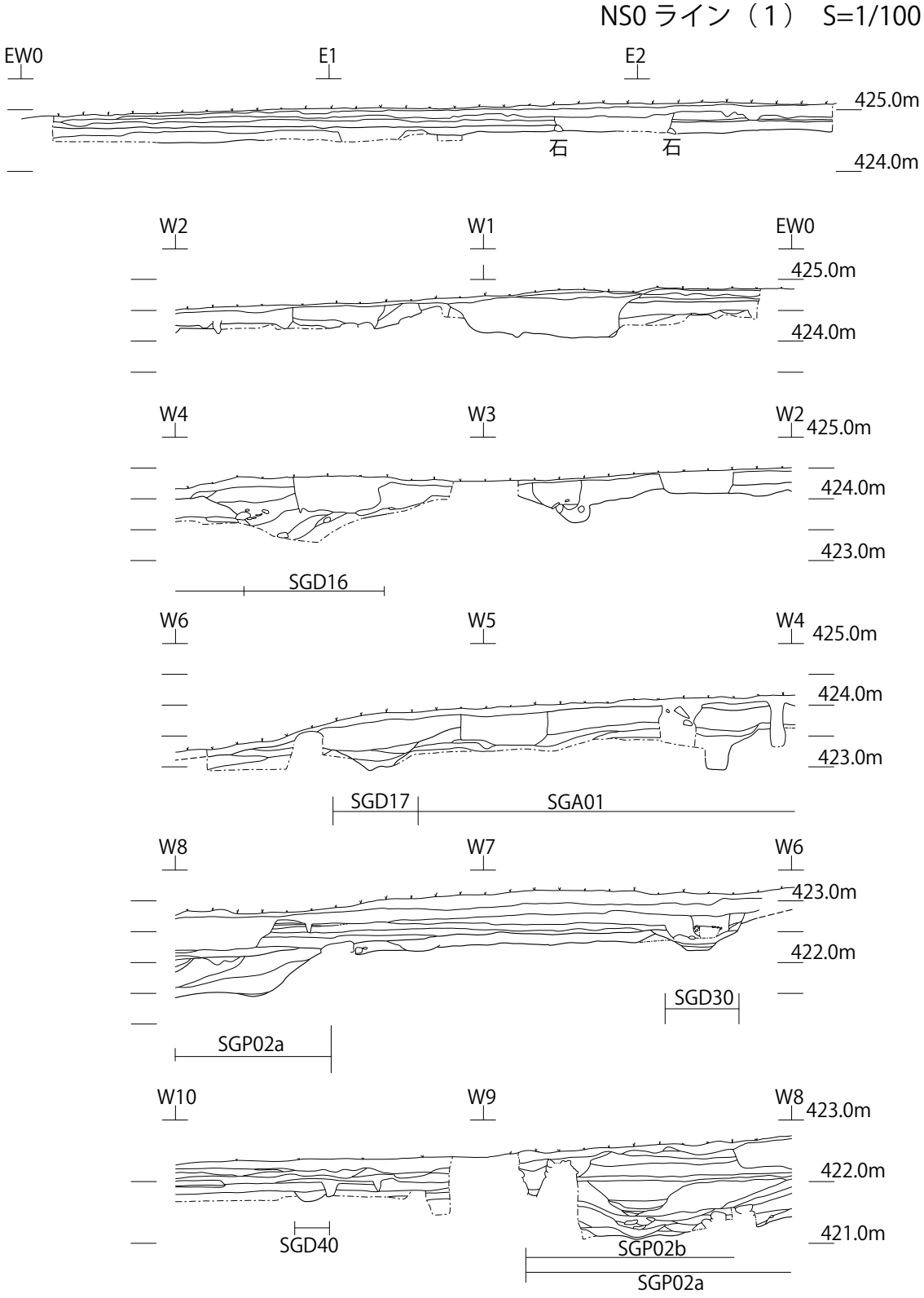
第 25 図　外郭域遺構図 (16) S=1/100



第 26 図　外郭域遺構図 (17) S=1/100

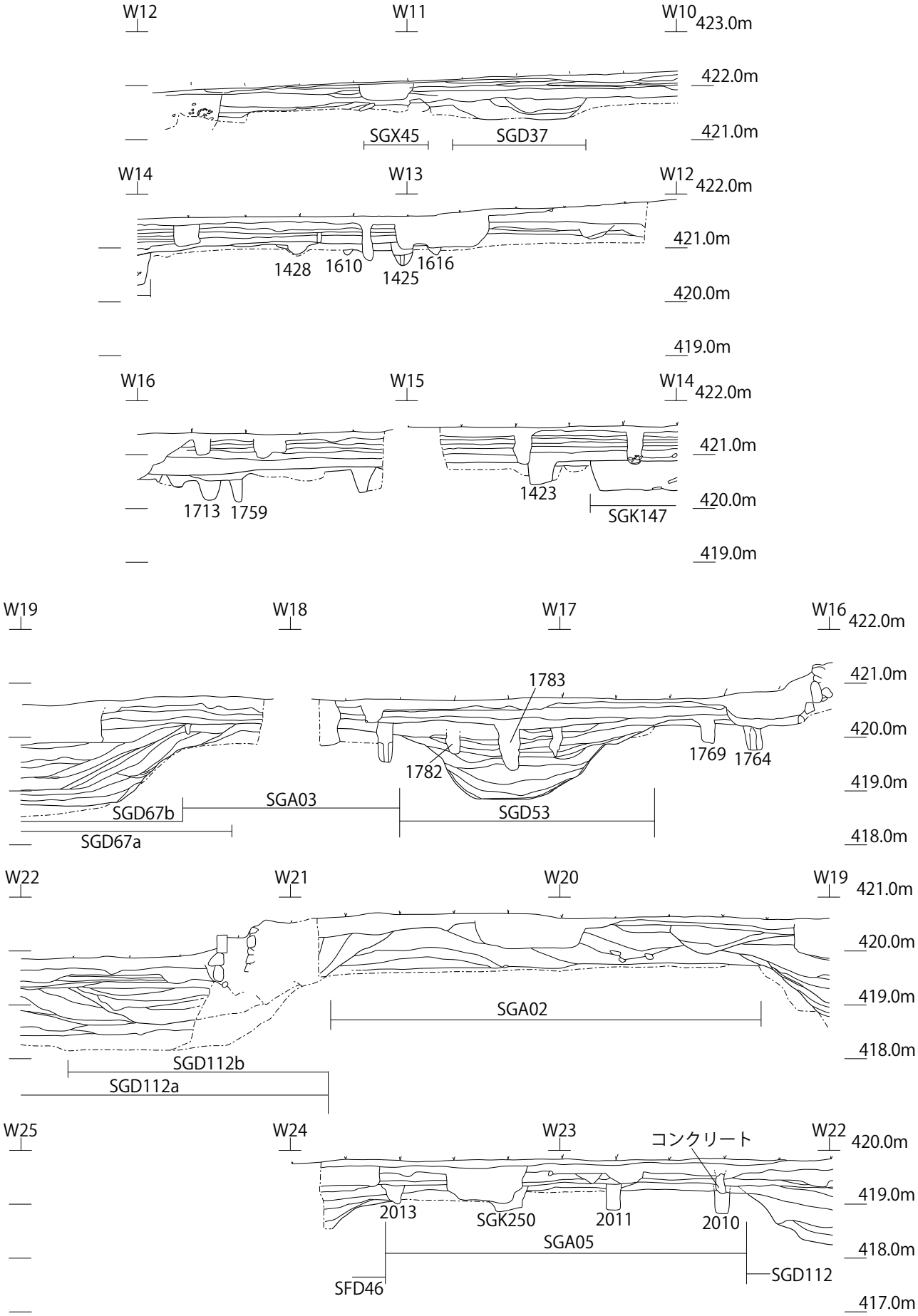


第 27 図　外郭域遺構図 (18) S=1/100

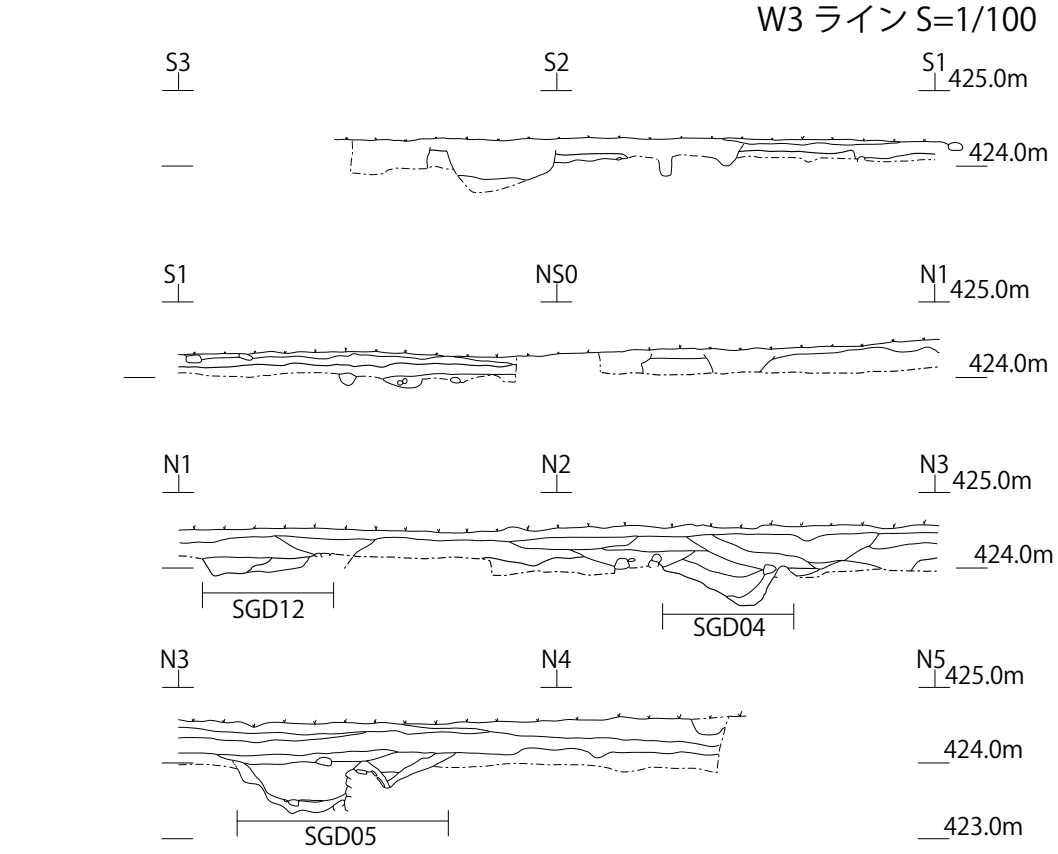


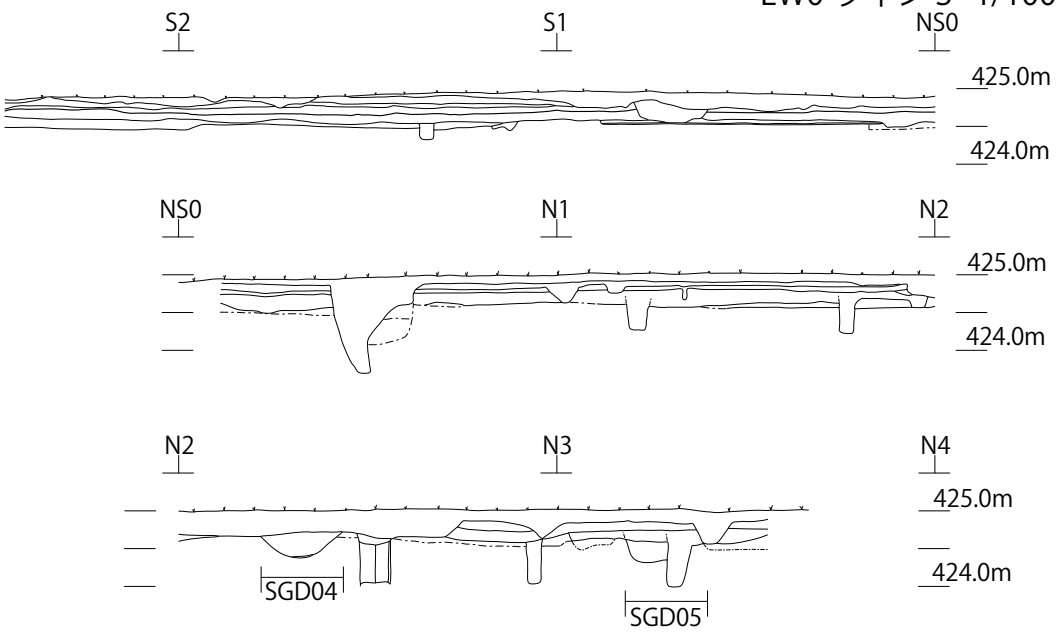
第 28 図　外郭域土層図 (1)

NS0 ライン（2）S=1/100

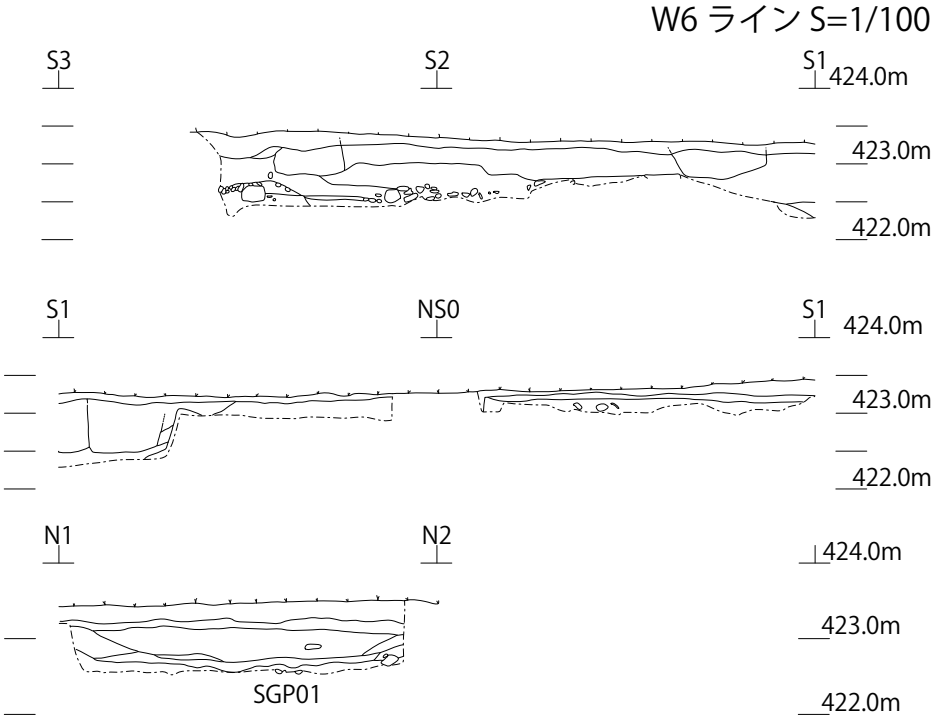


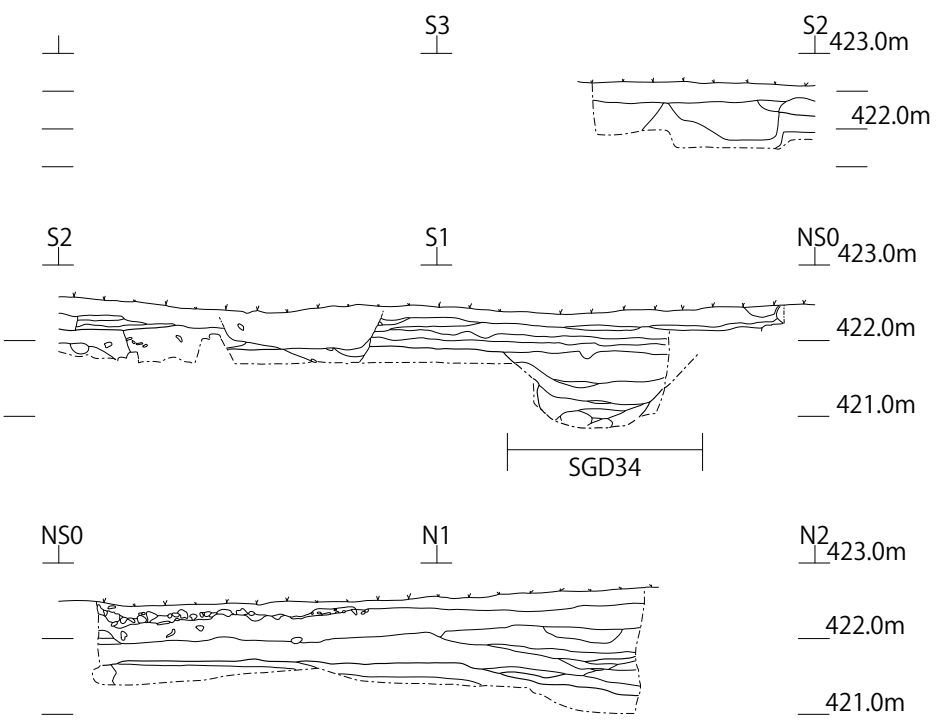
第 29 図　外郭域土層図 (2)





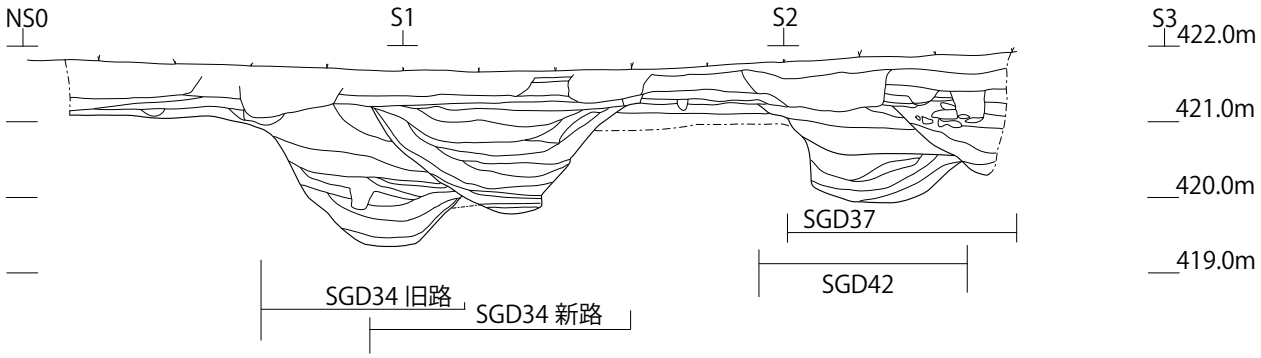
第 30 図　外郭域土層図 (3)



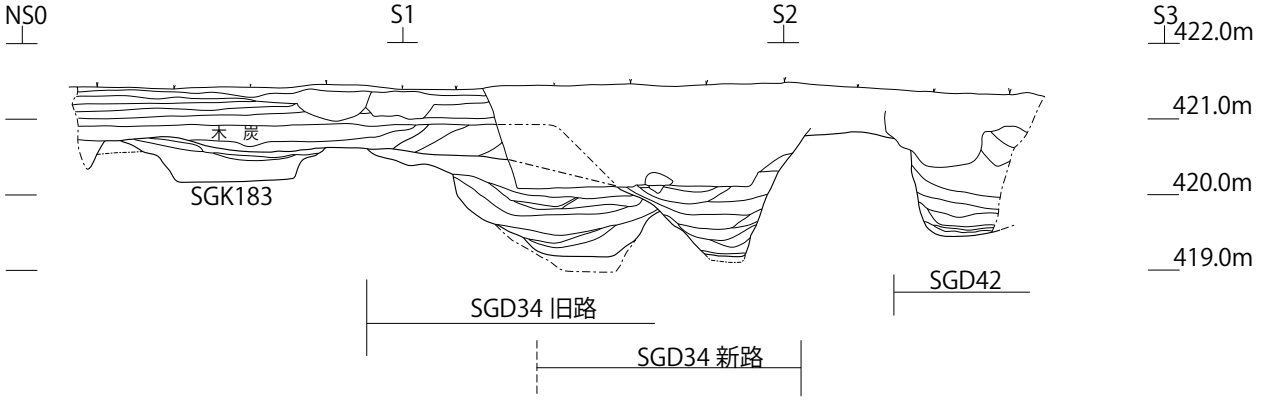


第 31 図　外郭域土層図 (4)

W12 ライン S=1/100

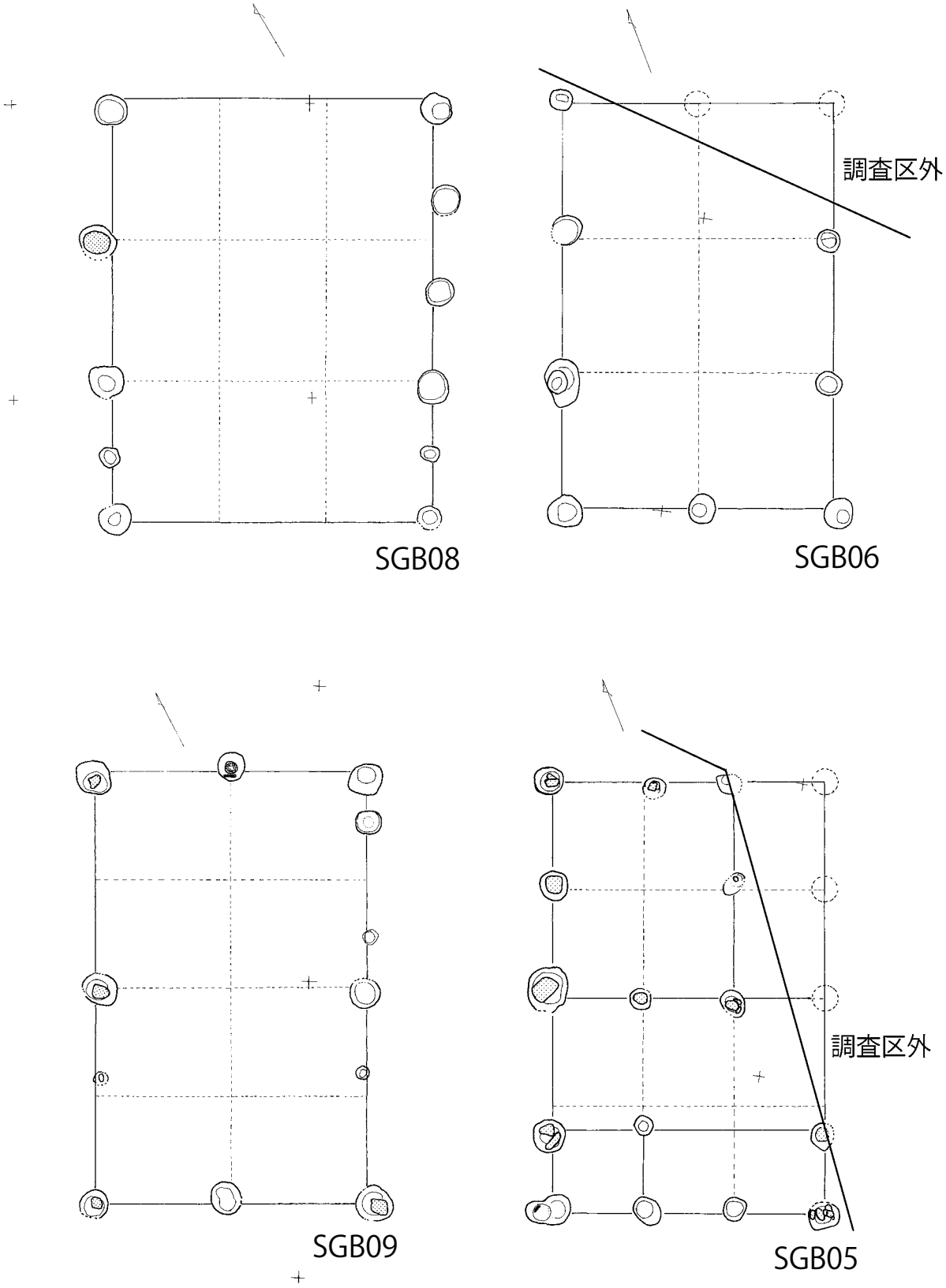


W15 ライン S=1/100



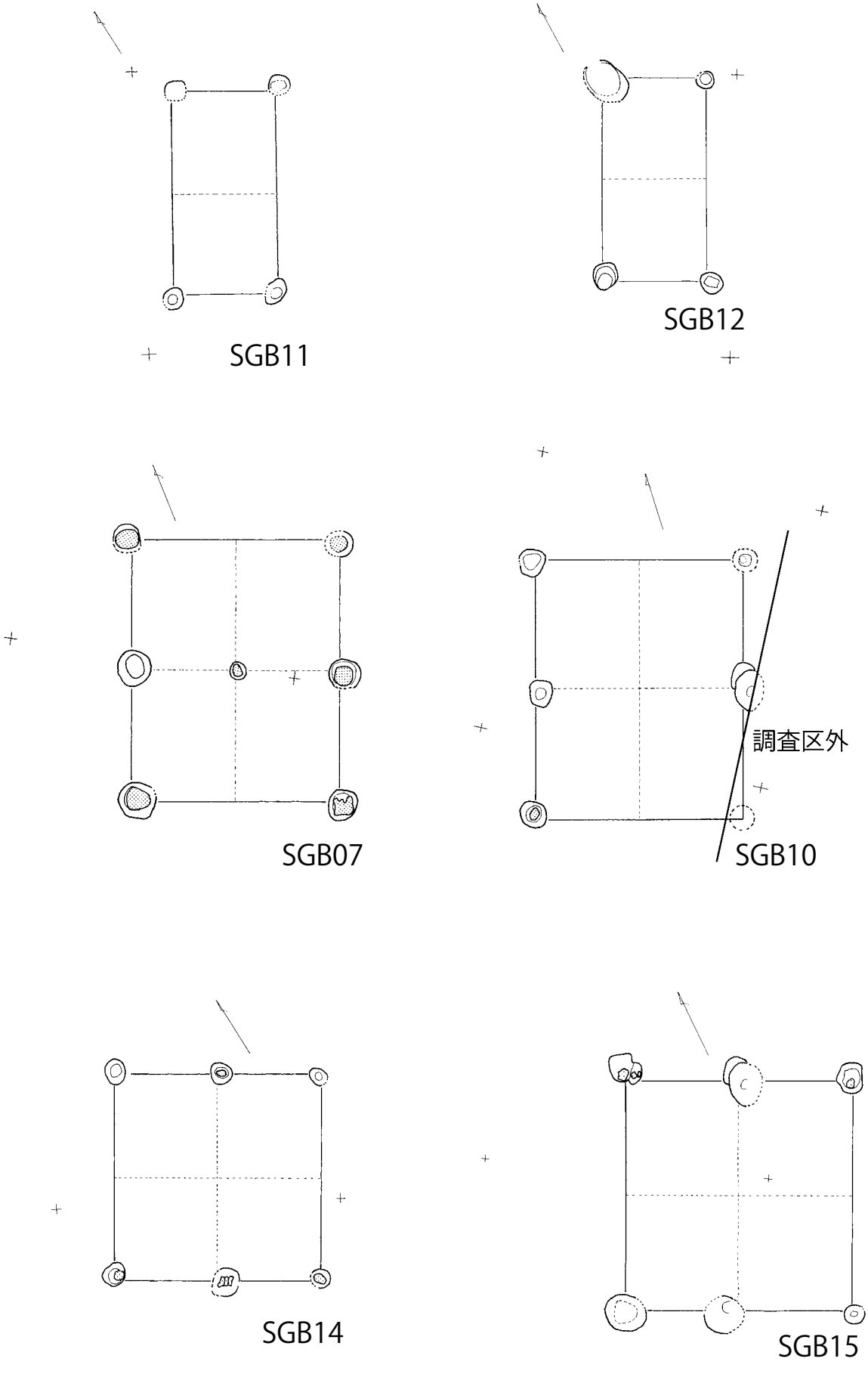
第 32 図　外郭域土層図 (5)

建物 A 群



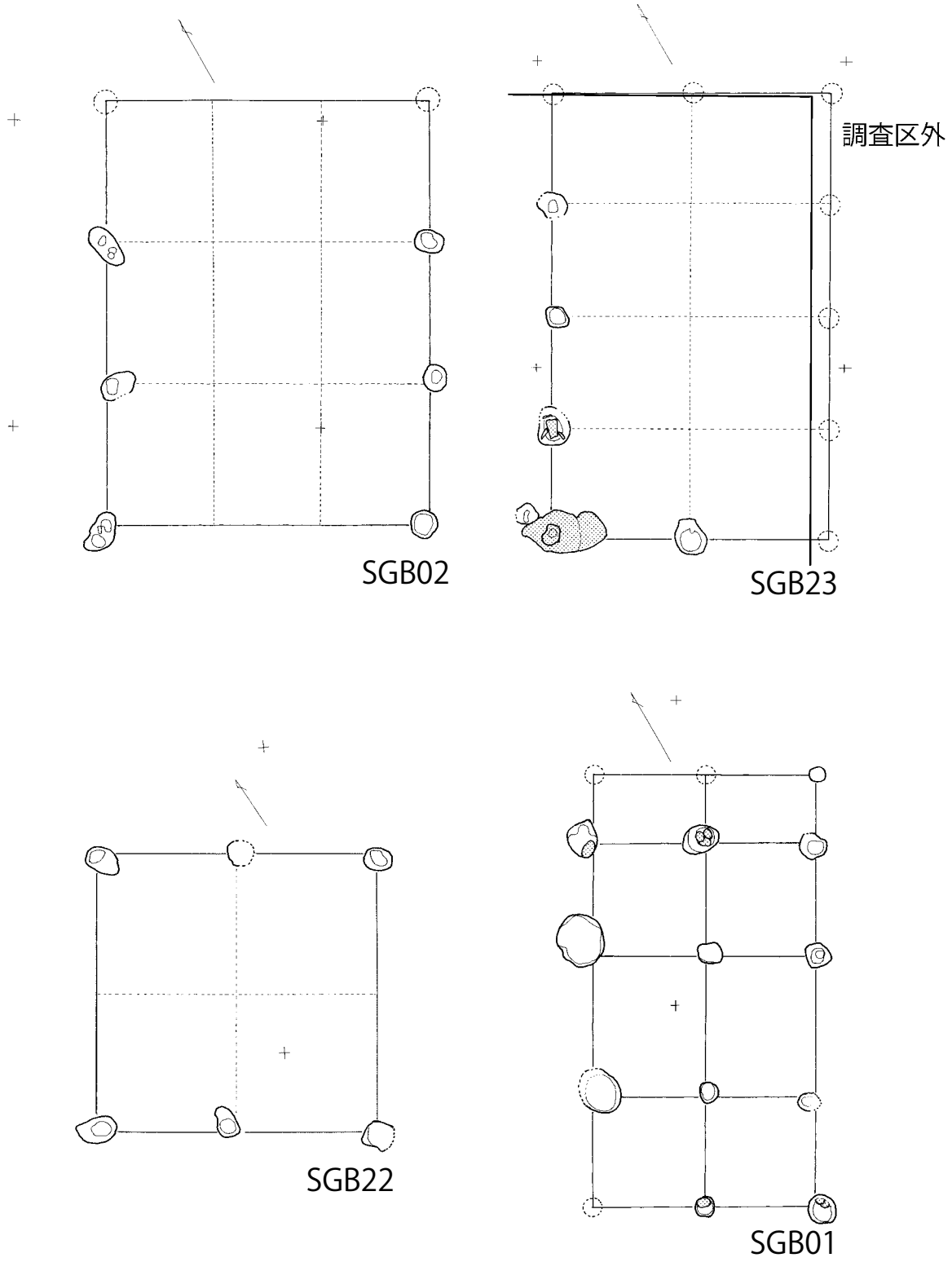
第 33 図　外郭建物遺構図　A 群 (1)

建物 A 群



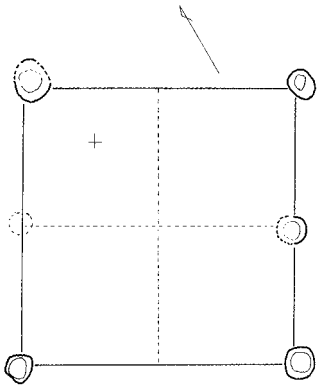
第 34 図　外郭建物遺構図　A 群 (2)

建物 B 群

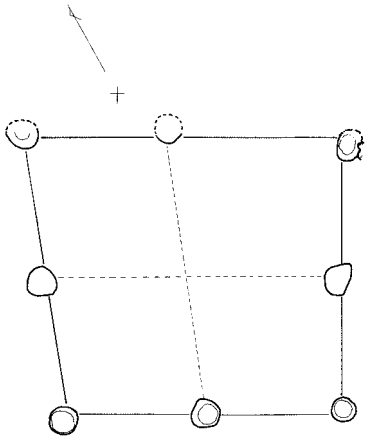


第 35 図　外郭建物遺構図　B 群

建物 C 群

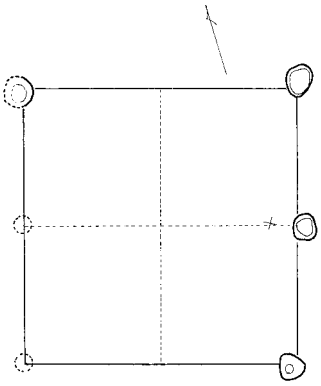


SGB26

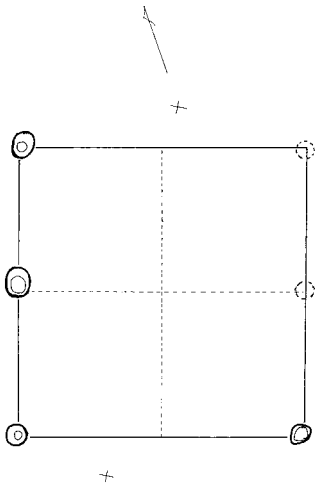


SGB27

建物 D 群



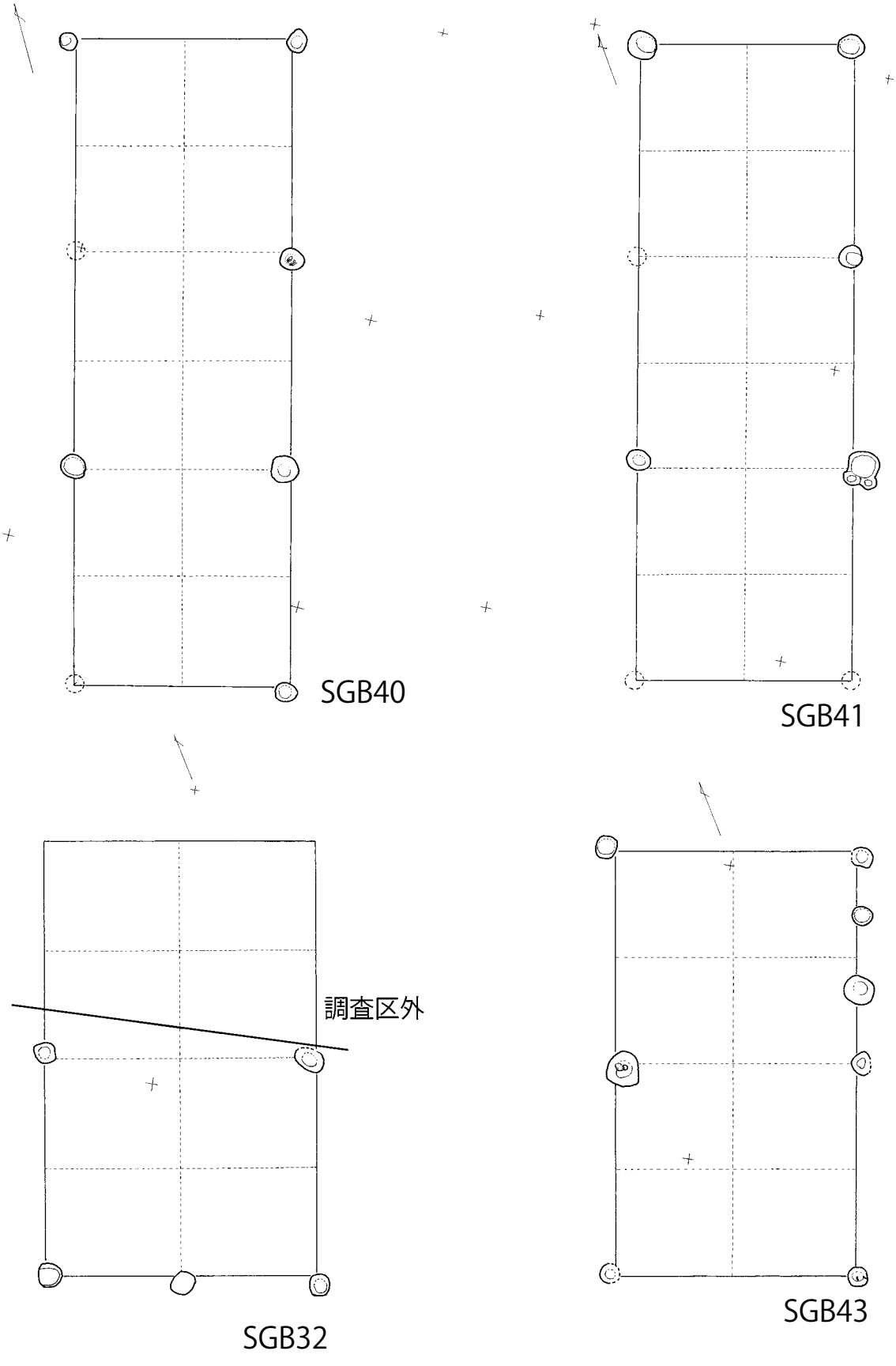
SGB29



SGB30

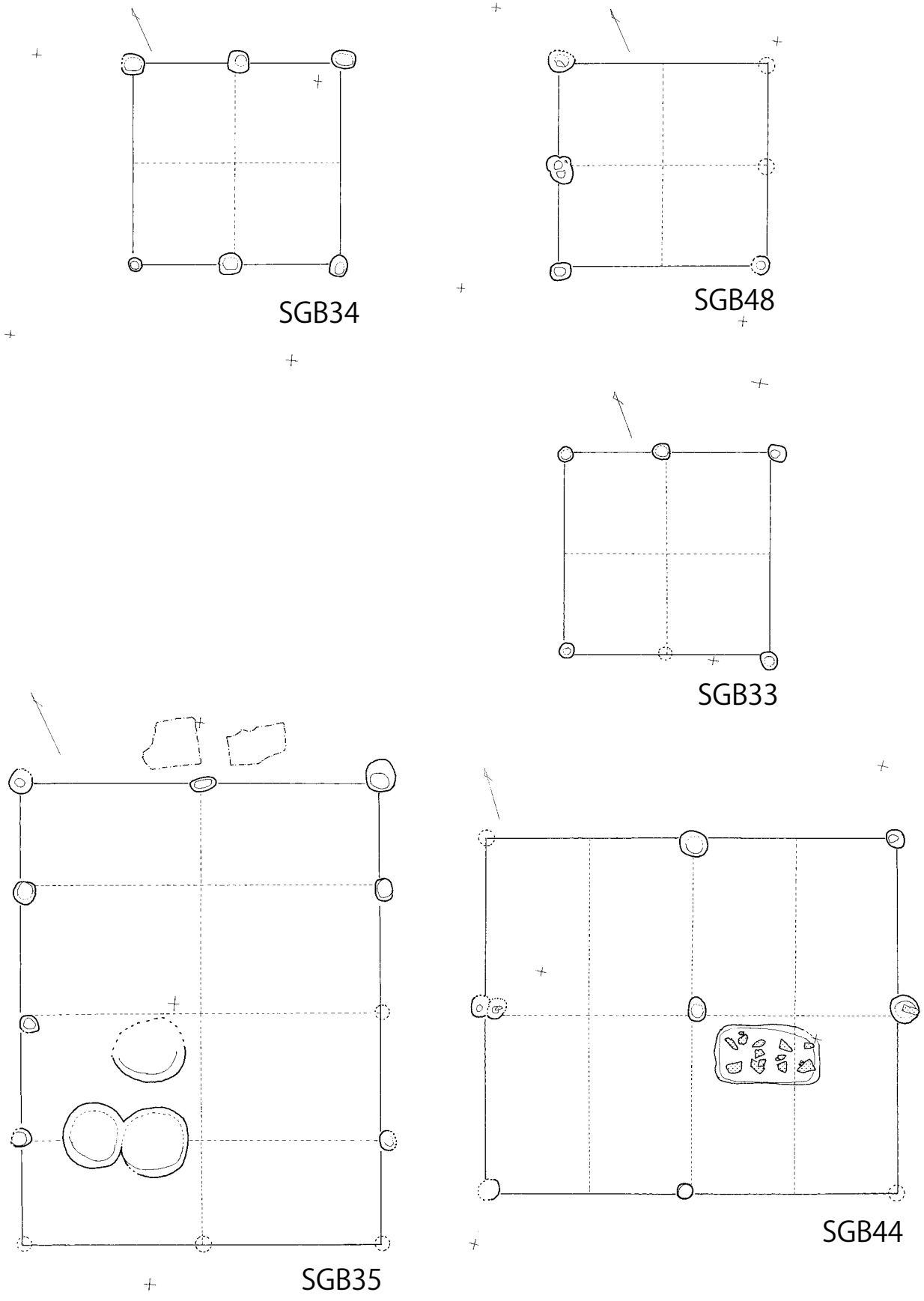
第 36 図　外郭建物遺構図　C 群・D 群

建物 E 群



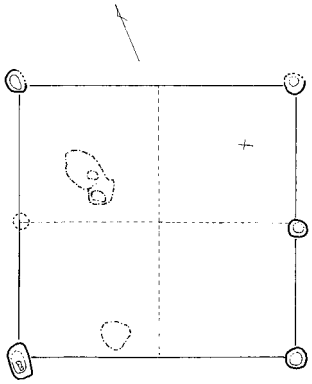
第 37 図　外郭建物遺構図　E 群 (1)

建物 E 群

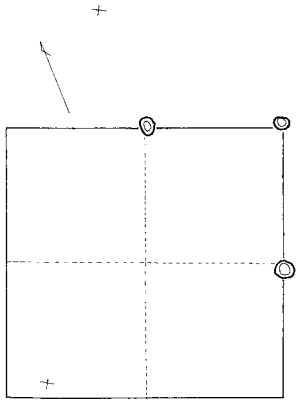


第 38 図　外郭建物遺構図　E 群 (2)

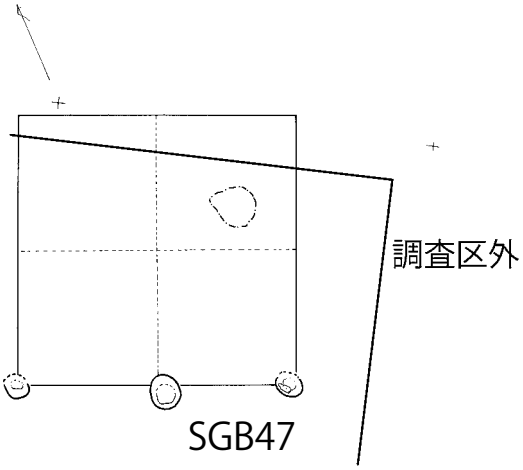
建物 E 群



SGB38



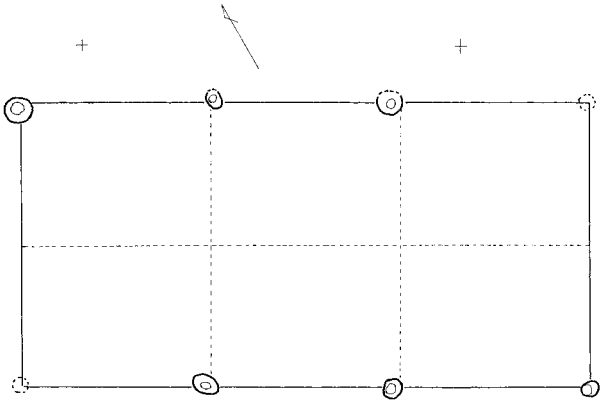
SGB46



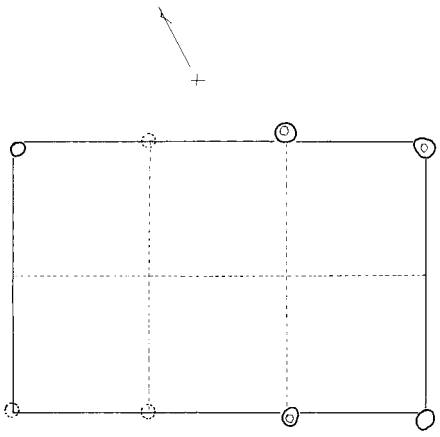
SGB47

調査区外

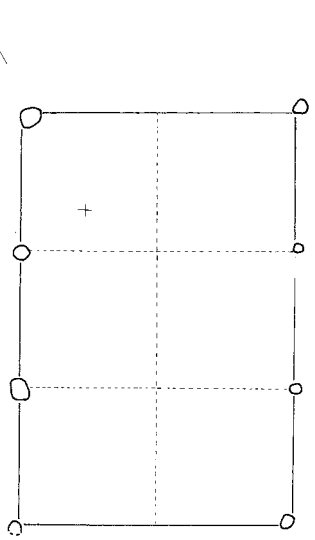
建物 F 群



SGB50



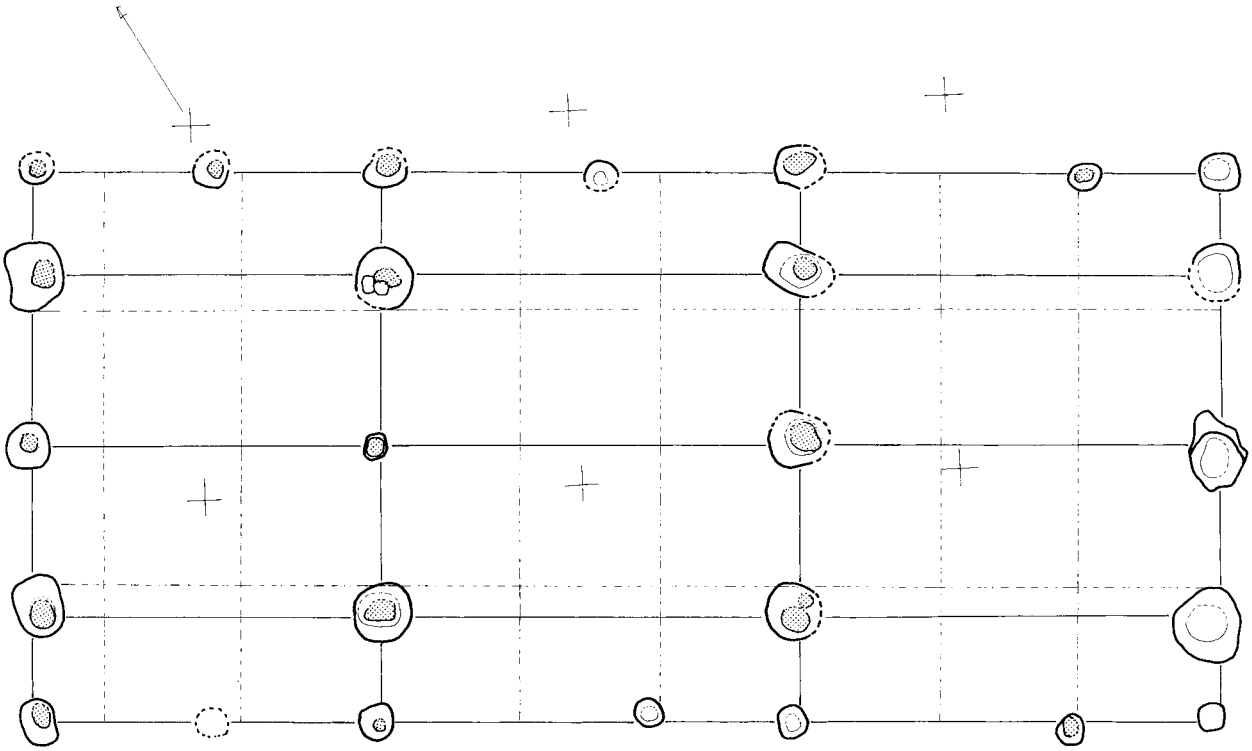
SGB49



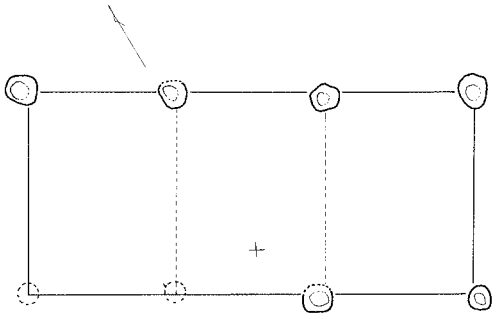
SGB51

第 39 図　外郭建物遺構図　E 群 (3)・F 群

建物 G 群

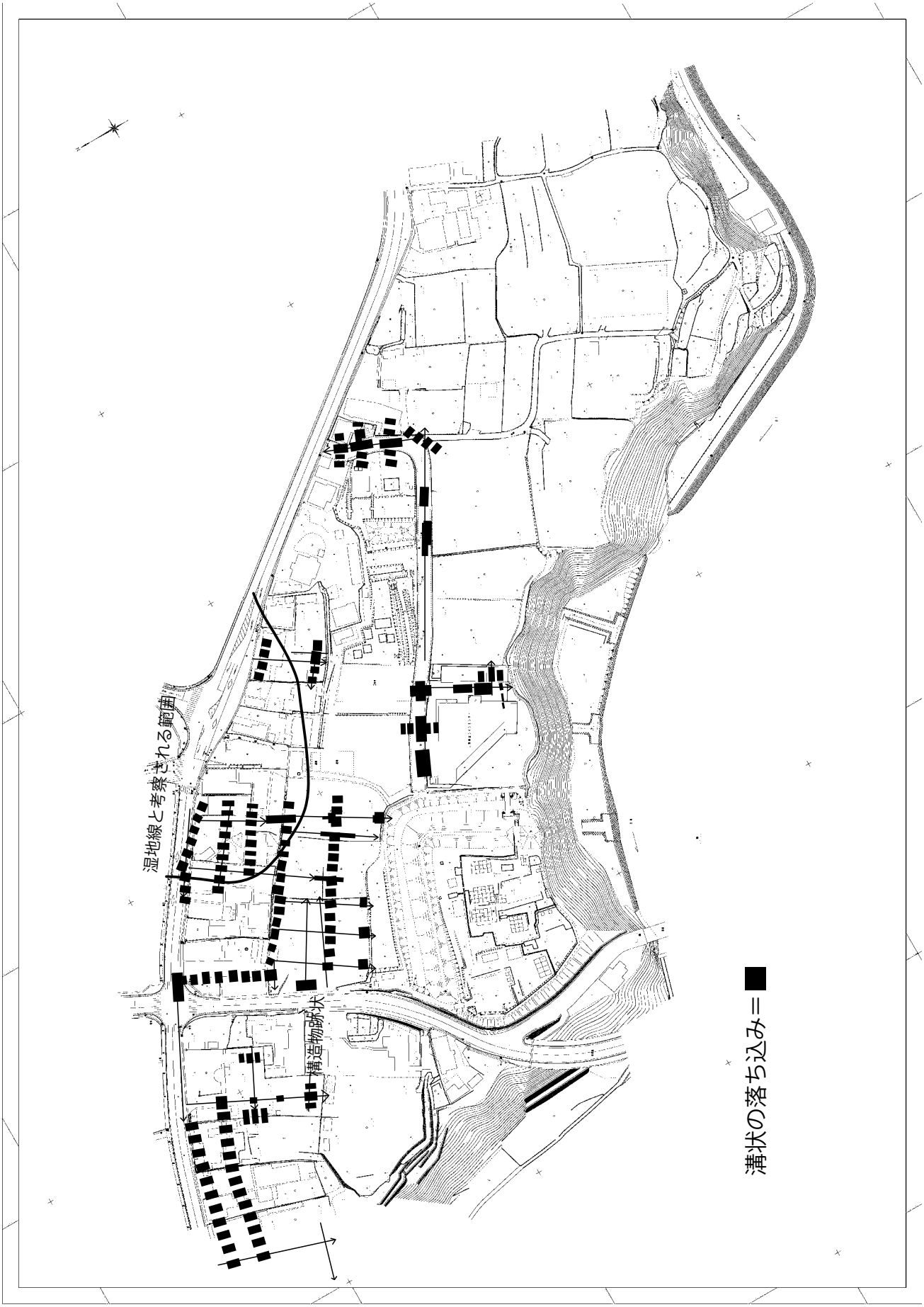


SFB10



SGB55

第 40 図　外郭建物遺構図　G 群



第 41 図　地中レーダー探査図

第 2 表　外郭域井戸遺構一覧表

遺構番号	調査区	グリッド	構造	掘方径 m	上部径 m	深さ m	底径 m	底部標高 m	出土遺物
SGE01	H6G	W1S3	石積	3.0	1.0	2.0	0.9	422.598	常滑
SGE02	H6G	W1S3	石積	2.0	0.7	1.5	0.6	422.923	土師質皿
SGE03	H9G	W15～W16N1	素掘り		1.5	1.3	0.6	419.800	砥石、木カス
SGK153	H10G	W17～W18NS0	素掘り		1.5	0.9	1.2	419.221	土師質皿
SGK156	H10G	W16～W17N1	素掘り		1.1	0.8	0.7	419.824	
SGE05	H11G	W16S2～S1	石積＋素掘り	4.5	1.1	4.2	0.7	416.244	木製品
SGE06	H11G		石積	4.4	1.3	2.0	1.1	418.500	木製品・骨片

第 3 表　外郭域建物遺構一覧表

遺構番号	調査区	建築群	規模		間数		廂(m)	内部柱	柱穴		備考
			桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行			規模	柱底	
SGB01	H4G	B群	5.9	3.6	3	2	1.2	有	中型		
SGB02	H4G・H6G	B群	(6.9)	5.2	(3)	1			中型		
SGB22	H4G・H6G	B群	(4.6)	4.6	(2)	1			中型		
SGB23	H4G・H6G	B群	(7.2)	4.6	(4)	2			中型	礎板石	瀬戸丸皿・銭
SGB05	H5G	A群	7.2	4.5	4	3		有	中型	礎板石	銭・環
SGB06	H5G	A群	6.8	4.5	3	2			中型		
SGB07	H5G	A群	4.6	3.6	2	1		有	中型	礎板石	初山窯擂鉢・染付
SGB08	H5G	A群	7.2	5.5	3	1			中型		焼成粘土塊
SGB09	H5G	A群	7.2	4.6	2	2			中型	礎板石	
SGB10	H5G	A群	4.6	3.6	2	1			中型		
SGB11	H5G	A群	3.6	1.8	1	1			小型		
SGB12	H5G	A群	3.6	1.8	1	1			小型	礎板石	
SGB14	H5G	A群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB15	H5G	A群	4.0	4.0	2	1			中型		
SGB26	H6G	C群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB27	H6G	C群	3.6	3.6	2	2			小型		
			4.2		2						
SGB29	H7G	D群	3.6	(3.6)	2	(1)			小型		銭
SGB30	H7G	D群	3.6	(3.6)	2	(1)			小型		
SGB32	H9G	E群	(7.8)	4.6	(2)	2			小型		
SGB33	H9G	E群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB34	H9G	E群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB35	H9G	E群	(8.4)	6.4	(3)	2			中型		土師質皿
SGB38	H9G	E群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB40	H9G	E群	10.8	3.6	3	1			小型		
SGB41	H9G	E群	10.8	3.3	3	1			小型		
SGB43	H9G	E群	7.2	4.4	2	1			小型		
SGB44	H9G	E群	7.3	6.0	2	2			中型		
SGB46	H10G	E群	(3.6)	(3.6)	(2)	(2)			小型		
SGB47	H10G	E群	3.6	3.6	2	(1)			小型		
SGB48	H11G	E群	3.6	3.6	2	1			小型		
SGB49	H11G	F群	5.4	3.6	3	1			小型		
SGB50	H11G	F群	5.4	3.6	3	1			小型		
SGB51	H12G	F群	5.4	3.6	3	1			小型		
SGB55	H13G・H14G	G群	6.0	2.7	3	1			小型		
SFB10	H13G・H16F	G群	15.6	4.6	3	2	1.4	有	大中小	礎板石	焼成粘土塊

第 4 表　外郭域塀遺構一覧表

遺構番号	調査区	長さ(m)	間数	方向	関連遺構
SGB03	H4G	3.6	2	東西	
SGB04	H5G	4.2	2	南北	SGB06
SGB17	H5G	3.6	2	東西	SGB03
SGB18	H5G	7.4	4	東西	
SGB19a	H5G	10.9	6	東西	
SGB19b	H5G	10.9	6	東西	
SGB21	H5G	3.6	2	南北	
SGB24	H5G	3.6	1	東西	SGB25？
SGB25	H6G	4.9	2	南北	
SGB28	H7G	20.1	(9)	南北	SGA01
SGB31	H7G	1.8	1	東西	
SGB32	H5G	2.0	1	南北	
SGB39	H9G	3.6	2	南北	SGB42
SGB42	H9G	5.5	3	南北	
SGB45	H10G	4.6	2	東西	SGB38

第 5 表　外郭域土壙・竪穴状遺構一覧表

種別	遺構番号	調査区	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	出土遺物
土壙	SGK118	H9G	W14S1～S2	円形擂鉢	0.70		0.24	砂礫、天目小片
土壙	SGK119	H9G	W14S1～S2	矩形直壁	3.00	2.40	0.68	かわらけ、灰釉
土壙	SGK120	H9G	W15S1	円形直壁	1.18		0.35	
土壙	SGK121	H9G	W15S1	円形直壁	1.15		0.59	
土壙	SGK122	H9G	W15S1	溝状船底	1.50	0.55	0.25	底部に粘土
土壙	SGK123	H9G	W15S1	円形直壁	1.20		0.40	
土壙	SGK129	H9G	W15S1	溝状船底	1.25	0.40	0.27	
土壙	SGK130	H9G	W14NS0	矩形船底	2.15	1.10	0.23	
土壙	SGK131	H9G	W14NS0	矩形船底	1.10	1.00	0.25	天目、常滑
土壙	SGK132	H9G	W14NS0	矩形船底	1.00	0.90	0.25	
土壙	SGK140	H9G	W15S1	矩形船底	1.50		0.70	
土壙	SGK141	H9G	W15S1	矩形船底	1.95	1.14	0.21	
土壙	SGK145	H9G	W15S1	円形擂鉢？	0.30		0.23	砂礫
土壙	SGK146	H9G	W15S1	円形擂鉢？	0.60		0.23	砂礫
土壙	SGK147	H9G	W15S1	矩形直壁	1.40	1.10	0.57	桶据石、内耳鍋
土壙	SGK148	H10G	W16～W17N3	矩形船底	3.40	1.00	0.20	礫、鉄滓
土壙	SGK184	H11G	W17S1	円形擂鉢	0.36		0.27	桶、かわらけ
竪穴状遺構	SGK241	H13G	W20N1～N2	矩形	6.80	3.70	0.49	古瀬戸卸皿
竪穴状遺構	SGK238	H13G	W26N6	矩形？	4.00	2.00	0.33	

第４章　遺物

第１節　焼物類

（１）土師質土器［第４２図～第４８図］

焼物類の大半を占めるのが土師質土器で、形状は香炉の脚部が１点あるのみで、ほとんどがカワラケとも呼ばれる皿である。皿は、轆轤成形で底部には糸切痕が明瞭に残り、胎土は赤褐色のものが多く金雲母、長石、チャート様の黒色粒を多く含んでおり、比較的焼成の良いものと悪いものとがある。大きさは、直径が20cm、13cm、10cm、7cm 前後のものがあり、それぞれ、特大、大、中、小と呼ぶこととする。大きさにかかわらず、ほぼ半数近いものの口縁周辺には油煙痕を見ることができ、用途のひとつが灯明皿であったことが分かる。底部から口縁部にかけての立ち上がりの形状から中型以上についてはＡ類からＤ類に大きく分けることができるが、小型については、微妙な指使いで変化しやすく、共伴関係でその組み合わせを示した。

土師質皿Ａ類　［第４８図下段］　底部からくぼみ気味に立ち上がり、以後は直線的に丸みを帯びた口縁部になるもので、底部の糸切りは丁寧で、胎土は灰褐色気味のものが多く、胎土中には金雲母とチャート様の黒色粒とやや少なめの長石粒が含まれ、焼きは緻密なものが多く、大きさは特大、大、中、小の４規格がある。

土師質皿Ｂ類　［第４８図下段］　底部からくぼみ気味に立ち上がり、口縁部の直前でさらに１段のくぼみを有し、内部も外面のくぼみに対応したくぼみを有することから、口縁部はやや厚めの玉状口縁を特色とし、胎土は赤褐色気味ものものが多く、胎土中には金雲母、長石粒が多量に含まれ、焼成の悪いものも多い。発見された土師質皿の多くがこの類に含まれ、口径は特大、大、中、小の４規格が見られるが特大は量的に少ない。

土師質皿Ｃ類　［第４８図下段］　底部から直線的に立ち上がり、口縁部近くでやや外反気味となり、口縁部からの強いナデにより薄くやや尖り気味で、胎土は赤褐色で、胎土中にやや少なめな金雲母、長石粒を含む、焼成は良く全体的にＢ類に比べ薄手である。口径は大と少の２規格が見られるが、出土量は少ない。

土師質皿Ｄ類　［第４８図下段］　底部から直線的に立ち上がり口縁部の直前でくぼみ、玉縁口縁を形づくるもので、内部は底部の立ち上がり部と口縁の直前の２条のくぼみが巡る。胎土は灰褐色から赤褐色で金雲母・長石粒を含み比較的焼成は良い。

Ａ類は、堀ＳＧＤ６７・ＳＧＤ５６から主に見出され、Ｂ類は水路ＳＧＤ３４旧路、ＳＧＤ３４新路さらに水路ＳＤＧ０５および水路ＳＧＤ０４の埋め立て層から見出される。Ｃ類は水路ＳＧＤ３７および水田直下層から見出され、Ｄ類はＢ類と共に見出されたことからＢ類の製作過程で生じた変種である可能性も考えられる。

（２）瓦質土器［第４９図～第５７図］

瓦質鍋　［第４９図～第５０図］

瓦質鍋は、その形状や胎土の違いから３類に分けることができる。

瓦質鍋Ａ類　［第４９図１・２］　底径 14cm、高さ 10cm、口径 26cm の底部から垂直気味に立ち上げながらも大きく外反させた浅鉢型を基本形態とし、口縁の２ないし３箇所を内側に折り曲げ、その外側に鍋吊取手を掛ける角状の突起を取り付け、さらに口縁の一部をW字型に曲げ片口としたもので、完全に復元できる資料が検出されておらず全体形状は明らかになっていない。底部には板目痕が残り、内面にはロクロ回転によるナデが丁寧に施され、外面の口唇から 2cm くらいまでがロクロナデで以下は指頭痕が残る荒仕上げである。胎土は灰褐色で、1.5cm ほどと器壁が厚いためか、焼成むらにより断面の内外側が明灰褐色で中央部が暗灰褐色のサンドイッチ構造の破断面が観察されたものが多い。胎土中には金雲母、長石、チャート状黒色粒が含まれ、粒子が細かく土師質皿Ａ類の胎土に近い。１は堀ＳＧＤ５６から、２は水路ＳＧＤ０４から

検出された。

瓦質鍋Ｂ類　胎土が赤褐色でＡ類と同じく浅鉢型を基本としているが、吊り手などの取り付け装置をもたないものをＢ類とした。さらに底部から外反気味に立ち上がるものをＢ－１類、内湾気味に立ち上がるものをＢ－２類とする。

瓦質鍋Ｂ－１類　［第５０図１・２］　底径 14 ～ 15cm、高さ 9cm、口径 19 ～ 22cm で底部から垂直気味に立ち上がり、わずかに外反し、口縁には１箇所片口が付けられる浅桶型の鍋。胎土は灰褐色から赤褐色で、金雲母･長石･チャート状の黒色粒を含み、器壁は 1.2cm 前後で破断面にはＡ類のような焼むらが見られない。底部には板目痕が残り、内面はロクロナデ、外面は口唇から 2cm ほどがロクロナデ、以下底部までは荒仕上げである。１は水路ＳＧＤ３４旧路から、２は井戸ＳＧＥ０６の北側初期層面から石臼［第７１図２］と共に検出された。

瓦質鍋Ｂ－２類　［第５０図３］　底径 15cm、高さ 6.5cm、口径 19cm で、底部から内湾気味に口縁が立ち上がる。１例しかなく特色は明確でないが、胎土は赤褐色で、金雲母・長石粒を含み、口縁部の内外 2cm ほどがロクロナデで他は荒仕上げで指頭痕が残る。水路ＳＧＤ３４旧路から検出された。

瓦質鍋Ｃ類　［第５０図４・５］　底径 20 ～ 22cm、高さ 15 ～ 17cm、口径 26 ～ 29cm で、底は 0.5cm 前後で薄く、底部から垂直に立ち上がり、口縁の外側 5cm ほどがやや膨らみ気味に整形され、この部分の内側２箇所に鍋吊を取り付ける輪が付くいわゆる筒型内耳鍋で、口縁内側が滑らかなものと数条の条線が巡るものがある。胎土は茶褐色ないし暗茶褐色で、長石を主体とした砂粒分が多く焼成は良い。底部は砂目で内面は内面および外面の口唇から 5cm の膨らみぎみの範囲はロクロナデで以下は荒い仕上げである。４は水路ＳＧＤ３４新路から、５は据桶土壙ＳＧＫ１４７の上部から検出された。

瓦質鍋Ａ類は内郭部の第１期面からも検出されており、堀ＳＧＤ６７、堀ＳＧＤ５６、水路ＳＧＤ０４などから主に検出され、Ｂ類は堀ＳＧＤ５６、水路ＳＧＤ３４旧路から検出され、Ｃ類は水路ＳＧＤ３４新路、井戸ＳＧＥ０１の西側、堀ＳＦＤ４６の上部東郭内屋敷の整地層などから破片が検出される。形態や製作技術から瓦質鍋Ａ類からＢ－１類、Ｂ－２類へと変化したと考えられるが、Ｃ類は形状や胎土、焼成技術などがまったく異なっており、水路ＳＧＤ 34 新路以降にＡ・Ｂ類に替わり新たに使用が始まった器種と考えられる。

瓦質火鉢　［第５１図］

口縁が内湾し、底部に脚をもつもので、形状を復元できるものは見出されていない。胴部の内湾曲形状や、口縁部外側に施された菊印花紋の有無などにより以下のように分類される。

瓦質火鉢Ａ類　［第５１図１］　口径 32cm、胴部最大径 34cm で、口縁部が屈曲するように内湾し、屈曲部と口唇の間に菊印花紋が一条巡り、屈曲部の内側は段を成し、クボミ線を形成する。胎土は暗灰褐色で内面は煤で黒変しており、器面は内外ともに丁寧なロクロナデが行われている。脚部は不明であるが、色調の似た面取りを施したものが検出されている。堀ＳＧＤ５６から検出された。

瓦質火鉢Ｂ類　［第５１図２］　口径 33cm、胴部最大径 36cm、高さ 12cm で、胴部は外反気味に立ち上がり、口唇部の手前 2cm ほどの箇所から内湾曲する。湾曲部と口唇の間に菊印花紋が一条巡る。胎土は明茶褐色で、金雲母、チャート状の黒色粒子を含み、内面には煤の付着がみられる。器肉は 1.3cm と厚く破断面には中心部が暗灰褐色となる焼成ムラがみられる。内面の調整は丁寧で、外面は湾曲部までロクロナデで、以下底部までは指頭痕の残る荒仕上げで底部には板目痕が残る。脚部は不明であるが、色調が類似した指頭痕が残る円弧条の脚部が検出されている。水路ＳＧＤ０４の底部から検出された。

瓦質火鉢Ｃ類　［第５１図３］　口径 32cm、胴部最大径 35cm、高さ 10cm で、胴部形状はＢ類に近いが、高さが低く、口縁部外側に菊印花紋を伴わない。胎土は明茶褐色で緻密、金雲母を含み、破断面は中心部が暗灰褐色のサンドイッチ状で、器面内側は丁寧なロクロナデ、外面は湾曲部までロクロナデ、以下底部までは指頭痕の残る荒仕上げで、底部には布目圧痕が残る、脚部は不明であるが、取り付け部の成形状況からＢ

類と同じく、指頭痕が残る円弧状の脚が付されていたと考えられる。水路ＳＧＤ３４新路と水路ＳＧＤ３７から検出された。

瓦質擂鉢は遺構からも、Ａ類の口縁部が屈曲しスタンプ紋を有する灰褐色のものから、Ｂ類の口縁部が湾曲しスタンプ紋を有する明茶褐色のもの、Ｃ類の口縁部が湾曲し無紋の明茶褐色ものへと推移したと考えられる。

瓦質擂鉢［第５２図～第５６図］

浅鉢型で内面に放射状（１６区分）に櫛歯条線（６条から１０条）の卸目が施され、口唇部に１箇所片口が付く。内面底部から胴部への屈曲部付近はいずれのものも著しい磨耗がみられ、内面にオコゲ状付着物があるものや外面に煤が付着したもの、加熱により胎土が剥離したものも見られる。口縁部の断面形状の違いから以下のように分類される。

瓦質擂鉢Ａ類［第５２図１］ 外反気味に立ち上った胴部が、口唇の直前に折れ曲がり、丸みを帯びた口唇部を形成するもので、胎土表面は黒褐色で金雲母、長石粒を僅かに含み、破断面は灰白色と暗灰褐色のサンドイッチ状を呈す。口縁部破片１例のみで形状等は明確でない。

瓦質擂鉢Ｂ類［第５２図２～４、第５３図１、第５４図１］ 口唇部が平らないしくぼみを帯びたもので、平坦な口唇が外傾気味で外側が突出するもの、水平で内外がわずかに突出するもの、内傾気味で内側が突出するものなどがある。口径 29cm ～ 31cm、高さ 8.5cm ～ 11cm　底径 13.5cm ～ 15cm を測り、胎土は赤褐色で金雲母・長石・チャート状黒色粒を含み、破断面はサンドイッチ状を呈するものが多い。

瓦質擂鉢Ｃ類［第５５図１、第５６図１～３］ 口唇部が丸みを帯びたもので、僅かに内側が突出したもの、丸みを帯たコの字状のもの、口唇部が内傾し尖り気味に見えるものなどがある。胎土は赤褐色で金雲母・長石粒を含む。口径 30cm、高さ 9cm、底径 14 ～ 15cm を測る。

瓦質擂鉢Ａ類［第５２図１］は堀ＳＧＤ５６から検出され、Ｂ類は堀ＳＧＤ５６［第５２図３］、水路ＳＧＤ０４［第５２図２・４］さらに水路ＳＧＤ３４旧路［第５３図１、第５４図１］などから検出され、Ｃ類は堀ＳＧＤ５６の埋め立て層［第５６図３］、水路ＳＧＤ３４［第５６図１・２］、水路ＳＧＤ０４の埋め立て層［第５５図１］などから検出される。Ａ類からＢ類、Ｃ類の順で変化したと考えられるが、水路ＳＧＤ３４ではＢ類もＣ類も共に出土しており、遺構的に瓦質擂鉢の変化を明確にすることはできない。

その他器種［第５７図］

瓦質湯沸し器［第５７図１］ 水路ＳＧＤ３４旧路内から１点検出されている。口径 13.5cm、胴部最大径 14.5cm、底部を欠失しているが、推定高 16cm で壺型の頸部２箇所に釣手を取り付ける環と火受けの鍔が付されており、底部は欠損後、破断面を磨りならし、釣手取り付け装置の直下に２箇所に孔が開けられている。胎土は茶褐色で金雲母・長石粒を含み、内外面とも丁寧なロクロナデが行われているが外面胴下半部には熱剥離痕と多量の煤、内面は茶渋に似た付着物が見られる。外郭域では、この一点以外に破片資料も無く、湯沸しとして工房周辺で使用されたものではなく、破損後ゴトクなどの代用品として持ち込まれた可能性が考えられる。

（３）国産陶器

常滑焼［第５８図～第５９図］

常滑焼は甕類のみで他の器種は検出されていない。

常滑甕Ａ類［第５８図１］ 頸部は垂直ぎみに立ち上がり、大きく外反し幅 2.3cm のＮ字状口縁を形づくる。胎土は赤褐色で砂粒分を多く含む。堀ＳＧＤ６７より検出された１例があるのみである。

常滑甕Ｂ類［第５８図２］ 頸部がやや厚くなり内傾気味に立ち上がり、大きく外返し幅 3.3cm のＮ字状口縁を形づくる。胎土表面は明茶褐色で破断面は灰褐色のサンドイッチ構造で、肩部には自然釉が付着して

いる。土壙ＳＧＫ１３１の上部より天目碗とともに検出された１例があるのみである。

常滑甕Ｃ類　［第５８図３、第５９図１・２］　口径 42cm、胴部最大径 53.5cm を測る。胴部上半で屈曲し、口縁部は肩から直角気味に立ち上がり圧着したＮ字状口縁を形づくり、Ｎ字上端は口唇より高く巡る。胎土は灰褐色から赤褐色で、肩部には自然釉が載る。水路ＳＧＤ３４新路から同一個体の破片が散乱する状態で検出され、多くの破片の破断面に漆接着の痕跡や内面に漆布を貼り付けた痕跡などが見られる。

常滑甕Ｄ類　［第５９図３］　井戸ＳＧＥ０１の内部より検出された口縁部は破片で、胎土は灰褐色で多量の白色砂粒を含み、表面は光沢を帯びた茶褐色で肩部分には自然釉が見られる。口縁部は頸部から垂直に立ち上がり、圧着したＮ字口縁を形づくり、口唇部はＮ字の上端より高く、内側にはらんでいる。

常滑甕Ａ類は常滑６型式、常滑Ｂ類は７型式、常滑甕Ｃ類は９ないし１０型式、常滑甕Ｄ類は１１型式に当たると考えられる。

瀬戸美濃焼

古瀬戸　［第６０図］

古瀬戸類では天目茶碗、卸皿、鉢、広口壺、折縁皿、鉄釉壺か瓶、鉄釉水注、灰釉腰折皿などの器種がある。

天目茶碗　［第６０図１～３］　１は、柿釉で丸みを帯びた胴部から尖り気味の口縁部が僅かに外反し立ち上がり、胎土は灰白色で古瀬戸後Ⅰ期に当たる。天目茶碗２・３は鉄釉で体部下半は錆釉が施され、体部は丸みを持ち、口縁部は縁折状に内湾し大きく外反する、胎土は灰白色で、古瀬戸後Ⅳ新期に当たる。土壙ＳＧＫ１３１上部から出土した天目茶碗２には、漆継の継ぎ目に朱漆を塗る修復が行われており、体部内側には茶筅による著しい傷が見られる。

卸皿　［第６０図４～７］　４～７は卸皿の断片である。４は口縁部で口唇が内側に折れており古瀬戸後Ⅰ期、５～６は底部で、５が古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期、６はＨ１３Ｇ区の竪穴状遺構ＳＧＫ２４１から、７は土塁ＳＧＡ０２の基底部水田層下で見出されたもので共に古瀬戸後期に当たる。

灰釉折縁皿類　［第６０図８～１２］　８は外反した口縁部内側に条線が巡るもので古瀬戸中Ⅰ期、９は口縁部が外反し、口唇が内側に折れるように立ち上がるもので古瀬戸中Ⅱ期、１０は中皿で口縁部が水平に張り出し、端が折り返され段を成すもので古瀬戸後Ⅱ期、１１・１２は小皿で外反した口縁の端が内側に折り返し立ち上がるもので古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期に当たる。ただし、いずれも近世水田層面の直下から検出されており、伴う遺構は明確でない。

灰釉腰折皿　［第６０図１３・１４］　１３・１４は、口縁はやや厚めで外反し、体部下半から高台部までを回転ヘラ削りで作り出して露胎としており、胎土は淡黄色でモグサ土に近い、古瀬戸後Ⅳ新期に当たり、Ｈ９Ｇ区の木炭層や近世水田直下層から検出されている。

鉄釉耳付水注　［第６０図１５］　１５は、菊印花紋を施した耳の取り付け部小片で、古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期に当たり、Ｈ９Ｇ区の木炭層から検出されている。

灰釉広口壺　［第６０図１６］　１６は、筋条線が施された肩部破片で、古瀬戸後Ⅳ期に当たり、堀ＳＧＰ０２の底部から検出されている。

その他　灰釉鉢類は古瀬戸後Ⅰ～Ⅲ期、鉄釉壺か瓶は古瀬戸後Ⅲ・Ⅳ期のものが検出されているが、小片であり、図示できるものが無い。

瀬戸美濃大窯　［第６１図～第６２図］

瀬戸美濃大窯製品では、灰釉の端反皿、丸皿、内ソギ丸皿、小杯、丸碗、鉄釉の天目茶碗、平碗、端反皿、丸皿、稜皿、水注、小壺、徳利などの器種がある。

灰釉端反皿　［第６１図１～５］　瀬戸美濃大窯製品では灰釉端反皿が最も多く検出されている。削り出し高台は断面が三角形と角型があり、高台内には輪トチンの跡が見られる。口縁直下で大きく外反し玉状口縁を成す、見込み中央に菊印花紋が施されたものもあり、胎土は淡黄色で吸水性が高い。１は三角高台で見込み

に菊印花紋があり、２・４・５は角高台で、いずれも瀬戸大窯１期に当たり、５は器肉がやや厚く、瀬戸大窯１後半期に当たる。なお、２には漆継の跡が見られる。

灰釉丸皿［第６１図６］ 底部が削り出し角高台のものと碁笥底のものがある。６は底部から内湾気味に立ち上がり、角口唇をもつもので、瀬戸大窯２期に当たり、Ｈ９Ｇ区の木炭層から検出されている。

灰釉内ソギ丸皿［第６１図７］ ７は、丸皿の内側に放射状にソギが施されたもので、瀬戸大窯２前半期に当たり、Ｈ９Ｇの木炭層から見出されており、小片がＨ１６Ｆ区建物ＳＦＢ１０の下部整地層から検出されている。

灰釉小杯［第６１図８・９］ ８・９は、底部から外反気味に立ち上がっており、瀬戸大窯１期に当たり、東郭外屋敷の北屋敷から検出されている。

灰釉丸碗［第６１図１０・１１］ １０・１１は、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反し、角口唇を形づくるもので、胎土は淡黄色で吸湿性が高く、瀬戸大窯１期に当たり、１０はＨ１１Ｇ区の木炭層から、１１は堀ＳＧＤ６７の埋め立て層中から検出されており、共に漆継が見られることから、同一個体の可能性が高い。

鉄釉天目茶碗［第６１図１２～１５］ 底部は削り出しの角高台と抉り底のものがあり、体部下半露胎部に濃い錆釉、赤褐色の淡い錆釉を施すものと無釉があり、胎土は淡黄色から茶褐色で吸水性があるものと、灰白色で黒色粒子を含むものがある。１２は露胎部に濃い錆釉が施され、体部は直線的でくの字状に内湾し、口唇部で外反し玉縁を構成しており、胎土は茶褐色で吸水性があり漆継の痕跡がみられ、建物ＳＧＢ１４の南西隅柱内より検出されたもので、瀬戸大窯２期後半に当たる。１３は露胎部に淡い錆釉が施されており、体部は丸みを帯び、くの字状に内湾し、口唇部で外反するが玉縁は構成されておらず、胎土は灰白色で黒色粒を含んでおり、堀ＳＧＤ６７の埋め立て層上部より検出されたもので、大窯３期前半に当たる。１４は、柿釉の抉り底茶碗で露胎部に錆釉が施され、体部は僅かに曲がり、口縁部は薄くなりながら、くの字状に屈曲しており、胎土は灰褐色、堀ＳＧＤ５６の埋め立て層上位部から検出されたもので、瀬戸大窯３期前半に当たる。１５は露胎部に淡い錆釉が施され、体部は直線的で口縁でくの字状に屈曲し、僅かに外反しながら尖り気味の口唇を構成するもので、胎土は灰白色、建物ＳＧＢ５５柱穴確認面で検出されたもので、瀬戸大窯３期後半に当たる。

鉄釉平碗・小天目［第６１図１６～１８］ １６は角高台の平碗底部で露胎部には濃錆釉が施され、胎土は淡黄色で吸水性があり、堀ＳＧＤ１１２の埋め立て層上部礫群中より検出されたもので、瀬戸大窯１期に当たる。１７は小天目茶碗で露胎部に錆釉が施され、体部は曲線を描いて湾曲し、口唇直下で僅かに外反しており、胎土は褐色茶褐色で吸水性があり、Ｈ１０Ｇ区の木炭層中検出されたもので、瀬戸大窯１期に当たる。１８は小天目茶碗で露体部は無釉、体部は僅かに湾曲しながらくの字状に屈曲し、口唇部が強く外反する、胎土は灰褐色、Ｈ６Ｇ区の堀ＳＧＤ１６の埋め立て層中から検出されたもので、瀬戸大窯４期前半に当たる。

鉄釉稜皿［第６１図１９・２０］ １９・２０は底部が碁笥底で、体中央に稜を有し、口縁部は外反しながら玉状の口唇を形作る、胎土は灰褐色で緻密、高台内に輪トチン、見込み内にトチンの跡が残り、瀬戸大窯２期に当たる。１９は漆継ぎ痕があり、Ｈ９Ｇ区の砂礫土壙ＳＧＫ１１８の覆土中から、２０はＨ５Ｇ区の東郭外北屋敷地内より検出されている。

鉄釉丸皿［第６２図１・２］ １・２は底部が碁笥底、体部は丸みをもって立ち上がり、胎土は灰褐色で黒色粒が含まれる。高台内に輪トチン、見込み内にトチンの跡が残り、瀬戸大窯３期前半に当たる。１はＨ６Ｇ区の郭外南屋敷の建物ＳＧＢ２３の南西隅柱穴の脇に埋設されていた完形品、２はＨ５Ｇ区の郭外北屋敷地内から検出されている。

鉄釉その他［第６２図３～５］ ３は鉄釉徳利で底部は平底で無釉、胎土は淡黄色で吸水性があり、瀬戸大窯１ないし２期に当たる。Ｈ５Ｇ区の郭外北屋敷から検出され、漆継の跡が見られる。４は土瓶型の水滴で、吊り手部分は欠失しているが完形品であり、体部下半は無釉で底部は糸切の平底、胎土は淡黄色で吸水性があり、瀬戸大窯１期頃に当たる。注ぎ口は白色土で塞がれており、水路ＳＧＤ３４新路覆土中から検出され

た。５は柿釉の小壺で底部は糸切で無釉、胎土は灰白色で黒色粒を含み、瀬戸大窯３期頃に当たる。水路ＳＧＤ３４新路中層から検出された。

志野丸皿［第６２図６］　６は、長石釉で底部が碁笥底、口縁は厚く僅かに外反し、胎土は淡黄色で吸水性があり、瀬戸大窯４期後半に当たり、Ｈ５Ｇ区の郭外家臣屋敷から１点検出されている。

初山窯［第６２図］

初山窯製品は瀬戸大窯３期後半並行の鉄釉筒形碗、擂鉢がＨ５Ｇ区の郭外北屋敷内から３点検出されている。

鉄釉形筒碗［６２図７］　７は筒型碗の口縁部破片で、胎土は暗灰褐色で黒色粒を含む。

鉄釉擂鉢［第６２図８・９］　８・９は全面錆釉の擂鉢で、８はＮ字状に折り返した口縁部、９は底部破片で、体部内面に放射状、底部は別に曲線を描き、２０条近い卸目条線が施されている。９はＨ５Ｇ区の北屋敷建物ＳＧＢ０７の南東隅柱穴の楚板石の脇から検出された。

瀬戸美濃連房窯製品類［第６２図］

中世遺構面の上に乗る近世水田面の造成層中から瀬戸美濃連房製の志野、鉄絵皿が検出されている

志野丸皿［第６２図１０］　１０は長石釉で、口唇部は尖り気味に外反しており、胎土は淡黄色で吸水性が高い。水田直下層から４点検出されている。

鉄絵皿［第６２図１１］　１１は丸皿の口縁部破片で、内面に鉄釉の筋引が見られ、胎土は淡黄色で吸水性が高く、３点が水田面直下層から検出されている。

（４）舶載陶磁器

陶器［第６３図］

天目茶碗［第６３図１］　１は天目茶碗口縁部の小片であるが、鉄釉で胎土は灰褐色で黒色粒を含み緻密で口唇部の口当たりが滑らかである。漆継の痕跡があり堀ＳＧＰ０２の底部から検出された。

磁器

白磁［第６３図］

瓜破壺［第６３図２～６］　２～６は、胴部を隆線により分割し、区画内に沈線による草花紋を施した瓜破壺の破片で、胎土は淡黄色で、外面には細かな貫入の入った灰白色釉が施されており、１１世紀後半から１２世紀前半に当たる。

小杯・小皿［第６３図７～９］　７・８は抉り込みを有する高台付き小杯、９は同様の小皿で、体部下半は露胎で、白濁した釉が施され、見込みには重ね焼きの痕跡がみられ、１４世紀後半から１５世紀前半頃の白磁皿Ｂ群に当たる。

連弁紋端反皿［第６３図１０］　１０は体部に片切りの弧状の連弁紋を有す端反皿の口縁部破片。口唇部は薄く、角気味で、口縁は波状を呈するようである。Ｈ５Ｇ区の建物ＳＧＢ０８の南西隅柱穴内より検出された。体部の施紋が雷紋帯青磁の胴部に施される連弁紋と類似していることから、１４世紀後半から１５世紀前半頃に当たると考えられる。

端反皿［第６３図１１～１４］　１１～１４は、断面三角に近い砂目高台で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が大きく外反する。釉はやや黄色がかったものと灰白色のものがある。１３は堀ＳＧＤ１１２の覆土下層から検出された。１５世紀後半から１６世紀前半頃の白磁皿Ｃ群に当たる。

菊皿［第６３図１５・１６］　１５・１６は菊皿の口縁部破片で、口唇部には刻み目が施され、体部には内面をへこませ、外面をはらませた菊弁紋が施されるなどが共通しているが、１５は口縁部外側直下に沈線が巡るなどの違いがある。１５は若干緑かかっており、溝ＳＧＤ４２から検出され、１６は白濁色で破断面に

煤が付着しており、水路ＳＧＤ３４新路の末端から炭化建築部材などと共に検出された。１６世紀の前半頃の白磁皿Ｄ群に当たる。

青磁［第６４図］

櫛歯紋皿［第６４図１・２］ １・２は、底部無釉で糸切痕を残す櫛歯紋皿の小片、釉はやや褐色気味の青磁釉で細かな貫入が入っており、１２世紀代の同安窯系の皿に当たる。

櫛歯紋碗［第６４図３］ ３は、内面に櫛歯紋と沈線による文様を施した碗の体部破片で、胎土は灰白色で、釉は貫入の入った淡い青磁釉、１２世紀代の龍泉窯系碗Ⅰ類の碗に当たる。

連弁紋碗［第６４図４～８］ ４～７は連弁紋青磁碗の小片。４は外反する口縁の外面に丁寧な連弁が削り出されており、釉は淡緑色で、堀ＳＧＤ５６の覆土から検出されている。５は鎬連弁紋碗の体部破片でＨ１０Ｇ区の木炭層中から検出されている。６は鎬連弁紋の底部破片で、高台内および畳付の釉は削り取られており、Ｈ８Ｇ区の水路ＳＧＤ３４の上面から検出されている。７は片切り連弁紋碗の体部破片で、釉は濃い青磁釉がほどこされており、水溜ＳＧＰ０１から検出されている。８は、碗の底部破片で高台内および畳付の釉を削り取っており、見込みには沈線で連弁様の文様が施されており、７と同じ水溜ＳＧＰ０１から検出されており、胎土も類似している。４は１３世紀末から１４世紀初頭の龍泉窯系蓮弁碗Ｂ１類、５～８は１４世紀末から１５世紀中葉頃の青磁碗Ｂ２からＢ３類に当たる。

雷紋帯青磁碗［第６４図９］ ９は直立する口縁部に雷紋帯、胴部に連弁紋が施された青磁碗の口縁部破片。Ｈ６Ｇ区の建物ＳＧＢ２７の柱穴脇から検出された。１４世紀末から１５世紀初頭の龍泉窯青磁碗Ｃ２類に当たる。

端反皿［第６４図１０～１２］ １０～１２は端反皿の口縁部破片で、口唇部の作りは微妙に異なる。１０はＨ１１Ｇの溝ＳＧＤ６８の壁際より、１１はＨ６Ｇ区の土塁ＳＧＡ０１の北側土塁脇側溝ＳＧＤ２２の上部から、１２はＨ１５Ｆ区の堀ＳＦＤ４６の埋め立て整地層から検出されている。１５世紀代頃に当たる。

稜花皿［第６４図１３］ １３は端反皿の口唇部に刻み目を施した稜花皿で、胎土は淡黄色で陶器に近く、釉は白濁釉が施されている。堀ＳＧＤ５６の中層から検出されたもので１５世紀後半頃に当たる。

その他の器種［第６４図１４・１５］ １４は小壺の頸部破片、１５は淡緑色の壺の口縁部破片、この他洗（手を洗う容器）の小片も見出されている。

染付［第６５図］

碗［第６５図１～６］ １は体部下半の小片で班紋がみられ、４・５は口縁部の小片で波濤紋を帯状に施している。２・３は体部にアラベスク風の文様を施すもので、３は口縁部に波濤紋、見込みに花紋を施しており、高台は大きく、高台内および畳付を斜めに釉を削り取り、高台内に「二六」の墨書がある。水路ＳＧＤ３４旧路の中位層から検出されたもので破断面に煤の付着が著しい。６は内湾する口縁部破片で白濁した花様の文様が施されており、胎土は淡黄色で、Ｈ５Ｇ区の建物ＳＧＤ０３の南西隅柱の脇から検出されている。１・４・５は１５世紀後半から１６世紀前半の染付碗Ｃ群、２・３はＤ群で、６は１６世紀後半の漳洲窯系の碗ではないかと考えられる。

皿［第６５図７～１６］ ７～１６は端反型の小皿で、体部外面には唐草紋、見込みには十字花紋を描き、高台は三角に近く、畳付の釉を削り、砂目が付く。１２は漆継の痕跡があり、７はＨ５Ｇ区の水路ＳＧＤ０４の埋め立て層から、８はＨ５Ｇ区の建物ＳＧＢ１５の内部柱の礎板石の脇から検出された。１５世紀後半から１６世紀の染付皿Ｂ$_1$群に当たる。

（５）土製品

土製品［第６６図］

円板［第６６図１～１５］ 土師質皿の底部から体部の破片の周囲を打ち欠き研磨し円板状にしたもので

１５点検出されており、大きさは直径 2.2cm から 7.2cm、厚さは 0.3cm から 2.0cm のものまである。１０は土師器の柱状高台を転用したもので時代が異なる可能性がある。用途については定かでない。

有孔円板［第６６図１６～１７］ 土師質皿の破片を円板と同様に加工し、孔をうがったもので３点検出されている。１６は外周から孔まで打ち欠き痕があり、１８は外周が打ち欠きのままで、円板同様用途は定かでない。

円柱状土製品［第６６図１９］ 直径 1.9cm の円柱状の土製品が１点検出されているが、両端を欠失しており、用途は定かでない。

土鈴［第６６図２０・２１］ 土鈴の破片が２点検出されている。２１は堀ＳＧＤ５６の埋め立て層、２０は水路ＳＧＤ３７の埋め立て層の上から検出されている。

動物形［第６６図２２・２３］ ２２は、動物の頭部から上半身の破片で、頸が前方を向いており、耳の表現もあり土馬の可能性が考えられる。２３は胴部破片で頸部以上と尾部を欠失しているが、ふっくらとして体部から鳥形ではないかと考えられる。これらは、Ｈ５Ｇ区の東郭外家臣北屋敷の主屋の南側から検出されたもので、両遺物の中間からガラス丸玉が検出されている。

（6）焼成粘土塊［第１０９図下段、写真図版２０右下］

焼成粘土塊は、壁土が火災などにより加熱焼成されたもので、胎土中には藁材などの植物繊維、破断面には竹小舞や結節紐の圧痕がみられる。以下集中して検出された地点ごとに述べる。Ｈ５Ｇ区郭外家臣屋敷の建物ＳＧＢ０８の西側南から２番目の柱穴内から木炭と供に大小５０点余りが検出されている。この粘土塊の胎土中の繊維は藁、小舞は割り竹と棒状のものが見られる。残存している焼成粘土塊の大きさから壁は少なくとも 5cm 以上で、壁土の表面が残存しているものがあることから荒壁仕上げであったと考えられる。また、この壁土と類似した焼成粘土塊が土塁ＳＧＡ０１の北側を画す溝ＳＧＤ２２の埋め立て層中からも検出されている。Ｈ９Ｇ区で検出された建物ＳＧＢ３５の北側から検出された焼土遺構ＳＧＦ１０とＳＧＦ１１は火災の後倒壊した壁土で、炭化した竹小舞を伴っており、この周辺の木炭層中からも焼成粘土塊が検出されている。Ｈ１６Ｆ区の建物ＳＦＢ１０のほとんど柱穴内から焼成粘土塊が検出されている。最大のものは 14.5cm × 5.0cm、厚さ 7.5cm を測り、直径 3cm の竹を半割りしたものを心々で 5cm の間隔で配置した小舞痕跡が残る。小舞から 1.3cm 程で荒土仕上げの土壁面となっている。Ｈ１４Ｇ区の水路ＳＧＤ３４新路の末端から、炭化建材、炭化物と供に、最大 8cm ほどの焼成粘土塊が多量に検出されている。土質や壁面の仕上げ状態は建物ＳＦＢ１０の柱穴内から検出された焼成粘土塊と良く似ている。

第２節　金属製品類

金属製品は材質により鉄製、銅・金銅製品などに分けられ、その用途により武具、生活用具、農耕具、建築用具、信仰用具などに分けられる。

（1）鉄製品［第６７図］

武具類［第６７図１～３］ 水路ＳＧＤ３４新路から検出された１は葉型の先端を有す鉄鏃で茎部を欠損する。２は小孔を有す鉄板で小札ではないかと考えられ、Ｈ１１Ｇ区の木炭層中から検出された。井戸ＳＧＥ０５の内部より検出された３は、鉄板を張り合わせ刀子の柄の様な形に成形したもので、飾り金具の一部ではないかと考えられる。

生活用具類［第６７図４～８］ ４は全長 19.2cm の刀子、Ｈ１３Ｇ区の水田直下層から検出された。５は刀子の柄部、６は刃部の先端破片である。７は全長 16.4cm の和鋏で、溝ＳＧＤ３０の壁際から検出された。８は据座径 30.1cm、残存高 49.5cm を測る鍛造燭台で、据座は周囲が僅かに上反する円盤に突起状の三足を付し、中心から茎部を立ち上がらせ、その上部に受け皿を取り付けたもので、水路ＳＧＤ３４新路の末端

部から焼けた建築部材や炭化物、焼成粘土塊（壁土）などと共に検出された。

農工具類［第６７図９～１２］９は幅 19.9cm の鋤先で両端茎部を欠失するが、鋳鉄製品であり、東郭東辺土塁ＳＧＡ０１と郭外家臣屋敷の間にある通路的空間ＳＧＣ０１の地山層に食い込む様に検出された。ＳＧＣ０１では表土直下が砂礫層となっており、この削平作業に使用された鋤ではないかと考えられる。１０は楔で、Ｈ１３Ｇ区の土塁削平後の整地層面から検出された。１１はＨ１０Ｇ区の木炭層から、１２はＨ１２ＧのＳＧＤ６７の埋め立て層中から検出されたもので、先端が二股に分かれた鉄製品であるが、鉄鏃とも形状が異なっており、板材などを割るときに使う目付け、目割などの工具ではないかと考えられる。

建築用具類［第６７図１３～２５、第１０８図上段］１３から２５は角釘で、出土した金属製品類で最も数が多い。最小は２４で全長が 3.2cm（１寸か）で、大型のものは完形ではないが２１などが全長 6.2cm 以上（２寸か）を測る。検出箇所は掘立柱建物そのものの位置は少なく、建物の周辺の埋め立て土層中から出土する。

（２）銅・金銅製品［第６８図］

武具類［第６８図１～１３］１は金銅製鞘尻金具で猪目の透かしがありＨ５Ｇ区の郭外北屋敷内から検出された。一枚板の打ち出しで作られている。２は青銅製の柄冠飾り金具で、Ｈ１０Ｇの木炭層中から３片に別れて検出された。３は中央に孔を有するキャップ状の銅製品で脇差などの柄冠金具ではないかと考えられ、Ｈ１３Ｇ区の土塁削平後の整地層面から検出された。４は中央に稜線を付した菱形の飾り金具で、湾曲した形状から鞘などの目貫金具ではないかと考えられ、Ｈ９Ｇ区工房域から検出された。５～８は青銅製笄で、５は胴部を抉り立体的な飾り金具が取り付けられ、６は筋彫が装飾として付されており、７は耳掻き部、８は先端部の破片であり、５はＨ７Ｇの区溝ＳＧＤ３０上部から、６はＨ９Ｇ区の水路ＳＧＤ３４新路の埋め立て層から、７はＨ１１Ｇ区の堀ＳＧＤ５６内部から、８はＨ１２Ｇ区の水田層直下から検出された。９～１２は鎧などの一部と考えられるものを示した。９は金銅製飾鋲で、Ｈ１１Ｇ区の水路ＳＧＤ３４旧路内から検出された。１０は青銅製環でＵ字形を呈し、開口部には環台に取り付ける突起があり、紐掛部は肉厚に造られていることから、取手金具の可能性もあり、Ｈ５Ｇ区の郭外家臣北屋敷の建物ＳＧＢ０５の西側桁列南から２列目の柱穴内より検出された。１１～１３は金銅製の板を加工した飾り金具。銅１１はＨ１１Ｇ区の堀ＳＧＤ５６の埋め立て層から、銅１２はＨ１３Ｇ区の水田直下から、銅１３はＨ１５Ｆ区の水田直下層から検出された。

生活信仰用具類［第６８図１４～１６］１４は青銅製棒で蝶番の軸棒であり、H6G 区の郭外家臣南屋敷内から検出された。１５は青銅製の管で用途は明確でない、Ｈ１５Ｇ区の水田直下層から１３と共に検出された。１６は金銅製の鈴で、Ｈ６Ｇ区の中世地山層面から検出された。

（３）銭貨［第６９図］

銭貨［第６９図１～２１］銅銭６５点が疎らに出土しており、遺構に伴うものでは堀や水路中が多く、建物の柱穴内より検出された例は、ＳＧＢ０５（第６９図１９）、ＳＧＢ２３（永楽通寶）、ＳＧＢ２９（判読不能）の３例があり、建物ＳＧＢ２９の場合、３枚が重なって検出された。判読できる銘は、開元通寶２点、皇宋通寶、永楽通寶５点、至道元寶２点、元祐通寶２点、紹寧元寶、洪武通寶５点、宣徳通寶、治平元寶３点、景徳元寶、紹聖元寶、至和元寶、大観通寶などがある。

（４）金属加工関係品［第６８図１７～１８］

金属加工にかかわる遺物は、鞴の羽口、鉄滓、溶融物付着土器などがある。

鞴羽口［第６８図１７］いずれも小片ではあるが３点検出されている。１７はＨ１２Ｇ区の堀ＳＧＤ６７の覆土中から検出されたもので、胎土は赤褐色で長石粒を多く含み、先端部は灰褐色に変色し、吹き口部分は溶融状態になっている。他はＨ７Ｇ区の堀ＳＧＰ０２の底部から、Ｈ１０Ｇ区の木炭層中からは小片が検

出されている。

溶融物付着土器　［第６８図１８］　土師質皿が再加熱され、表面に溶融した金属ないし灰が付着した土器で、６点検出されている。Ｈ５Ｇ区、Ｈ６Ｇ区、Ｈ７Ｇ区から検出されており、１８は最も大きい資料でＨ７Ｇ区の水路ＳＧＤ３０から検出され、内部に銅を主体とした溶融物が付着し激しく変形しているが、小型の土師質皿の半分近く残存しており、２箇所に金鋏で摘んだ跡が残る。小鍛冶遺構が検出されたＨ１０Ｇ区より地形的にも高い東側で溶融物付着土器が検出されていることから、小鍛冶遺構で使用されたものではない可能性が考えられる。

鉄滓　［第６８図１９、第１０８図中段］鉄滓はＨ１０Ｇ区の土壙ＳＧＫ１４８で取り上げることができなかった遺物を除き、４０点余りが検出されている。その殆どは小鍛冶遺構が検出されたＨ１０Ｇ区に集中しており、この遺構で排出された遺物と考えられる。最大のものは長さ 15cm を測り、碗状に屈曲し、内部には木炭片が付着しており、鍛冶炉の中心部に溜まった滓ではないかと考えられる。

第３節　石製品類

石製品類［第７０図、第７１図］

石製品類は量的には少ない。

砥石類　［第７０図１～６］　１は携帯用鎌砥石でＨ８Ｇ区の水田直下層から検出された。２は携帯用砥石の断片でＨ１０Ｇ区の堀ＳＧＤ５６内より検出された。３、４、５は仕上げ砥石で同一個体、表面剥離後漆で接着した痕跡が残り、Ｈ１４Ｇ区の堀ＳＧＤ１１２の覆土中から検出された。６は大型の花崗岩製据え置き荒砥石でＨ８Ｇ区の水路ＳＧＤ３４内より木製品類と共に検出されたもので、工房で使用されたものと考えられる。

生活信仰関係用具類　［第７１図１～６］　１は安山岩製の小型搗臼で、三足脚が付き、口縁部は波型を呈しており、Ｈ４Ｇ区の塀柱穴ＳＧＫ０９内より検出された。２は回転臼の上臼で、側面に取手を取り付ける穴が２箇所、中央に軸受け穴があり、鋸歯状と放射状が入り混じった摺目が彫り込まれており、Ｈ１１Ｇ区の井戸ＳＧＤ０６の脇、中世地山層面から瓦質鍋Ａ類と共に検出された。３は粘板製の円板で碁石ではないかと考えられ、Ｈ９Ｇ区のＷ 13 ＮＳ０の掘立柱建物群と共に検出された。４は滑石製の管玉ないし切子玉でＨ１１Ｇ区の水路ＳＧＤ３４新路の上面から検出された。５は紫色のガラス製丸玉で、Ｈ５Ｇ区の郭外家臣北屋敷の庭から土製馬、土製鳥などの祭祀遺物と共に検出された。６は水晶の自然結晶で堀ＳＧＤ６７の埋め立て層中から検出され、特異な形状から陽物として扱われた可能性も考えられる。

第４節　植物製品類

外郭域の調査では、中世段階に整備された柏尾堰（深沢用水）からの滲み出し水が絶えなかったためか、堀ＳＦＤ０６、ＳＧＤ５６、ＳＧＤ６７、ＳＧＤ１１２、ＳＧＰ０２や水路ＳＧＤ３４旧路・新路、井戸ＳＧＥ０５、ＳＧＥ０６などから植物製品や未製品、植物遺存体が検出され、なかでも水路ＳＧＤ３４旧路と新路からは折り重なるように集積して検出された。また、植物製品類自体は遺存していなかったものの、その圧痕が土壙ＳＧＫ１８３やＳＧＫ１８７、溝ＳＧＤ４２などから見出され、木製品類が存在していたことを確認できる遺構もある。検出された植物製品類は用途により食膳具、服飾具、遊具祭祀具、家具調度品、建築部材、製作用具などに分けることができる。

（１）食膳具

漆椀　漆器類は、使用される漆の違いにより光沢ある純度の高い漆を用いるもの（一種漆）と、鈍い光沢の純度の低い漆を用いるもの（二種漆）の二種類がある。

一種漆を用いた椀は２例で、第１０３図３は内外面が光沢ある朱漆で、口唇が外反する丁寧な作りで井戸ＳＧＥ０６から検出され、第９４図２１は内外面共に朱漆で三角高台の内側のみ黒漆塗りとなっており、水路ＳＧＤ３４から検出された。

他の漆椀は全て二種漆を用いたもので、高台部の形状から高足高台をＡ類、三角高台をＢ類、ベタ底高台をＣ類とする。

漆椀Ａ類　高足高台を有すもので、水路ＳＧＤ３４（第８２図１７、第８３図１～４、第８４図１・２、第９４図７・８・１５・１６）や堀ＳＧＤ５６（第９６図７・１０）、堀ＳＧＤ６７（第９８図２）、堀ＳＧＤ１１２（第１０１図２～４、第１０２図２）などから検出されている。口径は 14cm 前後、高さは 9cm 前後で、その３分の１を高台が占める。内面は朱塗りで無紋、外面は黒漆を下地として朱漆により文様を描くものと無紋がある。材質はクリ、キハダ、ムクロジ、ハンノキなどさまざまな樹種に及んでいる。高台は 3cm 近くあり、畳み付けは三角に近く、高台内は 5mm ほど窪み、底面に朱漆により菱井桁や文字を描くもの（第８４図２、第９４図１５・１６、第１０１図４）、線刻紋を施すもの（第８３図４）などがある。体部は一旦大きく広がり、屈曲ぎみに立ち上がって口縁部を形成し、全体的に肉厚である。体部外面の朱漆紋様は動物や草木を描いたものと家紋的文様がある。草木紋は草木の間で向かい会う鶴と亀を太い朱漆で描くもの（第８３図１、第８４図２）、草花や樹木らしい図柄をやや細い朱漆で描くもの（第８３図２、第９４図７・８、第９６図７）がある。家紋的文様は体部を５分し、二ないし三重圏の中に、二重亀甲花菱紋（第８３図３）、二重亀甲七曜紋（第８３図４）や、鶴の羽を圏に見立てた紋様（第８４図１、第９６図１０）を描くものと、繋ぎ亀甲紋（第９４図１５）を散らすように描くものがあり、無紋は第９８図２などがある。なお、底部形状は定かでないが、体部の立ち上がり形状から第９３図４～６、第９４図１～６もこの類に含まれると考えられる。

漆椀Ｂ類　三角高台を有すもので、内面は朱漆、外面は黒漆の上に朱漆で紋様を描くものと無紋がある。水路ＳＧＤ３４（第８２図１４・１６、第９３図２、第９４図１１・１８）、堀ＳＧＤ５６（第９６図６）・ＳＧＤ１１２（第１０１図１）などから検出されている。体部は、丸みを帯び立ち上がり、外面の紋様はＡ類と同じと思われるが残存状態が悪く定かでない。第９３図２が無紋である。

漆椀Ｃ類　ベタ底高台を有すものであるが、Ｂ類の三角高台が失われた可能性も考えられる。体部から高台を削り出したような体下部の屈曲に特色があり、内面は朱漆、面には黒漆の上に朱漆で草木紋を描くようである。水路ＳＧＤ３４（第９３図３、第９４図１０・１２・１３）から検出されている。

この他、椀と考えられる断片資料が水路ＳＧＤ３４（第８２図９・１２、第８７図９、第９４図９・１９・２０）から多く出土している。

漆皿ないし蓋　１例だけであるが、皿ないし蓋の可能性がある内外面とも黒漆が施されたものが、水路ＳＧＤ３４から検出されている（第８２図１１）。

折敷　折敷は一辺 30cm 程のヒノキ材の隅丸方形の板に高さ 3cm 弱の縁を桜皮で取り付けた無脚のものが検出されている。堀ＳＦＤ０６（第７３図１）、水路ＳＧＤ３４（第７９図１、第８６図９、第８７図１１、第８８図６）、堀ＳＧＤ１１２（第１００図７、第１０１図５）などから検出されている。第７９図１、第８７図１１、第１００図７は底板、第８６図９は縁板、第７３図１と第８８図６６、第１０１図５は底板に縁板が桜皮で取り付けられていた状態で検出された。第８７図１１の底板には菱井桁の刻みがあり、第８８図６の底板には刃物傷が交差するように多くあり、第７３図１、第７９図１には、刃物傷と共に、製作時における仮留め、ないし割れた底板や外れた縁板を紐で結束補修するために穿たれたと思われる小孔がみられる。

箸　箸は長さ 24cm 前後で両端を細く削り出す形状をしており、ヒノキ、スギ、サワラ、タケ、ウコギなど多様な樹種が利用されている。水路ＳＧＤ３４（第７９図２～４、第８２図１～６、第８６図３～６、第９２図１～１２）、堀ＳＧＤ５６（第９５図２～５）、溝ＳＧＤ４２（第９５図１０）、堀ＳＧＤ１１２（第１００図２～６）、井戸ＳＧＥ０５（第１０２図７）、井戸ＳＧＥ０６（第１０３図１）から検出されている。

水路ＳＧＤ３４からは、波状に折曲げた状態で検出されたものもある。

楊枝　水路ＳＧＤ３４から検出された第９２図１３は、長さ8.4cm、断面台形で一端を細く削り、根元を斜めに切り落としたもので、形状から楊枝ではないかと考えられる。

ヘラ　水路ＳＧＤ３４から検出された第８７図２は、片刃の刃部と柄から成り、削りヘラではないかと考えられるが、使用痕が無いことから刀形の可能性もある。この他、堀ＳＧＤ６７（第９７図２）、井戸ＳＧＥ０５（第１０２図４）から検出された､筒タケの一端を斜めに切り取ったものは掬いヘラ､水路ＳＧＤ３４（第８６図２）から検出された、断面三角形を呈し両端を斜めに削り取ったものはヘラ的利用がされたものではないかと考えられる。

鍋蓋　水路ＳＧＤ３４から検出された第８５図１は、丸板に一文字取手を紐で取り付ける鍋蓋で、表面には焦げ付跡がみられ、一端は激しく焼け焦げている。同水路から検出された第８２図８は、中央端部に紐の取り付け孔があり、取手を付けた痕跡があることから、やや大型の鍋蓋の一部と考えられる。

卸板　第９２図１６は本来羽子板状のものの半分で、取手と卸面から構成され、取手には紐通し穴がある。卸面は菱格子状に筋引きし、交点に穴を穿ちタケ籤を差し込んだもので、卸面の磨耗が著しい。

シャモジ　第９７図１は大型のシャモジで柄の末端を欠いているがほぼ完形品で、すくい面には付着物の痕跡が残っている。堀ＳＧＤ６７より検出された。

竪杵　第９８図３は全長93cmを測る竪杵である。Ｈ１１Ｇ区の水路ＳＧＤ３４と堀ＳＧＤ６７の重複点から検出された。両頭部には磨耗痕が、握り部分には手ずれ痕がある。第１０５図６は水路ＳＧＤ３４から検出された32.2cmの小型の竪杵で、両端部は磨耗が著しく、一部が炭化しており、第７１図１のような小型の搗臼の杵ではないかと考えられる。

桶　第７２図１～６は堀ＳＦＤ０６からまとまって検出された同一個体の桶の側板。高さ16cm程の浅桶で、箍の擦れ痕跡が明瞭に残る。第１０５図１は底板、第１０５図２・３は浅桶の側板、第７８図２は高さ38cm程のやや深い桶の側板で水路ＳＧＤ３４から検出されたもの、第１０２図３は底板であり、井戸ＳＧＥ０５から検出されたものである。この他、水路ＳＧＤ３４からはタケ箍と考えられる割竹材が多く検出されている。なお、堀ＳＧＤ６７から検出された第１０５図９は、桶などの側面ないし蓋に付けられた栓と考えられる。

曲輪・ホケイ・蒸篭　水路ＳＧＤ３４から検出された第８２図１５、第８７図１は曲輪の底板、水路ＳＧＤ３４からの第８０図４、第９２図１５、堀ＳＧＤ５６からの第９６図３の檜ヘギ板材は側板材と考えられる。曲輪の底部に脚を取り付けたホケイは、堀ＳＧＤ５６から差込式の脚部（第９６図８）が、井戸ＳＧＥ０６から底板（第１０４図１）が検出されており、曲輪の側材の一部が残存し、底部には三方向の差込式の脚を取り付けるホゾが刻まれ、中央に「吉」の字が墨書されている。なお、第１０３図５・６は、あるいはこのホケイの側板材かもしれない、また、同井戸から検出された第１０５図１１は黒漆塗りの差込式のホケイの脚で、この個体のものではないが、同様なものが付されていたと考えられる。堀ＳＧＤ６７から検出された第１０５図７は、側面に竹釘で曲板を留めた痕跡があり、中央に規則的に穿たれた孔があることから、蒸篭の底板と考えられる。

柄杓　水路ＳＧＤ３４から検出された第８７図４は円盤の中央からずれた位置に孔が穿たれており柄杓の底板と考えられる。また、同じ水路中から検出された第７４図２～４や第８６図７など細長い柄の類は柄杓の柄の可能性が考えられる

箱　食膳具であるか定かでないが、水路ＳＧＤ３４から検出された第９１図６はタケ釘で留めた箱の縁板で黒漆の下地に光沢がある一種漆の朱漆が重ね塗りされており、重箱の蓋とも考えられる。また、同水路から検出された第８０図５は、タケ釘で組み合わせた末広がりの箱の側板材で、桜皮で内部に底板などを留めた跡があるが、形状用途は定かでない。

その他　水路ＳＧＤ３４から検出された第８９図２・３は直径6.5cmの有孔円盤で、黒漆が塗られている。食膳具であるか定かでないが、丁寧な造りから、孔にツマミを取り付け、容器の蓋のような利用方法も考え

られる。また、同水路の第８０図３、第８４図３、堀ＳＧＰ０２の第１０４図２は板材であるが、刃物傷が多く残されており、俎板のように使用された可能性が考えられる。堀ＳＦＤ０６から検出された第７２図７は、幹と枝をＬ字状に加工したもので、特異な形状から石臼の回し取手として使用された可能性が考えらえる。水路ＳＧＤ３４からは、第９１図１・７のような瓢箪の一部が検出されており、刃物による切断痕跡があることから生活用具として加工されていた可能性も窺える。

（2）服飾具

櫛　水路ＳＧＤ３４（第９１図４・５）、井戸ＳＧＥ０５（第１０２図５）から検出されており、いずれも横櫛で、第９１図５は幅 7.8cm で、1cm あたり７本の歯が刻み出されている。

下駄　下駄は隅丸矩形ないし長楕円形で、歯は組み合わせ式が１例（第７７図１）で他は削り出し式であり、キリ、クリなどの広葉樹が利用されている。堀ＳＧＦ０６から検出された第７２図８は桐製で全長 13.5cm と小さく子供用と思われる。他は大人用で水路ＳＧＤ３４から第７７図１・２、第８０図１、第９０図１～４、堀ＳＧＤ５６から第９５図９、堀ＳＧＤ６７から第９７図３、第９８図１、堀ＳＧＤ１１２から第１００図１などが検出されているが、いずれも長さ 20cm ほどである。第９０図４は保存状態が良く、表面の磨耗痕から右足用であることが分かり、一旦割れてから、タケ釘と紐で繋いで使い続けた様子が分かる。

草履　水路ＳＧＤ３４から検出された第８７図３は草履の芯板と考えられる。

この他、水路ＳＧＤ３４新路の末端部からは草鞋が検出されている。

（3）遊具祭祀用具

遊具　水路ＳＧＤ３４から検出された第７９図８は独楽サイコロで６面に墨で１から６の点が施されている。堀ＳＧＤ５６から検出された第９５図７は小型の独楽、水路ＳＧＤ３４から検出された第７３図８は枝を輪切りにした円盤で側面中央に筋切りを巡らせており、あるいは双六の駒の可能性も考えられる。同水路の第８２図１３、第９１図２は板を小判状に加工したもので用途は明確でないが、遊具に類別しておく。

祭祀具　水路ＳＧＤ３４から検出された第７９図７は頭部が方形で直下に二筋、四面に凡字を墨書したもので、仏事用具の差込式の頭飾りではないかと考えられる。形代類では、水路ＳＧＤ３４の第８２図１０が刀形、堀ＳＧＤ５６第９５図８が鍔形、水路ＳＧＤ３４の第８６図１が横向きの人形で、全体に刃物傷が交差するようにみられ、堀ＳＧＤ５６の第９５図６と第９６図４にも同様な刀物傷が多く見出せることから人形の足部分ではないかと考えられる。上部に割りが入った棒状製品を斎串とした。堀ＳＧＤ５６の第９６図１・２は、袋に木屑を詰め、これに２本の斎串を挿し、浮かべていたものが、堀底に沈んだような状態で検出されたもので全長が 30cm 近い大型のものである。同堀から検出された第９６図９は小型であるが先端を細く削り、上半部に割りが有り、頭部に紐結びのための溝が刻まれている。

（4）家具調度品

箱　堀ＳＧＤ５６から検出された第９５図１は、タケ釘で組み合わせた箱物の側板材で、高さ 36cm 以上を測り、内外面とも木地漆が塗られており、上端は湾曲し、下端は直線的構造になっており、収納物にあわせて作られた箱ではないかと考えられる。

その他に第９２図１４のような割タケ材を用いて編まれた籠（写真図版）がＳＧＤ３４旧路底から検出されたが取り上げることはできなかった。

（5）建築部材

建築部材ないし、部材の端切れ材の可能性があるもの、土木用の杭などを本類とする。

板材　水路ＳＧＤ３４から検出された第７３図２・４、第７４図１、第７５図１・２、第７６図１～４、第７８図１、第７９図５、第８１図３、第８８図３～５、第９１図９、堀ＳＧＤ１１２の第９９図１・４、第

１００図８・１１は板材およびその端切れではないかと考えられる。なお井戸ＳＧＥ０５から検出された第１０２図６は厚さが3cm近くあり、かなり腐食が進んでいるが、井戸中であることから井戸枠材の一部ではないかと考えられる。

角柱材　水路ＳＧＤ３４から検出された第７４図５は突き付けのホゾ、第７８図３は交差する貫材を受けるホゾ穴がある角柱材、堀ＳＧＤ１１２の第９９図５、第１００図１０は角柱材の端切れではないかと思われる。なお､第９９図５は「キ」の字状の刻みや刃物傷があり､作業台として再利用された可能性が考えられる。

角材　水路ＳＧＤ３４から検出された第７５図３は一本溝が刻まれた角材で建具材ではないかと考えられる。同水路の第７４図６、第７５図４・５は幅６～8cm程の四角ないし矩形断面の角材で、堀ＳＧＤ６７の第９７図４、第９８図４、堀ＳＧＤ１１２の第９９図３なども垂木ないし建具用の角材ではないかと考えられる。その他、水路ＳＧＤ３４の第７３図３・６・７、第８４図４・５、第８７図１０、堀ＳＧＤ１１２の第１００図９などが角材の端切れと考えられる。

杭　水路ＳＧＤ３４から検出された第８１図１・２は新路開削に当たり旧路との壁の補強用に打たれていたもの、第８６図１０・１１、第８９図1・４・７、堀ＳＧＤ１１２の第９９図２なども杭材の一部である。

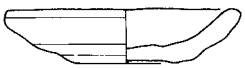
（6）製作用具および未製品

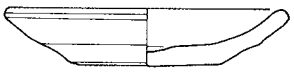
木製品製作用具類　水路ＳＧＤ３４旧路の底部粘土層中からは、木製品類と共に、木製品製作用具、未製品、削りカスなどが多量に発見された。第８５図２は丸太を利用した鉈台で､刃当りの部分が大きく抉れており､端部に黒漆が付着している。鉈台と共に、松皮（第８９図５）や鉈の削りカス（第８７図５、第９６図５）なども多量に発見されており、さらに第９４図１７、第１０５図５は小型の杯の荒形で、轆轤目と鉈削り痕が残っており、轆轤掛けの中途段階で廃棄されもので、内面のみ炭化していることから、加熱物を置く台として再利用された形跡がみられる。の第９４図１４は漆椀Ｂ類の形状を有しているものの、全面に轆轤引きの痕跡が観察され、内面に僅かに漆下地を施した跡があることから、漆掛けの途中で破損し廃棄された可能性が考えられる遺物である。また、第９１図８は全長40cm弱の桶の箍締め杵で、第８７図６・７は楔であるが、桶の箍締めにも類似したものが使用されているため、製作用具に含めた。第９３図１はヒノキのヘギ板であるが、木目に当たり、厚みが変化し折れたもの、第８８図１・２・７はヒノキのヘギ板材で切り目を入れ折り割った状況が残り、繋ぎ穴も穿たれているものの完成にはいたらなかったと考えられる檜物の未製品で、第８８図７は二つ割りにし、一端を１８０度ひねり返した状態で検出された。なお、堀ＳＧＤ６７から検出された檜板（第１０５図８）は「田」の字状に切目が付されており､加工途中の可能性も考えられる。檜物の接合に使う桜皮は水路ＳＧＤ３４の内部からも検出されているが、良好な資料は堀ＳＧＤ１１２（第１０２図１､第１０５図１０）や堀ＳＧＰ０２の底部（第１０４図２）などから巻いた状態で検出されている。この他、用途は定かでないが枝材に刃物で刻みを付けたものが、水路ＳＧＤ３４（第９１図３）、堀ＳＧＰ０２（第１０４図４）から、水路ＳＧＤ３４からはタケの枝を束ねた箒状の物も検出されている。

製糸用具　また堀ＳＧＤ６７の底部から検出された第９７図５は軸棒の先端に鍵状の取手をホゾ組みで取り付け、紐で固定した痕跡が残るもので、糸繰り機の回転軸の可能性が考えられる。

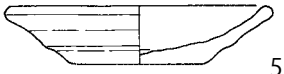
SGD04 上部

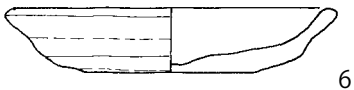
1

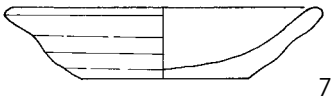

2

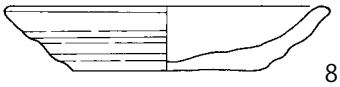

3

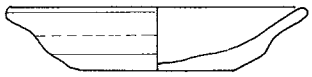
4


5


6

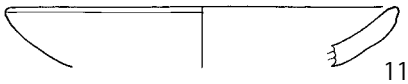

7


8

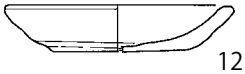

9

SGD04 中位

10


11

SGD04 北壁際

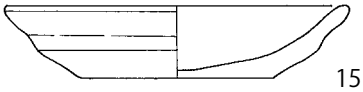

12

SGD04

13

14

SGD05 上部

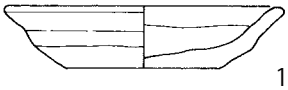

15

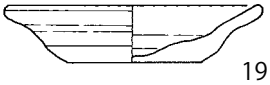
SGD05 中位

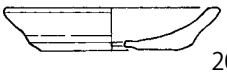
16

17

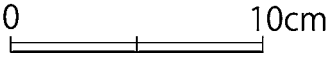
SGD05 底部


18


19


20

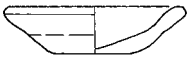
第 42 図　土師質土器 (1)



SGD08 底部

1

SGD15 上部

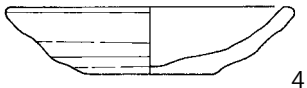


2

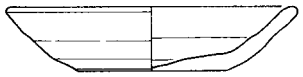
SGD16 上面

3

SGD16 テラス

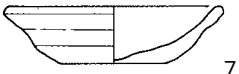


4



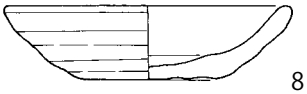
5

6

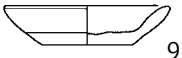


7

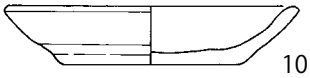
SGD16



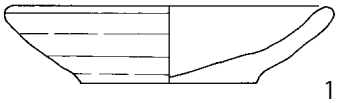
8



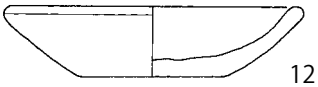
9



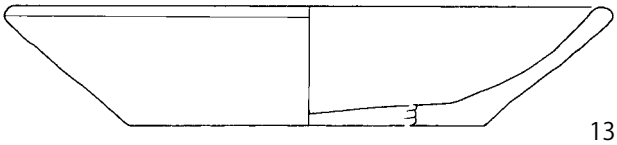
10



11



12



13

SGD17 上面

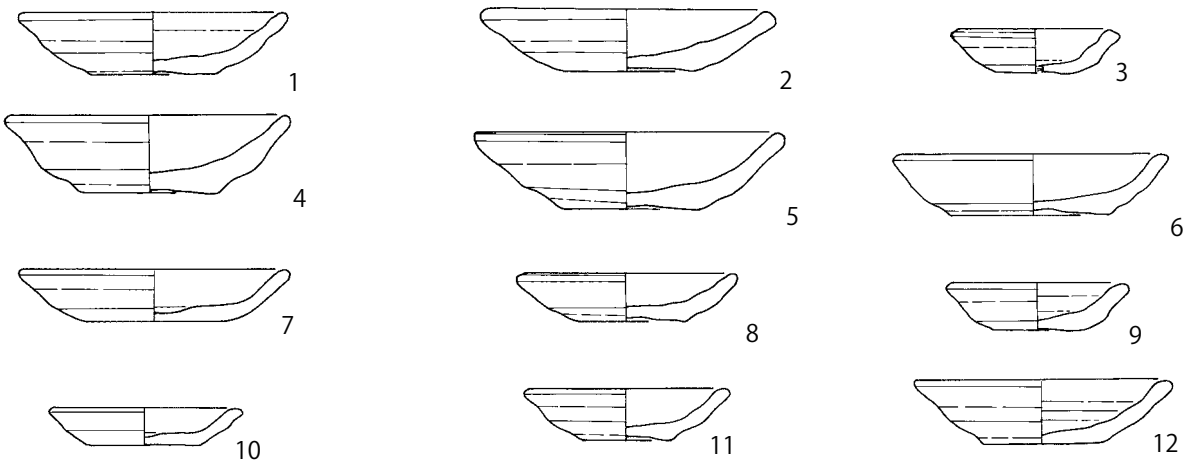
14

15

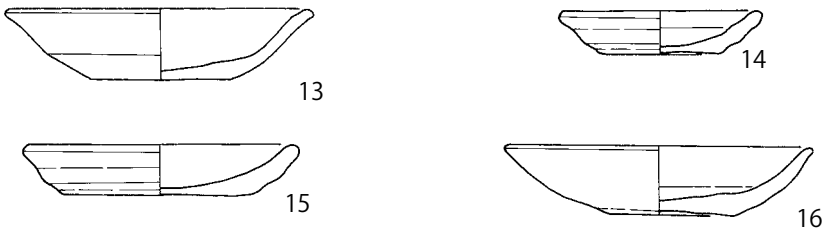
第 43 図　土師質土器 (2)

0　10cm

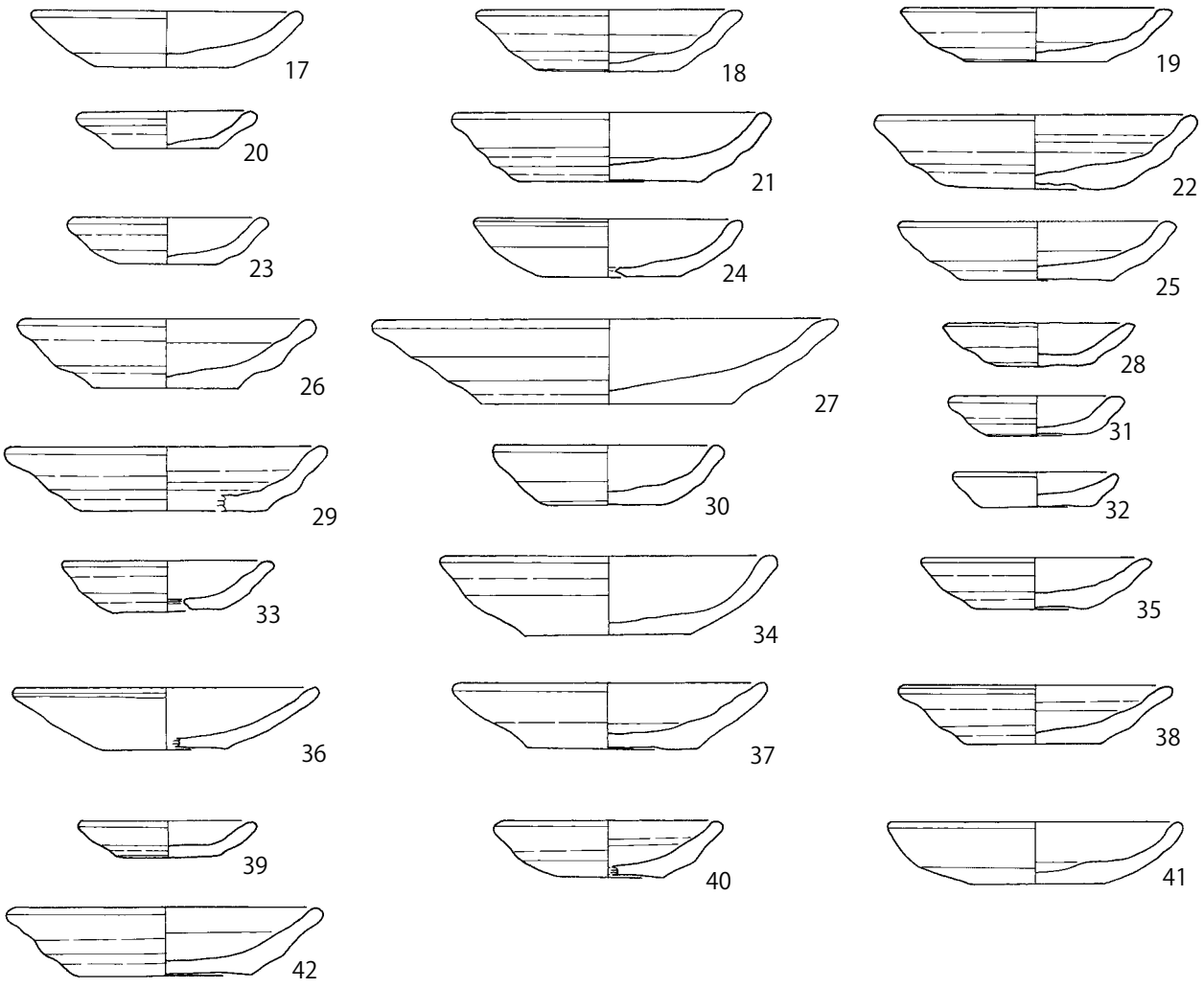
SGD34 旧路



SGD34 新路



SGD34



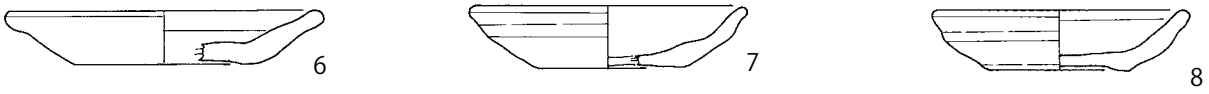
第 44 図　土師質土器 (3)

0　10cm

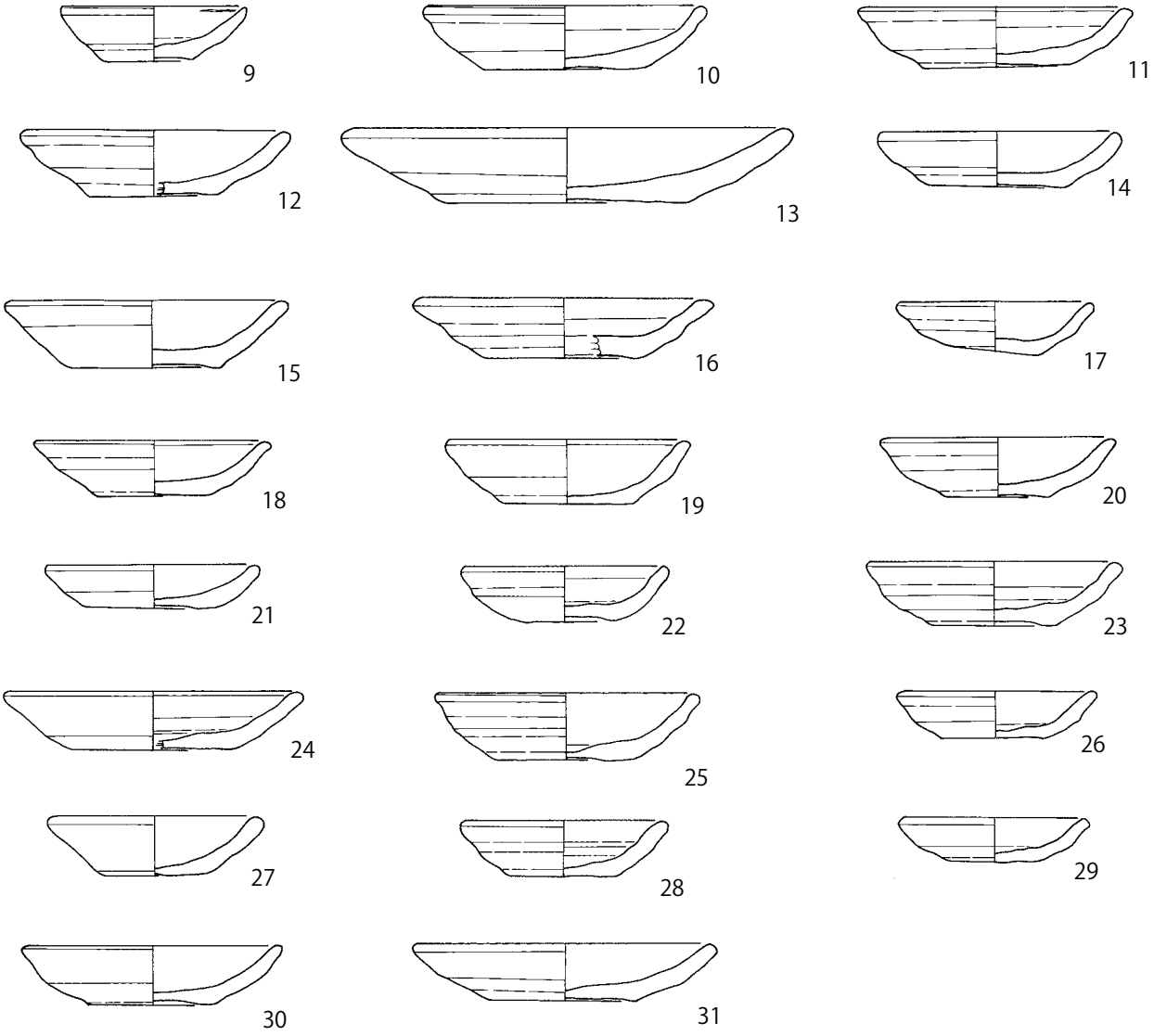
SGD37

SGD39

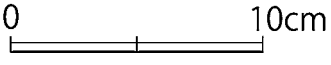
SGD56 サブトレ内



SGD56

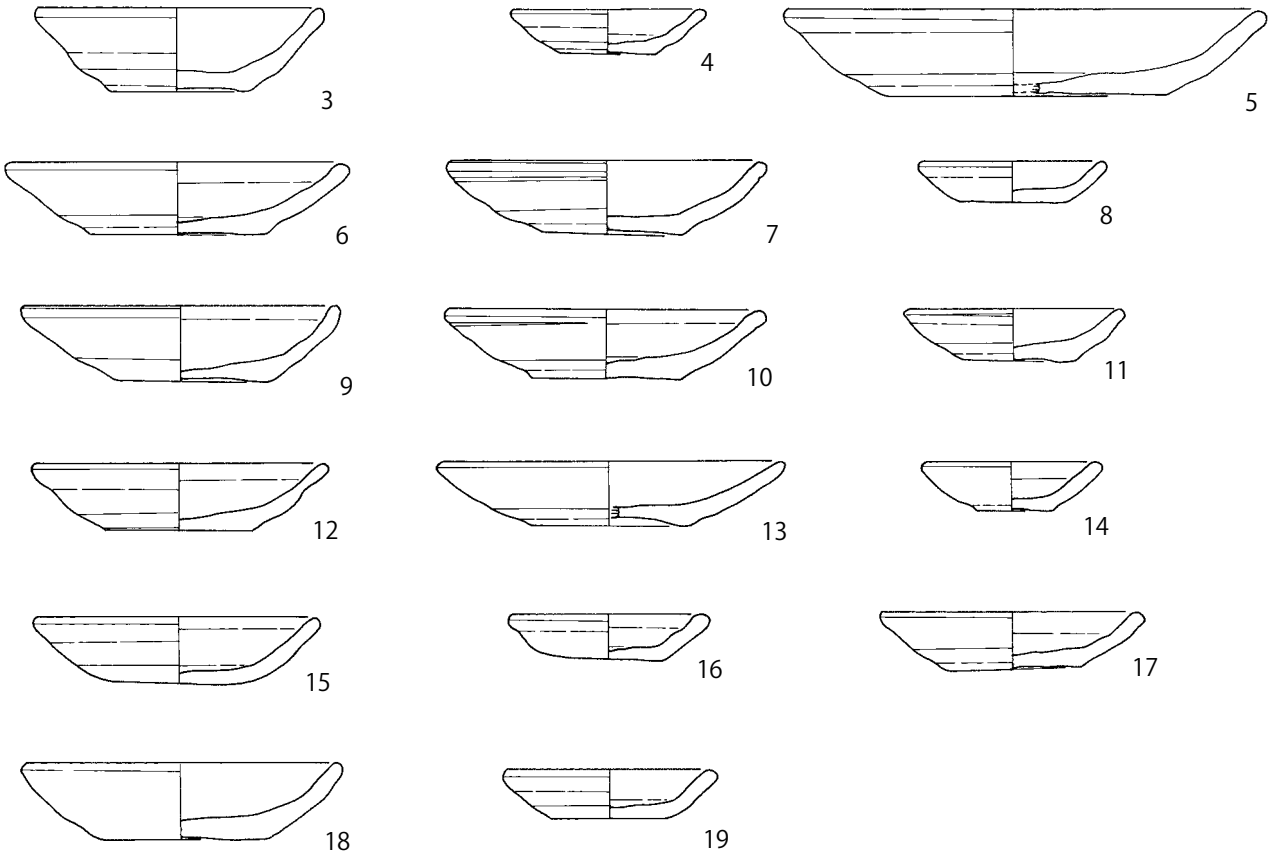


第 45 図　土師質土器 (4)



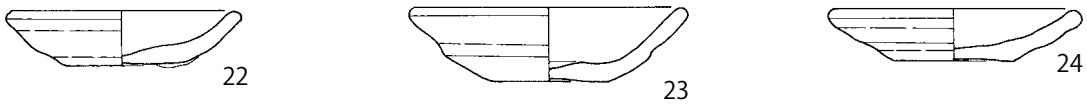
SGD60

SGD67

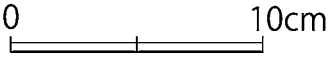


SGD68

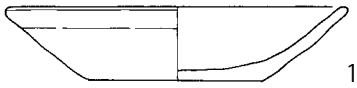
SGD112



第 46 図　土師質土器 (5)



SGD42



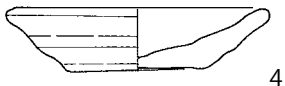
1

SGK117

2

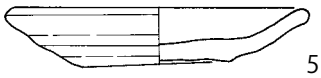
SGK124

3



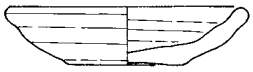
4

SGK153

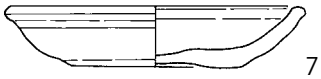


5

SGK187 内

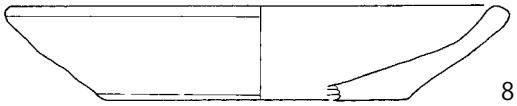


6

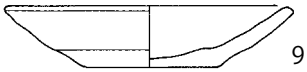


7

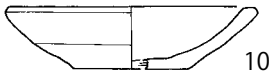
SGP02



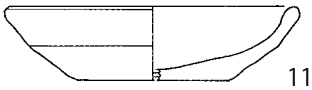
8



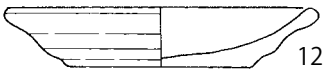
9



10

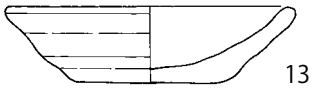


11



12

SGE05

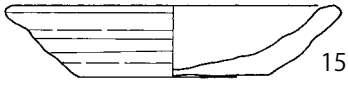


13

SGE06

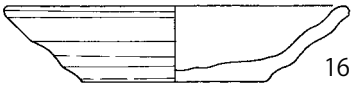
14

189 号柱穴内



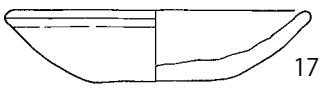
15

2026 号柱上



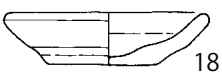
16

SGB35



17

柱穴

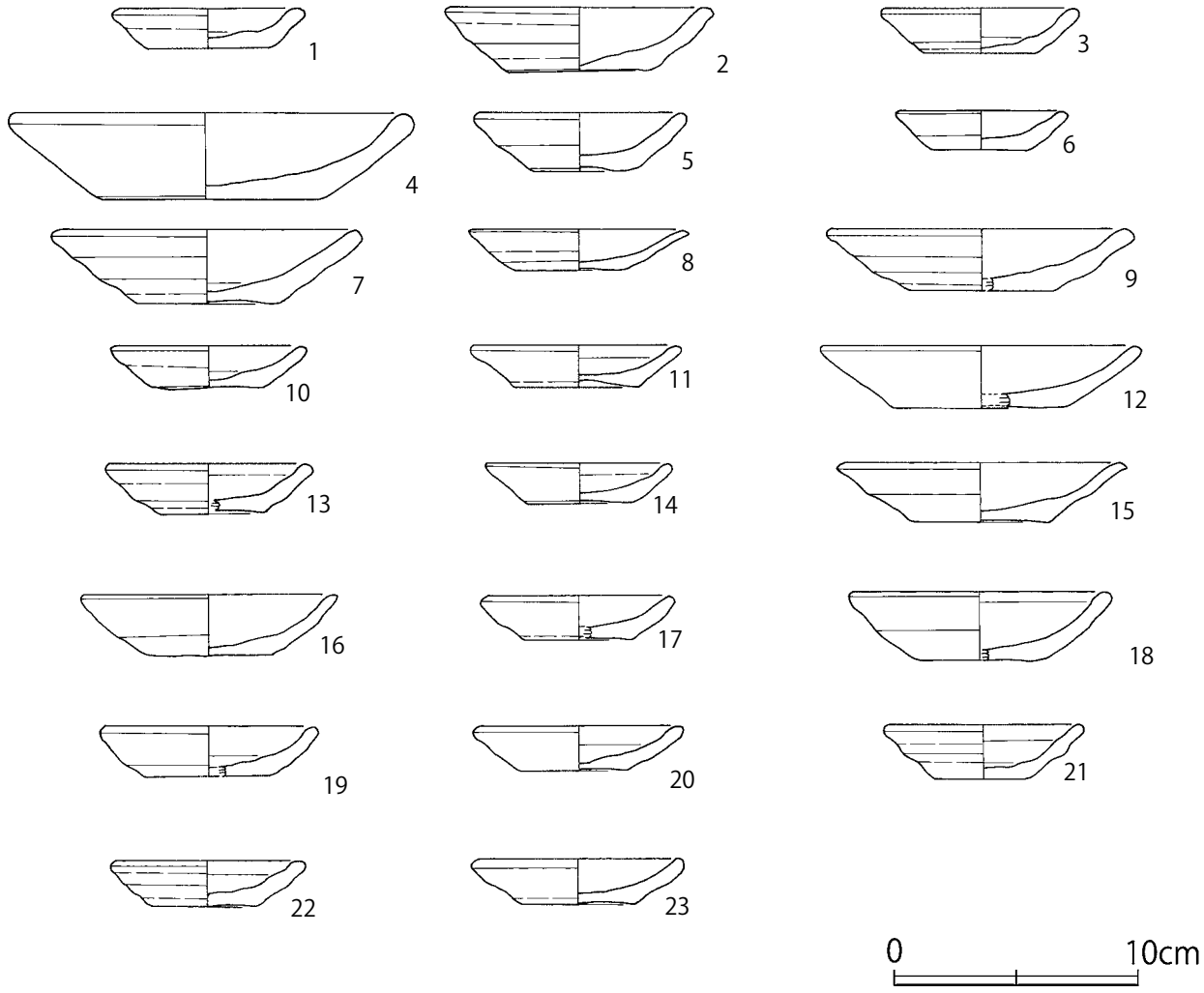


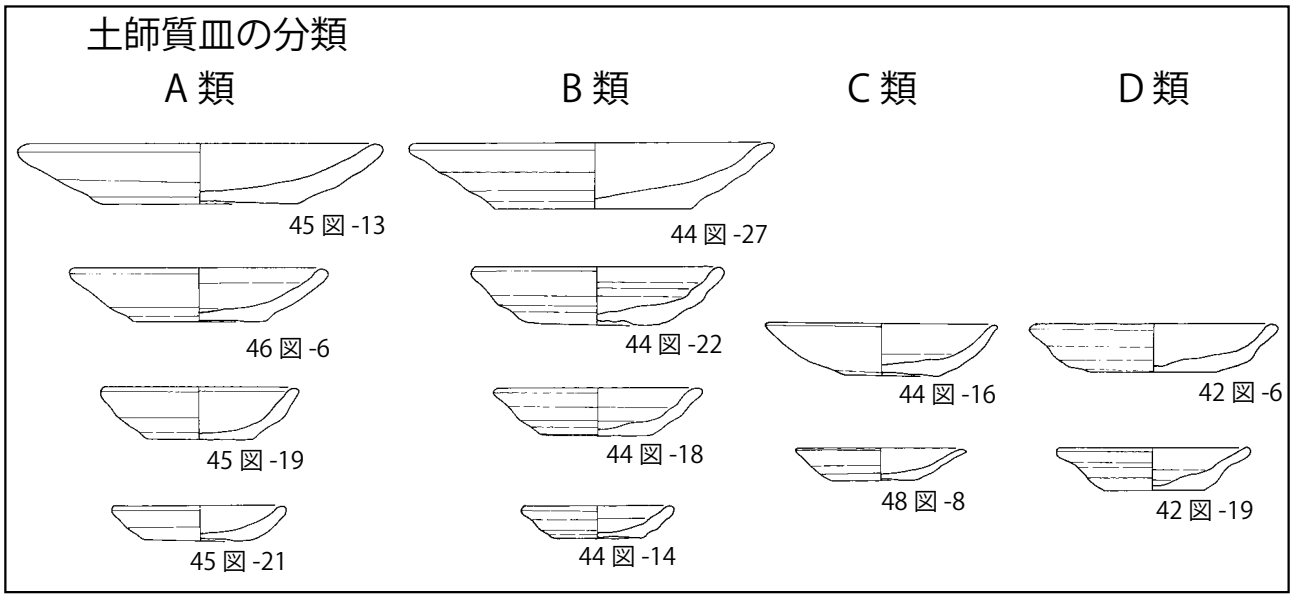
18

第 47 図　土師質土器 (6)

0　10cm

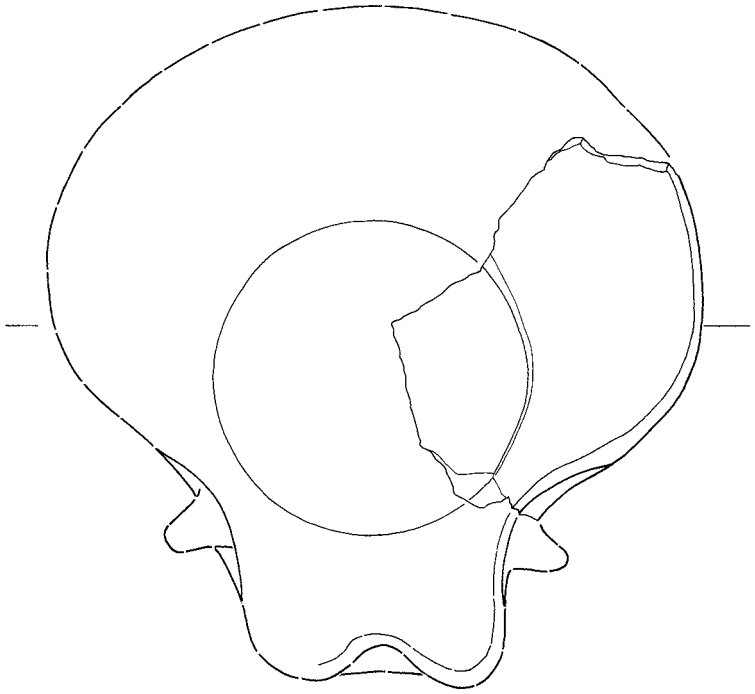
遺構外

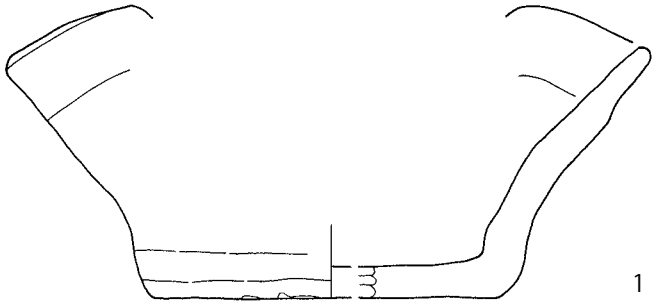




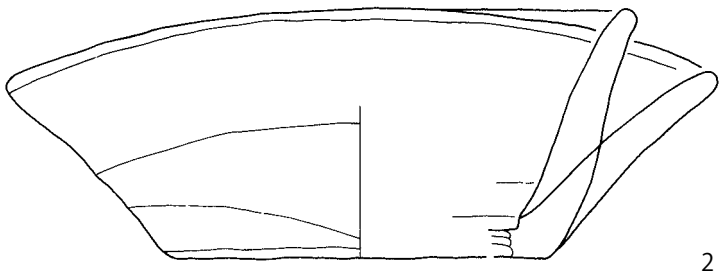
第 48 図　土師質土器 (7)

鍋 A





1

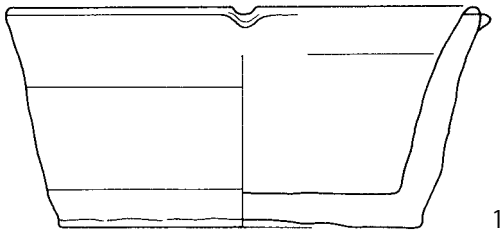


2

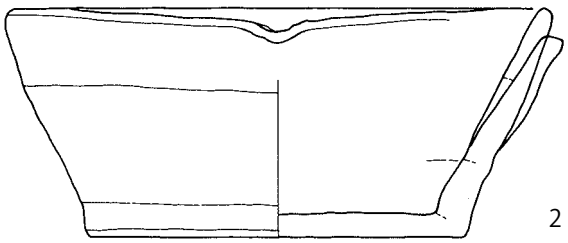
第 49 図　瓦質土器 (1)

0　10cm

鍋 B-1

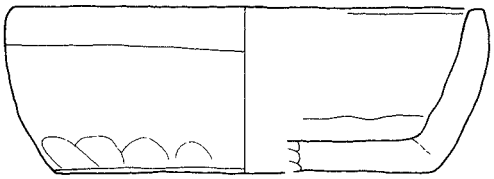


1



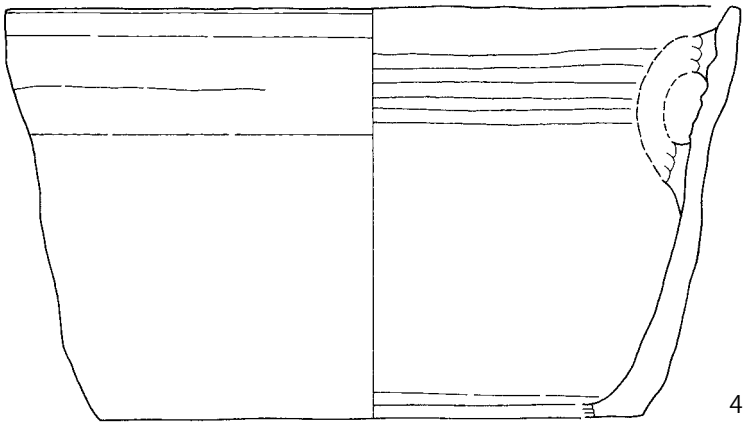
2

鍋 B-2

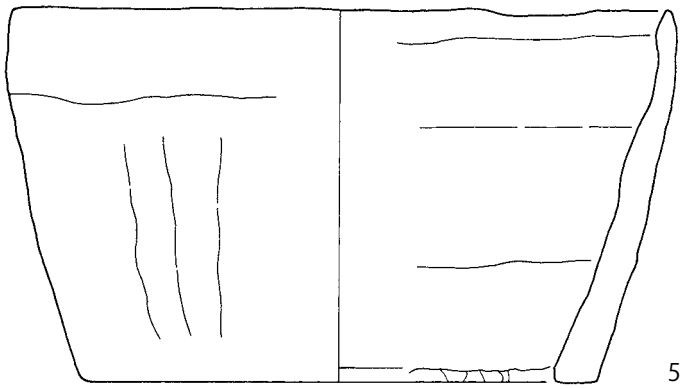


3

鍋 C



4

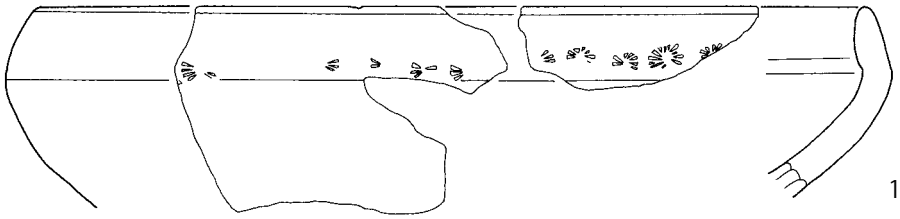


5

第 50 図　瓦質土器 (2)

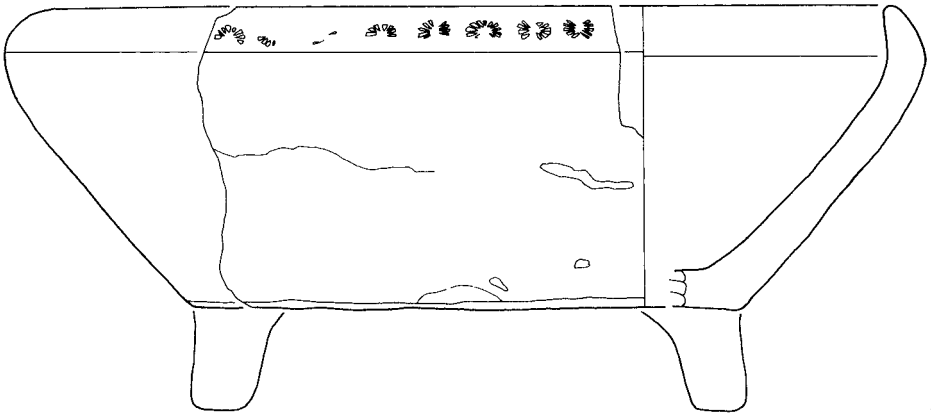
0　10cm

火鉢 A



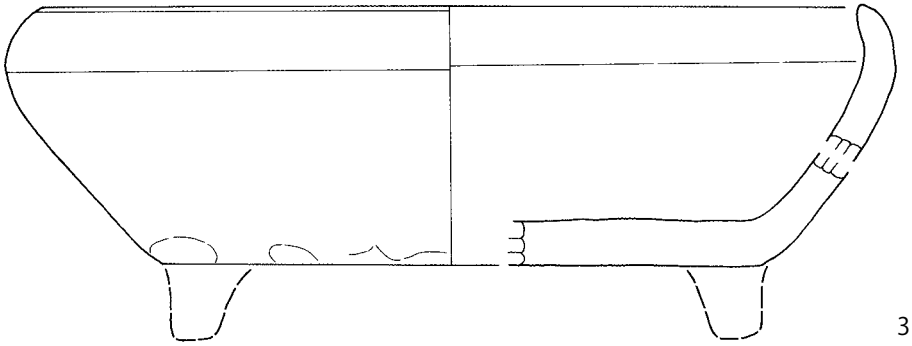
1

火鉢 B



2

火鉢 C



3

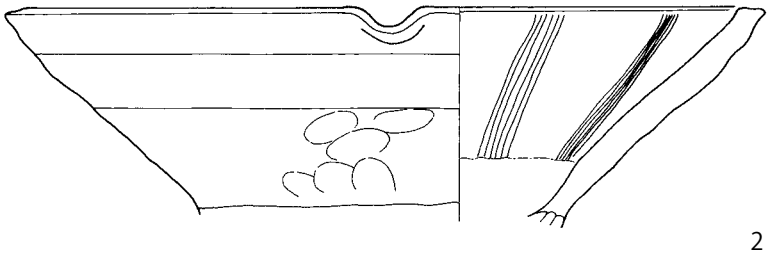
第 51 図　瓦質土器 (3)

0　10cm

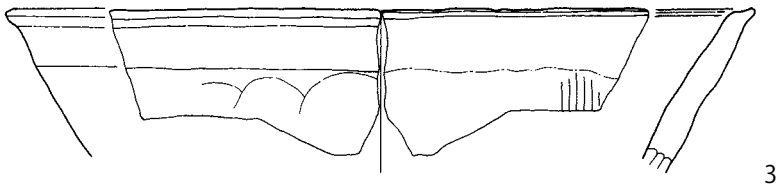
擂鉢 A

1

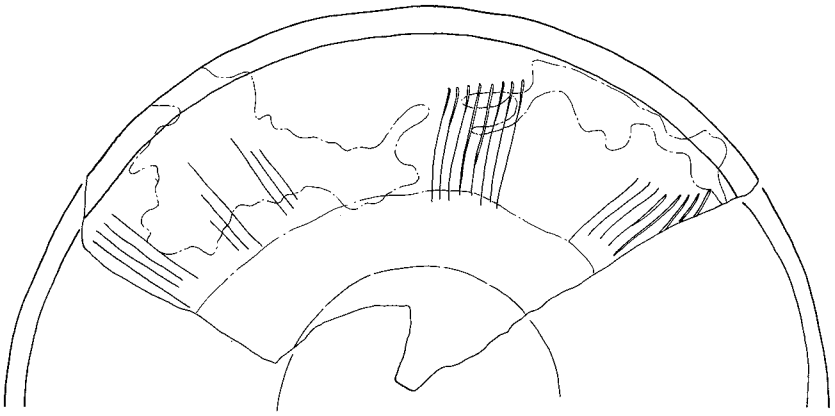
擂鉢 B



2



3

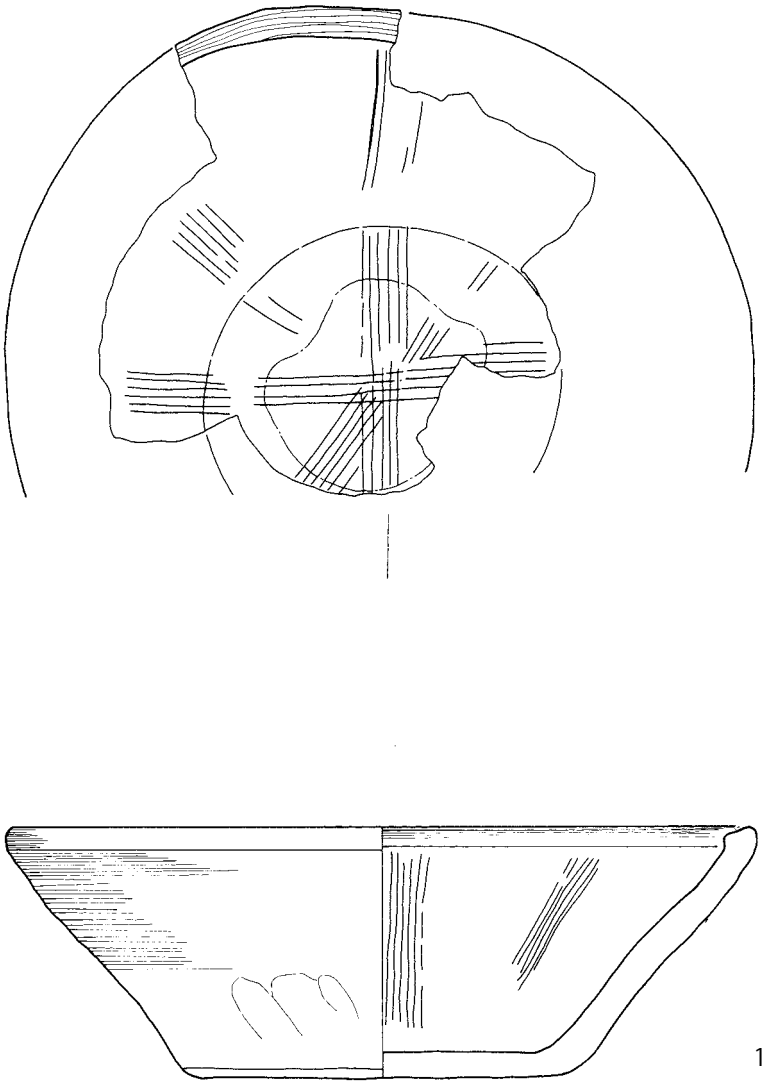


4

第 52 図　瓦質土器 (4)

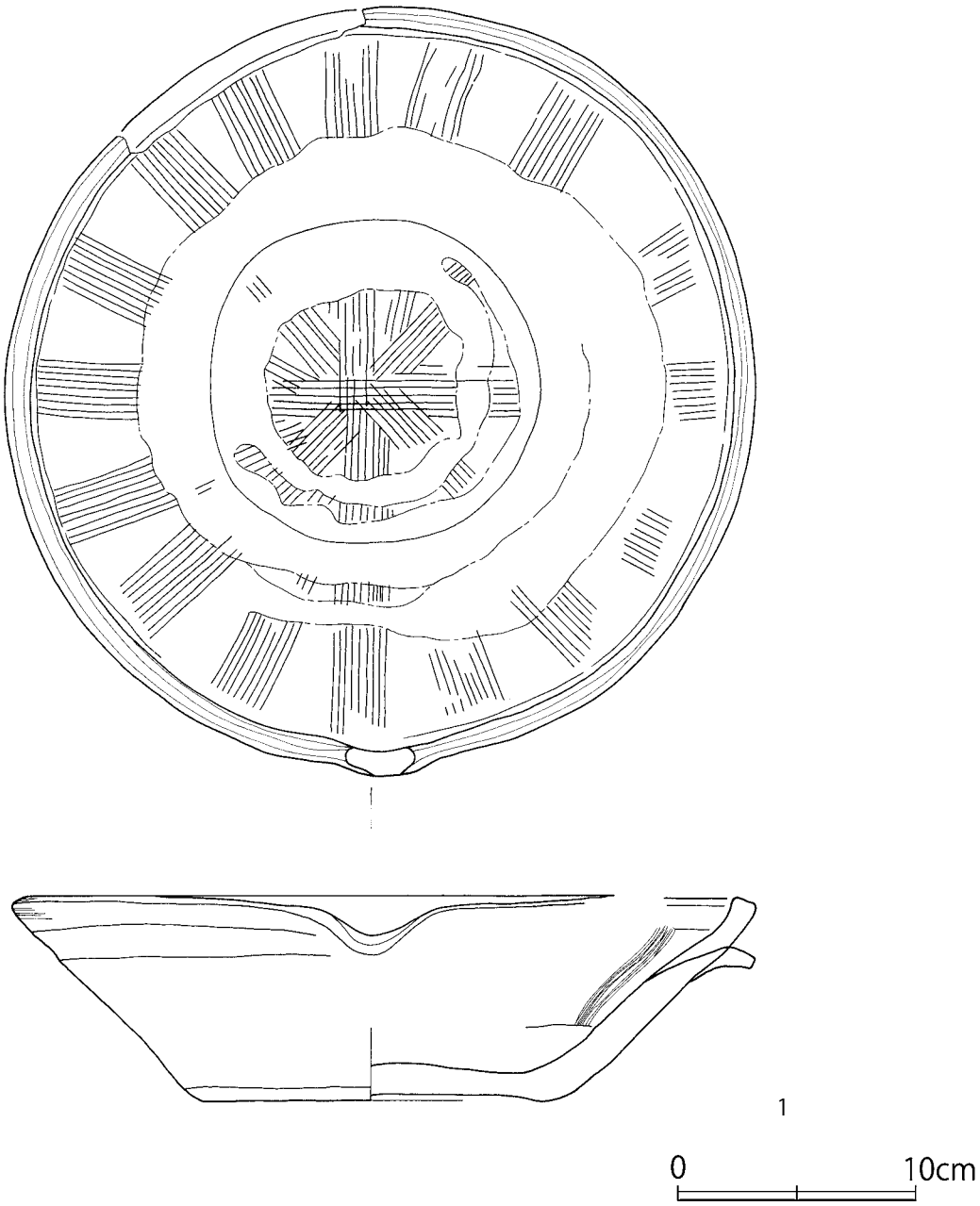
0　10cm

擂鉢 B



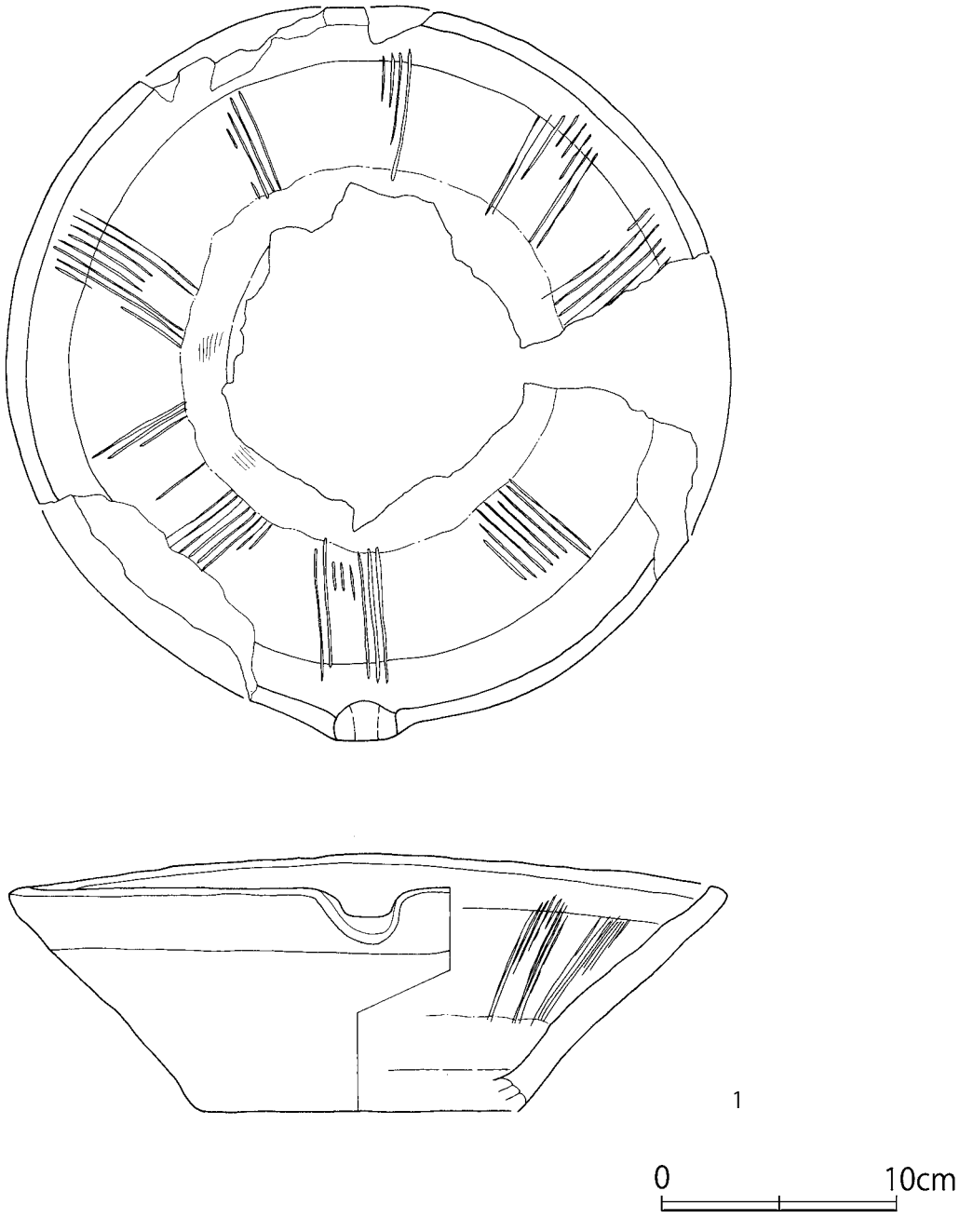
第 53 図　瓦質土器 (5)

擂鉢 B



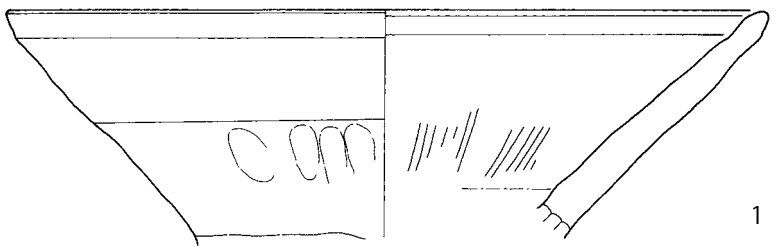
第 54 図　瓦質土器 (6)

擂鉢 C

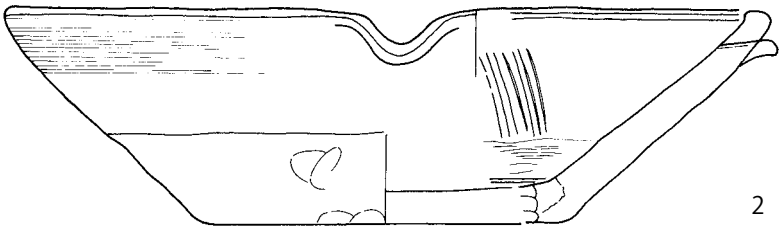


第 55 図　瓦質土器 (7)

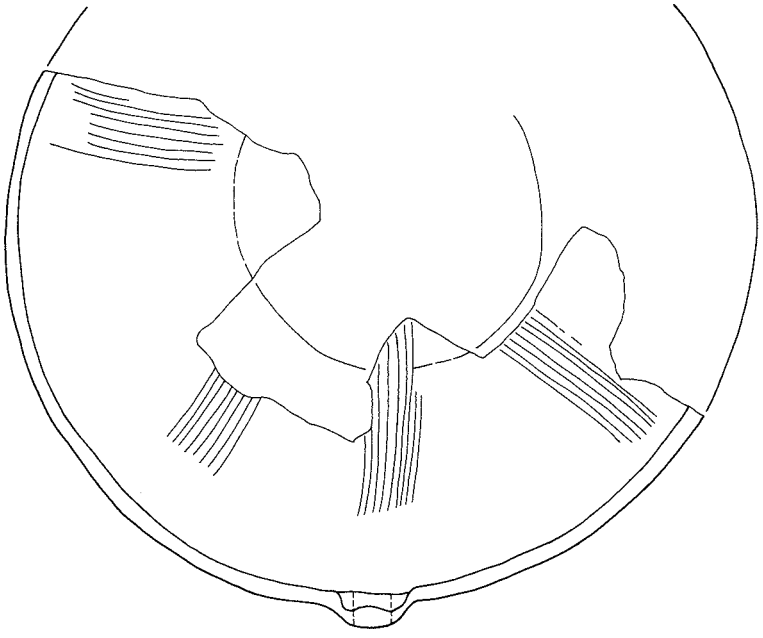
擂鉢 C

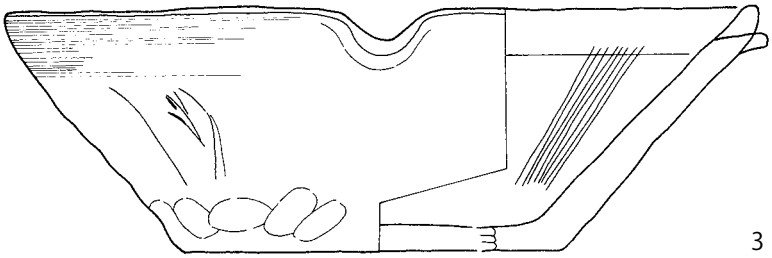


1



2



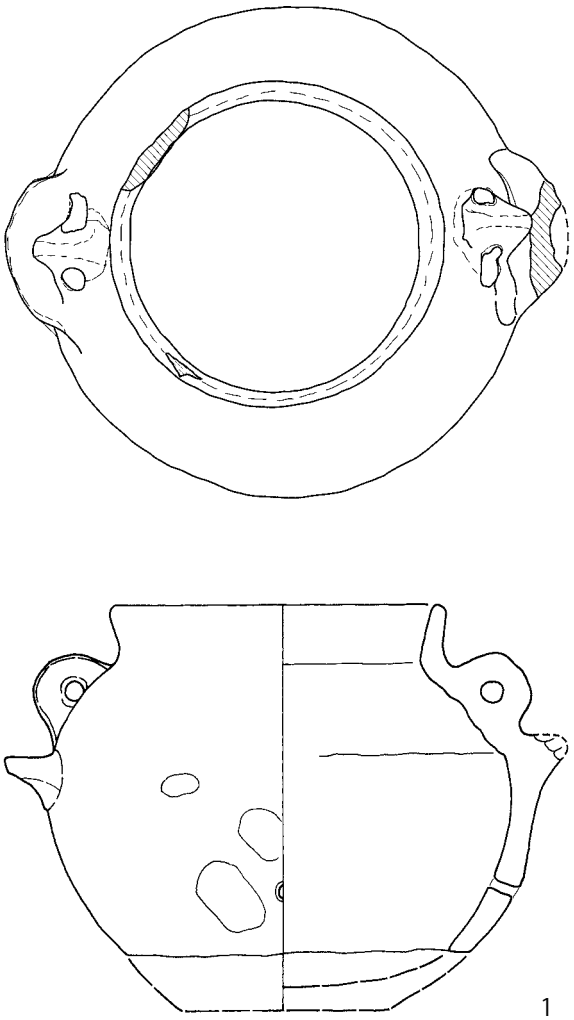


3

第 56 図　瓦質土器 (8)

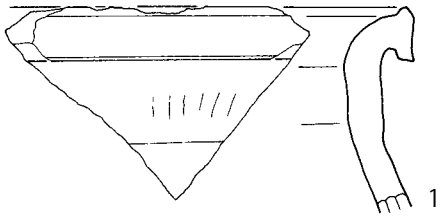
0　10cm

茶釜

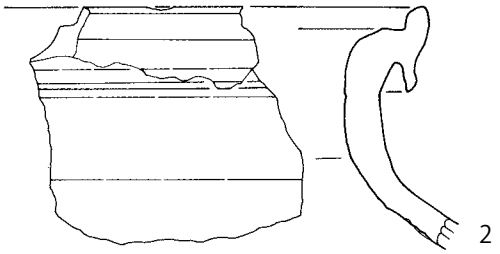


第 57 図　瓦質土器 (9)

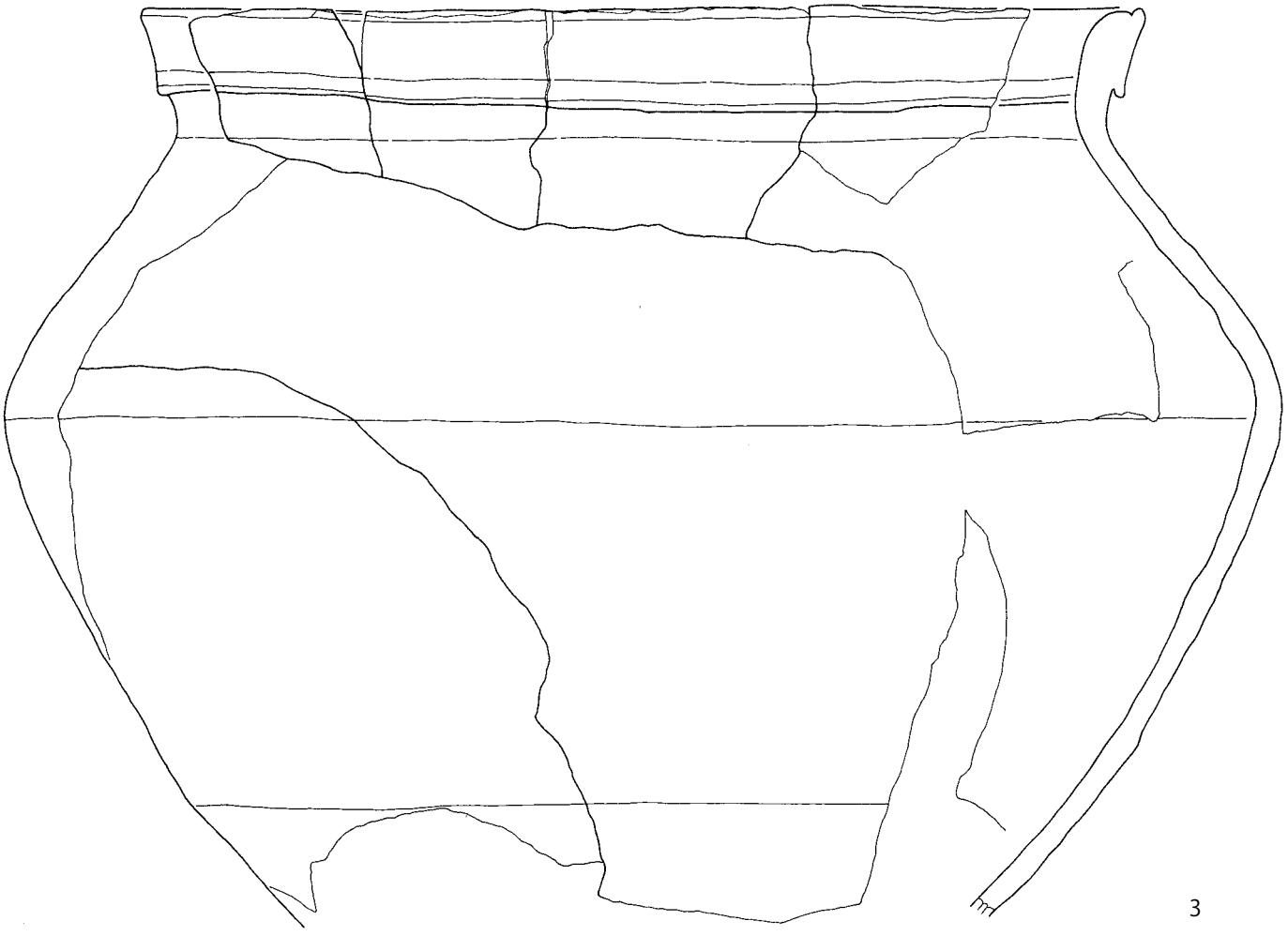
常滑 A

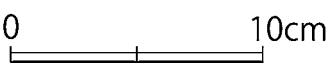


常滑 B



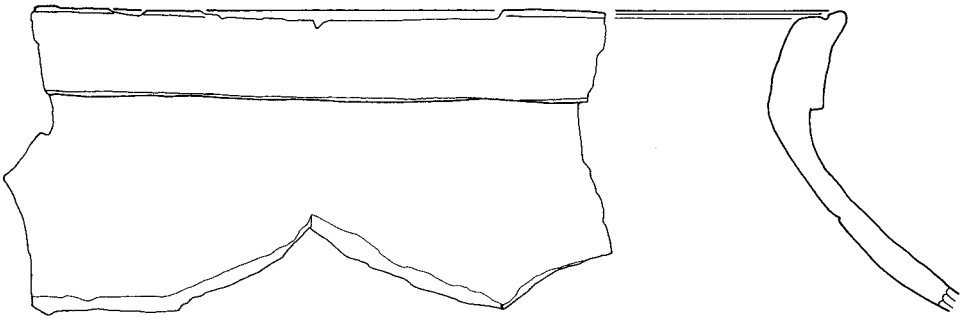
常滑 C



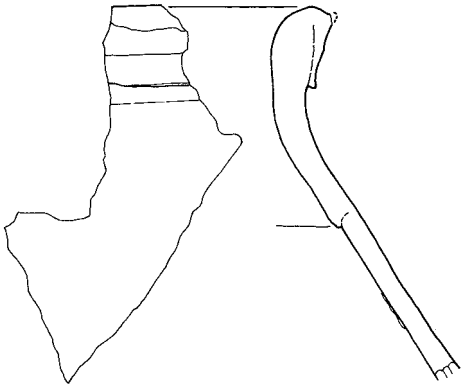


第 58 図　常滑 (1)

常滑 C

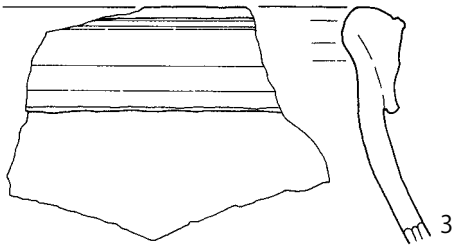


1



2

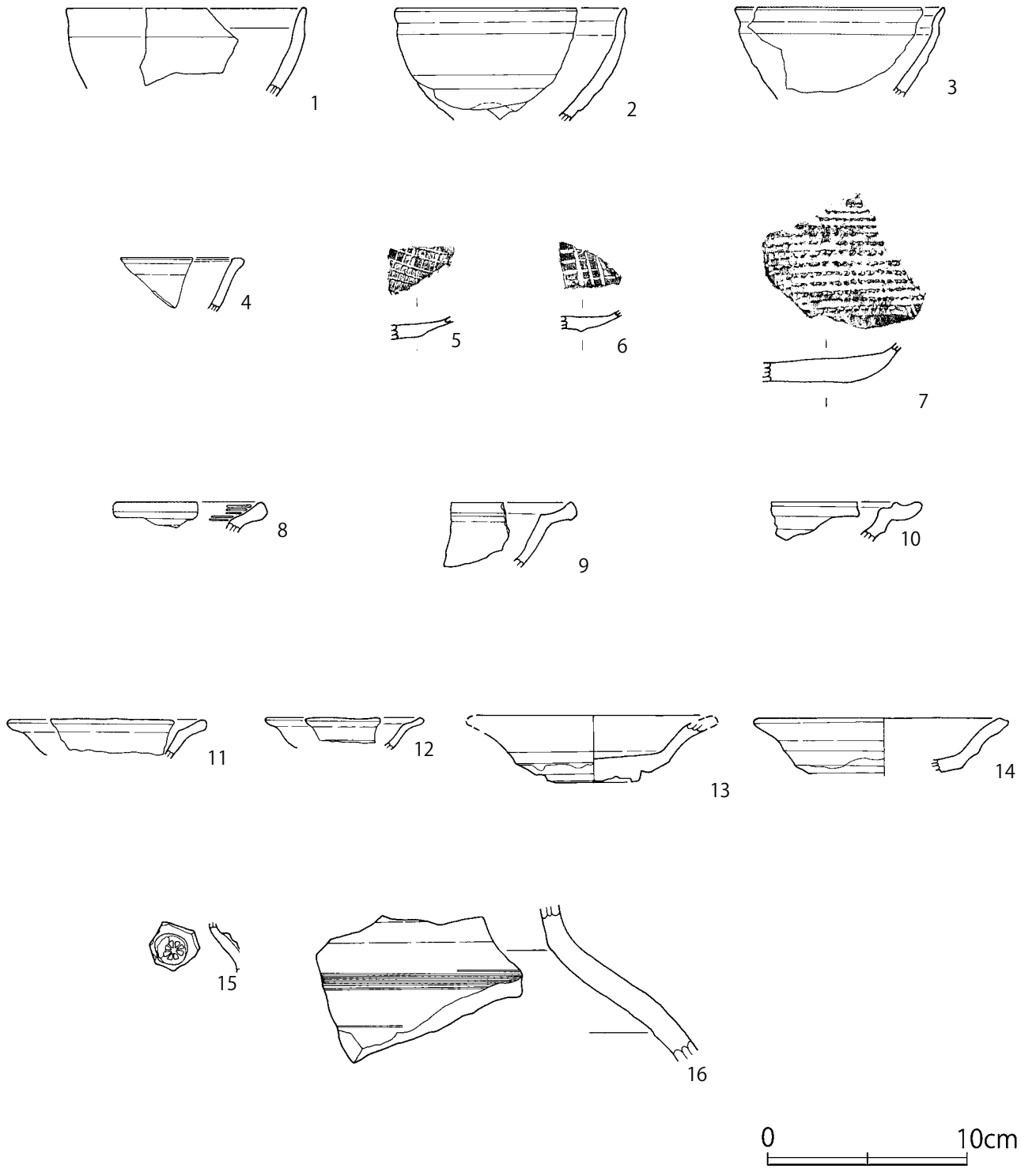
常滑 D



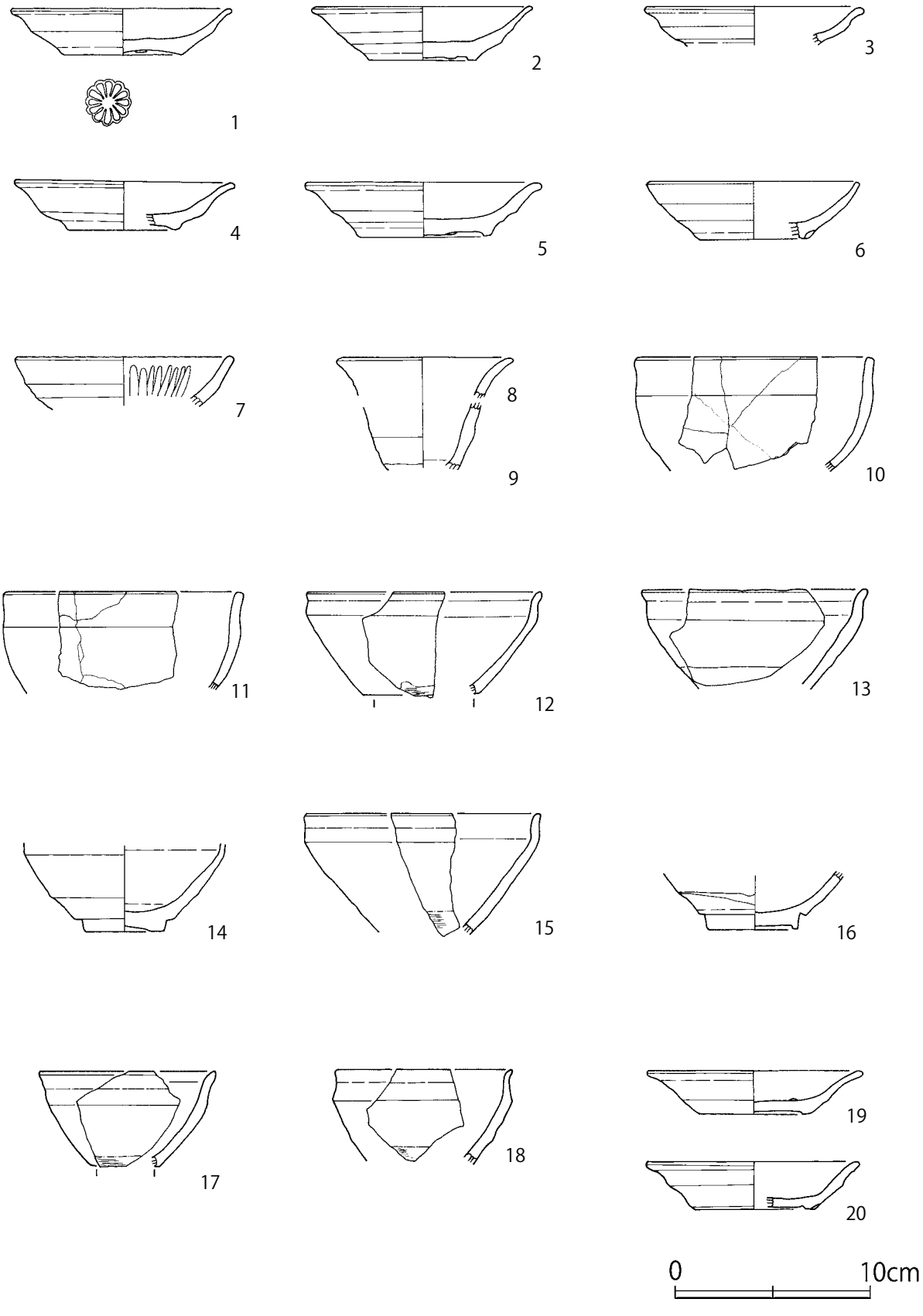
3

第 59 図　常滑 (2)

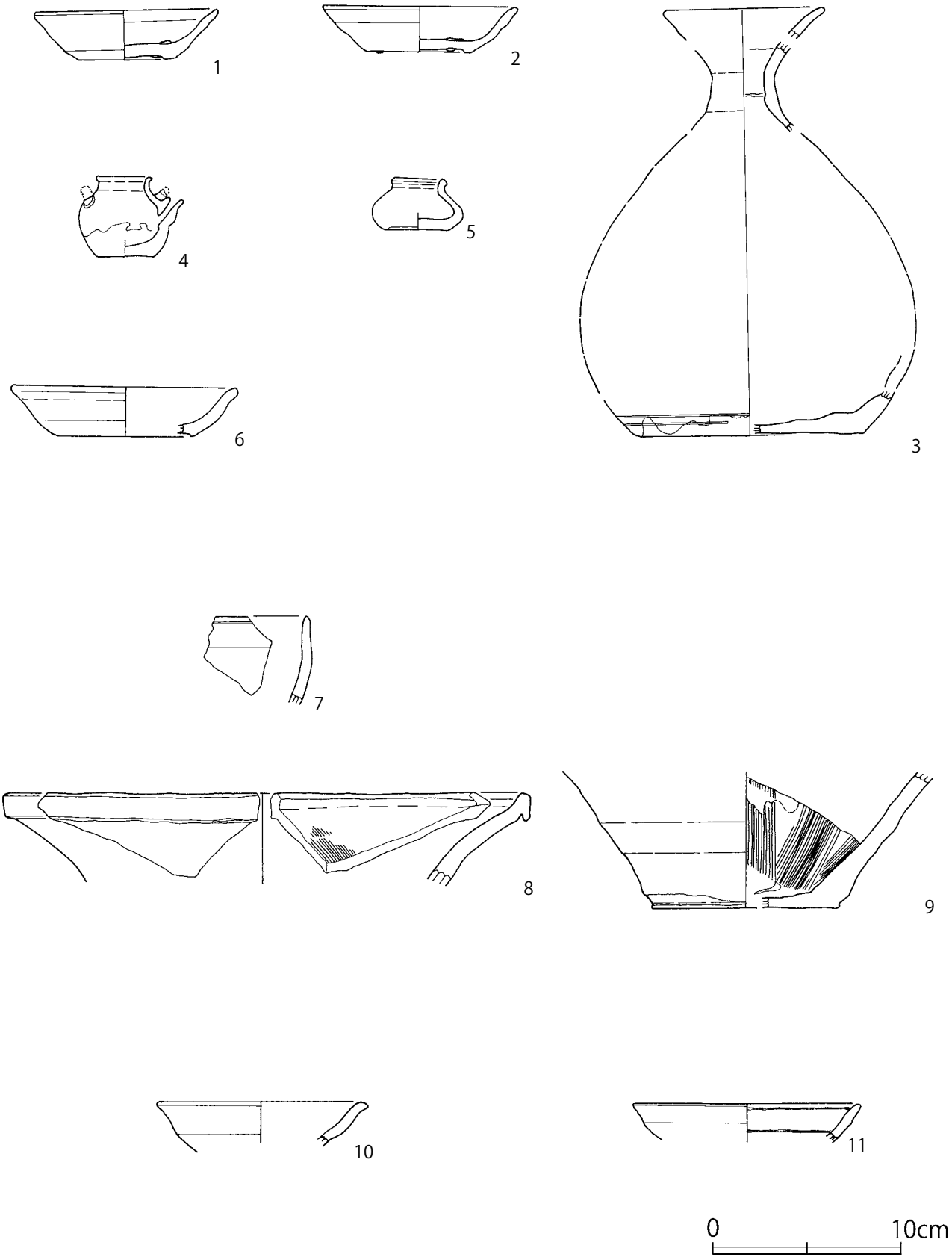
0　10cm



第 60 図　古瀬戸

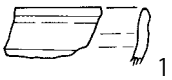


第 61 図　瀬戸大窯 (1)

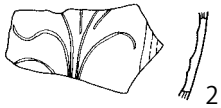


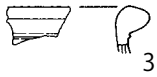
第 62 図　瀬戸大窯 (2)・連房

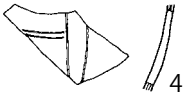
中国産　天目

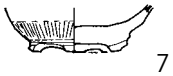


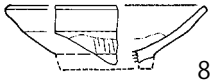
白磁

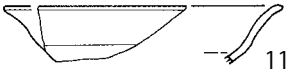


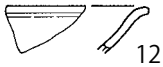


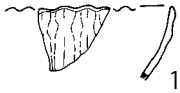


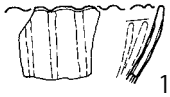


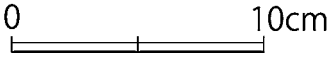






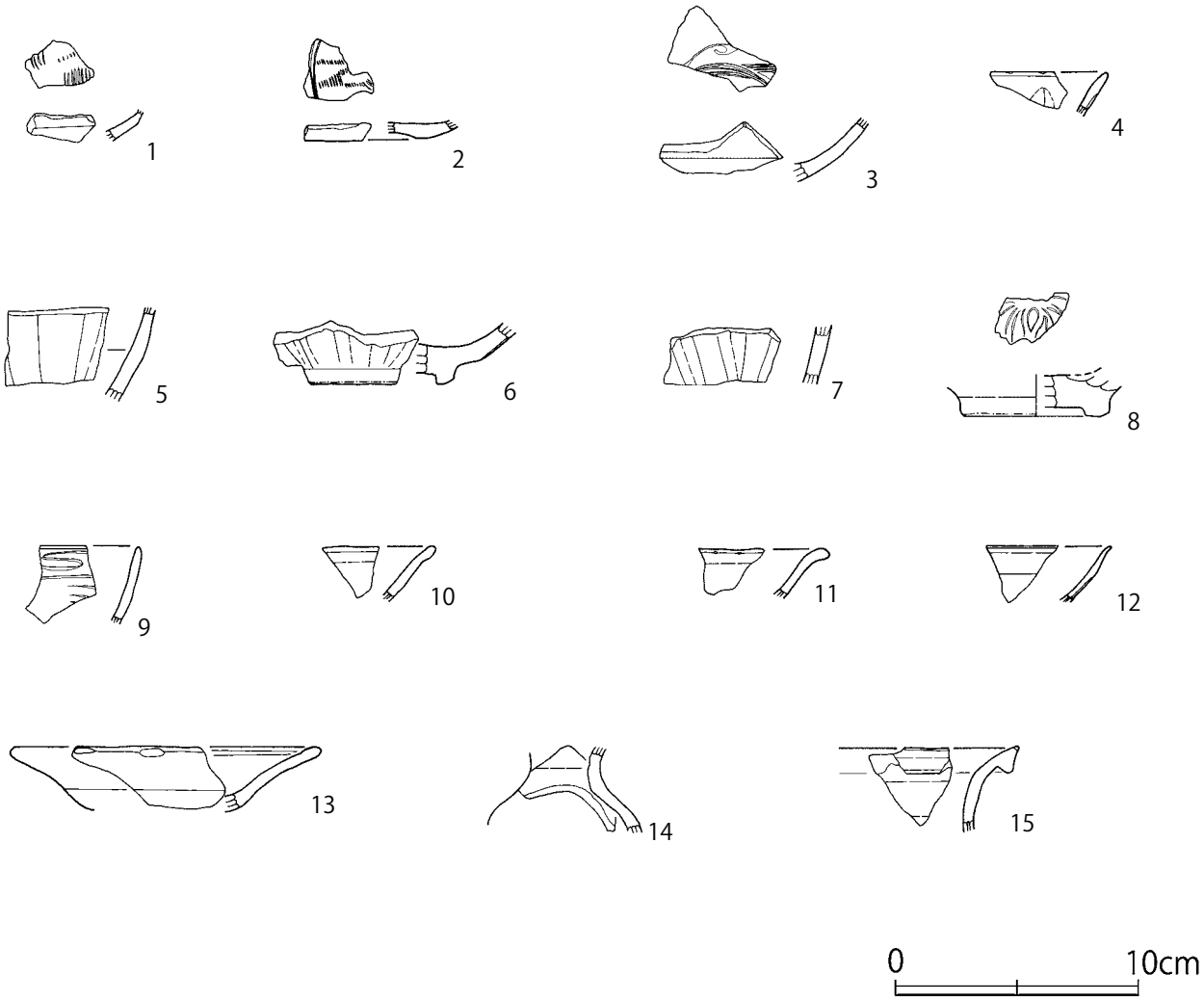




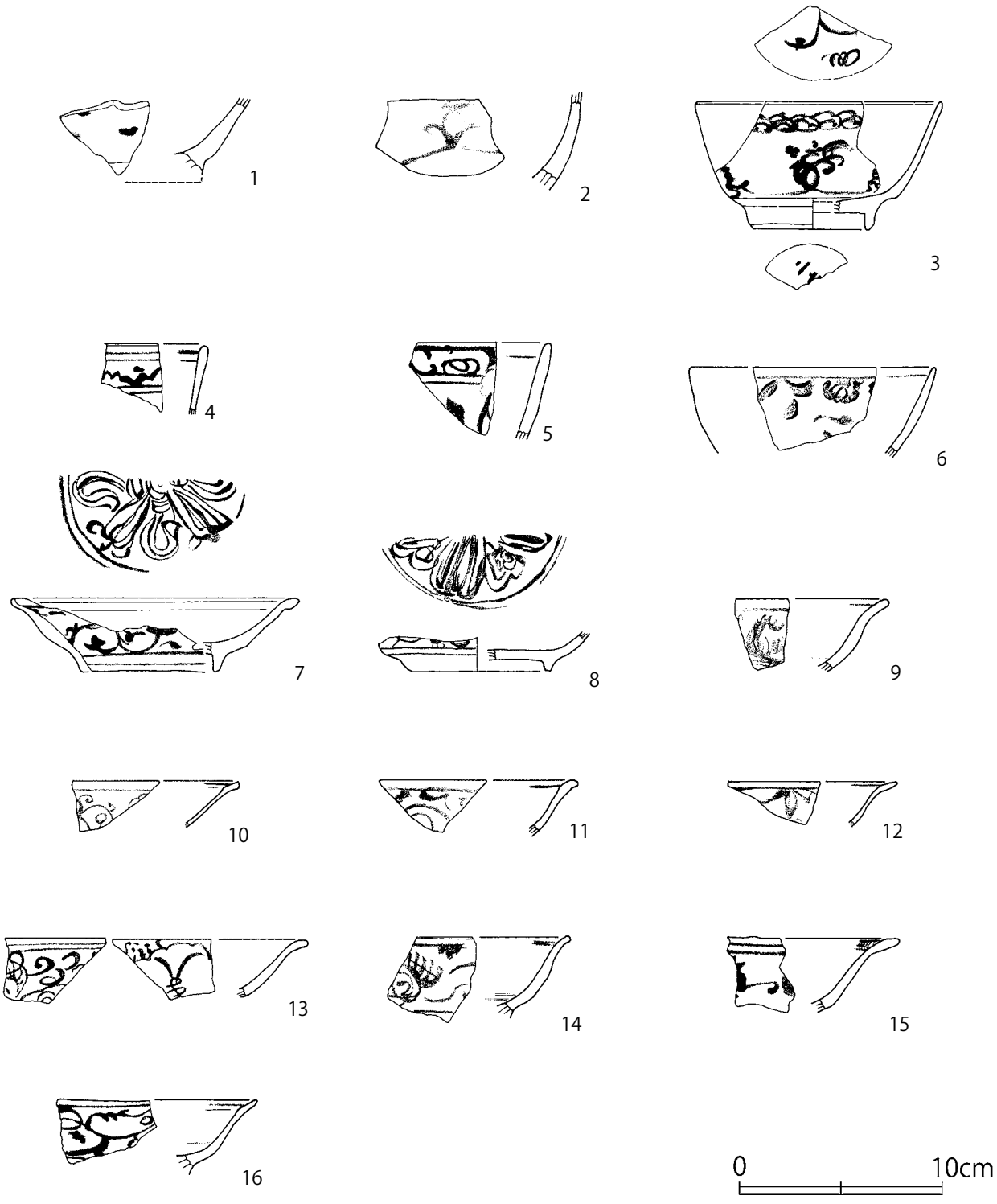


第 63 図　天目・白磁

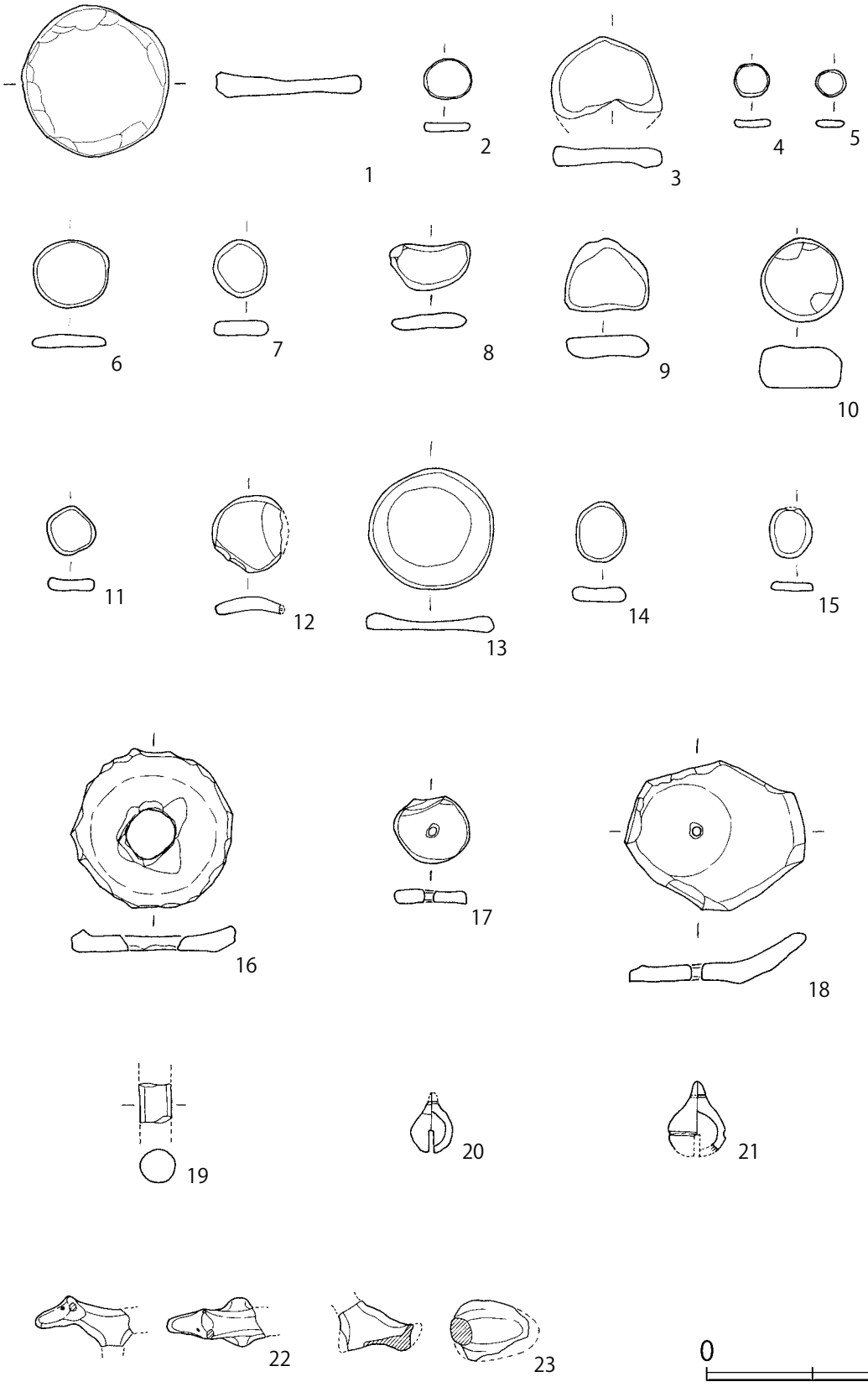
青磁



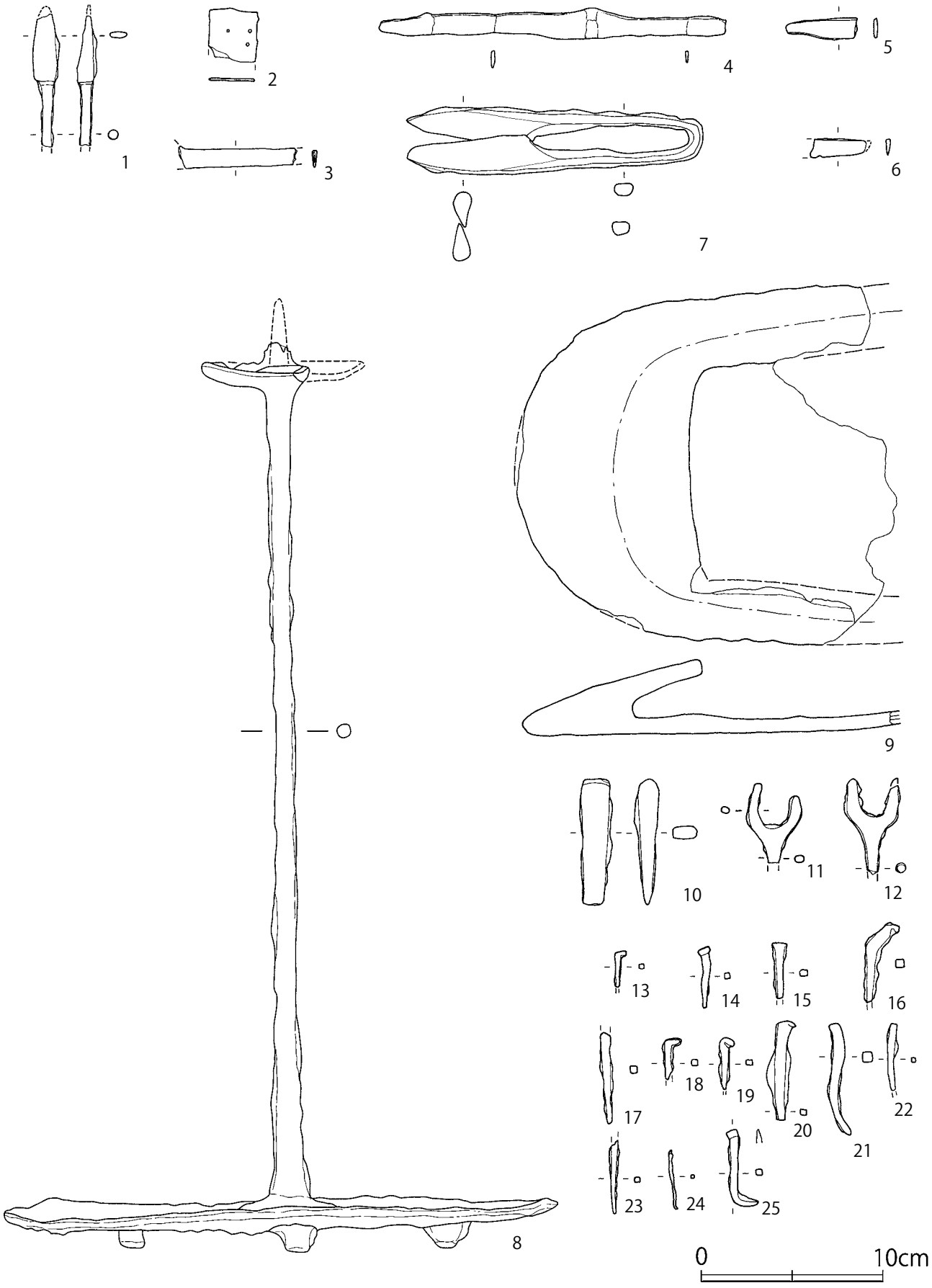
第 64 図　青磁



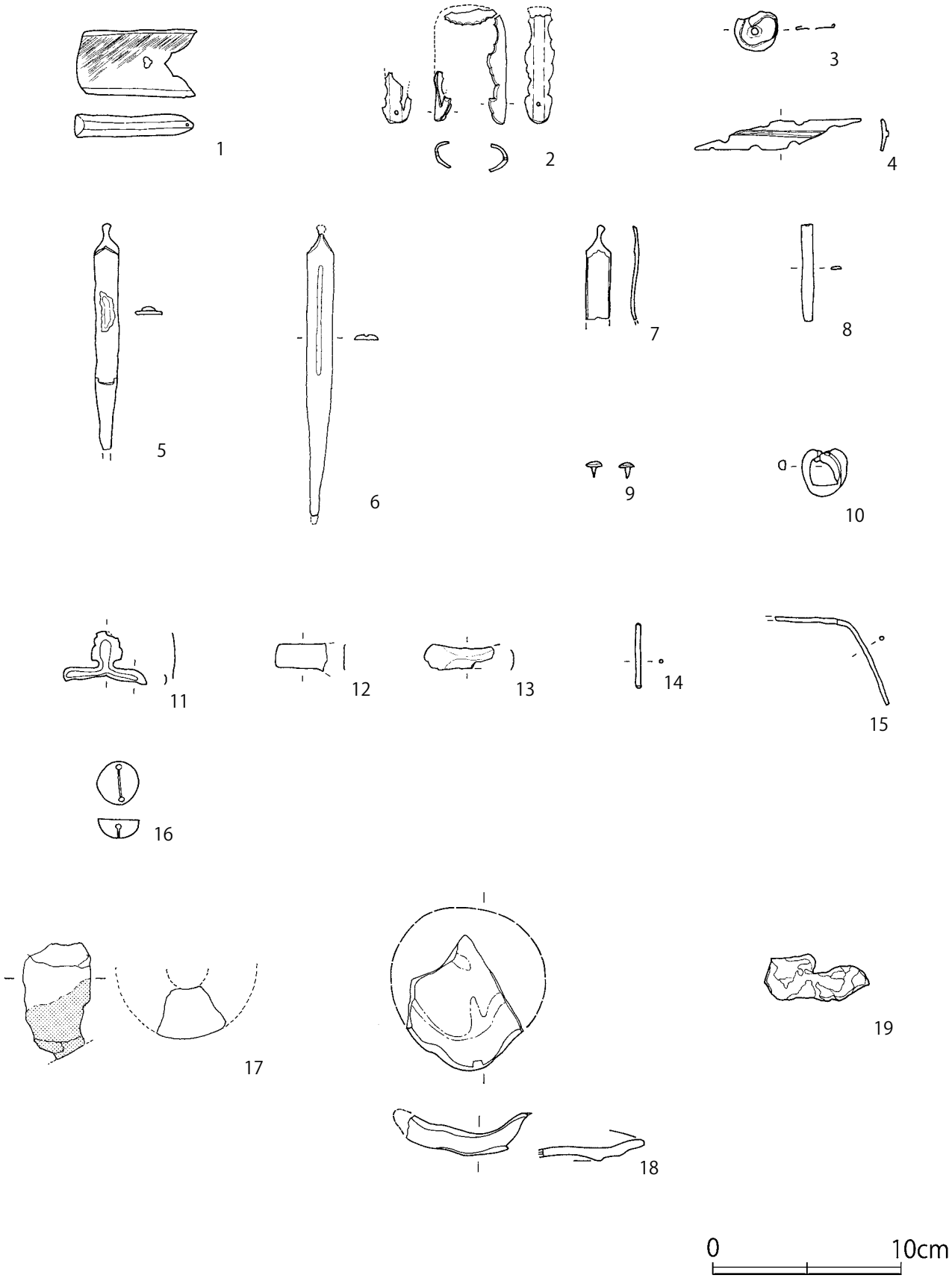
第 65 図　染付



第 66 図　土製品



第 67 図　金属製品 (1)



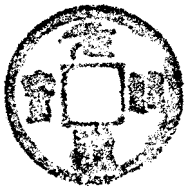
第 68 図　金属製品 (2)・金属加工関係品

皇宋通寶　1

至道元寶　2

大定通寶　3

至□□寶　4


元祐通寶　5

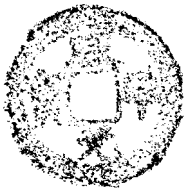
洪武通寶　6

大観通寶　7

元祐通寶　8

洪武通寶　9

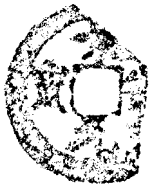
開元通寶　10


治平元寶　11

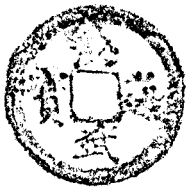
治平元寶　12

永楽通寶　13

治平元寶　14


景徳元寶　15

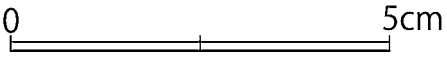
紹聖元寶　16


洪武通寶　17

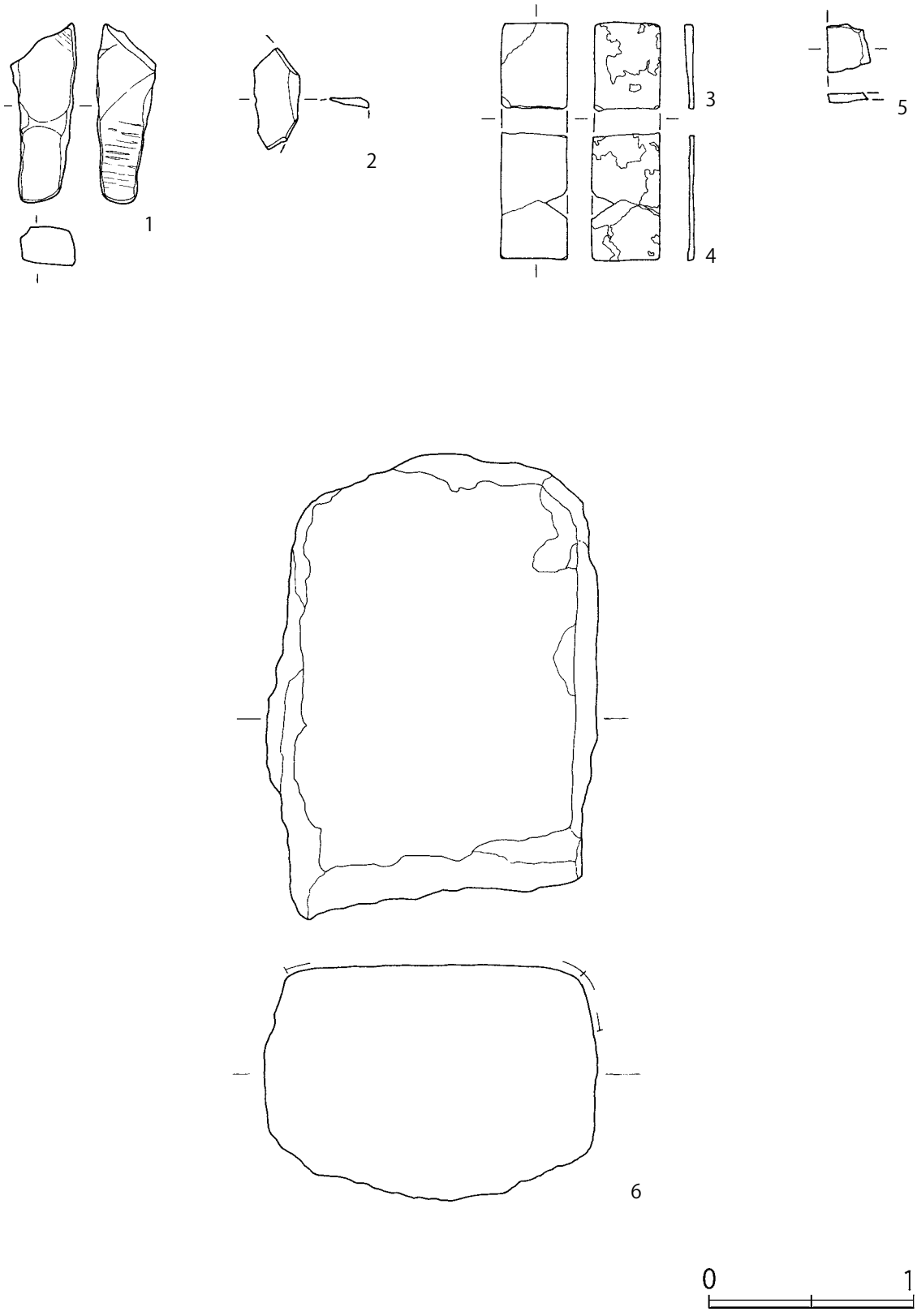
洪武通寶　18

永楽通寶　19

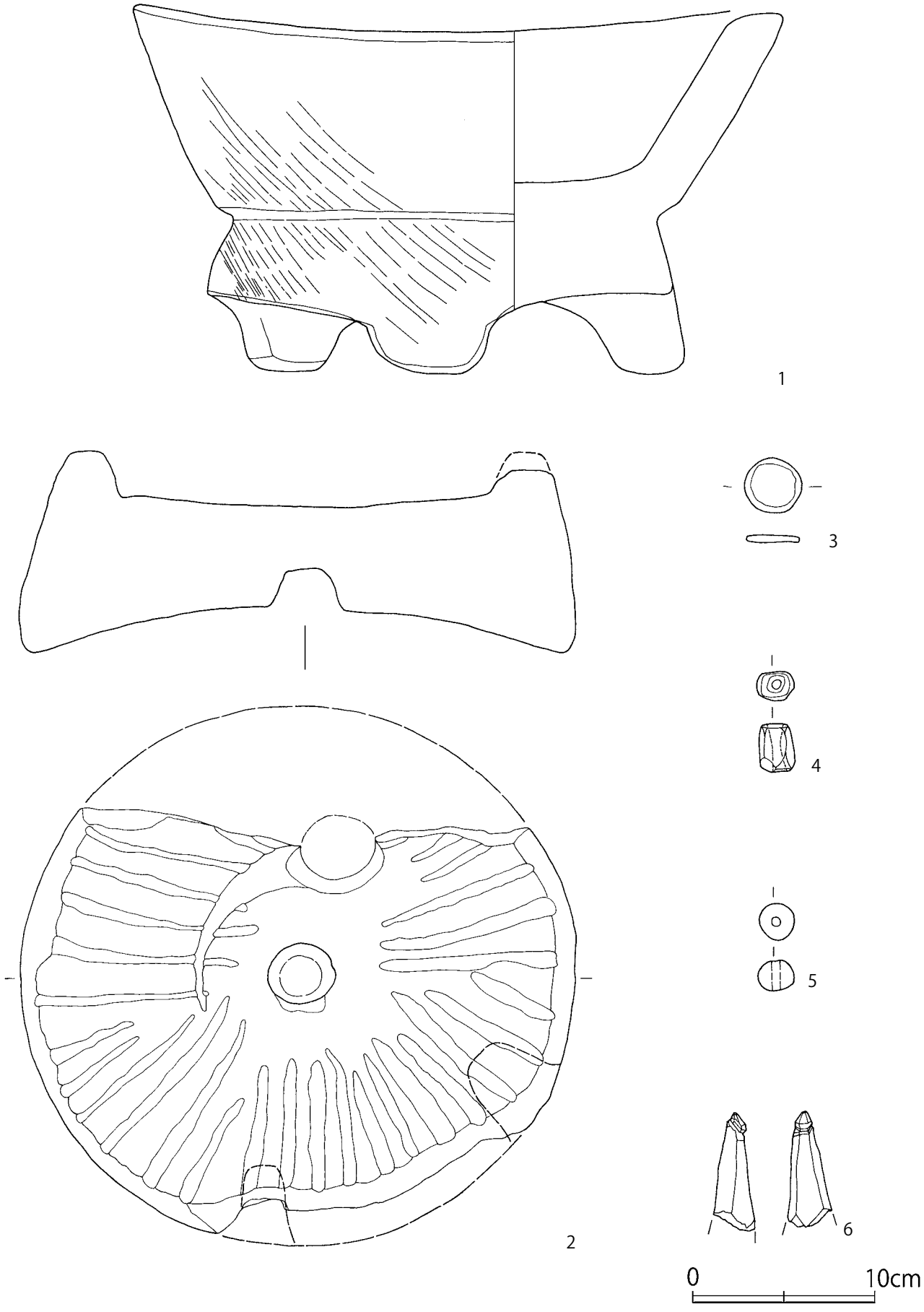
天□通寶　20



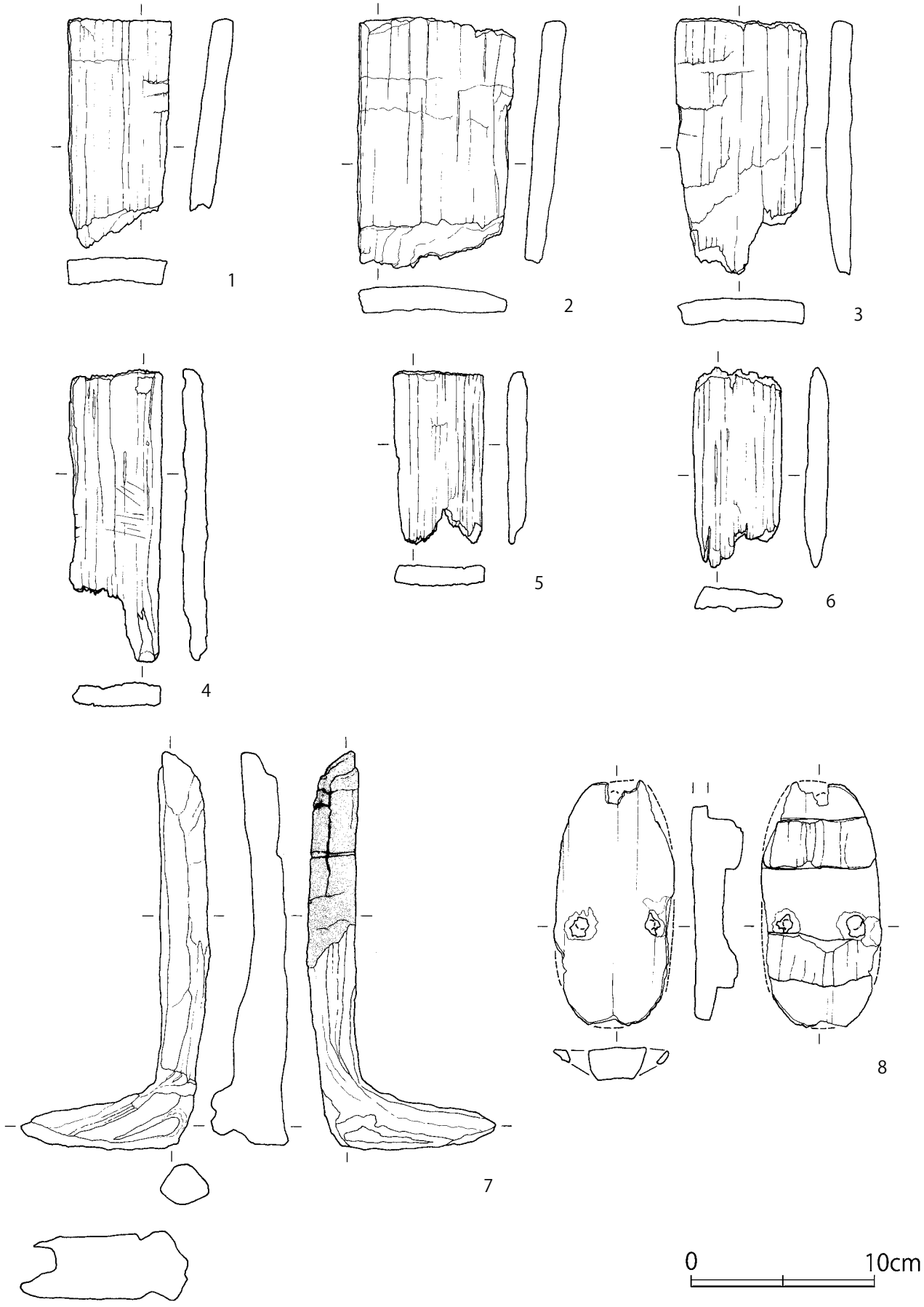
第 69 図　銭貨



第 70 図　石製品 (1)



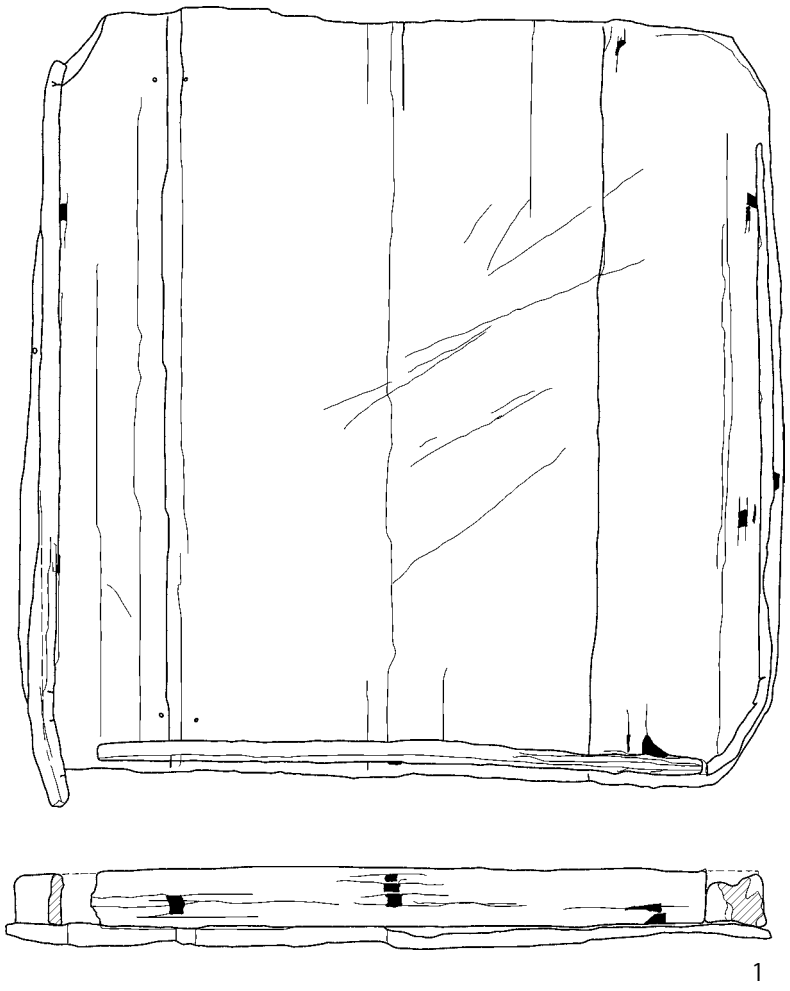
第 71 図　石製品 (2)



第 72 図　木製品 (1)

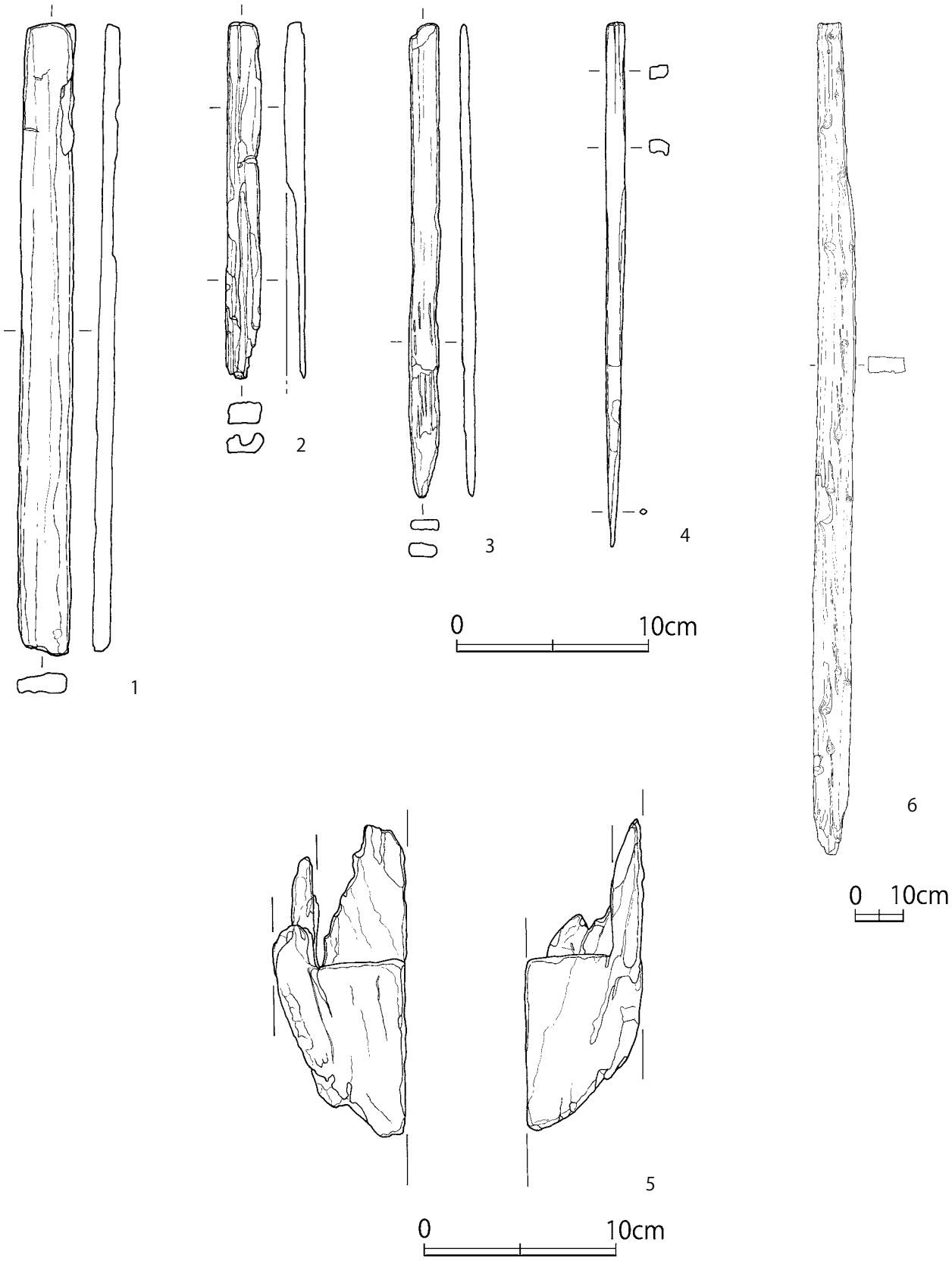
SFD06

SGD34 新路



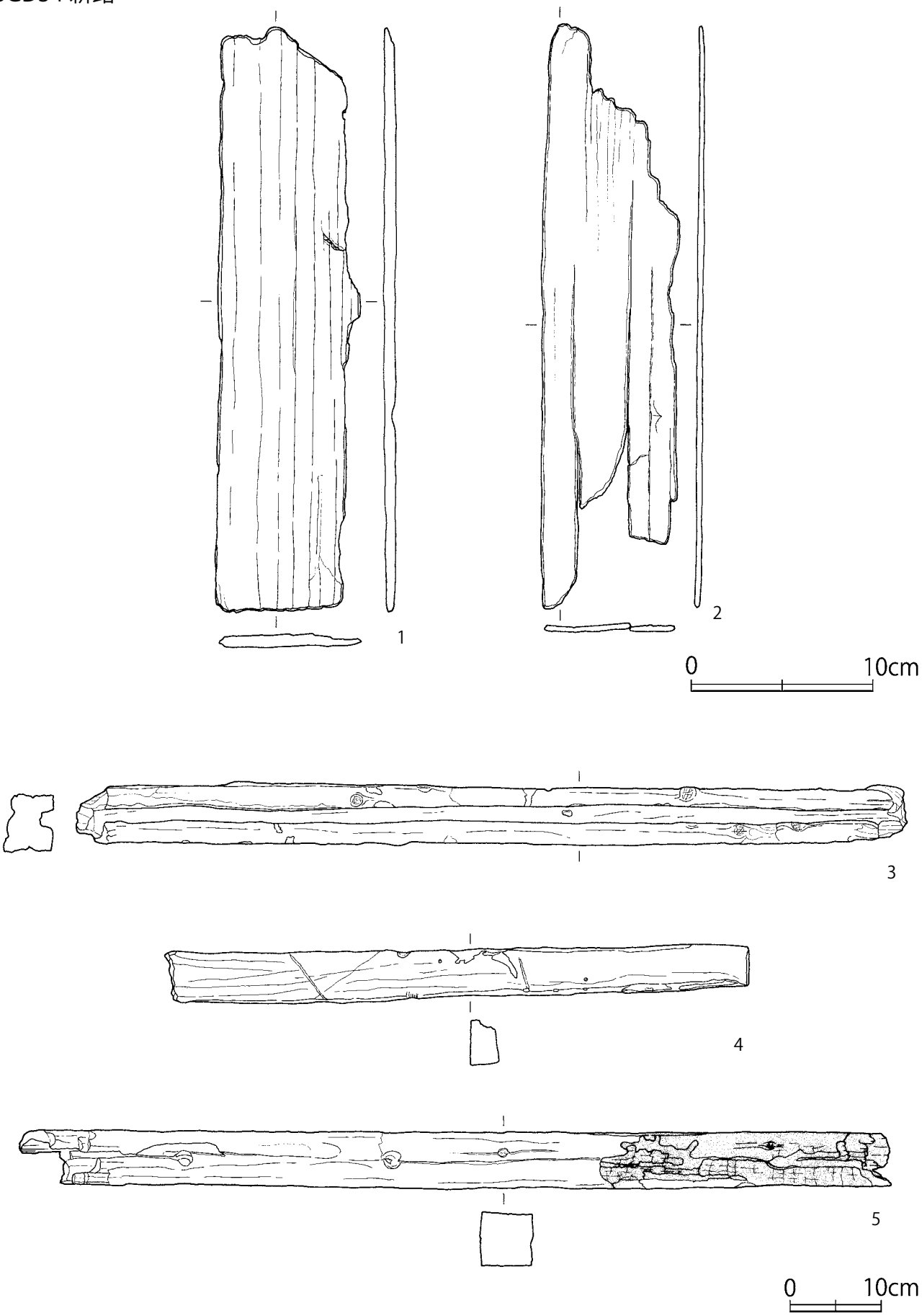
第 73 図　木製品 (2)

SGD34 新路



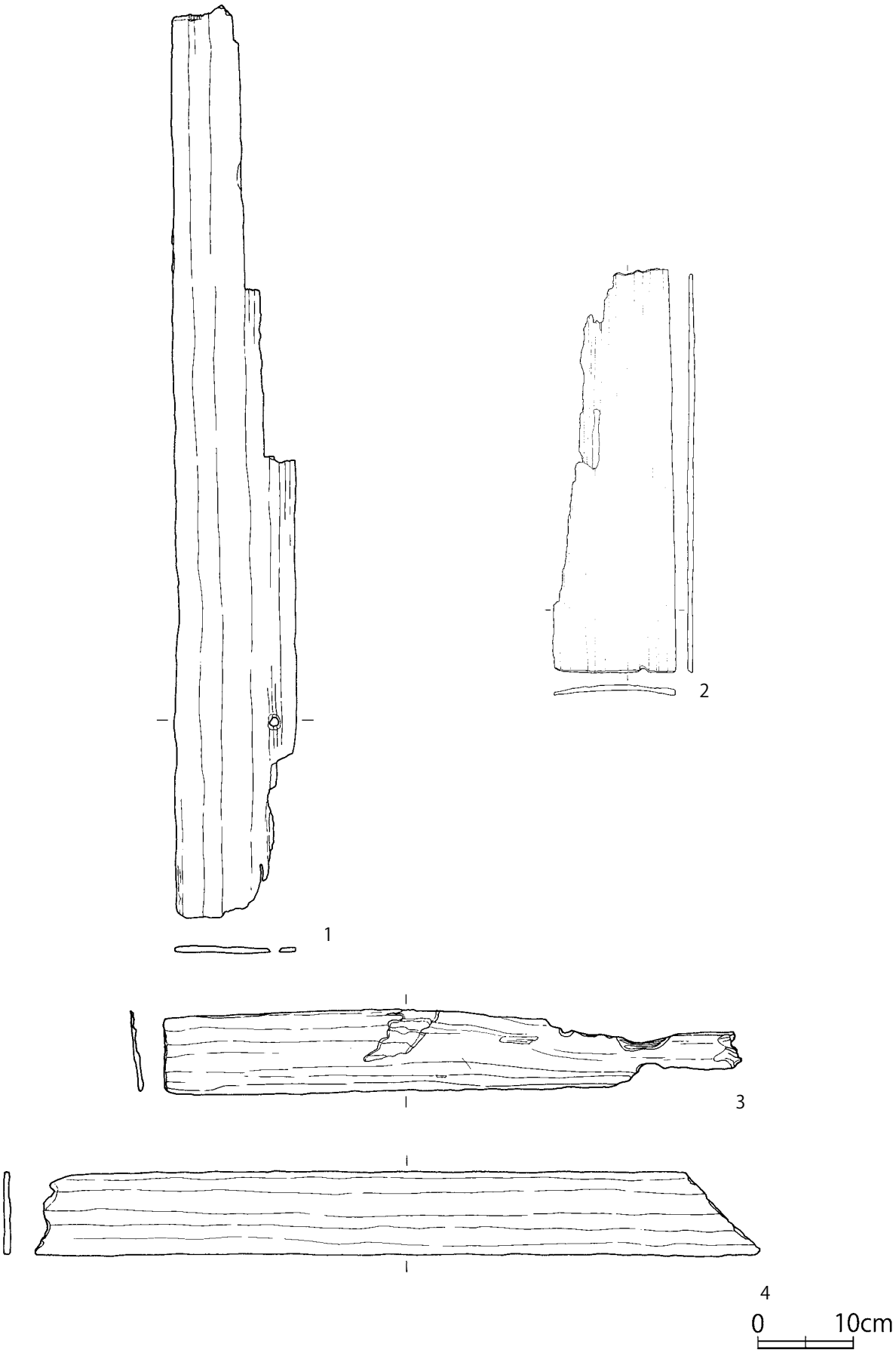
第 74 図　木製品 (3)

SGD34 新路

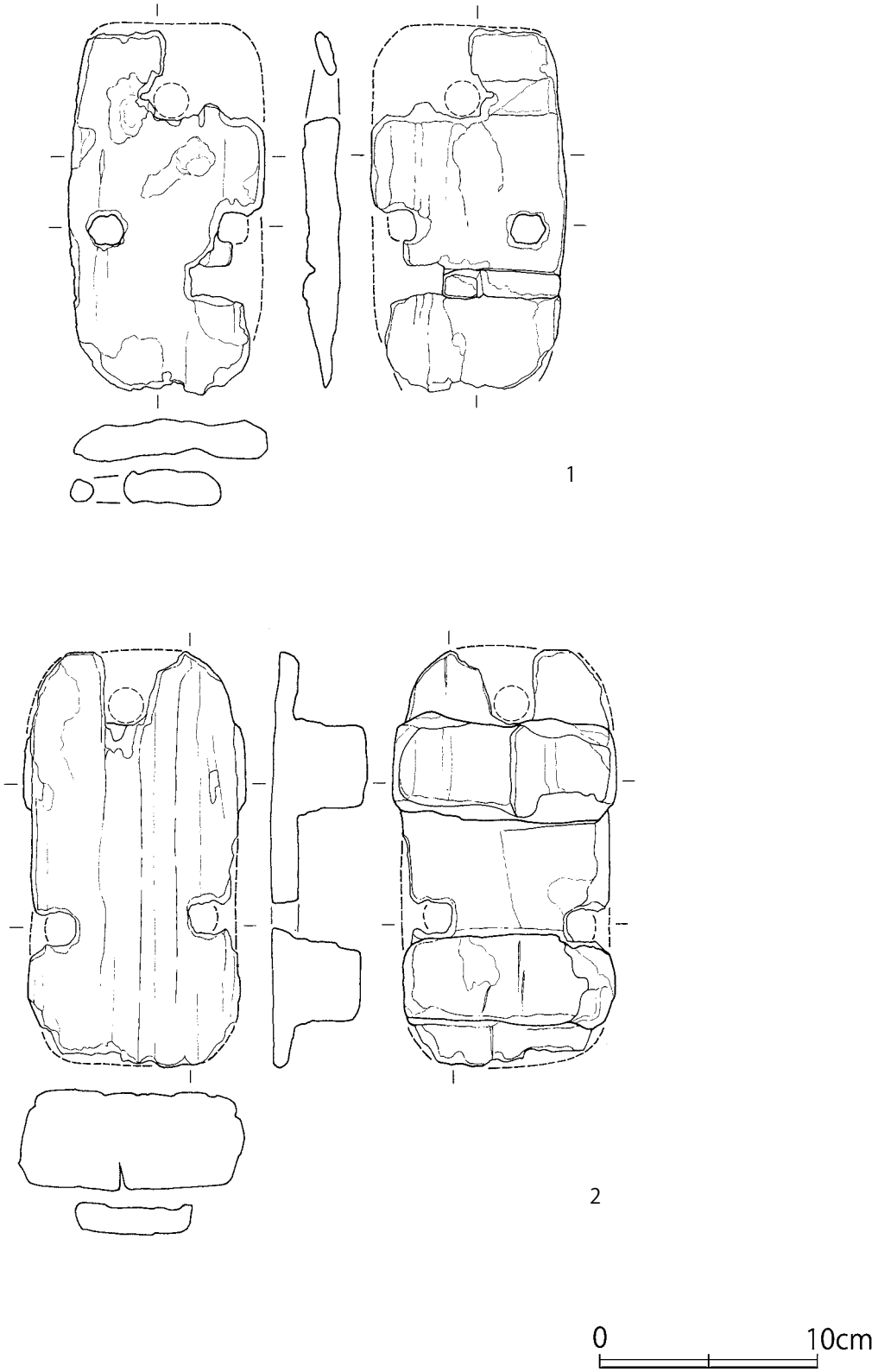


第 75 図　木製品 (4)

SGD34 新路

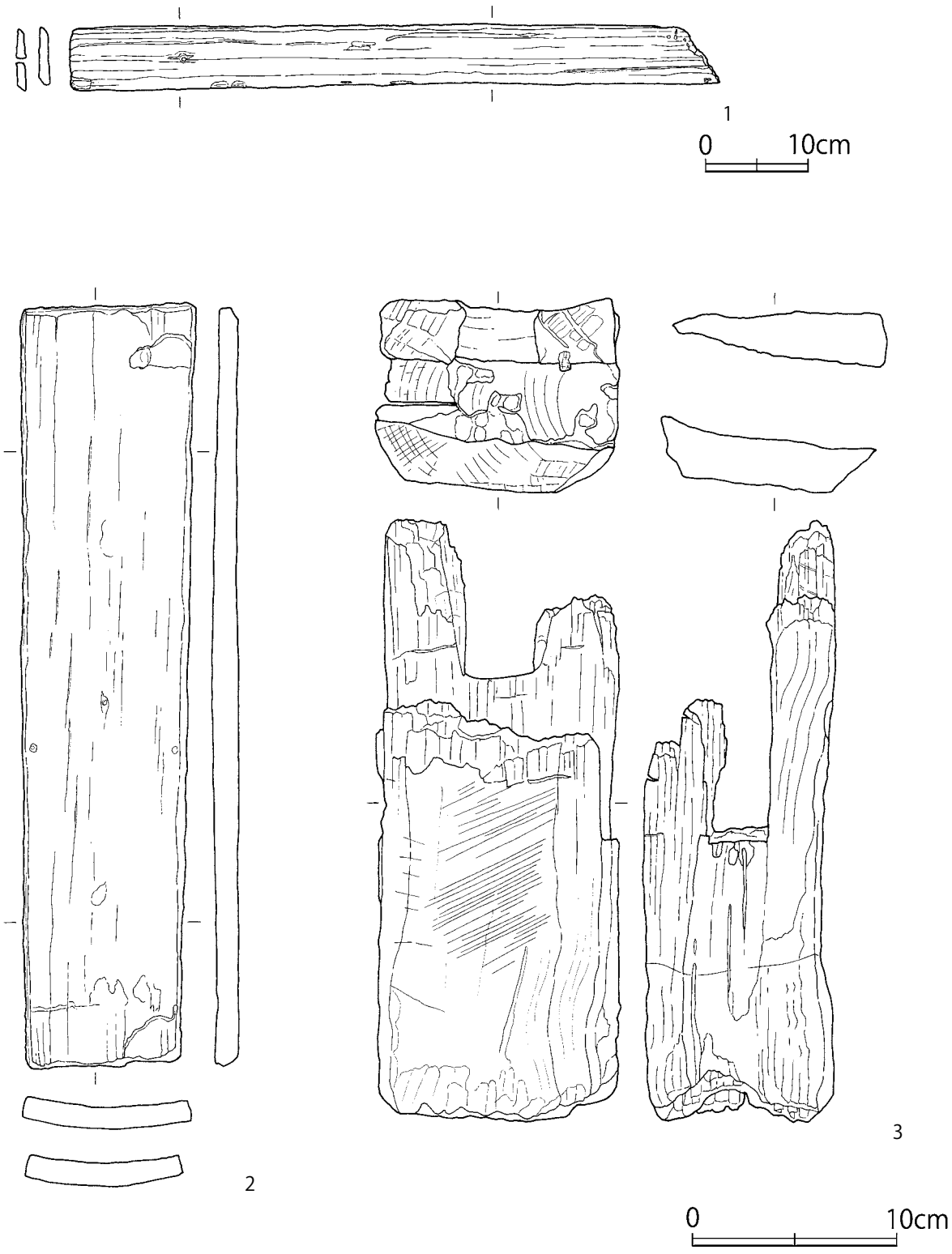


第 76 図　木製品 (5)



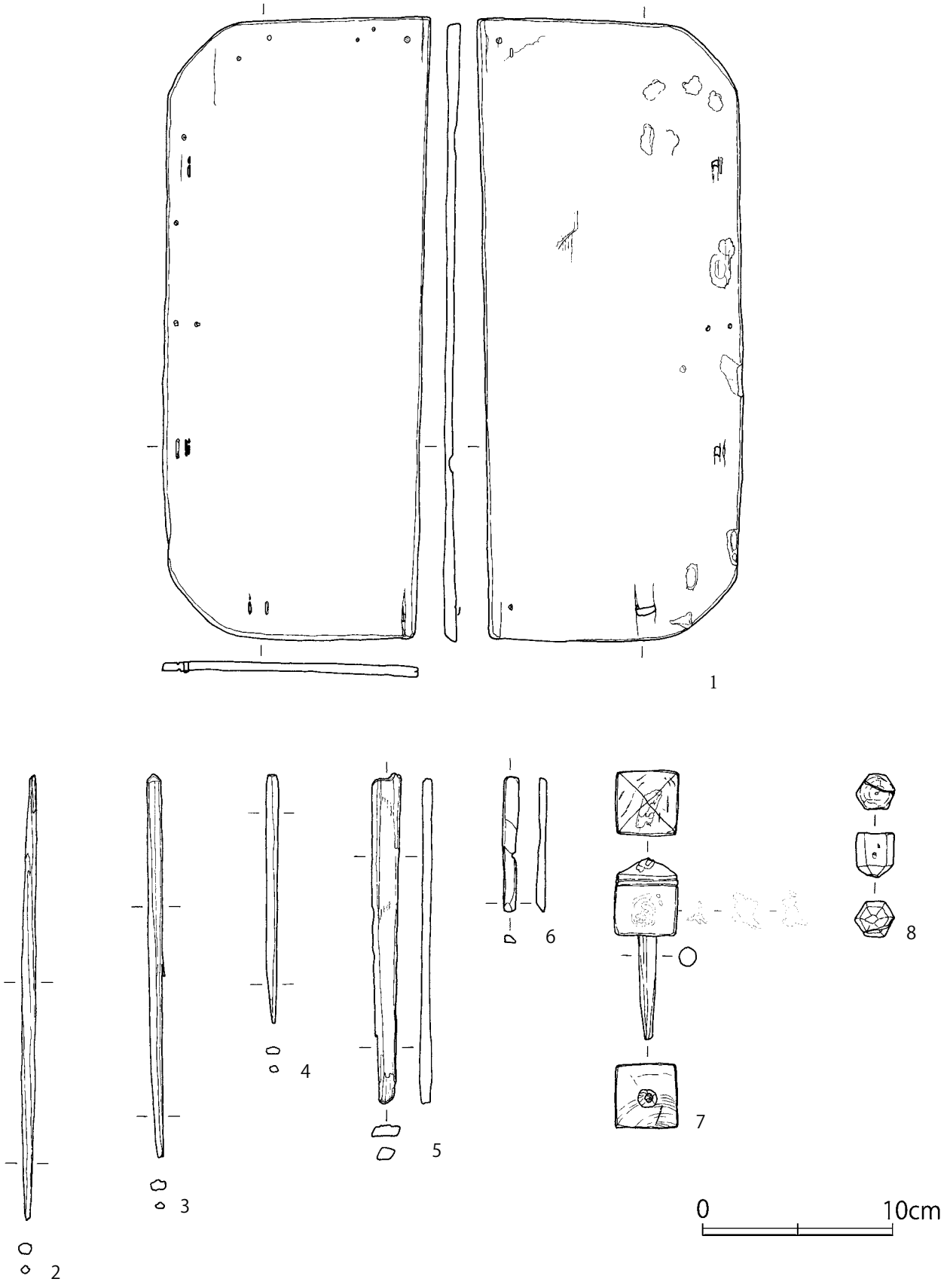
第 77 図　木製品 (6)

SGD34 新路



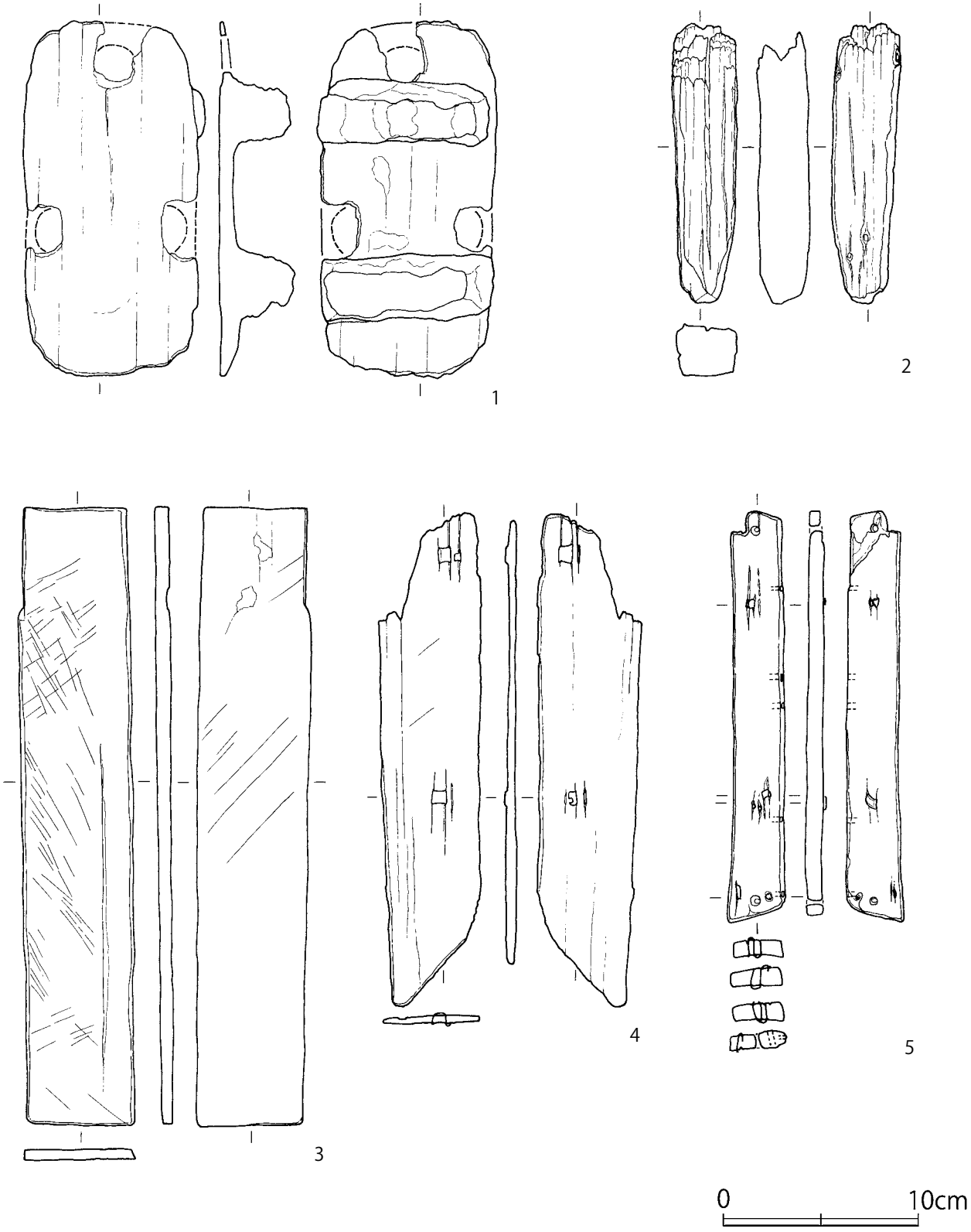
第 78 図　木製品 (7)

SGD34 旧路



第 79 図　木製品 (8)

SGD34 旧路

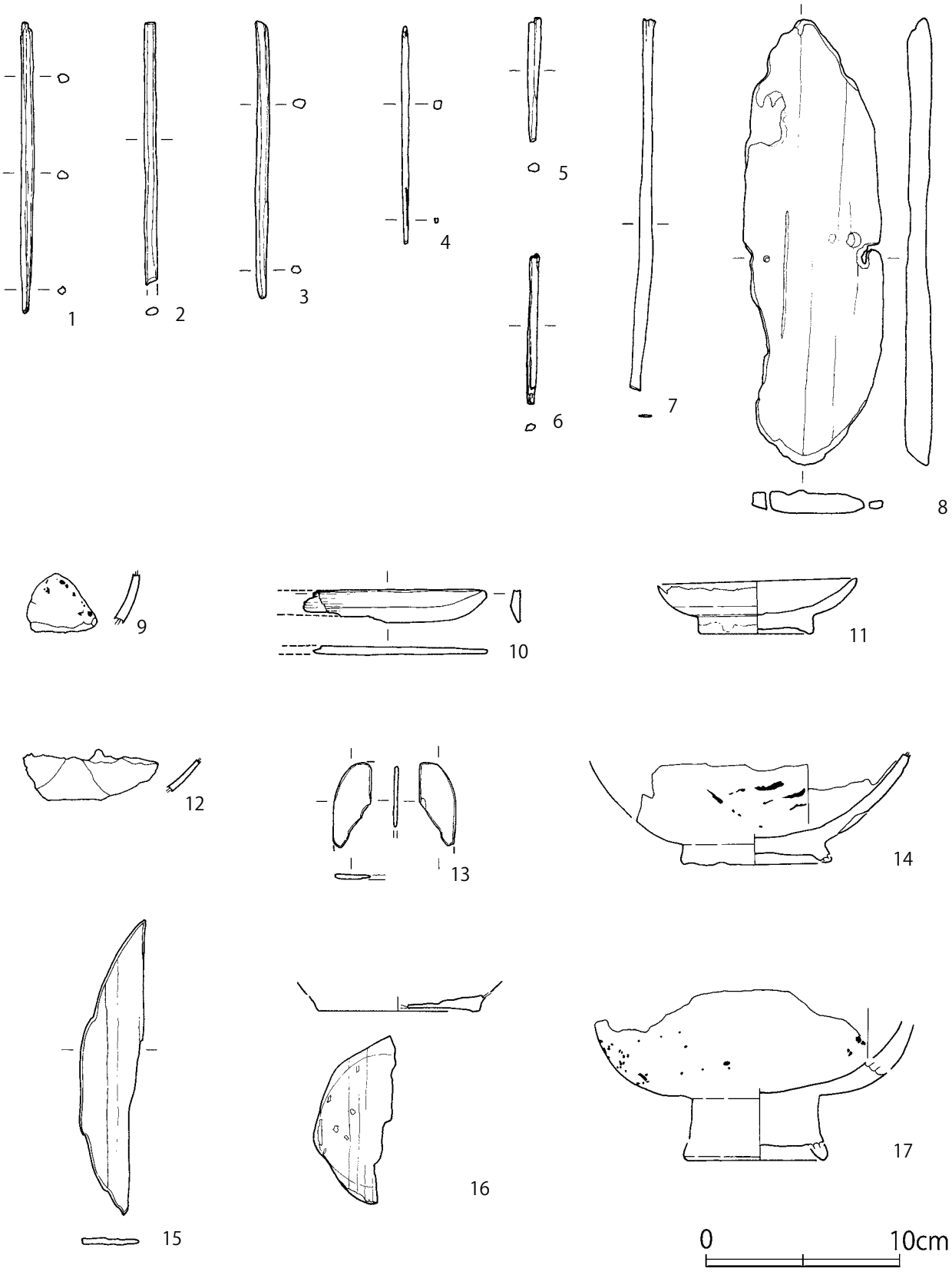


第 80 図　木製品 (9)

SGD34 旧路

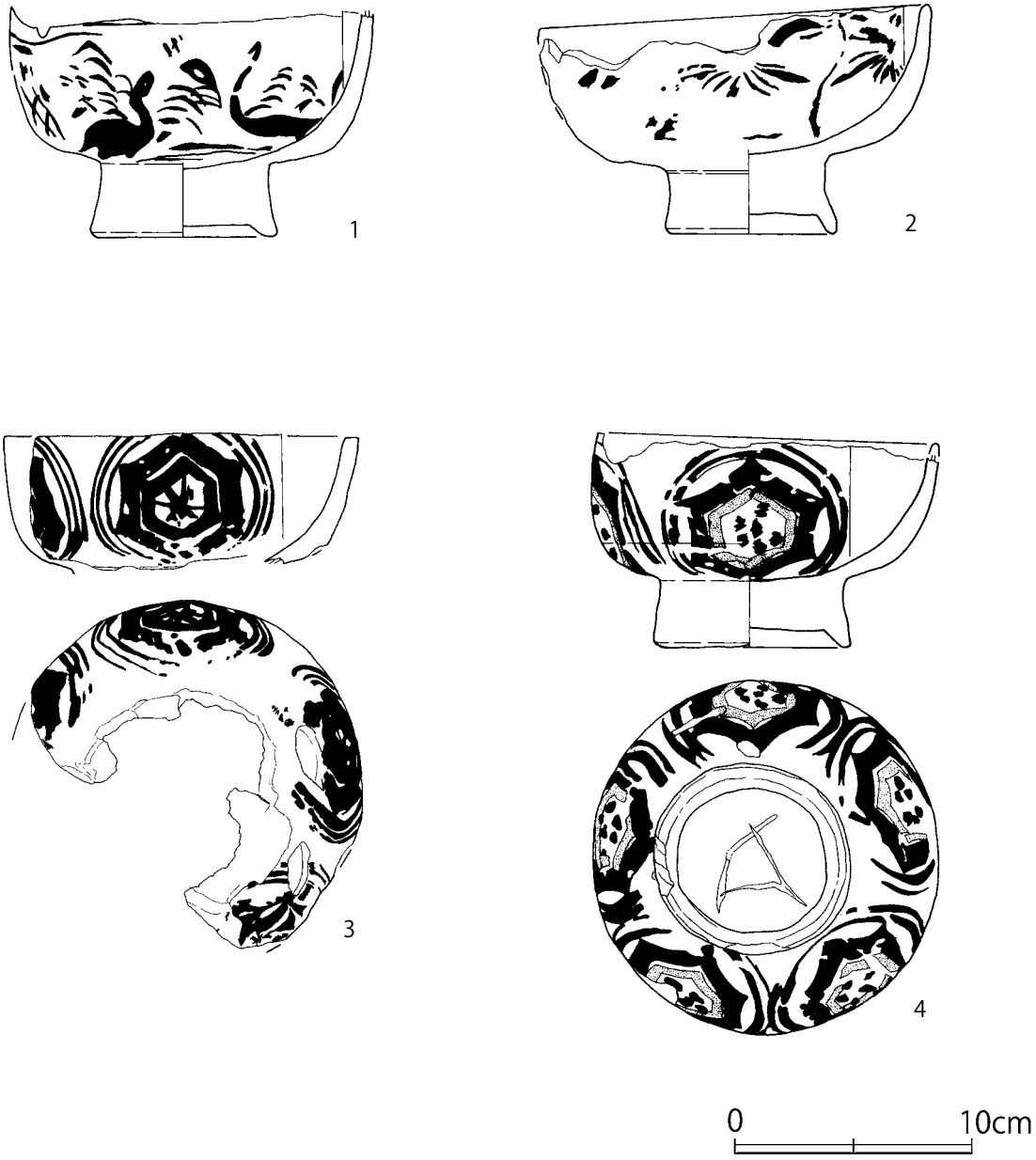
第 81 図　木製品 (10)

SGD34 旧路

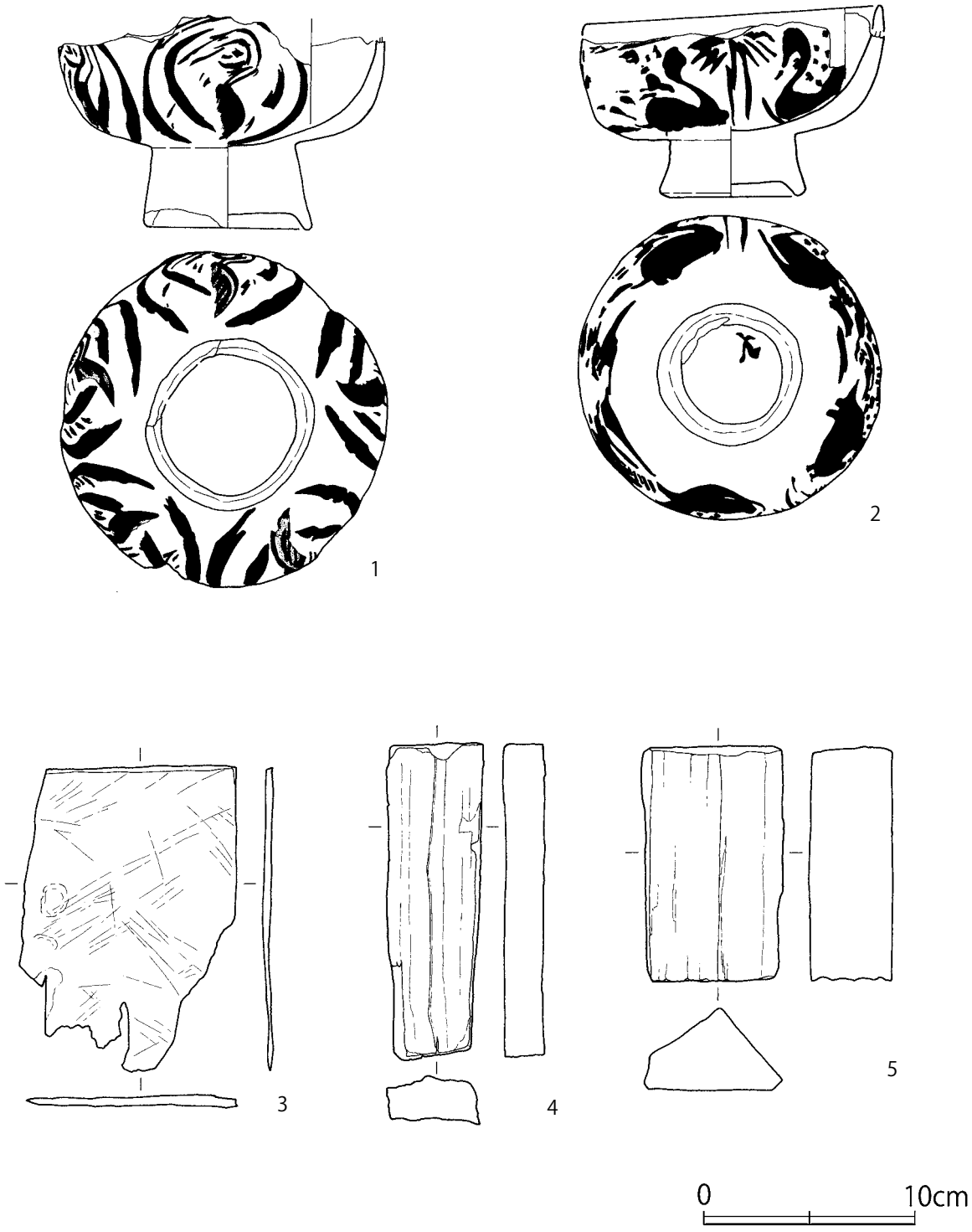


第 82 図　木製品 (11)

SGD34 旧路

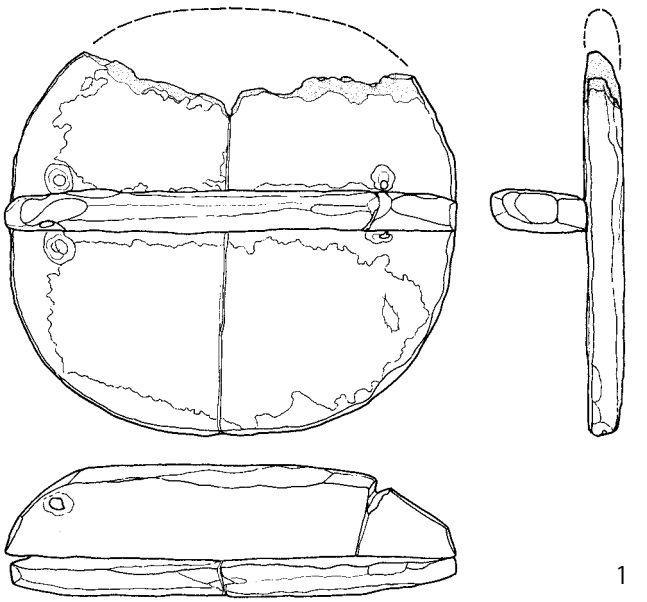


第 83 図　木製品 (12)

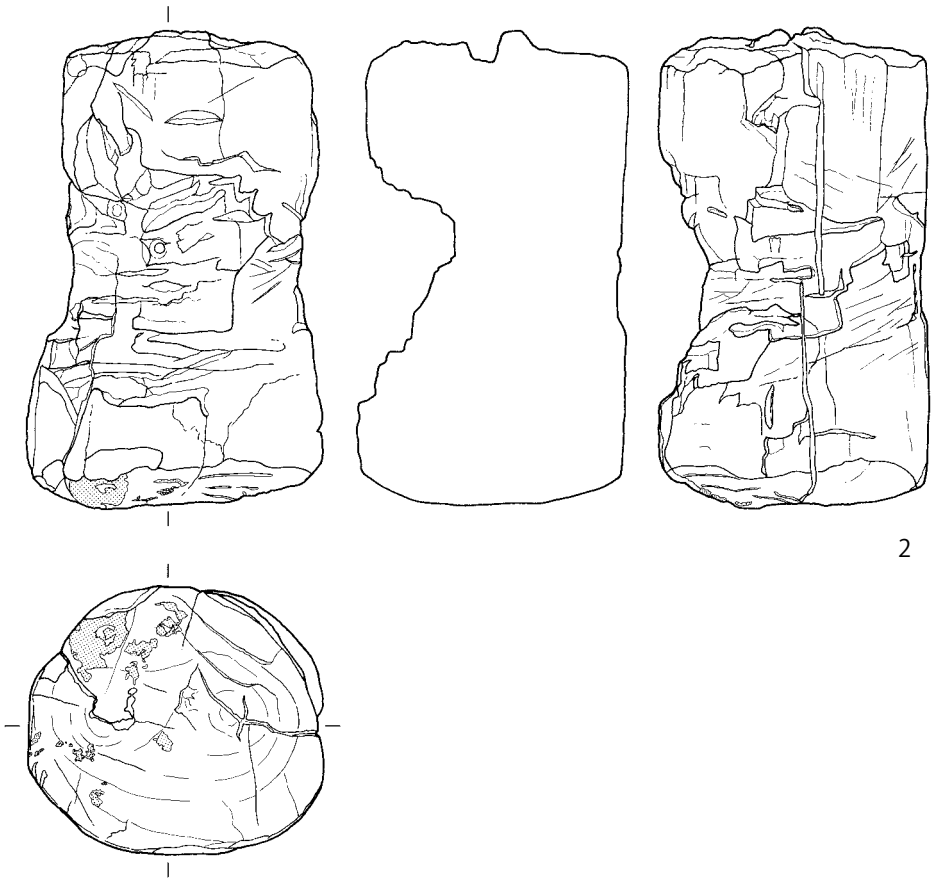


第 84 図　木製品 (13)

SGD34 旧路



1

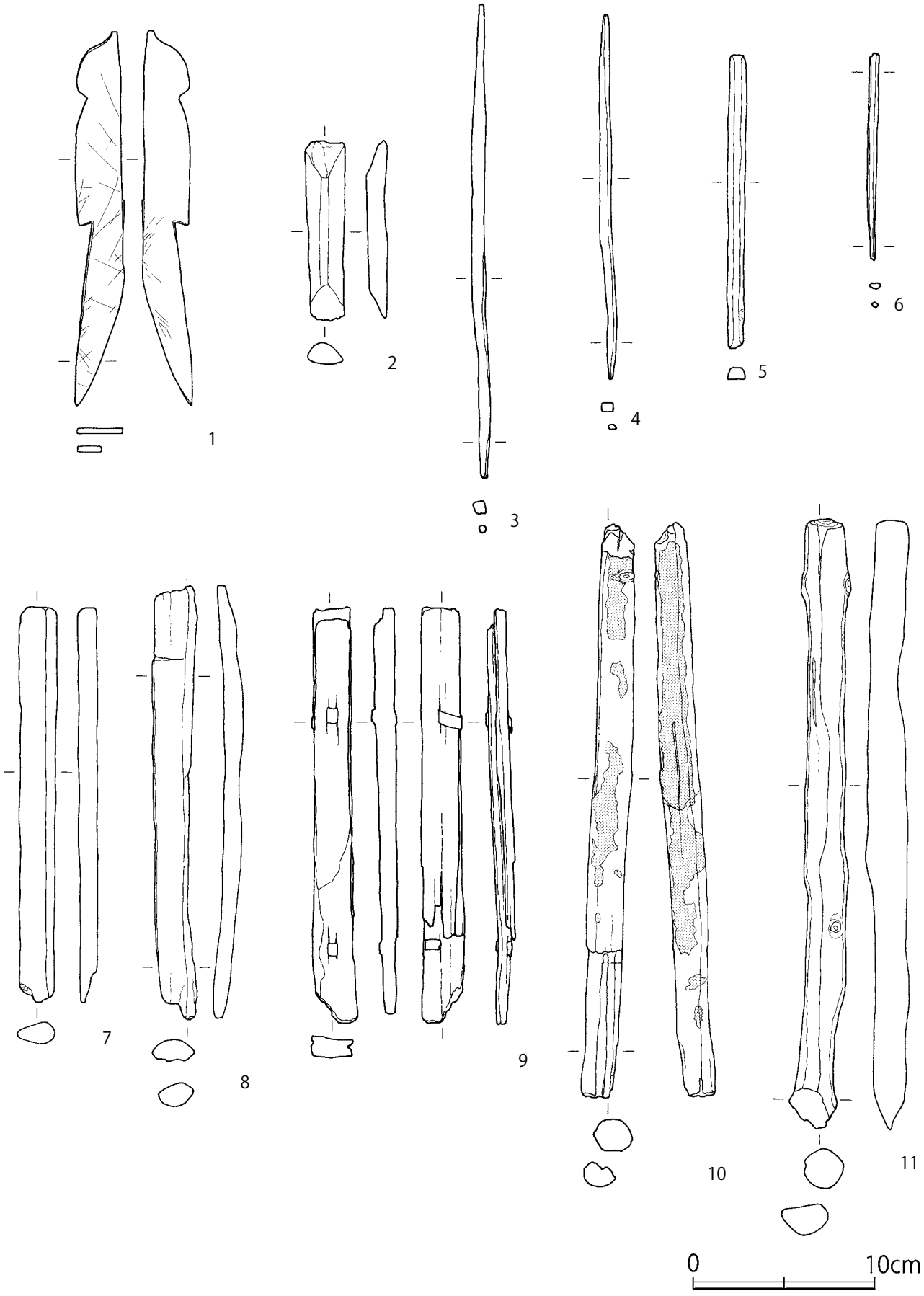


2

0 10cm

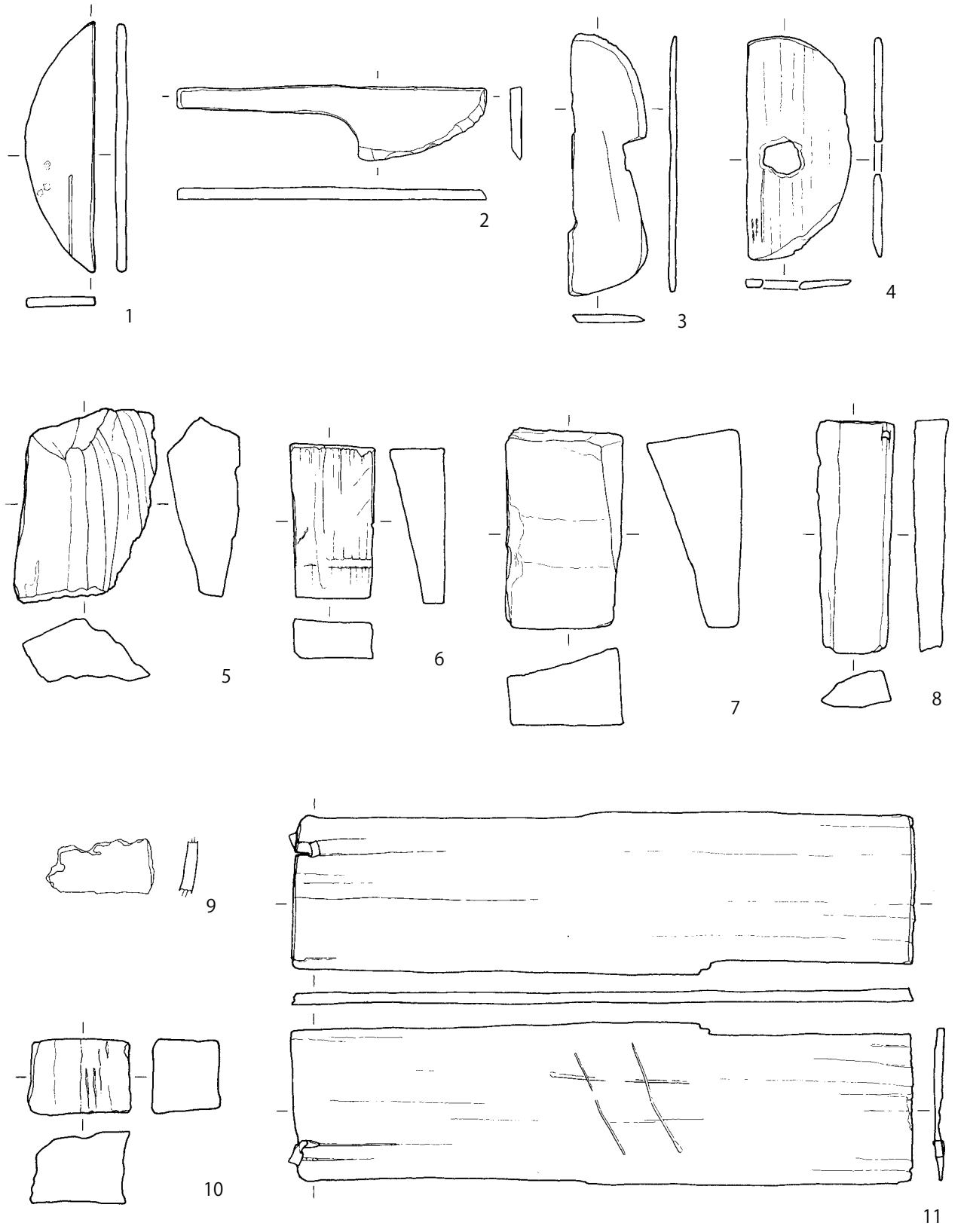
第 85 図　木製品 (14)

SGD34



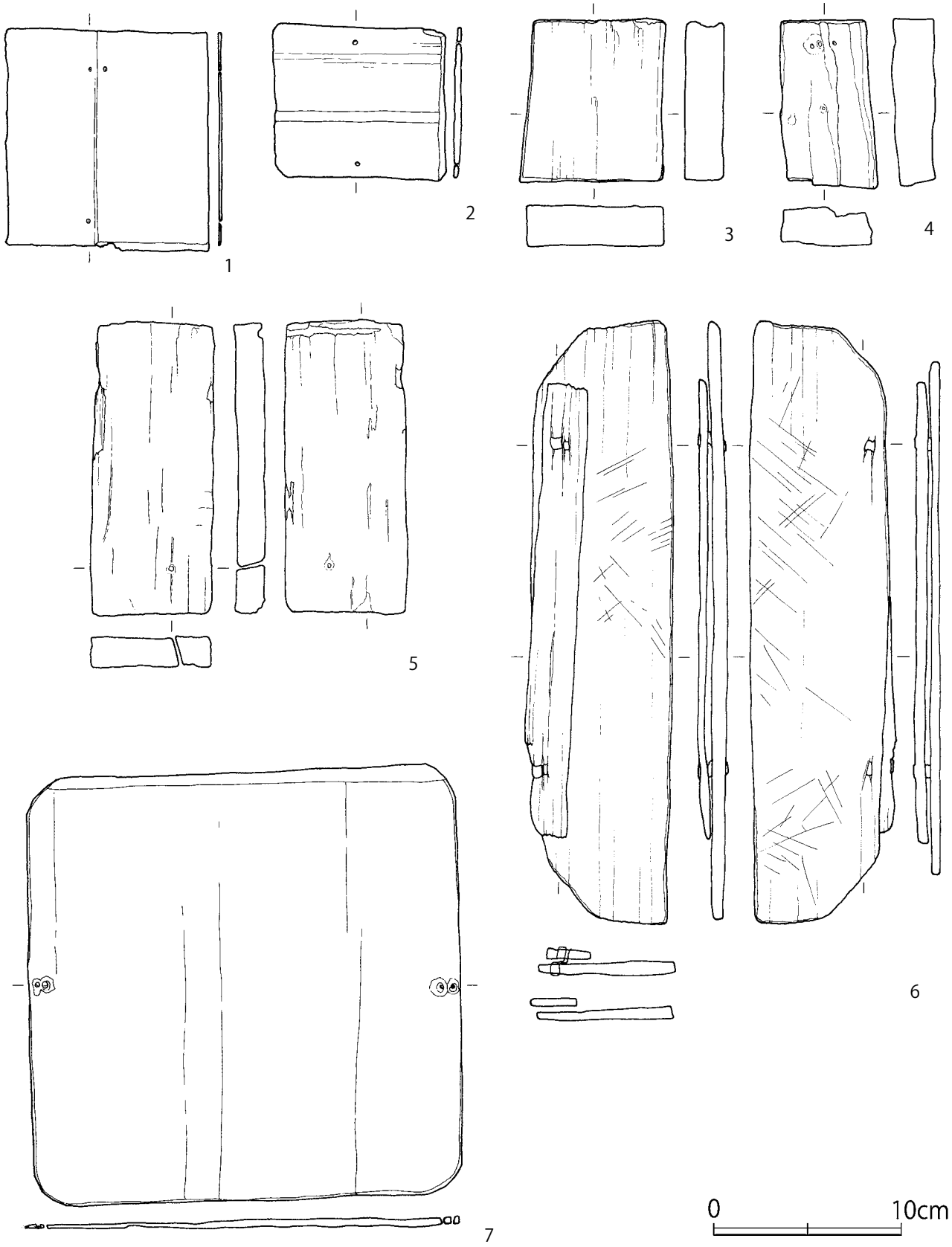
第 86 図　木製品 (15)

SGD34



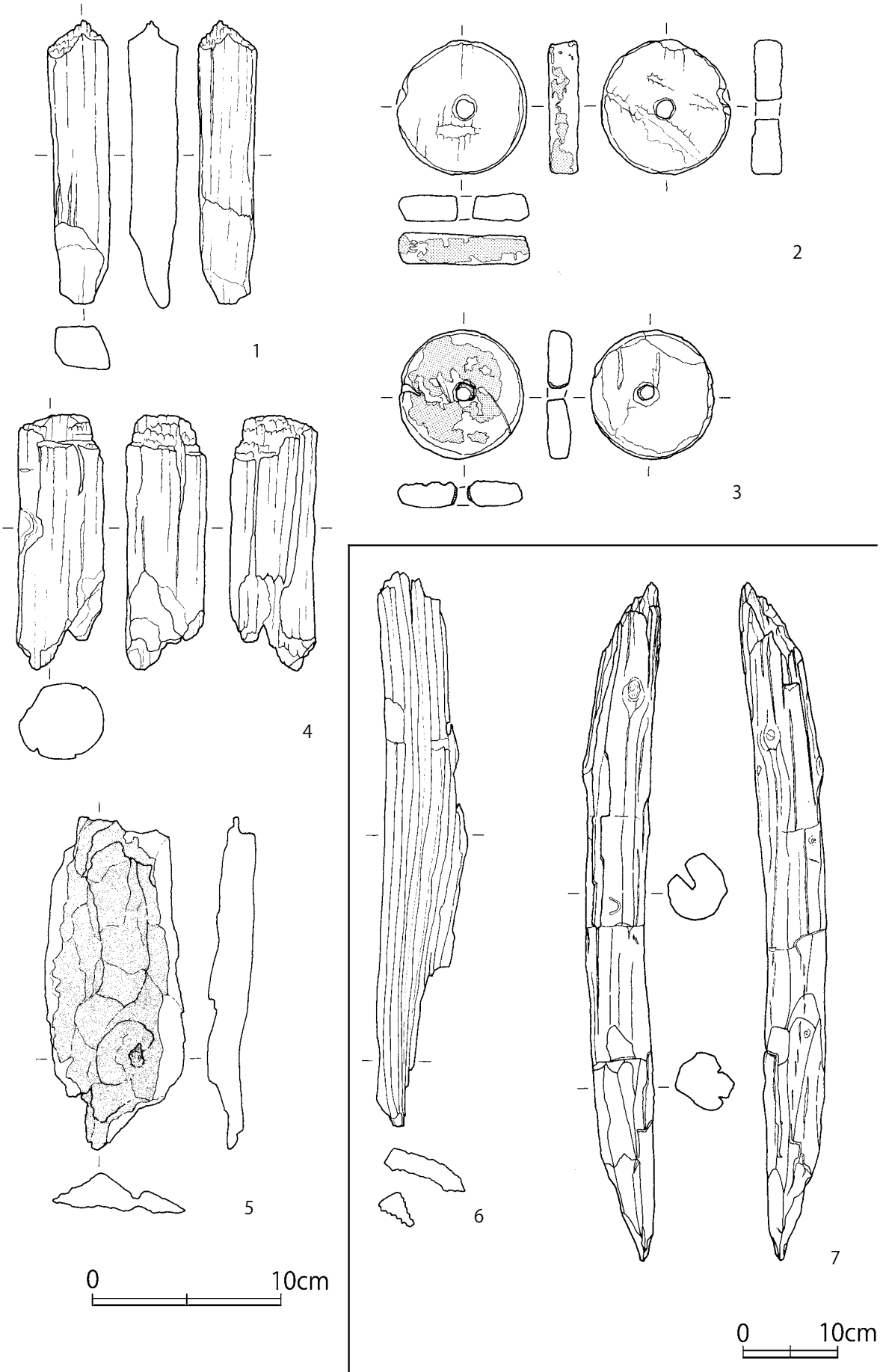
第 87 図　木製品 (16)

SGD34



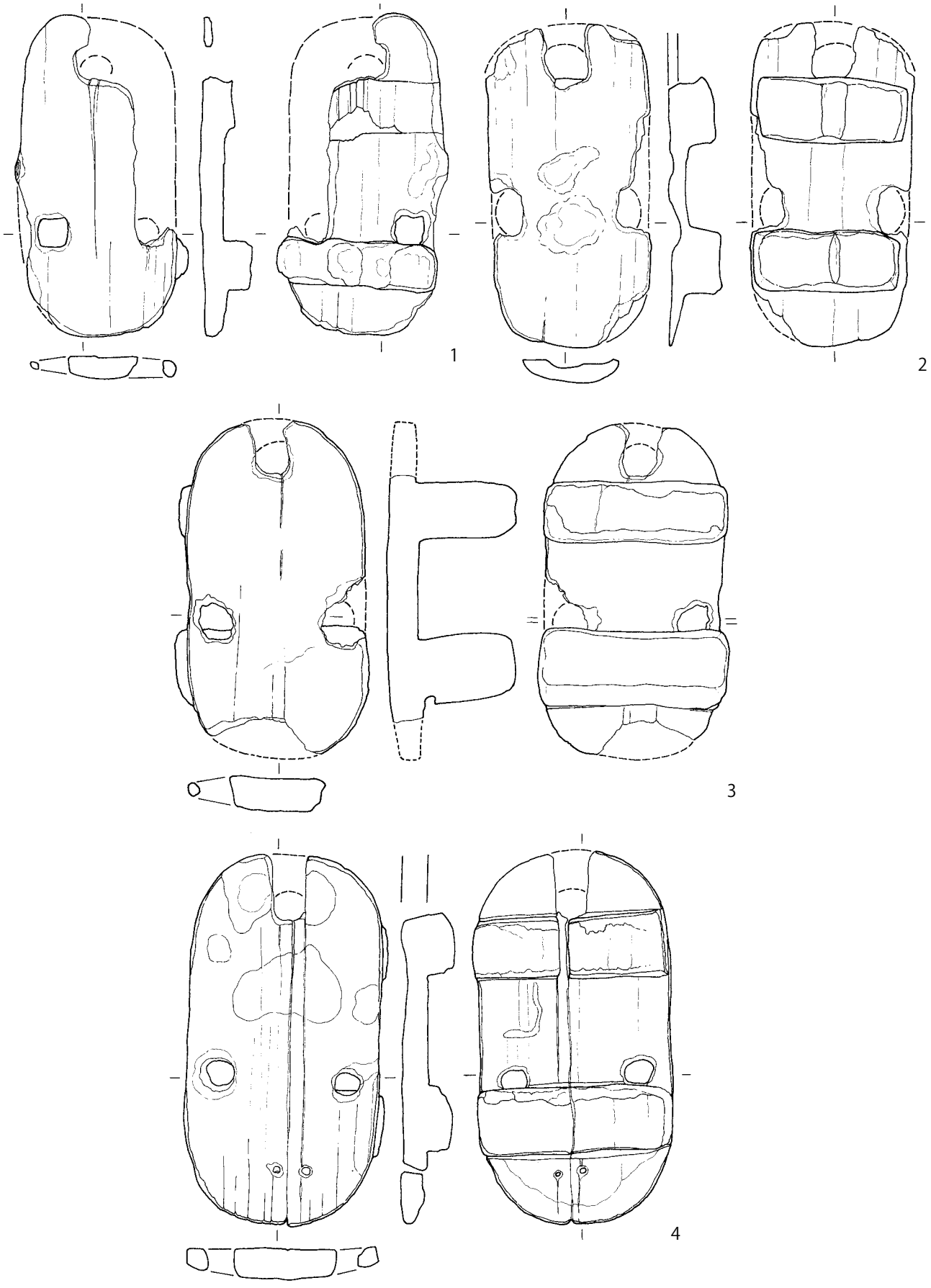
第 88 図　木製品 (17)

SGD34



第 89 図　木製品 (18)

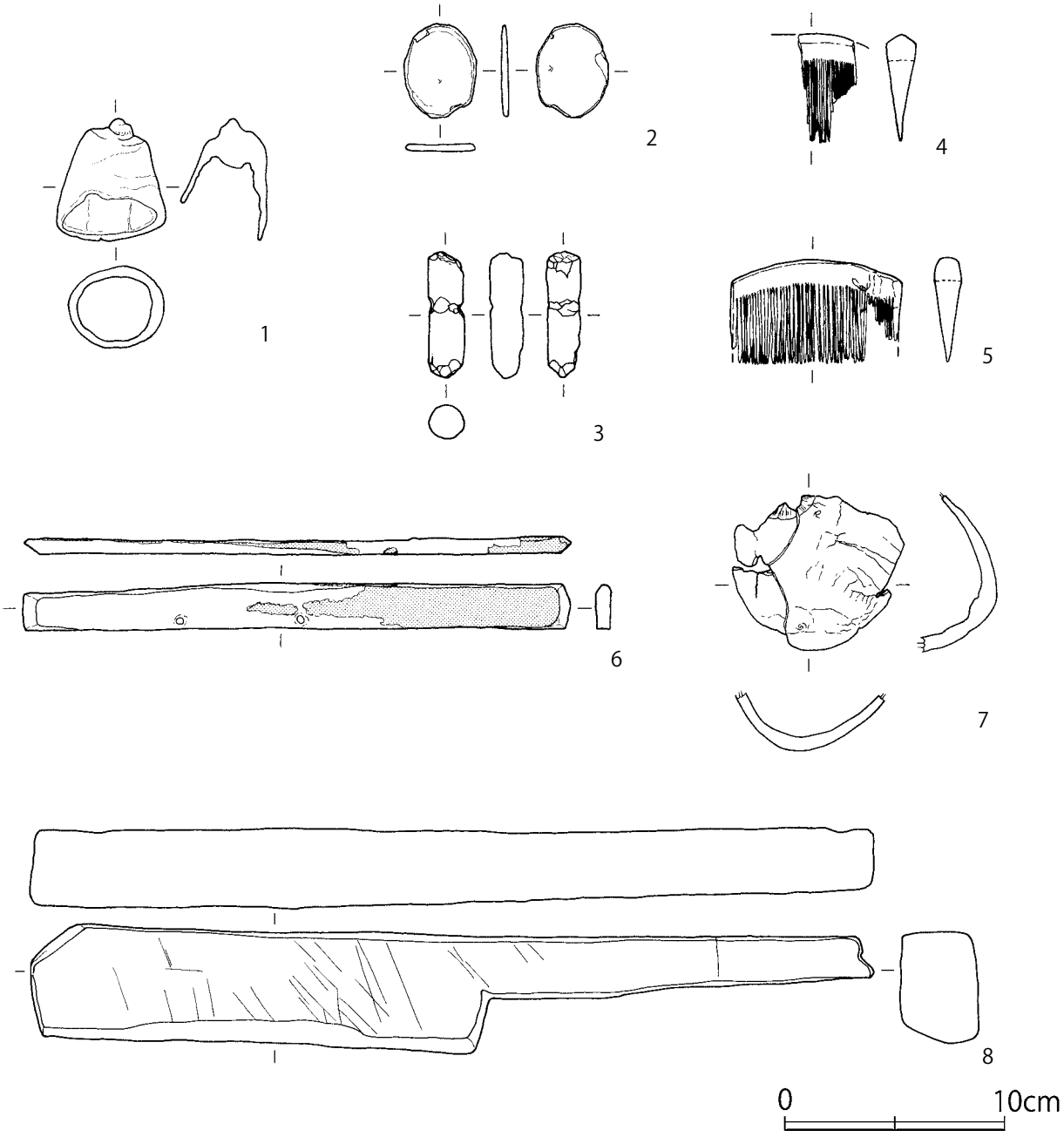
SGD34



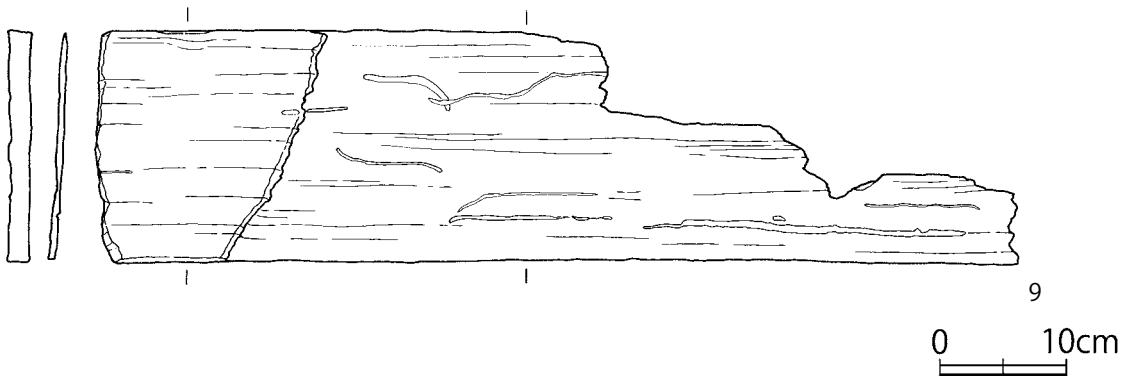
第 90 図　木製品 (19)

0　10cm

SGD34

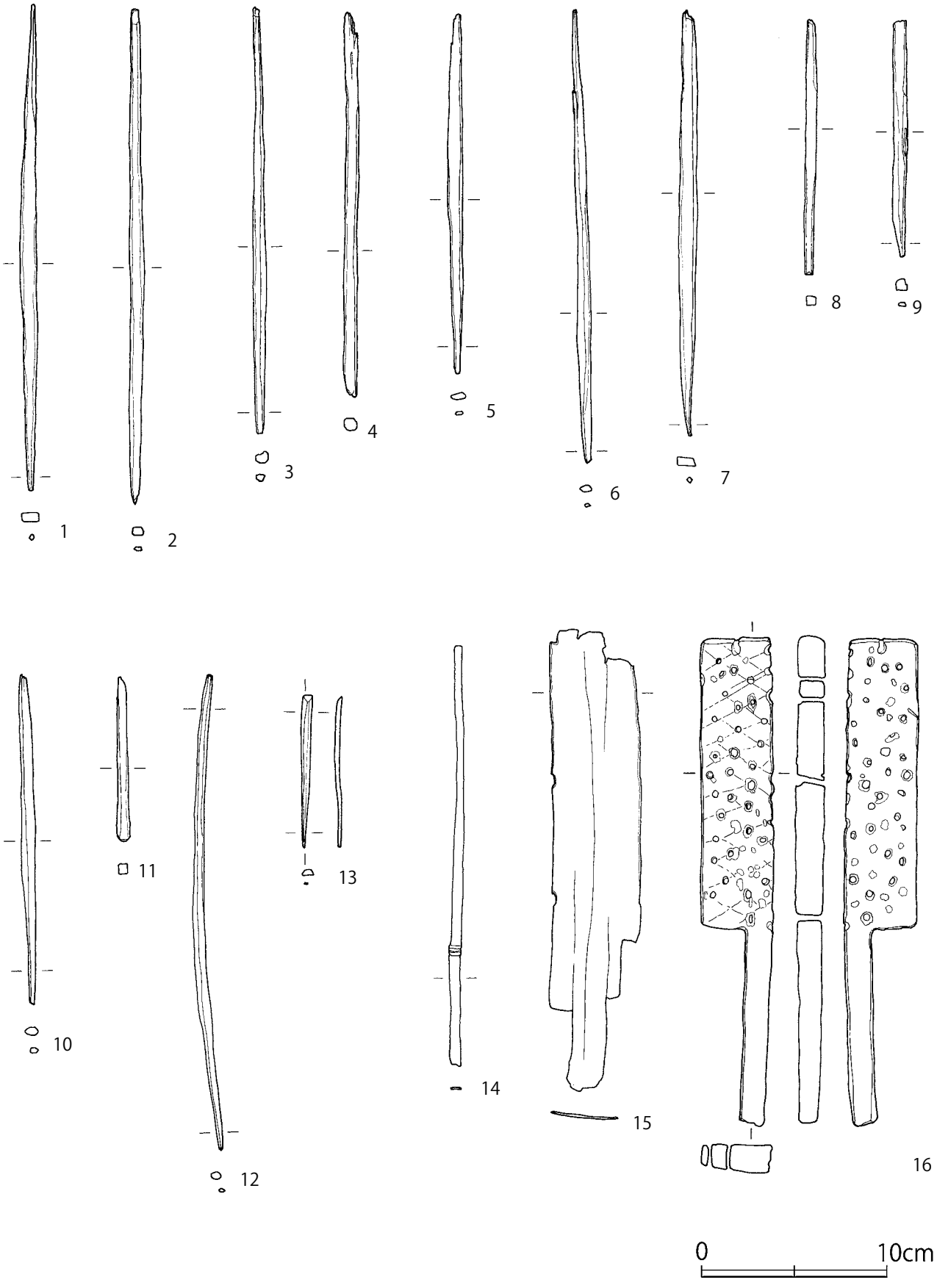


SGD34 新路



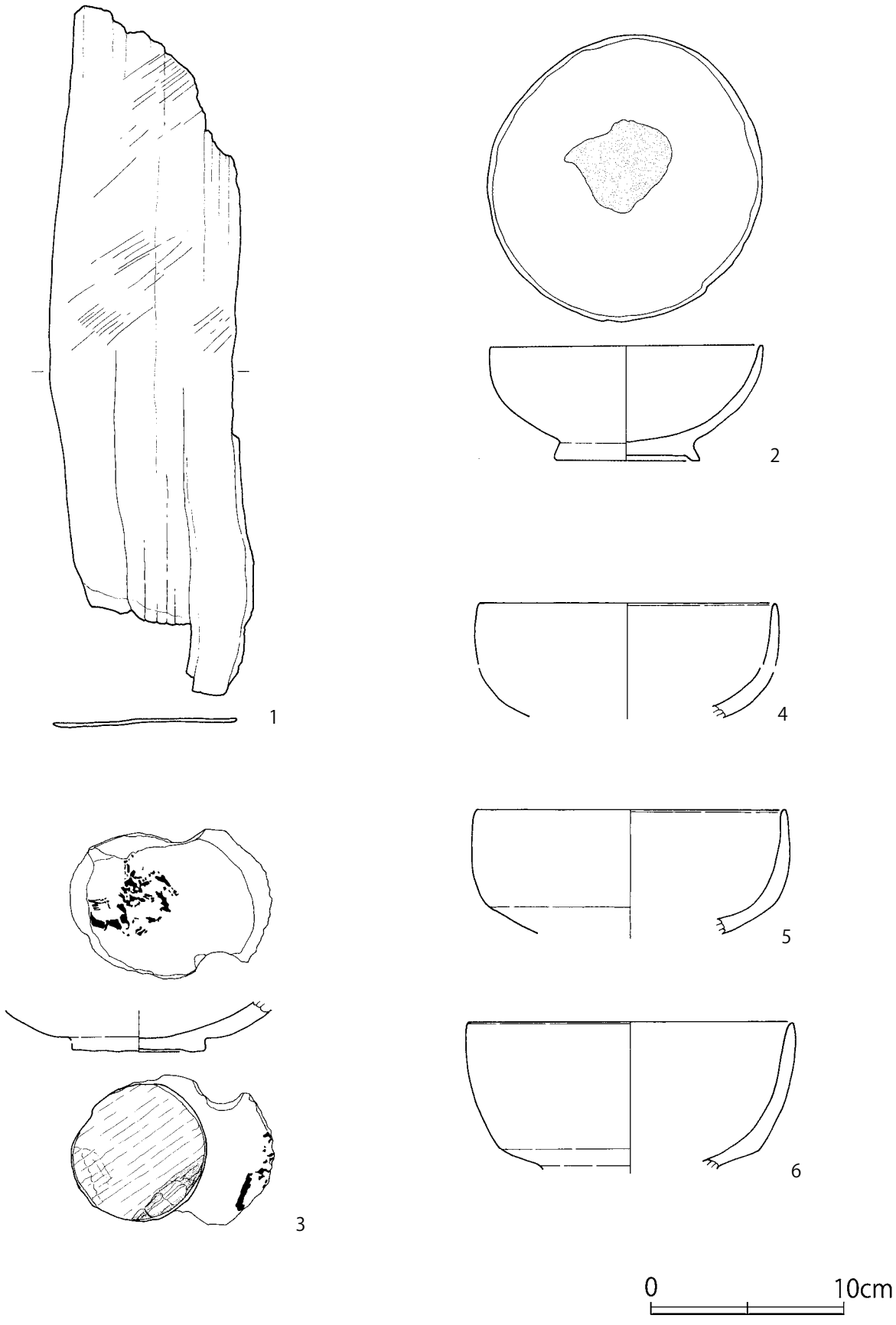
第 91 図　木製品 (20)

SGD34



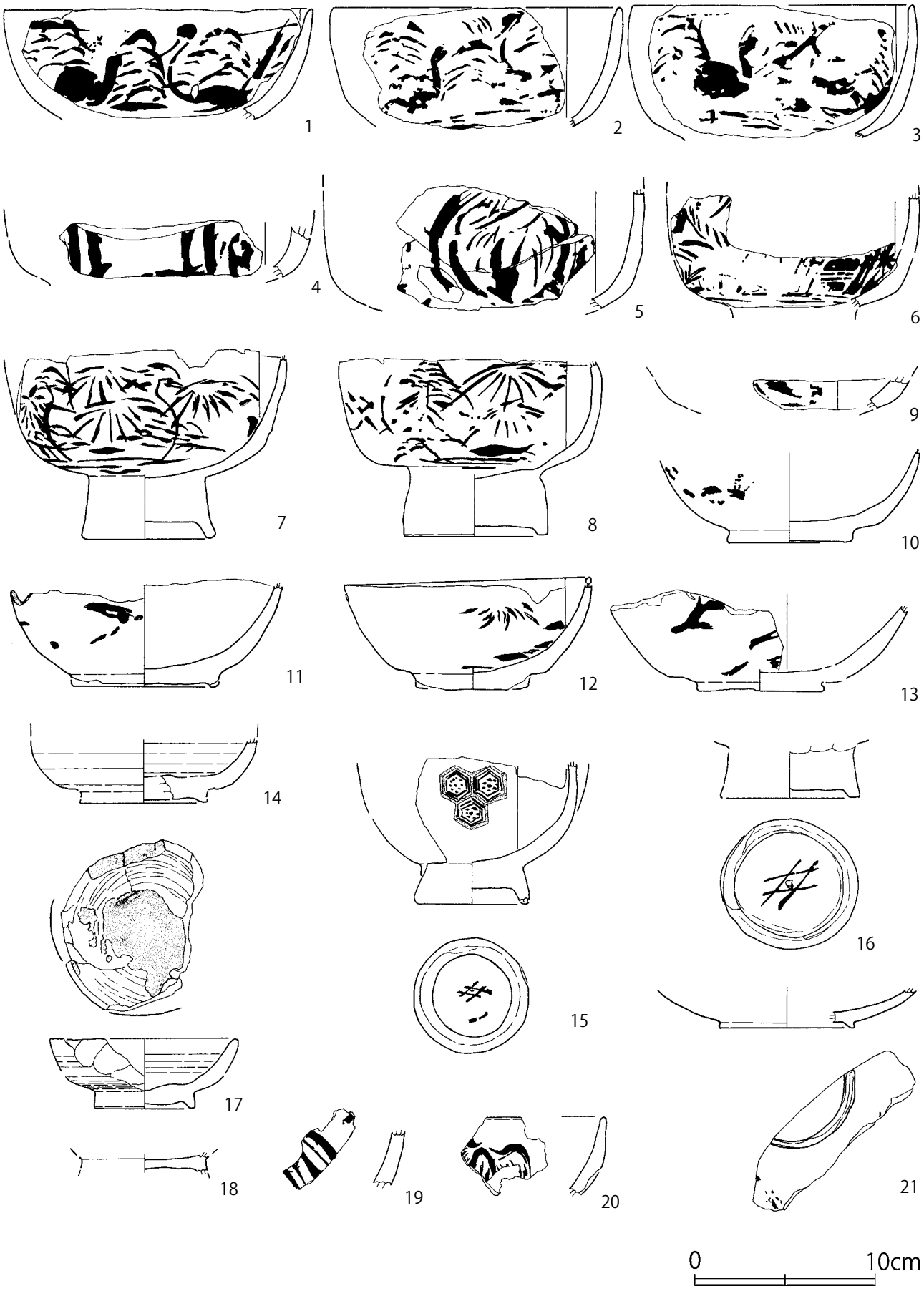
第 92 図　木製品 (21)

SGD34

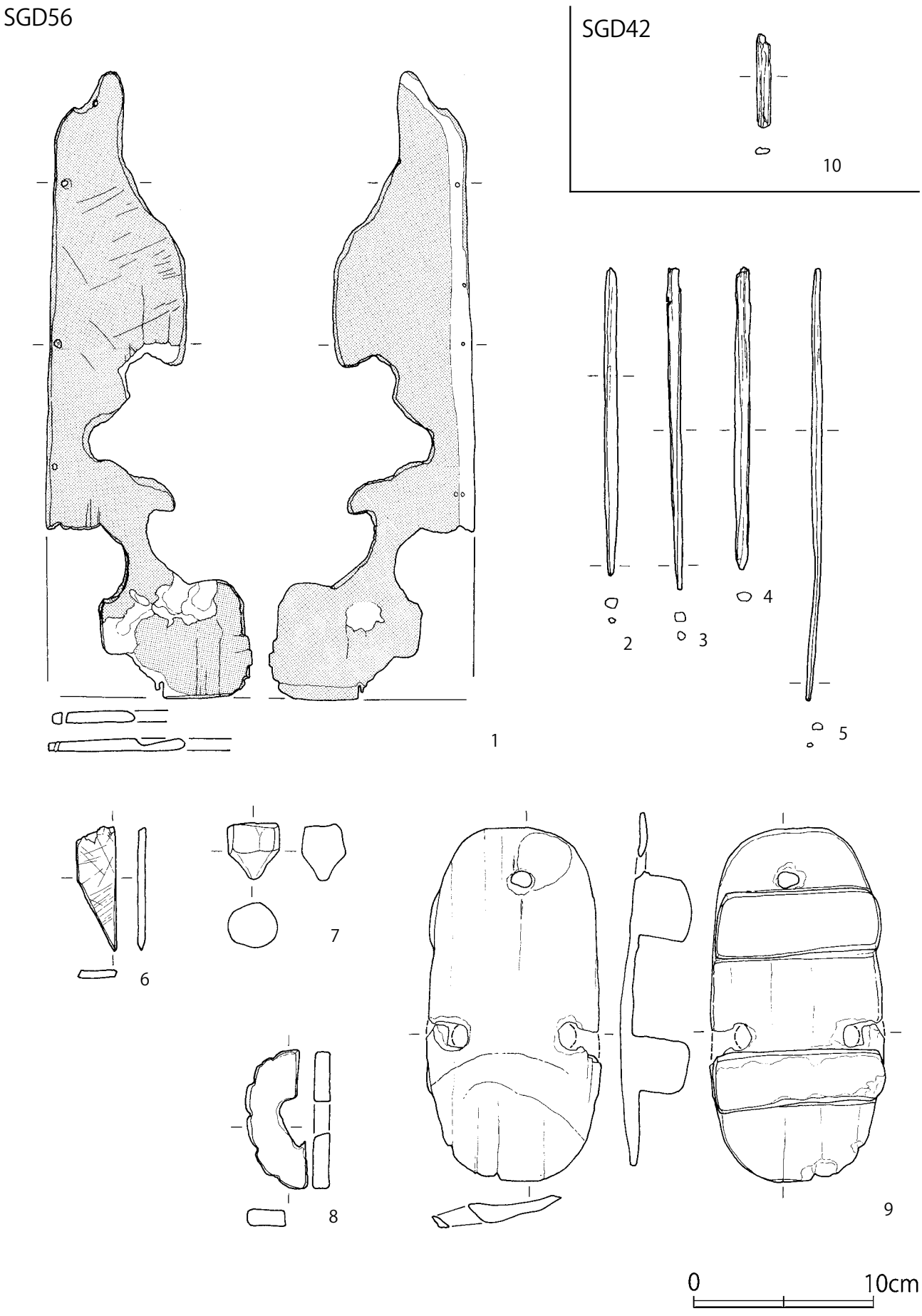


第 93 図　木製品 (22)

SGD34

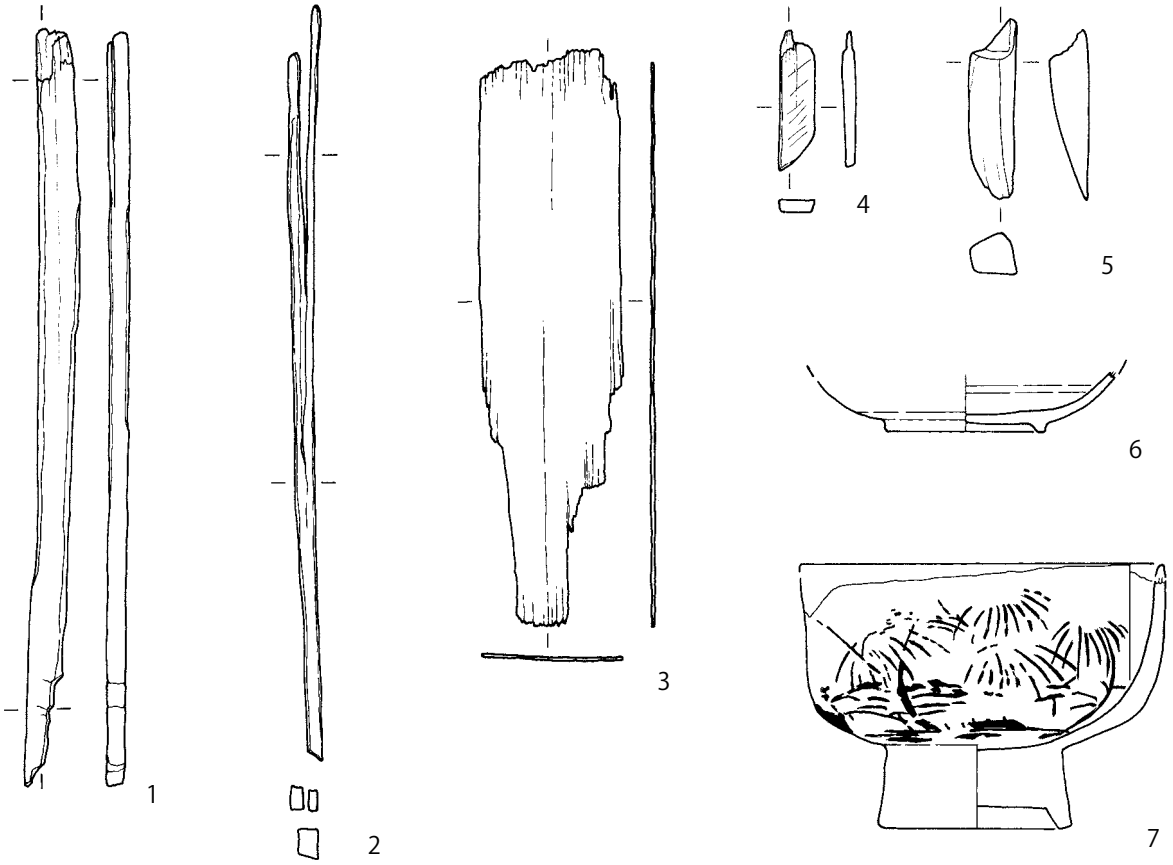


第 94 図　木製品 (23)

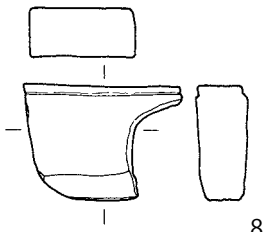


第 95 図　木製品 (24)

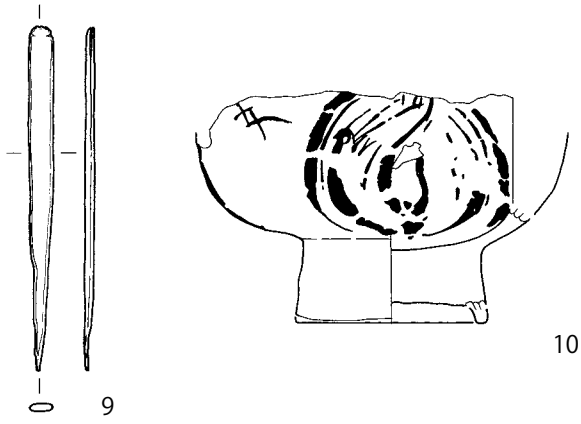
SGD56

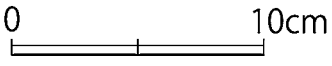


SGD56 下部



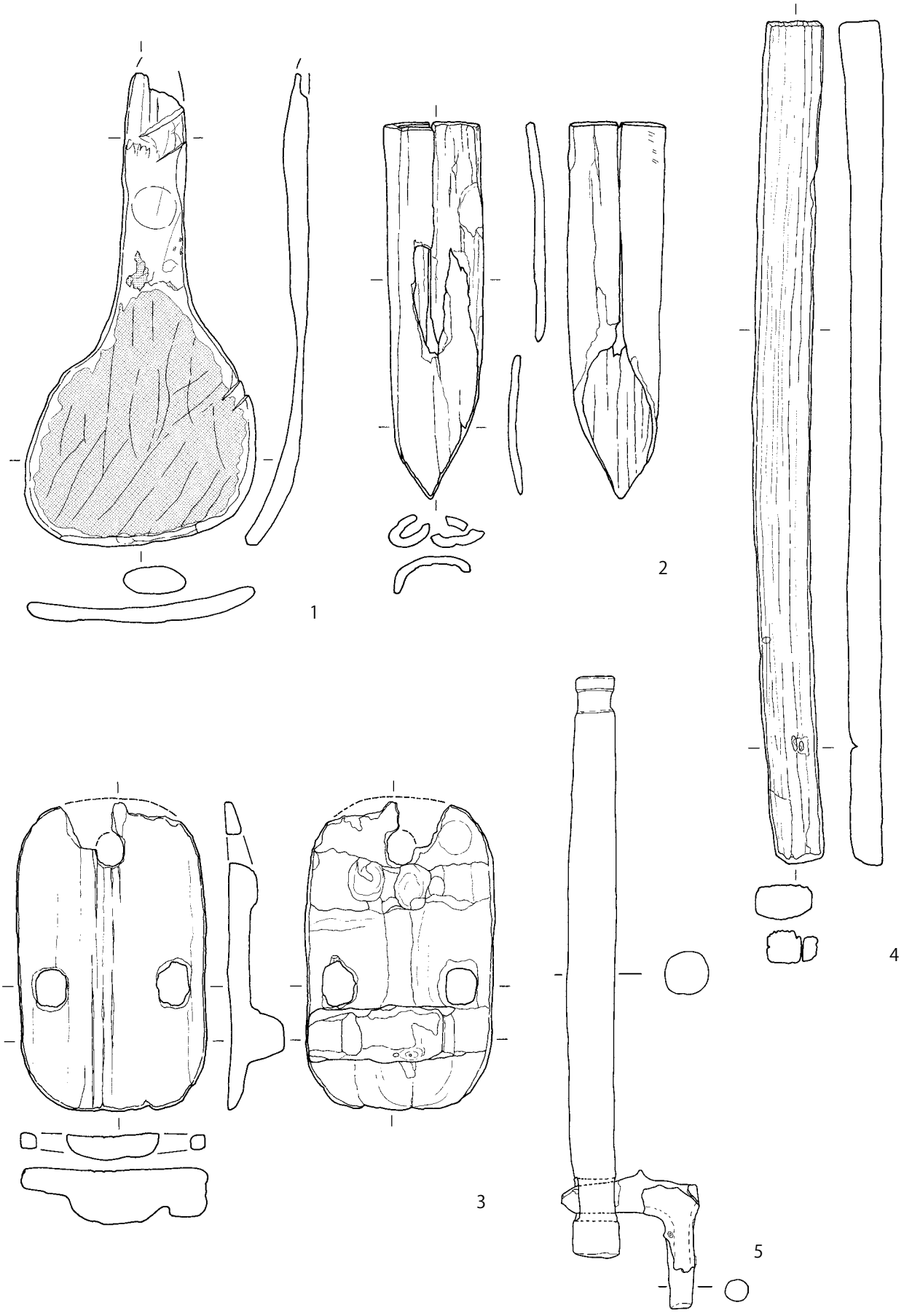
SGD56 底部





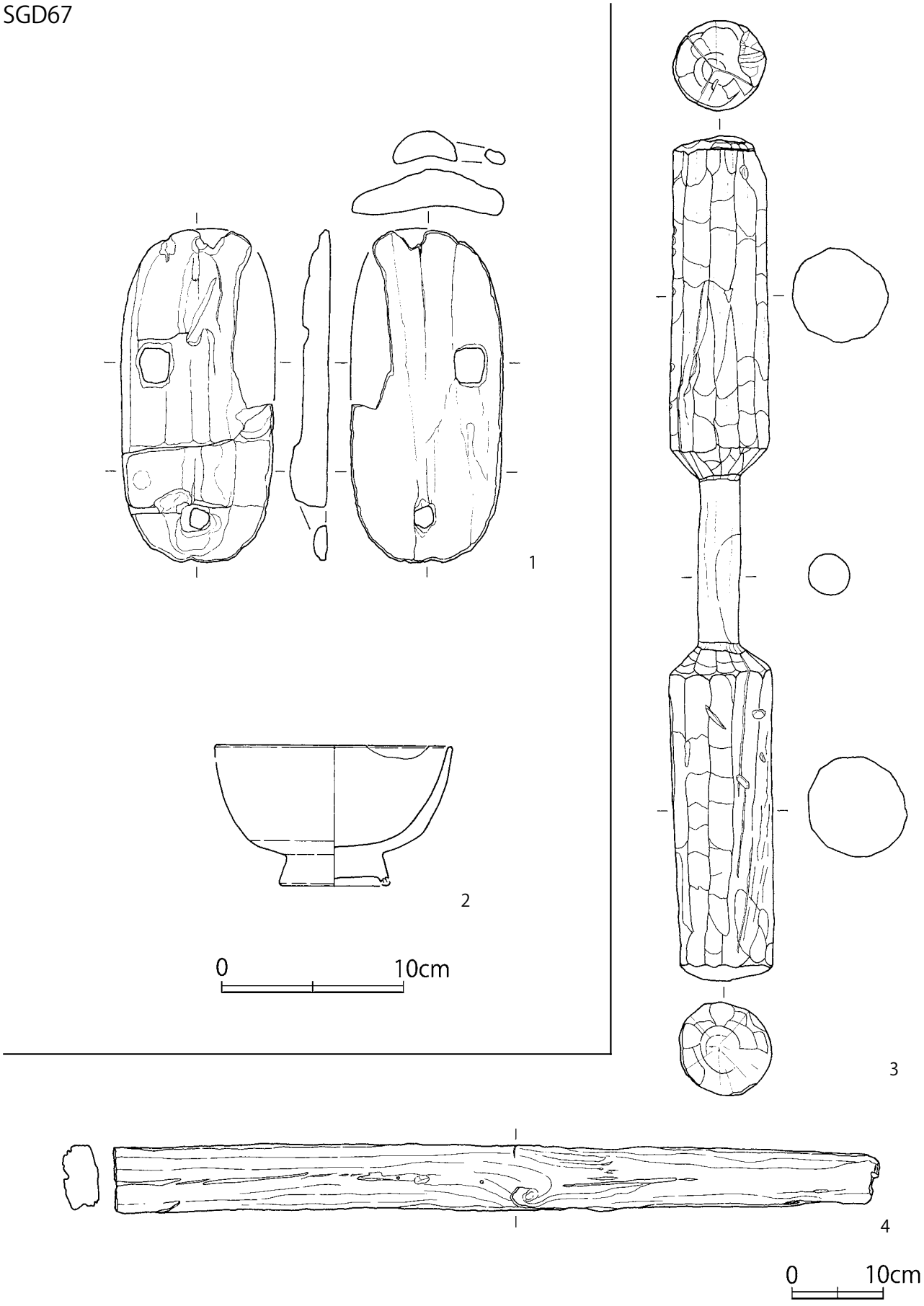
第 96 図　木製品 (25)

SGD67



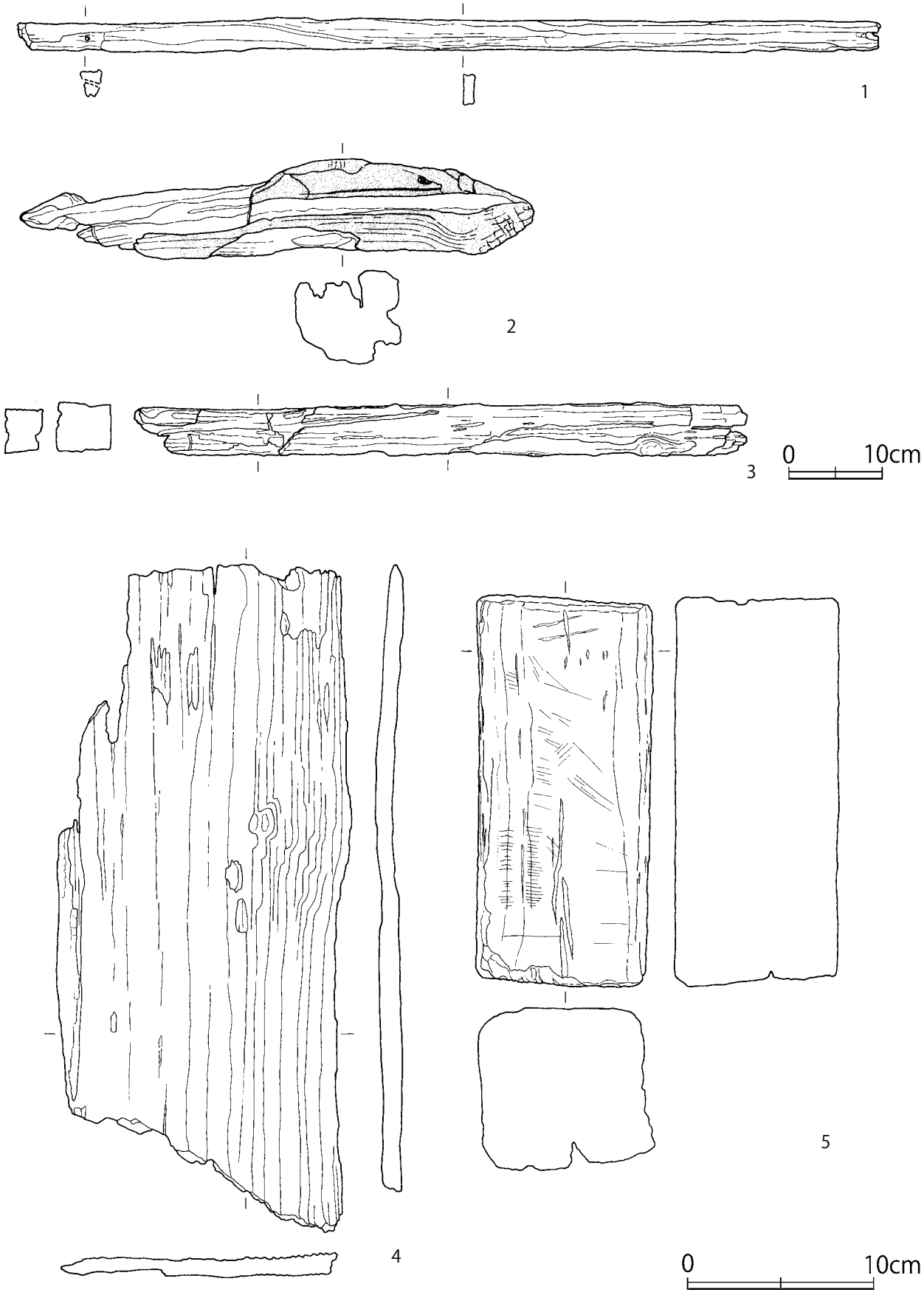
第 97 図　木製品 (26)

SGD67



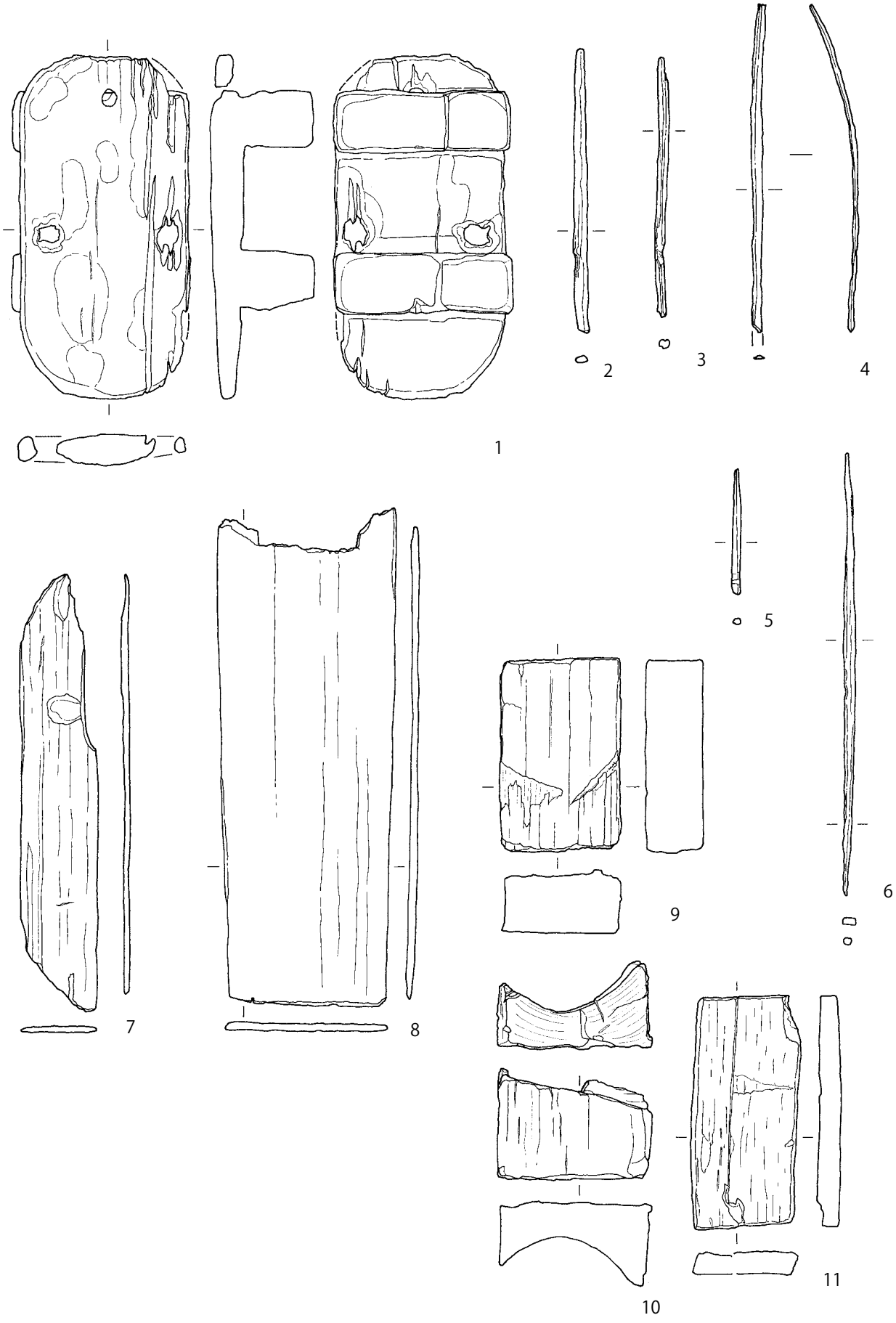
第 98 図　木製品 (27)

SGD112



第 99 図　木製品 (28)

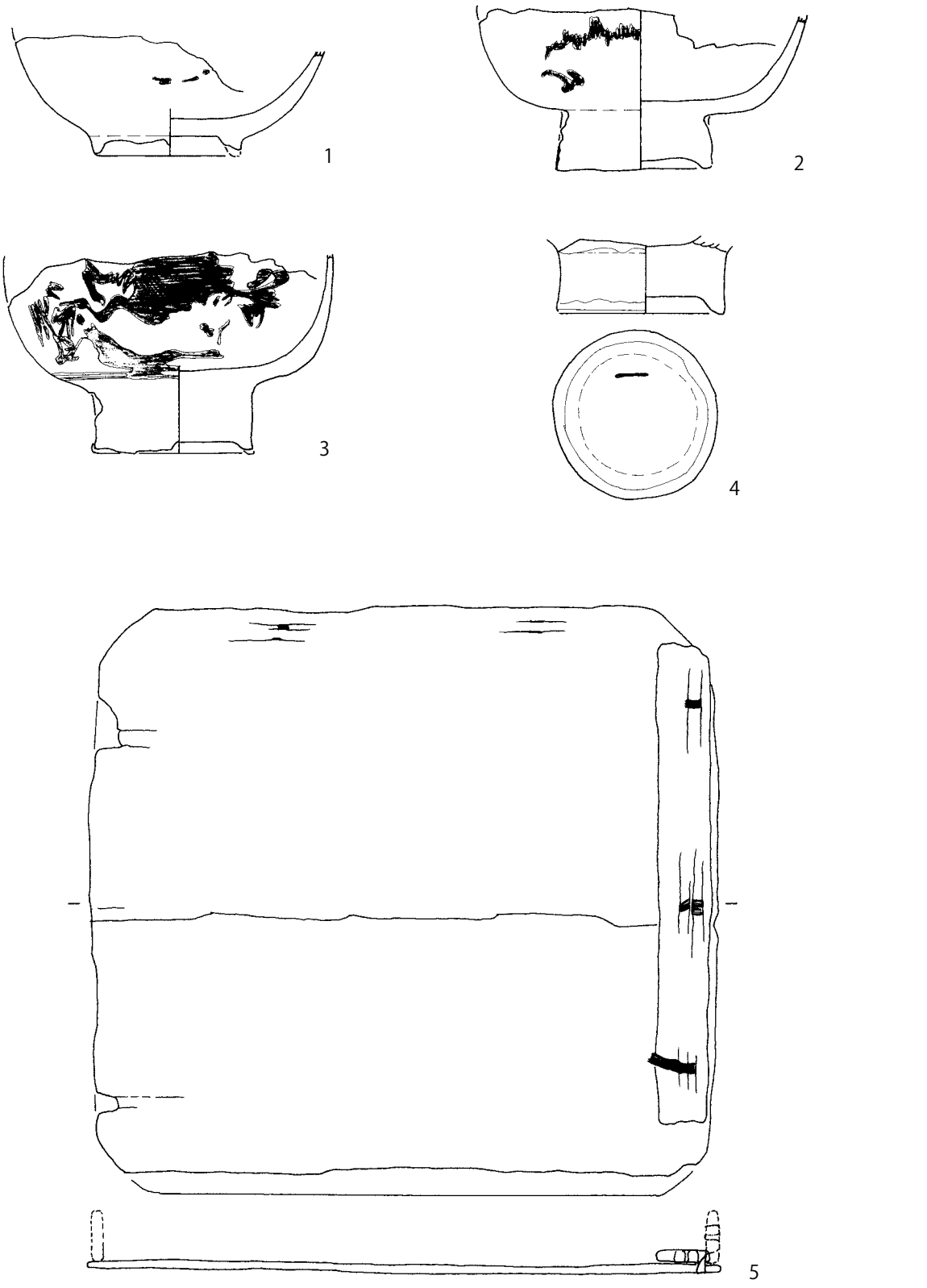
SGD112



第 100 図　木製品 (29)

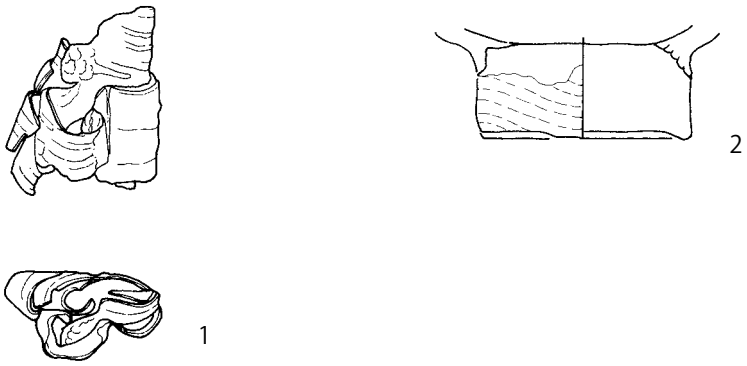
0　10cm

SGD112

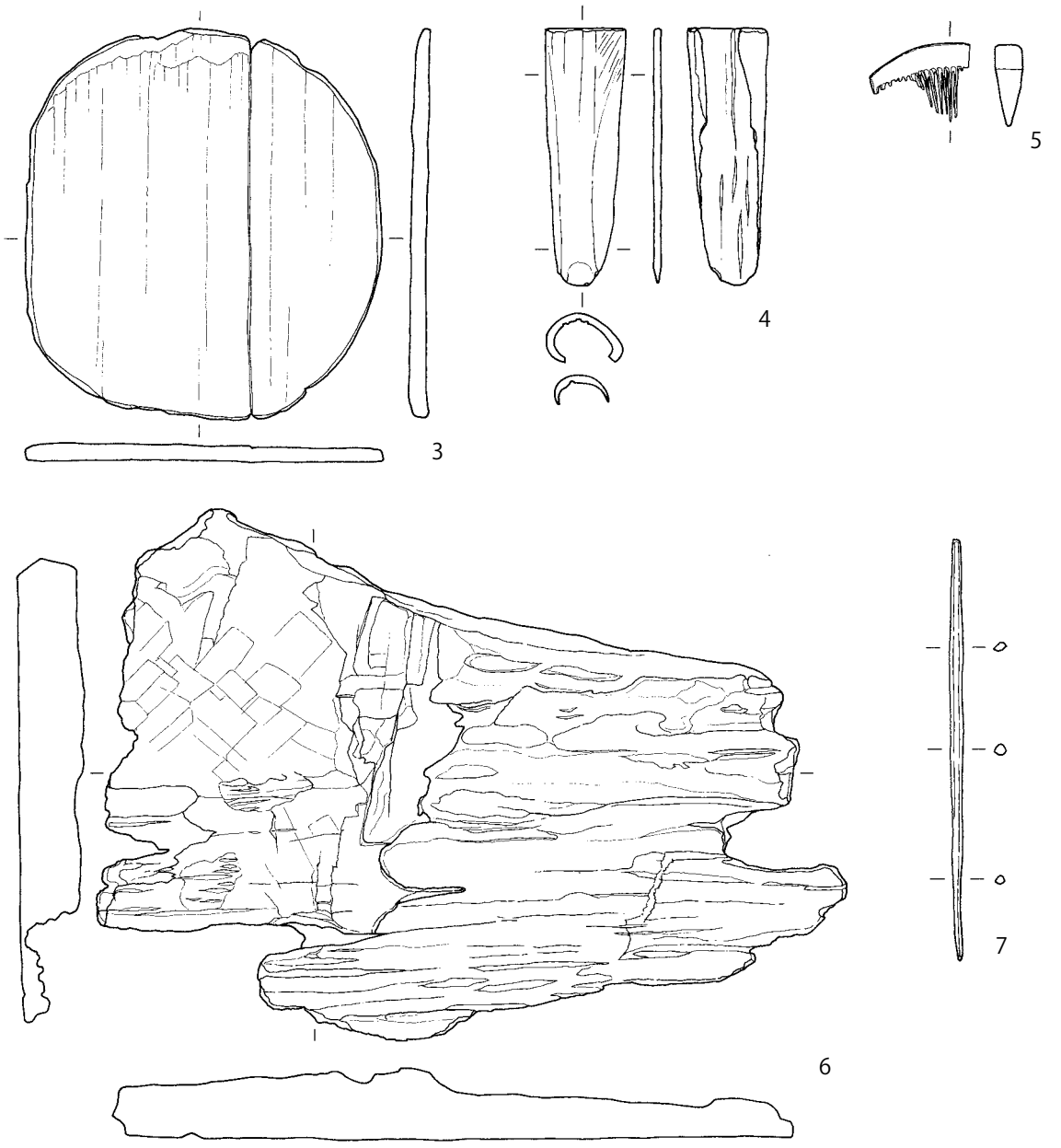


第 101 図　木製品 (30)

SGD112 礫層中

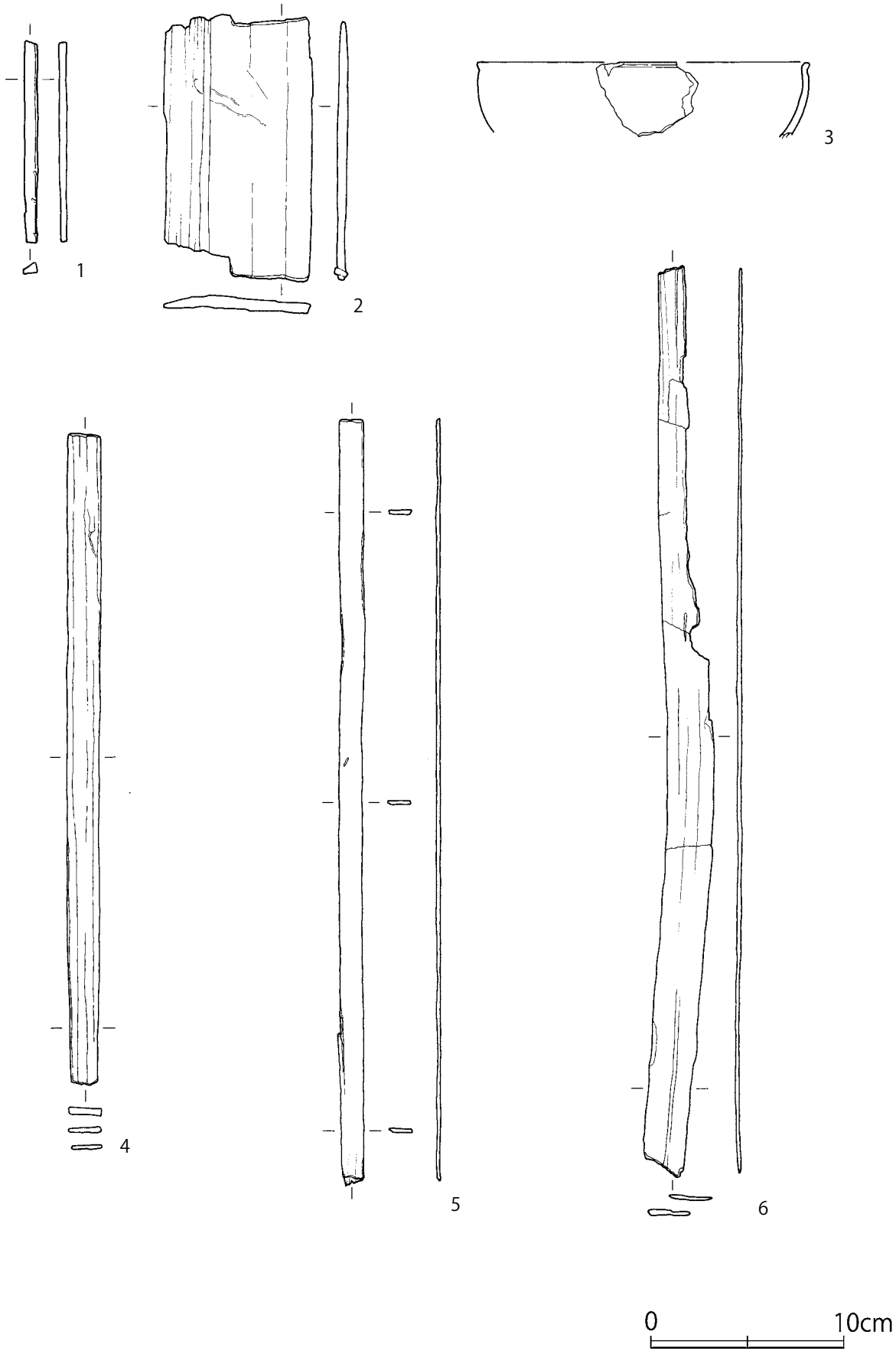


SGE05



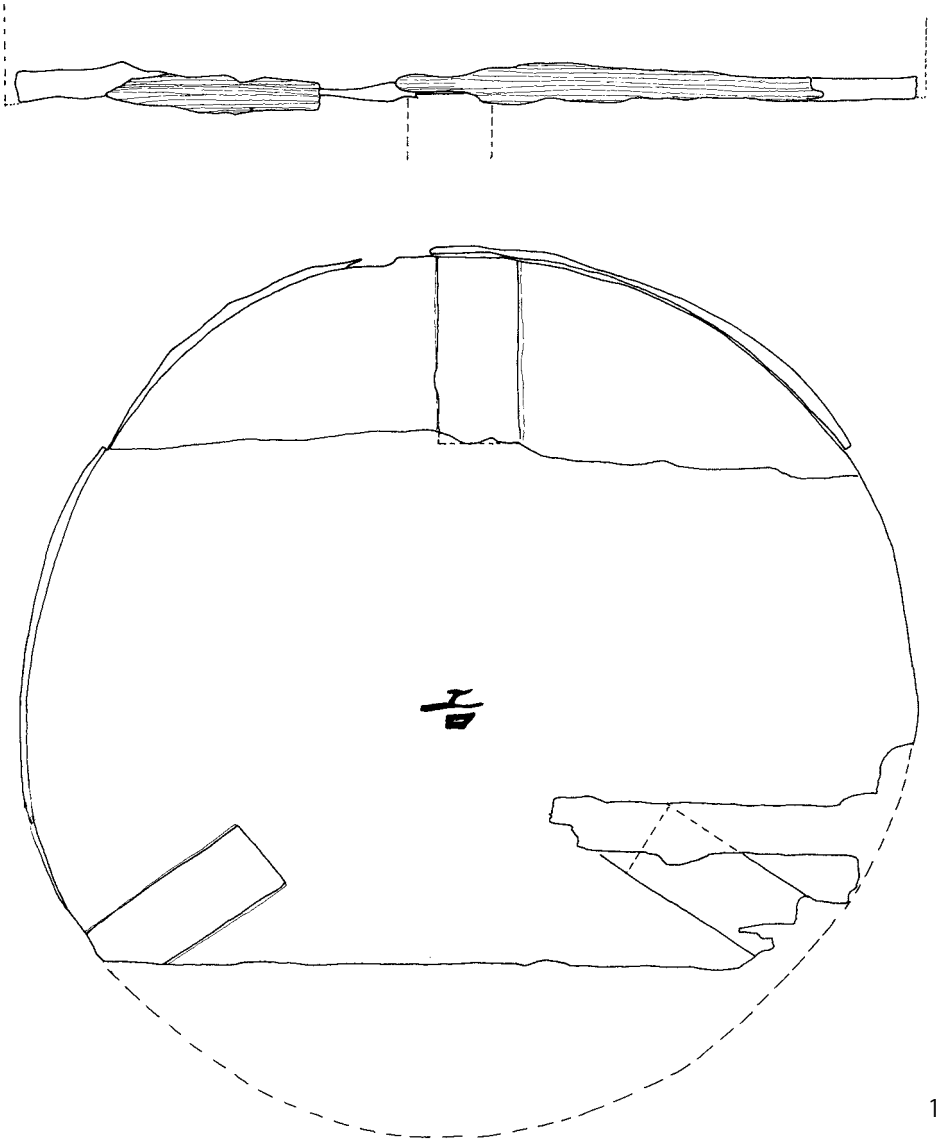
第 102 図　木製品 (31)

SGE06

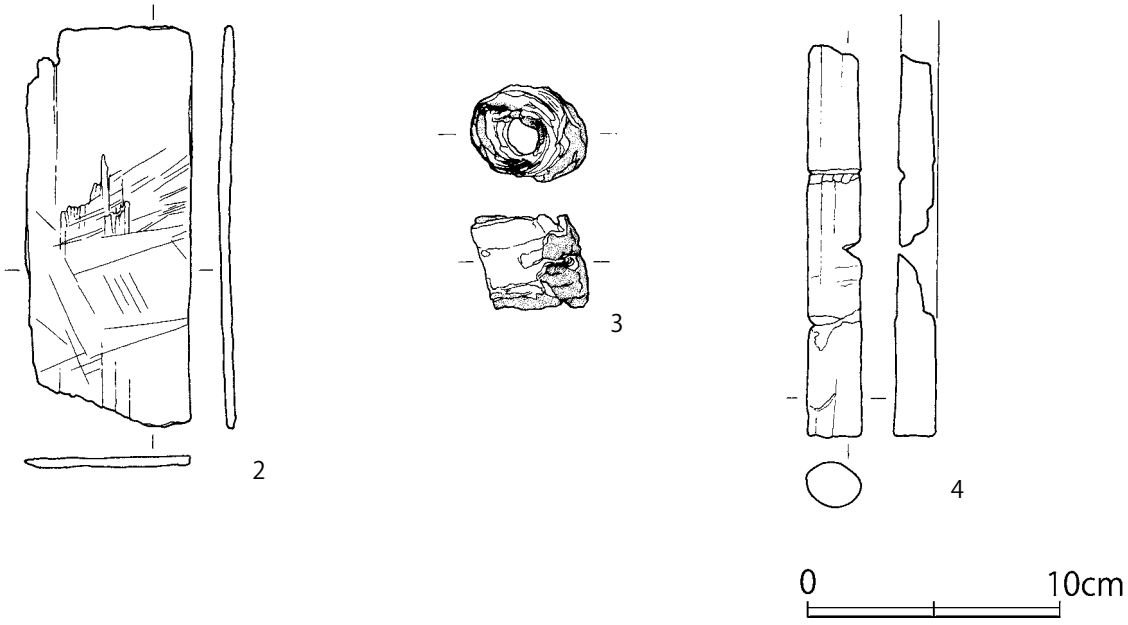


第 103 図　木製品 (32)

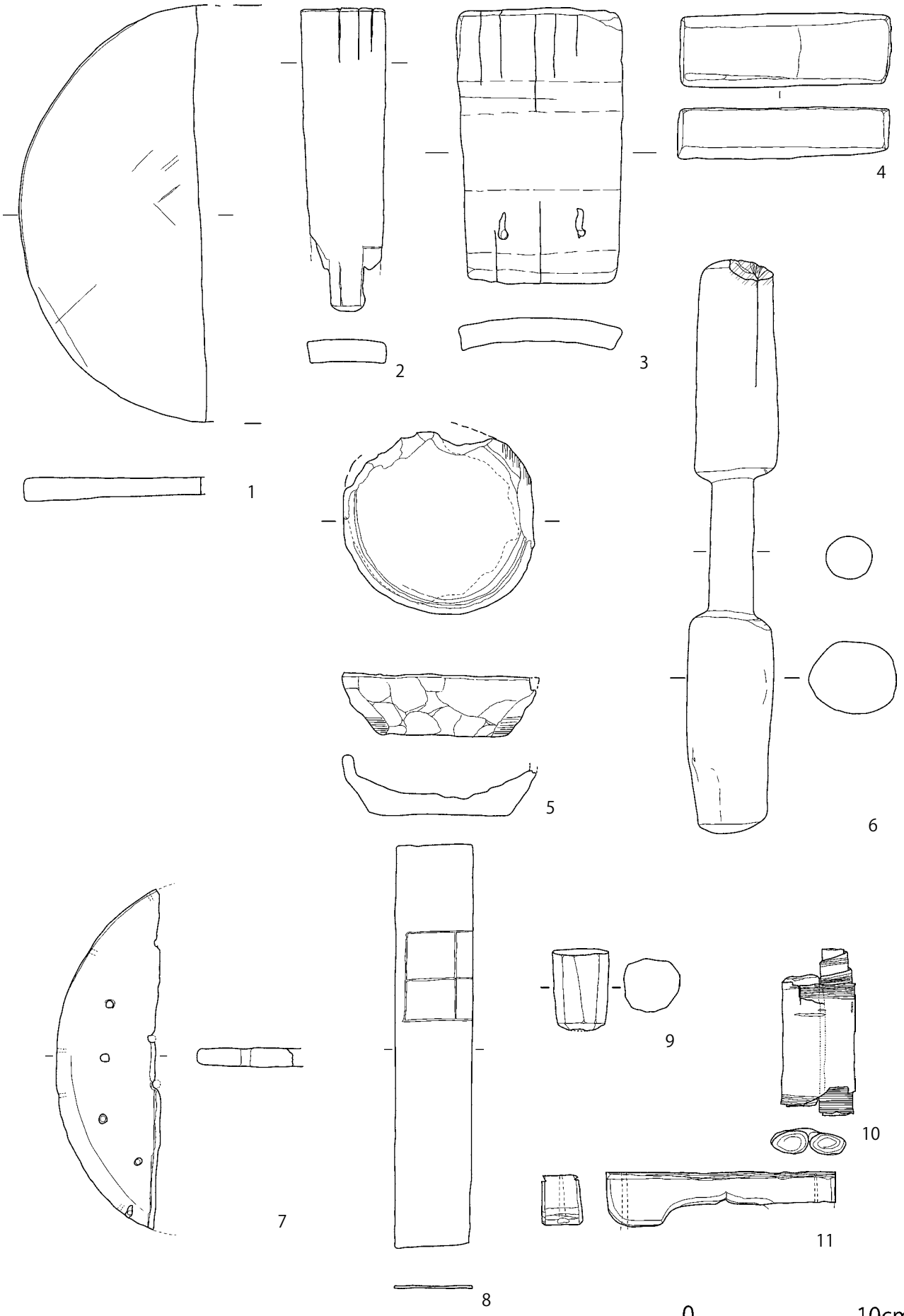
SGE 06



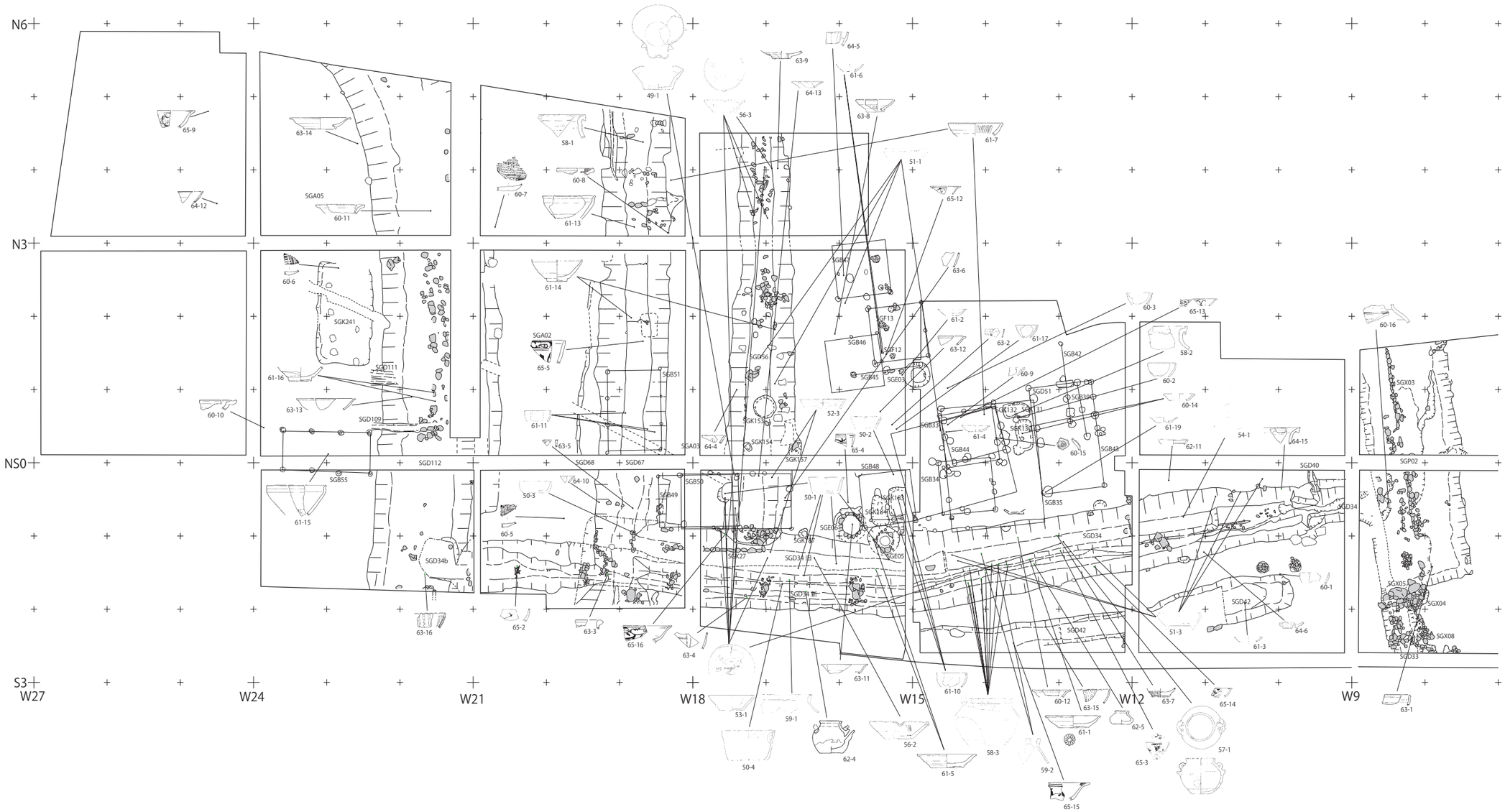
SGP 02



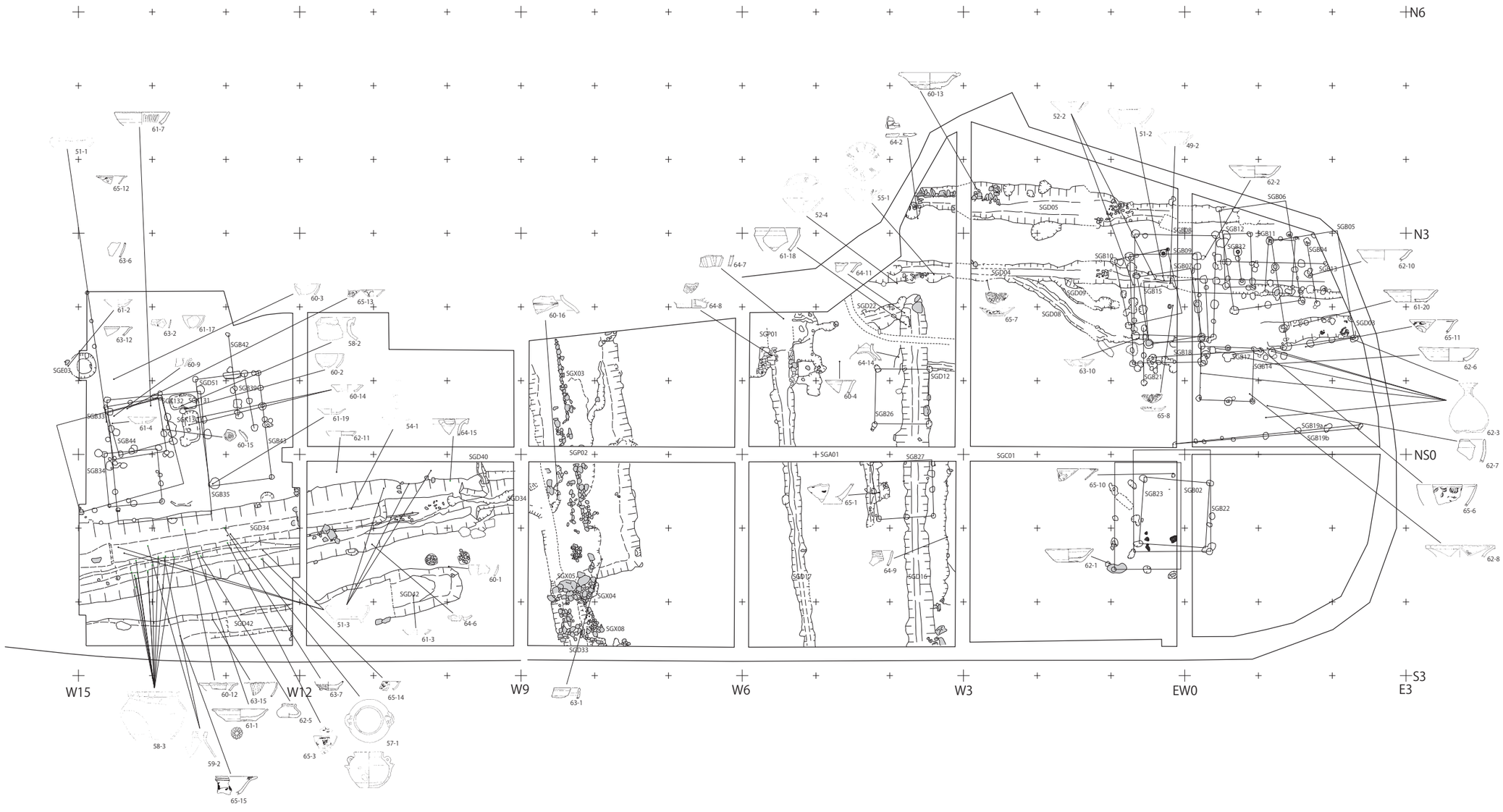
第 104 図　木製品 (33)



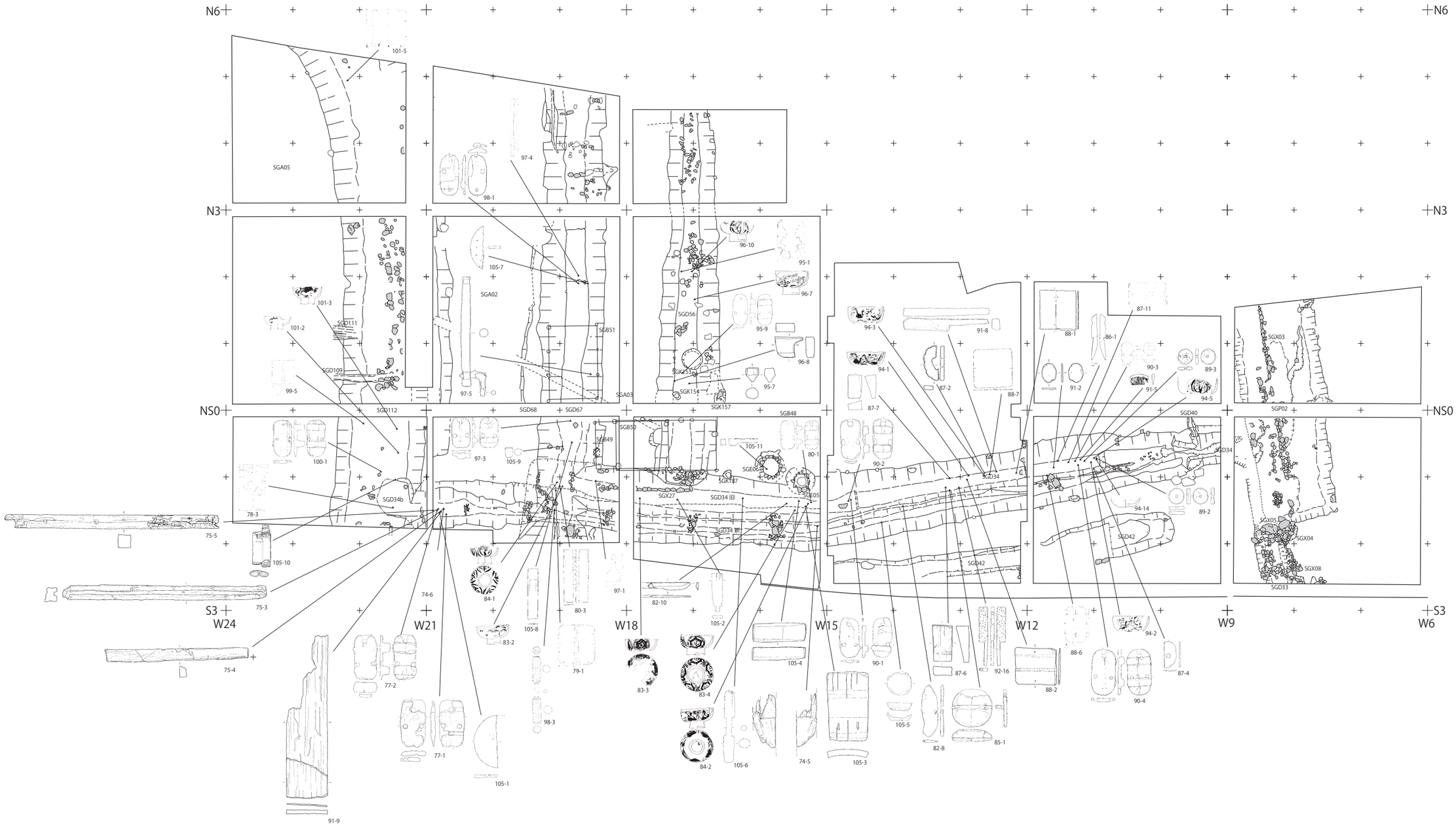
第 105 図　木製品 (34)



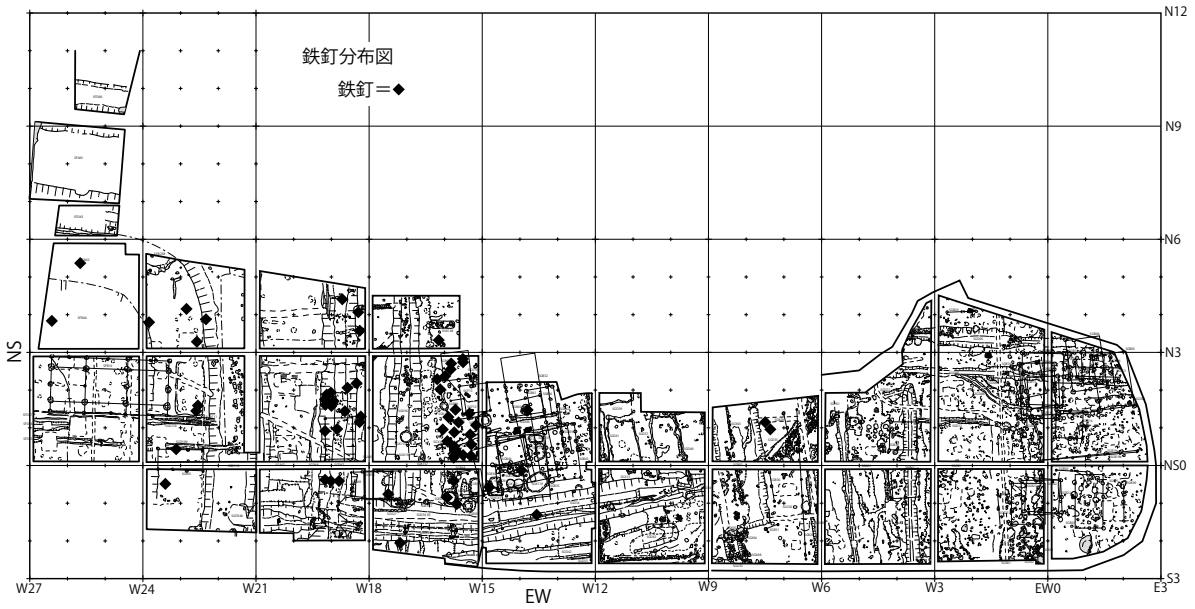
第 106 図　遺物分布図（1）陶磁器類

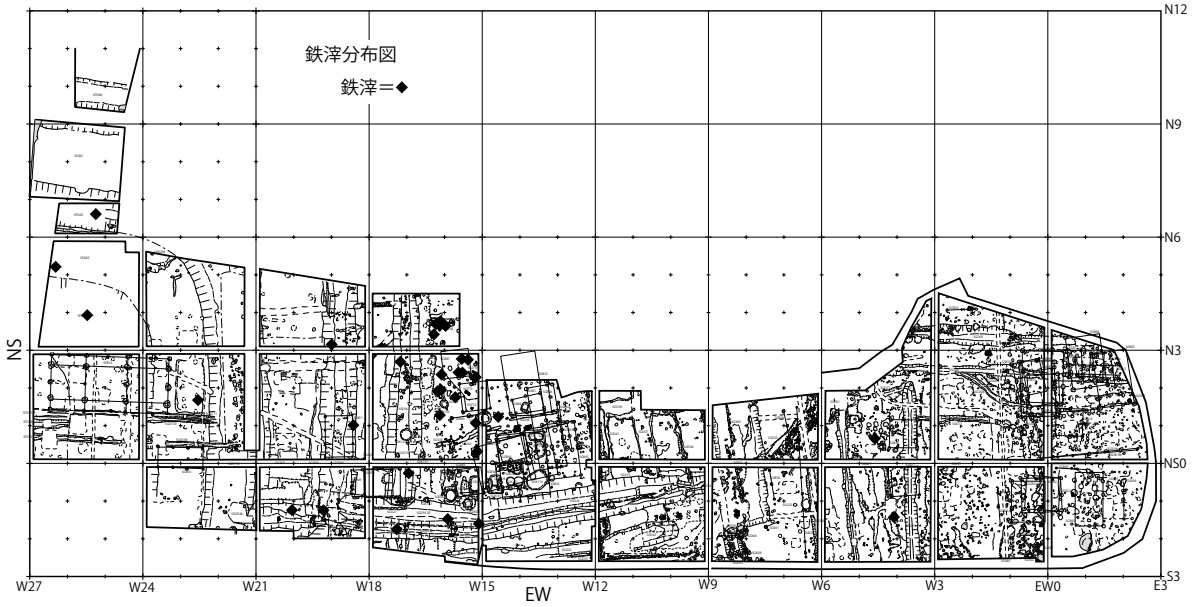


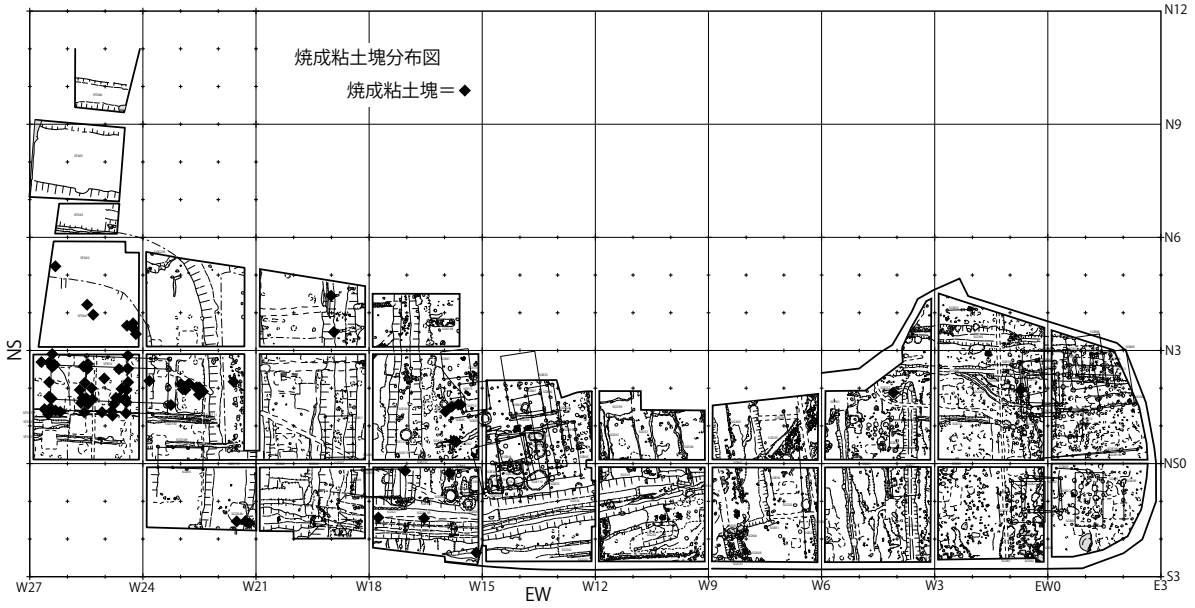
第 107 図　遺物分布図（2）陶磁器類



第 108 図　遺物分布図（3）木製品類


鉄釘分布図
鉄釘＝◆
N12
N9
N6
N3
NS0
S3
NS
W27
W24
W21
W18
W15
W12
W9
W6
W3
EW0
E3
EW


鉄滓分布図
鉄滓＝◆
N12
N9
N6
N3
NS0
S3
NS
W27
W24
W21
W18
W15
W12
W9
W6
W3
EW0
E3
EW


焼成粘土塊分布図
焼成粘土塊＝◆
N12
N9
N6
N3
NS0
S3
NS
W27
W24
W21
W18
W15
W12
W9
W6
W3
EW0
E3
EW

第 109 図　遺物分布図

第５章　外部調査

第１節　地中レーダー調査

平成１４年３月、以下の事項の確認のために地中探査レーダー調査をテラ・インフォメーション・エンジニアリングに委託実施した。

１）北郭を構成する堀と東郭の外堀ＳＦＤ０６との連続関係の確認
２）北郭の領域確定のための西側区画施設位置確認
３）初期外郭帯の西側領域の確定
４）Ｈ８Ｆ区で検出された北辺堀ＳＦＤ０６が東郭の東堀ＳＧＰ０２と連続するかどうかの確認
５）Ｈ１１Ｇ区で検出された調査区南端で止まっている南北堀ＳＧＤ５６は、南側に延長があるか
６）Ｈ６Ｇ区で検出された東郭東辺土塁ＳＧＡ０１の堀ＳＧＤ１６が県立ワインセンター進入路下で屈曲し、道路南側Ｈ地区の土塁ＳＨＡ０１に伴う堀と連続するものかどうかの確認

調査の結果、１）は県道の東側から北郭東辺堀が外郭外堀の位置から始まる状況が観察された。２）は県道上町交差点東側で屈曲した堀（北郭北辺堀）が旧甲州街道に沿い西に 140 m延びていることが確認された。３）は北西郭の中央を東西に通過する堀が県道から西 50m まで確認され、110m 先では確認されなかったことから、この間において屈曲している可能性が高くなった。４）南北堀ＳＧＤ５６の調査区区外でこの堀がＴ字状に交差している状況が確認され、外郭北辺堀ＳＦＤ０６とＳＧＤ５６が接続していること、これがさらに東に延長された状況を示していると判断された。５）堀ＳＧＤ５６の南側延長線上に堀が存在していることが確認でき、堀ＳＧＤ５６南端の途切れた部分は土橋と判断された。６）堀ＳＧＤ１６の延長線上、県立ワインセンター進入路下で堀の存在が確認され、屈曲点の把握には至らなかったが、屈曲している可能性は高いと判断された（第４０図）。

第２節　自然科学分析

外郭域では、木製品類、未製品類と共に多量の植物遺存体が出土した。出土した遺構は堀ＳＧＰ０２、水路ＳＧＤ３４新路・旧路、堀ＳＧＤ５６・６７・１１２、井戸ＳＧＥ０５・０６などで、平成１２年度に検出した木製品類の樹種、植物遺存体、種子類の分析、土壌の花粉、珪藻類の自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施したところ、以下のような状況が分析された。

１）木製品樹種

漆椀はクリ・キハダ・ヒノキ・ハンノキ、漆皿はムクロジ、折敷はヒノキ・モミ、曲輪はヒノキ、底板はスギ、箸はヒノキ・スギ・サワラ・タケ・ウコギ、下駄はクリと広葉樹、杭・板・建材・その他加工木片クマシデ・サワラ・ムクロジ・クリ・マツ・トネリコ・サクラ・スギ・ヤマウルシ・クヌギ・針葉樹が使用されている。

２）樹木類

樹木枝類は、コナラ・マツ・カバノキ・クリ・トネリコ・マタタビ・ヌルデ・ムクロジ・モモ・ウツギ・ハンノキ・マキ・ヤナギなどがある。

３）種実

水路ＳＧＤ３４旧路粘土層から採取された種実は、以下の通りである。

（木本類）

カヤ・イヌガヤ・アカマツ・オニグルミ・ヒメグルミ・ヤマグワ・ウメ・モモ・スモモ・ネムノキ・チャノキ・クリ・カジノキ属・タラノキ

（草本類）
オモダカ属・イネ・イネ科・ホタルイ属・カヤツリグサ科・イボクサ・ミズアオイ属・タデ属・アカザ科－ヒユ科・ナデシコ科・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属・カタバミ属・ヒョウタン類・エノコログサ属・スゲ属・イバラモ属・ウマノアシガタ近似種

4）花粉

水路ＳＧＤ３４旧路粘土層から採取された花粉は以下のとおりである。

（木本類）
モミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属・スギ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科・ヤナギ属・クルミ属・クマシデ属－アサダ属・カバノキ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・クリ属－シイノキ属・ニレ属－ケヤキ属・エノキ属－ムクノキ属・ツツジ科・イボタノキ属・ガマズミ属・スイカズラ属・マキ属・トウヒ属・ヤマモモ属・サワグルミ属・ハシバミ属・キハダ属・シラキ属・ウルシ属・カエデ属・トチノキ属・ブドウ属・ウコギ科・カキ属・コウヤマキ属・ジャケツイバラ属

（草本類）
イネ科・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・ユリ科・ギシギシ属・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ソバ属・ナデシコ科・キンポウゲ属・フウロソウ属・ミソハギ属・ヒルガオ属・オオバコ属・ゴマ属・マツムシソウ属・ヨモギ属・キク亜科・オモダカ属・サジオモダカ属・クワ科・イブキトラノオ節・アカザ科・キンポウゲ科・キケマン属・アブラナ科・キカシグサ属・セリ科・オミナエシ属・オナモミ属・タンポポ亜科などがある。

5）珪藻分析

堀、水路の植物遺存体を伴う土層の珪藻分析から以下のような状況が判断された。

堀ＳＧＤ６７初期堆積層

流水不定性種が優先し、堀に河川からの流れ込みがあった。

堀ＳＧＤ６７改修後層

好汚濁性種が産出され、水の停滞により富栄養化が進んだ。

堀ＳＧＤ５６初期堆積層

流水不定性種が優先し、河川水の流入する沼沢湿地性種群が含まれる。

水路ＳＧＤ３４旧路初期層

流水不定性種が優先する。

水路ＳＧＤ３４旧路廃棄物層

流水不定性種、富栄養種、陸生珪藻が混在し、土ごと廃棄物が投棄された可能性がある。

溝ＳＧＤ４２底部粘土層

陸生種と水生種が半々ずつ検出される。

第３節　動物遺体

植月　学（山梨県立博物館）

資料は発掘調査時に採取されたもの、および井戸ＳＧＥ０６の灰層を水洗選別して得られたものからなる。所属時期は第１期段階（１５世紀代）を中心とする（撹乱出土を除く）。

現場採取資料では哺乳類４種が同定された。シカが大部分を占めるが、部位の重複がまったく見られないこと、堀ＳＧＤ６７のＷ19ＮＳ０グリッドを中心に隣接するグリッドでのみ固まって出土していることから１個体に由来する可能性がある。下顎骨の歯の萌出状況より２歳程度の若獣と推定される。

残された部位は一部だが、環椎とすべての頸椎、右側肋骨の大部分、右前肢（肩甲骨と上腕骨）、右後肢（大腿骨と脛骨）などがまとまって残されており、ブロックごとに廃棄されたと推測される。

右肋骨の多くには近位部内面に刃物で何度も切りつけた跡が確認された。脊柱から肋骨を折り取る際の傷と考えられ、実際に折れている部分も観察される（写真図版 31 下）。椎骨、肋骨ともに骨製品の素材としての価値は低いことから、肋骨につく肉を求めての行為であることは間違いない。シカの入手自体は骨角や皮革などの利用目的もあった可能性もあるが、少なくとも食用に供されたことが以上により明らかである。

堀ＳＧＤ６７からは他にイノシシ、イヌも少量ながら出土している。堀ＳＧＤ１１２からもウマの他、大型の哺乳類の破片が出土した。なお、イノシシ下顎が出土した土壙ＳＧＫ２２２、マグロ属が出土した溝ＳＦＤ３５はいずれも撹乱である。イノシシは別の遺構からの２次堆積の可能性もあるが、マグロ属は保存状態が良く、明らかに後世の混入物である。

以上のように哺乳類の廃棄は内堀ＳＧＤ１１２と外堀ＳＧＤ６７を中心に確認された。肉食の実態や頻度を論じるにはあまりに断片的な資料ではあるが、切痕のあり方から、１５世紀段階の武家の居舘において肉食がおこなわれていたことが確かめられた。

水洗選別資料は井戸ＳＧＥ０６覆土中に廃棄された灰・炭化物層中より回収された（篩は 4、2、1mm）。いずれも被熱し、白色化している。ニワトリ、魚類５種が同定された。アジ科は破片のため確実性を欠くが、マアジなど小型のアジ類の椎骨と考えられる。タイ科はマダイ、クロダイなどのタイ類の第２椎骨の破片である。他に歯も１点検出された。これらはマグロ属も含めていずれも 50cm に満たない比較的小形の個体と推定され、当時の海産魚類の運送事情を反映しているのかもしれない。

中世甲斐への海産魚類の流通は、文献資料では、二宮祭礼帳（天正年間）の鰹、いわし、うずわ（ソウダガツオ）など、１６世紀以降のものがわずかに知られるに過ぎない。実物資料としても南アルプス市大師東丹保遺跡出土の鎌倉時代の可能性があるマダイ１点が唯一の例であった。今回の資料は出土状況が明らかで、複数であることから確実な証拠として重要である。

第６表　現場採取資料

種	調査区	遺構	グリッド		層位	取り上げ番号	部位	左右	位置	数	備考/計測値(mm)	整理番号
イヌ	H12G	SGD67	W19	N2	最下層	木No.1115	上腕骨	右	遠位端	1		01
シカ	H12G	SGD67	W19	N1	下層	木その他No.1077	肩甲骨	右	完存	1	切痕？GLP:47.1、BG:35.2	02
						木No.1092	上腕骨	右	完存	1	BD:47.0、GL:206	03
						木No.1046	大腿骨	右	近位端-遠位端（欠）	1		04
			W19	N2		木No.1088	寛骨	左	寛骨臼	1		05
			W19	NS0	－	(木その他)No.1116	下顎骨	左	[<P1>m23M12<3>]	1		06
					下層	その他No.1074	腰椎	－		2		07
						その他No.1074	肋骨（第6？）	右	遠位端	1		08
						木No.1078	肋骨（第8？）	右	近位端	1	切痕	09
						木No.1079	脛骨	右	近位端-遠位部	1		10
						木No.1085	肋骨（第9？）	右	骨幹部	1	切痕	11
						木No.1086	腰椎	－		1		12
					底	(木その他）骨No.1096	頸椎（第4）	－	前右	1	No.1101と同一か。切痕？	13
						(木その他）骨No.1097	肋骨（第3？）	右	遠位端	1	切痕	14
						(木その他）骨No.1099	肋骨（第13？）	右	近位端	1	切痕	15
						(木その他）骨No.1100	環椎	－		1	GB:80.9、GL:66.7	16
						(木その他）骨No.1101	頸椎（第4～7）	－		4		17
						(木その他）骨No.1102	頸椎（第6）	－	左半	1		18
							肋骨（第7？と10～12?）	右	近位端	2		19
						(木その他）骨No.1104	肋骨（第11？）	右	近位端	1	切痕	20
						(木その他）骨No.1107	軸椎	－	後半	1		21
							頸椎（第3）	－	完存	1		22
						(木その他）骨No.1108	肋骨（第5？）	右	近位端	1	切痕	23
イノシシ	H11G	SGD67	W19	S1	下層	木No.911	顎骨、歯	？	破片			24
			W20	S2	下層	木No.864	上顎骨	右	[M12]	1	成獣	25
	H13G	SGK222	W22	N2	－	－	下顎骨	左右	左[IxxxCx<P1>mx23M1] 右[IxxxCx<P1>m123M1]	1	撹乱。若獣	26
ウマ	H13G	SGD112	W22	N5	下層	No.1134	橈骨	左	骨幹部	1		27
大型獣	H14G		W22	S	下層	木その他No.1322	？	？	破片			28
			W22	S2	下層	木No.1360	？	？	破片			29
哺乳類	H14G		W22	S2	下層	木No.1388	？	？	破片			30
	H11G	SGD56	W18	S1	中層	木No.882	？	？	破片	2		31
	H15F	SFD44	－	－	－	－	？	？	破片			32
マグロ属	H15F	SFD35	－	－	－	－	擬鎖骨、肩甲骨	左		1	撹乱。他に鳥骨片	33

第７表　水洗選別資料

種	層位	部位	左右	位置	数	推定体長	備考	整理番号
アジ科	灰層中	尾椎	－	破片	1	26cm前後		S1
タイ科	灰層直下土層	歯	?	完存	1			S2
	灰層中	腹椎	－	破片	1	35cm前後	第2	S3
スマノカツオ	中層灰木炭層	尾椎	－	完存	1	30cmよりやや小		S4
スマ	灰層中	尾椎	－	完存	1	50cm未満		S5
マグロ属	灰層中	腹椎	－	完存	1	40cm前後		S6
ニワトリ	灰層中	足根中足骨	左	完存	1		雄	S7

※体長は標準体長。現生標本との比較による

第６章　調査の成果

第１節　館以前の時期変遷

外郭域では、１１世紀後半から１２世紀前半の白磁瓜破壺の破片に始まり、その後１２世紀から１３世紀の青磁四耳壺、水注、洗、同安系櫛歯紋、古瀬戸中ⅠからⅡ期の卸皿、常滑６ａ～６ｂ期・７期の甕など高級陶磁器から日常陶器類および柱状高台の土師器等も見出されており、この時期に該当する建物遺構は見出されていないが、この付近に高級陶磁器を入手し使用する施設が有り、その施設が設置される領域として利用されていたと考えられる。

この施設も１４世紀後半を過ぎるとその役割を終え、耕地化が行われたことが、Ｈ１２ＧからＨ１３Ｇ区にかけ検出された水田遺構が示しており、さらにこの水田層を切る竪穴状遺構の存在から、一般集落地に組み込まれていった状況が窺える。

第２節　外郭施設の時期変遷

しばらくすると、農村風景を一変させるよう土塁や堀により郭を区画し、さらにその内外に水路や建物が設置される館の時期を迎える。勝沼氏館跡ではすでに内郭部で、遺構の重複関係から３時期の変遷があったことが確認されており、その後実施された範囲確認調査で、内郭を取り巻く第２の堀（外堀）に伴う土塁ＳＡ－０３が土塁基底部から土師質皿を伴う生活面が検出されたことにより、当初から有ったものではないこと、同様に東郭の東辺を画する土塁ＳＨＡ０１も当初は無かったことなど、外郭域においても時期変遷があったことが明らかにされている。

今回の外郭域調査では、外郭域の土塁や堀、水路など大規模施設の重複関係が明らかになったことからその時期変遷を検討してみたい（第１１０～１１６図）。

外郭第１期　館に伴う最も古い施設は、土塁ＳＧＡ０５と堀ＳＧＤ１１２、土塁ＳＧＡ０２と堀ＳＧＤ６７の近接二重の土塁堀から構成される南北の防御施設で、この施設が西に屈曲し東西の土塁ＳＦＡ０２と堀ＳＦＤ４３、土塁ＳＧＡ０１と堀ＳＧＤ０６と連続している。この防御施設は既存の内郭部内堀から 20m 外側にあり、この間に帯状の郭（外郭帯）を構成していたことになる。この近接二重の堀土塁が当初から二重構造であったのか、あるいは一重から二重へと順次整えられたものかは、遺構、遺物面から峻別することは出来なかった。その後、東辺を構成する土塁と堀は、堀ＳＧＤ６７を一部埋めてその上に土塁ＳＧＡ０３を構築し、土塁に伴う堀ＳＧＤ５６が設置された経過から、東側に２重構造がシフトする構造改修が行われる。これと連動し当初の内側の堀ＳＧＤ１１２が土塁ＳＧＡ０５側からの土砂により埋まり、溝状に変化しており、この改修が外郭帯の拡幅整備であったことを窺うことができる。加えて、外郭帯には調査区の南端、Ｓ

２からＳ３ライン間、現県立ワインセンター進入路下に、出入り口通路遺構が検出され東門（正門）が設置されていたことが明らかになっており、門構の改修として捉えることができる。基本的な構成が継承された状況での大規模改修であることから、外郭帯防御施設が機能していた時期を外郭第１期とし、改修より前を１Ａ期（第１１１図）、改修以後を１Ｂ期（第１１２図）とする。なお、水路との関係を考えると、第１Ａ期の外郭帯外堀ＳＧＤ６７には珪藻分析から流水路が接続されており、第１Ｂ期の改修後はこの機能が外堀ＳＧＤ５６に移った経過が窺え、外郭第１期段階から外郭帯の外堀には流水路が接続されていたと考えられる。また、Ｅ群建築の間から見出された、井戸ＳＧＥ０５、ＳＧＥ０６は、水路ＳＧＥ３４旧路より古く、おそらく外郭第１期に所属するものと考えられる。

第１期の年代は土塁ＳＧＡ０５構築以前の竪穴状遺構から古瀬戸後期の卸皿が検出されており、これを上限とする。また堀ＳＧＤ５６の覆土中から１５世紀前半のＢ群白磁皿が検出されており、下限は堀ＳＧＤ１１２から検出された白磁皿Ｃ１群、堀ＳＧＤ５６から検出された青磁稜花皿から１５世紀後半と考えられる。瀬戸大窯製品を伴わないことから、第１期は１５世紀代が想定される。１Ａ期を１５世紀前半、１Ｂ期を１５世紀後半と大まかに捉えておく。

外郭第２期　その後外郭域では、外郭第１期の外郭帯の東辺防御施設は埋め立て、45m 東側に新たに設けられた土塁ＳＧＡ０４と堀ＳＧＰ０１に役割を移行し、その間に東郭が形成されることになる。この郭の東辺土塁は、鍵の手に屈曲しており、その内側に東郭東門が想定できる。この改修は郭の新設から城砦的門構造の設置まで及んでおり、館から城砦的機能を備えた館への基本構造を変える大規模改修といえる。この改修と同時期であるかは特定されていないが、外郭第１期の外郭帯には内郭部の第２の堀（外堀）ＳＦＤ４６が開削され、この堀は内郭部北西で屈曲して北西郭を構成し、この北西郭を囲むように北郭も設置され、内郭の北面の防御構造が強化されており、この北面の整備と東郭拡大整備は連動したものと考えるのが自然である。この改修に伴い、外郭第１期外郭帯の外堀に接続されていた流水路は堀ＳＧＰ０２に流入するようになり、さらに出水路ＳＧＤ３３から、県立ワインセンターの東隣Ｈ地区の石積水溜ＳＨＰ０１に一旦入り、Ｃ地区の石積水路ＳＧＤ０２を経由して、内郭部に供給される幹線水系が整備されたと考えられる。その後、この幹線水系は、堀ＳＧＰ０２を半減させ、新たに途中から開削された水路ＳＧＤ３４旧路に変更される。この水路は、外郭第１期の遺構を全て切っており、東郭を南北に２分することになる。この東郭の設置に伴う大規模な構造変化が起こった時期を外郭第２期とし、水路ＳＧＤ３４新路が設置されるまでを第２Ａ期（第１１３図）、以後を第２Ｂ期（第１１４図）とする。

第２期の年代は、水路ＳＧＤ３４旧路から大量に見出される瀬戸大窯１期の灰釉端反皿を主体とした遺物の年代からおおむね１６世紀の前葉だと考えられる。

外郭第３期　さらに外郭域では内郭部の第２の堀ＳＦＤ４６を埋め、東郭内屋敷の造成と建物整備が行われる。この部分は内郭近接２重堀の外堀屈曲部に当たり防御上極めて重要な部分であり、城砦としての機能を必要としなくなったことを示唆している。さらにこの屋敷に給水するようＳＧＤ３４新路が開削され、この水路に水を供給する郭東辺の堀ＳＧＰ０２も堀としての機能を失い水路化していることが確認されており、これは東郭だけで無く、館全体の防御施設が形骸化する変化と考えられ、この館に城砦としての機能が求められなくなった結果と受け止められることから、これをもって外郭第３期とする。さらに、東郭内屋敷の建物が焼失し、その廃棄物が水路ＳＧＤ３４新路の末端に投棄され、水路としての機能を失い、新たにこの水路を横断する水路ＳＧＤ３７が開削され、しばらくしてからこの館は終焉を迎え、近世初頭の水田化が始まる。幹線水系の変化を示す水路ＳＧＤ３７の整備期以前を３Ａ期（第１１５図）、以後を３Ｂ期（第１１６図）とする。

第３期の年代は、堀ＳＦＤ４６の埋め立て造成層で建物ＳＦＢ１０の下部から瀬戸大窯２期前半の灰釉内ソギ丸皿片が出土しており、上限はこれ以降で、下限は水田造成層から見出される瀬戸連房窯１・２小期の鉄絵皿より前である。

ここで、Ｈ５Ｇ区、Ｈ６Ｇ区で検出された館に水を供給する深沢用水の前身水路と考えられる郭外水路Ｓ

ＧＤ０４とＳＧＤ０５の時期について検討してみたい。これらの水路と外郭施設との結節点が調査区外であったため水路の連続性から直接的に時期の特定ができないためである。まず、並行する両水路は掘り込み層面の違いからＳＧＤ０４が古くＳＧＤ０５が新しいことが確認されており、ＳＧＤ０４は第２Ａ期の鍵の手に飛び出た東郭東辺土塁ＳＧＡ０１の整備段階では北側を抜ける通路の障害となり、ＳＧＤ０４からＳＧＤ０５へのルート変更はこの通路空間の確保にあったと考えられることから、ＳＧＤ０４は第１期、ＳＧＤ０５は第２Ａ期以降の水路とすることができる。なお、ＳＧＤ０４は流路を南側に迂回させる部分改修が行われており２小期に分けることができる。さらに、水路ＳＧＤ０５は建物ＳＧＢ０６により切られていることから、この建物の時期には埋められ、おそらく現状の深沢用水にその機能が移され、この水路を基準として建物が設置された一時期が存在したと考えられる。

第３節　建築の時期変遷

外郭域で検出された建物遺構は全て掘立柱構造であり、内郭部が礎石建築であることと明瞭な違いがあり、これらの建築遺構の時期変遷を群ごとに検討してみたい。

Ｃ群建築　第２Ａ期に設置された土塁ＳＧＡ０１下から検出されたＣ群建築２棟は、伴出した１５世紀前半の雷紋帯青磁碗からも第１期に属する建築であることが確認できる。その特質はＳＧＢ２６より、小柱穴を用いること、梁行２間幅と狭く、梁行２間幅を一本の梁材で結ぶ２間 (12 尺) 飛ばしの高架技術を用いることが掲げられる。なお、ＳＧＢ２７は扁平であり前述の技法は用いられていないが、ある意味技術的稚拙さを示しているとも理解できる。

Ａ群建築　次に水路とも重なり、住宅建築が重複するＡ群建築を検討してみたい。Ａ群建築中、ＳＧＢ１４とＳＧＢ１５が２間四方で２間飛ばしの高架法を用いていることから、Ｃ群建築との類似性が認められ第１期建築として峻別される。第１期水路ＳＧＤ０４とその改修水路との関係からＳＧＢ１４が第１Ａ期、ＳＧＢ１５が第１Ｂ期の建築ではないかと考えられる。

次に残された建築から付属屋と考えられる建物を抽出してみる。

付属屋１類　１間２間のＳＧＢ１１とＳＧＢ１２は横長の同形状で付属建築と判断され、その形状から馬屋の可能性が考えられる。

付属屋２類　２間梁飛ばしの桁柱建物ＳＧＢ０７とＳＧＢ１０も同形状で、ＳＧＢ０７がＳＧＢ０９より新しい建築であることを考慮すると、小規模であることから付属建築と理解される。その機能は床束柱を備えていることから倉庫ではないかと考えられる。

残されたＳＧＢ０５、ＳＧＢ０６、ＳＧＢ０８、ＳＧＢ０９はＡ群建築のなかでも大型建築で、屋敷の中心家屋となり得る建築であり、構造的違いから３タイプに分けられる。

主屋１類　梁行１間（１８尺）で棟持ち柱を用いない３間梁飛ばしの桁柱構造を取る建築。ＳＧＢ０８

主屋２類　梁行２間半（１５尺）で棟持ち柱を持つ側柱構造建築。ＳＧＢ０６、ＳＧＢ０９

主屋３類　梁行２間半（１５尺）で内部区分柱を持つ建築で、区分ごとに桁行柱間を変える。ＳＧＢ０５

また主屋と付属建築の位置関係から配置形式が以下のように分けられる。

配置１形式　主屋１類ＳＧＢ０８、主屋２類ＳＧＢ０９が付属屋１類のＳＧＢ１１、ＳＧＢ１２と共存できる関係をもち、主屋が西側、付属屋が東側にある配置構造を取る。

配置２形式　主屋２類ＳＧＢ０６、主屋３類ＳＧＢ０５が付属屋２類のＳＧＢ０７、ＳＧＢ１０と共存できる関係をもち、主屋が東側、付属屋が西側にある配置構造を取る。

さらに、水路との関係ではこの一群の建物はＳＧＤ０４より新しく、ＳＧＤ０５との関係では建物ＳＧＢ０６が水路より新しいことが確認されており、配置形式と水路との共存関係は、配置１類は水路ＳＧＤ０５と共存でき、配置２形式は共存できない関係、おそらく現状深沢用水と共存できる関係にあると考えられる。

また、ＳＧＢ０９（配置１形式で主屋２類）よりＳＧＢ０７（配置２ 形式で付属屋２類）が新しいことから、配置２類が配置１類より新しいと判断される。これにより、配置１形式と配置２形式に含まれる主屋２類はＳＧＢ０９が古くＳＧＢ０６が新しい、しかも連続する関係として理解される。この結果、配置１形式ではＳＧＢ０９と共存できない関係にあるＳＧＢ０８が古いことになり、配置２形式ではＳＧＢ０６と共存できない関係にあるＳＧＢ０５が新しいことになる。

このような関係を整理すると、主屋４棟はＳＧＢ０８、ＳＧＢ０９、ＳＧＢ０６、ＳＧＢ０５の順で造り替えられたと考えられ、これに建築方位と位置から付属屋を組み合わせると、以下のように推移が想定される。

Ａ群第１段階　　主屋ＳＧＢ０８と付属屋ＳＧＢ１１
Ａ群第２段階　　主屋ＳＧＢ０９と付属屋ＳＧＢ１２
Ａ群第３段階　　主屋ＳＧＢ０６と付属屋ＳＧＢ１０
Ａ群第４段階　　主屋ＳＧＢ０５と付属屋ＳＧＢ０７

この変遷を主要遺構から設定された外郭時期区分と対応させると、第１段階が外郭第２Ａ期、第２段階が外郭第２Ｂ期、第３段階が外郭第３Ａ期、第４段階が外郭第３Ｂ期となり、建築的には第２期と第３期の違いは建物配置に現れ、付属建築が馬屋から倉庫に変化する。なお、主屋の出入り口は第２期段階南北棟建物ＳＧＢ０８とＳＧＢ０９では北東隅にあり、第３Ｂ期の南北棟建物ＳＧＢ０５では南西ないし南東側にあり、第２期と第３期の間で出入り口が北から南に変化した可能性が考えられる。また、外郭３Ｂ期の年代は、建物ＳＧＢ０７の柱穴底より瀬戸大窯３期後半並行の初山窯の擂鉢が発見されており、これより後となる。

Ｂ群建築　Ａ群建築と比較すると、主屋１類型のＳＧＢ０２が外郭第２Ａ期、梁行幅は異なるが主屋第３類型のＳＧＢ０１が外郭第３Ｂ期となり、主屋第２類型のＳＧＢ２２とＳＧＢ２３が外郭第２Ａ・３Ａ期の建築と理解され、さらにＳＧＢ２３の南西柱穴脇から瀬戸大窯３期前半の鉄釉稜皿の完形品が出土していることからこの建物が外郭第３Ａ期に当たると考えられる。ＳＧＢ０１は、梁行２間（１２尺）と狭いが内部空間の区分柱を持ち、区分ごとに桁行きの柱間間隔を変えており、Ａ群主屋第３類、外郭第３Ｂ期の遺構と考えられる。また、石積井戸ＳＧＥ０２とＳＧＥ０１はこの建物に付随する井戸と考えられるが、時期的に古いＳＧＥ０２を外郭第２期、新しいＳＧＥ０１を外郭第３期の遺構としておく。

なお、Ｂ群建築は、Ａ群建築の主屋に対応する建築のみの構成であり、敷地規模はほぼ同じであるが、終始Ａ群は２棟構成、Ｂ群は１棟構成と違いが認められる。

Ｄ群建築　Ｄ群建築は部分的であり明確ではないが、一応Ｃ群建築との類似性が求められ、第２期以降にこの部分が通路として利用されていることからも第１期の建築群と考えられる。

Ｅ群建築・Ｆ群建築　Ｅ群建築とＦ群建築は、井戸を中心として配置された建築群の可能性があるので、合わせて検討してみたい。この建築群では建物相互の新旧関係はＥ群建築の中では、ＳＧＢ３３がＳＧＢ４４より古い、Ｆ群建築ではＳＧＢ５０がＳＧＢ４９より古いということが把握できただけである。ただ、この群の建物は類似した建築が同じような位置で建替えられ、さらに近接して土壙を伴うなど、他の群には見られない特質がある。このため、時期変遷を検討するにあたり、柱配置と近接して見出された遺構との関係から、いくつかの類型に分けてみる。

第１類　梁行１間（１２尺）桁行３間（１８尺）の２間飛ばしの高架法を用いる桁柱構造建物。
ＳＧＢ４０、ＳＧＢ４１

第２類　梁行１間（１５尺）桁行２間（２４尺）の梁行２間以上の飛ばし高架法を用いる桁柱構造建築、ないし棟持ち柱を持つ側柱構造建築でＡ群の主屋建築との類似性が求められる建築。
ＳＧＢ４３、ＳＧＢ３２

第３類　方２間（１２尺）の桁側柱構造建築で周囲に木片と投棄した船底の矩形土壙を伴う。
ＳＧＢ３３、ＳＧＢ３４、ＳＧＢ４８

第４類　方２間（１２尺）で建物内部に焼土ないし小鍛冶遺構を伴う側柱ないし桁柱構造建築で、周囲か

ら鉄滓、金属製品が出土する。

ＳＧＢ３８、ＳＧＢ４６、ＳＧＢ４７

第５類　梁行２間（２１尺、２４尺）の梁間が広い棟持ち柱構造建築で、建物内部に桶据え土壙を伴う建築。

ＳＧＢ３５、ＳＧＢ４４

第６類　桁行３間梁行２間（１２尺）の桁柱建築で周囲から漆塗膜片が出土する。

ＳＧＢ４９、ＳＧＢ５０、ＳＧＢ５１

まず、第１類建築は、規模は大きいが、梁行２間で２間飛ばしの高架建築技法からＳＧＢ４０とＳＧＢ４１が第１期の建築と考えられ、第１期段階とすれば、桁行３間（３６尺）の規模は外郭帯東門外側の最も近い位置に配置された屋敷の中心建物と理解される。さらに石積井戸ＳＧＥ０５とＳＧＥ０６はこの屋敷に伴うものとなり、主屋の西側、井戸の北側から検出された粘板岩川原石群は主屋に至る通路敷石の可能性があるため、西に屋敷の出入り口を備えた 40m 四方規模の家臣屋敷の姿が復元される。

第２類建築はＡ群の主屋建築との類似性が認められ、ＳＧＢ４３は主屋１類で外郭第２Ａ期、ＳＧＢ４３は主屋２類で外郭第２Ｂないし３Ａ期に該当し、居住棟として利用されていたと考えられる。

第３類、第４類、第６類建築は、構造的にはＣ群建築との類似性が認められるが、第１期の井戸ＳＧＥ０５やＳＧＥ０６より新しく、土壙を伴う点も異なっており、第２期以降の特殊な小規模建築と考えられる。これらの建築は、南側に２棟が並び、北にずれて１棟があるという共通した配置が見られ、それぞれ、同時共存するのではなく重複関係をもつことから、何らかの要因で同時に建て替が行われた結果、共通した変遷配置となったと判断される。南側に２棟が横並びに造り替えられる段階は、ＳＧＢ３４とＳＧＢ４８が水路ＳＧＤ３４旧路に近い位置関係からも窺えるが、Ｆ群第６類のＳＧＢ４９とＳＧＢ５０は水路ＳＧＤ３４旧路に切られており、水路ＳＧＢ３４旧路が設置される以前の建築と判断され、北側への移動は水路の開削に伴う移転とすれば、共通の変化が生じた理由が説明できる。整理すると、第３類型のＳＧＢ３４とＳＧＢ４８が外郭第２Ａ期、ＳＧＢ３３が外郭第２Ｂ期、同様に第６類はＳＧＢ４９・ＳＧＢ５０が第２Ａ期、ＳＧＢ５１が外郭第２Ｂ期、第４類もＳＧＢ４６・ＳＧＢ３８が外郭第２Ａ期、ＳＧＢ４７が外郭第２Ｂ期の建築と考えられる。各類別の建物の性格用途については、第３類建築は近接して木片廃棄土壙が存在することから木製品製作の荒加工段階で使用された建物、第４類建築は小鍛冶遺構や周囲に金具や鉄滓があること、さらに鉄滓を廃棄した土壙がすぐ北側にあることから、金属加工に使用された建物、第６類建築は周囲から漆塗膜片が発見されるものの土壙などを伴っていないことから、木製品の仕上げ工程段階で使用された建物ではないかと考えられる。

第５類建築は、第３類建築より新しいが、棟持ち柱構の梁間も幅も広く、内部に桶据え土壙を有する建築で居住専用建物とは考えにくく、第２期以降の工房的性格を受け継いだ第３期の特殊な建築と考えられ、土壙の重複関係からＳＧＢ３５が外郭第３Ａ期、ＳＧＢ４４が外郭第３Ｂ期の建物と考えられる。

Ｇ群建築　この建築は外郭第３Ａ期の基準となった建築であり、主屋とその入り口側前面に配置された馬屋から構成されており、Ａ群第２期建築の建物配置類型と同じであるが、Ａ群建築が終始南北棟であるのに対し、東西棟が採用されており、この屋敷が建物規模とともに極めて高い地位にあった人物の建物であることを示唆している。加えるならば、第３Ａ期段階ではＡ群建築に倉庫が伴っており、この屋敷内にも倉庫建築が存在している可能性が十分考えられる。

建築に見られる格式序列　外郭域で検出された建物構造は全て掘立構造であり、内郭部において、工房建築までが礎石建築であったこととの際立った違いが明らかになった。この格差は、１５世紀の第１期段階ですでに現われており、第２期、第３期の１６世紀中葉段階まで継承されたものであることが確認された。さらに郭外家臣屋敷についても、東郭東門外家臣屋敷の北屋敷と南屋敷では、主屋の建物の規模は同じであっても付属建築の有無に違いがあり、この違いが第２期から第３期まで継承されていることから格差の基準として屋敷内建物数がある可能性が考えられる。また、建物の規模、特に桁行間数（建築方眼で６尺１間とした場合）についてみると、第１期段階では外郭帯東門に近接した家臣屋敷は桁行６間規模で、離れるに従い２

間規模となっており、第３期段階では東郭内屋敷の主屋が８間半、郭外家臣屋敷が４間規模であり、違いが認められるため、格差基準の一つと考えられる。さらに、外郭家臣屋敷の建物と東郭内工房関係建物では使用されている柱の径に違いが認められた。

これとは別に、東郭内屋敷の主屋では桁行３間（１８尺）飛ばし（３間桁）の技術が用いられているのに対し、梁行は２間半（１５尺）を２分する支え柱構造となっている。このような長尺の桁材・梁材を使う技術は、Ａ群建築の第１類主屋ＳＧＢ０８において梁行に利用されており、１６世紀前葉にはすでに確立された技術であったことが分かる。しかし、Ａ群建築においても第２Ｂ期以降、梁行が２間半（１５尺）と狭くなっており、梁行だけを２間半にするのは、技術の進歩としては説明できない極めて不自然な現象であり、何らかの社会的規制が介在した可能性が考えられる。一般的に近世前半に農家建築の梁行を３間以下に規制する事例はあるが、戦国期まで遡り、類似した規制が武家住宅に適応された事例は聞かないので、極めて先駆的な例となることから、甲斐国内の中世武家住宅の調査例の増加と編年を待って判断したいが、明確な格式序列の手段であった可能性は高い。

第４節　内郭部時期変遷と外郭域時期変遷の対応関係

まず遺物の面から検討してみると、内郭部第１期と外郭第１期は瓦質鍋１類、土師質皿１類が用いられ、内郭部２期と外郭２期は土師質皿２類と瀬戸大窯１期の灰釉端反皿が用いられるなど、時間的対応関係が有ることが分かる。

次に遺構の面から検討してみると、内郭部第１期の正門は東辺土塁の中央に想定されており、内郭部第２期以降、北西隅に正門が移動し、東辺土塁の南端が裏門となることが分かっており、北西隅が正門となるのに対応し、北西郭、北郭が整備されたとすれば、この段階で内郭部外堀が外郭第１期外郭帯に開削されたことになり、外郭帯の削減に対応し東郭の拡充整備、さらに東郭東門の防御構造の確立が行われたとすれば、内郭第２期の改修は外郭第２Ａ期の改修と対応することになる。さらに、内郭部第２Ａ期の水路の郭外から郭内への受水地点は東辺土塁南端の裏門の位置で、郭内水路が嵩上げされた第２Ｂ期は東辺土塁の中央に受水地点が移動している。一方外郭では第２Ａ期の水路は、堀ＳＧＰ０１から東郭南半のＨ地区の水溜ＳＨＰ０１へ供給され、Ｃ地区の南端、日川の急崖に近いところを通過すると考えられ、第２Ｂ期には東郭の中央に東西水路ＳＧＤ３４旧路を開削しており、この水系の北側への移動は水路の水位を上げることになり、内郭部第２Ｂ期の水路受水点の嵩上げ移動に対応した行為と考えられる。また、内郭部第３期は、中心建物部分の遺構が残存していなかったものの、北西門前で堀状に幅員を広げていた北辺土塁脇側溝が完全に埋没し、その機能を停止している反面、接客用建築ＳＧＢ０９は大型化し、その南側に石組み庭園が敷設されるなど、城館的性格から生活優先の館としての施設整備が行われた状況が把握されている。一方外郭第３期は、堀などの重要な防御施設が縮小され、戦闘的機能が希薄になることが把握されており、遺構、遺物面で内郭部と外郭部の関係を結びつけることは難しいが、館全体の性格の変貌という点では対応関係があると考えられる。以上より、外郭域において設定した時期区分は、内郭部の時期区分と対応関係を有していると判断される。

なお、内郭部では、第３期遺構は著しい破壊を受けていたため、第１期遺構は上部遺構保護のため、両期の遺構は全体構造を明確にすることができなかった。この結果、比較的施設の全体像が把握できた第２Ａ期遺構を遺構表示対象とし、地表面の段差構造と遺構との関係、水系の連続性からの水路の接続関係の検討を行い、第２Ｂ期遺構保護のため、明確にできなかった建物遺構がある場合には上部遺構を参考として表示を行った。今回の外郭域の調査で、内郭部と外郭域の時期的対応関係が明らかになったことにより、外郭域の史跡整備においても復元表示対象時期は、第２Ａ期遺構とすることになるが、外郭域で見出された水路ＳＧＤ３４は、本遺跡の特色を示す遺構であることから、これを表示することも検討対象と考えられる。また、建築において、内郭部と外郭域では、大きな格差があり、これを明確に示すことが外郭域整備では重要と判断される。

第５節　遺物

土師質皿は、外郭域で最も多く検出された焼き物であり、この点は内郭部と共通しているが、内郭部で見出された香炉と考えられる内湾形土器が見出されなかったことは、宗法行為の点で違いがあった可能性が考えられると共に、内郭部内の宗教空間の存在を再検討する必要があるかもしれない。土師質皿は現時点では１５世紀代と１６世紀前半、１６世紀後半程度にしか細分できないが、前半段階で現れる特大サイズの皿は類例が少ないが、注目されるタイプと考えられる。瓦質土器類では、特に鍋Ａ・Ｂ類は浅鉢を基本とするタイプで、１５世紀から１６世紀前半に存在し、県内では甲州市の岩崎氏館、甲府市の武田氏館周辺から破片が検出されているものの、その分布圏もまだ明らかになっておらず、勝沼氏館跡では第３Ａ期の１６世紀後半以降、筒型内耳鍋に入れ替わり姿を消す。

陶磁器類は国産や舶載陶磁器も含め出土量が少なく、瀬戸大窯製品類でも、特定の器種のみが見出されるなどの特色がある。さらに、外郭域では漆継の痕跡があるものが多く、内郭部と際立った違いが見られる。なお、内郭部調査では見出せなかった威信財としての袋物舶載陶磁器類が断片的にせよ、見出せたことは成果の一つである。

山梨県内では平安時代、鎌倉時代、近世の木製品が多量に発見されており、今回この間を埋める戦国時代の木製品が大量に発見されたことは、外郭域調査の大きな成果の一つと言える。加えて、木製品類の製作に関わる遺物を伴っていたことが、郭内工房遺構の発見に結びついた。城郭内部における常設に近い工房の存在は全国的にも事例が殆ど無いだけに、武田氏の職人支配のあり方を含め大きな検討課題を生じることとなった。郭内工房に居た可能性がある木製品を扱う職人は、荒形や削りカスから木地師、檜のヘギ板材や桜皮・未製品から檜物師、漆布や漆継の存在から漆を扱う塗り師、桶箍や箍締め杵や楔から桶職人などが推測される。また、この木製品製作に関わる職人とは別に、小鍛冶を備えた建物があり、周辺から見出された鉄滓から鍛冶職人も居たと考えられる。

なお、外郭域では塔婆や斎串、形代など木製の宗教関係遺物が多く見出されたが、工房関係遺物と共に出土した遺物については、製作していることを示す遺物なのか、使用廃棄状況を示す遺物なのか区別が難しい。第１期段階の外郭帯外堀ＳＧＤ５６から検出された祭祀遺物は、城館の堀で行われた祭祀行為を考える上で興味深い発見となった。なお、外郭域では大量の木製品が検出されたにもかかわらず、墨書はホケイ底部の「吉」と塔婆の梵字、染付け茶碗の数量書など限られており、加えて外郭域で硯が一点も検出されなかったことも、甲斐の武家屋敷と書のあり方を考えさせるものである。なお、漆椀に描かれた「二重圏二重亀甲花菱紋」は勝沼氏の菩提寺泉勝院に近世まで伝えられていたとされる勝沼氏の遺品にあったという「圏内に花菱を亀甲の上に重ね付けたる紋」と対応する可能性が考えられ注目される。

鉄製品では、量的には少ないが武器類の一部が検出されたことは、武家屋敷であることを証明する一助となった。なお、東郭内家臣屋敷で使用されていた可能性が高い鉄製大型燭台は、特異な遺物であり、使用者の格式が高いことを示す遺物と考えられるが、法具である可能性もあり、今後の検討課題である。

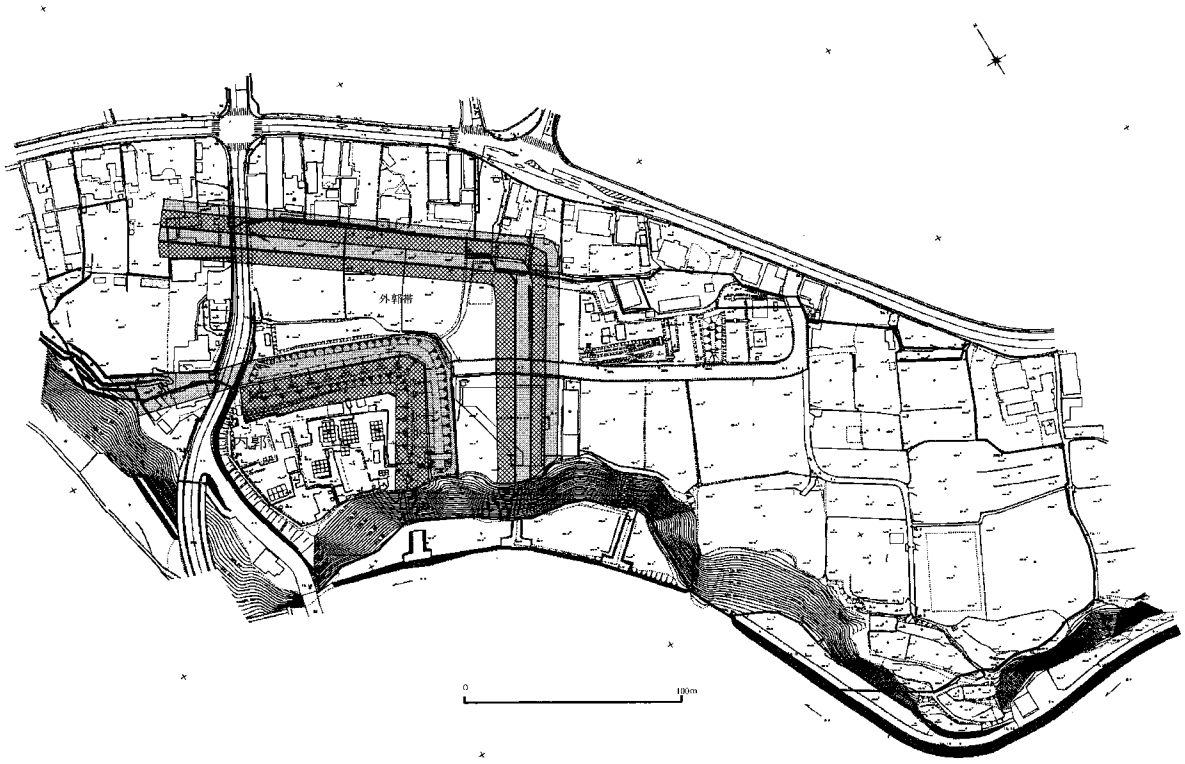
主要参考文献

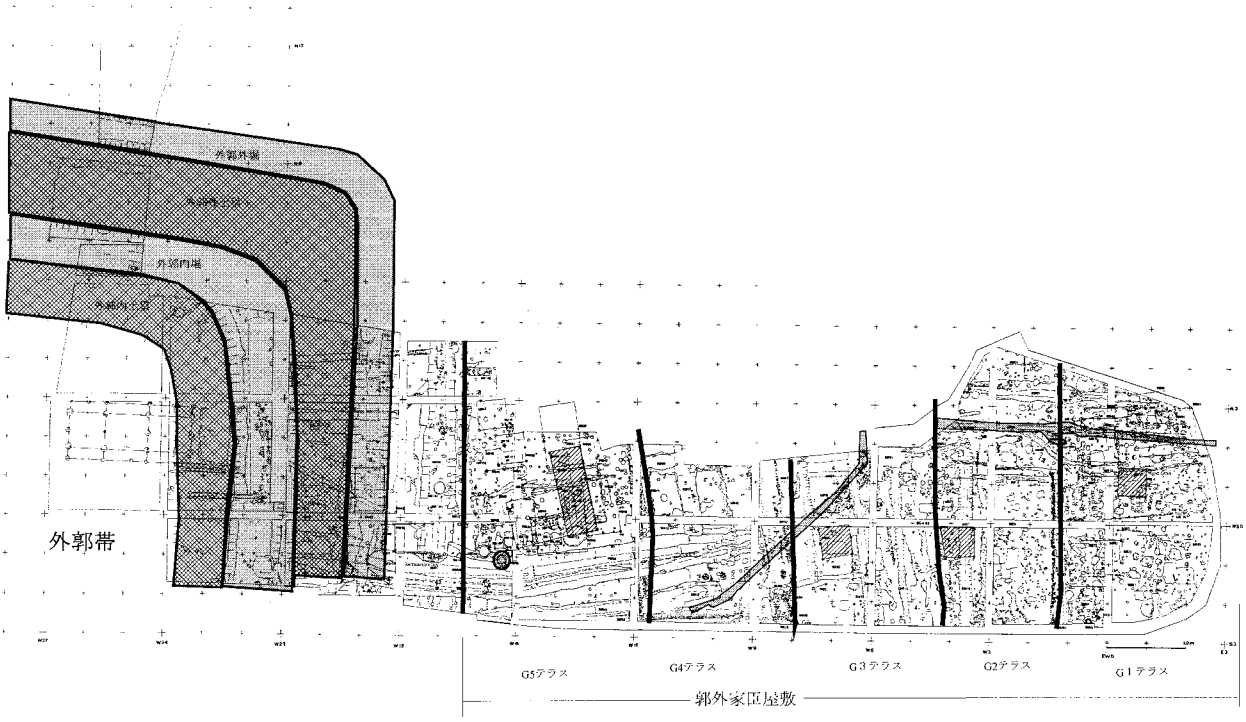
森田勉　1982 年「14 ～ 16 世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』№ 2 日本貿易陶磁研究会
上田秀夫　1982 年「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』№ 2 日本貿易陶磁研究会
小野正敏　1982 年「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』№ 2 日本貿易陶磁研究会
藤澤良祐　1991 年「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1986 年「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　2008 年『中世瀬戸窯の研究』高志書院
太宰府市教育委員会　2000 年『大宰府条房跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』
日本福祉大学知多半島総合研究所　1994 年『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』
北陸中世土器研究会　1996 年『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』
北陸中世土器研究会　1997 年『北陸の漆器考古学―中世とその前後―』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001 年『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品―東アジア的視野から―　資料集』
帝京大学山梨文化財研究所　2008 年『シンポジウム　戦国の城と年代観―縄張研究と考古学の方法論―　資料集』
山梨県教育委員会　1990 年『大輪寺東遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 53 集
山梨県教育委員会　1990 年『城下・原田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター第 58 集
山梨県教育委員会　1992 年『塩川遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集
山梨県教育委員会ほか　1997 年『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 132 集
山梨県教育委員会ほか　1997 年『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 133 集
山梨県教育委員会ほか　2004 年『百々遺跡２・４』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 212 集
山梨県教育委員会ほか　2008 年『小井川遺跡Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 255 集
須玉町教育委員会　1984 年『中尾城遺跡　塚田遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第２集
甲府市教育委員会　1985 年『武田氏館跡Ⅰ』甲府市文化財調査報告 2
甲府市教育委員会　1986 年『武田氏館跡Ⅱ』甲府市文化財調査報告 5
甲府市教育委員会　1998 年『史跡武田氏館跡Ⅲ』甲府市文化財調査報告 7
甲府市教育委員会　1999 年『史跡武田氏館跡Ⅳ』甲府市文化財調査報告 8
甲府市教育委員会　2000 年『史跡武田氏館跡Ⅴ』甲府市文化財調査報告 9
甲府市教育委員会　2000 年『史跡武田氏館跡Ⅵ』甲府市文化財調査報告 10
甲府市教育委員会　2000 年『史跡武田氏館跡Ⅶ』甲府市文化財調査報告 11
甲府市教育委員会　2002 年『史跡武田氏館跡Ⅷ』甲府市文化財調査報告 18
甲府市教育委員会　2002 年『史跡武田氏館跡Ⅸ』甲府市文化財調査報告 20
甲府市教育委員会　2003 年『史跡武田氏館跡Ⅹ』甲府市文化財調査報告 21
甲府市教育委員会　2003 年『史跡武田氏館跡ⅩⅠ』甲府市文化財調査報告 23
甲府市教育委員会　2001 年『秋山氏館跡』甲府市文化財調査報告 16
武川村教育委員会　1988 年『宮間田遺跡』
白州町教育委員会ほか　1991 年『上北田３遺跡　新居道上遺跡』
韮崎市教育委員会ほか　1992 年『宮ノ前遺跡』長坂町教育委員会　1999 年『宮久保遺跡』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集
一宮町教育委員会ほか　1997 年『西田町遺跡調査報告書』一宮町文化財調査報告第 23 集
明野村教育委員会ほか　2000 年『深山田遺跡』明野村文化財調査報告 12

時期区分	F地区（東郭）		外郭域G地区（東郭）														外郭G地区（郭外）			
3B											SGD37								SGB05	SGB07
											↑						現水路			↑
3A		SFB10	SGB55	SGD34b									SGP02c					SGB06	SGB10	↑
		↑	↑	↑	↑		↑					↑	↑		SGA01			↑		↑
2B			↑	↑	↑	SGB51	SGD34a						SGP02b					↑	SGB12	SGB09
		SFD46	↑	↑	↑	↑	↑	↑		↑		↑	↑	SGD17		SGD16	SGD05	↑		
2A			↑	↑	↑	↑	↑	SGB50・4	SGB48	↑		SGP02a						SGD05	SGB08	SGB11
			↑	↑	↑	↑	↑			↑			↑	↑	↑		↑			
1B	SFD43b	↑	↑	SGD112b		SGD67b	SGA03	SGD56	SGE06	↑			SGB29		SGB27	↑		SGD08	SGD03	SGB15
	↑		↑	↑	SGA02	↑			↑	↑				SGP01		↑	SGD04	↑	↑	
1A	SFD43a	SFA02	SGA05	SGD112a		SGD67a			SGE05				SGB30			SGB26		SGD04		SGB14
		↑																		
直前		SGK241																		

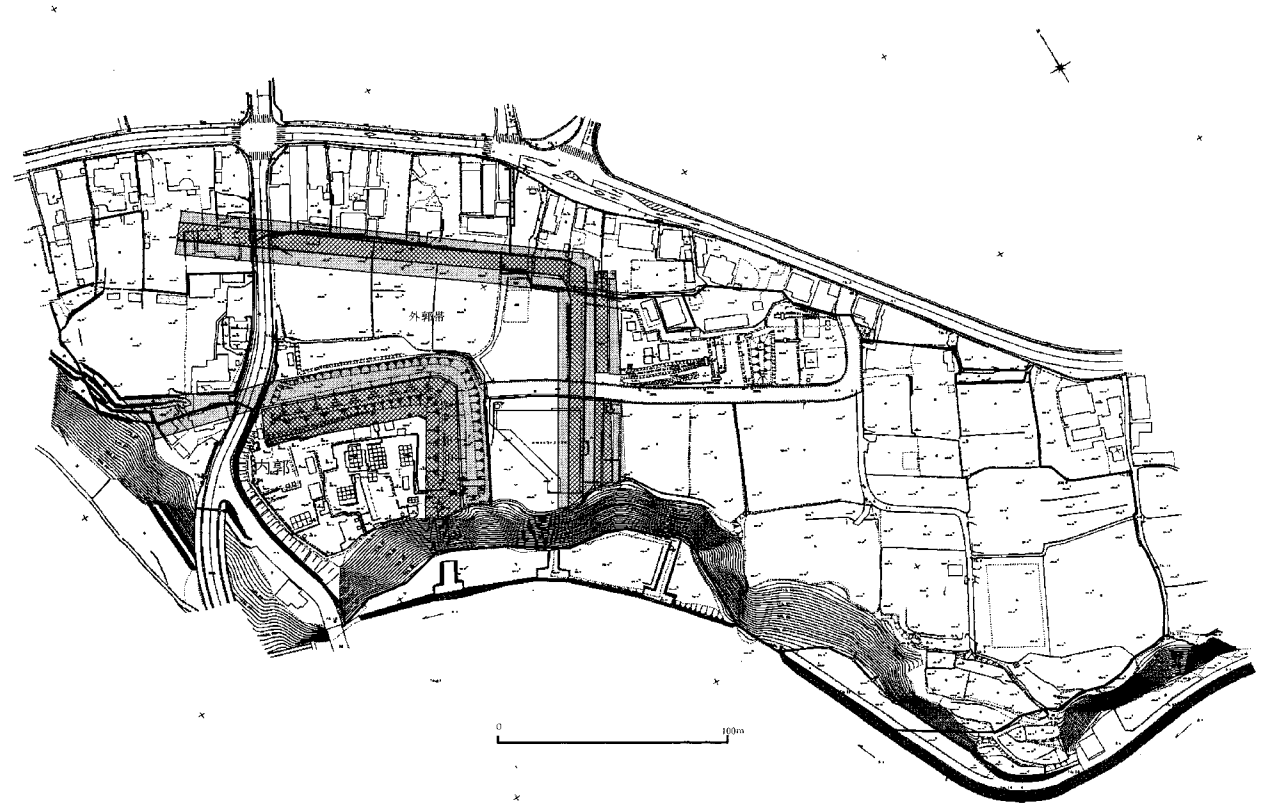
※↑は重複関係にある遺構、縦軸は共存関係を有し無い遺構、横軸は共存関係が想定される遺構を表す。

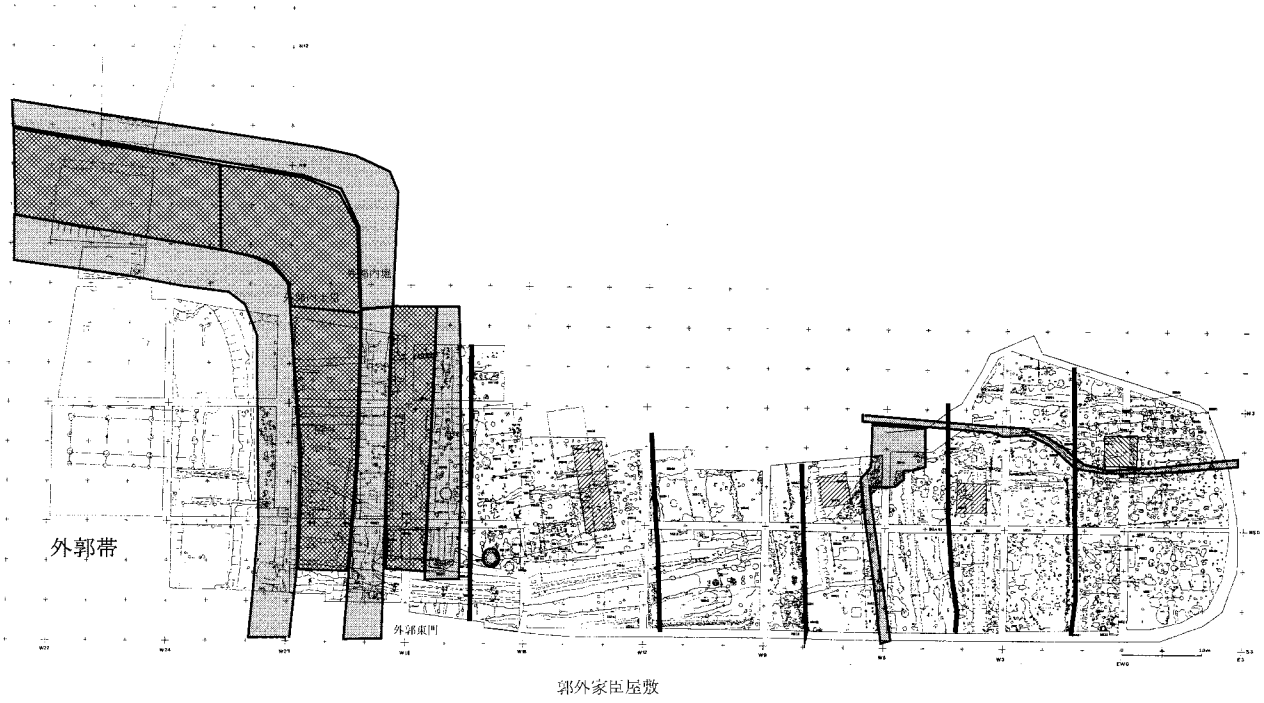
第 110 図　遺構重複関係図



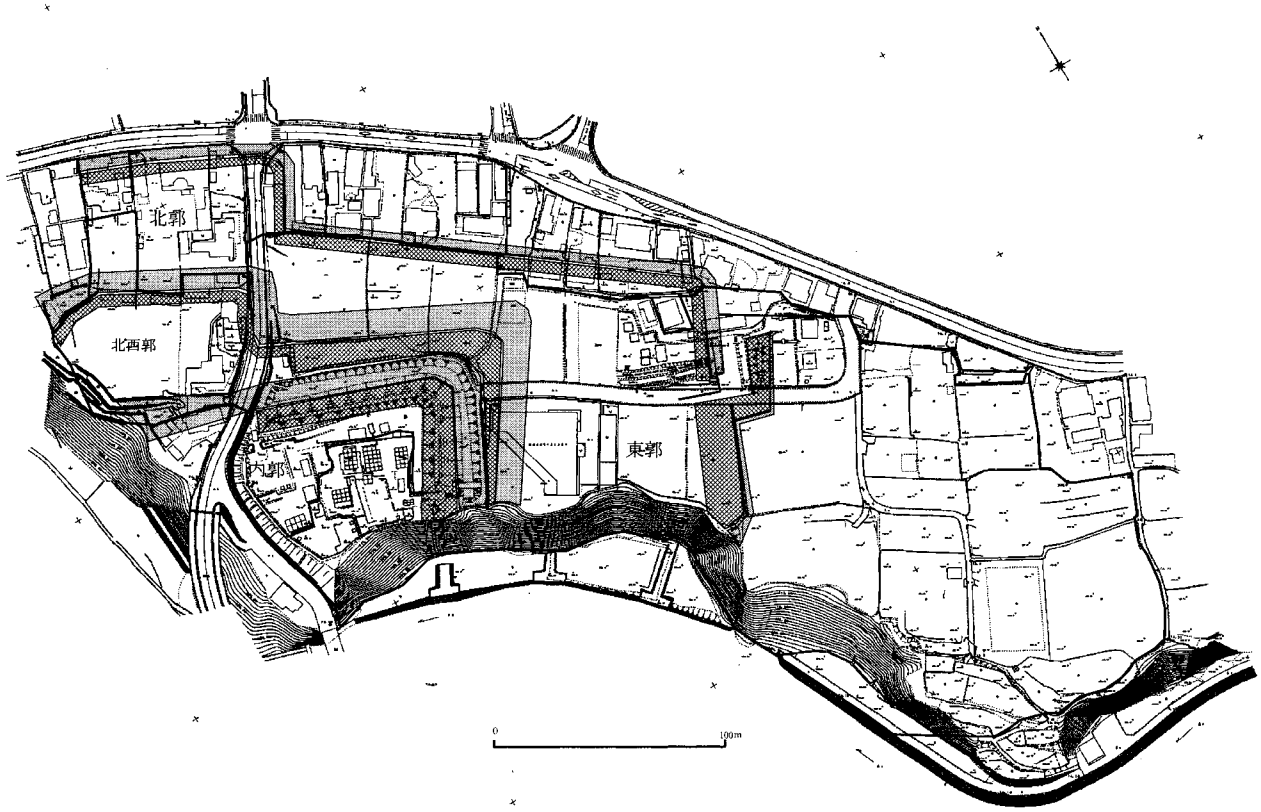


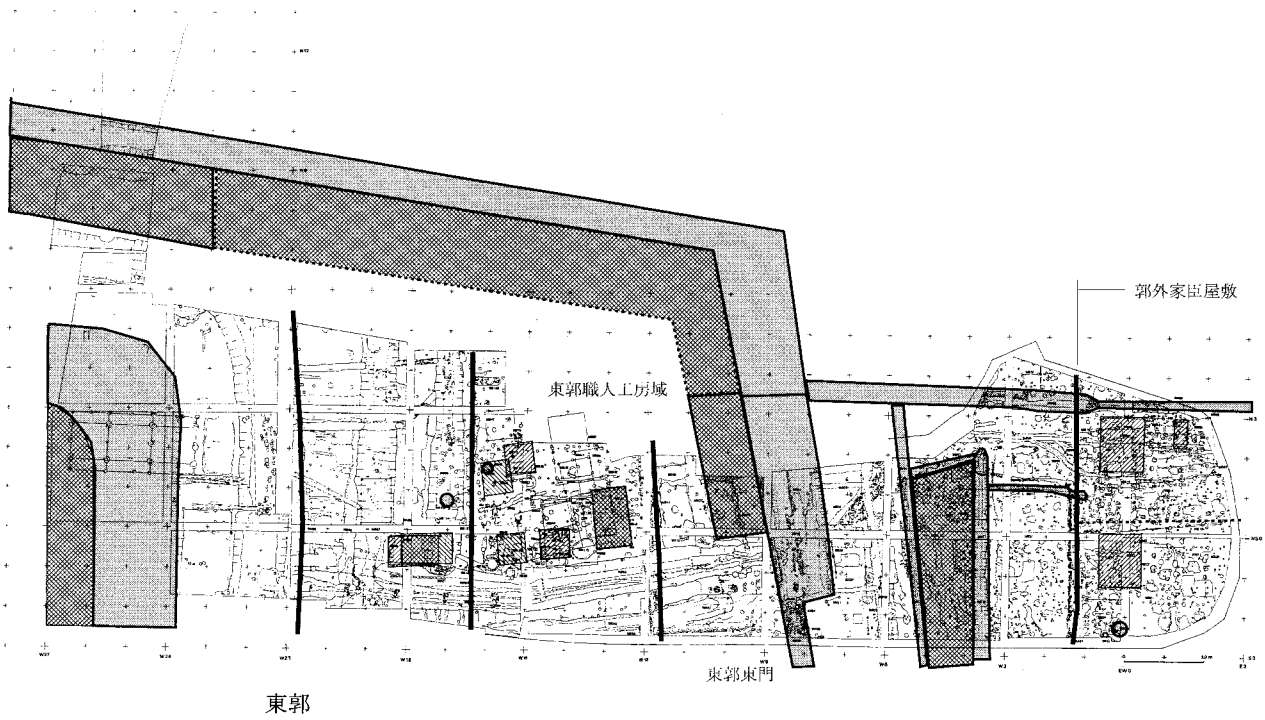
第 111 図　外郭時期別遺構図（1）



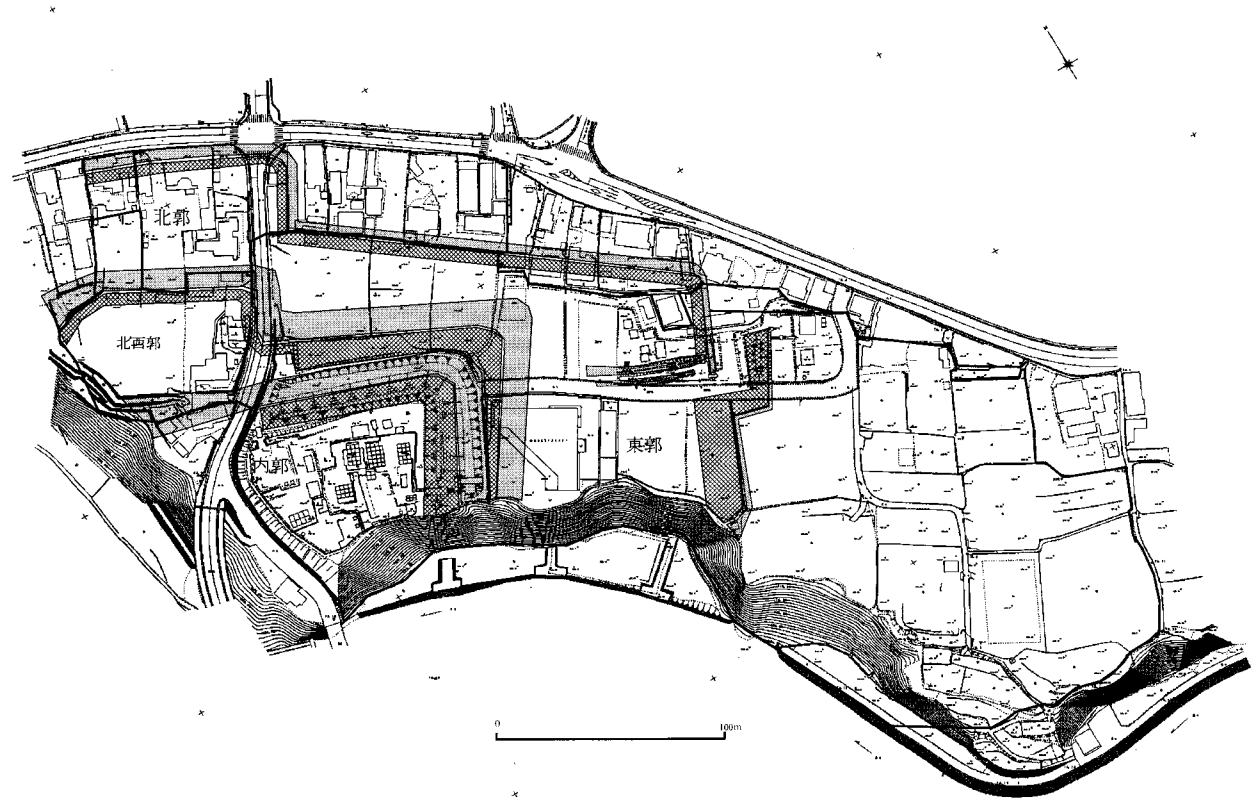


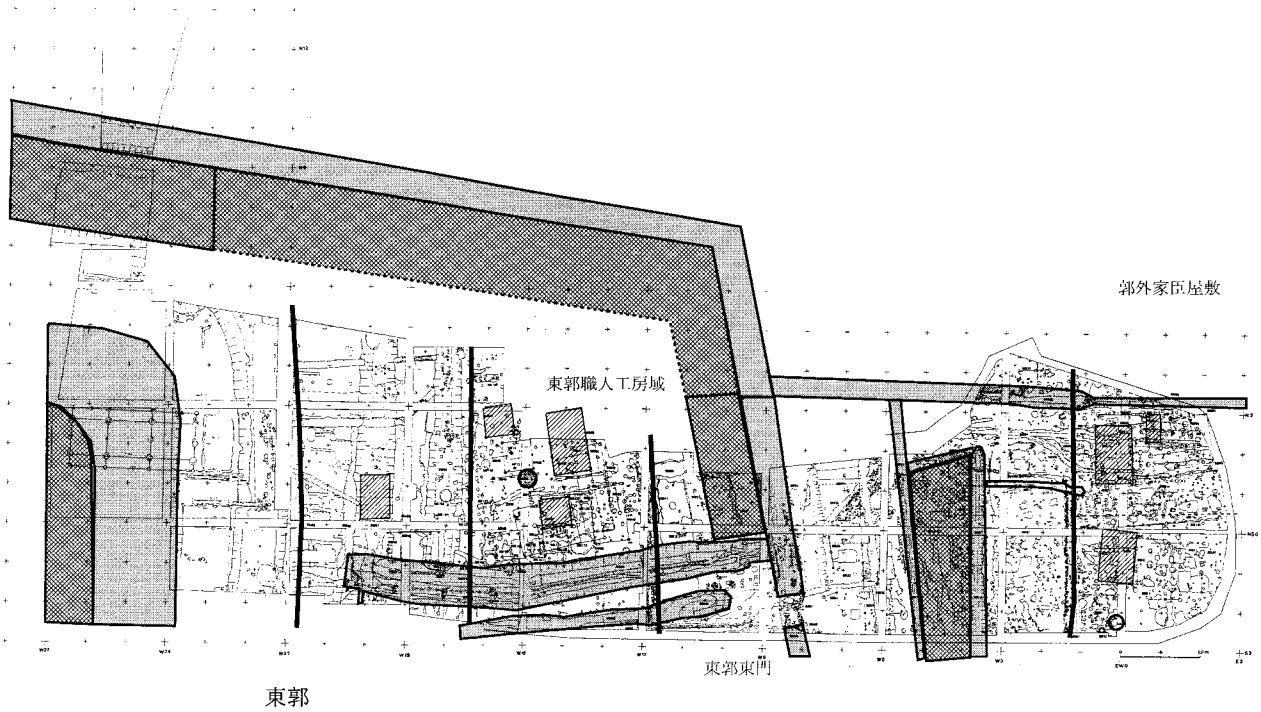
第 112 図　外郭時期別遺構図（2）



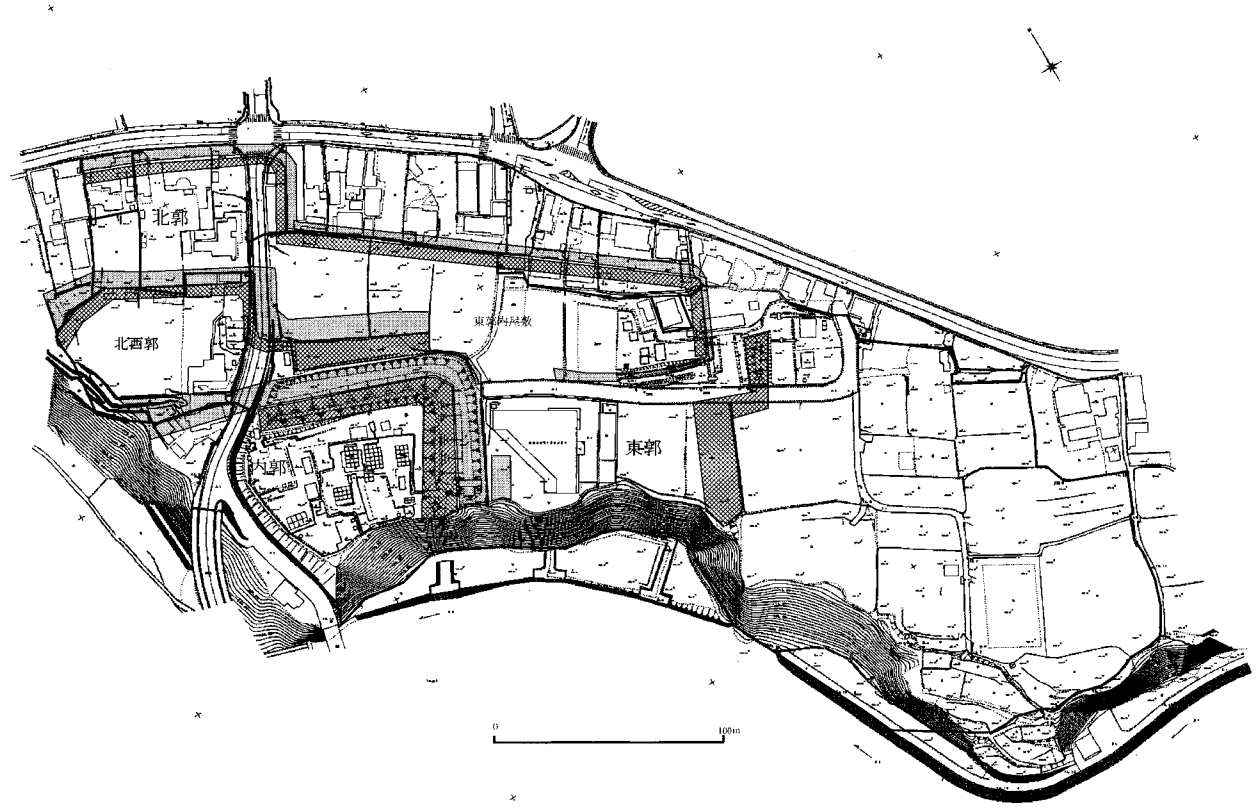


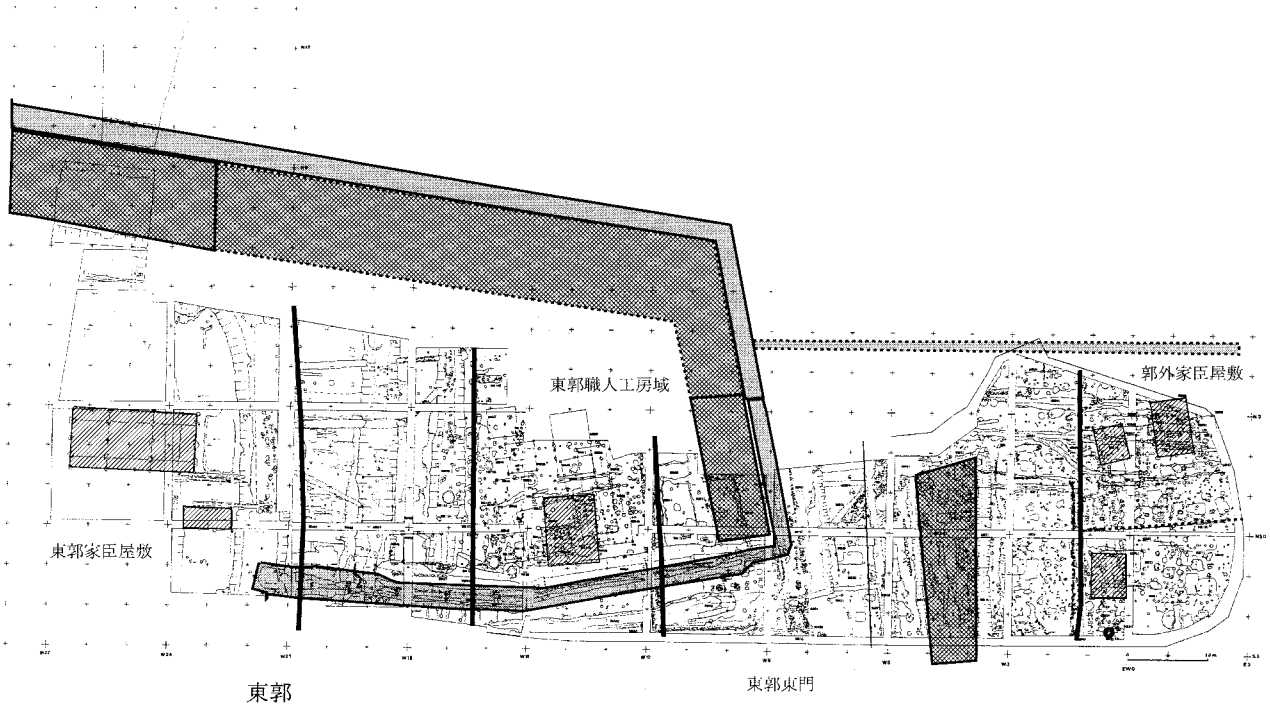
第 113 図　外郭時期別遺構図（3）



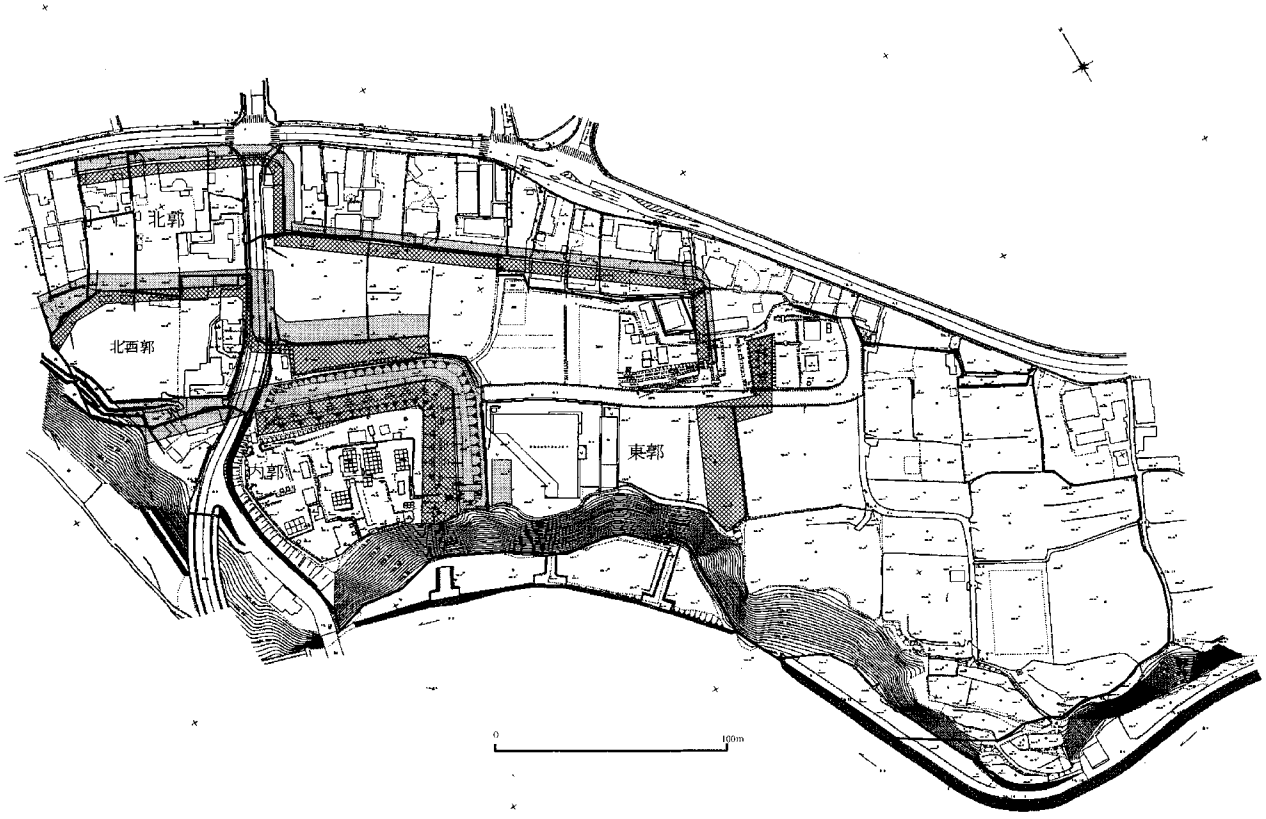


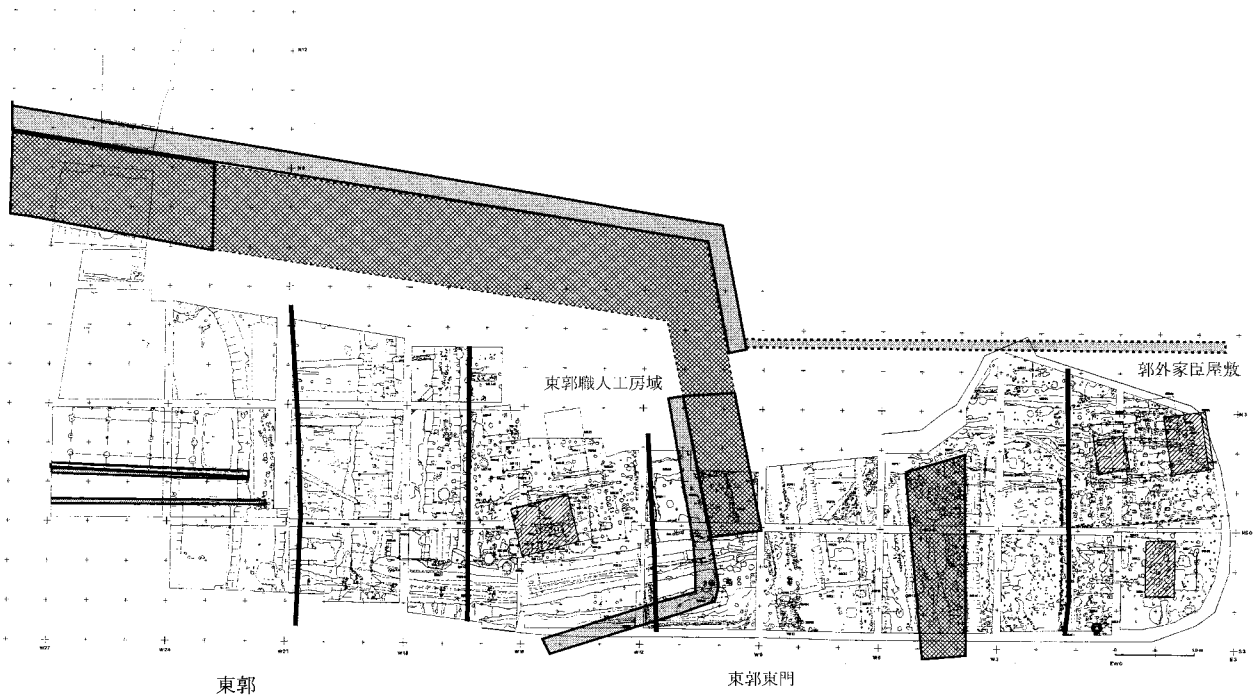
第 114 図　外郭時期別遺構図（4）





第 115 図　外郭時期別遺構図（5）





第 116 図　外郭時期別遺構図（6）

第８表　外郭遺物一覧表

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 42 図	1	SGD04	上層部	土師質土器	大皿	B	12.5	6.6	2.7	8/10	W 3	N 2	-11.520	12.000	424.084	H5G	土	173	
第 42 図	2	SGD04	上層部	土師質土器	中皿	A	9.3	4.0	2.1	10/10	W 3	N 2	-11.940	12.030	424.054	H5G	土	175	
第 42 図	3	SGD04	上層部	土師質土器	中皿	A	11.0	5.9	2.2	10/10	W 3	N 2	-12.030	11.980	424.054	H5G	土	177	
第 42 図	4	SGD04	上層部	土師質土器	中皿	B	10.0	5.8	2.1	10/10	W 3	N 2	-12.100	12.000	424.054	H5G	土	178	
第 42 図	5	SGD04	上層部	土師質土器	中皿	B	10.5	5.4	2.3	7/10	W 3	N 2	-12.780	11.980	424.097	H5G	土	180	
第 42 図	6	SGD04	上層部	土師質土器	大皿	D	13.1	6.6	2.5	7/10	W 1	N 2	-2.390	11.670	424.297	H5G	土	134	
第 42 図	7	SGD04	上層部	土師質土器	大皿	B	12.5	6.5	2.8	6/10	W 1	N 2	-2.850	11.920	424.027	H5G	土	135	
第 42 図	8	SGD04	上層部	土師質土器	大皿	B	12.8	7.6	2.5	9/10	W 1	N 2	-3.860	11.680	424.255	H5G	土	137	
第 42 図	9	SGD04	上層部	土師質土器	大皿	D	12.0	6.4	2.5	6/10	W 3	N 2	-12.540	12.740		H5G	土	165	
第 42 図	10	SGD04	中層部	土師質土器	小皿	A	7.6	4.4	1.6	10/10	W 2	N 2	-7.100	12.220	423.719	H5G	土	188	
第 42 図	11	SGD04	中層部	土師質土器	特大皿	A	11.6	7.5	2.3	1/10	W 1	N 2	-0.860	11.680	424.135	H5G	土	128	
第 42 図	12	SGD04	壁際	土師質土器	中皿	A	8.9	5.4	1.8	4/10	W 1	N 2	-4.630	12.270	424.149	H5G	土	185	
第 42 図	13	SGD04	覆土中	土師質土器	特大皿	AかB	19.4	11.2	3.3	9/10	W 4	N 2	-18.680	12.080	423.394	H6G	土	352	
第 42 図	14	SGD04	護岸裏込中	土師質土器	中皿	A	11.8	6.0	3.2	6/10	W 4	N 2	-19.420	11.600	423.387	H6G	土	355	
第 42 図	15	SGD05	上層部	土師質土器	大皿	B	13.6	7.6	2.8	7/10	W 3	N 3	-13.170	16.570	423.916	H5G	土	164	
第 42 図	16	SGD05	中層部	土師質土器	大皿	AかB	12.2	6.0	2.6	2/10	W 2	N 3	-5.800	16.300	423.443	H5G	土	148	
第 42 図	17	SGD05	中層部	土師質土器	中皿	D	10.7	5.9	2.5	4/10	W 2	N 3	-7.330	17.120	423.916	H5G	土	149	
第 42 図	18	SGD05	底部	土師質土器	中皿	B	11.0	5.9	2.5	5/10	W 2	N 3	-7.760	16.750	423.427	H5G	土	150	
第 42 図	19	SGD05	底部	土師質土器	中皿	D	10.2	5.2	2.2	5/10	W 2	N 3	-8.450	15.570	424.189	H5G	土	143	
第 42 図	20	SGD05	底部	土師質土器	小皿	D	8.6	5.5	1.7	9/10	W 2	N 3	-5.890	16.800	423.402	H5G	土	144	
第 43 図	1	SGD08	底部	土師質土器	小皿	A	7.9	4.3	1.7	4/10	W 2	N 1	-6.640	8.480	424.115	H5G	土	192	
第 43 図	2	SGD15	上層部	土師質土器	小皿	D	7.2	3.5	1.8	4/10	W 1	NS 0	-2.980	1.900	424.298	H5G	土	183	
第 43 図	3	SGD16	上層部	土師質土器	大皿	D	13.1	6.7	3.4	7/10	W 4	S 1	-18.640	-0.600	423.691	H6G	土	255	
第 43 図	4	SGD16	テラス	土師質土器	中皿	B	11.5	5.1	2.8	10/10	W 4	S 1	-16.370	-3.830	423.824	H6G	土	248	
第 43 図	5	SGD16	テラス	土師質土器	中皿	B	11.5	5.9	2.5	10/10	W 4	S 1	-16.440	-3.760	423.829	H6G	土	249	土250と接続
第 43 図	5	SGD16	テラス	土師質土器	中皿	B					W 4	S 1	-16.590	-3.540	423.832	H6G	土	250	土249と接続
第 43 図	6	SGD16	テラス	土師質土器	中皿	B	11.8	5.2	2.7	5/10	W 4	S 1	-17.160	-1.810	423.793	H6G	土	254	
第 43 図	7	SGD16	テラス	土師質土器	小皿	D	8.6	4.1	2.3	7/10	W 4	S 2	-16.260	-7.450	423.808	H6G	土	245	
第 43 図	8	SGD16	上層部	土師質土器	中皿	B	11.4	5.5	3.0	10/10	W 4	NS 0	-18.130	1.720	423.761	H6G	土	330	
第 43 図	9	SGD16	上層部	土師質土器	小皿	A	6.6	3.6	1.6	10/10	W 4	NS 0	-18.870	4.470	423.731	H6G	土	332	
第 43 図	10	SGD16	上層部	土師質土器	中皿	A	11.2	7.1	2.4	5/10	W 4	N 1	-17.600	6.660	423.648	H6G	土	326	
第 43 図	11	SGD16	覆土中	土師質土器	大皿	A	13.0	7.0	3.0	4/10	W 4	S 1	-18.440	-4.710	423.618	H6G	土	251	
第 43 図	12	SGD16	上層部	土師質土器	中皿	Aか	11.8	5.8	2.8	7/10	W 4	NS 0	-18.280	3.720	423.749	H6G	土	331	
第 43 図	13	SGD16	覆土中	土師質土器	特大皿	A	24.0	14.1	4.8	2/10	W 4	S 2	-18.290	-7.150	423.459	H6G	土	244	
第 43 図	14	SGD17	上層部	土師質土器	大皿	A	12.4	6.7	2.8	6/10	W 6	S 1	-26.190	-4.950	423.202	H6G	土	285	
第 43 図	15	SGD17	上層部	土師質土器	中皿	B	11.5	6.6	2.3	10/10	W 6	S 1	-26.810	-1.850	423.144	H6G	土	287	
第 44 図	1	SGD34旧路	中層部	土師質土器	中皿	B	10.7	4.9	2.4	10/10	W 19	S 2	-94.371	-5.723	418.895	H11G	土	1334	
第 44 図	2	SGD34旧路	上層部	土師質土器	中皿	B	11.6	5.4	2.5	6/10	W 16	S 2	-78.597	-5.192	420.539	H11G	土	1190	
第 44 図	3	SGD34旧路	中層部	土師質土器	小皿	B	6.6	2.9	1.8	5/10	W 17	S 2	-82.974	-6.505	419.187	H11G	土	1228	
第 44 図	4	SGD34旧路	上層部	土師質土器	中皿	B	11.3	5.5	3.1	4/10	W 16	S 2	-76.381	-7.288	420.170	H11G	土	1193	
第 44 図	5	SGD34旧路	上層部	土師質土器	大皿	B	12.3	5.4	3.0	10/10	W 17	S 2	-82.190	-6.861	419.961	H11G	土	1194	
第 44 図	6	SGD34旧路	上層部	土師質土器	中皿	B	10.9	6.2	2.4	5/10	W 18	S 2	-88.822	-5.269	419.921	H11G	土	1238	
第 44 図	7	SGD34旧路	中層部礫群上	土師質土器	中皿	B	10.7	5.5	2.0	10/10	W 18	S 2	-86.452	-6.661	419.082	H11G	土	1224	
第 44 図	8	SGD34旧路	中層部	土師質土器	小皿	B	8.8	4.5	1.9	7/10	W 16	S 2	-78.811	-7.412	419.376	H11G	土	1227	
第 44 図	9	SGD34旧路	上層部	土師質土器	小皿	D	7.3	3.7	1.9	10/10	W 18	S 1	-88.351	-4.881	419.873	H11G	土	1247	
第 44 図	10	SGD34旧路	上層部	土師質土器	小皿	B	7.6	4.5	1.5	10/10	W 18	S 1	-88.128	-4.857	420.106	H11G	土	1242	
第 44 図	11	SGD34旧路	上層部	土師質土器	小皿	B	8.1	3.5	2.0	4/10	W 17	S 2	-83.795	-5.786	419.798	H11G	土	1248	
第 44 図	12	SGD34旧路	上層部	土師質土器	中皿	B	10.2	4.8	2.5	10/10	W 17	S 2	-82.463	-5.056	419.932	H11G	土	1250	
第 44 図	13	SGD34新路	下層部	土師質土器	大皿	C	12.1	5.6	2.8	5/10	W 21	S 2	-104.304	-7.519	418.526	H11G	土	1498	
第 44 図	14	SGD34新路	中層部	土師質土器	小皿	B	8.0	4.5	1.7	9/10	W 17	S 2	-82.172	-9.370	420.047	H11G	土	1106	
第 44 図	15	SGD34新路	上層部	土師質土器	中皿	B	10.9	7.3	2.0	6/10	W 19	S 2	-92.952	-8.565	419.635	H11G	土	1152	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 44 図	16	SGD34新路	中層部	土師質土器	大皿	C	12.1	5.0	2.8	8/10	W 20	S 2	-96.692	-7.398	419.267	H11G	土	1153	
第 44 図	17	SGD34	中層部礫群上	土師質土器	中皿	B	11.3	5.7	2.4	4/10	W 11	S 1	-51.129	-3.342	420.756	H8G	土	450	
第 44 図	18	SGD34	上層部	土師質土器	中皿	B	11.0	5.6	2.6	10/10	W 11	S 1	-54.546	-2.612	421.299	H8G	土	451	
第 44 図	19	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	A	11.2	5.9	2.3	10/10	W 12	S 1	-56.974	-4.590	419.176	H8G	土	456-2	
第 44 図	20	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	A?	7.4	4.2	1.5	4/10	W 12	S 1	-55.778	-3.913	419.804	H8G	土	471	
第 44 図	21	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	B	13.1	7.6	2.8	8/10	W 12	S 1	-55.679	-3.714	419.072	H8G	土	472	
第 44 図	22	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	B	13.3	6.5	3.0	10/10	W 12	S 1	-55.429	-3.776	420.345	H8G	土	475	
第 44 図	23	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	B	8.2	4.0	1.9	7/10	W 11	S 1	-54.163	-3.878	420.508	H8G	土	479	
第 44 図	24	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	A	11.1	5.6	2.4	9/10	W 10	S 1	-45.835	-1.377	421.431	H8G	土	486	
第 44 図	25	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	A	11.4	6.2	2.5	10/10	W 12	S 1	-59.048	-4.420	419.593	H8G	土	511	
第 44 図	26	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	B	12.3	5.8	2.8	4/10	W 12	S 1	-57.482	-4.320	419.423	H8G	土	515	
第 44 図	27	SGD34	下層部壁際	土師質土器	特大皿	B	19.2	10.4	3.5	5/10	W 12	S 1	-54.522	-4.040	419.454	H8G	土	587	
第 44 図	28	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	A	7.9	3.6	1.8	7/10	W 15	S 2	-73.428	-7.926	420.064	H9G	土	589	
第 44 図	29	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	B	13.3	7.8	2.6	3/10	W 14	S 2	-68.348	-8.415	420.599	H9G	土	591	
第 44 図	30	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	B	9.6	4.8	2.5	7/10	W 15	S 2	-71.551	-7.657	420.292	H9G	土	598	
第 44 図	31	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	D?	7.2	4.4	1.6	10/10	W 13	S 1	-64.38	-4.896	419.536	H9G	土	662	
第 44 図	32	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	C?	6.8	4.5	1.5	9/10	W 14	S 2	-69.056	-7.675	419.943	H9G	土	611	
第 44 図	33	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	B	8.7	4.7	2.1	6/10	W 14	S 2	-65.571	-7.014	420.028	H9G	土	617	
第 44 図	34	SGD34	壁際	土師質土器	大皿	B	13.9	6.7	3.3	3/10	W 13	S 2	-64.893	-5.585	420.508	H9G	土	625	
第 44 図	35	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	B	9.4	4.5	2.2	7/10	W 15	S 2	-71.303	-8.38	419.958	H9G	土	631	
第 44 図	36	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	C	12.6	5.1	2.6	4/10	W 14	S 2	-67.997	-7.416	419.742	H9G	土	632	
第 44 図	37	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	A?	13.0	7.0	2.8	6/10	W 14	S 2	-65.257	-5.314	419.806	H9G	土	649	
第 44 図	38	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	B	11.3	5.5	2.5	7/10	W 13	S 2	-63.079	-5.678	419.884	H9G	土	650	
第 44 図	39	SGD34	中層部	土師質土器	小皿	A	7.4	4.0	1.5	4/10	W 14	S 2	-65.974	-5.845	419.644	H9G	土	653	
第 44 図	40	SGD34	中層部	土師質土器	中皿	B	9.5	4.2	2.3	3/10	W 14	S 2	-68.392	-6.219	419.572	H9G	土	654	
第 44 図	41	SGD34	中層部	土師質土器	大皿	A?	12.2	5.7	2.5	3/10	W 14	S 2	-66.012	-5.273	419.471	H9G	土	655	
第 44 図	42	SGD34	中層部	土師質土器	大皿		13.1	7.3	2.9	4/10	W 14	S 2	-67.327	-8.673	421.074	H9G	土	590	
第 45 図	1	SGD42	中層部	土師質土器	中皿	A?	10.0	4.9	2.9	8/10	W 11	S 2	-54.839	-9.294	421.003	H8G	土	470	
第 45 図	2	SGD37	上層部	土師質土器	小皿	D?	8.1	5.1	1.8	10/10	W 11	S 1	-51.903	-0.875	421.515	H8G	土	496	
第 45 図	3	SGD37	上層部	土師質土器	小皿	A	8.2	4.6	2.3	6/10	W 11	S 1	-52.379	-0.748	421.456	H8G	土	498	499と接続
第 45 図	3	SGD37	上層部	土師質土器	小皿	A					W 11	S 1	-52.532	-0.684	421.415	H8G	土	499	498と接続
第 45 図	4	SGD37	上層部	土師質土器	中皿	A?	11.0	6.4	2.2	4/10	W 11	S 1	-52.788	-1.231	421.613	H8G	土	500	
第 45 図	5	SGD39	下層部	土師質土器	中皿	B	9.4	3.1	2.1	4/10	W 12	N 1	-59.267	-7.183	421.286	H8G	土	538	
第 45 図	6	SGD56サブ		土師質土器	大皿	D?	12.6	7.2	2.1	3/10	W 18	N 2				H10G	土	790	
第 45 図	7	SGD56サブ		土師質土器	中皿	B	11.0	6.0	2.5	4/10	W 18	N 2				H10G	土	791	
第 45 図	8	SGD56サブ		土師質土器	中皿	B	10.2	5.6	2.4	3/10	W 18	N 2				H10G	土	792	
第 45 図	9	SGD56	上層部	土師質土器	小皿	A?	7.9	3.7	2.4	4/10	W 17	S 1	-84.656	-1.341	419.792	H11G	土	1440	
第 45 図	10	SGD56	中層部	土師質土器	大皿	B	12.1	6.9	2.7	7/10	W 18	S 1	-85.015	-1.474	419.200	H11G	土	1475	
第 45 図	11	SGD56	中層部	土師質土器	大皿	A	11.7	6.3	2.7	7/10	W 18	S 1	-85.352	-1.239	419.118	H11G	土	1480	
第 45 図	12	SGD56	埋立層土部	土師質土器	大皿	B	11.5	5.5	2.9	4/10	W 17	N 3	-83.767	16.761	420.314	H10G	土	941	
第 45 図	13	SGD56	覆土	土師質土器	特大皿	A	19.2	10.4	3.2	3/10	W 18	NS 0	-85.797	0.946	419.154	H10G	土	983	
第 45 図	14	SGD56	壁際	土師質土器	中皿	A	10.4	5.9	2.5	6/10	W 17	N 1	-83.642	6.534	420.051	H10G	土	1003	
第 45 図	15	SGD56	覆土	土師質土器	大皿	B?	12.0	6.3	2.8	8/10	W 18	N 1	-85.757	7.142	419.237	H10G	土	1023	
第 45 図	16	SGD56	覆土	土師質土器	大皿	B	12.9	6.8	2.5	4/10	W 18	N 1	-85.312	8.994	419.308	H10G	土	1025	
第 45 図	17	SGD56	覆土	土師質土器	小皿	B	8.4	3.7	2.3	5/10	W 17	N 3	-84.819	19.763	419.498	H10G	土	1027	
第 45 図	18	SGD56	覆土	土師質土器	中皿	B	10.1	4.7	2.4	7/10	W 18	N 2	-85.641	10.639	419.263	H10G	土	1028	
第 45 図	19	SGD56	覆土	土師質土器	中皿	B	10.4	5.5	2.7	10/10	W 17	NS 0	-84.468	1.927	419.331	H10G	土	1029	
第 45 図	20	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	B	10.0	4.9	2.5	4/10	W 18	N 1	-85.827	7.182	419.144	H10G	土	1043	
第 45 図	21	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	D?	9.2	5.5	1.8	10/10	W 17	N 4	-84.653	21.483	419.491	H10G	土	1059	
第 45 図	22	SGD56	壁際	土師質土器	中皿	D	8.8	4.0	2.4	10/10	W 17	N 4	-84.582	21.297	419.523	H10G	土	1060	
第 45 図	23	SGD56	下層部壁際	土師質土器	中皿	B	10.9	5.2	2.8	10/10	W 17	N 4	-84.516	21.274	419.583	H10G	土	1061	
第 45 図	24	SGD56	下層部	土師質土器	大皿	A?	12.7	6.3	2.5	4/10	W 18	N 3	-85.020	19.331	419.645	H10G	土	1062	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 45 図	25	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	B	11.3	6.0	2.9		W 17	N 4	-84.760	20.893	419.470	H10G	土	1065	1066と接続
第 45 図	25	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	B					W 18	N 4	-85.476	21.182	419.455	H10G	土	1066	1065と接続
第 45 図	26	SGD56	下層部	土師質土器	小皿	B	8.5	4.5	2.0	10/10	W 18	N 4	-85.022	21.207	419.438	H10G	土	1070	
第 45 図	27	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	A	9.2	4.5	2.5	9/10	W 18	N 3	-85.407	18.529	419.550	H10G	土	1073	
第 45 図	28	SGD56	下層部	土師質土器	中皿	B	8.8	4.6	2.4	10/10	W 18	N 4	-85.463	21.578	419.510	H10G	土	1071	
第 45 図	29	SGD56	下層部	土師質土器	小皿	B	8.1	3.6	2.9	10/10	W 18	N 4	-85.711	22.136	419.542	H10G	土	1072	
第 45 図	30	SGD56	覆土	土師質土器	中皿	B	11.0	5.2	2.6	6/10	W 17	NS 0	-84.659	2.034	419.952	H10G	土	832	
第 45 図	31	SGD56	覆土	土師質土器	大皿	A	12.9	6.6	2.4	6/10	W 18	NS 0	-85.586	2.024	419.784	H10G	土	834	
第 46 図	1	SGD60		土師質土器	中皿	B	11.1	6.8	2.4	9/10	W 16	NS 0	-79.245	4.671	420.573	H10G	土	1054	
第 46 図	2	SGD60		土師質土器	中皿	B	11.0	4.9	2.4	9/10	W 17	NS 0	-80.267	3.480	420.492	H10G	土	1055	
第 46 図	3	SGD67	上層部	土師質土器	中皿	B	11.4	5.4	3.3	5/10	W 19	S 1	-92.508	-3.232	420.021	H11G	土	1342	
第 46 図	4	SGD67	上層部	土師質土器	小皿	B	7.7	3.6	2.8	7/10	W 19	S 2	-93.789	-9.832	420.177	H11G	土	1349	
第 46 図	5	SGD67	中層部	土師質土器	特大皿	A	18.9	10.9	3.5	3/10	W 19	S 1	-93.574	-2.503	419.928	H11G	土	1467	
第 46 図	6	SGD67	下層部	土師質土器	大皿	A	13.6	6.7	2.8	10/10	W 19	S 1	-93.433	-1.002	419.013	H11G	土	1492	
第 46 図	7	SGD67	下層部	土師質土器	大皿	B	12.8	5.6	3.0	10/10	W 19	S 1	-93.987	-0.621	418.794	H11G	土	1499	
第 46 図	8	SGD67	上層部	土師質土器	小皿	D?	7.4	4.0	1.6	7/10	W 20	N 3	-95.524	16.508	420.010	H12G	土	1562	
第 46 図	9	SGD67	上層部	土師質土器	大皿	A	12.6	5.9	3.0	9/10	W 19	N 3	-93.619	19.22	419.855	H12G	土	1567	
第 46 図	10	SGD67	中層部	土師質土器	大皿	B	12.7	5.7	2.7	10/10	W 19	N 3	-92.124	19.267	419.919	H12G	土	1587	
第 46 図	11	SGD67	中層部	土師質土器	中皿	B	8.7	4.4	2.1	7/10	W 19	N 3	-92.311	19.561	419.979	H12G	土	1588	
第 46 図	12	SGD67	上層部	土師質土器	大皿	B	11.7	5.9	2.6	8/10	W 19	N 1	-92.489	6.672	420.092	H12G	土	1595	
第 46 図	13	SGD67	中層部	土師質土器	大皿	A	13.3	6.2	2.5	4/10	W 19	N 2	-93.89	12.023	419.563	H12G	土	1612	
第 46 図	14	SGD67	中層部	土師質土器	小皿	A	7.1	2.8	1.9	5/10	W 19	N 1	-93.414	6.439	419.720	H12G	土	1623	
第 46 図	15	SGD67	中層部	土師質土器	中皿	D?	11.3	5.5	2.6	6/10	W 20	N 1	-95.246	6.095	419.365	H12G	土	1627	
第 46 図	16	SGD67	中層部	土師質土器	小皿	B	8.0	4.3	1.8	10/10	W 19	N 1	-92.985	5.918	419.613	H12G	土	1645	
第 46 図	17	SGD67	中層部	土師質土器	中皿	B	10.5	5.2	2.3	7/10	W 19	NS 0	-92.746	3.154	419.747	H12G	土	1651	
第 46 図	18	SGD67	中層部	土師質土器	大皿	B	12.6	6.3	3.0	7/10	W 19	N 4	-93.33	23.129	419.595	H12G	土	1657	
第 46 図	19	SGD67	底部	土師質土器	小皿	D?	8.4	4.8	1.9	8/10	W 19	N 4	-93.993	23.851	423.213	H12G	土	1679	
第 46 図	20	SGD68	下層部	土師質土器	中皿	B	11.5	5.1	2.5	7/10	W 20	S 2	-97.594	-6.188	419.659	H11G	土	1158	
第 46 図	21	SGD68	下層部	土師質土器	中皿	B	11.8	5.5	2.7	6/10	W 20	S 2	-97.697	-6.557	419.568	H11G	土	1159	
第 46 図	22	SGD112	上層部	土師質土器	中皿	B	9.3	4.8	2.2	4/10	W 22	S 1	-107.337	-4.92	418.961	H14G	土	1923	
第 46 図	23	SGD112	中層部	土師質土器	中皿	D	11.0	4.5	2.9	4/10	W 22	S 1	-109.848	-3.635	418.720	H14G	土	1956	1971と接続
第 46 図	23	SGD112	中層部	土師質土器	中皿	D					W 23	S 1	-110.661	-4.708	418.722	H14G	土	1971	1956と接続
第 46 図	24	SGD112	中層部	土師質土器	中皿	B	10.0	4.6	2.1	10/10	W 23	S 1	-110.953	-0.714	418.705	H14G	土	1970	
第 47 図	1	SGD42	木炭層	土師質土器	大皿	C	13.4	7.0	2.9	2/10	W 14	S 3	-69.709	-12.618	419.839	H9G	土	670	
第 47 図	2	SGK117	覆土	土師質土器	大皿	B?	13.5	7.5	3.2	9/10	W 13	S 1	-62.311	-2.957	421.035	H9G	土	674	
第 47 図	3	SGK124	上層部	土師質土器	中皿	D	8.6	4.9	1.9	10/10	W 15	N 1	-74.546	6.774	420.885	H9G	土	755	
第 47 図	4	SGK124	粘土層	土師質土器	中皿	B	10.3	5.4	2.5	10/10	W 15	N 1	-74.19	6	419.397	H9G	土	756	
第 47 図	5	SGK153	土坑	土師質土器	大皿	B?	12.0	5.9	2.3	10/10	W 18	NS 0	-85.219	3.664	419.741	H10G	土	1074	
第 47 図	6	SGK187内	中層部	土師質土器	中皿	B	9.6	4.4	2.3	10/10	W 17	S 1	-82.384	-4.981	419.988	H11G	土	1327	
第 47 図	7	SGK187内	壁際	土師質土器	大皿	B?	11.8	6.7	2.4	10/10	W 17	S 1	-82.167	-4.939	419.972	H11G	土	1328	
第 47 図	8	SGP02	東壁直	土師質土器	特大皿	A	19.8	11.9	3.8	3/10	W 8	S 2	-37.440	-5.150	421.984	H7G	土	373	
第 47 図	9	SGP02	底部	土師質土器	中皿	A	11.4	5.4	2.4	7/10	W 8	S 2	-38.820	-6.920	421.611	H7G	土	376	
第 47 図	10	SGP02	下層部	土師質土器	中皿	A	10.0	4.6	2.4	3/10	W 9	S 2	-40.020	-6.750	421.475	H7G	土	379	
第 47 図	11	SGP02	南壁際	土師質土器	中皿	B?	11.7	6.0	2.9	4/10	W 8	S 2	-39.690	-7.710	421.728	H7G	土	378	
第 47 図	12	SGP02	灰色粘土下部	土師質土器	大皿	B?	12.5	7.2	2.3	3/10	W 9	S 2	-41.330	-7.930	421.163	H7G	土	382	
第 47 図	13	SGE05	上層部	土師質土器	大皿	B	11.5	5.9	3.9	10/10	W 16	S 2	-77.079	-5.784	419.741	H11G	土	1278	1283と1284に接続
第 47 図	13	SGE05	中層部	土師質土器	大皿	B					W 16	S 2	-76.959	-5.777	419.722	H11G	土	1283	1278に接続
第 47 図	13	SGE05	中層部	土師質土器	大皿	B					W 16	S 2	-77.055	-5.847	419.739	H11G	土	1284	1278に接続
第 47 図	14	SGE06	木炭層	土師質土器	中皿	B	11.1	6.3	2.5	4/10	W 16	S 1	-78.853	-3.489	420.487	H11G	土	1323	
第 47 図	15	189号柱穴内		土師質土器	大皿	B	13.2	7.5	2.8	6/10	E 1	NS 0	5.100	2.100		H5G	土	196	
第 47 図	16	2026号柱上		土師質土器	大皿	B?	13.6	7.9	3.0	5/10	W 5	N 1	-24.400	8.400	423.327	H6G	土	296	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 47 図	17	SGB35	1440柱穴内	土師質土器	大皿	D?	12.0	4.7	2.8	4/10	W 14	NS 0				H9G	土	780	
第 47 図	18		木炭層	土師質土器	小皿	A	8.1	4.2	2.1	10/10	W 14	NS 0	-69.659	1.462	420.827	H9G	土	742	
第 48 図	1		黒土層	土師質土器	小皿	D	7.8	5.0	1.6	10/10	W 2	N 2	-9.340	14.350	424.174	H5G	土	152	
第 48 図	2		木炭層	土師質土器	中皿	B	10.9	5.8	2.7	3/10	W 16	S 1	-76.738	-2.992	420.555	H11G	土	1309	
第 48 図	3		木炭層	土師質土器	小皿	B	8.1	4.6	1.9	6/10	W 16	N 1	-77.496	8.688	420.870	H10G	土	914	
第 48 図	4		木炭層	土師質土器	特大皿	D	16.5	8.8	3.5	4/10	W 16	N 2	-76.791	12.279	420.946	H10G	土	927	
第 48 図	5		木炭層	土師質土器	小皿	B	8.1	3.8	2.4	7/10	W 16	N 2	-79.164	12.268	420.861	H10G	土	932	
第 48 図	6		水田層	土師質土器	小皿	B	7.0	2.9	1.6	10/10	W 17	N 3	-80.308	19.103	421.008	H10G	土	998	
第 48 図	7		木炭層	土師質土器	大皿	A?	12.2	5.6	3.1	5/10	W 16	NS 0	-78.034	4.304	420.574	H10G	土	1078	
第 48 図	8		木炭層	土師質土器	中皿	C	9.2	4.3	1.7	6/10	W 16	NS 0	-79.076	2.251	420.565	H10G	土	829	846と接続
第 48 図	8		木炭層	土師質土器	中皿	C					W 16	NS 0	-76.694	3.949	420.781	H10G	土	846	829と接続
第 48 図	9		木炭層	土師質土器	大皿	B	12.5	5.8	2.6	3/10	W 16	N 1	-78.798	5.218	420.973	H10G	土	859	
第 48 図	10		木炭層	土師質土器	小皿	D	7.9	4.5	1.8	6/10	W 16	N 1	-76.680	6.320	420.841	H10G	土	860	
第 48 図	11		木炭層	土師質土器	小皿	A?	8.5	5.1	1.8	8/10	W 16	N 1	-76.341	6.482	420.852	H10G	土	861	
第 48 図	12		埋立層	土師質土器	大皿	A?	13.1	6.8	2.5	3/10	W 27	N 5	-131.601	27.704	419.121	H15F	土	195	
第 48 図	13		上層部	土師質土器	小皿	B	8.4	4.2	2.0	4/10	W 25	N 4	-122.458	22.417	419.230	H15F	土	360	
第 48 図	14			土師質土器	小皿	D	7.1	4.1	1.6	10/10	W 25	N 3	-121.421	18.141	418.979	H15F	土	372	
第 48 図	15		砂質土上部	土師質土器	中皿	C	11.8	5.6	2.4	5/10	W 5	S 3	-21.260	-11.970	423.309	H6G	土	260	
第 48 図	16		黒土層	土師質土器	中皿	C	10.6	5.1	2.6	9/10	W 1	S 2	-4.370	-8.610	424.429	H6G	土	220	
第 48 図	17		木炭層中	土師質土器	小皿	B	7.9	4.3	1.8	3/10	W 15	NS 0				H9G	土	781	
第 48 図	18		水田床土層下	土師質土器	中皿	D	10.6	4.7	2.9	3/10	W 14	S 1	-68.93	-4.119	421.083	H9G	土	703	
第 48 図	19		木炭層	土師質土器	中皿	B	8.9	5.0	2.1	3/10	W 15	N 1	-72.618	5.516	420.890	H9G	土	737	
第 48 図	20		水田床土層下	土師質土器	小皿	B	8.1	4.4	1.9	5/10	W 15	N 2	-74.064	6.88	420.879	H9G	土	739	
第 48 図	21		木炭層	土師質土器	小皿	B	8.2	3.3	2.3	9/10	W 14	NS 0	-69.637	1.452	420.796	H9G	土	743	
第 48 図	22		木炭層	土師質土器	小皿	B	7.9	4.2	1.9	9/10	W 14	NS 0	-69.594	1.454	420.810	H9G	土	744	
第 48 図	23		木炭層	土師質土器	中皿	A?	8.7	4.6	1.8	4/10	W 15	NS 0	-73.139	2.192	420.784	H9G	土	754	
第 49 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	鍋	A	15.0	12.2	11.5		W 18	S 1	-87.267	-0.706	419.866	H11G	土	1452	
第 49 図	2	SGD04	上層部	瓦質土器	鍋	A	15.9	30.0			W 1	N 2	-1.050	11.660	424.385	H5G	土	127	
第 50 図	1	SGD34旧路	上層部	瓦質土器	鍋	B-1	19.1	14.1	8.8	8/10	W 17	S 2	-82.420	-7.727	419.619	H11G	土	1202	
第 50 図	1	SGD34旧路	上層部	瓦質土器	鍋	B-1					W 17	S 2	-82.814	-7.286	419.640	H11G	土	1203	1202と接続
第 50 図	1	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	鍋	B-1					W 17	S 2	-80.209	-6.909	419.699	H11G	土	1208	1202と接続
第 50 図	1	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	鍋	B-1					W 16	S 2	-76.656	-6.682	419.928	H11G	土	1220	1202と接続
第 50 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	鍋	B-1					W 18	S 1	-87.806	-2.106	420.094	H11G	土	1351	1202と接続
第 50 図	2		上層部	瓦質土器	鍋	B-1	21.8	14.6	9.0	4/10	W 16	S 1	-76.332	-0.815	420.685	H11G	土	1502	
第 50 図	3	SGD34旧路	埋立層	瓦質土器	鍋	B-2	19.1	14.6	6.5		W 19	S 1	-94.078	-4.864	420.131	H11G	土	1329	
第 50 図	4	SGD34新路	中層部	瓦質土器	内耳鍋	C	28.9	21.2	16.3		W 17	S 2	-83.986	-8.373	419.699	H11G	土	1145	
第 50 図	5	SGK147	上層部	瓦質土器	内耳鍋	C	26.8	20.1	14.8		W 14	S 1	-69.765	-0.525	420.890	H9G	土	760	
第 51 図	1		木炭層	瓦質土器	火鉢	A	34.8		8.2	1/10	W 15	NS 0	-73.16	2.253	420.789	H9G	土	753	
第 51 図	1		木炭層	瓦質土器	火鉢	A					W 16	N 2	-79.677	10.928	420.814	H10G	土	917	753と同一
第 51 図	1	SGD56	下層部	瓦質土器	火鉢	A					W 17	N 1	-84.475	5.447	419.299	H10G	土	958	753と同一
第 51 図	1	SGD56	覆土	瓦質土器	火鉢	A					W 18	N 1	-85.416	7.279	419.148	H10G	土	1022	753と同一
第 51 図	2	SGD04	底部	瓦質土器	火鉢	B	21.4	36.1	12.0	1/10	W 1	N 2	-1.410	11.840	424.146	H5G	土	130	
第 51 図	3	SGD37	上層部	瓦質土器	火鉢	C	35.7	23.4	10.4		W 11	S 1	-52.644	-2.056	421.325	H8G	土	503	
第 51 図	3	SGD34	中層部	瓦質土器	火鉢	C					W 11	S 1	-54.323	-2.348	420.926	H8G	土	504	503と同一
第 51 図	3			瓦質土器	火鉢	C					W 11	NS 0	-51.169	-1.104	421.720	H8G	土	547	503と同一
第 51 図	3	SGD34	中層部	瓦質土器	火鉢	C					W 13	S 2	-62.581	-6.501	419.577	H9G	土	619	503と同一
第 51 図	3	SGD34	中層部	瓦質土器	火鉢	C					W 15	S 2	-71.905	-6.704	419.477	H9G	土	664	503と同一
第 51 図	3	SGD34	中層部	瓦質土器	火鉢	C					W 15	S 2	-72.302	-6.342	419.498	H9G	土	665	503と同一

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 52 図	1	SGD56	下層部	瓦質土器	擂鉢	A	3.6	6.0	1.2	1/10	W 18	NS 0	-85.788	2.179	419.314	H10G	土	956	
第 52 図	2	SGD04	上層部	瓦質土器	擂鉢	B	29.8		8.5	2/10	W 1	N 2	-2.030	11.920	424.365	H5G	土	133	136と同固体
第 52 図	2	SGD04	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 1	N 2	-3.560	11.540	424.399	H5G	土	136	133と同固体
第 52 図	3	SGD34旧路	上層部	瓦質土器	擂鉢	B	29.8		6.1	1/10	W 17	S 2	-84.717	-6.181	419.598	H11G	土	1200	1441と接続
第 52 図	3	SGD56	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 17	S 1	-84.663	-1.062	419.752	H11G	土	1441	1200と接続
第 52 図	4	SGD04	護岸裏込中	瓦質土器	擂鉢	B	32.2	13.5	11.0	3/10	W 4	N 2	-19.550	11.680	423.376	H6G	土	354	
第 53 図	1	SGD34	中層部	瓦質土器	擂鉢	B	29.7	13.9	9.9	3/10	W 13	S 2	-64.925	-5.562	420.368	H9G	土	635	
第 53 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	N 4	-85.179	20.224	419.904	H10G	土	979	635と接続
第 53 図	1	SGD34旧路	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 1	-88.162	-4.754	419.820	H11G	土	1251	635と接続
第 53 図	1	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 2	-87.799	-5.229	419.477	H11G	土	1252	635と接続
第 53 図	1	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 2	-87.086	-5.643	419.264	H11G	土	1254	635と接続
第 53 図	1	SGD34旧路	下層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 17	S 2	-84.992	-6.524	419.036	H11G	土	1261	635と接続
第 53 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 1	-87.851	-2.521	420.110	H11G	土	1346	635と接続
第 53 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 1	-87.193	-3.135	420.080	H11G	土	1357	635と接続
第 53 図	1	SGD56	上層部	瓦質土器	擂鉢	B					W 18	S 1	-87.865	-2.444	419.920	H11G	土	1416	635と接続
第 54 図	1	SGD34	中層部	瓦質土器	擂鉢	B	31.3	14.7	8.5	10/10	W 12	S 1	-56.574	-3.720	419.607	H8G	土	513	
第 55 図	1	SGD04	上層部	瓦質土器	擂鉢	C	30.5	13.3	10.8	6/10	W 4	N 2	-17.040	12.230	423.769	H6G	土	348	
第 56 図	1	SGD34		瓦質土器	擂鉢	C	29.9		9.0	1/10	W 13	S 2				H9G	土	782	
第 56 図	2	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	擂鉢	C	30.1	13.8	8.5		W 17	S 2	-81.740	-6.501	419.202	H11G	土	1225	
第 56 図	3	SGD56		瓦質土器	擂鉢	C					W 18	N 3	-85.803	16.975	419.998	H10G	土	974	
第 56 図	3	SGD56	覆土	瓦質土器	擂鉢	C					W 17	N 4	-84.686	20.128	419.842	H10G	土	986	
第 56 図	3	SGD56	覆土	瓦質土器	擂鉢	C					W 17	N 3	-84.935	16.709	419.541	H10G	土	1017	
第 56 図	3	SGD34旧路	中層部	瓦質土器	擂鉢	C					W 18	S 2	-87.261	-5.232	419.166	H11G	土	1258	
第 57 図	1	SGD34	下層部	瓦質土器	茶釜		22.2	8.2	16.2		W 13	S 2	-64.76	-5.413	419.332	H9G	土	658	
第 58 図	1	SGD67	中層部	常滑	甕口縁	A	7.7	12.0	2.4		W 19	N 4	-93.407	21.996	420.282	H12G	土	1648	
第 58 図	2	SGK131		常滑	甕口縁	B	9.3	10.7	2.2		W 14	NS 0	-68.075	3.392	420.946	H9G	土	751	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C	42.1		38.8	4/10	W 15	S 2	-71.161	-7.295	420.230	H9G	土	599	漆継
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-71.41	-8.009	420.249	H9G	土	602	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C	12.1	24.1	2.1		W 15	S 2	-71.062	-8.012	420.151	H9G	土	603	1119と接続
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-71.124	-9.018	420.309	H9G	土	605	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-70.388	-8.004	419.901	H9G	土	610	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 14	S 2	-69.671	-7.072	420.091	H9G	土	612	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 14	S 2	-68.507	-7.045	419.968	H9G	土	614	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-70.355	-7.994	419.877	H9G	土	621	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-70.056	-7.572	419.877	H9G	土	622	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 14	S 2	-69.12	-6.909	420.035	H9G	土	623	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-71.165	-8.441	419.984	H9G	土	628	
第 58 図	3	SGD34	中層部	常滑	甕	C					W 15	S 2	-71.206	-8.288	419.974	H9G	土	629	
第 59 図	1	SGD34新路	中層部	常滑	甕口縁	C	12.1	24.1	2.1		W 17	S 2	-83.419	-8.058	419.912	H11G	土	1119	603と接続
第 59 図	2	SGD34	壁際	常滑	甕	C	14.8	9.4	2.1		W 15	S 2	-70.359	-6.297	420.665	H9G	土	607	624と接続
第 59 図	2	SGD34	中層部	常滑	甕口縁部	C					W 14	S 2	-69.267	-7.063	420.016	H9G	土	624	607と接続
第 59 図	3	SGE01	覆土中	常滑	甕	D	9.2	12.6	2.5		W 1	S 3				H9G	土	2014	
第 60 図	1	SGK103	上層部壁際	古瀬戸	天目碗		12.0		3.9		W 10	S 2	-49.978	-7.699	421.622	H8G	土	456-1	
第 60 図	2	SGK131		古瀬戸	天目碗		11.7		5.5		W 14	NS 0	-67.723	3.196	420.890	H9G	土	749	漆継

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 60 図	3		水田床土層下	古瀬戸	天目碗		10.5		4.2		W 15	N 2	-72.611	5.161	421.026	H9G	土	734	
第 60 図	4		黒土層	古瀬戸	灰釉卸皿		2.5	3.6			W 5	N 1	-23.400	6.340	423.579	H6G	土	299	
第 60 図	5	SGA02トレ	水田床土層下	古瀬戸	灰釉卸皿		2.3	3.3			W 20	S 1	-98.843	-3.850	420.172	H11G	土	1339	
第 60 図	6	SGK241		古瀬戸	灰釉卸皿		2.3	2.9			W 23	N 2	-114.241	13.386	419.253	H13G	土	1848	
第 60 図	7	SGA02下	水田床土層下	古瀬戸	灰釉卸皿		8.1	6.8			W 21	N 3	-103.551	16.176	423.044	H12G	土	1682	
第 60 図	8		水田床土層下	古瀬戸	灰釉折縁深皿		1.2	4.3			W 19	N 2	-91.785	15.711	420.478	H12G	土	1528	
第 60 図	9		灰褐色土層	古瀬戸	灰釉折縁中皿		3.2	3.3			W 15	NS 0	-72.675	2.66	420.696	H9G	土	752	
第 60 図	10		水田直下	古瀬戸	灰釉折縁中皿		1.8	4.4			W 24	NS 0	-119.348	2.406	419.297	H13G	土	1808	
第 60 図	11		水田直下	古瀬戸	灰釉折縁小皿		9.9		1.8		W 22	N 3	-107.953	17.293	419.264	H13G	土	1786	
第 60 図	12	SGD34	中層部	古瀬戸	灰釉折縁小皿		8.0		1.8		W 14	S 2	-67.886	-5.191	420.261	H9G	土	642	
第 60 図	13	SGD05	上層部	古瀬戸	灰釉腰折皿		12.1	4.4	3.3	6/10	W 3	N 3	-14.130	18.080	424.062	H5G	土	162	
第 60 図	14		木炭層	古瀬戸	灰釉腰折皿		12.7		2.8	2/10	W 14	NS 0	-66.954	2.539	420.919	H9G	土	723	748と接続
第 60 図	14	SGK130	底部	古瀬戸	灰釉腰折皿						W 14	NS 0	-67.59	2.041	420.700	H9G	土	748	723と接続
第 60 図	15		木炭層	古瀬戸	鉄釉耳付水注		2.9	2.1			W 14	NS 0	-69.367	1.765	421.015	H9G	土	714	
第 60 図	16	SGP02	底部	古瀬戸	灰釉広口壺		7.4	10.3			W 9	S 1	-42.550	-2.780	420.901	H7G	土	383	
第 61 図	1	SGD34	中層部	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿		11.2	6.0	2.4	8/10	W 14	S 2	-67.087	-6.69	419.978	H9G	土	615	
第 61 図	2		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿		11.2	5.3	2.7	9/10	W 16	N 1	-75.709	6.003	420.872	H10G	土	855	
第 61 図	3		上層部	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿		11.2		1.9	2/10	W 11	S 2	-52.339	-9.672	421.168	H8G	土	573	
第 61 図	4		水田床土層下	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿		11.2	5.4	2.5	3/10	W 15	N 1	-72.717	2.141	420.998	H9G	土	710	
第 61 図	5	SGD34旧路	中層部	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿		12.0	6.2	2.8	9/10	W 16	S 2	-77.571	-7.304	419.700	H11G	土	1219	1277と接続
第 61 図	5	SGE05	上層部	瀬戸美濃大窯	灰釉端反皿						W 16	S 2	-77.708	-5.143	420.144	H11G	土	1277	1219と接続
第 61 図	6		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗		10.9	5.4	3.0	2/10	W 16	N 1	-77.090	7.562	420.910	H10G	土	881	882,916と接続
第 61 図	6		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 16	N 1	-77.199	7.626	420.912	H10G	土	882	881,916と接続
第 61 図	6		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 16	N 1	-77.115	7.566	420.899	H10G	土	916	881、882と接続
第 61 図	7		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸皿		11.1		2.5	1/10	W 15	NS 0	-70.168	3.3	421.014	H9G	土	725	1680と接続
第 61 図	7	SGA03	基底部	瀬戸美濃大窯	灰釉内ソギ丸皿						W 19	N 3	-91.53	19.325	422.393	H12G	土	1680	725と接続
第 61 図	8	SGD03	覆土	瀬戸美濃大窯	灰釉小杯		9.0		5.6	1/10	E 1	N 1	5.910	7.420	424.654	H5G	土	67	217と同一個体
第 61 図	8		黒褐色土層	瀬戸美濃大窯	灰釉小杯						W 1	S 2	-4.220	-9.800	424.448	H6G	土	217	67と同一個体
第 61 図	10		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗		5.7	7.0	0.6		W 16	S 1	-75.773	-2.269	420.610	H11G	土	1311	1312、1314と接続
第 61 図	10		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 16	S 1	-76.015	-2.468	420.583	H11G	土	1312	1311、1314と接続
第 61 図	10		木炭層	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 16	S 1	-76.389	-3.216	420.597	H11G	土	1314	1311,1312と接続
第 61 図	11	SGD67	中層部	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗		5.1	6.0	0.6		W 19	NS 0	-94.634	3.413	419.703	H12G	土	1584	1649、1650と接続
第 61 図	11	SGD67	中層部	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 19	NS 0	-92.6	2.171	419.854	H12G	土	1649	1584、1650と接続
第 61 図	11	SGD67	中層部	瀬戸美濃大窯	灰釉丸碗						W 19	NS 0	-93.156	2.324	419.619	H12G	土	1650	1584、1649と接続
第 61 図	12	723号柱穴	柱痕内	瀬戸美濃大窯	天目碗		12.0	5.9	5.4		EW 0	NS 0				H5G	土	197	
第 61 図	13	SGD67	上層部	瀬戸美濃大窯	天目碗		11.5		4.9		W 19	N 3	-94	16.126	419.877	H12G	土	1559	
第 61 図	14	SGD56	埋立層土部	瀬戸美濃大窯	天目碗Ⅱ			4.0	4.3		W 17	N 1	-84.434	9.170	420.381	H10G	土	803	1533と接続
第 61 図	14		水田床土層下	瀬戸美濃大窯	天目碗Ⅱ						W 19	N 1	-94.201	9.968	420.320	H11G	土	1533	803と接続
第 61 図	15		上層部	瀬戸美濃大窯	天目碗Ⅱ		12.0		6.2		W 23	NS 0	-114.910	0.634	419.184	H13G	土	1990	
第 61 図	16	SGD112	礫層	瀬戸美濃大窯	鉄釉平碗			4.1	2.3		W 22	NS 0	-107.720	4.857	419.164	H13G	土	1871	1872と接続
第 61 図	16	SGD112	礫層	瀬戸美濃大窯	鉄釉平碗						W 22	NS 0	-107.667	4.298	419.148	H13G	土	1872	1871と接続
第 61 図	17		木炭層	瀬戸美濃大窯	小天目碗		8.9	3.5	4.9		W 16	NS 0	-76.125	2.306	420.882	H10G	土	817	
第 61 図	18	SGD19	上層部	瀬戸美濃大窯	天目碗		8.9		4.6		W 4	N 1	-18.920	8.860	423.712	H6G	土	324	
第 61 図	19	SGK118	覆土	瀬戸美濃大窯	鉄釉稜皿		11.0		2.2	4/10	W 14	S 1	-65.981	-2.049	421.009	H9G	土	678	
第 61 図	20	SGD03	覆土	瀬戸美濃大窯	鉄釉稜皿		10.8	5.9	2.4	2/10	E 1	N 1	7.420	8.760	424.657	H5G	土	62	
第 62 図	1	854号柱穴		瀬戸美濃大窯	鉄釉稜皿		9.7	5.2	2.6	10/10	W 2	S 2	-5.100	-7.440	424.297	H6G	土	205	
第 62 図	2			瀬戸美濃大窯	鉄釉丸皿		10.2	5.5	2.5		EW 0	N 2	1.490	13.470	424.565	H5G	土	113	
第 62 図	3		黒土層	瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か		8.5	11.9	22.6		E 1	NS 0	5.500	2.550	424.636	H5G	土	24	66、68、73、80、195と同一個体
第 62 図	3	269号柱穴		瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か						E 1	N 1	5.980	7.010	424.601	H5G	土	66	24と同一
第 62 図	3		黒土層	瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か						E 1	N 1	5.670	7.200	424.675	H5G	土	68	24と同一
第 62 図	3		黒土層	瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か						EW 0	N 1	3.940	6.690	424.675	H5G	土	73	24と同一
第 62 図	3		黒土層	瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か						EW 0	N 1	1.180	5.530	424.568	H5G	土	80	24と同一

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 62 図	3	280号柱穴		瀬戸美濃大窯	鉄釉徳利か						E 2	N 1	11.430	7.890	424.411	H5G	土	195	24と同一
第 62 図	4	SGD34新路	中層部	瀬戸美濃大窯	鉄釉水注		2.9	3.0	4.3	9/10	W 17	S 2	-82.335	-8.873	419.774	H11G	土	1118	
第 62 図	5	SGD34	中層部	瀬戸美濃大窯	柿釉小壺		2.9	3.9	2.8		W 14	S 2	-66.744	-6.969	420.019	H9G	土	594	
第 62 図	6		黒土層	瀬戸美濃大窯	志野丸皿		12.0	7.1	2.7		E 1	N 1	5.550	6.130	424.551	H5G	土	71	
第 62 図	7		黒土層	初山窯	筒型碗						E 1	NS 0	5.630	3.330	424.551	H5G	土	22	
第 62 図	8		黒土層	初山窯	擂鉢		4.3	11.7			EW 0	NS 0	4.450	4.160	424.572	H5G	土	21	
第 62 図	9	298号柱底部		初山窯	擂鉢			9.8	7.0		EW 0	N 1				H5G	土	198	
第 62 図	10	346号柱上		連房窯	志野丸皿		11.2		2.2		E 1	N 2	8.490	12.180	424.680	H5G	土	105	
第 62 図	11			連房窯	鉄絵皿		12.0		1.9		W 12	S 1	-57.544	-1.234	421.499	H8G	土	584	
第 63 図	1	SGP02	底部	舶載陶器	天目碗		1.9	3.9			W 8	S 2	-39.550	-7.150	421.569	H7G	土	377	
第 63 図	2		木炭層下	白磁	瓜割壺		3.5	6.2			W 15	NS 0	-76.468	2.600	420.516	H10G	土	1089	
第 63 図	3	SGD34新路	中層部	白磁	瓜割壺		1.5	2.5			W 20	S 2	-95.886	-7.699	419.357	H11G	土	1160	
第 63 図	4	SGD34新路	上層部	白磁	瓜割壺		3.2	4.3			W 18	S 2	-86.382	-9.265	420.270	H11G	土	1101	
第 63 図	5	SGD67	上層部	白磁	瓜割壺		1.2	1.8			W 19	S 1	-94.145	-3.188	419.843	H11G	土	1409	
第 63 図	6	SGD56	上層部	白磁	瓜割壺		2.8	2.6			W 17	S 1	-83.759	-2.457	420.063	H11G	土	1383	
第 63 図	7	SGD34	中層部	白磁	面取杯			3.6	1.8		W 14	S 2	-65.171	-5.028	420.165	H9G	土	648	
第 63 図	8		木炭層	白磁	面取杯		8.0	3.6	2.5		W 17	N 1	-80.389	8.851	420.899	H10G	土	904	
第 63 図	9	SGD56		白磁	面取杯			3.8	1.5		W 17	N 4	-84.251	20.168	419.894	H10G	土	978	
第 63 図	10	531号柱穴		白磁	皿		12.0		2.8		W 1	N 1	-3.140	7.930	424.073	H5G	土	124	
第 63 図	11	SGE06	上層部	白磁	端反皿		11.0		2.2		W 16	S 1	-79.105	-4.278	420.295	H11G	土	1317	
第 63 図	12		木炭層	白磁	端反皿		1.8	3.2			W 16	NS 0	-77.243	3.590	420.840	H10G	土	844	
第 63 図	13	SGD112	下層部	白磁	端反皿		12.0		2.3		W 22	NS 0	-109.258	4.505	418.047	H13G	土	1978	
第 63 図	14		水田直下	白磁	端反皿		12.5	6.5	2.4		W 23	N 4	-112.915	21.862	419.394	H13G	土	1748	
第 63 図	15	SGD42	木炭層	白磁	菊皿		2.5	2.8			W 14	S 3	-65.914	-11.225	419.882	H9G	土	668	
第 63 図	16	SGD34新路	中層部	白磁	菊皿		2.9	3.3			W 22	S 2	-108.359	-7.660	418.483	H14G	土	1934	
第 64 図	1	SGD05内		青磁	櫛歯紋皿		1.8	2.8			W 1	N 3				H5G	土	199	
第 64 図	2	SGD23	上層部	青磁	櫛歯紋皿		2.5	2.9			W 4	N 3	-18.120	16.040	423.568	H6G	土	339	
第 64 図	3		排土中	青磁	櫛歯紋碗		3.5	4.5								H10G	土	793	
第 64 図	4	SGD56	覆土上層	青磁	連弁紋碗		1.5	3.2			W 18	N 1	-87.024	5.097	420.026	H10G	土	810	
第 64 図	5		木炭層下	青磁	連弁紋碗		3.1	4.4			W 16	N 2	-79.749	12.877	420.672	H10G	土	1087	
第 64 図	6	SGD37	上層部	青磁	連弁紋碗		2.6	6.0			W 12	N 1	-55.155	-6.150	421.725	H8G	土	533	
第 64 図	7	SGP01		青磁	連弁紋碗		2.4	4.9			W 6	N 1	-27.260	9.270	422.749	H6G	土	295	
第 64 図	8	SGP01	石抜き跡	青磁	連弁紋碗か		2.1	3.0			W 6	N 1	-28.000	6.740	422.784	H6G	土	293	見込み連弁紋
第 64 図	9	SGD16	テラス	青磁	雷紋帯碗		3.2	2.9			W 4	S 2	-16.140	-5.670	423.902	H6G	土	246	
第 64 図	10	SGD68	壁際	青磁	端反皿		2.1	2.3			W 20	S 1	-96.451	-2.724	420.021	H11G	土	1337	
第 64 図	11	SGD22	上層部	青磁	端反皿		1.8	2.5			W 4	N 1	-19.080	9.680	423.553	H6G	土	322	
第 64 図	12			青磁	端反皿		2.3	2.9			W 25	N 3	-122.527	17.760	418.372	H15F	土	378	
第 64 図	13	SGD56	中層部	青磁	稜花皿		2.5	6.2			W 18	S 1	-85.542	-0.923	419.205	H11G	土	1481	
第 64 図	14	SGD19	上層部	青磁	小壺か		3.4	4.1			W 4	N 1	-19.430	6.680	423.654	H6G	土	337	
第 64 図	15	SGD34	上層部	青磁	壺口縁		3.2	3.4			W 10	S 1	-49.823	-1.880	421.466	H8G	土	494	
第 65 図	1	SGK70		染付	碗	C	2.4	3.0			W 5	S 1	-20.750	-2.670	423.442	H6G	土	257	
第 65 図	2	SGD34新路	中層部	染付	碗	D	2.6	4.2			W 21	S 2	-102.095	-7.116	419.035	H11G	土	1235	
第 65 図	3	SGD34旧路	中層部	染付	碗	D	12.3	5.7	6.3		W 13	S 2	-64.954	-6.02	419.844	H9G	土	651	高台内「二六」の墨書
第 65 図	4		木炭層	染付	碗	C	2.3	2.0			W 16	S 1	-79.426	-2.768	420.618	H11G	土	1306	
第 65 図	5		水田床土層下	染付	碗	C	3.1	2.9			W 19	N 1	-93.45	8.314	420.323	H11G	土	1553	
第 65 図	6	269号柱穴脇	黒土層	染付	碗	E	4.0	6.0			E 1	N 1	5.130	7.260	424.579	H5G	土	69	
第 65 図	7	SGD04上部		染付	皿	B1	9.5	4.4	2.5		W 3	N 2	-13.470	11.890	423.900	H5G	土	181	
第 65 図	8	545号柱穴		染付	皿	B1	1.2	4.5			W 1	N 2	-0.840	10.110	424.399	H5G	土	126	
第 65 図	9		埋立層	染付	皿	B1	2.3	1.8			W 25	N 4	-123.154	24.025	419.281	H15F	土	175	
第 65 図	10	774号柱穴		染付	皿	B1	1.7	2.9			W 1	S 1	-0.860	-1.330	424.347	H6G	土	200	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 65 図	11		黒土層	染付	皿	B1	1.7	3.5			E 1	N 1	8.200	7.320	424.671	H5G	土	58	
第 65 図	12		木炭層	染付	皿	B1	1.4	3.1			W 16	N 1	-76.891	7.412	420.854	H10G	土	880	
第 65 図	13		水田床土層下	染付	皿	B1	2.1	3.4			W 15	NS 0	-71.717	3.171	421.026	H9G	土	728	
第 65 図	14	SGD34	下層部	染付	皿	B1	2.8	2.9			W 13	S 2	-62.655	-7.101	419.784	H9G	土	597	
第 65 図	15	SGD42	木炭層	染付	皿	B1	2.5	2.3			W 14	S 3	-68.114	-12.337	419.845	H9G	土	673	
第 65 図	16	SGD34旧路	上層部	染付	皿	E1	2.1	3.3			W 18	S 1	-87.806	-4.938	420.244	H11G	土	1192	
第 66 図	1	SGD34	中層部	土製品	円板		7.2	6.9	1.3		W 10	S 1	-47.285	-1.906	421.143	H8G	土	487	
第 66 図	2	SGD34旧路	上層部	土製品	円板		2.2	2.0	0.4		W 18	S 2	-87.782	-6.743	419.790	H11G	土	1189	
第 66 図	3	SGD56	上層部	土製品	円板		3.9	5.2	1.0	7/10	W 18	S 1	-85.767	-2.700	419.850	H11G	土	1425	
第 66 図	4	SGD67	上層部	土製品	円板		1.5	1.7	0.3		W 19	N 4	-93.65	20.417	420.414	H12G	土	1586	
第 66 図	5	SGD67	上層部	土製品	円板		1.3	1.4	0.3		W 19	N 4	-94.702	23.15	420.382	H12G	土	1592	
第 66 図	6	SGD67	中層部	土製品	円板		3.3	3.5	0.6		W 19	N 2	-93.223	11.851	419.693	H12G	土	1611	
第 66 図	7	SGD67	中層部	土製品	円板		2.6	2.5	0.7		W 19	N 4	-92.34	21.491	420.082	H12G	土	1646	
第 66 図	8	SGD112	上層部	土製品	円板		2.2	3.8	1.0		W 22	S 2	-107.094	-7.044	419.073	H14G	土	1924	
第 66 図	9	W26ラインドレ	初期層	土製品	円板		3.5	4.0	1.0		W 27	N 6	-130.243	33.104	417.943	H15F	土	207	
第 66 図	10		砂質土上部	土製品	円板		3.8	4.0	2.0		W 5	S 3	-24.550	-10.140	423.273	H6G	土	271	
第 66 図	11			土製品	円板		2.3	2.3	0.6		W 10	S 2				H8G	土	449	一括中
第 66 図	12			土製品	円板		3.6	3.2	0.6		W 12	S 1	-58.306	-1.076	421.466	H8G	土	585	
第 66 図	13		木炭層	土製品	円板		5.7	5.8	0.8		W 16	N 2	-78.843	12.158	420.924	H10G	土	868	
第 66 図	14		木炭層	土製品	円板		2.8	2.4	0.6		W 16	N 2	-76.216	12.437	420.848	H10G	土	928	
第 66 図	15		水田直下	土製品	円板		2.3	2.0	0.3		W 24	NS 0	-116.740	4.768	419.385	H13G	土	1817	
第 66 図	16	SGD37	上層部	土製品	有孔円板		7.6	7.6			W 11	S 1	-51.640	-0.770	421.602	H8G	土	495	
第 66 図	17		黒土層	土製品	有孔円板		3.6	3.7	0.6		W 5	S 1	-21.550	-3.970	423.554	H6G	土	263	
第 66 図	18		木炭層	土製品	有孔円板		8.5	7.0			W 17	N 1	-80.284	6.890	420.763	H10G	土	869	
第 66 図	19	SGD56	上層部	土製品	円柱		1.9	1.6			W 18	S 1	-87.065	-2.737	420.129	H11G	土	1348	
第 66 図	20	SGD37	上層部	土製品	鈴		2.8	1.9			W 11	NS 0	-53.039	-4.478	421.643	H8G	土	532	
第 66 図	21	SGD56	埋立層	土製品	鈴		3.6	2.7			W 18	N 1	-85.530	5.222	420.133	H10G	土	808	
第 66 図	22		黒土層	土製品	馬		4.6	2.3	2.4		E 1	N 1	9.430	5.310	424.661	H5G	土	31	
第 66 図	23		黒土層	土製品	鳥形か		3.4	2.8	2.5		EW 0	N 1	1.630	6.060	424.611	H5G	土	78	
第 67 図	1	SGD34新路	中層部	鉄製品	鉄鏃		7.3	1.5	0.5		W 19	S 2	-94.375	-8.261	419.688	H11G	金	154	
第 67 図	2		木炭層	鉄製品	小札か		3.0	2.7	0.1		W 16	S 1	-79.201	-1.890	420.542	H11G	金	174	
第 67 図	3	SGE05	中層部	鉄製品	刀子柄		1.3	6.6	0.2		W 16	S 1				H11G	金	175	
第 67 図	4		水田床土層下	鉄製品	刀子		1.6	19.2	0.3		W 23	N 2	-110.759	11.223	419.310	H13G	金	254	
第 67 図	5	SGD34新路	中層部	鉄製品	刀子柄		1.2	4.0	0.2		W 18	S 2	-86.508	-9.015	419.695	H11G	金	151	
第 67 図	6		水田床土層下	鉄製品	刀子		1.0	3.2	0.2		W 15	N 1	-74.401	3.160	420.923	H9G	金	67	
第 67 図	7	SGD30		鉄製品	鋏		3.7	16.4	1.0		W 7	S 1	-31.700	-2.800	422.373	H7G	金	34	
第 67 図	8	SGD34新路	中層部	鉄製品	燭台		49.5	30.1			W 22	S 2	-107.527	-7.190	418.831	H14G	金	290	
第 67 図	9		砂質土上部	鉄製品	鋤先		19.9	21.0	4.1		W 3	S 1	-10.520	-4.380	424.135	H6G	金	31	
第 67 図	10		中層部	鉄製品	楔		7.0	1.2	0.7		W 24	N 2	-119.282	14.338	418.915	H13G	金	294	
第 67 図	11		木炭層	鉄製品	目割か		4.4	3.1	0.4		W 16	N 2	-79.844	11.912	420.951	H10G	金	103	
第 67 図	12	SGD67	上層部	鉄製品	目割か		5.4	3.1	0.6		W 20	N 1	-95.330	5.167	419.974	H12G	金	220	
第 67 図	13		水田層面	鉄製品	釘		2.0	0.7	0.3		W 24	N 3	-119.123	19.020	419.450	H13G	金	246	
第 67 図	14		水田層面	鉄製品	釘		3.3	0.7	0.3		W 23	N 3	-112.810	16.475	419.514	H13G	金	247	
第 67 図	15		水田床土層下	鉄製品	釘		3.0	0.8	0.4		W 23	N 4	-114.237	20.775	419.331	H13G	金	250	
第 67 図	16		木炭層	鉄製品	釘		4.4	2.0	0.5		W 16	NS 0	-76.502	4.099	420.807	H10G	金	85	
第 67 図	17		水田床土層下	鉄製品	釘		5.0	0.4			W 19	N 2	-92.827	10.401	420.376	H12G	金	201	
第 67 図	18		水田床土層下	鉄製品	釘		2.3	1.0	0.4		W 20	N 1	-95.945	8.616	420.288	H12G	金	199	
第 67 図	19		水田層	鉄製品	釘		2.9	0.9	0.3		W 17	N 3	-80.739	16.603	420.808	H10G	金	138	
第 67 図	20		木炭層	鉄製品	釘		5.5	1.3	0.4		W 18	S 3	-85.740	-10.174	420.105	H11G	金	182	
第 67 図	21			鉄製品	釘		6.2	0.5			W 23	N 1	-112.560	7.899	419.251	H13G	金	260	
第 67 図	22		水田床土層下	鉄製品	釘		3.7	0.3			W 19	NS 0	-94.098	4.863	420.267	H12G	金	207	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 67 図	23		水田床土層	鉄製品	釘		4.1	0.3			W 27	N 3	-132.110	19.202	419.130	H15F	金	107	
第 67 図	24	SGE06	灰層中	鉄製品	釘		3.2	0.2			W 16	S 1				H11G	金	407	
第 67 図	25		灰褐色盛土中	鉄製品	釘		4.2	1.2	0.4		W 8	N 1	-37.410	5.580	422.401	H7G	金	38	
第 68 図	1	SGD08		銅・金銅製品	鞘尻金具		3.6	6.9	1.2		W 1	N 1	3.900	7.730	424.260	H5G	金	9	
第 68 図	2		木炭層	銅・金銅製品	柄冠金具		6.1	3.8	1.5		W 16	N 2	-76.839	12.431	420.782	H10G	金	110	111と接続
第 68 図	2		木炭層	銅・金銅製品	柄冠金具						W 16	N 2	-76.965	12.281	420.751	H10G	金	111	110と接続
第 68 図	3		水田層上部	銅・金銅製品	飾金具		2.2	2.8			W 22	N 3	-108.803	19.026	423.343	H13G	金	240	
第 68 図	4		水田床土層下	銅・金銅製品	飾金具		1.8	8.8	0.3		W 14	S 1	-69.045	-2.964	421.003	H9G	金	61	
第 68 図	5	SGD30		銅・金銅製品	笄		12.0	1.3	0.5		W 7	S 2	-31.580	-6.620	422.358	H7G	金	33	
第 68 図	6	SGD34旧路	上層部	銅・金銅製品	笄		15.0	1.4	0.2		W 13	S 2				H9G	金	406	
第 68 図	7	SGD56	中層部	銅・金銅製品	笄		5.1	1.3	0.2		W 18	S 1	-86.125	-3.067	419.596	H11G	金	180	
第 68 図	8		水田床土層下	銅・金銅製品	笄先端部		5.2	0.7	0.1		W 19	NS 0	-94.294	4.777	420.348	H12G	金	205	
第 68 図	9	SGD34旧路	中層部	銅・金銅製品	鋲		0.8		0.8		W 16	S 2	-76.956	-6.918	419.411	H11G	金	163	
第 68 図	10	308号柱穴		銅・金銅製品	環		2.5	2.4	0.4		E 1	N 1	6.470	8.720	424.386	H5G	金	16	
第 68 図	11	SGD56	中層部	銅・金銅製品	飾金具		2.8	4.5			W 18	S 1	-86.969	-0.726	419.712	H11G	金	181	
第 68 図	12		水田床土層下	銅・金銅製品	飾金具		1.5	2.8			W 23	NS 0	-114.902	2.087	419.322	H13G	金	257	
第 68 図	13		埋立層	銅・金銅製品	飾金具		1.4	3.7			W 26	N 4	-125.503	23.203	419.168	H15F	金	110	
第 68 図	14	SGD15	上層部	銅・金銅製品	軸棒		3.5	0.3			W 1	S 2	-2.780	-9.130	424.491	H6G	金	22	
第 68 図	15		埋立層	銅・金銅製品	管状製品		4.7	6.0	0.2		W 27	N 3	-132.920	17.283	419.017	H15F	金	113	
第 68 図	16		砂質土上部	銅・金銅製品	鈴		2.8	2.8	1.0		W 6	S 2	-25.270	-5.410	423.276	H6G	金	30	
第 68 図	17	SGD67	中層部	金属加工	羽口		6.2	3.7	2.7		W 20	N 1	-95.722	8.236	419.770	H12G	土	1632	
第 68 図	18	SGD30		金属加工	溶融物付着		7.2	6.1	0.6		W 7	NS 0	-31.430	2.800	422.455	H7G	土	390	
第 68 図	19		水田床土層	金属加工	鉄滓		5.2	2.3	1.7		W 26	N 6	-126.254	33.036	419.316	H15F	金	102	
第 69 図	1			銭貨	皇宋通寶		2.4		0.2	10/10	W 1	N 3	-1.360	16.340	424.194	H5G	金	10	
第 69 図	2	SGD16	覆土中	銭貨	至道元寶		2.2		0.3	10/10	W 4	S 2	-18.020	-7.400	423.453	H6G	金	27-1	
第 69 図	3	SGP02	底部	銭貨	大定通寶		2.4		0.1	10/10	W 9	S 2	-41.310	-7.910	421.147	H7G	金	36	
第 69 図	4	SGD34	中層部	銭貨	至□□寶		2.3	1.0	0.1	4/10	W 13	S 1	-63.024	-4.694	419.585	H9G	金	55	
第 69 図	5	SGD34	中層部	銭貨	元祐通寶		2.4		0.2	10/10	W 14	S 2	-65.447	-5.763	419.480	H9G	金	56	
第 69 図	6			銭貨			2.3		0.2							H10G	金	102-2	
第 69 図	7		水田床土層	銭貨	大観通寶		2.2	2.3	0.1	8/10	W 26	N 5	-126.917	26.091	419.262	H15F	金	103	
第 69 図	8		水田床土層	銭貨	元祐通寶		2.0	2.2	0.1	8/10	W 26	N 3	-127.923	17.915	419.164	H15F	金	106	
第 69 図	9	SFD44		銭貨	洪武通寶		2.3		0.1	10/10	W 27	N 6	-130.266	33.155	418.781	H15F	金	111	
第 69 図	10	SGD56	下層部	銭貨	開元通寶		2.4		0.1	10/10	W 18	NS 0	-86.204	2.402	419.324	H10G	金	123	
第 69 図	11	SGD34旧路	中層部	銭貨	治平元寶		2.3		0.1	10/10	W 17	S 2	-80.031	-6.871	419.690	H11G	金	158	
第 69 図	12	SGD34旧路	中層部	銭貨	治平元寶		2.4		0.1	10/10	W 16	S 2	-76.268	-7.690	419.798	H11G	金	160	
第 69 図	13		木炭層	銭貨	永楽通寶		2.5		0.1	10/10	W 16	S 1	-75.988	-3.008	420.629	H11G	金	167-1	
第 69 図	14		水田床土層下	銭貨	治平元寶		2.2		0.1	10/10	W 20	N 3	-97.143	15.570	420.480	H12G	金	190	
第 69 図	15	SGD67	中層部	銭貨	景徳元寶		2.4	1.8	0.1	7/10	W 19	N 1	-94.222	9.605	419.325	H12G	金	221	
第 69 図	16		水田層面	銭貨	紹聖元寶		2.4		0.1	10/10	W 23	N 3	-111.794	18.621	419.371	H13G	金	248	
第 69 図	17	SGD112	中層部	銭貨	洪武通寶		2.4		0.2	10/10	W 23	S 2	-110.499	-8.344	418.347	H14G	金	292	
第 69 図	18		黒土層	銭貨	洪武通寶		2.4		0.1	10/10	E 2	NS 0				H5G	金	400	
第 69 図	19	SGB05(282柱内)		銭貨	永楽通宝		2.4		0.1	8/10	E 1	N 1	10.000	7.750		H5G	金	404	
第 69 図	20	SGD39	上層部	銭貨	天□通寶		2.5		0.1	8/10	W 12	N 1	-59.007	6.890	421.661	H8G	土	537	
第 70 図	1		水田耕土中	石製品	砥石		8.8	2.8	1.8		W 11	S 2				H8G	他	1500	
第 70 図	2	SGD56		石製品	砥石		4.9	2.2	0.5		W 18	N 2				H10G	他	1501	
第 70 図	3	SGD112	中層部	石製品	砥石		3.2	4.3	0.4		W 22	S 1	-109.556	-3.800	418.528	H14G	他	1481	漆継
第 70 図	4	SGD112	下層部	石製品	砥石		6.2	3.3	0.3		W 22	S 1	-108.890	-4.597	418.460	H14G	他	1476	漆継
第 70 図	4	SGD112	中層部	石製品	砥石						W 22	S 1	-109.541	-3.175	418.475	H14G	他	1477	漆継
第 70 図	5	SGD112	下層部	石製品	砥石		2.3	2.1	0.4		W 22	S 1	-109.440	-2.359	418.586	H14G	他	1475	漆継
第 70 図	6	SGD34	中層部	石製品	砥石		22.7	16.0	11.5		W 12	S 1	-58.632	-4.727	420.789	H8G	他	67	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 71 図	1	SGK09	覆土	石製品	臼		35.7	25.5	20		E 1	S 1	9.950	-2.450	424.303	H4G		1	
第 71 図	2		初期面	石製品	石臼		23.2	30.4	11.0		W 16	S 1	-76.841	-1.211	420.652	H11G	土	1501	
第 71 図	3			石製品	碁石か		2.0	2.1	0.2		W 13	N 0				H9G	他	1502	
第 71 図	4	SGD34新路	上層部	石製品	滑石製切子玉		1.4	1.8			W 20	S 2	-98.176	-7.778	419.971	H11G	土	1132	
第 71 図	5		黒土層	石製品	ガラス玉		1.3	1.2			EW 0	NS 0				H5G	他	15	
第 71 図	6	SGD67	上層部	石製品	水晶		4.2	1.6			W 19	NS 0	-92.913	2.599	420.140	H12G	他	1026	
第 72 図	1	SFD06		木製品	桶材		12.5	5.6	1.5		W 26	N 9				H8F		18-1	
第 72 図	2	SFD06		木製品	桶材		12.5	5.6	5.5		W 26	N 9				H8F		18-2	18-1と同一
第 72 図	3	SFD06		木製品	桶材		13.9	7.2	1.4		W 26	N 9				H8F		18-3	18-1と同一
第 72 図	4	SFD06		木製品	桶材		15.9	5	1.3		W 26	N 9				H8F		18-4	18-1と同一
第 72 図	5	SFD06		木製品	桶材		9.9	4.8	1.1		W 26	N 9				H8F		18-5	18-1と同一
第 72 図	6	SFD06		木製品	桶材		10.9	4.7	1.3		W 26	N 9				H8F		18-6	18-1と同一
第 72 図	7	SFD06		木製品	取手か		21.8	10.2	3.5		W 26	N 9				H8F		13	
第 72 図	8	SFD06		木製品	下駄		13.5	6	2.8		W 26	N 9				H8F		16	キり
第 73 図	1	SFD06		木製品	折敷		30.3	30.4	3.2		W 26	N 9				H8F		19	刃物傷、補修孔
第 73 図	2	SGD34新路	中層部	木製品	板材		17.1	5.7	0.6		W 21	S 2	-103.350	-7.744	418.851	H11G	他	672	
第 73 図	3	SGD34新路	中層部	木製品	角材		12.4	5.7	3.9		W 16	S 2	-78.431	-8.764	419.597	H11G	他	530	
第 73 図	4	SGD34新路	中層部	木製品	板材		19.5	9.8	0.9		W 21	S 2	-103.493	-7.633	418.819	H11G	他	670	
第 73 図	5	SGD34新路	中層部	木製品	板材		9.2	7.0	0.3		W 21	S 2	-103.278	-7.801	418.675	H11G	他	720	
第 73 図	6	SGD34新路	下層部	木製品	角材		4.4	4.5	2.5		W 21	S 2	-101.911	-7.223	418.670	H11G	他	993	
第 73 図	7	SGD34新路	中層部	木製品	角材		4.0	3.2	1.8		W 21	S 2	-103.579	-7.450	418.797	H11G	他	679	
第 73 図	8	SGD34新路	中層部	木製品	双六駒か		2.7	3.2	1.3		W 16	S 2	-76.485	-9.435	419.516	H11G	他	541	
第 74 図	1	SGD34新路	中層部	木製品	板材		32.8	2.7	1.1		W 21	S 2	-102.050	-7.496	418.910	H11G	他	725	
第 74 図	2	SGD34新路	中層部	木製品	柄杓柄か		18.6	1.9	1.2		W 21	S 2	-103.101	-7.753	418.835	H11G	他	666	
第 74 図	3	SGD34新路	中層部	木製品	柄杓柄か		24.7	1.5	0.7		W 21	S 2	-102.622	-7.773	418.879	H11G	他	706	
第 74 図	4	SGD34新路	中層部	木製品	柄杓柄か		27.4	1.1	0.8		W 21	S 2	-103.098	-7.340	418.809	H11G	他	675	
第 74 図	5	SGD34新路	中層部	木製品	角柱材		16.3	7.0	6.2		W 16	S 2	-75.797	-8.777	419.592	H11G	他	552	
第 74 図	6	SGD34新路	下層部	木製品	角材		172.0	9.2	3.3		W 21	S 2	-103.746	-7.484	418.727	H11G	他	945	
第 75 図	1	SGD34新路	中層部	木製品	板材		32.0	7.9	0.7		W 21	S 2	-103.762	-7.795	418.799	H11G	他	668	
第 75 図	2	SGD34新路	下層部	木製品	板材		32.2	7.6	0.3		W 21	S 2	-103.947	-7.752	418.767	H11G	他	940	
第 75 図	3	SGD34新路	下層部	木製品	角材(敷居溝あり)		88.8	7.4	9.0		W 21	S 2	-104.165	-7.415	418.678	H11G	他	959	
第 75 図	4	SGD34新路	下層部	木製品	角材		63.0	6.4	3.0		W 21	S 2	-103.750	-7.460	418.705	H11G	他	949	
第 75 図	5	SGD34新路	下層部	木製品	角材		93.3	6.2	5.8		W 21	S 2	-104.563	-7.501	418.737	H11G	他	967	
第 76 図	1	SGD34新路	下層部	木製品	板材		93.5	12.5	0.7		W 21	S 2	-104.181	-7.455	418.666	H11G	他	963	
第 76 図	2	SGD34新路	中層部	木製品	板材		41.2	12.8	0.7		W 21	S 2	-103.376	-7.669	418.769	H11G	他	702	
第 76 図	3	SGD34新路	中層部	木製品	板材		55.0	8.2	0.5		W 21	S 2	-102.729	-7.209	418.881	H11G	他	664	
第 76 図	4	SGD34新路	下層部	木製品	板材		74.8	8.6	0.7		W 21	S 2	-104.371	-7.581	418.642	H11G	他	978	
第 77 図	1	SGD34新路	中層部	木製品	下駄		16.7	8.9	1.8		W 21	S 2	-103.597	-7.825	418.826	H11G	他	667	
第 77 図	2	SGD34新路	下層部	木製品	下駄		18.9	20.2	4.4		W 21	S 2	-104.225	-7.548	418.785	H11G	他	930	
第 78 図	1	SGD112	中層部	木製品	板材		62.4	6.3	1.1		W 22	S 2	-107.913	-5.741	418.528	H14G	他	1189	
第 78 図	2	SGD112	中層部	木製品	桶側板		36.9	8.2	1.1		W 22	S 2	-108.409	-6.844	418.463	H14G	他	1202	
第 78 図	3	SGD34新路	中層部	木製品	角柱材		29.3	12.0	8.9		W 22	S 2	-107.596	-7.393	418.403	H14G	他	1243	
第 79 図	1	SGD34旧路	中層部	木製品	折敷底板		32.8	13.8	0.7		W 20	S 2	-95.316	-6.038	419.149	H11G	他	849	補修孔
第 79 図	2	SGD34旧路	下層部	木製品	箸		23.5	0.8	0.6		W 17	S 2	-81.038	-6.695	418.799	H11G	他	738	
第 79 図	3	SGD34旧路	中層部	木製品	箸		21.2	0.8	0.6		W 17	S 2	-82.034	-6.966	418.844	H11G	他	628	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 79 図	4	SGD34旧路	中層部	木製品	箸		0.7	13.1	0.4		W 17	S 2	-82.499	-7.429	419.380	H11G	他	603	
第 79 図	5	SGD34旧路	中層部	木製品	板材		17.4	1.5	0.7		W 17	S 2	-82.979	-6.428	419.188	H11G	他	624	
第 79 図	6	SGD34旧路	中層部	木製品	加工木		7.0	0.9	0.4		W 17	S 2	-80.557	-7.600	419.515	H11G	他	573	
第 79 図	7	SGD34旧路	下層部	木製品	仏具頭飾り		9.5	3.3	3.4		W 14	S 1				H9G	他	374	4面に梵字墨書
第 79 図	8	SGD34旧路	中層部	木製品	独楽サイコロ		2.3	2.0	1.9		W 16	S 2	-78.154	-7.557	419.700	H11G	他	567	6面に1～6の墨点
第 80 図	1	SGD34旧路	中層部	木製品	下駄		18.1	9.3	3.9		W 16	S 2	-76.235	-6.926	419.221	H11G	他	637	
第 80 図	2	SGD34旧路	中層部	木製品	角材(杭か)		14.2	3.3	2.6		W 13	S 2	-63.009	-5.058	419.850	H9G	他	200	
第 80 図	3	SGD34旧路	下層部	木製品	俎板か		31.7	5.6	0.8		W 20	S 2	-95.046	-5.744	418.896	H11G	他	851-1	刃物傷
第 80 図	4	SGD34旧路	中層部	木製品	曲輪側板		25.2	5.3	0.7		W 13	S 2	-63.636	-5.455	419.585	H9G	他	212	
第 80 図	5	SGD34旧路	中層部	木製品	箱縁板か		21.0	3.0	1.0		W 18	S 2	-86.204	-6.943	419.309	H11G	他	574	
第 81 図	1	SGD34旧路	中層部	木製品	杭		43.5	3.3	3.5		W 17	S 2	-80.151	-7.762	419.215	H11G	他	644	
第 81 図	2	SGD34旧路	下層部	木製品	杭		50.5	3.7	4.0		W 19	S 2	-91.089	-6.304	418.692	H11G	他	841	
第 81 図	3	SGD34旧路	中層部	木製品	板材		116.4	10.7	1.4		W 16	S 2	-78.707	-6.706	419.164	H11G	他	648	
第 82 図	1	SGD34旧路	上層部	木製品	箸		15.0	0.6	0.5		W 19	S 1	-94.003	-4.999	419.210	H11G	他	846	
第 82 図	2	SGD34旧路	下層部	木製品	箸		13.5	0.7	0.4		W 18	S 2	-85.461	-6.911	418.843	H11G	他	727	
第 82 図	3	SGD34旧路	中層部	木製品	箸		14.3	0.8	0.5		W 19	S 2	-91.696	-6.365	418.915	H11G	他	838	
第 82 図	4	SGD34旧路	中層部	木製品	箸		11.3	0.4	0.4		W 16	S 2	-75.780	-6.997	419.663	H11G	他	626	
第 82 図	5	SGD34旧路	下層部	木製品	箸		6.4	0.7	0.5		W 18	S 2	-85.442	-5.853	418.923	H11G	他	762	
第 82 図	6	SGD34旧路	中層部	木製品	箸		7.7	0.6	0.4		W 18	S 2	-88.269	-6.525	418.893	H11G	他	625	
第 82 図	7	SGD34旧路	中層部	木製品	板材		19.2	1.2	0.1		W 19	S 2	-92.279	-6.534	418.966	H11G	他	835	
第 82 図	8	SGD34旧路	中層部	木製品	桶底板		22.9	7.2	1.2		W 14	S 2	-69.344	-7.296	419.903	H9G	他	173	
第 82 図	9	SGD34旧路	下層部	木製品	漆椀破片	2種	2.7	3.6	0.6		W 19	S 2	-91.713	-5.866	418.866	H11G	他	839	
第 82 図	10	SGD34旧路	中層部	木製品	刀形		1.7	9.4	0.4		W 16	S 2	-78.087	-7.085	419.777	H11G	他	566	
第 82 図	11	SGD34旧路	中層部	木製品	漆皿ないし蓋		10.2	6.9	2.7		W 13	S 2	-63.321	-5.423	419.526	H9G	他	227	
第 82 図	12	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種	2.5	6.9	0.3		W 16	S 2	-76.074	-7.342	419.462	H11G	他	630	
第 82 図	13	SGD34旧路	中層部	木製品	小判形円板		4.4	1.9	0.3		W 16	S 2	-79.755	-7.052	419.416	H11G	他	683	
第 82 図	14	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種B類		14.0	5.2		W 19	S 2	-92.005	-6.348	418.862	H11G	他	837	
第 82 図	15	SGD34旧路	中層部	木製品	曲輪底板		15.2	4.0	0.3		W 17	S 2	-84.256	-7.378	419.411	H11G	他	604	
第 82 図	16	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種B類	8.7	4.3	0.8		W 17	S 2	-80.315	-7.794	419.633	H11G	他	559	
第 82 図	17	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種A類	16.4	7.4	8.8		W 16	S 2	-76.781	-6.773	419.188	H11G	他	633	
第 83 図	1	SGD34旧路	下層部	木製品	漆椀	2種A類	15.2	15.2	9.8		W 14	S 1				H9G	他	373	
第 83 図	2	SGD34旧路	上層部	木製品	漆椀	2種A類	16.2	7.2	9.5		W 19	S 2	-94.880	-5.711	419.081	H11G	他	844	
第 83 図	3	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種A類	14.9	14.0	6.0		W 18	S 2	-89.074	-6.671	419.146	H11G	他	592	
第 83 図	4	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種A類	13.9	8.2	8.8		W 16	S 2	-77.414	-7.528	419.592	H11G	他	588	
第 84 図	1	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種A類	20.5	8.0	10.1		W 20	S 2	-95.202	-5.440	419.171	H11G	他	850	
第 84 図	2	SGD34旧路	中層部	木製品	漆椀	2種A類	14.0	6.9	8.6		W 16	S 2	-76.485	-7.075	419.173	H11G	他	638	
第 84 図	3	SGD34旧路	中層部	木製品	俎板か		14.9	10.1	0.6		W 17	S 2	-83.308	-7.839	419.482	H11G	他	606	刃物傷
第 84 図	4	SGD34旧路	中層部	木製品	角材		14.7	4.6	2.3		W 17	S 2	-84.045	-7.093	419.017	H11G	他	614	
第 84 図	5	SGD34旧路	下層部	木製品	角材		11.1	6.7	3.9		W 20	S 2	-95.046	-5.744	418.896	H11G	他	851-2	
第 85 図	1	SGD34	中層部	木製品	鍋蓋		15.2	17.7	5.3		W 14	S 2	-65.857	-6.036	419.522	H9G	他	224	
第 85 図	2	SGD34	下層部	木製品	鉈台		20.3	12.4	11.5		W 12	S 1				H8G	他	1600	漆付着
第 86 図	1	SGD34	中層部	木製品	人型		20.5	1.5	0.3		W 12	S 1	-57.700	-3.812	419.608	H8G	他	142	刃物傷
第 86 図	2	SGD34	中層部	木製品	ヘラか		9.9	2.0	1.1		W 13	S 1	-62.254	-4.711	419.530	H9G	他	233	
第 86 図	3	SGD34	中層部	木製品	箸		26.0	0.7	0.7		W 15	S 2	-71.812	-8.443	419.600	H9G	他	163	サワラ
第 86 図	4	SGD34	下層部	木製品	箸		20.0	0.7	0.5		W 13	S 1	-64.495	-4.978	419.593	H9G	他	252	ヒノキ
第 86 図	5	SGD34	下層部	木製品	箸		16.1	1.0	0.7		W 13	S 2	-63.091	-5.045	419.387	H9G	他	244	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 86 図	6	SGD34	中層部	木製品	箸		11.2	0.6	0.3		W 14	S 2	-69.370	-6.251	419.641	H9G	他	196	スギ
第 86 図	7	SGD34	中層部	木製品	柄杓柄か		20.6	2.0	1.1		W 13	S 2	-63.385	-5.623	419.610	H9G	他	207	
第 86 図	8	SGD34	中層部	木製品	加工木		23.8	2.3	1.2		W 14	S 2	-65.484	-6.028	419.574	H9G	他	225	
第 86 図	9	SGD34	中層部	木製品	折敷縁		22.9	2.5	1.6		W 13	S 2	-63.683	-5.426	419.610	H9G	他	211	モミ属
第 86 図	10	SGD34	下層部	木製品	杭		31.6	2.8	1.7		W 15	S 2	-70.817	-6.446	419.497	H9G	他	349	
第 86 図	11	SGD34	下層部	木製品	杭		33.6	2.7	2.2		W 14	S 2	-68.464	-6.083	419.243	H9G	他	372	
第 87 図	1	SGD34	下層部	木製品	曲輪底板		13.1	3.6	0.5		W 13	S 2	-64.303	-5.225	419.353	H9G	他	251	スギ
第 87 図	2	SGD34	中層部	木製品	ヘラ		3.8	16.2	0.6		W 13	S 1	-63.249	-4.744	419.566	H9G	他	219	針葉樹
第 87 図	3	SGD34	中層部	木製品	板		13.7	4.0	0.4		W 12	S 1	-55.221	-4.257	420.326	H8G	他	70	
第 87 図	4	SGD34	中層部	木製品	柄杓底板		11.7	5.5	0.5		W 12	S 1	-55.004	-4.458	420.376	H8G	他	71	
第 87 図	5	SGD34	中層部	木製品	削りカス		10.2	7.5	3.8		W 14	S 2	-65.663	-5.425	419.470	H9G	他	236	
第 87 図	6	SGD34	中層部	木製品	楔		8.1	4.4	1.9		W 14	S 2	-66.196	-5.824	419.765	H9G	他	206	針葉樹
第 87 図	7	SGD34	中層部	木製品	楔		10.6	6.0	2.1		W 14	S 2	-65.879	-5.198	419.578	H9G	他	222	針葉樹
第 87 図	8	SGD34	下層部	木製品	木片		12.2	4.2	1.9		W 14	S 2	-66.220	-5.503	419.388	H9G	他	316	
第 87 図	9	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種	2.9	5.5	2.0		W 11	S 1	-54.311	-3.435	419.765	H8G	他	73	
第 87 図	10	SGD34	中層部	木製品	角材		5.0	5.4	3.8		W 13	S 2	-62.602	-5.542	419.964	H9G	他	195	
第 87 図	11	SGD34	中層部	木製品	折敷底板		32.5	8.7	0.5		W 12	S 1	-56.965	-3.958	419.603	H8G	他	106	井桁刻
第 88 図	1	SGD34	下層部	木製品	底板未製品		11.7	10.3	0.1		W 13	S 1	-60.899	-4.751	419.421	H9G	他	255	ヒノキ
第 88 図	2	SGD34	下層部	木製品	底板未製品		8.3	9.1	0.4		W 13	S 2	-64.506	-5.262	419.236	H9G	他	280	
第 88 図	3	SGD34	下層部	木製品	板材		8.6	7.7	2.2		W 13	S 2	-64.191	-5.016	419.516	H9G	他	250	スギ
第 88 図	4	SGD34	下層部	木製品	板材		9.0	5.2	2.1		W 15	S 2	-72.285	-6.366	419.440	H9G	他	358	
第 88 図	5	SGD34		木製品	板材		15.7	6.5	1.6		W 12	S 1				H8G	他	1605	
第 88 図	6	SGD34	中層部	木製品	折敷		32.2	7.7	0.6		W 12	S 1	-58.507	-4.938	419.786	H8G	他	75	刃物傷
第 88 図	7	SGD34	中層部	木製品	底板未製品		23.9	23.0	0.5		W 13	S 1	-62.857	-4.851	419.453	H9G	他	240	ヒノキ
第 89 図	1	SGD34	中層部	木製品	杭		14.9	3.1	2.3		W 13	S 2	-63.685	-5.427	419.643	H9G	他	210	
第 89 図	2	SGD34	中層部	木製品	漆塗蓋か		7.1	6.8	2.5		W 11	S 1	-54.848	-3.669	419.472	H8G	他	74	
第 89 図	3	SGD34	中層部	木製品	漆塗蓋か		6.8	6.5	1.3		W 12	S 1	-55.772	-3.834	419.667	H8G	他	66	
第 89 図	4	SGD34	下層部	木製品	杭		13.5	4.8	4.0		W 14	S 2	-65.899	-5.285	419.495	H9G	他	278-2	
第 89 図	5	SGD34	下層部	木製品	松皮		17.6	7.3	2.1		W 13	S 2	-64.854	-5.288	419.370	H9G	他	283	
第 89 図	6	SGD34	下層部	木製品	杭		29.5	4.8	1.0		W 15	S 2	-70.154	-6.349	419.508	H9G	他	347	
第 89 図	7	SGD34	下層部	木製品	杭		70.3	8.5	6.7		W 13	S 2	-64.310	-5.363	419.847	H9G	他	279	
第 90 図	1	SGD34	下層部	木製品	下駄		17.6	9.5	2.9		W 15	S 2	-73.230	-6.703	419.382	H9G	他	241	クリ
第 90 図	2	SGD34	中層部	木製品	下駄		17.6	7.7	2.9		W 15	S 2	-73.476	-6.871	419.464	H9G	他	239	
第 90 図	3	SGD34	中層部	木製品	下駄		18.2	10.6	7.1		W 12	S 1	-56.402	-3.826	419.450	H8G	他	141	
第 90 図	4	SGD34	中層部	木製品	下駄		20.4	10.9	2.7		W 12	S 1	-56.296	-4.198	419.796	H8G	他	144	補修痕
第 91 図	1	SGD34	中層部	木製品	瓢箪		5.5	4.9	0.5		W 13	S 1	-62.413	-4.837	419.576	H9G	他	217	
第 91 図	2	SGD34	下層部	木製品	小判型円板		4.2	3.3	0.3		W 12	S 1	-58.006	-4.309	419.397	H8G	他	63	
第 91 図	3	SGD34	中層部	木製品	加工木		5.7	1.6	1.6		W 12	S 1	-55.159	-3.779	419.402	H8G	他	137	
第 91 図	4	SGD34	下層部	木製品	櫛		4.8	2.6	1.3		W 12	S 1	-55.280	-4.006	419.343	H8G	他	159	
第 91 図	5	SGD34	中層部	木製品	櫛		4.8	7.8	1.2		W 12	S 1	-56.052	-3.703	419.451	H8G	他	135	
第 91 図	6	SGD34	中層部	木製品	漆箱縁		1.1	24.6	0.9		W 14	S 2	-68.128	-7.437	419.450	H9G	他	186	ヒノキ
第 91 図	7	SGD34	中層部	木製品	瓢箪		7.1	7.8	0.9		W 12	S 1	-57.495	-4.134	419.627	H8G	他	79	
第 91 図	8	SGD34	中層部	木製品	桶の箍締め杵		6.0	38.3	3.5		W 13	S 1	-62.393	-4.688	419.573	H9G	他	216	広葉樹
第 91 図	9	SGD34新路	下層部	木製品	板材		72.0	18.2	1.7		W 21	S 2	-103.925	-7.622	418.782	H11G	他	944	
第 92 図	1	SGD34		木製品	箸		26.2	0.9	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-1	
第 92 図	2	SGD34		木製品	箸		26.7	0.7	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-2	
第 92 図	3	SGD34		木製品	箸		23.1	0.7	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-3	

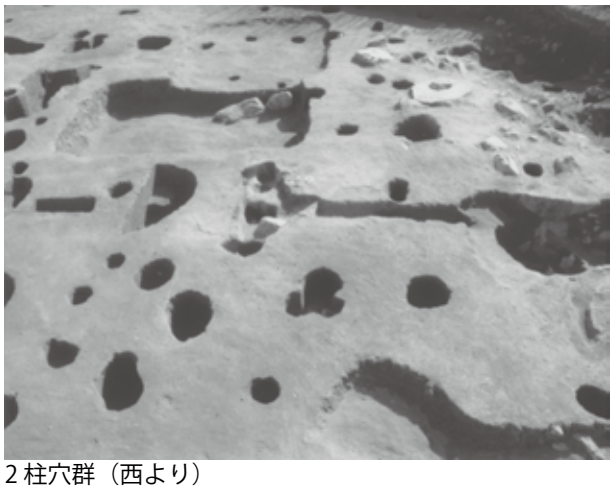
図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 92 図	4	SGD34		木製品	箸		20.7	0.8	0.6		W 12	S 1				H8G	他	1604-4	
第 92 図	5	SGD34		木製品	箸		20.7	0.8	0.4		W 12	S 1				H8G	他	1604-5	
第 92 図	6	SGD34		木製品	箸		24.6	0.7	0.4		W 12	S 1				H8G	他	1604-6	
第 92 図	7	SGD34		木製品	箸		23.1	0.9	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-7	
第 92 図	8	SGD34		木製品	箸		13.9	0.6	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-8	
第 92 図	9	SGD34		木製品	箸		12.8	0.7	0.6		W 12	S 1				H8G	他	1604-9	
第 92 図	10	SGD34		木製品	箸		17.7	0.6	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-10	
第 92 図	11	SGD34		木製品	箸		8.8	1.2	0.5		W 12	S 1				H8G	他	1604-11	
第 92 図	12	SGD34	中層部	木製品	箸		26.9	0.8	0.1		W 12	S 1	-57.213	-3.639	419.652	H8G	他	143	
第 92 図	13	SGD34		木製品	楊枝		8.2	0.6	0.3		W 12	S 1				H8G	他	1604-12	
第 92 図	14	SGD34	中層部	木製品	竹籤		22.8	0.6	0.1		W 15	S 2	-71.044	-8.008	419.444	H9G	他	191	
第 92 図	15	SGD34	中層部	木製品	曲輪側板		25.1	4.8	0.1		W 14	S 2	-69.779	-8.160	419.426	H9G	他	188	
第 92 図	16	SGD34	中層部	木製品	卸板		26.5	3.9	1.5		W 14	S 2	-65.193	-5.805	419.556	H9G	他	221	針葉樹+イネ科タケ亜科
第 93 図	1	SGD34	中層部	木製品	板		35.8	10.5	0.2		W 13	S 2	-64.583	-7.217	419.786	H9G	他	187	サワラ
第 93 図	2	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種B類	14.0	7.4	6.0		W 13	S 1	-61.813	-4.811	419.358	H9G	他	167	
第 93 図	3	SGD34	中層部	木製品	漆皿	2種C類	10.4	6.9	2.6		W 14	S 2	-65.846	-7.264	419.942	H9G	他	171	ムクロジ
第 93 図	4	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種A類か					W 13	S 2	-64.508	-5.370	419.357	H9G	他	274	
第 93 図	5	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種A類か	16.0		6.4		W 11	S 1	-54.893	-3.714	419.455	H8G	他	161	
第 93 図	6	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類か	16.8	16.8	7.5		W 12	S 1	-56.133	-3.693	419.484	H8G	他	136	
第 94 図	1	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種A類か	17.0	17.0	6.1		W 13	S 1	-64.442	-4.990	419.449	H9G	他	275	
第 94 図	2	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類か	15.8	15.8	6.6		W 12	S 1	-55.232	-3.930	420.111	H8G	他	69	
第 94 図	3	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種A類か	15.6		7.4		W 13	S 1	-63.264	-4.929	419.313	H9G	他	246	クリ
第 94 図	4	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類か		13.8	3.1		W 14	S 2	-65.946	-5.395	419.402	H9G	他	230	ハンノキ属ハンノキ亜属
第 94 図	5	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類か		11.6	6.9		W 12	S 1	-55.043	-3.624	420.182	H8G	他	72	
第 94 図	6	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類か					W 12	S 1	-56.739	-4.159	419.470	H8G	他	145	
第 94 図	7	SGD34	粘土層	木製品	漆椀	2種A類		14.9	10.5		W 12	S 1				H8G	他	1608	
第 94 図	8	SGD34		木製品	漆椀	2種A類	14.6	14.6	9.9		W 12	S 1				H8G	他	1610	
第 94 図	9	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種	1.7	4.6			W 12	S 1	-56.475	-3.749	420.124	H8G	他	61	
第 94 図	10	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種C類	14.3	14.3	5.0		W 15	S 2	-72.376	-6.898	419.336	H9G	他	247	
第 94 図	11	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種B類	15.0	15.0	5.9		W 13	S 2	-63.430	-5.118	419.309	H9G	他	245	
第 94 図	12	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種C類	13.6	6.2	6.0		W 12	S 1	-56.541	-3.740	419.455	H8G	他	140	
第 94 図	13	SGD34	下層部	木製品	漆椀	2種C類	16.3	7.0	5.6		W 13	S 1	-61.217	-4.738	419.427	H9G	他	248	
第 94 図	14	SGD34	下層部	木製品	椀荒形		12.5	7.0	4.0		W 11	S 1	-54.867	-3.737	419.530	H8G	他	157	
第 94 図	15	SGD34		木製品	漆椀	2種A類	12.2	6.3	8.1		W 12	S 1				H8G	他	1609	
第 94 図	16	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種A類	7.6	7.6	2.8		W 12	S 1	-55.491	-3.882	419.528	H8G	他	99	
第 94 図	17	SGD34		木製品	椀荒形		10.4	5.6	3.9		W 11	S 2				H8G	他	1602	
第 94 図	18	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種B類		8.0	1.0		W 12	S 1	-58.327	-4.737	419.754	H8G	他	62	
第 94 図	19	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種	5.1	2.0			W 12	S 1	-55.496	-3.791	419.440	H8G	他	139	
第 94 図	20	SGD34	中層部	木製品	漆椀	2種	4.4	4.9	2.0		W 12	S 1	-55.205	-3.504	419.555	H8G	他	133	
第 94 図	21	SGD34	中層部	木製品	漆椀	1種	11.4	3.5	2.1		W 12	N 1	-56.149	-4.234	419.722	H8G	他	152	
第 95 図	1	SGD56	覆土	木製品	鞍櫃被蓋側板		34.9	17.5	0.7		W 18	N 2	-85.902	10.400	419.409	H10G	他	441	漆塗り
第 95 図	2	SGD56	覆土	木製品	箸		17.1	0.8	0.5		W 18	N 1	-85.589	6.407	419.326	H10G	他	450	
第 95 図	3	SGD56底部	下層部	木製品	箸		17.8	0.8	0.5		W 18	N 2	-85.513	12.756	419.400	H10G	他	474	
第 95 図	4	SGD56下部	覆土	木製品	箸		16.7	0.9	0.5		W 18	NS 0	-85.847	1.984	419.337	H10G	他	407	
第 95 図	5	SGD56	下層部	木製品	箸		24.0	0.5	0.4		W 18	N 1	-85.482	9.525	419.852	H10G	他	485	
第 95 図	6	SGD56	覆土	木製品	人形脚部か		7.1	2.1	0.4		W 17	NS 0	-84.739	2.139	419.285	H10G	他	434	
第 95 図	7	SGD56	覆土	木製品	独楽		3.1	2.8	2.5		W 18	NS 0	-85.394	2.032	418.937	H10G	他	435	広葉樹
第 95 図	8	SGD56	底部粘土層	木製品	鍔形		7.7	5.3	0.9		W 18	NS 0				H10G	他	無番	
第 95 図	9	SGD56	覆土	木製品	下駄		19.5	9.6	3.8		W 18	NS 0	-85.818	2.886	419.060	H10G	他	440	広葉樹
第 95 図	10	SGD42	下層部	木製品	箸		4.8	0.8	0.4		W 16	S 3	-76.060	-12.427	419.497	H11G	他	524	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 96 図	1	SGD56	下層部	木製品	斎串		30.1	1.6	0.8		W 18	NS 0	-86.288	1.200	419.046	H10G	他	490	SGK145
第 96 図	2	SGD56	下層部	木製品	斎串		29.9	1.3	1.2		W 18	NS 0	-86.257	1.350	419.026	H10G	他	491	SGK145
第 96 図	3	SGD56	覆土	木製品	曲輪側板		22.9	5.6	0.2		W 18	NS 0	-85.858	4.504	419.395	H10G	他	445	
第 96 図	4	SGD56	覆土	木製品	人形脚部か		5.5	1.4	0.5		W 18	N 1	-85.637	7.662	419.228	H10G	他	443	
第 96 図	5	SGD56	覆土	木製品	木片		7.1	1.8	1.6		W 18	N 1	-85.927	7.927	419.157	H10G	他	463	
第 96 図	6	SGD56	下層部	木製品	漆椀	2種B類	2.4	11.7			W 18	S 1	-86.019	-4.096	419.008	H11G	他	903	
第 96 図	7	SGD56	覆土	木製品	漆椀	2種A類	14.3	7.6	10.5		W 17	N 1	-84.977	8.350	419.382	H10G	他	465	
第 96 図	8	SGD56	下層部	木製品	ホケイ脚部		6.2	4.5	1.9		W 18	NS 0	-86.472	2.209	419.381	H10G	他	405	
第 96 図	9	SGD56	底部	木製品	斎串		13.8	1.0	0.3		W 18	NS 0	-86.699	0.752	419.176	H10G	他	497	
第 96 図	10	SGD56	底部	木製品	漆椀	2種A類		13.2	8.8		W 18	N 2	-85.184	10.418	419.333	H10G	他	473	
第 97 図	1	SGD67	中層部	木製品	シャモジ		25.6	12.4	1.3		W 20	S 1	-92.399	-5.339	418.973	H11G	他	906	
第 97 図	2	SGD67	下層部	木製品	竹ヘラか		20.5	5.3	0.6		W 19	NS 0	-94.300	1.258	418.938	H12G	他	1060	
第 97 図	3	SGD67	下層部	木製品	下駄		16.9	10.1	2.9		W 19	S 1	-94.236	-0.877	418.927	H11G	他	908	
第 97 図	4	SGD67	下層部	木製品	角材		45.4	3.8	2.3		W 19	N 2	-93.630	10.143	419.119	H12G	他	1043	
第 97 図	5	SGD67	最下層	木製品	軸棒		34.3	7.5	2.3		W 19	NS 0	-92.767	2.709	419.197	H12G	他	1111	
第 98 図	1	SGD67	底部	木製品	下駄		18.3	8.3	2.0		W 19	N 1	-93.616	9.530	418.891	H12G	他	1109	
第 98 図	2	SGD67	下層部	木製品	漆椀	2種A類	12.7	6.0	7.7		W 19	NS 0	-94.237	1.136	418.966	H12G	他	1059	
第 98 図	3	SGD67	下層部	木製品	堅杵		90.4	10.8	10.7		W 20	S 2	-95.453	-7.527	418.967	H11G	他	865	
第 98 図	4	SGD67	中層部	木製品	加工木		82.6	7.5	3.8		W 19	NS 0	-94.621	1.256	419.372	H12G	他	1031	
第 99 図	1	SGD112	中層部	木製品	板材		90.3	3.6	1.2		W 22	S 2	-108.307	-6.115	418.392	H14G	他	1198	
第 99 図	2	SGD112	中層部	木製品	杭		53.9	10.6	11.1		W 22	S 2	-107.220	-7.670	418.520	H14G	他	1240	
第 99 図	3	SGD112	中層部	木製品	角材		64.5	5.8	5.8		W 22	S 1	-108.137	-4.956	418.529	H14G	他	1182	
第 99 図	4	SGD112	中層部	木製品	板材		32.6	14.7	1.1		W 22	N 1	-109.639	6.319	418.311	H13G	他	1341	
第 99 図	5	SGD112	下層部	木製品	角柱材か		21.0	9.5	8.8		W 22	S 1	-109.751	-1.052	418.429	H14G	他	1328	
第 100 図	1	SGD112	下層部	木製品	下駄		18.9	9.8	5.2		W 22	S 1	-108.454	-4.645	418.398	H14G	他	1307	
第 100 図	2	SGD112	下層部	木製品	箸		15.5	0.7	0.4		W 22	S 2	-107.321	-5.290	418.178	H14G	他	1299	
第 100 図	3	SGD112	中層部	木製品	箸		14.2	0.6	0.5		W 22	S 2	-108.294	-7.631	418.468	H14G	他	1232-2	
第 100 図	4	SGD112	中層部	木製品	箸		18.0	0.6	0.2		W 22	S 2	-107.306	-6.266	418.220	H14G	他	1284	
第 100 図	5	SGD112	中層部	木製品	箸		6.8	0.5	0.3		W 22	S 2	-107.402	-7.179	418.605	H14G	他	1158	
第 100 図	6	SGD112	中層部	木製品	箸		24.0		0.4		W 22	S 2	-108.294	-7.631	418.468	H14G	他	1232-1	
第 100 図	7	SGD112	中層部	木製品	折敷底板		23.9	4.2	0.4		W 22	S 2	-107.459	-7.679	418.652	H14G	他	1175	
第 100 図	8	SGD112	中層部	木製品	板材		27.3	9.7	0.5		W 22	S 2	-107.406	-7.463	418.541	H14G	他	1191	
第 100 図	9	SGD112	中層部	木製品	角材		10.7	6.5	3.5		W 23	N 5	-110.660	25.391	417.870	H13G	他	1393	
第 100 図	10	SGD112	中層部	木製品	角柱材		6.1	8.4	4.6		W 22	S 2	-107.930	-7.530	418.467	H14G	他	1246	
第 100 図	11	SGD112	下層部	木製品	板材		12.8	5.7	1.2		W 22	S 2	-108.486	-6.973	418.324	H14G	他	1291	
第 101 図	1	SGD112	中層部	木製品	漆椀	2種B類		7.2	6.2		W 22	N 1	-109.512	7.283	418.232	H13G	他	1342	
第 101 図	2	SGD112	下層部	木製品	漆椀	2種A類		7.7	8.1		W 22	S 1	-107.105	-3.275	418.396	H14G	他	1290	
第 101 図	3	SGD112	中層部	木製品	漆椀	2種A類		7.9	10.1		W 22	S 1	-107.259	-1.436	418.259	H14G	他	1286	
第 101 図	4	SGD112	中層部	木製品	漆椀	2種A類		8.1	3.6		W 22	N 4	-109.806	21.760	418.137	H13G	他	1365	
第 101 図	5	SGD112	中層部	木製品	折敷		30.1	29.3	3.1		W 23	N 4	-110.901	24.722	418.094	H13G	他	1379	
第 102 図	1	SGD112	礫層	木製品	巻桜皮		7.2	6.1	3.5		W 22	N 5	-109.432	25.989	417.910	H13G	他	1133	
第 102 図	2	SGD112	礫層	木製品	漆椀	2種A類		8.7	3.9		W 22	NS 0	-109.456	2.557	418.035	H13G	他	1338	
第 102 図	3	SGE05	下層部	木製品	桶底板		16.8	15.2	0.8		W 16	S 2	-77.178	-5.364	418.572	H11G	他	790	
第 102 図	3	SGE05	下層部	木製品	桶底板						W 16	S 2	-76.717	-5.087	418.611	H11G	他	791	
第 102 図	4	SGE05	中層部	木製品	竹ヘラか		11.0	3.4	0.4		W 16	S 2	-76.772	-5.122	418.907	H11G	他	786	
第 102 図	5	SGE05	下層部	木製品	楯		3.5	4.3	0.7		W 16	S 2	-77.103	-5.221	418.564	H11G	他	792	
第 102 図	6	SGE05	中層部	木製品	井戸枠板材か		34.4	24.6	3.3		W 16	S 2	-76.399	-5.456	419.443	H11G	他	774	

図版	遺物番号	遺構	層位・位置	種類	器種	類別	法量(cm)			残存	グリッド		位置(m)			注記番号			備考
							口径(縦)	底径(横)	高さ		EW	NS	X座標(EW)	Y座標(NS)	標高	年次	分	番号	
第 102 図	7	SGE05	中層部	木製品	箸		18.1	0.5	0.5		W 16	S 2	-77.006	-5.793	418.931	H11G	他	783	
第 103 図	1	SGE06	上層部	木製品	箸		10.4	0.7	0.6		W 16	S 1	-79.624	-4.629	419.335	H11G	他	817	
第 103 図	2	SGE06	中層部	木製品	板材		13.8	7.5	0.9		W 16	S 1	-78.959	-4.300	418.460	H11G	他	830	
第 103 図	3	SGE06	中層部	木製品	漆椀	1種	3.9	5.2	1.5		W 16	S 1	-78.960	-4.202	418.483	H11G	他	831	
第 103 図	4	SGE06	中層部	木製品	ホケイ側板か		33.7	1.8	0.4		W 16	S 1	-79.417	-4.302	418.627	H11G	他	821	
第 103 図	5	SGE06	中層部	木製品	ホケイ側板か		39.7	1.4	0.2		W 16	S 1	-79.505	-4.676	418.420	H11G	他	824	
第 103 図	6	SGE06	中層部	木製品	ホケイ側板か		46.7	2.4	0.3		W 16	S 1	-79.270	-3.896	418.541	H11G	他	822	
第 104 図	1	SGE06	上層部	木製品	ホケイ底部		28.4	35.4	1.5		W 16	S 1	-79.027	-3.468	419.487	H11G	他	809	「吉」墨書
第 104 図	2	SGP02	底部	木製品	板		16.1	6.5	0.5		W 9	N 1	-41.270	7.860	421.434	H7G	他	43	
第 104 図	3	SGP02	底部	木製品	巻桜皮		3.8	4.6	3.9		W 9	NS 0	-40.380	2.070	421.420	H7G	他	32	
第 104 図	4	SGP02	底部	木製品	加工木		15.6	2.1	1.8		W 9	NS 0				H7G	他	無番	
第 105 図	1	SGD34新路	中層	木製品	桶底		23.2	10.0	1.3		W 21	S 2	-104.042	-7.781	418.763	H11G	他	704	
第 105 図	2	SGD34旧路	中層	木製品	桶側板		17.0	4.2	1.2		W 18	S 2	-86.214	-6.710	419.277	H11G	他	615	
第 105 図	3	SGD34旧路	中層	木製品	桶側板		15.5	9.2	1.3		W 16	S 2	-76.607	-7.244	419.153	H11G	他	641	
第 105 図	4	SGD34旧路	中層	木製品	戸閉栓		11.9	4.1	2.8		W 16	S 2	-77.160	-6.824	419.132	H11G	他	642	
第 105 図	5	SGD34	中層	木製品	椀荒型	クリ	10.3	10.2	3.4		W 15	S 2	-70.987	-8.494	419.496	H9G	他	180	
第 105 図	6	SGD34旧路	下層	木製品	竪杵		32.2	4.9	4.0		W 17	S 2	-81.390	-6.608	418.969	H11G	他	739	
第 105 図	7	SGD67	下層	木製品	蒸篭底板		19.3	5.5	1.1		W 19	N 1	-92.915	9.533	418.988	H12G	他	1080	
第 105 図	8	SGD67	下層	木製品	板材		22.6	4.3	0.2		W 19	S 1	-94.132	-2.424	418.958	H11G	他	910	
第 105 図	9	SGD67	中層	木製品	栓		4.3	3.2			W 19	S 1	-94.887	-2.769	419.305	H11G	他	902	
第 105 図	10	SGD112	中層	木製品	桜皮	サクラ	9.4	3.9	1.6		W 22	S 2	-107.376	-5.210	418.417	H14G	他	1221	
第 105 図	11	SGE06	上層	木製品	ホケイ脚		12.9	2.3	3.0		W 16	S 1	-79.517	-4.490	419.218	H11G	他	815	黒漆塗

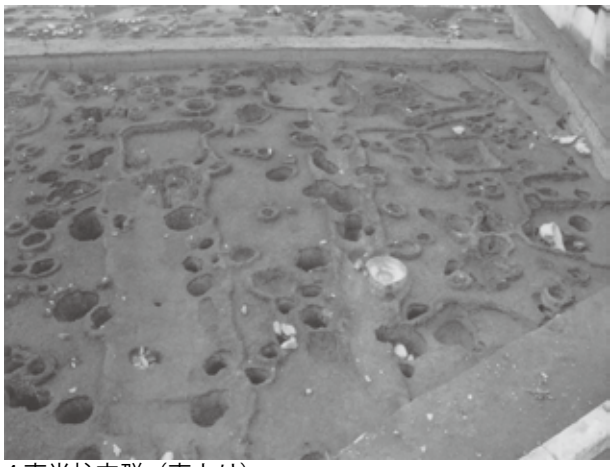
H4G 区

1 調査状況（南西より）


2 柱穴群（西より）

H5G 区

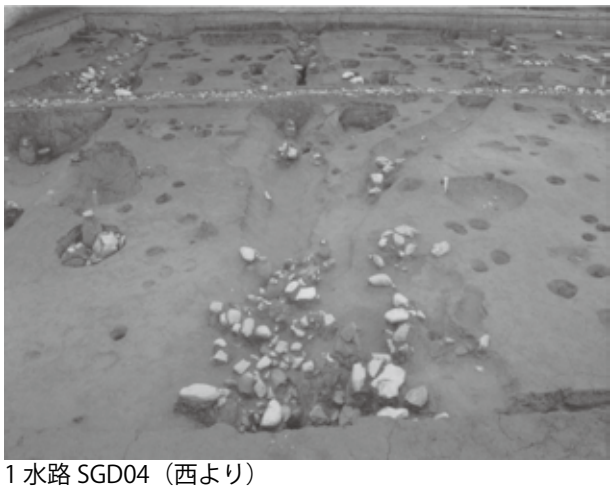
3 東半域全景（南東より）


4 東半柱穴群（東より）

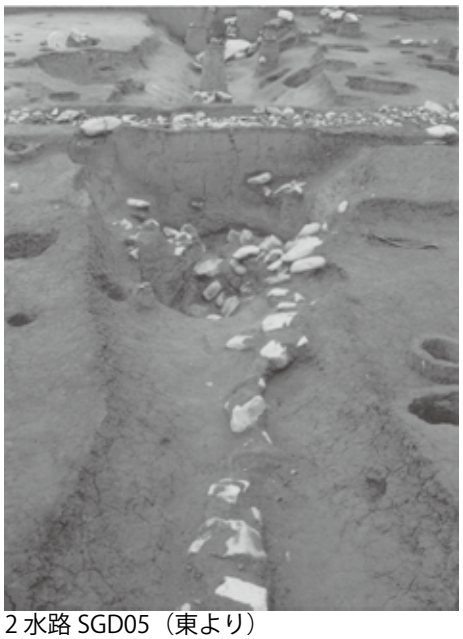
5 東半域全景（南より）

6 西半域全景（南より）

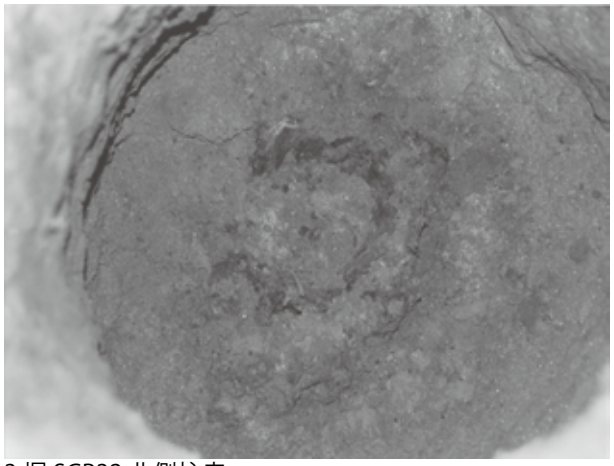
H5G 区



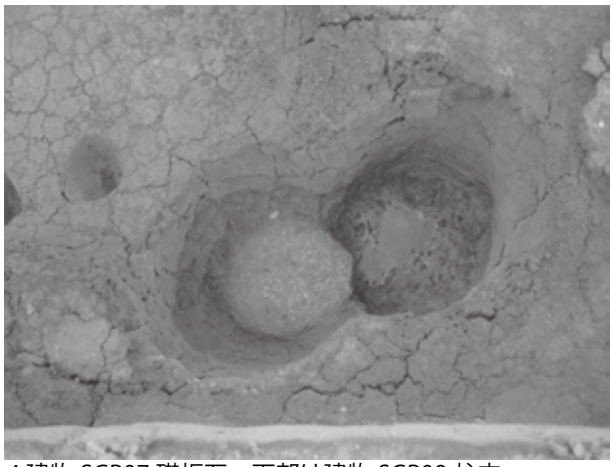
1 水路 SGD04（西より）



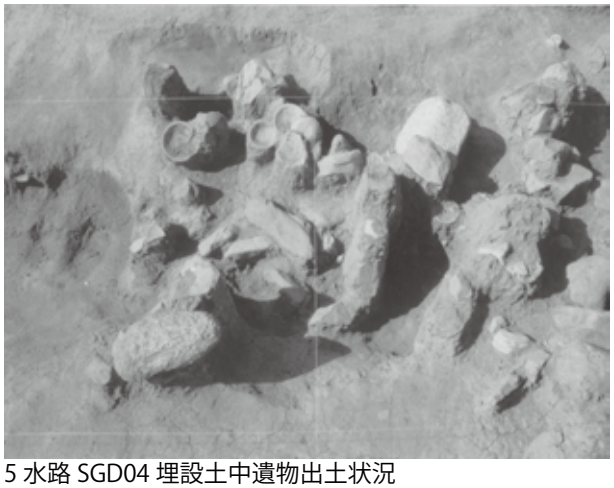
2 水路 SGD05（東より）



3 塀 SGB32 北側柱痕

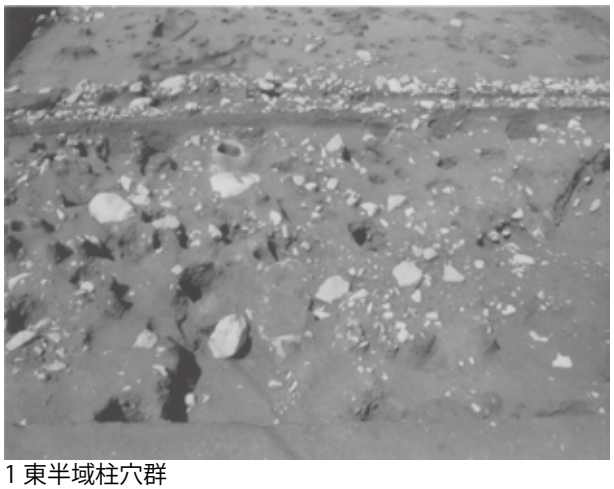


4 建物 SGB07 礎板石、下部は建物 SGB09 柱穴

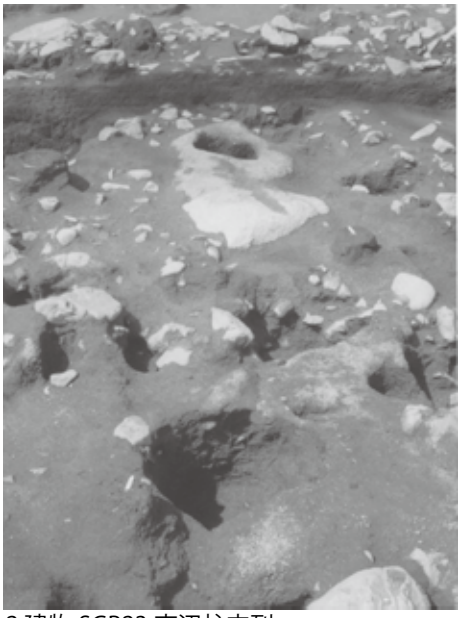


5 水路 SGD04 埋設土中遺物出土状況

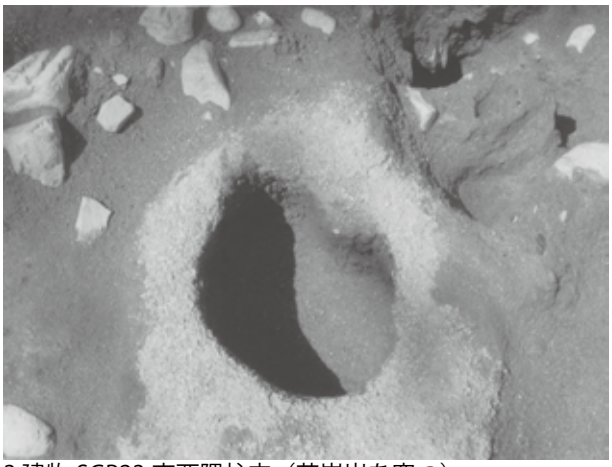
H6G 区



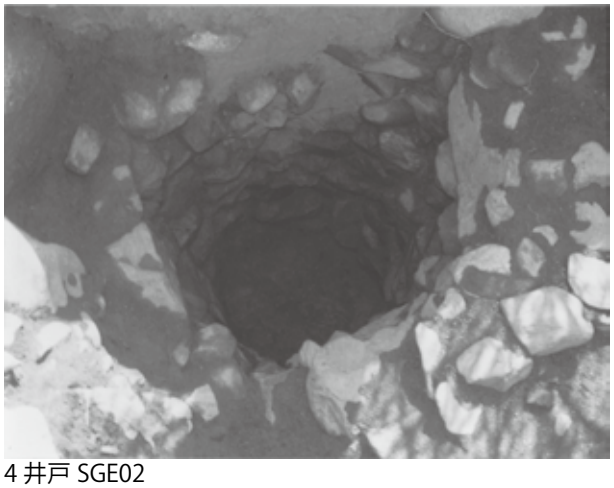
1 東半域柱穴群



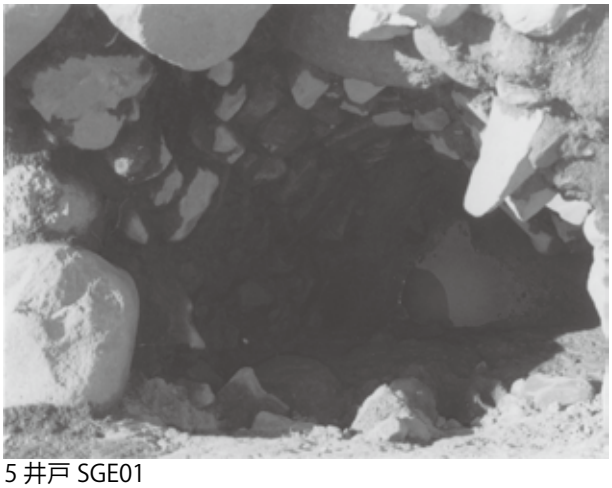
2 建物 SGB23 南辺柱穴列



3 建物 SGB23 南西隅柱穴（花崗岩を穿つ）



4 井戸 SGE02



5 井戸 SGE01

H7G 区

1 北半域全景（北西より）

2 南半域全景（北西より）

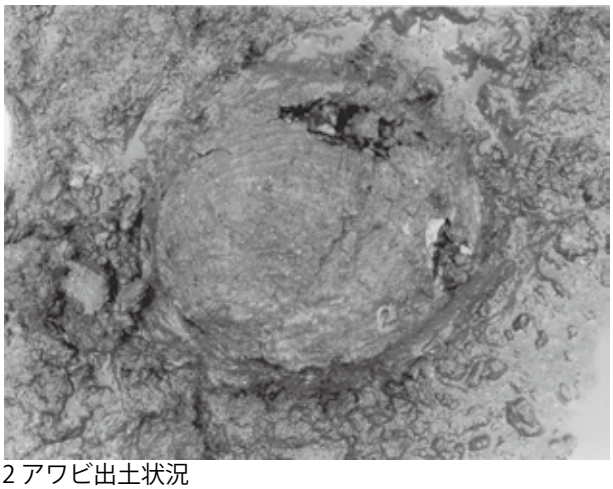
3 出水路 SGD33 閉塞施設

4 出水路 SGD33 堆積状況

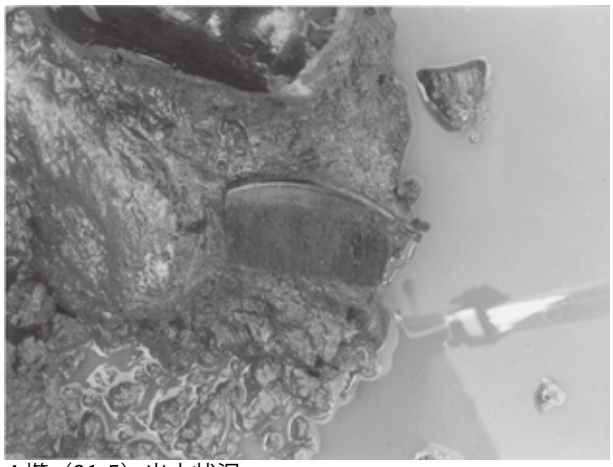
5 堀 SGP02 覆土堆積状況

H8G 区

1 水路 SGD34（東より）


2 アワビ出土状況

3 漆椀（94-7）出土状況


4 櫛（91-5）出土状況

5 下駄（90-4）出土状況

6 人形（86-1）出土状況

H9G 区

1 北半域全景（南東より）

2 南半域全景（南東より）

3 水路 SGD34 調査状況

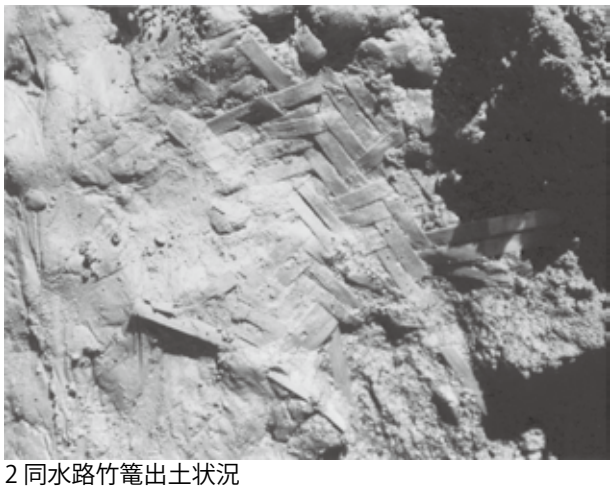
4 工房域土壙群（西より）

5 土壙 SGK147 底部桶据石群

6 井戸 SGE03

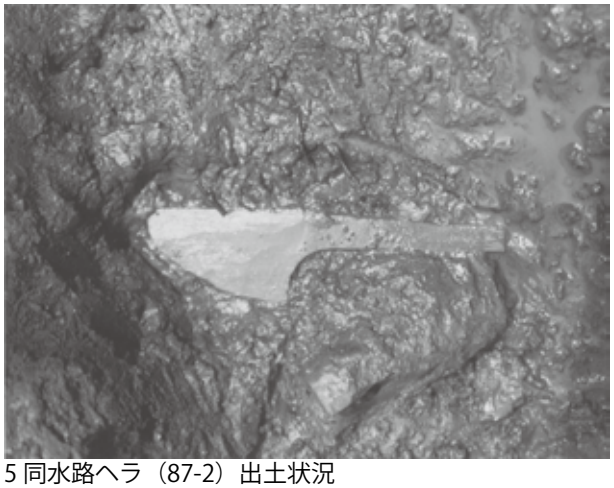
H9G 区

1 水路 SGD34 旧路内杭類出土状況


2 同水路竹篭出土状況

3 同水路茶釜（57-1）出土状況

4 同水路法具頭飾り（79-7）出土状況


5 同水路ヘラ（87-2）出土状況

H10G 区

1 調査区全景（南より）

2 鉄滓廃棄土壙 SGK148

3 堀 SGD56 覆土堆積状況

4 同堀漆椀（96-7）出土状況

5 同堀下駄（95-9）出土状況

6 同堀土師質皿（45-21,22,23）出土状況

H10G 区

1 土壙 SGK145 内削りカス

H11G 区

2 西半域水路 SGD34 新路（西より）

3 東半域水路 SGD34 旧路（東より）

4 堀 SGD56 南端部（南より）

5 井戸 SGD05（右）、SGE06（左）

H11G 区

1 井戸 SGE05 調査状況

2 桶据土壙 SGK187

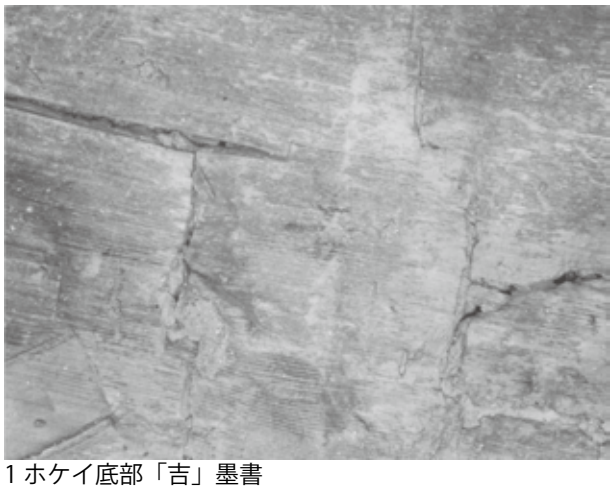
3 水路 SGD34 旧路漆椀（83-2）出土状況

4 同水路漆椀（83-4）出土状況

5 井戸 SGE06 遺物出土状況

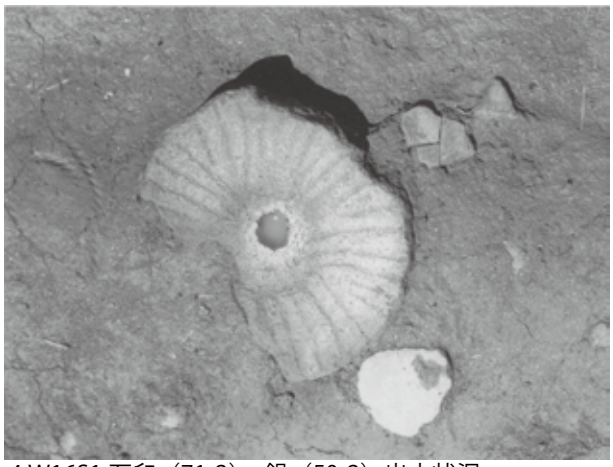
6 同井戸ホケイ底部（104-1）出土状況

H11G 区

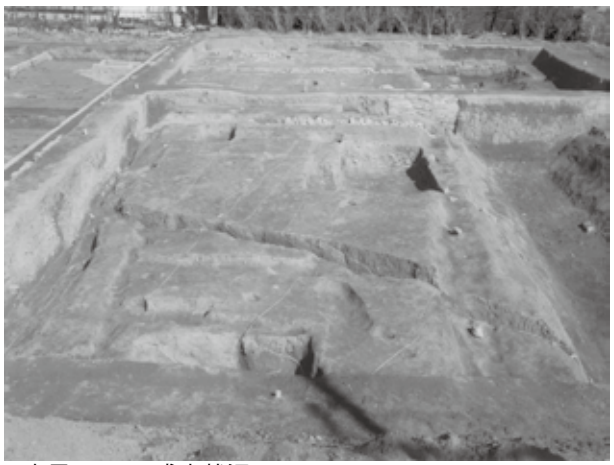

1 ホケイ底部「吉」墨書

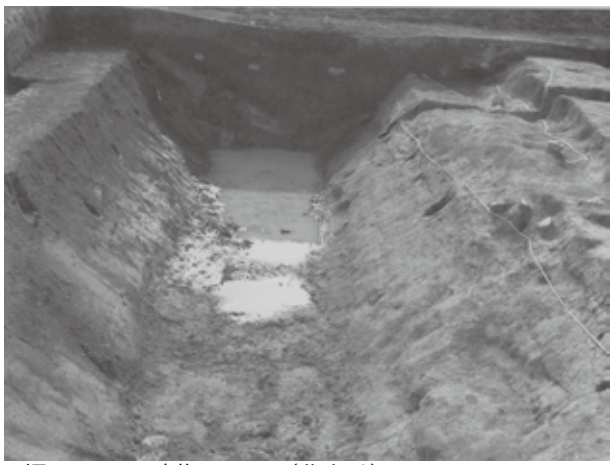
2 水路 SGD34 内竪杵（98-3）出土状況

3 同水路刀形（82-10）出土状況


4 W16S1 石臼（71-2）、鍋（50-2）出土状況

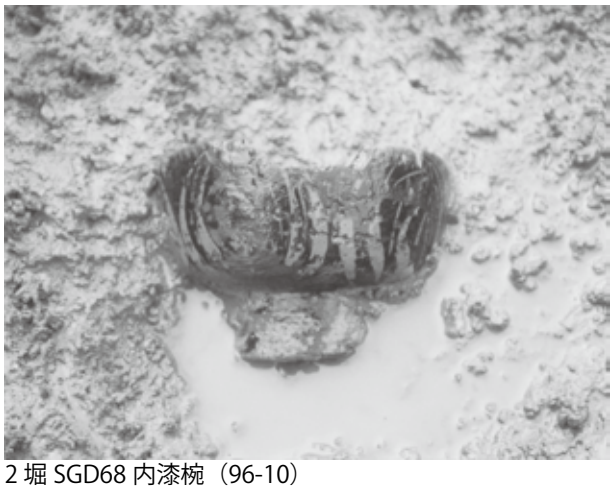
H12G 区


5 土塁 SGA02 盛土状況


6 堀 SGD68、建物 SGB51（北より）

H12G 区

1 水晶陽物？（71-6）出土状況



2 堀 SGD68 内漆椀（96-10）

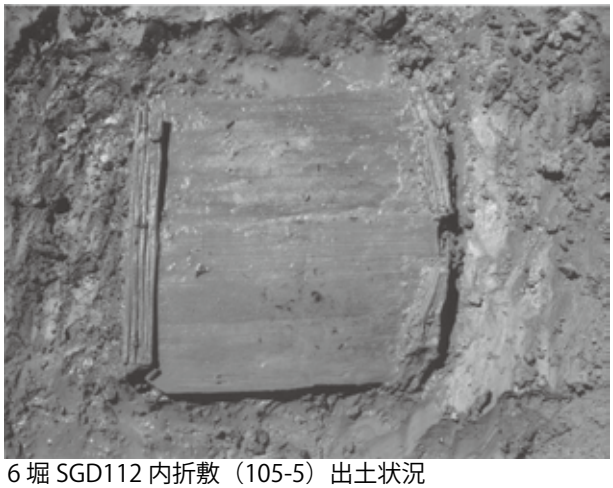
H13G 区

3 堀 SGD112 屈曲部（西より）

4 溝 SGD109,110,111（西より）

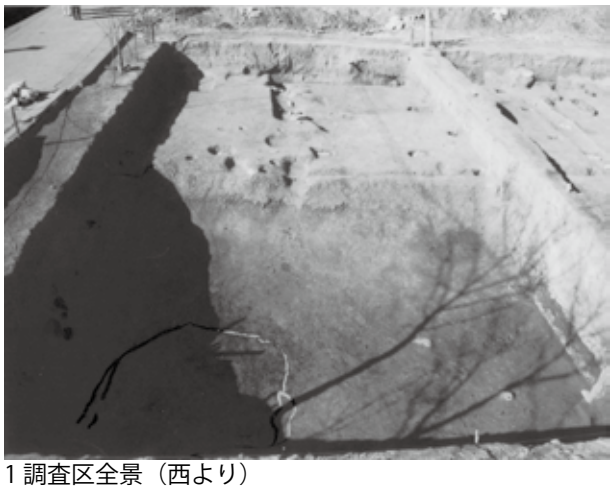
H14G 区

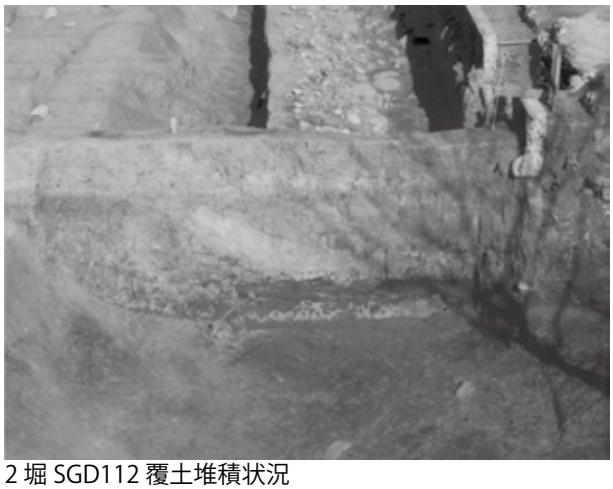
5 堀 SGD112 覆土上部礫群



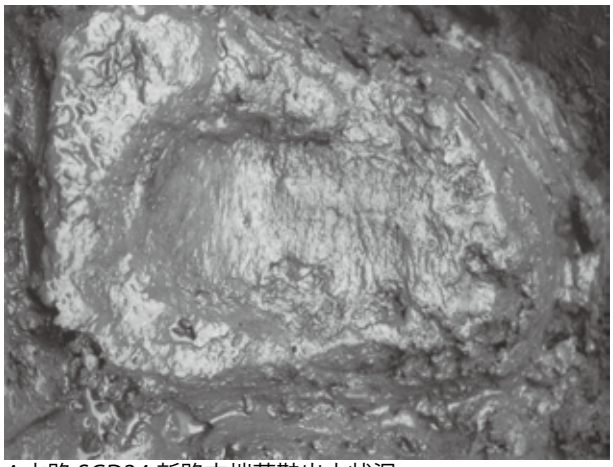
6 堀 SGD112 内折敷（105-5）出土状況

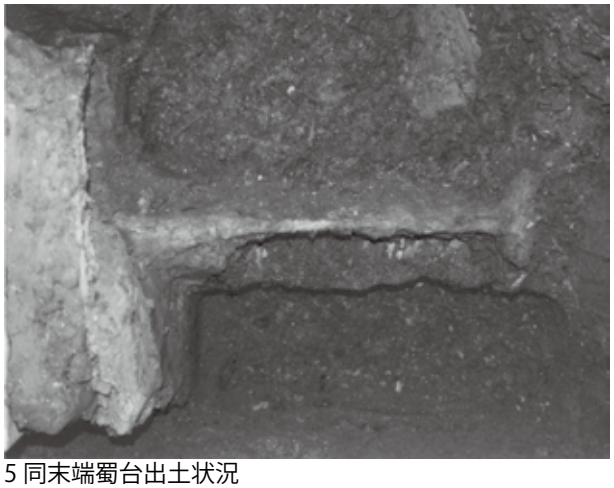
H14G 区

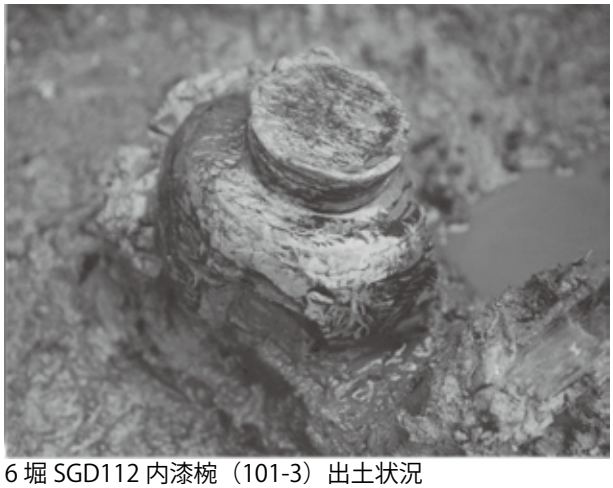

1 調査区全景（西より）


2 堀 SGD112 覆土堆積状況

3 同堀下駄（100-1）出土状況


4 水路 SGD34 新路末端草鞋出土状況


5 同末端蜀台出土状況


6 堀 SGD112 内漆椀（101-3）出土状況

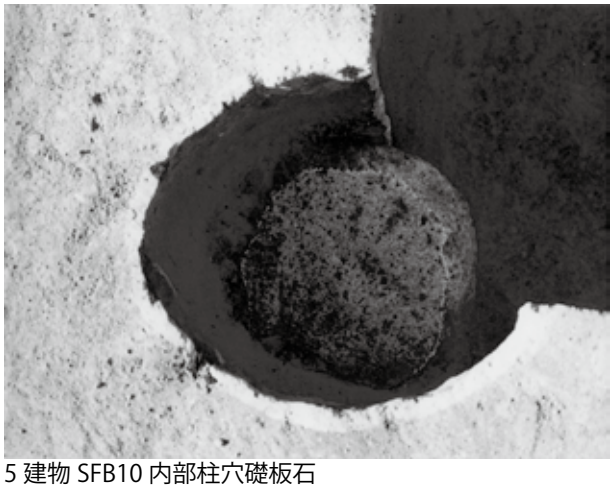
H8F・H15F・16F 区

1 SFD06（東より）

2 堀 SFD43 覆土堆積状況

3 H16F 区全景（南西より）

4 建物 SFB10（東より）


5 建物 SFB10 内部柱穴礎板石

6 建物 SFB10 側柱柱穴礎板石

45-13

44-27

46-6

44-22

45-19

44-18

44-16

42-6

45-21

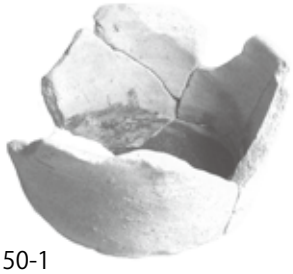
44-14

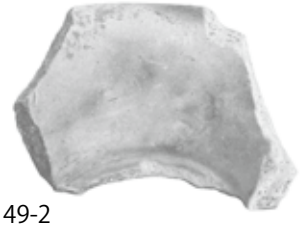
48-8

42-19

49-1

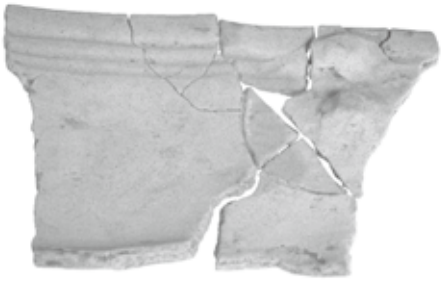
50-2


50-1


49-2

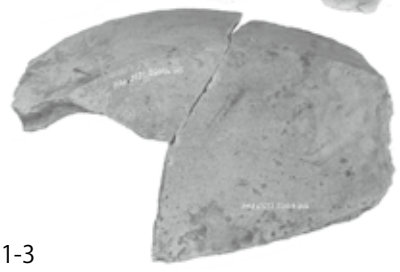
50-3

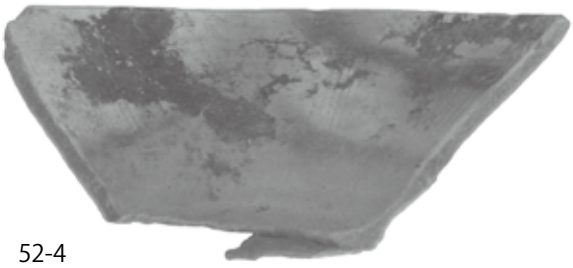
50-5


50-4

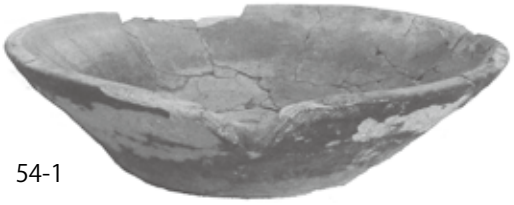
51-1

51-2

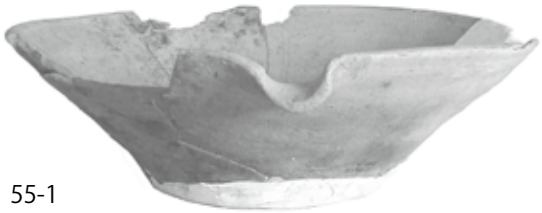

51-3



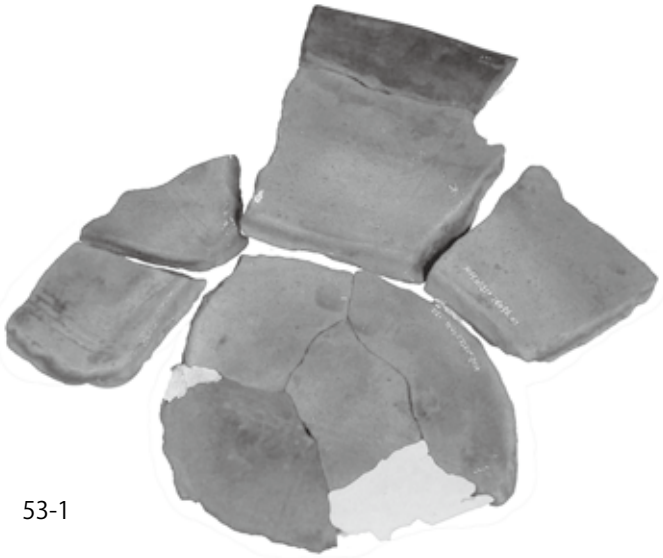
52-4



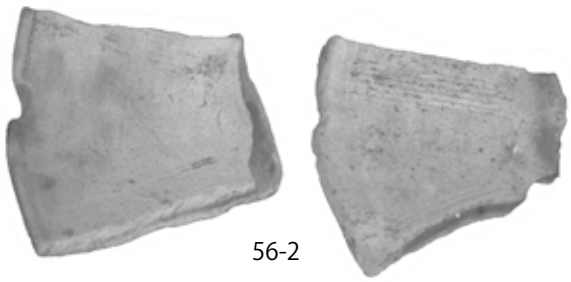
54-1



55-1



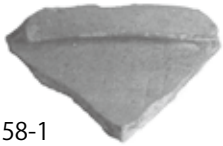
53-1



56-2

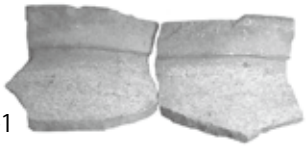
57-1

58-3



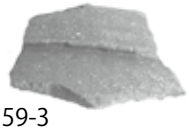
58-1

58-2

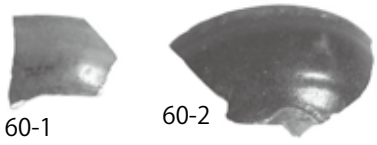


59-1

59-2



59-3

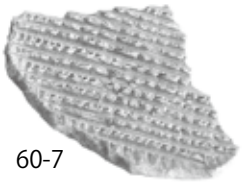

60-1 60-2

60-3

60-4

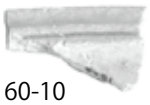
60-5

60-6


60-7

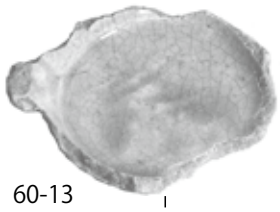
60-8

60-9


60-10

60-11

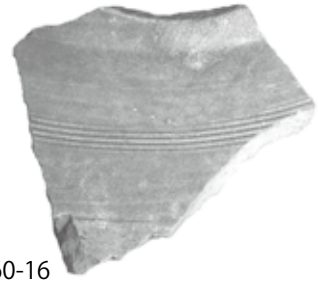
60-12


60-13

60-14

古瀬戸　鉢

60-15


60-16

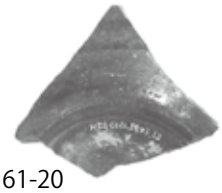
61-1

61-2

61-5

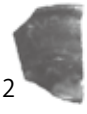
61-4

61-3


61-20

61-19

61-6


61-12

61-13

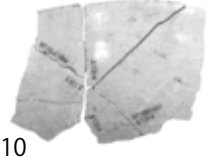
61-8,9

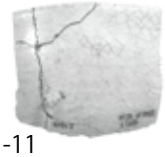
61-7

61-14

61-15

61-16

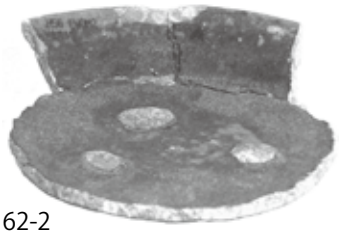

61-10

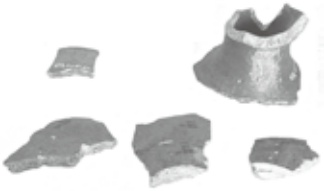

61-11

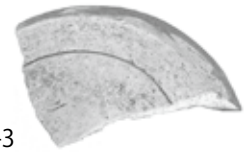
61-17

61-18

62-1

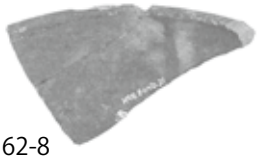

62-2

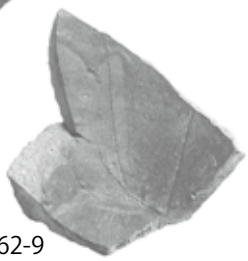

62-3


62-7

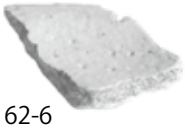
62-4

62-5


62-8


62-9

63-1

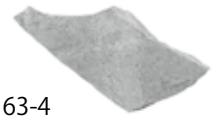

62-6

62-10

62-11

63-2

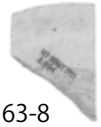
63-3


63-4

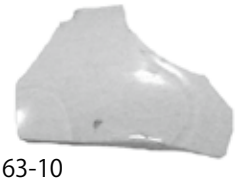
63-5

63-6

63-7


63-8

63-9


63-10

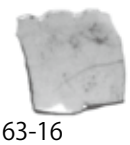
63-11

63-12

63-13

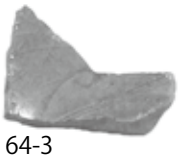
63-14

63-15

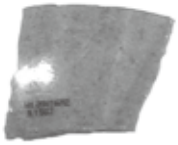

63-16

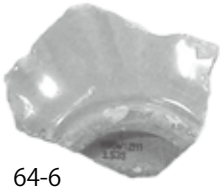
64-1

64-2

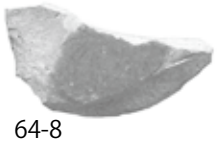

64-3

64-4


64-5


64-6

64-7

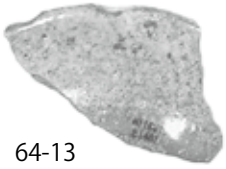

64-8

64-9

64-10

64-11

64-12

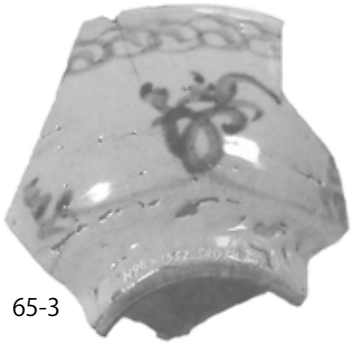

64-13

64-14

64-15

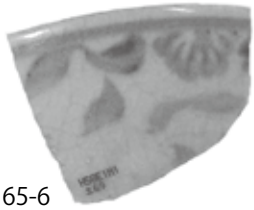
65-1

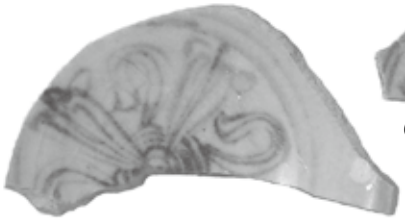
65-2


65-3

65-4

65-5

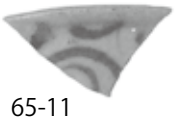

65-6


65-7

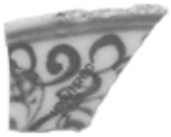
65-8

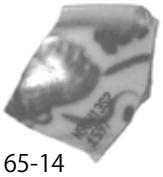
65-9

65-10

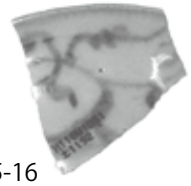

65-11

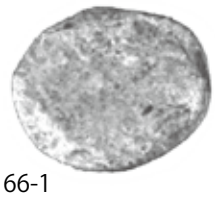
65-12


65-13


65-14

65-15


65-16


66-1

66-2

66-3

66-4

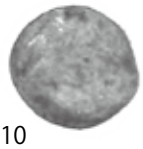
66-5

66-6

66-7

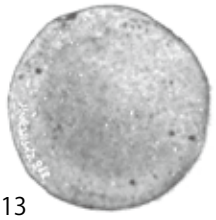
66-8

66-9


66-10

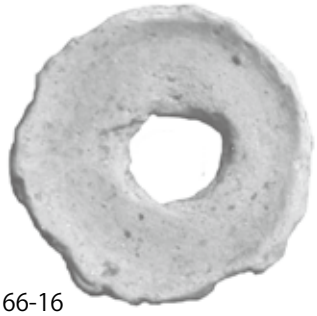
66-11

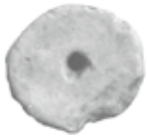
66-12

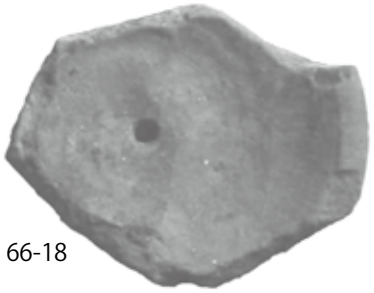

66-13

66-14

66-15


66-16


66-17


66-18

66-19

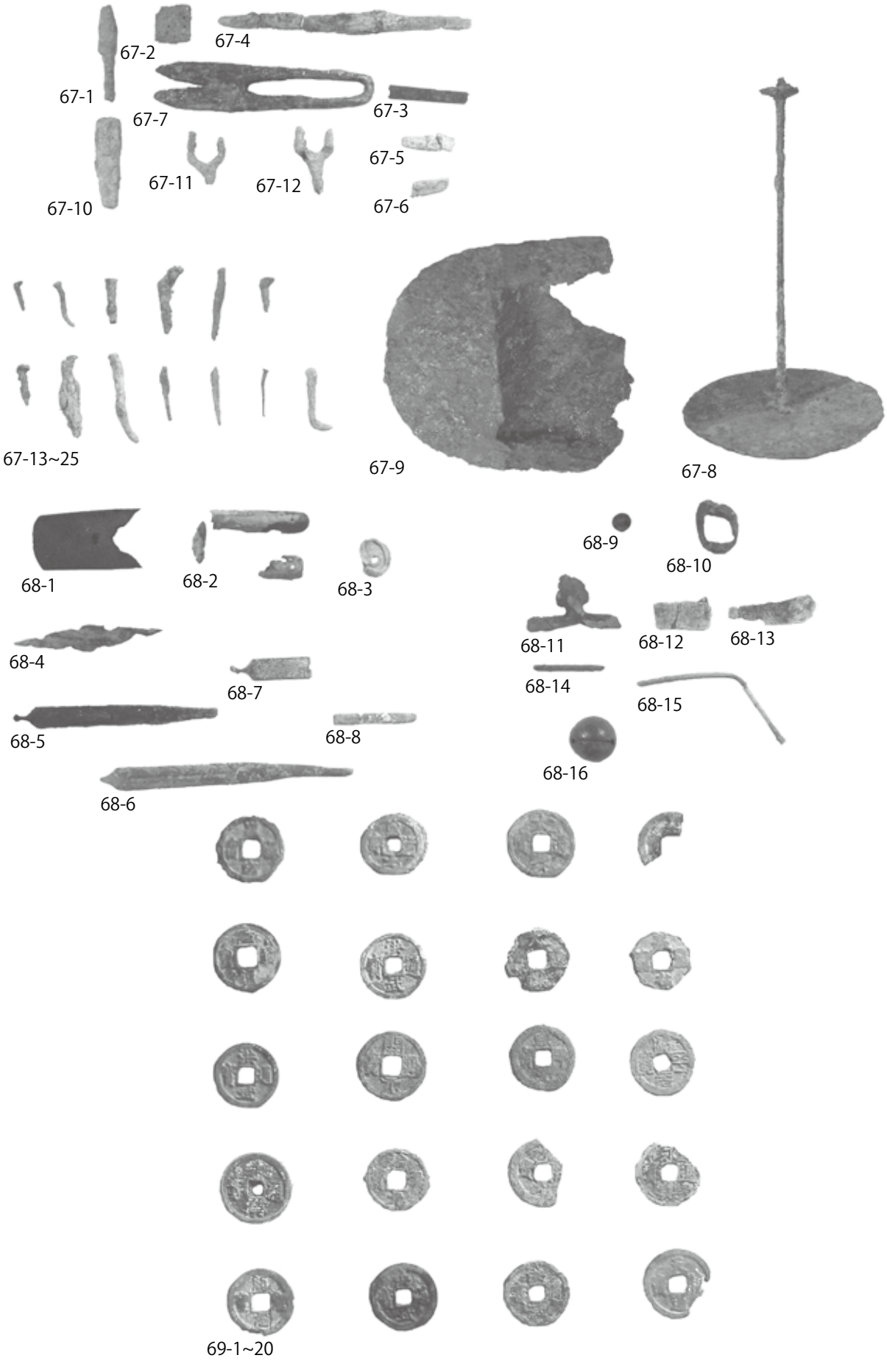
66-20

66-21

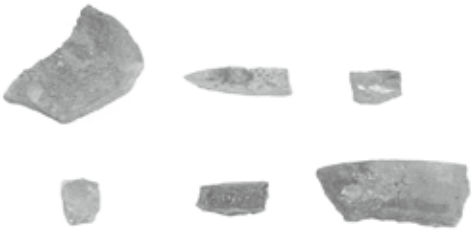
66-22

66-23

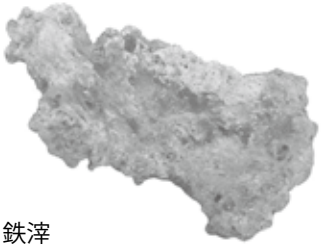
焼成粘土塊


67-1
67-2
67-4
67-7
67-3
67-5
67-11
67-12
67-10
67-6
67-13~25
67-9
67-8
68-1
68-2
68-3
68-9
68-10
68-11
68-12
68-13
68-4
68-7
68-14
68-15
68-5
68-8
68-16
68-6
69-1~20

68-17



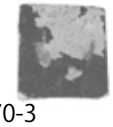
68-18



鉄滓

70-1

70-2



70-3

70-4

70-5

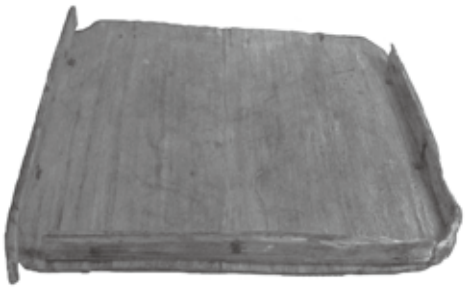
70-6

71-1

71-2

72-1~5

72-8



73-1

74-5

74-3

99-3
75-3
75-4
74-6
75-5
99-1

91-9
81-3
76-3
76-4
76-1

77-1

77-2

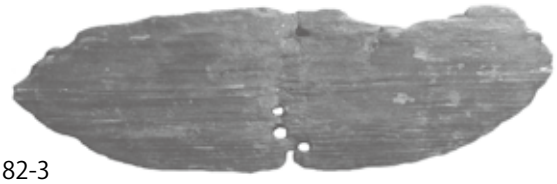
78-3

80-1

79-1

80-4

80-3



82-3

80-5

82-15

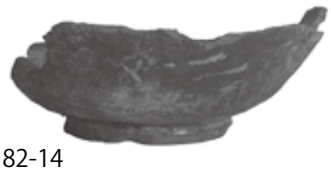
79-7

82-10

82-13

81

82-11


82-14

82-17

83-1

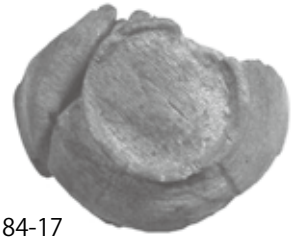
83-2

83-4

83-3

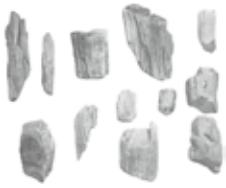
84-1

84-2


84-17

85-2

85-1


削り片

86-2

86-1

86-9

74-2

86-10

87-1

87-2

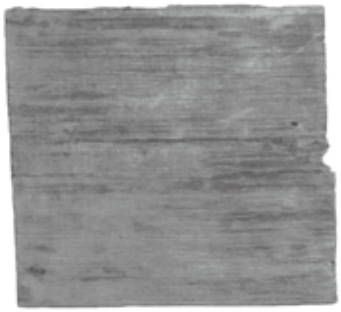
87-3

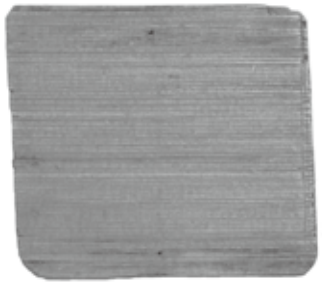
87-11

87-4

87-6

87-7


88-1


88-2

88-17

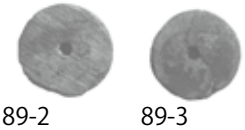
88-6

90-1

90-2

90-3

90-4


89-2 89-3

91-1

91-2

91-3

91-6

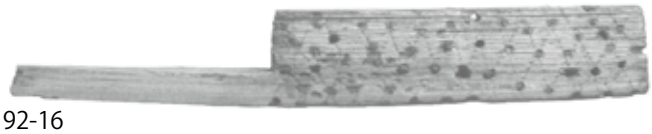
91-4

91-5

91-8

92-1~12

92-13



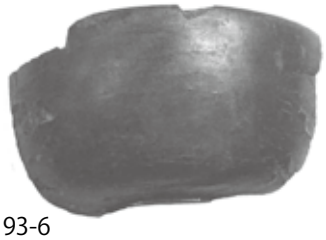
92-16

93-1

93-5

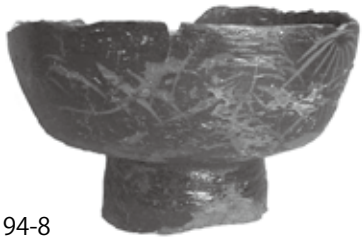
93-2

93-4



93-6

94-7



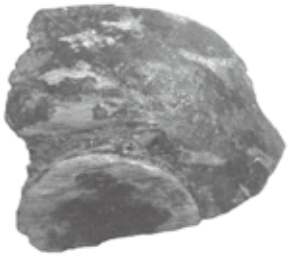
94-8

94-15

94-11

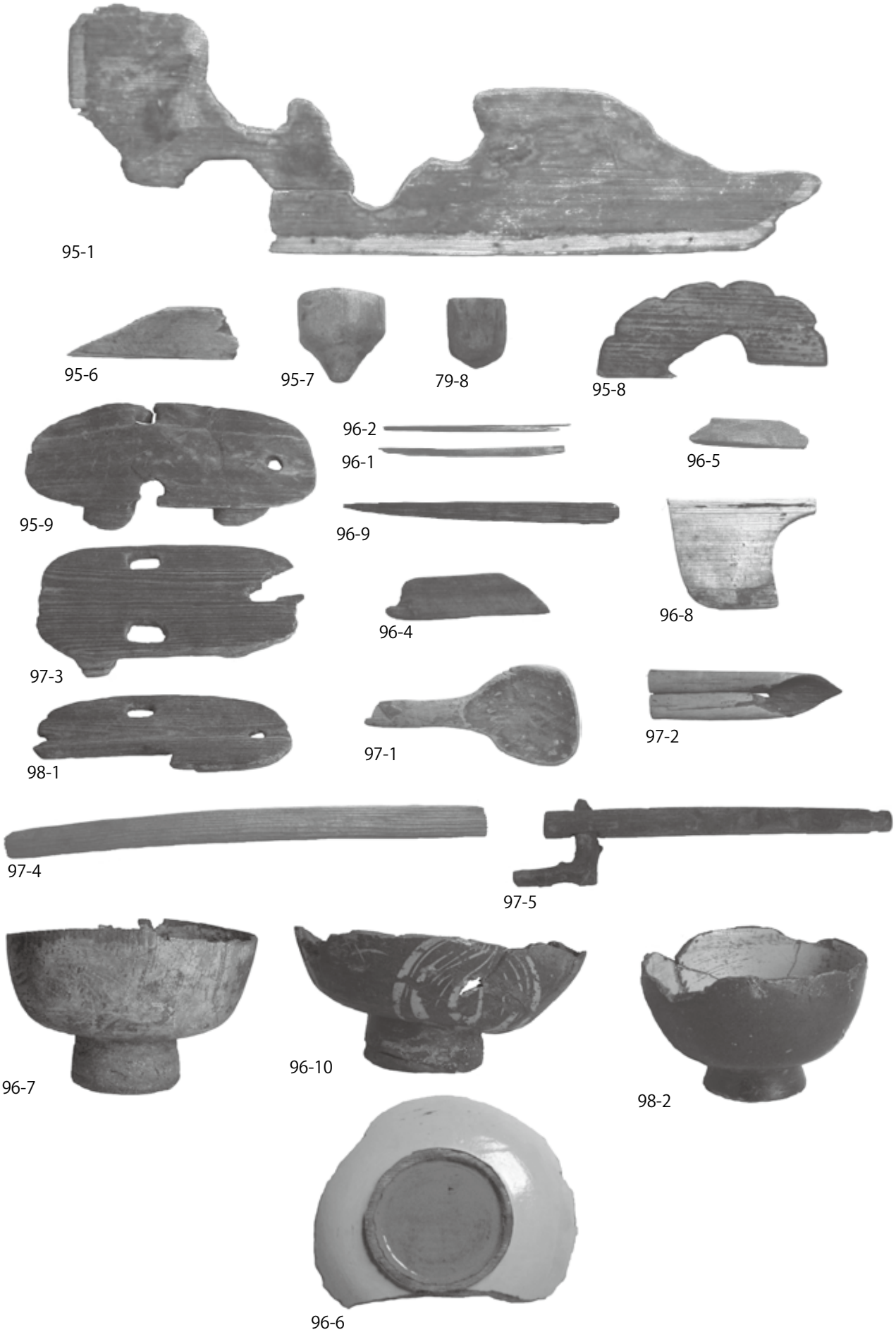
94-12

94-10

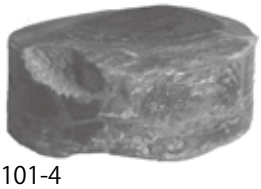


94-13

94-16


95-1
95-6
95-7
79-8
95-8
96-2
96-1
96-5
95-9
96-9
96-8
96-4
97-3
98-1
97-1
97-2
97-4
97-5
96-7
96-10
98-2
96-6

100-1

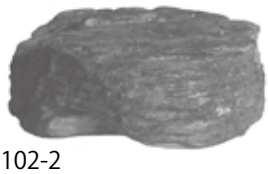

101-4

101-1

101-2

101-3

102-1

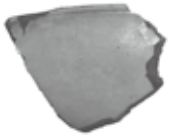

102-2

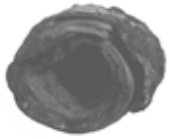
101-5

102-3

102-4

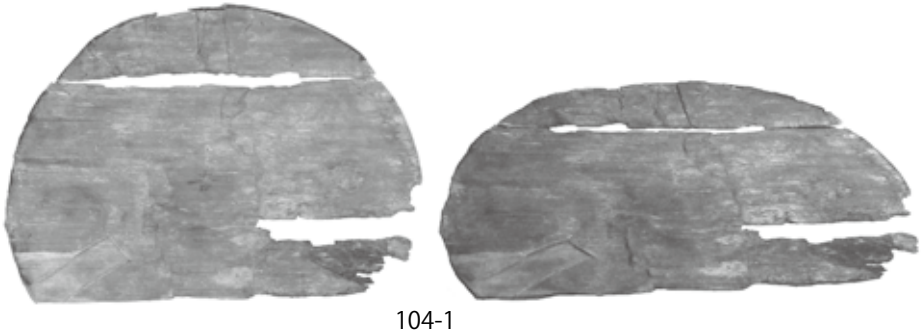
102-5


103-3


104-3

104-4

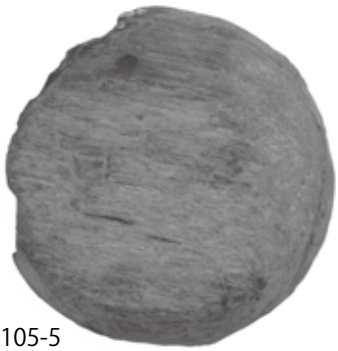
102-6

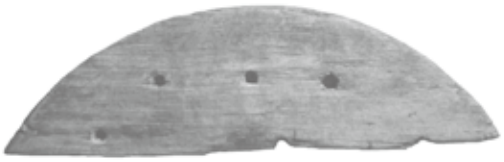

104-1

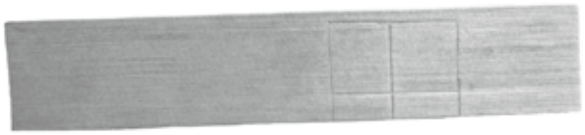
105-1

105-2

105-3


105-5


105-7


105-8

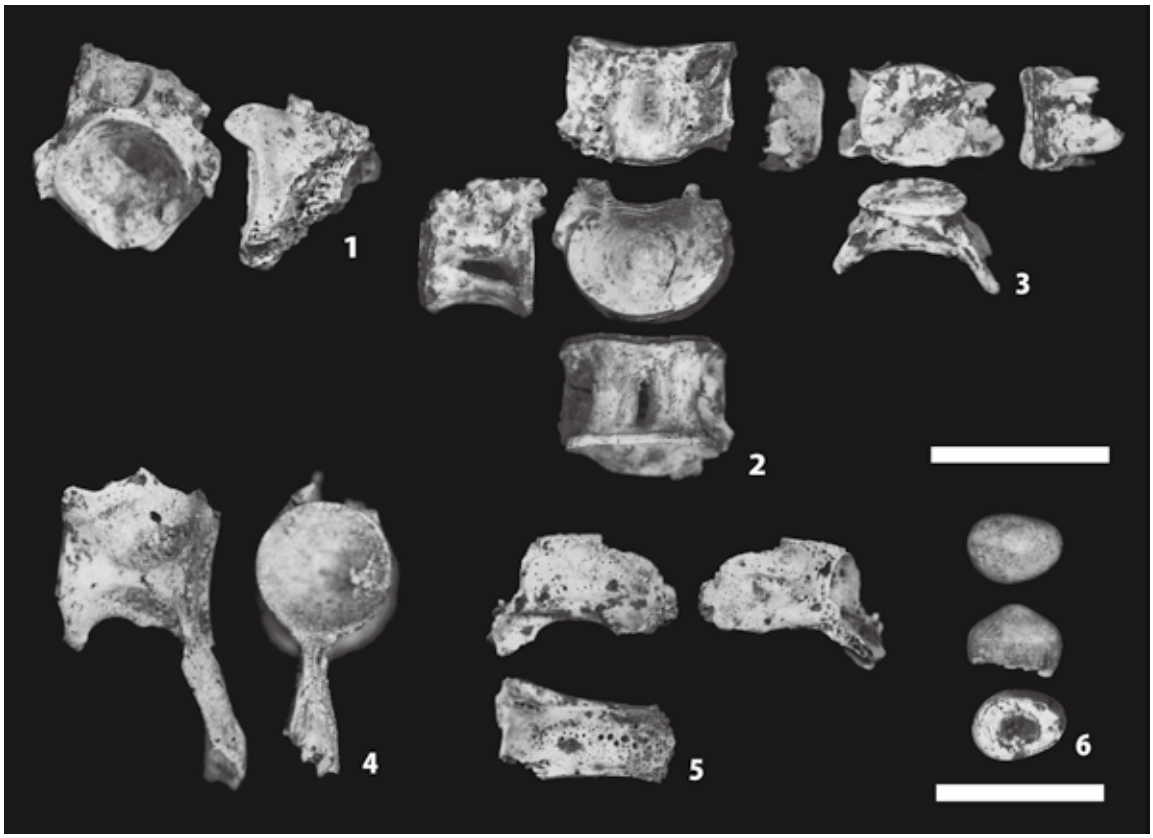
105-9

105-10

105-4

105-11

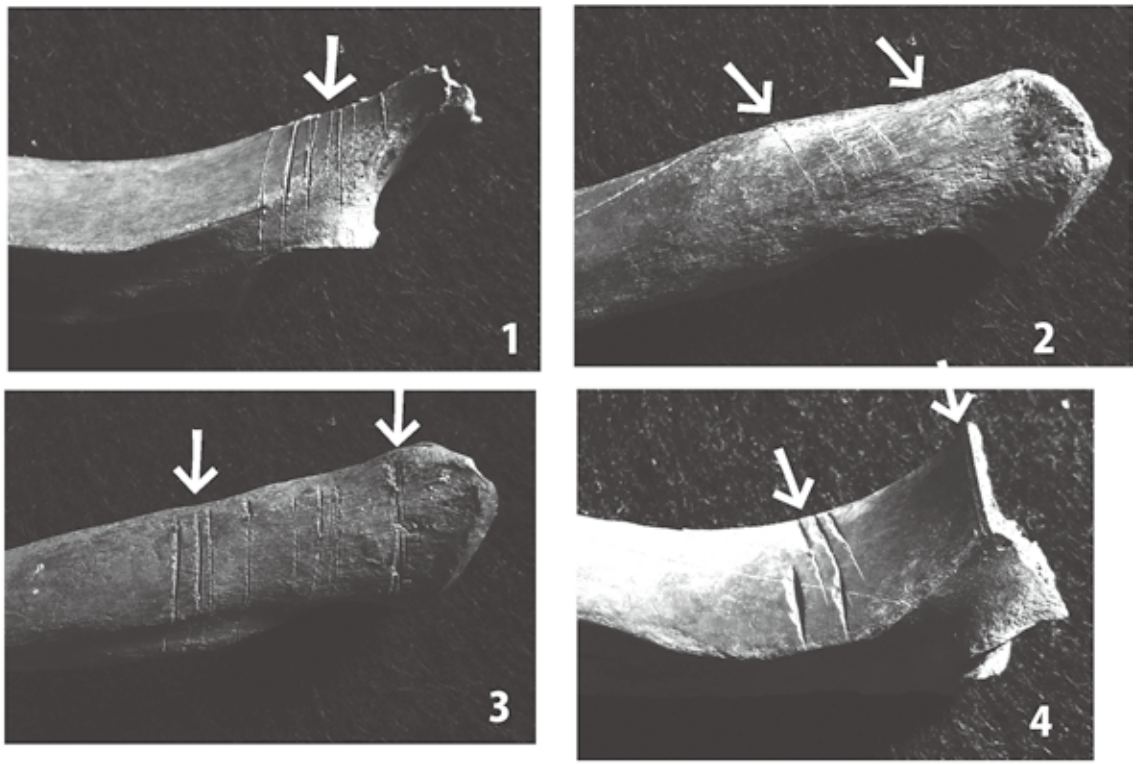
105-6



魚　類

1. タイ科腹椎（S3）　2. マグロ属腹椎（S6）　3. スマ / カツオ尾椎（S4）　4. スマ尾椎（S5）　5. アジ科尾椎（S1）　6. タイ科歯（S2）（　）内は整理番号

スケールバーは 1 ～ 3：1cm、4 ～ 6：5mm



切痕の認められた骨

いずれもシカ［1. 肋骨 R（09）　2. 肋骨 R（20）　3. 肋骨 R（15）　4. 肋骨 R（23）］

（　）内は整理番号

鳥類・哺乳類

ニワトリ［1. 足根中足骨 L（S7)］ イヌ［2. 上腕骨 R（01)］ ウマ［3. 橈骨 L（27)］ イノシシ［4. 下顎骨（26） 5. 上顎骨 R（25)］ シカ［6. 下顎骨 L（06） 7. 環椎（16） 8. 寛骨」(05） 9. 肩甲骨 R (02） 10. 上腕骨 R (03） 11. 大腿骨 R (04） 12. 脛骨 R (10)］(　)内は整理番号　縮尺：1/2

報　告　書　抄　録

報告書概要

ふりがな	しせきかつぬましやかたあと
書名	史跡勝沼氏館跡
副題	外郭域発掘調査報告書（中世編）
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書　第3集
著者名	甲州市教育委員会・室伏　徹、山梨県立博物館・植月　学
編集者名	甲州市教育委員会・入江　俊行
発行者	甲州市教育委員会
編集機関	甲州市教育委員会　生涯学習課　文化財担当
所在地・電話	山梨県甲州市塩山上塩後240番地　電話0553-32-1411
印刷所	株式会社　峡南堂印刷所
印刷日・発行日	平成21年　3月　30日

遺跡概要

遺跡名	勝沼氏館跡
所在地	山梨県甲州市勝沼町勝沼2515-1外
	25,000分の1地形図　石和
	位置　北緯35度39分33秒　東経138度43分55秒
	市町村コード19213
主な時代	室町時代・戦国時代
種別	中世武家館
主な遺構	郭、土塁、堀、井戸、水路、溝、水溜、建物、塀、小鍛冶、焼土
主な遺物	中世土器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品、動植物遺存体
調査期間	平成4年1月6日～平成18年3月31日

山梨県甲州市
史跡勝沼氏館跡
—外郭域発掘調査報告書（中世編）—
2009
編集　甲州市教育委員会　生涯学習課
山梨県甲州市塩山上塩後240
0553-32-1411
発行　甲州市教育委員会
平成21年　3月　30日
印刷　株式会社　峡南堂印刷所